

ONE PIECE～重力の魔人 ～

ネコガミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつもと変わらず趣味に没頭していた三十路男は、いつものように寝落ちをしてしま

う。しかし、目が覚めたらそこは自分の部屋ではなかった・・・

拙作は処女作となっております。誤字、脱字などの凡ミス

また、原作に対する独自解釈、独自設定などがございます。

どうかそれらを踏まえた上でご一読くださるよう、よろしく願います

目次

第7話	106	第19話	214
第6話	96	第18話	208
第5話	86	第17話	201
第4話	78	第16話	192
第3話	65	第15話	183
過去・アカリ編		第14話	175
第2話	56	第13話	164
第1話	46	本編・原作前	
プロローグ3	23	第12話	151
プロローグ2	15	第11話	143
プロローグ	1	第10話	133
		第9話	123
		第8話	115

第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話 第24話 第23話 第22話 第21話 第20話

321 313 304 297 290 281 271 264 255 244 238 231 223

第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話 第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話

411 404 397 391 385 379 372 363 356 350 343 336 330

第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話 第51話 第50話 第49話 第48話 第47話 第46話

505 498 488 479 473 467 461 453 446 440 434 428 421

第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話 第64話 第63話 第62話 第61話 第60話 第59話

610 604 598 590 578 571 562 556 548 540 530 524 514

第83話	第82話	第81話	第80話	第79話	第78話	第77話	第76話	第75話	第74話	第73話	本編・原作開始	第72話
700	692	684	676	668	660	653	647	637	630	624		616

第96話	第95話	第94話	第93話	第92話	第91話	第90話	第89話	第88話	第87話	第86話	第85話	第84話
785	779	772	766	759	752	745	739	733	726	720	713	706

第109話
第108話
第107話
第106話
第105話
第104話
第103話
第102話
第101話
第100話
第99話
第98話
第97話

868 862 856 848 842 837 831 825 819 813 806 800 792

第122話
第121話
第120話
第119話
第118話
第117話
第116話
第115話
第114話
第113話
第112話
第111話
第110話

946 940 933 927 922 916 909 902 897 891 885 880 874

第135話 第134話 第133話 第132話 第131話 第130話 第129話 第128話 第127話 第126話 第125話 第124話 第123話

10251018101210071002 996 990 984 979 971 966 959 953

第148話 第147話 第146話 第145話 第144話 第143話 第142話 第141話 第140話 第139話 第138話 第137話 第136話

1094108910841080107510701065105910531048104210371032

外伝：ヘタレのライトの強かなたしぎ	1154
おまけ・東の海の名付け決闘	1143
最終話	1136
第156話	1132
第155話	1126
第154話	1120
第153話	1116
第152話	1111
第151話	1106
第150話	1102
第149話	1098

プロローグ

『グラビトロンカノン、発射』

いつも通り仕事が終わわり、明日は休みだと気分上々にゲームをプレイしていく

そして、ふと独り言をディスプレイに向かって零してしまう

「今作は主人公のはずなのに、いつもと変わらさずラスボスの貫禄ですねえ…博士…」

ディスプレイに映る蹂躪ともいえる光景に苦笑いが浮かぶが気分は爽快そのもの

そしてあつという間にステージをクリアしてしまい少し拍子抜けするが

「少し休憩するか」と呟き、煙草を手に取ると外へと向かった

ふーつと紫煙を吐き出し背伸びを一つ、背中や腰からパキパキと小気味よい音が鳴る

「昔は何時間でもぶっ通しでやってられたものだけだなあ…」

ゲームに限らず漫画やアニメ、二次創作小説なども嗜み給料と休みを趣味に費やす

気づけば三十路を超えているが、それがどうしたとばかりに日々を楽しんでいる

「さてと…飲み物とかも準備できてるし、今日は徹夜で遊ぶか…」

今日も今日とて一日を趣味に費やす変わらない日々…

そして遊び続けていると少しずつ瞼が落ちて意識が遠のいていく

「寝落ちするかも」と呟くがいつものことだと思ひ遊び続けていく…

だが、気づいた後の光景はいつものものとはまったく違っていたのだった



「…あれ?…なにこれ?…どこ?…どこ?」

寝ぼけた頭に入ってくる情報は只々全てが白いということだけ

そもそもここが部屋なのか外なのかもわからない

「え?俺、ゲームしてたよね?で、寝落ちしたんだよね?え?え?」

少しずつ目が覚めていくがいまだ混乱は覚めず、答える者もないのに

独り言を話すのはいつもの癖だが…今回は答える者がいた

「うむ、確かにお主は遊戯をしたまま意識を失ったのう」

不意に話しかけられ混乱に拍車がかかるが反射的に声の主を探してしまう

辺りを見渡すも姿は見えず、混乱に焦りや恐怖が追加された

「いや…意識を失ったというのは正確ではないのう…」

魂が世界から切り離された…これが正解かの」

本来ならば恐慌ともいえる状態でまともに誰かの言葉など聞こえないものだが

不思議とこの誰かの言葉が耳に入ってくる…いや、頭に響いてくる？

そんなことにふと気づいたおかげか、落ち着いてきたのを自覚すると

深呼吸を一つして声の主に話しかけてみた

「え〜と、あの、どこに…いるのでしようか？」

心は落ち着くも体はまだなのか、言葉がなかなかでてこない…

一息いれようといつもの癖で煙草を求めるが、ポケットや周囲を探しても見つからな

い

「ふむ…探しているのはこれかの？」

今までと違いはつきりと声のした方に振り向くと愛煙している紅白の箱があった

そして、その箱を差し出す手が見えると、少しづつ声の主を認識し始めた

足元はサンダル、服装は…たしか映画や何かで見た古代ギリシヤの服のように見える

…

キトンと…ヒマティオンだったかな？うろ覚えの知識だが…

オタク趣味もなかなか馬鹿にできないものだなと自己満足に浸る

目線をそのまま上げていくと、立派と形容できる白いヒゲと

肩甲骨辺りまで伸びる後ろ髪、そして…見事に磨き上げられた頭頂部がある…

…見事に磨きあ g

「…どうやらこれは要らぬようだの」

「あ、いや、失礼しました、いただきます」

輝きを放つ老人から受け取った煙草を銜えるが火をつけようにもライターはない

このままでは生殺しだと思っていたら煙草を渡してきた老人が

《手から火を出し》銜えていた煙草に火をつけてくれた：

目礼をして煙を吸い込み、吐き出す：慣れ親しんだ味により余裕が出来てきた

「ふ…：申し訳ありませんが一本吸い終わるまでお待ちいただけますか？」

「うむ、構わぬぞ」

吐き出した紫煙の行き先を目で追いながら考えを巡らせていく

魂がどうかこの老人が言っていた気がするが他にも聞きたいことがある

ここはどこなのか、老人は何者なのか、自身のオタク趣味による思考から

ある答えが浮かぶが確信には至らない

確信には至らないのに歓喜の感情が心に広がる

—— 落ち着け…ぬか喜びの可能性だつてあるんだ！ ——

心の中で言い聞かせようとするが口角が上がるのを抑えられない

落ち着こうとまた一口煙を吸い込む、うん、大丈夫だ

紫煙を吐き出し心を落ち着かせたらふと気づいてしまった

それはとても大事なことだ、だからだろうか、いつものように独り言を零した
「…灰皿どうしよう」

他にすべきこともあるのだろうかこの時の自分は
愛煙家としてのエチケツトに心を割くのだった



「お待たせしました」

あの後、灰皿は老人が用意してくれたので事なきを得た
そして一服を終えたのでこうして老人に話しかけたのだ

「うむ、落ち着いたようだなによりだの」

髭を手で撫でながら老人が話します

先ほども感じたことだがこの老人の言葉は
すつと、内側に入り込んで来る…

「色々と聞きたいことがあるのですが、お待たせしてしまつたこともありますし
まずは貴方の話しを聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」

「では、そうしようかの」

一服している時に考えたうちの一つ、この老人が誰なのか……
確証は無いものの非礼とならないように話したつもりだが……

こんな感じの言葉遣いでよかったのだろうか？

「なに、それほど畏まる必要はない」

……どうやらお見通しのようだ

思わず苦笑いをしてしまう

「ありがとうございます」

「うむ、儂の話しを聞くうちに色々と問いたきことも出てこようが、まずは聞くことよ」
首を縦に振ることで老人に続きを促す

「まず理解して貰いたいことは……お主は死んだということだ」

……考えていたことの一つであったのだが……はつきりと告げられるときついものがある……

老人の話しの続きを聞くためにも落ち着こうと考え

また煙草を銜えると老人が火をつけてくれる……

——…!!非礼とか考えたのになんでいきなり煙草吸ってるんだよ!——

「し、失礼しました!一言の断りも入れずに!」

「ほっほっほ……よいよい、先にも言うたがそれほど畏まらずともよいて」

老人が手でこちらを制しながら言葉続ける

「今のお主はちと自制が効かぬ状態となつていてな、それにも理由はあるのだが…

まあ、煙草を飲みながらでよいのでゆるりと構え聞くことよ」

「自制が効かない？理由がある？…とりあえずこのままでいいと許しはもらったなら遠慮せずに煙草を吸いながら話を聞かせてもらうことにしよう…

「ありがとうございます。話の続きを聞かせていただけますか？」

「うむ、まずはお主自身の死を理解、受け入れることはできたかな？」

受け入れられたかは正直なところ微妙だ…遊んでいて寝落ちした…

つまり死んだという実感がないのだから…正直に答えたほうがいいかな？

まずは聞くことと言われたのだが…

そんなことを考えていたら不意に言葉を漏らしていた

「正直なところ…死んだという実感がないですね…」

独り言が癖になつている自分だがこれには驚愕した

そしてこれが自制が効かなくなつていくことかと恐怖した

震える手にある煙草を口に持つていこうとするがなかなか銜えられない…

「ほっほっほ…焦らずともよい…なれば儂もゆるりとしようかの」

老人はそう言う、見事な装飾が施された銀煙管のようなものを銜え煙を吹かし始め

た

それを見て呆然としていると

「ほっほっほ、儂が煙草を飲むのは可笑しいか？」

慌てて首を横に振る、そして震えの止まった手で

煙草を口に持つていき同じように煙を吹かす

「いえ、私の周りは所謂、紙巻き煙草が主流だったものでして…煙管が珍しかったですよ」

「なるほどのう、今の世は紙巻きが主流か」

「あ、いえ、私の周りではして…」

「ほっほっほ！」

少数派だと貶めてしまったかと慌てて言葉が続けたが、老人は軽快に笑い飛ばす

「よいよい、こうして仕事以外の話をするのも楽しきことよ」

「おや、仕事をサボるとは…どうやら中々の不良老人のようで…」

「ほっほっほ！どうやらお主の調子もあがってきたようだね？」

「おかげさまで」

調子が上がったというよりは、上げてもらったが正しいと思う

幾度も混乱する自分を何度も宥めてもらったのだから…

「ふく…とりあえず私が死んだというのは理解したつもりです

納得したとは言いきれませんが…」

「うむ、それでよい。では、続きを話すぞ?」

「お願いします」

煙を吸い込みつつ続きを待つ

「お主には儂の試しを受ける形で、異なる世界に転生をして貰いたいのだ」

試し…転生…これらの言葉に頬が緩む

考えていたことであり、期待していたことだ

「お答えする前に、幾つか質問してもよろしいでしょうか?」

「うむ、よいぞ」

「では…試しを受けなかった場合、私は生き返れますか?」

「お主にとつては残念な事と思うが生き返れぬ。記憶、経験、人格と

お主を構成する全てが消え去り元の輪廻に還り転生の機会を待つ事となる」

「異なる世界とはどういうところか、教えていただくことはできますか?」

「否。試しを受けると決めた者のみ教えることを認められている」

「試しとは何でしょうか?」

「それも受けると決めた者のみ教えることができる」

「私が何故死んだのか教えていただけますか？」

「世界の自浄作用により無作為に選ばれ、魂が世界から切り離された為よの」

「世界の自浄作用？」

「世界とは例えるならば本のようなものでな…お主が生きていた世界を

一頁目とすると二頁目となる並行世界が存在する…」

「それら数多の頁を束ね《一つの世界》となるのだが…その頁ごとに

存在する魂の数に偏り無きよう調整するために時折、天命とは関係なく

世界が自浄作用として魂を切り離すのだ」

「私の自制が効かない理由とは何でしょうか？」

「それも世界の自浄作用が関係しているの。死ぬ者が在れば、生まれる者も在る

自浄作用として生まれる者を抑制するために無意識下で本能が抑え込まれる」

「それによつて生前に結婚願望や現実の異性に対する興味が希薄になる者が出てくる

そういういた者達が死後に抑制されていた本能が解放される反動で

自制が効かなくなってしまうのだ」

短くなった煙草を火種として新しい煙草に火を点ける

紫煙を吐き出しつつ、火種として使った煙草を灰皿でもみ消していると

老人が煙管を吹かしつつ声をかけてくる

「質問は終わりか?」

「あ、いえ、お聞きしたいことはまだあるのですが、

お答えいただいたことについて少し考えさせていただきたくて…」

「ほっほっほ。よいよい、納得のいくまで考えるがよいて

答えたことについても、己が死についても」

老人の言葉に安心して考えを巡らせていく…

自浄作用と抑制、そして老人は転生するのは異なる世界と言った…

並行世界との違いは?

まずは自浄作用と抑制について考えよう。自制が効かないのはこれが原因らしい…

しかし…結婚願望?異性への興味?正直なところ自覚がない…

学生時代はクールで硬派な俺格好いいか思っていた

そして、次第にオタク趣味に目覚めて二次元の異性に惹かれるようになったのだが…

ちよつと待て…確かに結婚願望なんてなかったし、現実の女性に興味がなかったが…

何でだ?今考えるとおかしい…今は凄く現実の女性に興味があるぞ…あれ?

結婚願望はとりあえず置いておくとして、何で現実の女性に興味がなくなつた?

二次元の女性に惹かれたから?現実の女性に興味をなくす必要はないよな?

え?本当にいつから現実の女性に対して興味がなくなつたんだ?

なんか嫌なこと……トラウマになるようなことあったっけ？

……ない……思い当たることはない……

——これか？これが、自浄作用による本能の抑制なのか！——

自分の意思で行動してきたと思っていた

情況に流されることも多々あったが決めたのは自分だと割りきってきた

でも、それが無意識の内に誘導されていた可能性が出てきた

もしかしてオタク趣味も？楽しかったあの時間も全部、抑制による結果？

困惑、後悔、怒りと様々な感情が入り乱れる

過去の光景がフラッシュバックするたびに疑念が噴き出す

あの頃は若かった、子供だったと思っていたものももしかして……

今の生活に不満は無い、落ち着いた、大人になった、成長した

そう思っていたこれまでの自分が、これまでの人生が全部否定された気がした

そんなことはない、その考えを否定するが過去の自分の感情の一部が

偽りのものだったと自覚してしまったため否定しきれない

「熱っ!!」

気づけば煙草の火が根元までできていた。一時的ではあるが混乱から

脱することができ、思考に余裕が出来たので落ち着くためにも一服しよう

また、短くなつた煙草を火種として使い新しい煙草に火を点ける

「…雨？」

煙草に火を点けるとポタツと新しい煙草に水滴が落ちてきて上を見上げる

全てが白く雨雲らしきものは見当たらない…

短くなつた煙草の火を揉み消そうと灰皿に手を伸ばすと手の甲にも水滴が落ちてくる

消そうとした煙草が水滴で湿気る、視界が滲んでいるのを自覚する

気づけば、涙を流していた

「え？あれ？何で泣いて…三十路過ぎたいい大人が…」

静かに待つていた老人が声を発する

「うむ、よいよい。自製の効かぬ今のお主では激流の如く流れる感情を抑えきれなくて」

「なれば泣いて感情を治めるのも一つの手よ…」

「大人だからと己が心を縛る必要はない…今はただ在るがままに在ればよい」

「儂はゆるりと待とう…お主が落ち着くまでゆるりとな」

泣いてはいけないといつ考えたのだろうか？俺は子供のころのように声を出して泣いた

老人は煙管から立ち昇る紫煙を目で追っていた

俺を急かさぬように、俺が落ち着くのをゆっくりと待ったために…

プロローグ 2

「ほっほっほ。どうやら落ち着いたようだの」

年甲斐もなく大泣きをしてしまい、かなり老人を待たせてしまった

だが老人は機嫌が悪いどころか良いように見える

泣き腫らした目から少しでも視線を外せたらと煙草を銜える

…今更取り繕っても遅いとは思うが恥ずかしいものは恥ずかしいのだ

「ええ、正直なところ、ここに来てから一番落ち着いたと思います」

「うむ、腫れてはおるが先ほどまでよりも良き眼になったからの」

腫れていることには触れてほしくなかったのだが、この不良老人はそこを遠慮なくい

じってくる…

ええい！ニヤニヤしながらこつちを見るな！

いいから早く早く煙草に火を！きつきまでは直ぐにつけてくれていただろうが！

「…煙草に火をいただけませんか？」

「ほっほっほ！ほーほーほっほっほ！照れんでもよいではないか！」

老人が大笑いをしながらも煙草に火をくれる…髭を引っ張ってやろうか…

「ほっほっほ！そう睨むでないわ。ゆるりと煙草を飲み落ち着くがよい……
ほーほーほっほっほー！」

どうやら今の俺は老人の笑いのツボにはまってしまったらしい

どことは言わないが磨き上げてやろうかと思いつながらも煙を吸い込む……
顔が熱いせいか煙草がいつもと違う味に感じる

「ふふ……そろそろ笑うのをやめていただけませんか？」

「ほっほっほ……いや、すまぬ、中々に愉快だったものでな」

上機嫌に髭を撫でながら老人が受け答えしてくる

「……そんなに、私が泣いたのが愉快だったのですか？」

「ほっほっほ、拗ねるでない。むしろ抑制されておった者が己を律し続け、

あそこまで持たせたのは非常に珍しかったのでな……良き者に当たったと思うたら
笑いを堪えきれなんだ。他の者は存外、苦勞しておるようだし」

褒められているようだが、まだ気恥ずかしくて素直に受け取れない……

でも、老人が気になることを言ったな……他の者？俺以外にもいるのか？

「他の者と言われましたが、私以外にも死んだものがあるのですか？」

「うむ、いるぞ。試しを受けると決めた者もいれば、還った者もいる。

あとは、答えを残すのはお主のみよ……受けると決めた者を待たせてはいるのだが、

焦らずともよい。ゆるりと考えよ」

他の人達はもう決めたのか：待たせているみたいだが老人がゆるりと考えていいと言ったんだ

遠慮なく考えよう。すまないな名も知らぬ他の人達：文句はこの老人に言ってくれしかし、還った人もいるのか：正直なんで還ったのかわからないな。俺自身の答えは、

この白い場所で老人から試しの話しを聞いたときからほぼ決まっているのだが：どういった理由で還ったのか聞いてみるか

「還った人達がいるようですが、どういった理由だったのか教えていただけますか？」

「ふむ、還った者達に儂は会っておらぬのでな、担当した者からの又聞きになるが良いか？」

「お願いします」

老人が煙管から一息煙を吐き出してから話しだした

「還った者の多くは元の世界において抑制を受けなかった、もしくは

抑制から解放された者達での。そういった者達は元の世界にて、それなりの地位や名声を

得たことで世界から評価されておる。そのため、お主と違い元の世界に還っても

転生の際に優遇されるのだ」

「どういった形での優遇ですか？」

「記憶、経験、人格等の継承や自浄作用を受けぬといったところなのだ」

なるほど、それならば還るのも理解できる。

所謂、前世でも勝ち組で、次世でもその可能性が高いということだ。妬ましい

「他に還った者達は元の世界の文明の利器が無い世界、もしくは

無いかも知れぬ世界では生きて行けぬとのことだ」

「文明の利器ですか？」

「うむ、確かパソコンやら携帯電話とか言っておったかの？」

あゝ……もの凄く納得した。確かにそれらが無い生活とか考えたこともなかった。

でも、また抑制されることに比べれば……還った者達はそうは思わなかったようだ

「ありがとうございます。納得できました」

「うむ、聞きたいことは以上かの？」

後は特になかった気がするが……

「申し訳ありませんが、また少し考えさせていただけますか？」

「うむ、良いぞ」

老人がまた、煙管から煙を吹かしはじめる。俺もまた短くなつた煙草を火種に使う。

少し考えを整理しよう。老人に醜態を晒してから何か忘れているかもしれないから
な

まずは老人に何を聞いたのかを思い出そう

一つ目は：生き返れるのか聞いたんだっとな。答えは否。

少なくとも死ぬ前の状態には戻れない。まあ、また抑制されたくないから俺は還らな
いけどな

ん？ 試しを受けて転生する異なる世界では自浄作用や抑制はどうなるんだ？

：後で老人に聞いてみよう

二つ目、三つ目は試しと転生先の世界について聞いたはずだが：教えてくれなかった
な

そうなると転生に博打要素が出てくるが：これも転生先での自浄作用次第だな

四つ目が自身の死の理由で、五つ目は死の理由で老人が言った自浄作用についてだ

これはもう、うん、俺が大泣きした理由だからね。深く思い返したくはないんだが：
ええと、なんだっけ？ 一つの世界がどうこう：そうだ！ 並行世界だ！

異なる世界と並行世界の違いがよくわからなくて聞こうとしてたんだ！

大泣きしてすっかり忘れてたよ：思い出してよかった：

さて、そうなると老人に聞くべきことは転生先での自浄作用、抑制についてと、

異なる世界と並行世界の違いについてだな

考えはまとまった。後はゆっくりと一本吸ってから改めて聞いてみよう

静かな白い場所で煙草を吸い込む際のチリチリとした音が耳に響く

ふくつと吐き出した紫煙の行き先を目で追いながらゆっくりとしたのだった



「考えはまとまったかの？」

「はい、それでなのですが…またお聞きしたいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「ふむ、慎重だの。もしくは好奇心旺盛なのか…さて、何を聞きたい？」

「そうですね…まずは、異なる世界と並行世界の違いを教えてくださいませんか？」

「並行世界は同じ本の中の別の頁ということは答えははずだの？」

異なる世界とは別の頁ではなく別の本ということになる」

「また、別の本…異なる世界になることで世界に定められた規則も違ってくる。

例えば神秘や幻想が認められる…といった具合にの」

「神秘や幻想とは何でしょうか？」

「神秘とは特異な力のことだの。例えば魔法や超能力といったものだの。

幻想とは特異な存在のことだの。これは竜や精霊といった者達のことだの」

「なるほど…それと試しの先の異なる世界について答えられないと言われましたが、

自浄作用や抑制を受けるかだけでも教えていただくことはできませんか？」

「ふむ、そのぐらいならばよかろう。答えはどちらも無い。安心せい」

老人の答えに思わず拳を握りしめる。これで俺の腹も完全に決まった

「教えていただき、ありがとうございます」

「うむ、質問は以上かの？」

「あ、最後に一つだけよろしいでしょうか？」

「ふむ、何かの」

「本当に今更だが、散々世話になったのだからこれだけは聞いておかないと…

「貴方が何者なのか教えていただけますか？」

「ほっほっほ！ ずいぶんと遅き問いよの？」

「申し訳ありません」

「なに、構わぬ。儂は世界の外に在る者、お主達、人々の定義では神と呼ばれる存在だの」

「お名前は…」

「それは教えぬほうがよかろう。儂の名を教え、試しを受けるとなれば、

それは儂の使徒となり、儂という存在に縛られることとなる……それはお主の望まぬことであろう？」

本当にこの老人には頭が下がる……いくら感謝してもし足りない

「お心遣い、感謝します」

「ほっほっほ！ 畏まらずともよいて。では、そろそろ試しを受けるか……答えてもらうかの」

答えは決まっている。煙草を揉み消し、姿勢を正してはつきりと答えた

「試しを受けさせてください」

頭を下げて請う俺の耳に、老人の……神様の笑い声が響いた

嬉しそうに、楽しそうに笑う声だった

プロローグ 3

「さて、それでは受けると答えを得たので試しの話をしようかの」

老人が髭を撫でながら話し出す

「試しの内容は、農達の加護：他の試しを受ける者達が言っていた言葉で言うならば

転生特典を異なる世界の規則に合わせた形で与えて、

お主達に異なる世界に転生してもらうのだの」

俺のオタク趣味の一つである二次創作小説でよくある神様転生に思えるのだが：

何でこれが試しになるんだ？

「加護をいただけるのは嬉しいのですが、なぜそれが試しになるのですか？」

「お主達よりも前に加護を与えて異なる世界の一つに転生させた者達がいるのだが、

その時はその者達が望むままの加護を与えて転生させていたのだ」

「そして、その世界の規則に合わぬ力を用いた結果、

異なる世界の内に在る並行世界のいくつかが滅びてしまったのだ」

…滅びた？！本当に？

「どういった力を使って滅びたのでしょうか？」

「たしか《王の財宝》とかいうものにある宝具の一つを用いて神話を再現した結果、

世界が耐えきれずに滅びたはずだの」

…どうやら冬木市の耐久力は異常だったようだ。

あれ？ 召喚でクラスのス枠に当て嵌められてるから本来の力を発揮できないとかだったっけ？

「他にも滅びた理由はあるのだが、そういうことが幾度も起きた結果、いくつかの世界で異なる世界からの魂の受け入れが拒絶されるようになってしまったのだ」

「そうなる让世界から切り離された魂の受け入れ先が減ってしまったの…」

その結果、世界の魂の数に偏りができ、今回の試しを受ける者達のように自浄作用により

天命を全うできぬものが増えてしまったのだ」

「加護を与えずに異なる世界に転生させることはできないのでしょうか？」

「できぬことはない。だが、そうだのう…問い返す形になるが、お主が冒険の旅に

出ることになった際に優秀な者と、そうでない者、どちらを仲間にするかの？」

ゲームでなら所謂、縛りプレイをやったりしたけど…

「そうですね…命懸けになるのなら間違いない優秀な者でしょうね」

「うむ、ではそうでない者を選ぶならば、見知った者と見知らぬ者、どちらを選ぶ？」

「あまりにも性格が合わない等の理由が無いのならば見知った者を選びますね」

「うむ、世界が魂を受け入れる時も同様での。異なる世界からの魂は特に理由がないならば」

「転生は後回しにされてしまうのだ」

「農達や世界にとつては一時の後回しの時間でもお主達にとつては長い時間となることもある」

「そうなるとその魂が転生した際に、そのことが無意識下に残ってしまったりしての…性格が捻くれてしまったりと少し問題が起きやすくなってしまうのだ」

「だからこそ異なる世界からの魂を優先して転生させるために加護を与えざるを得ぬのだ」

「なんというか、世知辛いなあ…」

「納得しました。ですが、今回の試しは私達転生者のものというよりは神様達のものと思うのですが、いかがでしょうか？」

「うむ、故に農の試しを受けてと言うたのだ」

「正直なところ試しと言われて、世界を救ったりするのかと思ったりしたのだが…」

「世界を救ったりとかの壮大なものではないのですね」

「お主も中々に想像力が豊かだの。此度の試しは輪廻から外れた魂を転生させるとい

儂等の役割を円滑に進めるためのものだの。

役割に慣れておらぬ若い者達から嘆きの声が上がってきておるからの」

「順番待ちの魂からクレームがきたりとか、休みが欲しいとかですか？」

「うむ、ようわかつたの」

どこでも似たようなことはあるものなんだな…

「どこでも似たようなことはあるものですね。では、話しの続きをお願いします」

「うむ、それでは転生することになる異なる世界について話そう。」

転生先はお主の世界に存在する《ONE PIECE》が元になった世界だの。

そして、加護はその世界の規則に合わせた形で与えて転生してもらうこととなる」

《ONE PIECE》!!好きな漫画の一つだ!でも…

「元になった世界…ですか?」

「うむ、創造者が産み出したものではなく、それを認識した人々の思いが

昇華し生まれた世界だの」

「違いは何でしょうか?」

「一言で言うなれば、《もしも》が認められる世界かどうかだの。

前の世界では認められず、後の世界では認められる世界だの。

故にお主達が転生することができる」

《もしも》が認められる世界：何度も思い描いた妄想、もとい想像が認められる世界：「続きを話してもよいかの？」

「あ、はい、お願いします」

「加護を与えるのだが、神秘：特異な力は《悪魔の実》の形をとり与えることとなる
その他に試しを受ける報酬として才能や資質をお主が3つ選び、それを与えることとする」

「才能や資質ですか？」

「うむ、身体能力等の才能、覇気の資質といったところかの」

…覇気？

「覇気とは何でしょうか？」

そう聞いた俺に老人が首を捻りながら問い返す

「む？知らぬのか？」

「《ONE PIECE》はある程度知っているのですが…その、私は漫画に関しては原作が完結してから単行本を大人買いして一気に読むのが好きでして、あまり詳しくは…」

「ふむ、何処までなら見知っておるかの？」

何処までか…随分前に週刊誌で見て大人買いリストにチェックしたただけだから…

正直なところ、ほとんど覚えていないな…

「私が見たのは確か…砂漠の王国の…アラハバキ？でしたか？」

「アラバスタだの」

「それです。私が見たのはそこまでですね」

「ならば、自然系（ロギア系）能力を覚えておるかの？」

「ええと…確か、砂とかでしたか？」

「うむ、自然系能力者には弱点をつかなければ攻撃を当てることができぬのは知っているか？」

確か主人公のルフィが水で手を濡らして攻撃していたはずだ

そして、自分の血で手を濡らして攻撃した場面では痺れた記憶がある

「砂を固めるのに水や血を使ってみましたね」

「うむ、本来ならば弱点をつく必要があるのだが、3つある覇気の内の一つを使えば弱点をつかずとも自然系能力者に攻撃を当てることができるようになるのだ」

そんな便利なものが特異な能力ではなく資質としてあるのか…

「凄い有用な資質ですね」

「うむ、その覇気は《武装色の覇気》と呼ばれておる。他には《見聞色の覇気》と

《霸王色の覇気》と呼ばれるものがあつての…」

老人が説明するのを自分なりに要約するところなる

《武装色の覇気》

- ・ 体の一部等をこれで覆うことでその部位を強化することができる
- ・ 体だけでなく手にした武器等も同様に強化できる

・ 《武装色の覇気》で強化することで自然系能力者に攻撃を当てられるようになる

《見聞色の覇気》

- ・ 覇気の範囲内の者の敵意等を感知できる

・ 《見聞色の覇気》に優れた者ならば範囲内の相手の行動や心の声も感知できる

《霸王色の覇気》

- ・ 特に稀な資質で持つ者は非常に少ない
- ・ 範囲内の相手を威圧し気絶させることができる
- ・ 強者は威圧に耐えて気絶しないこともある
- ・ 資質を持つがその資質が低い、まだ力が弱い等の時には威圧ではなくカリスマ等の他者を惹き付ける魅力として発現することがある

これから転生する先では覇気はこういった感じだそうだ

このことを聞いて思ったのは、武装色は必須で残りはあれば便利といったところかな
武装色は自然系能力者に対する要となり、更に自身を強化することにも繋がる

見聞色は喧嘩1つまともにしたことない俺が実戦でそんなに情報が増えて

対処できるのかが問題で、他の願いで確実なりターンを得たほうがいいと感じている
霸王色は：これ、その時代の英雄なんかが持っている類いのものじゃないか？

そう考えると所謂、格下相手を無力化できるメリットはあるものの、その希少な資質
故に

至極、厄介事を招く種になるんじゃないかと思うのだ：そう考えると資質があつても
扱いに困るというか：正直なところいらないなと感じている

「さて、覇気については理解できたかの？」

「ええ、ありがとうございます」

「うむ、ならば悪魔の実を選ぶ際の規則について話そうかの」

「その前に、一服させていただいてもよろしいでしょうか？」

「ほっほっほ！中々に厚かましいの。他の者を待たせているが今更だしの。

ゆるりとしようかの」

他の者がなぜ待つ必要があるのかと思うが本当に今更なので気にしないことにする
協調性なんて抑制と共にどこかにいつてしまったのだろう。

自分の意思で自由に決めていこう：誰にも縛られずに自由に：



「さて、悪魔の実際の規則は理解したかの？」

一服を終えた俺は老人から悪魔の実際の規則を選ぶ際の規則を聞いていた。

そして、選ぶ際の規則はこうだったものだった

- ・ いかなる能力者でも海、海楼石に触れたならば身体の力は抜けてしまう
- ・ 同一の実は存在できない

・ 一部例外を除いて2つの能力を有することはできない

・ 既に強い因果が生まれている実（原作に登場した実）は選ぶことができない場合がある

・ 自然、動物系の能力は海、海楼石に触れたら能力を封じられる

・ 超人系の一部（体質そのものが変化する等）は例外的に能力を使用できる

・ 転生先に無いモノ（物質、現象、神秘、幻想等）を能力に選ぶことはできない

この説明の内の同一の実は存在できないというのが他の者達を待たせた理由になるらしい

要するに後から選ぶことになった者は不利になるのだということだ

他にも、同時期に世界に魂を送った際に与えた加護の違いが転生する時代や場所に

こういった影響を与えるのかを観測したりする必要があるらしい

しかし、老人が言うにはこれらの理由はある意味で建前で本当のところは違うようだ
現在、輪廻から外れて転生を待っている魂は大渋滞を起こしているらしい…

そして、人間の時間に換算すると向こう百年は休みなく役割に奔走しなければならぬ
いようだ。

だが、今回の試しで担当した者を観測している間は役割を免除されて休むことができ
るとのこと。

なので、今回の試しの担当者達にとっては待たせられている者達の文句、暴言、愚痴
等は

可愛いもので、むしろ時間をかけるのは大歓迎のようだ。

「欲する加護の系統、能力等をお主に決めてもらうのだが、考えは纏まったかの？」
「すいません、同一の実は存在できないとのことですが、」

他の転生者の方と被った場合はどうなるのでしょうか？」

「欲する加護を答えるのは同時にしてもらうが、被った場合は儂等、

神々の話し合いで決めさせてもらう。二度目以降の欲する加護の答えにて

先に答えた加護に被った場合は既に決まっていることを伝え、

違う加護を選んでもらうことになる」

そうなるよ、第2候補とかも考えておいたほうがいいか……
でも、待てよ？

「あの、被って選べなかった場合、少なくとも誰かがその能力を選んだことを知るようになるのですが……そうなるよと先に決まった者は転生した後に対策を練られたりする可能性があるので不利になりませんか？」

「ふむ、確かにその懸念はあるの……ちと相談してみるかの。」

お主は一服しながら選ぶ加護のことでも考えてゆるりとしていてくれ」

そういった老人は俺に煙草を銜えさせて火をつけると何処かに消えてしまった。

いきなり消えたことに驚いたが老人が言ったように加護のことを考えることにする
さて、どんな能力がいいかな？ 系統は？ こういうことを考えるのは本当に楽しい

煙を吐き出し、紫煙の行き先を目で追いつつ思いついたのは、

この場所に来る前にやっていたゲームのことだ

いけるか？ ということができる？ 戦闘以外の汎用性は？

欲しい能力に思い至った俺は更に考えを進めていく

これではできるか？ 能力以外で合わせるべき才能や資質は？ これは貰えるのか？

考え、悩み、また考える。時間を忘れて没頭した楽しい時間はあつという間に過ぎて

いった



「待たせたの」

「いえ、それほど待っていませんよ」

「こういつた会話は可愛い女の子とだったらよかったのになと思いつつ老人の言葉を待つ」

「…次世では必ず彼女を作つてやる！」

「お主の懸念は同じ時代に生まれるとは限らぬので不利とは認めぬと結論がでた」

「確かにその通りですね」

「だがの、そうなった者には担当者個人の裁量で3つの願いを1つ増やすことで合意した」

「ん？ どういう事だ？」

「担当者個人の裁量ですか？」

「うむ、此度の話し合いの内容は他の転生者達は知らぬ」

「転生者はお主を含めて7人いるのだが、他の転生者の中には担当者に対して

罵倒、暴言を吐いたりした者がおるのだ」

「如何に役割をサボ…休むためとはいえ気持ちのいいことではないのでな、優遇するかは個人の裁量でということになったのだ」

「なんというか…：礼節って大事だよな」

「お主は話し合いの内容を知っているでの、もし誰かがお主の選んだ加護があると知ったならば願いを一つ増やすことにしようかの」

「ありがとうございます」

「なに、誰かが知ったならばのこと。まだ礼はいらぬよ」

「それでもこの確約のアドバンテージはでかいと思う。俺の願う加護が決まったとは限らないが…」

「ああ、それとお主の加護の願いを他の転生者達よりも優先すると決めてきたからの。安心して加護を選ぶがよい」

「…えっ？」

「あく、いや、その、ありがとうございます」

「ほっほっほ！よいよい。実はの、お主は夜更かしをしておったせいか目覚めるのが

一番遅くての、お主が目覚めた時には他の者は皆、試しを受けると決めておったのだ」

「暇ができた他の担当者達は、担当の転生者の相手をしつつも

儂とお主の話し合いを覗いておったのだ。そして、存外にもお主のことを気にいったらしいの」

…覗いてた？もしかして、あの大泣きもこの老人以外に一部始終見られていた？

顔を赤くして俯き、片手で顔を覆う俺を見て老人が楽しそうに笑う

「ほっほっほ！照れるでない！お主が在るがままに在ったおかげで、お主を優遇するところが

できたのだからの…ほーっほっほっほっほー！」

老人が楽しそうに笑う。優遇してもらえるのは凄くありがたいのだが、

代わりに他の神々にも醜態を晒してしまいもの凄く恥ずかしい思いをする羽目になったのだった



「それでは、どのような加護を…悪魔の実を望むかの？」

笑いが治まった老人が改めて問いかけてくる。俺は考えていた系統、能力を老人に伝えたい

「超人系（パラミシア系）で重力を操作する能力が欲しいですね」

「ふむ…その能力は既に存在しておるの…」

うえ…そうなると選ぶことができないのか…これは本気で残念だな

「だが、上位種、又は下位種としてならば求めることができるの」

「本当ですか!!」

「うむ、同一は存在できぬがの。それで上位、下位を定めるのにお主がその実で成せると考えていることを教えてもらう必要があるの」

その実で成せることか…どこまでならいいのか疑問もあるがとりあえず老人に答えるか

「そうですね…私が考える重力操作能力で出来ることはこんな感じですね」

老人に伝えた内容を要約するところなる

- ・ ワームホールを開き転移することができる
- ・ ワームホールを倉庫として利用できる
- ・ 重力を操作し、空を飛ぶことができる
- ・ 重力を操作し、空間を湾曲させてバリアを張ることができる
- ・ 重力操作能力を球状にして相手にぶつけることで対象に掛かる重力を増減することができる
- ・ 自身に掛かる重力を増減することができる

・バリアを応用することで範囲内の空気を濃くし休息時の回復力を高めることができる

こういった内容を老人に伝えた

「うむむ…これは上位種となるかの？同一の存在とはならぬので創造することはできないの…」

老人が髭を撫でながら首を捻り考え始める。だが、望んだ能力を手に入れられそうで一安心だ

「すまぬがこの実を創造する際に、お主が想定したものと多少差異が生じるかもしれない
そのことを頭に入れておいて欲しい」

なんですと？

「差異ですか？」

「うむ、重力操作能力そのものは与えることができるが、あくまでもその世界が許容できる範囲で

となるのでな。もしかしたら想定よりも減ることが減ることになるかももの」

「そうですか…仕方ないでしょうね。また世界が減んだりしたら試しの意味が無くなりますから」

「うむ、理解してもらえたようで何よりだの」

しかし、ワームホールだけはぜひとも欲しいな。海を旅する際に非常に便利だし戦闘でも同様だ。

「さて、今度はお主が待つ番じゃの。他の者が能力を決めるまでゆるりとしているが良い」

そう言うのと老人は煙管から煙を吹かし始めた

「なら、もらえる加護が決まったのでそれを前提として3つの願いを考えることにします」

老人に続いて俺も煙草を銜える。火をつけてもらった煙草から煙を吸い込み上を見上げる

さて、何を願ったらいいかな？と考えながら煙を吐き出す

あれ？戦闘を前提として考えていたけど…と、ふと思ってしまう

海兵、海賊、賞金稼ぎ、商人のどれになってもワームホールが使えるなら便利なんだが…

差異がでるかもしれないと言われたので、それが無いことも想定しておいたほうがいいかな？

白い空間に煙が立ち昇っていく。また楽しい時間がきたと感じながら

俺は思考という名の妄想に没頭していくのだった



「待たせたの。ようやく他の者が望む加護が決まったようでの」

「いいいえ。散々待たせましたからね。私が言うことでは無いかも

知れないですがお互い様ですよ」

「うむ、では才能や資質で求めるものを3つ選んでもらおうかの。」

それと、覇気の資質の内1つはその願いと関係なく与えることができるでの」

3つか…誰とも加護が被らなかつたようだ。残念

だが、覇気の資質を1つもらえるのは凄く助かる

「確認なのですが、知識などを望んでも大丈夫でしょうか？」

「転生先の未来、つまり原作知識などは与えることはできぬの。それ以外ならば問題ない」

今更ながら随時単行本を買って読んでおけばよかつたかなと少し後悔する

「わかりました、ありがとうございます。では私が望む願いの1つは

《神速のインパルス》及びそれを十全に使える健康で丈夫な体ですね」

「ふむ、《神速のインパルス》とな…成程の、人の身で可能な反応速度の極致かの」

「ええ、それと神経は身体だけでなく頭にもありますので必然的に記憶力もよくなるかと」

「確かにの。ふむ、中々良いものを望んだの。して、望んだ理由は何かの？」

「一言で言うならば、天才というやつになってみたかったから…ですかね」

前世では赤点ギリギリで高校を卒業した凡人だったからな

勉強も運動も優れているとは言えなかった…

学生時代に出来る奴に聞いたことがあるのだが、大体は努力したからだと言われた

俺から言わせれば努力が実るだけの才能があるからだと思う

少なくとも前世の俺には出来なかったことだ…まあ、オタク趣味のゲーム以外に

努力する意欲なんてなかったけど…

「まあ、記憶力が良くなってもあくまでも思考するのは私なので

所謂、頭のいいバカになりかねないのですがね」

「中々に辛辣な言い方をするの」

「無いものねだりをする訳ですからね。扱いきれるとは限りませんから」

「ふむ、1つ目の願いは叶えよう。では、2つ目の願いは何かの？」

「そうですね…運を良くしてもらいたいと思っています」

「運とな？」

「はい、私は自浄作用で死にしましたが、一体どのくらいの確率で選ばれたのでしょうか？」

並行世界がいくつあるのか知らないが、それらの中から無作為で選ばれるのに、少なくとも億を超える確率を引き当ててしまったのだと思う…

どう考えても運が悪すぎるだろう

「今回、試しを受けることができるのは運が良かったと思いますが、その前が余りにも運が悪かったと思うので…次世では運が良いといいなと」

「成程の、与えることは可能だが…どれほどの運を望む？」

「そうですね…豪運とか天運と呼ばれるぐらいには」

「ふむ、ならば儂の方でその領域に適当に調整するが良いかの？」

「お願いします」

「では、3つ目の願いは何かの？」

「知識がもらえるということでしたので《シユウ・シラカワ博士》の重力に対する知識を」
「《シユウ・シラカワ》とな…：しばし、待ってもらおうぞ」

今まで好々爺とも呼べる表情をしていた老人が急に真面目な顔になり目を瞑った

…何か問題でもあったのだろうか？あったからあんな顔をしたのだろうか？

一体何が問題だったのだろうか？

「待たせたの。お主の3つ目の願い、叶えることはできるが…

代わりに加護を制限させてもらうことになる」

「制限？なんででしょうか？」

「一言でいうと、その知識を得て重力崩壊などを起こされると世界が減ぶからだ」

あゝ…そうだった。ゲームでは何度も当たり前のように使っていたけど

縮退砲とかを使えば普通に星や宇宙が減びるんだよな

「うゝん…どの程度、制限されますか？」

「少なくともブラックホールを作り出すことはできぬようにさせてもらう…」

その代わりといっってはなんだが3つの願いを儂にできる範囲で優遇しよう」

「どういった形での優遇になりますか？」

「ほっほっほ！なに、悪いようにはせぬよ。楽しみにして転生するが良い」

どう変わるのか判らないと不安なのだが…

「うゝん…解りました。では楽しみにさせていただきます」

「うむ、では最後に望む覇気の資質はなにかの？」

「その前に、選ばなかった覇気の資質はどうなりますか？」

「それは運次第かの。お主の両親となる者の才によるところとなる」

運か…ならば、確実に欲しいものを選ぶのがいいな

「では、『武装色の覇気』の資質をお願いします」

「叶えよう。では同時に転生させる必要があるのではし待つがよい」

「あの、両親と言われましたがつまり赤ん坊になるのですよね？」

「うむ、お主の自我は離乳を終えた辺りに目覚めることになるの。」

加護を与えた魂と身体が馴染むのにそのぐらいの時間が必要になるでな。

乳児の間は微睡みの中で過ごすことになる」

「悪魔の実はどのように手に入るのでしょうか？」

「強き因果を結ぶので生きていけば自然と手に入るようになるの。手にすれば

感覚的にそれが望んだものだと判る。」

まあ、出会う前に死んでしまうこともあるがそれはお主次第よ」

不吉なことを言わないで欲しい

そんな感じで加護が決まった俺は暇つぶしに老人と話しながら

転生の時を待つのだった



「では、転生させるとするかの」

「お願いします、神様もどうかお達者で」

「ほっほっほ！嬉しいことを言ってくれるの。では、楽しんでくるが良い」

老人の言葉と共に意識が薄れていく

ああ、老人の言葉通りに楽しむとしよう

自分らしく、自由に…そして彼女を！

そして意識が途絶えた俺は《ONE PIECE》の世界に転生するのだった

第1話

夢を見ていた。とても暖かい夢だ

紫色の髪の美女に抱き上げられ、話しかけられている

何を言っているのかは解らないが、とても優しく嬉しそうな表情をしているふと感じるのはこの人が母親だということだ。

記憶にある母親はこんなに若くないし、美人でもなかったはずだが俺はこの人が母親なのだと感じている

—— ああ、これは夢なんだ ——

そんなことを微睡みながら思っていると

誰かの声らしき音が聞こえる。どうやら母親に声をかけたようだ

刈り上げた独特な髪形の女性がこちらに歩いてきている

この女性も凄いい美人だ。制服のようなものを着ているが何の制服だろうか？

彼女の髪形に既視感があるが思い出せない：どこかで会ったのだろうか？

母親に抱かれているせいかととても暖かく、幸せなのだがとても眠い

もう少し考えたいことがあるのだが眠気に抗えない

もどかしく感じて少し身悶えするように身体を動かすと

母親がやすすように軽く揺り動かしてくる

もどかしく感じていた心が安心に満たされていく

——ああ、今はこの暖かさに身を委ねよう——

俺は眠気に身を任せ眠りにつく

た
紫色の髪の女性が赤ん坊をあやしていると、独特な髪形をした女性の声が大きく響いた



「アカリ——!!」

「ちよつとベルメール! 静かにしてよ! 赤ちゃんが起きちゃうでしょ!」

「はっはっは! ごめんごめん」

「もう…大佐になつたのなら少しは落ち着いたら?」

「そんなことしてたら海賊にやられちゃうわよ」

わたしの友人、ベルメールが快活に笑い答えてくる

「でも、昇進もここで打ち止めでしょうね」

「どうしてよ?」

快活で男勝りで強気な親友にしては珍しく弱気な発言だ

「六式は《薊（ソル）》を体得したし、他も手応えはあるんだけど

あんたも使っていた覇気がちよつとね…」

「海軍本部女性士官で悪魔の実の能力を持たずに最速で

大佐になった天才のあなたが随分と弱気ね」

「天才とかアカリに言われたくないわ。嫌味に聞こえるわよ」

笑顔のままベルメールが答えるが言葉に力がない…本当に少し気が落ち込んでいますよ
ようだ

「そんなに弱気じゃあ覇気は身に付かないわよ」

「わかつてはいるんだけどね…どうにもやる気がね…」

「…《オハラ》のこと?」

「…アカリ。その事は他に言ったらダメよ」

「わかっているわよ。この子とまだ別れたくないもの」

少し前に小さな島が1つ海から消えた

海軍はその事を秘匿しているがわたしは昔のツテで知っている

ベルメールはその時に現場にいたことで大きなショックを受けたようだ

話は変わるがこの世界には貴族や天竜人といった特権階級が存在する

その貴族や天竜人が一般の人に酷いことをしても海軍の軍人は

見て見ぬ振りをしなければならない

わたしも昔は軍人だったけどそのことで自分の在り方に疑問が出来ていた時にロジャー海賊団と戦闘することになり、あいつと出会った。

それがきっかけで海軍を除隊して、そしてロジャー海賊団に入った

同期で親友だったベルメールと敵対することになったけど

今でも親友であることに変わりはない。

数年前にロジャー船長が処刑されてからは、あいつが海賊団を作ると言うのでそれに入ったのだけど少ししてから訳があつて、あいつの一味を抜けた

その後はこの子を妊娠していることに気付いて落ち着ける場所を探していたら彼女が笑いながら自分の故郷のことを教えてくれて迎え入れてくれた

あの時は本当に助かった。気っ風が良くてももの凄く美人なのになんで恋人が：

「ちよつとアカリ？なんか変なこと考えてないでしょうね？」

「ん？ベルメールに恋人ができたらなあ」と

「自分に子供が出来たからって余計なお世話よ！」

抱いていたわたしの赤ちゃんがむずがる

「ベルメール！……起きちゃうでしょ！」

小声で叫ぶという我ながら器用なことをする。母は強いのだ

「ああ、ごめん。でもね、私だってその気になれば男の1人や2人

すぐにだってできるんだから。試しにゲンさんでも誘惑してこようかしら？」

「からかい過ぎたら可哀想よ。ゲンさん、純情そうだし」

「いーや、ゲンさんは結構好き者よ。顔を赤らめはするけど嫌がらないしね」

ゲンさんとは今、わたしがいる村である《ココヤシ村》の駐在さんだ

顔は強面だがとても優くていい人だ

強面で思い出したが、ロジャー船長が処刑される日にローグタウンで会った

あの子供らしからぬ強面をしていた男の子はどうしているのだろうか？

「どうしたのよアカリ？」

「ん？あのね、ゲンさんの強面顔で思い出したんだけど、あの日に

ローグタウンで会った子供はどうしているのかなって」

「ああ、スモーカーのこと？元気に海兵をやっているわよ。

最近、初戦闘を経験してちよっと参ってたけどね」

「そうなの？」

どうやらあの子は元気になっているようだ

「ちよつと見ていられない状態だったからね、酒で潰して連れ込んでやったわ」

「連れ込んだって…あの子、まだ15にもなっていないでしょう？」

「大丈夫よ。服をひん剥いて朝まで添い寝してあげただけだから。あつはつはつは！」
「もう…男の子の純情を弄んで…」

ベルメールは世話焼きでもあるが時折とんでもない悪戯をしたりする

今回のようなことはこれが初めてではない…スモーカー君、御愁傷様でした
「あいつがいつまでもマックスのことで遠慮するからね、

私はもう気にしてないのに」

マックスとはベルメールの元恋人のことだ

彼はロジャー船長の処刑の日に、処刑を止めるために襲来した

金獅子のシキとガープさん、センゴクさん達との戦いの余波から

スモーカー君を庇い亡くなったのだ…

「ベルメールは気にしなくなつたとしてもスモーカー君にとつては

命の恩人の元恋人なんだから、仕方ないんじゃない？」

「そういうけど、軍人なんてやってるんだから顔見知りか死ぬことなんて

珍しくもなんともないじゃない」

「なら、少しでもスモーカー君を安心させるために新しい恋人をつくつたら？」

「軍人を現役でやっている間は、もう作る気はないわよ」

手をヒラヒラさせながらベルメールが答えてくる

海軍軍人の家族が海賊に人質にされるといふ話は珍しいものだけど

無い訳ではない。それを気にする軍人も少くないのだ

「そういう訳で、私は恋人が出来ないんじゃないよ。作らないのよ。」

そこどころ、間違えるんじゃないわよアカリ」

そう言いながらベルメールが軍服の胸ポケットから煙草を取り出す

マックスが吸っていたものと同じやつだ

「気にしてないって言いながらも彼と同じ煙草を吸ってるじゃない」

「これ？一度やってみたら癖になっちゃってね。手放せなくなっちゃったのよ」

少しおどけた様子でそう告げてくる。本当に吹っ切れているように見えるのは

やはり彼女が強い女性だからだろう

「健康に良くないわよ？」

「板子一枚下は地獄っていう海兵をやっているのに、いちいちそんなの気にしちゃいられないわよ」

「まったく…それはともかく赤ちゃんの前では吸わないですよ。」

ベルメールはいいとしてもこの子まで不健康になっちゃうからね」

「別にいいじゃないの、海の上だと火の始末とかで船内では好きに吸えないんだから」

文字通りに命に関わるので木造船では火の始末は非常に厳しい

甲板ではともかく船内では禁煙どころか灯りとなるランプ一つのみ

扱いにだって海軍では大きな制限がかかるのだ

「軍は色々と厳しいからねえ。その点、海賊は自由に楽しかったわよ」

「宴なんかも自由にやれるんでしょ？そこだけは素直に羨ましいわ」

「あはははは…コホツ、コホツ」

「ちよつと、大丈夫？」

空咳が出る、最近は落ち着いていたんだけど…

「うくん…出産で体力使っちゃたからなあ。風邪でもひいたかな？」

「ちよつと、本当に大丈夫なの？その子に移すんじゃないわよ」

「わかつてるわよ」

大人気ないところもあるがこういってところでは本当に優しいのが彼女なのだ

わたしの自慢の親友だ

「《一角姫のアカリ》なんて二つ名を持つあんたがそこまで消耗するなんてね

そんなになつてまで産むほど母親になるってのはいいものなの？」

「…なつてみないとわからないわよ、ベルメール」

そう、好きな人の子供を宿すことの嬉しき、暖かさはなってみないとわからない
それは女の…母親の特権なのだ

「ところでアカリ。その子の名前は何て言うの？」

「ちよつと、ベルメール？確かあなたが戻ってくる前に手紙で伝えたはずだけど？」

「ごめん、間違つてスモーカーの件で始末書を書けつていう命令書と一緒に
捨てちゃつたわ、あつはつはつは！」

わたしの親友はこういったところでは大雑把なのだ。でも、こう見えて料理が上手
だったりと

何気に女子力が高い。こういったギャップもベルメールの魅力の一つだ

「アカリ？」

「何でもないわよ」

「そう？それじゃその子の名前、教えてよ」

腕に抱いている我が子を見てベルメールに告げる

「この子の名前は《シユウ》…わたしの愛する息子、《シラカワ・シユウ》よ」

潮風がこの子を撫でる、ココヤシ村の潮風だ。まるで、シユウを

祝福してくれているようで嬉しくなる

こうして、わたしが穏やかな時間を過ごせるのもココヤシ村に誘ってくれた

ベルメールと、海賊だったことを気にせず、笑いながらわたしを
迎え入れてくれたココヤシ村の人達のおかげだ

また一つ潮風が吹く：

わたしは潮風に乗せるようにココヤシ村の人達へ心の中で感謝を捧げた

第2話

「それじゃ、半年は帰ってこれないから。無理しちゃダメよ」

ベルメールがココヤシ村に戻ってきてきて2週間ほどたった

そして、村の沖合いに迎えの船がきたので、ベルメールの休暇は終わりになったのだ
「半年かあ、今度は結構長いわね」

「金獅子のシキがインペルダウンから脱獄したから色々忙しくなっちゃったのよ」
「ちよつと、それをわたしに教えていいの?」

「どうせ《冥王》から手紙がきて教えてもらえるんでしょう? ならいいじゃない。

オハラのことといい、さすが《冥王》よね」

《冥王》シルバース・レイリー

元ロジャー海賊団の副船長だ。わたしは3年ほどしかロジャー海賊団にいなかったけど、

育ての父のように感じている。なので一度、お養父さんと呼んだら

レイリーさんが顔を真っ赤にしまい、それをロジャー船長に大笑いされて

大喧嘩になってしまったことがある

その後は、宴をして仲直りをしたんだけど、その宴でロジャー船長がわたしにレイリーさんを父親と呼んであげてほしいと言ってきた

レイリーさんは顔を赤らめて否定してきたのだけど、ロジャー船長が頭を下げてわたしに頼んできたのでわたしは快諾した。それ以来わたしは

レイリーさんのことを《レイ養父さん》と呼んでいる

そのレイ養父さんから先日、オハラのことに関する手紙がきて

オハラが海から消えた事の詳細を教えてください

オハラは学者の人達が集まる島で、その島では皆で何かを研究しているらしい

そのオハラでは今年、8歳と6歳になる姉妹がいて、その2人が今年

博士号の試験に合格して、考古学者になった

姉の名前はニコ・ルビーで妹は《ニコ・ロビン》というみたいだ

ニコ・ロビンの名前には既視感を感じている…

多分だけど、もうほとんど思い出せない《前世の記憶》に関係しているのだろう

その姉妹が考古学者になったことで海軍の注目が集まり、オハラの人達が研究してい

る

何かに気づいた海軍が《バスターコール》を発動してオハラを海から消した…

オハラで研究されていたのは禁忌のもので海軍や《世界政府》が

見逃すことができない類いのものとレイ養父さんは手紙に書いていた老若男女を問わずにバスターコールでオハラごと海から消したことで今は政治的な根回しをしている段階なので秘匿しているらしい

もう少ししたらオハラのことを悪魔の島として発表するみたいだ

それに合わせて生き残りを賞金首として登録、発表するみたいだけど

その生き残りがあの天才姉妹だと書いてあったから驚いた

なにやらその姉妹が生き残ったことに《青雉》こと海軍中将のクザンさんが関わっているらしい

そういったことが手紙に書いてあったのだけど…

本当にレイ養父さんはどこから情報を手に入れているのだろうか？

「ゲンさんとDr. ナコーにアカリとシユウのことを頼んであるからね。

遠慮せずにこき使ってやりなさい」

「ありがとう。ところで、ベルメール？沖合に來ている船って…

もしかして、ガープさんの船？」

「あら、よくわかったわね。実はね、今回ココヤシ村に帰ってくる時に、

ガープ中将が同じ東の海（イーストブルー）にあるフーシヤ村に帰るっていうから

私もガープ中将の船に乗せてもらったって訳なのよ。私の船よりも足が速いからね」

「《英雄》ガープを足に使うだなんて：相変わらねベルメール」

「あつはつはつは！…これもいい女の特権よ♪」

ウインクをしながらそう言い切る親友に思わずため息がでる

《英雄》モンキー・D・ガープ

海軍の英雄で階級は中将。本来ならば大将や元帥にだってなれる

実力や実績を持っているのだけど、本人がこれ以上の昇進は断っているらしい。

大将や元帥に昇進すると責任やらなにやらで今ほど自由に動けなくなるから

というのが昇進を断っている理由みたいだ。

ちなみに海軍時代のわたしの上司だった

ガープさんはロジャー船長の無名時代からの好敵手でその因縁は深い。

わたしもレイ養父さんからの又聞きだからあまり詳しくはないけど

個人としての実力は《白ひげ》や《金獅子》と並び世界最強の一角だ。

しかも、悪魔の実の能力を持たずに拳一つで渡り合う本物の化け物なのだ

ロジャー船長やレイ養父さんはガープ中将を相手によく生き残り続けたと思う

まあ、わたしにしてみればロジャー船長もレイ養父さんも同じ化け物なだけだ

「それじゃ、そろそろいくわ。本当に無理したらダメよアカリ」

「そつちこそね、ベルメール。グランドラインの連中の力は天井知らずなんだから、

「1人で突っ込み過ぎないようにね…コホッ、コホッ」

「もう、Dr. ナコーが出産で体力を失った女性がそのまま亡くなるって話しは珍しくないって言っていたんだから。本当に気をつけなさいよ」

「わかってるわよ」

「この世界は海軍や海賊が1年中戦っているからか、外科技術はかなり高い。

前世での現代医療のように多くの医療器具、検査器具がないので

医者当人の知識、診察眼、外科技術に頼らなくてはならないからだ

その反面、内科のほうは時代相応というか、前世では完治可能な病気でも

この世界では死病だったりもする。…まあ、貴族や天竜人といった

特権階級がいるおかげなのか、その…そっち方面の薬は充実していたりする…

「なに急に顔を赤くしているのよアカリ？」

「な、なんでもないわよ」

「ふくん…怪しいわね〜？」

「…医者の話を聞いて外科技術は高いのに内科技術はねって思っただけよ」

ベルメールが首を傾げながら話してくる

「外科っていうのは外傷とかを治療するものだったっけ？で、内科は薬とかのことよね？」

「どこに顔を赤くする理由があるのよ？」

「…その薬のことで、その、あっち方面の薬は、じゅ、充実しているなって…」
「ふくん…で、あっち方面ってどの方面のことかしら？」

察しているはずのベルメールが顔をニヤニヤさせながら聞いてくる

「もう！わかつているなら聞いてこないでよ！」

「あつはつはつは！相変わらずアカリは変なところで初心よね〜」

前世に比べて命が失われやすいこの世界では、比較的に積極的な人が多いと思う
もちろん、恥じらいをもった人もいるがどちらかと言うと少数派のように見える

「いいじゃない別に。おかげで素敵な旦那様を捕まえて子供だつて出来たんだから」

「それは、私に喧嘩を売ってるのかしら？アカリが元気になったら、いつでも買うわよ」
「1年以上もブランクがある状態で、ベルメールに勝てるとは思えないからやめておくわ」

「よく言うわね。海軍時代の手合わせで私に8割は勝ってるじゃない」

「悪魔の実際の能力と覇気も有りの状態でじゃない。素のままじゃ勝てないわ」

「実戦ではなんでも有りなんだから、その状態で勝てなければ意味がないわよ」

なんて事のない、いつものやり取り…船出前の寂しさを隠そうとどちらともなく

おどけたように言葉を重ねていく。さあ、親友の船出を祝福しないと

「いってらっしゃい、ベルメール」

「いってきます、アカリ」

その言葉と共に踵を返す親友を見送る。旅立ちには笑顔でというのが船乗りの礼儀だから



「行っちゃったわね」

親友を乗せた船が帆を張り進んでいく、英雄が率いる船だが航海の無事を祈る。

見送った後に間借りをしているベルメールの家に戻った

「ふふふ、よく寝てるわね」

ゲンさんが村の大工さんに頼んで作ってもらったベビーベッドで、

わたしの息子であるシユウが気持ちよさそうに眠っているのをわたしは眺めた

「少し前にベルメールが言っていたけど、この子は本当に泣かないのよねえく…」

わたしの息子はお腹がすいた時と、おしめを取りかえて欲しい時ぐらいしか泣かない。
い。

とてもいい子なのだが、もう少し甘えてくれてもいいのと思ってしまう

「シユウウ？もう少し甘えてくれてもいいのよっと」

そんなことを言いながら、柔らかい頬を軽くつつく

少しむずがったと思ったら、その小さな手でわたしの指を掴む

そして、安心したようにまた眠る我が子に、わたしの顔は緩んでしまう

「…カワイイ！」

空いている手で拳を握りしめ、小声で歓喜の気持ちを表す

これぞ母親の特権！この子のためならば白ひげにだつて喧嘩を売れる！

…売るつもりはないけどね

にやけながらも、可愛い息子の顔を改めて眺める。

わたしと同じ波打つ紫の髪と紫の瞳だけど、切れ長と言える目と

すつと通つた鼻はあいつに似ているかな？

そんなことを思いながら、すやすやと眠る我が子の頭を撫でる

「素敵な恋人が欲しいとは思つていたけど、母親にまでなれるとは思つてなかつたなあ…」

既にほとんど思い出せなくなっている前世の記憶だが、それでもわかることがある
少なくとも、前世ではこれほど幸せな感情を抱いたことはない

「…まだ20年近くしか生きてないけど、色々あつて楽しかつたなあ」

そう呟いたわたしは、この世界での人生を思い返すのだった

過去・アカリ編

第3話

わたしシラカワ・アカリは所謂転生者だ

もう、ほとんど思い出せない記憶だけど、前世では看護師で25歳ぐらいまでは生きてははず

たしか最後は夜勤明けで急患が入ったからと電話がかかってくる、それにヘルプに入ったことまでは僅かながら記憶に残っている。

その後はあの白い場所で女神様に会って転生することになった。

なんかも凄く待たされたけどわたしは女神様とお話しをしながらゆっくりと待った。

どうやら転生者の1人が今起きたばかりで、担当の神様に色々質問していたらしいわたしは死んだことを聞かされて取り乱したのだけど、その人は煙草を吸って落ち着き

神様に質問をしては考えてと、現状の理解と納得に努めているみたいだった。

女神様が言うには、他の人達は罵倒、暴言は当たり前だったのにこれは珍しいとのこと

と。

そういった女神様の言葉に興味を持ち、その人の神様とのやり取りを
実況中継してもらうことにした

自身が死んだ理由から始まり、並行世界などのことなど質問は多岐に渡る。

抑制のことで涙を流しはじめたと聞いた時は吃驚した。

わたしも生前は異性に興味が無かった理由がわかり納得できたのは良かった。

今度こそは恋人を作ると女神様に宣言した後に、女神様と好みの異性について

ガールズトークをしたのはとても楽しかった。

その後は、転生特典を決めて転生をした。転生した先は《ワノ国》だ



ワノ国の九里にある《シラカワ家》に生まれたわたしは《神童》と呼ばれた。

女神様に願い、望んだ覇気を生まれながらに使えるようにしてもらったからだ。

他にも転生者なので前世の知識などが有り、周囲の子供よりも賢かったというのもある。

でも、それらよりも一番大きかったのは、前世の経験で血に慣れていたことかもしれ

ない。

おかげで、戦う際の所謂覚悟を決めるのにあまり時間はかからなかった。シラカワ家はわたしの曾祖父が剣術の一流派を興してその腕を認められ、姓を名乗ることを認められた家だ。わたしも4歳の頃から剣と覇氣の手解きを受けている。

7歳の頃には覇氣を扱うのにも慣れて、父親と近海に出るようになった。

その頃に海賊から手に入れた悪魔の実を食べて、女神様に望んでいた力を手にした動物系《ウマウマの実》モデル《一角馬（ユニコーン）》

これがわたしが望んだ悪魔の実だ

変身能力は角を生やす以外は無しにしてもらった代わりに、癒しの力に特化させた。涙や血液などの体液に癒しの力を付与させることが出来たりとかなり便利な力だ。角を生やし癒しの力を振るうわたしはやがて周囲の人に

《一角姫のアカリ》と呼ばれるようになった

わたしが8歳になったらシラカワ家にわたしを嫁に欲しいといった話しがくるようになる。

正直、8歳の幼女を嫁にくれってどうなのよ？とも思ったが、海賊などがいて

いつともされない命となれば結婚の話しが前世に比べて早くても仕方ないのかもし

れない。

ワノ国は長い間、鎖国をしているので海賊？などと思うかもしれないがそれでも一部貿易が

認められている場所もあるので海賊や海軍、商人といった者達が立ち寄る港があったりもする。

前世の日本での出島のようなものかな？

でもわたしは、旦那様は自分で決めたかったので全ての話しを断った。

ワノ国の大名である光月家に仕える重臣からも話しがあつたがそれも同じく断った。

父は大名家の臣に名を連ねるとあつて乗り気で、わたしを説得してきたがそれでも断った

父は家族の縁を切るとかも言ってきたがわたしは受け入れない。

母はわたしの味方をしてくれたが、やがて父に家を追い出された。

それからわたしは1人で生きることになった。まあ前世では一人暮らしをしていたので、

家事などは問題が無かつたし、既に実戦を経験していたので賞金稼ぎをすることにした。

船を手に入れるのは苦勞したし、航海術もなかつたので近海にしか行けなかつた。

そうなると実入りが少なく割りに合わないと感じたわたしは、癒しの能力で医者のも真似事をして稼ぐことにした。そのおかげで暮らしていく分程度には稼ぐことができた。

そんなわたしを見て宛が外れたのが父親だ。

泣きついてきたら婚約を結ぼうとしていたようだが、それができない。

しかも、口約束だがわたしと話しをつけると言ってしまうていたようで、

わたしを追い出しても、わたしが自活してしまったことで家での立場が無くなったみたいだ。

婿養子だから色々とあつていいところを見せたかったみたいなんだけど……

父は決して悪い人ではない、むしろ夫婦仲は口の中が甘くなるほど良いし、子煩悩と
言える。

でも、なんというか……思い立ったら猪突猛進なのが今生でのわたしの父親なのよね……
今回の縁談の件もわたしの将来の安定のために色々と動いたりした結果の空回りな
のだけど、

それ以外では特に悪い所はない……たぶん今頃、母親にこつてりと絞られているだろう
……

その後、実家がある村の隣村にある集会所に間借りして診療所モドキを開き、近所さ

んとも

顔馴染みになった頃、わたしの仕事場に山賊が来て荒らすようになった。

だけど、実戦を経験して、覇気と悪魔の实の能力が有るわたしは簡単に追い払った。だが、何度も執拗に荒らしにくるので一度、ワノ国の番所（交番のようなもの）に突きだそうとしたら、山賊が雇われただけなので見逃してくれと言ってきた。

雇い主を聞いてみたら、わたしの父だった。何やってんのよ糞親父：

暴走気味の父に色々と思うところはあつたけど、山賊さんたちと話し合い、

彼らの報酬の一部で支払える程度に診療所を壊して依頼をこなしたことにしようと思つた。

別の山賊を雇われてわたしの手に負えない相手だったら困るからだ。

それからは定期的にやってくる山賊さん達がわたしの診療所の名物になった。

患者さんや村の人達は遅しく、その日に何が壊されるか賭けるようになったのだ。

山賊さん達も悪乗りして、ちよつとした演技をしながら壊す物を物色するようになり、

賭けをしている人達を一喜一憂させるようになる。わたしはまだ子供だからダメと言われたので賭けてなかつたけど、とても楽しい時間を過ごした。

そして診療所で癒しの能力を使っているうちに癒しの力の欠点がわかつた。

わたしの癒しの力は怪我や毒は治せるが病気は治せなかったのだ。

いや、治せない病気があるというのが正しい：

一言で欠点を言うならば、ウイルスが原因の病気は治せないのだ

病気の症状そのものは能力で治せるのだけど、ウイルスを駆逐することができない。

そのため、表面上は治ったように見えてもまた再発するといった具合になる。

わたしはこの事に前世での経験や知識のおかげで気づくことができた

わたしは村の人達に正直に治せない病気があると言った。

すると、村の人達は医療大国でも治せないものは治せないのだから

気にしなくていいと言ってくれた。

わたしは今生で自意識が目覚めてから初めて泣いた。村の人達は笑っていた。

家を追い出され、母に会えなくなつてから少し寂しく感じていたわたしは

村の人達の暖かさに触れて恥ずかしくも泣いてしまっていた

それまでも何かと村の人達にはお世話になっていたのだが、わたしの泣いた姿を見た

後は

それまで以上のお世話を受けるようになった。

なんでも、子供らしいところを見られて安心したそうだ：

穴を掘って埋まりたいほど恥ずかしい：

暖かい村の人達に、陽気な山賊さん達と日々を楽しく過ごしていく。そして、わたしが9歳になった頃、その生活に転機が訪れる。わたしの父が剣を腰に帯びて診療所に乗り込んだのだ



「たのも——!!」

大きな叫び声とともに診療所のドアが勢いよく開けられる

聞き覚えのあるその声にわたしは頭を抱えたいと思いつつも声に応える

「ずいぶんと元気な患者さんですね。他の患者さんに迷惑なのでどうぞお帰りください」

「あ、いや、これは失礼いたしましたのだ」

そう言った父は静かにドアを閉めて外に出る…

「なんでじゃ——!!」

と、思ったら自分でツツコミをしながら戻ってくる。相変わらず愉快的な父だ。

「なんででしょうか父上？用事が無いのならばさつきとお帰りください。

あ、お母様にはわたしは元気にやっていますとお伝えくださいね♪」

「うむ、家内にはしつかりと伝えよう…つて、そうではない！用事があるからきたのだ！それとアカリ、なぜ拙者のことをいつもものようにパパと呼んでくれぬのだ？」

「パパなんて呼んだことないわよ、糞親父！」

「ガ——ン!!」

頭を抱えてそう言った父は膝を折り、手を着いた四つん這いの姿勢になり落ち込む

…人前じゃ恥ずかしくて呼べるはずないじゃないバカ親父!!

「うう…シオリ、アカリは反抗期になってしまったようなのだ…」

「わたしを放り出したのはお父さんでしょーが！わたしだって

それなりに苦労したんだからね！」

「それはアカリが見合いを…」

「なんでお見合いを断っただけで家を追い出す必要があるのよ！」

自分は恋愛結婚だったくせに！」

「いや、シオリとの馴れ初めはな？」

「人様の前で惚気ようとしてんじゃないわよ、バカ親父！」

「ガ——ン!!」

漫才のような親子の掛け合いに周囲は笑いを堪える。

それに気づいたわたしは深呼吸をして落ち着きを取り戻し、父に問いかけた

「それで、本当になんの用なのよお父さん？」

「うむ…アカリ、その前にパパと」

「いいから早く言いなさい。また親父って呼ぶわよ？」

「はい…」

少し落ち込んだ父は姿勢を正してわたしに告げた

「戻ってきなさい、アカリ」

「だからわたしは旦那様は自分で選ぶって…」

「結婚の話しは受けずとも良い。なれど見合いで会うだけでもしてもらいたいのだ」

「なんでまだ8歳だったわたしを見てハアハアするような

変態達に会わないといけないのよ！」

わたしは素敵な恋人が欲しいの！変態という名の紳士はお呼びじゃないのよ！

「いや、それには拙者も思うところはあるのだが…相手はこのワノ国の名家であるので、会わずに顔を潰す訳にはいかんのだ」

「…それはわかるけど、今のわたしにはこの村の人達を治すっていう仕事があるし…」

「一緒に帰るのだアカリ、また家族で一緒に仲良く暮らそう」

「お父さん…」

「アカリを連れて帰らぬとシオリが床を一緒にしてくれぬのだ！」

「9歳の子供相手になんてこと言ってるのよ！感動を返せエロ親父！」
わたしは顔を真っ赤にして父親に叫ぶ。

前世では下ネタをなんとも思わなかったのだけど、異性に興味が出た今生では少し過剰に反応してしまふようになってしまった…。

看護師としての仕事だからと異性の裸だつて気にしなかつた

前世の凶太さはどこにいったのだろうか…

そんな事を思っていたら集会所にいた人達が診療所に顔を出し、

わたしの背中を押すような言葉をくれた。

「アカリちゃん、お父さんと一緒に帰りなさい」

「そうでさあアカリ先生！仕事するにもまだ早いつてもんでさあ！」

「村長、お頭さん…」

村長と山賊のお頭さんのその言葉にわたしは言葉を続けられない

「アカリちゃんはまだ若い、今のうちにいっぱい親に甘えておきなさい。」

「まあ、俺らも割りのいい仕事がなくなつちまいやすがね。でも山賊には戻る気がねえ。

なら色々と情ができちまったこの村に骨を埋めるのも悪くねえかと子分達と

話してたところでさあ！なあお前達！」

「「応！」」

「みんな…」

そんな村の人達の言葉にわたしも決心が出来たが、1つ疑問が残った

「ありがたい村の皆!この村を離れるのは寂しいけど…わたし、帰るわ!」

わたしの言葉に村の人達が口々にこっちこそありがとうと言ってくれる。

そして、一通りの言葉の掛け合いが収まった頃合いを見てわたしは父に問い質した。

「ところでお父さん?なんでこの診療所に山賊さん達を送り込んだのかしら?」

わたしの言葉に村の人達の視線が一斉に父に向けられる

「む?そのことか?なに、簡単なことなのだ。医者になつて動かなくなれば劍の腕も

鈍つてしまうと思つたのだ。それ故、手頃な輩を見繕つてアカリの劍の相手にしよう

とな」

「…それ、家の道場の門弟さん達を派遣すればすむことよね?」

診療所が痛いほどに沈黙する

「…あ——!?!」

「もう少し良く考えなさいよバカ親父!」

「う、うむ、それはそれとしてなのだ…」

「「誤魔化す気だ——!!」」

村の人達の総ツツコミが診療所を含む集会所全域に響く

「アカリよ、劍の腕は鈍っておらぬだらうな？」

父はそう言うのと腰に差していた劍を抜こうとする

「ちよつとお父さん！ここは診療所よ！劍を抜くなら外にして！」

「山賊だけでなく、海賊等もいる世の中なのだ、戦場を選べぬこともあるのだ！」

「もつともらしいことを言つて誤魔化すにしても、もう少しやりようがあるでしょ！」

「ええい！アカリよ、お前も劍士の端くれならば、いざ尋常に勝負なのだ！」

そう言つて父が鞘から直劍を抜いた直後、父が来たときよりも大きな声と共に

海軍の軍服を身に纏つた大男が診療所に入つて来た

「医者はおるか——！」

第4話

「医者はおるか——！」

その大きな声と共に、3メートル近くはあるだろう長身の

短髪の大男が診療所に入ってきた。

「ぬ？」

大男が目にしたのは10歳ぐらいに見えるかもしれない可憐な美少女のわたしと

そのわたしに向かつて剣を抜き放っている父だ……どう見ても危険な情況じゃないの

よ！

「むん！」

その言葉と同時に大男が父を殴り飛ばし、診療所の窓から外に父を叩き出す。

いや、正確には殴り終わった所しか見えなかったから、そこから判断したに過ぎない

——この人、凄く強い！——

「大丈夫じゃったかお嬢ちゃん？安心せい、儂がすぐに終わらせてくるからな」

そう言うで大男が外に出ていった。咄嗟のことだったのでわたしは反応が遅れてし

まった

「あ、ちよつ、ちよつと待つてください！あの人はわたしの父で！」
わたしの声は空しく響く。止めないと、と思い急いで外に向かった。



「儂の拳骨を防ぐとはお主やるのお。海軍に入らんか？」

「先程の拳の一撃はお見事だったのだ。名を聞かせてもらいたいのだ」

「儂の名前はモンキー・D・ガープ！海軍本部の中将じゃ！」

外に出たわたしが耳にした大男の名前は鎖国しているワノ国にも

聞こえてくる有名人のものであった。

—— 《ゲンコツのガープ》がなんでこんなところに？——

そう疑問に思うわたしがだが彼の名前に既知感を感じている。

悪魔の実を食べた頃から少しずつだけ思い出せなくなっている前世の記憶：

もしかしたら、その記憶に関係しているのかもしれない

看護師として日常的に関係があったことはまだ思い出せるのだけど、

そうでないことは思い出せなくて、今回のように既知感として感じるようになった。

「ほう、音に聞こえしゲンコツのガープ殿であったのか、鎖国をされていて外の事に疎い

ワノ国でも貴殿のことは伝わってきているのだ」

「ぶわっはっはっは！そうかそうか！」

「先程は貴殿の拳を馳走してもらったのだ。ならば今度は拙者の剣を馳走するのだ！」
その言葉と共に踏み込み、剣を上段から振り下ろす父と、拳骨で剣を迎え撃つガープさん。

——は？なんで剣を拳で弾けるの？——

あまりの光景にわたしは唾然としてしまう。1合だけでなく2合、3合と

2人の剣と拳が交わる。剣が鳴らす金属音が辺りに響き渡る。

わたしの父は180センチを超える長身痩躯な体格だけど、鍛え抜かれた体の持ち主だ。

だけどガープさんはそれを遥かに上回る3メートル近い身長に筋骨隆々の体だ。

そんな2人が戦う光景にわたしは魅せられてしまう。

——お父さん、あんなに強かったんだ——

普段は子煩悩でお母様に頭が上がらず、道場でもお弟子さん達と和気藹々な雰囲気
で剣の修練をしている父だが、一緒に近海に出て海賊と戦った時は少しだけ格好良かつた。

でも、二つ名を持つ相手にこれだけ戦えるとは思ってなかった…

家の道場の師範はお母様だし、家の道場の流派が使っている武器は…

「しかし、刀でもサーベルでもなく直剣とは珍しい！」

「拙者の学ぶ流派は初代が不器用な御仁だったようだな！刀やサーベルを用いて、

引き斬る、撫で斬るといったことが苦手で、ただひたすらに

叩き斬ることを突き詰めた結果、直剣に行き着いたようなのだ！」

そう、家の流派は当世で流行している刀やサーベルではなく直剣を使っている。

船の上という不安定な場所で武器を用いる場合、力任せに振るえば体勢を崩しやす

い。

他にも直剣の形状から突き攻撃がやりやすいのだけど、点での攻撃は能力者、覇氣使

い、

人以外の種族などの生命力の強い人達には効果が薄い…。

そのため、線での攻撃となる斬ることに特化した刀やサーベルが流行しているのがこ

の世界だ。

そして、その流行に反する直剣を使っているのが家の流派なのだ。

正直な所、わたしは前世の記憶というか馴染み深さから刀に対する信仰のようなもの

があり、

わたしの曾祖父が姓をもらえたのは物珍しさからだと思っていた。

でも、わたしの父は海軍本部の中將と互角に渡り合えている。

「…お父さん、凄い」

思わず称赞の言葉が口から出てしまう。

—— いけない、わたしは止めにきたのに！——

「ちよつと、2人ともやめ…」

「ぶわっはっはっは！ 儂の拳骨とやりあつて劍を折らぬのは

《冥王》以来かもな！ 海軍に入らぬか！」

「愛する家内と娘達を置いて行くわけにはいかぬのだ！ お断りするのだ！」

止まってよ2人とも！

「2人ともやめ…」

「しかし、ガープ殿も良き拳であるのだ！ そこいらの海賊とは別格なのだ！」

「ぶわっはっはっは！ 愛ある拳骨に不可能はない！ だから海軍に入らんか！」

話しを聞いて！

「やめ…」

「先程断つたのだ！ だがその心遣いには感謝するのだ！」

「ぶわっはっはっは！ ならば海軍に入れ！」

わたしは深く息を吸い込み全力で叫んだ

「いい加減にしなさい！」



「いい加減にしなさい！」

お嬢ちゃんの声が辺りに響き周囲の者達の耳目を集める

その烈迫の気合いにお嬢ちゃんの足下で微かに土埃が舞う。

——— 今のは、まさか霸王色の覇気か？ ———

好敵手であるロジャーや白ヒゲに比べれば兎戯たるものだが、

儂とこの侍の戦いを止めるほどの注目を集める今の感覚は紛れもなく霸王色の覇気だ

「お嬢ちゃん…お主、今のは…」

「ガープさん！ 貴方は最初に医者はいるかっって言いましたよね？」

「う、うむ」

「なら！ 待たせている患者さんとかいるんじゃないんですか？」

「…あ」

「その人の治療が間に合わなくなったらどうするんですか！！ 早く連れてきなさい！」

「は、はい——!」

そう促され、儂は負傷している部下を連れてくるべく踵を返し走り出そうとする
「そもそもお父さん! お父さんが診療所で抜剣しなければこんなことには!」

「いや、アカリ…?」

「黙って聞きなさい!」

「はい!」

そう言つて正座をする侍の姿がおかしくて笑いそうになる。

しかし、目敏く気づいたお嬢ちゃんが儂に噛みついてきた

「何をしているんですか! 早く連れてきてください!」

「おう! 急いで連れてくるわい!」

儂は今度こそ走り出す。しかし、頭に浮かぶのはお嬢ちゃんが魅せた才と胆力だ。

海軍では若手で自身の部下であるマックスしか持つていない霸王色の覇気と、

明らかに格上である強者達の戦いに割り込む胆力…正に得難き人材だ。

「思わぬ出会いもあったものじゃ!」

遠ざかる村を走りながら一瞥すると笑いが込み上げてくる。

あのお嬢ちゃんを是非とも海軍に誘わねばならぬと

「その前にお嬢ちゃんに言われた通り怪我人の治療が先だな、ぶわっはっはっは!」

最初はあのお嬢ちゃんを助けるためだった。だが思わぬ強者との出会いに心が昂り、戦いにのめり込んでしまった。しかし、終わってみればあの侍はお嬢ちゃんの父親で、

こちらの早とちりだったのだ。後で謝らなければなるまい。

そんなことを考えながら走っていると入江に停めた船が見えてきた。

「負傷者の搬送の準備をせい！ 医者の方に連れていくぞ！」

慌ただしくも整然と動き出す部下達に笑みが溢れる。傲慢の部下達だ。

「お帰りなさい中将！ 少し時間がかかっていたようですが何かあったのでしょうか？」

副官のボガードがそう儼に問い質してくる。

いかな、言い訳を考えてこなかったわい……笑って誤魔化すか。

「ぶわっはっはっは！」

「一体何をやらかしてきたのですか貴方は——！」

全く信用のない部下の物言いにさらに笑い声を張り上げて誤魔化す。

船から覗く部下達の目が青空に浮かぶ雲のように白かった

第5話

「生まれてきて、すいませんなのだ…」

あの後、お父さんと30分ほどお話しをした結果、お父さんはこんな感じにネガティブ発言をするようになってしまった…少しやりすぎたかな？

でも、ガープさんとの戦いに夢中でこちらの話しを聞かなかったお父さんも悪いとわたしは思う。うん、自己弁護は完璧ね

「怪我人を連れてきたぞ——！」

ガープさんの大きな声が集会所に聞こえてきた。さてと、頑張らなくちゃ！「どれだけ怪我人がいるかわからないから皆、手伝ってください！お父さん！

いつまで凹んでいるのよ！お父さんにも手伝ってもらおうからね！」

「やるせないのだ…」

…はあ、仕方ないか。

「さつき、ガープさんと戦っている時は少しだけ格好良かったわよ…パパ」

わたしがそう言うのと、俯いていた父はガバツと顔をあげる

「…アカリ、今なんと？」

「ああもう！いいから手伝ってよお父さん！」

「だっはっはっは！拙者、復活！」

「馬鹿やってないで早くしてよね！また親父ってよぶわよ！」

「はい——！」

本当に世話が焼けるんだから……お母様はお父さんのどこに惚れたのかしら？

下手にそんなことを聞くと惚気がひどくて胸焼けしそうになるから聞かないけどね

「お湯と清潔な布を準備して！それと念のために針と糸の消毒もお願い！」

わたしの指示で村の人達と父がバタバタと動き出す。救急の時もこんなだったかな

と

前世のことを思い出そうとしながらも、わたしは能力を使う覚悟も決めておく。

人が死ぬ場面は見慣れているけど、それでも助けられる人は助けたいから……



「む？お嬢ちゃん、医者はどこじゃ？」

「わたしが医者ですよガーブさん」

わたしの言葉にガーブさんが目を見開く。慣れている反応なのだけど、

思わず苦笑いをしてしまう。

「ぶわっはっはっは！そうかそうか！お嬢ちゃんが医者か！」

「はい、怪我人は何人ですか？」

「僕の副官から聞いてくれ、ボガード！」

「はっ！ガープ中将の副官をしておりますボガードです！貴女に治療を求める怪我人は

17名です！すぐにこの集会所に運び入れたいのですがよろしいでしょうか？」

「お願いします」

その言葉を聞くとすぐにボガードさんは部下の人達に指示を出し怪我人を運び入れてきた。

さあ、ここからはわたしの仕事だ！

「わたしの指示する色の布を怪我人に巻いていってください」

「ぬ？なぜそんなことをするんじや？」

「怪我の度合いによって治療の優先順位を分けるためです」

「ほう、面白いな」

「ええ、なかなか面白い試みだと思います。手当たり次第に治療をしていくよりも

よほど効率的ですし、多少ですが混乱を抑える効果が見込めます」

わたしの説明にガープさんとボガードさんは口々にそう言うと言った顔を縦にふる。

これだけの説明で専門ではないのにこの行為の意図に理解を示すのは、かなりの実戦経験を積んできているのだろう

そして、布を巻いていつている途中、緊急で治療が必要な人を見つけた

「…っ!!急いで水を持ってきて!」

わたしの言葉にお頭さんが水を持ってきてくれる

「どうしたんじやお嬢ちゃん?」

「質問は後でお願いします!」

そう言うとなわたしは能力を使うために角を生やす。それを見たガーブさんと

ボガードさんが目を見開くが構っていられない。

そして、わたしは針で指を刺して血を一滴、水に垂らすと水が淡く黄金色に輝きだす

「さあ、この水を飲んで!」

「う、あ…」

「頑張つて!お願いだから飲んで!」

口の端からこぼしながらも重傷の海兵は水を飲む。すると、傷口が

水と同じく淡く輝き出しゆっくりと再生していく

「これは…」

「よし!この人は血を失い過ぎているから点滴もしておいてください!次に行きます

「！」



「よし！この人は血を失い過ぎているから点滴もしておいてください！次に行きます！」

色付きの布を巻きながら緊急性の高い怪我人の治療をしていくお嬢ちゃんを見ながら儂は目の前で起きた奇跡を思い返す

右足と左腕を失っていた部下がお嬢ちゃんから水を飲ませられると、失っていた部位が少しずつ再生をしていき、今では元に戻っている。

治療のための物資が、先の海賊との戦いでその多くを失ってしまい、負傷した部下達に満足に治療を施すことができなかつた。

そのため軍医が最低限の止血を施し、近くの島に医者求めたのだが、思わぬ幸運、いや、奇跡に出会った。

海兵として前線に復帰するのは無理だと軍医に宣告され涙を流していた部下の傷が何事もなかったように治ってしまったのだ。これを奇跡と言わずなんと言う！

「ふわっふわっふわっ……」

の 本当に思わぬ出会いもあったものだと言いが止まらない。先のお嬢ちゃんの父親と

戦いと部下を助けてもらったことの札をしつかりとせねばなるまい。

見た目に合わず的確に治療の指示をしていくお嬢ちゃんを眺めながら改めて思う。

これは是非とも海軍に誘わねばならぬと。



「ふう、これで一通りの治療は終わったわね」

わたしは軽い怪我の人達は傷口の消毒と縫合をし、重傷の人達は能力を使って治していった。

本当は傷跡を残さないように能力で全員を治したほうがよかったのかもしれないけど、

わたしの能力は便利だが決して万能ではない。そのため、可能な限り能力を使わずに治すようにしているのだ。

「ご苦労じゃったなお嬢ちゃん、本当に助かったわい。それと一つ聞きたいのじゃが、なぜ全員に能力を使い治さなかったんじゃ？」

「…それは」

「あ、いや、話したくなければ話さんでもいいわい」

「違います。なんて説明したらいいかわからなくて…」

「む、そうか、すまんかったなお嬢ちゃん。お嬢ちゃんがまだ子供だということをすっかり忘れとったわ、ぶわっはっはっはっは！」

前世も合わせると30…いえ、わたしは9歳の女の子だもの。仕方ないわね、うん。

「理解しにくい説明になっちゃうと思いますけど…それでもいいですか？」

「ああ、構わんわい。まあ、儂はあまり頭がよくないから元々理解できんかもしれんがの？」

ぶわっはっはっはっは！」

「ぶぶぶ、それじゃ説明しますね」

わたしは自身の能力を頭の中で整理しつつ、ガープさんに治療方法を分けた理由を話した。

「わたしの能力は一言で言えば回復ではなく治癒なんです」

「ん？何が違うんじや？」

「そうですね…ガープさんは筋肉痛はわかりますか？」

「そのぐらいならわかるわい。訓練などの後に体の筋が張ったりするあれじやろ？」

「はい、それが治ると前よりも重いものを持つたりできるようになりますよね？」

「それが回復だと思ってください」

正確には超回復とかいったものだったはずだけど…前世でもっと勉強しておけばよかつたな

「ふむ、確かに訓練や戦いの後では力が増したりするのう」

「はい、そして治癒というのは訓練とかをする前の状態に戻す…みたいなものだ」と

思ってもらえればいいです」

「ふむ、では儂の部下達の治療を分けたのは、部下達の成長を考慮してといったところか？」

「そうですね、概ねそんな感じですよ」

「ガープさんは自分を頭がよくないと言ったけど、要点を掴むのは上手いみたいね」

「ぶわっはっはっは！そうかそうか！お嬢ちゃん、重ね重ね感謝するぞ」

「いえ、もう少し上手く説明できればよかつたんですけど…」

「なに、気にすることはないわい」

「アカリ、飲み物を持ってきたから少し休憩するのだ」

「お父さんがそう言ってジュースを持ってきてくれた」

「ありがとうお父さん」

「おお侍の…そう言えば名前を聞いてらんかったな」

「む、これは失礼したのだ。拙者はシラカワ・ブンタというのだ。以後お見知り置きをな
のだ」

「ぶわっはっはっは！こちらこそよろしく頼むわいブンター！」

先の戦いのおかげなのかお父さんとガープさんはすっかり打ち解けたみたいね

「おお、そうじゃった。ブンタ、いきなり殴ってしまったてすまんかった。お嬢ちゃんに
剣を向けているのを見て海賊等のような悪漢だと思つてしまつてな」

「あ、いや、その事は拙者が場所を弁えずに剣を抜いていたのが悪いのであつて…」

「そうですよガープさん。悪いのはお父さんであつてガープさんじゃないわ」

わたしの言葉にお父さんが項垂れる。もしかしたらお話しを思い出したのかもしれない
ない

「それにガープさんが謝るべき相手はお父さんじゃなくて部下の人達ですよ。

本当に危なかつた人もいたんですから」

「そうだのう、後で頭を下げるわい」

ガープさんは中将といふかなり上の立場なのに平然と頭を下げると言った。

少し吃驚したけど、なんかガープさんらしいなとも思った。

「それでお嬢ちゃん、治療した部下達はどのぐらいで動かせるんじや？」

「そうですね…かなり血を失っている人もいたので最低でも7日は安静にして欲しいです
すね」

「わかったわい。ボガード！」

「はっ！電伝虫で本部に遅帰を伝えておきます。」

そう言うのと副官のボガードさんは外に出ていった。…いつの間に近くにきていたの
？

「さて、話しは変わるがお嬢ちゃん」

「ガープさん、わたしの名前はアカリっていいいます」

「わかったわいお嬢…アカリ」

先程まで笑顔だったガープさんが真面目な顔付きになり話し掛けてくる…なんだろ
う？

「お主、海軍に入らんか？」

この時のわたしは、この一言がワノ国で生まれ育ったわたしの人生を
大きく変える転機となることをまだ知らなかった

第6話

ガープさんに海軍に勧誘されてから3日経ち、治療した軍人さん達の状態が安定してきたので

後を村のみんなと軍医さんに託したわたしは父と一緒に一度実家に帰ってきた

「お帰りなさい、アカリ」

「ただいま、お母様」

わたしと同じ紫色の髪をしたこの女性が今生でのわたしの母親だ。

「もう、お母様じゃなくてママでしょう？寂しいわあ」

そう言っつて着物の袖で目元を押さえる仕草をするお母様なのだけど：

お父さんといいなんでパパ、ママ呼びにこだわるのかしら？

「それで、お母様…」

「ママよ、アカリ」

「お母…」

「ママよ、アカリ」

「…ママ」

「何かしらアカリ?」

…このママ呼びの強制さえなければ綺麗で完璧なお母様なのと思うが、ため息をつきたいのを堪えて、わたしはガープさんに海軍に誘われたことを話すことにする

「わたし、海軍に誘われたんだけど…」

「ダメよ」

「そんな、ママ」

「ダメ」

そんな可愛く言われても…

「ブンタさんから聞いたけど、アカリは海軍の中将さんとブンタさんの

戦いをどう思ったのかしら?」

「…凄かったとしか」

「ブンタさんの剣を見せてもらったのだけど、打ち直しをしなければいけないほど

剣にダメージを受けていたわ。その中将さんの拳でね」

さすがはゲンコツのガープと言われるだけはあるのね…って

「素手で剣にそんなにダメージを与えたの!?!」

「ブンタさん曰く、最初の一撃以外は手加減されていたみたいね」

「そんな…」

「本当なのだアカリ」

「邪魔しとるぞお嬢ちゃん」

そう言ってお父さんとガーブさんが煎餅を齧りながら部屋に入ってきた。

…行儀悪いわよ2人とも

「拙者とガーブ殿の武装色の覇気では差があるのだ。故に手加減されていなければ

拙者は剣を折っていたかも知れないのだ」

「ぶわっはっはっは！折らぬように打点をずらし打ち込んでいただろうが」

…武装色の覇気

「アカリは物心ついた頃から見聞色の覇気を使えるけれど、武装色の覇気はどうかしら？」

「お母様…」

「ワノの国の外…海に出ていけば様々な能力者と出会うでしょうね。その時に

自然系能力者と出会ってしまったらアカリはどう戦うのかしら？」

わたしはお母様に言葉を返すことができない

「だから、1年我慢しなさい」

「え？」

「1年でシラカワ流の基礎と武装色の覇気を最低限使えるように鍛えてあげるわ」

お母様は笑顔でわたしに告げる。嬉しいのだけど…本当にいいの？

「アカリがブンタさんと船で近海に出た時に凄く嬉しそうにしていたのは知っているわ。」

だからブンタさんとアカリの将来のことを前から相談していたのよ」

「そんな時にアカリに見合いの話しがきたのだ。拙者はアカリが外に行くのに

反対だったから見合いを受けようと方々に話しをしに行っていたのだ」

そんなことがあったんだ…

「ブンタさんがアカリを追い出してもアカリは泣き言も言わずに自活してしまっただしょう？」

それでブンタさんもアカリが外に行くのを覚悟したのよ」

「お父さん…」

「すまなかつたのだアカリ。拙者はもつと家族で一緒にいたかつたのだ」

わたしはこの世界に転生する前にどういったところなのかある程度知っていたから

色々と楽しみたいと考えていた。それが自然と海への憧れとして出ていたのかもしれない

前世では一人暮らしをしていたから今生でも家を出ることを当たり前に考えていた

：

それを察した両親はわたしのことを考えてこの世界で生き抜くために必要な技術を教えようとしてくれている：わたしはあまり両親のことを考えてなかったのに：

「ごめんなさい：」

「何を謝ることがあるのかしらアカリ？」

「わたし、お母様やお父さんのことを考えてなかった：」

お母様がわたしに近づき頭を撫でてくる。とても優しいお母様の手だ

「：確かにアカリが家を出るのは寂しいわ。でもね、いつか子供は巣立つものよ」

お母様の言葉と手の暖かさに顔が熱くなってくる：涙が溢れそうだ

「だからあと一年思いつきり鍛えてあげるけど、そのかわりに思いつきり甘えてねアカリ」

わたしは今度こそ涙を流した。声をあげて泣いてしまった。

そんなわたしをお母様は優しく抱き締めてくれた



「ふふふ、泣き疲れて寝てしまったわね」

私の娘、アカリが私の胸に抱かれて眠っている。歳に似合わず大人っぽいところもあるけれど、寝顔もとても可愛い自慢の娘よ

「中将さん、お話しを聞いていたと思いますが、本当にアカリを海軍に誘うおつもりがあるのなら、１年後にアカリを迎えにきていただけませんか？」

「…本当にいいののか？」

「はい、航海術も持たずに海に出て迷子になるよりはいいですから」

「ぶわっはっはっは！確かにその通りじゃの！」

「静かに！アカリが起きてしまいます！」

「おっと、すまんすまん」

トテトテと部屋の外から可愛らしい足音が聞こえてくる。

どうやらあの子達がきちやっただみたいね

「お母様、アカリは外に行ってしまったのですか？」

「アカリお姉ちゃん、行っちゃうのですか？」

私の娘達が不安そうに訪ねてくる。後でちゃんと説明しないとね

「このお嬢ちゃん達は？」

「アカリの姉のユカリと、妹のヒカリなのだ。お前達、お客様に挨拶するのだ」

「姉のユカリと言いますわ」

「妹のヒカリなのです！」

「元気に挨拶をする娘達がとても可愛いわね。後で誉めてあげなくちゃ

「儂はガープじゃ、お嬢ちゃん達も海軍に入らんか？」

「私はアカリと違つて覇気をまだ扱えませんかから無理ですわ」

「ヒカリはまだママと一緒にいたいから嫌なのです！」

「今日はヒカリの好きな物をいっぱい作つてあげないとね」

「うゝむ、残念じゃのう」

「ガープ殿、あまり簡単に娘達を連れて行こうとしないでほしいのだ」

「海軍も人手不足で、機会があれば勧誘せねば休暇もまともにとれんのじゃよ」

「それほどに海賊が増えているのであるか？」

「正確には大物に対処できる者が少なくて、後進の育成に手間取つているのが現状

じゃわい」

「成る程、だから才ある若手を求めているのね

「それがアカリを誘つた理由ですか？」

「それもあるのじゃが……まあほとんどは儂の直感じゃな。ぶわっはっはっは！」

「私の問いにガープさんが笑いながら答える。なんとも憎めない人柄の方ね

「さて、そろそろ失礼するとしようかの」

「水くさいのだガープ殿、シオリの作る昼飯を食べていくのだ。絶品なのだ」

「そうしたいところだが、そろそろ報告書やらを書かねば副官のボガードに

どやされるからもう、ぶわっはっはっは！」

「残念なのだ」

ブンタさんはガープさんのことが本当に気に入ったみたいね

「それではな、アカリには見送りはいいから修行に励めと伝えておいてくれ」

「任せるのだ」

「お嬢ちゃん達もまたな」

「まだアカリが出ていくと決まった訳ではありませんわ」

「アカリお姉ちゃんを連れていこうとする悪い人なのです！」

あらあら、ガープさんはユカリとヒカリには嫌われちゃったみたいね

「奥方もまたな」

「ええ、航海の無事を祈っています」

そしてガープさんは部下の方々の元に戻っていった。さて、2人にアカリのことを

説明しないといけないのだけど、その前にお昼ご飯を作らないとね



「ガープさん行っちゃったわね、お父さん」

「うむ、気持ちのいい気性をした御仁だったのだ」

わたしとお父さんはガープさんの船がワノ国から離れていくのを見送っている

ガープさんからは見送りはいいって伝言をもらったけど、どうしても見送りたかったからだ

「あと一年、シオリに本気で鍛えてもらうのだ。泣き言は聞かないと思うのだ」

「わかっているわよお父さん。でも、お母様が師範だからというのはわかるけど、

なんでお父さんじゃないの？」

「覇気の使い手はそれぞれ得意な色があるのだ。そして拙者の得意な色は見聞色なのだ。」

故に、武装色を教えるのならシオリが適任なのだ」

得意な色ね、わたしは見聞色の筈だけど…他の色も使えるようになるのかしら？

「本当に一年で武装色の覇気を使えるようになるの？」

「普通は無理なのだ。才能をもった者が数年かけて修行をしてやつとなのだ。」

でも、アカリは既に色は違えど覇気を使えるので可能性は高いのだ」

本来なら数年かかるのね…使えるようにしておいてよかったわ

「それに…」

「ん？どうしたのよお父さん？」

「シオリが一度口にした以上は無理にでも修得させる筈なのだ…」

「…あのお母様が？」

「シオリは剣に関しては一切妥協しないのだ…」

わたしとお父さんの間に沈黙が流れる

「大丈夫よねお父さん？」

「頑張って生き抜くのだからアカリ」

それからのわたしはお父さんの言葉通りにお母様の修行によって毎日地獄の筋肉痛に

悩まされる日々を送ることになる。でも、そのおかげでわたしはお母様の言葉通りに

1年で武装色の覇気を使えるようになった。

そして1年後、約束通りにガープさんがワノ国に訪れる。

いよいよ、わたしがワノ国の外に出る時がやってきた

第7話

「それじゃみんな、行ってきます」

家族のみんながわたしを見送るためにガーブさんの船が止まっている入江にやってきた

ユカリお姉ちゃんとヒカリはもう泣いてしまっている。可愛い顔が台無しよ2人も。

「アカリ、元気に頑張るのですわ！」

「アカリお姉ちゃん！何かされたらヒカリに言うのです！斬り落としてやるのです！」

「ヒカリ…どこでそんな言葉を覚えたのよ」

「お頭さん達が言っていたのです！」

なにやってるのよお頭さん！お母様がお話しにいったらどうするの！

「あらあら、山賊さん達と後でお話しをしないとイケないわね」

「シオリ…ほどほどに加減してあげるのだ」

お頭さん…御愁傷様

「そろそろ出航するぞアカリ」

「わかったわガープさん。お母様、お父さん、ユカリお姉ちゃん、ヒカリ、みんな元気でね！」

「いつてらっしやい、アカリ」

「いつでも帰ってくるのだアカリ」

ユカリお姉ちゃんとヒカリはお母様に抱きついて泣いているわね：

お父さんはそれを見て羨ましそうにしているわ

「出航じゃ——！」

ガープさんの号令で船が動き出す。わたしはみんなが見えなくなるまで手を振る。家族のみんなも同じく手を振ってくれた：いつてきます、みんな！



海軍本部に到着してからは座学を中心に海の事を勉強していった。

ガープさんにスカウトされたわたしだけど、海兵としては新米だから仕方ないことだと思う。

航海術や書類の書き方、算数や悪魔の実の知識なんかも教えてもらった

《六式》という超人的体術もあるみたいだけど、それは追々教えてもらえるみたいね

但し、できるかどうかは本人次第らしいわ

海兵になった以上、座学だけではやっていけない。後方支援専門だろうと海賊と戦うことになる事もあるから戦い方を学ばないといけない

そして、同期の人達と手合わせをしていったのだけど、わたしは連戦連勝をした。2種類の覇気を使って、悪魔の実の能力もあるから年齢の近い少年少女達では正直なところ相手にならないのよね。

そんなわたしに刈り上げた独特の髪型をした女の子が手合わせを挑んできた



「強いわねあなた、私と勝負しない?」

「あなたは?」

「私はベルメール!東の海のココヤシ村の出身よ!」

東の海は最弱の海と称されている場所だ。勇ましい女の子だけど、勝負になるかしら
?

「わたしはシラカワ・アカリ、ワノ国の出身よ」

「アカリね、よろしく!それじゃ、勝負しましょう!」

そう言って彼女は模擬銃の銃身部分を持って構えた。銃身の長い銃を棒代わりに使うのかしら？

わたしも模擬剣を構える、お母様に散々鍛えられた基本の構えだ

「それじゃ、行くわよー！」

ベルメールが模擬銃を振りかぶり叩きつけてくる。わたしは1歩横に動いて避ける

「よっとー！」

そう掛け声を出してベルメールは上段からの攻撃を横殴りに変えてくる。

今までの人達はまだ体が出来てないからか、一振りごとに体が流れていたのだけど、

彼女はそうならず、攻撃を繋げてくる……予想以上ね、でも

「甘いわー！」

横殴りにしてきた模擬銃をわたしは模擬剣で受け止める。このままこれを後ろに流して

お腹に寸止めしてこの勝負は終わりね

そう思った時、模擬銃の本来の持ち手部分を剣に引っかけて引つ張られてしまう。

前につんのめるようにして体勢を崩したわたしはベルメールに場所を入れかえるようにして

地面に転がされてしまう。

「ふふん、私の勝ちね」

仰向けになったわたしに馬乗りになったベルメールは模擬銃の銃口を

わたしの額に突きつけて勝ちを宣言する：海軍に来てから初めての完敗だった



ベルメールとの手合わせから2年程、わたしとベルメールは幾度も手合わせをして今では親友と言えるほど仲が良くなった。ちなみに手合わせはわたしが勝ち越している。

でも、覇気も能力もないベルメールに今も何度も負けている。

「はいベルメール、今日の戦利品」

「ご馳走様、アカリ」

「はあ…」

「どうしたのよアカリ？」

「…なんでベルメールは時折、見聞色の覇気でも読めない動きをしてくるのかなって」

「うーん、女のカン？」

「なによそれ」

「あつはつはつは！いい女の特権よ♪」

今日の手合わせの勝利報酬として、わたしのおごりでデザートを食べているベルメールが

そう言ってくる。この2年で散々思い知ったことだけど、わたしと違って

彼女は天然の天才なのよね

「明日はわたしがおごってもらうからね」

「やれるものならやってみなさい」

そう言ったベルメールと顔を見合わせて笑う。うん、こういうのっていいわよね

「そう言えばアカリ、今度の任務ではどこにいくのよ？」

「シャボンディ諸島ね」

「シャボンディ諸島かあ…マックスが言っていたけど、あまりいい所じゃないみたいよ」

マックスは先月、ベルメールが付き合い始めた先輩海兵でグループさんに直接鍛えてもらっているグループさんの直弟子でもある。所謂、若手のホープね

「そうなの？」

「昨日のデートの時に言ってたわ、できればもう行きたくないって」

デザート…

「幸せそうねえ」

「あいつが中尉に昇進したからお祝い代わりにデートしたんだけど、

思ってたよりもヘタレだったわ」

「ヘタレって…」

「デートの終わりに目をつぶってやったのに、狼狽えるばかりで何もしてこないのよ？

十分にヘタレじゃない」

確かマックスって今年15歳だったはずよね

「マックスは15歳で成人したけど、ベルメールはまだ12歳だから遠慮したんじゃない？」

「いいえ、あいつはただのヘタレよ。ムカついたから胸ぐら掴んで引き寄せてこっちから

キスしてやったら顔を真っ赤にして固まっていたもの」

「うわあ…」

「なんというかベルメールらしいのだけど…ヘタレ認定されちゃったマックスが憐れね

「マックスがロリコン呼ばわりされないといいんだけど…」

「その覚悟も無しに年下の私に告白してきたほうが悪いわね」

「まあそうなんだけど…」

ベルメールとマックスの馴れ初めは2カ月前の任務で一緒になったのが始まりだ。航路の巡回中に白ヒゲの傘下と交戦することになり、その戦いの最中にマックスが海に投げ出されてしまった。彼は悪魔の实の能力者だから泳げなかつたのだけど、その彼を助けたのがベルメールなのだ

そのお礼にマックスがベルメールを食事に誘つてからも幾度か会つたりしている内に

マックスがベルメールに本気で惚れてしまい、先月ついに告白をした。

ベルメールは『告白するのが遅いわよへタレ!』とか言つていたけど、

顔を真っ赤にしていたから照れ隠しで言つただけでしょうね…羨ましい

「まったく、私のファーストキスだつたっていうのに雰囲気もなになかつたわ」

「その割りには随分と顔がにやけているみたいだけど？」

「うくん、今日のデザートは甘いわね♪これが幸せの味つてやつかしら？」

わたしも素敵な恋人が欲しいなあ…妬ましい

「ぜつつしたいに明日はベルメールにおごらせてみせるからね！」

「あつはつはつは！やれるものならやつてみなさい！」

こうして親友とのいつもの日常が過ぎていく。そして後日、わたしは1ヶ月程

シャボンディ諸島に短期赴任することになったのだった

第8話

シャボンディ諸島に赴任してから1カ月が経ち、

わたしは海軍本部のあるマリソフォードに戻ってきた。

「…はあ」

「どうしたのよアカリ？溜息なんてついて」

行きつけの店で飲み物を頼み少し…いや、かなり悩んでいたところ

ベルメールがわたしを見つけて話しかけてきた

「シャボンディ諸島でちよつとね…」

「…私もマックスから聞いているけど、あまり気にしすぎたらダメよ」

シャボンディ諸島では天竜人が一般人や奴隸を虐げていても

わたし達海兵は見ていないふりをしなければならぬ…

「守るべき人達を守ることができないのに…海兵をやっている意味があるの？」

「アカリ…」

ワノ国の外が知りたかったからガープさんについてきたわたしだけど、

2年ほどここで暮らしてきて海軍にそれなりに愛着もわいてきていた。

でも、今は自分の在り方に疑問ができてしまっている

「マックスは組織として形を保つためには色々と必要だから、不満があっても飲み込まなければいけないこともあるって言っていたわ」

「さすがにマックスは大人ね…わたしはそうやって自分を納得させられないわ…」

あの場にいた海兵の中には悔しきで手を握り締め過ぎて、手から血を出している人もいた。

わたしは女の子だからとなるべく沿岸の警備に回してくれていたのだけど、

それでもあの光景が目には焼き付いて離れない

「アカリ、来月にはまた海に出るんでしよう？吹っ切れとはいわないけど、

それでも今みたいにぼやっとしていると命取りになるわよ」

「わかっているわよベルメール」

「よし！なら今日は私がおごるから気晴らしにパーっとやりましょう！」

本当にこの親友は優しいと思う。ここは甘えさせてもらおうかしら

「それに、そんな辛気臭い顔をしていたら恋人はできないわよ」

「よけいなお世話よ！ぜったいに素敵な恋人をつくってみせるんだから！」

悩みが無くなったわけではないけれど、それでもベルメールとのじゃれあい

心が晴れた気がする。そして一カ月後、ガーブさん率いる船に乗り巡回していたわた

しは

初めて大物の海賊一味《ロジャー海賊団》と遭遇したのだった



わたしの目に写る光景は本当に同じ人間がやっていることなのかしら？

ガープさんと海賊のゴール・D・ロジャーが戦っているのだけど、

お互いの拳が合わさる度に衝撃で双方の船が大きく揺れている…

「ぶわっはっはっは！今日こそ年貢の納め時じゃロジャーー！」

「いい加減に引退したらどうだガープ！後は若いのに任せてな！」

「お前だけは儂が捕まえてやるわい！」

ロジャー海賊団の一味は2人の戦いを見て笑っている、所謂略奪主義であるモーガニアは

なんとというか厭らしい笑いかたをするように思うのだけど彼らは楽しそうに笑っている。

大悪人と言われているロジャーの元でなんでそんな風に笑うことができるの？

あれ？確かロジャーの罪状には天竜人を殴ったとかも…

あの天竜人を殴った？海兵のみんなが齒噛みをしていたあの天竜人を……それで大悪人なの？なんで？虐げられた人達を助けただけじゃないの？そう思ってしまったわたしはロジャー海賊団の人達の笑顔が眩しく見えた。そして、その笑顔に誘われるようにフラフラと船の端に歩いていったその時、波のうねりとガープさん達の戦いの衝撃が合わさり一際大きく船が揺れた。気づけばわたしは海に投げ出されていた



「おおくやつばロジャー船長はすげえな」

海に憧れた俺は見習いとしてロジャー海賊団に入れてもらった。

そして、海で生きる術を副船長であるレイリーさんに教えてもらっている

「てめえシャンクス！なにをのんきに顔を出してやがる！俺達見習いは

まだ戦闘を許可されてねえんだぞ！俺まで巻き込まれて副船長に怒られたら

どうしやがるんだ！派手に死ねえ！」

大きな赤鼻が特徴のこいつは俺と同じ見習いで、名前はバギーという。

口が悪い奴だがなんだかんだ同じ見習いの俺を心配してくれるいい奴だ。

「ゲンコツのガープとロジャー船長の勝負を見ないなんてもったいないだろ？」

「ガープと船長の戦いは派手になるから船内に引っ込んでろって副船長に言われただろ
うが！」

「はっはっは！ばれなきや大丈夫さ」

ふと気になり目を海軍の船にやると、紫の髪の女の子がフラフラと船の端に向かって
いた

「おいおい、危ねえぞ」

「てめえも危ねえんだよ！派手に引っ込めえ！」

ロジャー船長とガープの一撃で船が一際大きく揺れた時、あの女の子が海に投げ出さ
れた

そして、その事に気づいたのかゲンコツのガープの声が大きく響いた

「む？いかん！ロジャー！一時休戦じゃ！」

「どうしたガープ！バテたのか！」

「僕の部下が海に落ちた！そいつは能力者で泳げんだ！」

その声が聞こえた俺は考える前に走り出していた

「なにやっつてんだシャンクス！派手に戻れえ！」

バギーの制止も聞かずに、俺は彼女を助けるために海に飛び込んでいた

◆

体に力が入らない：知っていたことなのだけど、わたしはどんどん海に沈んでいく
本来なら肺の中の空気と身体の脂肪である程度の浮力を得られるはずなのだけど：
これが能力者が海に嫌われるってことなのね：

ベルメールに散々注意されていたのになと思いつつもどうにもならない：
わたし、このまま溺れちゃうのかな？

そんな事を思っていたら何かに手を掴まれる感覚がして体が浮かび始める。

水面まで出たわたしは咳き込みながらも思い切り息を吸い込むと、
わたしを引き上げてくれた人を見る。

そこには綺麗な赤毛をした、まだ小さな海賊の少年がいた

◆

「大丈夫か!？」

「ケホツケホツ！…う、うん、大丈夫よ」

「そうか、おおい！バギー！ロープを投げてくれ——！」

俺の声が聞こえたのだろう、バギーがバタバタと動き始める

「ためえ！ゲンコツのガープがこっちに來たらどうしやがる！派手に死ねえ！」

そう言いながらもあいつはしっかりと引き上げる準備をしてくれる。

やっぱりバギーはいい奴だ

「海軍のあんたには悪いと思うが、うちの船に引き上げさせてもらおうぞ。

それと、今は力が入らないんだろ？引き上げてもらうのにちよつと強く抱えて

痛いかもしれないけど、我慢してくれよな」

「警沢は言えないわね、よろしく頼むわ。それと、助けてくれてありがとう」

そうお礼を言つて微笑んだ彼女に俺は見惚れてしまう

「おらあロープいくぞシャンクス！派手に掴めえ！」

バギーの言葉で気を取り戻した俺はロープを掴み、彼女を抱き抱える。

女の子特有の柔らかさが身体に伝わってくる……こんな時に何を考えているんだ俺は

！

顔が熱くなつてしまい思わず彼女から顔を背ける。そんな俺を見て彼女はクスクス

と

笑っている。おいバギー！早く引き上げてくれ！



わたしを抱えてくれている赤毛の少年が真っ赤になった顔を背けている。
なんかその様子が可愛くて思わず笑ってしまう。

よく見ると非常に整った顔立ちをしている。将来は立派なイケメンに成長しそうね。
先程まで落ち込み、溺れて死にかけてのに我ながら現金だなど思うけど、

乙女としてはこういうシチュエーションは有りだと思おうわけで…

こんなに楽しい気持ちになったのは久し振りだなあ…ベルメールに自慢しないとね

♪

と
そして引き上げられたわたしと赤毛の少年を待っていたのは、大きな赤鼻をした少年

眼鏡の奥に理知的な光を灯した瞳をしている壮年の男性だった

第9話

「どうやら無事みたいだねお嬢さん。シャンクス、バギー、お前たち2人が言い付けを破ったことは彼女を助けたことで今回は免除としよう」

眼鏡を掛けた壮年の男性がそう言うものの、シャンクスとバギーと呼ばれた少年2人は

頭に見事なタンコブができており、しかも正座をさせられている。

こういつた事は海軍とあまり変わらないみたいね

「はい、助けていただきありがとうございます」

「うん、礼儀もすっかりとしているようだね。こいつらにも見習わせたいところだ」
少年2人は素知らぬ振りをしている。まあこのぐらゐの年齢なら仕方ないわよね

「自己紹介がまだだったね、私はシルバース・レイリーという。そちらの赤髪が

シャンクスで、もう1人がバギーだ」

「ご丁寧にありがとうございます、わたしはシラカワ・アカリです」

わたしが名前を言うとレイリーさんは顎に手を持っていき、少し考えるようにして話してきた

「その腰の物とシラカワの姓から察するに、ワノ国にあるシラカワ流の関係者かな？」
「はい、よくご存知ですね。ワノ国は鎖国していてあまり外には知られてないのに……」
「私も剣士の端くれだからね、それにワノ国の事で少々調べたことがあるんだよ」
調べたこと？鎖国をしているから入港出来る場所でも調べたのかしら？

「さて、アカリお嬢さんをすぐにガープの元に帰してあげたいところなのだが……」

我々海賊と海軍は敵対している間柄なのでね、互いの安全のために少々面倒な手順を踏んで取り引きをしなければならぬ。もちろん、その間の君の身の安全は

私が責任を持つて保証しよう」

「面倒な手順ですか？」

「一言で言うならば、政治的な証明のために必要な形式的取り引きだね。我々海賊との取り引きで非合法な事をしていないと証明するために必要な行動なのだよ」

なんと……

「部下を……仲間を引き取るのにそんなことをしないとイケないんですか？」

「ふふふ、馬鹿馬鹿しく感じるかもしれないが、正義を自称する組織故に相応に世間に配慮しなければならぬのだよ」

この2年程で海軍のことをそれなりに理解できたと思ってきたのだけど……
シャボンディ諸島の事も含めて、合わないと感じてきているわたしがいる

「まあ、しばらくゆつくりとしていてくれれば、それでいい」

「はい、それではしばらくお世話になりますね」

「では、シャンクス、バギー、2人に彼女の世話を命じる。私は海軍とのやり取りをしなければならぬからね。ロジャーに任せては日が暮れてしまう」

そう言うときレイリーさんは歩いて行ってしまった。それを見送った後に

シャンクスとバギーの2人が話し出した

「おいシャンクス、その女はてめえが拾ったんだからてめえが世話をしろよ」

「それはわかっている。でも、手伝ってくれよバギー」

「やなことだ、まだ甲板の掃除が残ってるんだよ」

そう言うときバギーという少年は手をヒラヒラと振りながら行ってしまった……

レイリーさんに命じられていたはずなのだけど、いいのかしら？

「あー……なんだ、その、水でも飲むか？」

頭を掻きながら困ったように言う彼の仕草が面白くて思わず笑ってしまう。彼に水をお願いして、わたしはゆつくりとすることにした



「ふうん、それでシャンクスはロジャー海賊団に入ったのね」

彼女に飲み物を持ってきてから俺達は世間話をしている。

歳が近いということと今ではお互い名前呼びになっている…海軍だから堅苦しい奴かもと

思っていたけど俺の思い込みだったようだ。

「今は見習いとして副船長のレイリーさんに剣とかを教えてもらっている」

「サーベルでの剣技かあ、わたしは直剣だから一度見てみたいわね」

「なら、見てみるか？」

「流石に海軍との話し合い中に剣を振り回すのはダメなんじゃない？」

レイリーさんに怒られるわよ？」

確かに怒られるかもしれないな…しかし、海賊の船にいるっていうに物怖じしないなアカリは

「俺の事を話したんだ。今度はアカリの事を教えてくれよ」

「あら、お姉さんのことが知りたいの？まだ子供なのにませてるわね」

「まだ子供って3つしか違わないだろ」

「ふふふ、まあいいわ。それじゃ教えてあげるわね♪」

アカリは俺の事を子供扱いしてからかかってくるから少し苦手だ…

でも、彼女の笑顔は悪くないと思ってる俺がいる……なんだろうなこの感じは
そして、アカリが過去の事を話し出した

4つのころから見聞色の覇気を使い、家で剣を教えてもらっていたようだ。

7つのころには近海の海賊と戦い二つ名をもらっている……とんでもない女の子だ

8つのころには見合い話しがきていたらしい……これはなんか面白くないな……

そして、見合いを断って家を追い出されてからは医者 of 真似事をして暮らしていたら
しい

そして9つの時にアカリの診療所にガープがきて海軍に誘われたのが

海兵になった切っ掛けだと話した

それからは親友だというベルメールという人の話しが中心になってきた

曰く、初めての手合わせでは完敗した

曰く、見聞色の覇気でも読めない動きをしてくる

曰く、恋人とのイチャイチャを見せつけられて妬ましい

そんな事を表情豊かに話していたアカリが不意に顔を曇らせた。

そんな彼女が話し出したのはシャボンディ諸島の事だ

副船長から聞いていたことだがあの島では色々と気にくわないことがあるようだ

その事を見逃がさないといけない今の自分の在り方に悩みがあると言っている

こんな時、副船長ならスパツと悩みに答えてくれるんだろうけど、俺はそこまで頭がよくないから答えられない…

それでも、あんなに綺麗な笑顔ができるアカリがこんな顔をするのは間違っていると思う。

そう思ったら、俺は自然とアカリに向けて話していた

「アカリ、お前も海賊にならないか？」



あれから7日、わたしは海軍本部のマリンフォードに戻ってきたのだけど、シヤンクスに言われた一言がずっと頭に残っている…

『アカリ、お前も海賊にならないか？』

ガープさんに誘われ、家族に送り出されて海軍に入って2年…

仕事そのものは危険なものだけど収入は安定しているし、世間体がいい職業だでも、やる気はどうかというと正直なところ無くなっている…

親友のベルメールもいるしこのまま惰性で続けるのもいいかと思うけど…

気持ちは揺れている。違う。気持ちはもう海賊に向いてしまっている

「また随分と暗い顔をしているわねアカリ」

「ベルメール…」

「そうだ…海賊になったらベルメールとも戦うことに…」

「で、今度は何を悩んでいたのかしら？」



「なるほどね、海賊になりたい、でも故郷の家族やお世話になったガープ中将、

ついでに私の事も気になって決心できないということね」

アカリがロジャー海賊団に助けられ、その時に勧誘されたことでアカリの心は

海軍から離れちゃったみたいね…まったく、世話が焼けるんだから

「海賊になればいいじゃない」

「でも…」

「でも、じゃないわよ。やらずに後悔するのなら、やってから後悔しなさい」

ずっと俯いていたアカリが顔をあげた…あと一息つてとこかしら

「それに、シャンクスっていう子に口説かれたんでしょ？」

「口説かれたんじゃないわなくて海賊に誘われたのよ」

「似たようなものじゃない」

そうして顔を見合わせた私達はどちらともなく笑いだした。

うん、調子が出てきたみたいね

「はあ…なんか悩んでるのが馬鹿馬鹿しくなってきたわ」

「それでいいのよ。それにそんなに悩んでいると、また海に落ちるわよ?」

「うん、それはもうイヤね」

「今度は愛しの王子様が助けてくれないかもしれないものね」

「シャンクスとはまだそういうのじゃないわよ!」

「まだ?」

「もう! そんなにからかわないでよベルメール!」

最近のアカリはあまり笑わなくなってしまうていたけど、やっぱりこうでなくっちゃね

「さてと、そうと決まったらアカリは辞表を書いてガープ中将に提出してきなさい。

私はアカリの荷物をまとめておいてあげるわ」

「ありがとうベルメール」

「いいのよこれぐらい」

さてと、親友の船出を祝うのにマックスを巻き込まないとね。先日、大尉に昇進して

自分の船を貰えたとか言っていたからちようどいいわ

「ベルメール、わたし海賊になってもあなたと戦いたくないわ」

「私も戦いたくないわね、落ち込んでいた時なら勝てたんですけど、

今のアカリには負けそうだわ」

「それと…」

「なによアカリ？」

「ガープさんと敵として会ったら、すっ飛んで逃げるわ」

「あっはっはっはー！」

こうして私達はようやくいつも通りに笑いあうことができるようになった。

本当に世話が焼けるんだから…いつてらっしやい、アカリ



「やあ、14日ぶりだねアカリ。それで、こんなところに何をしにきたのかな？」

わたしはベルメールとマックスに、ロジャー海賊団がいるという島に送ってもらった

2人はそのまま有給休暇でデートするらしい。付き合わされる船員が哀れね…妬ま

しい

「お久しぶりです、レイリーさん」

心が昂るままに、わたしは声をあげる

「わたしを、ロジャー海賊団に入れてください！」

こうしてわたしは悪名高いロジャー海賊団の一員になった。

でも、わたしの心は前世も合わせて一番、高鳴っていた

第10話

「おう、お前がアカリかよろしくな！」

ロジャー船長が満面の笑顔でわたしを歓迎してくれる…でも、いいのかしら？

「レイリーが認めたのなら俺は文句ねえさ。歓迎するぜアカリ！」

どうもそういうことらしい。レイリーさんへの信頼が凄いわね

「いいときに来たなアカリ！これから数年、退屈させねえぜ！」

「なにをするんですか？」

「俺の夢！世界一周！グランドラインの制覇だ！」

世界一周…まだ誰も成し遂げたことのない偉業…

「その前に仲間を勧誘しなければならぬけどね」

「レイリーさん」

「おう、レイリー！情報はどうだった！」

「医者の方は問題ないだろう。だが《読める者》は現在、白ヒゲの所に

身を寄せているらしく少々厄介だな」

「そうか、まあなんとかなるさ！」

ロジャー船長は笑ってるけど、それって白ヒゲ一味から引き抜くつてことよね？

「ふふふ、こんなことで顔を青くしていたら身が持たないぞアカリ。」

ロジャーの無理はいつものことだからね」

「文句一つ言わねえで付き合うお前はどうかなんだレイリー？」

「何年の付き合いだと思ってる、とうの昔に慣れてしまったさ」

そう言つて笑いあう2人の姿はすごく自然で格好良かった。これが海賊なんだ

「おめえら！出航準備だ！酒はたんまり積んでおけよ！」

「「「おお——！！！！」」」

ロジャー船長の号令で一斉に動き出す船員達、その動きは訓練された海兵と遜色ない

：

いえ、もしかしたら海兵よりも凄いかもしれない。これがロジャー海賊団の船員達なのね

「さて、アカリがどこまで出来るかわからねえからな。とりあえず見習いつてことで、

レイリーに預けるぜ！シャンクス、バギー共々面倒をみてやってくれ！」

「ああ、私が迎え入れたのだから責任は持つさ」

「ししし、それじゃアカリの歓迎つてことで宴だ！おめえら！出航準備が終わつたら飲

むぞー！」

「「宴だ——!!!」」

こうしてわたしの海賊としての日々が始まる。自由で楽しくて、ワクワクする冒険の日々が！

ロジャー船長！レイリーさん！シャンクス！一味のみんな！これからよろしくね！



麻酔の名医であるクロツカスさんと、ワノ国九里大名である光月おでん様を仲間に加えた

ロジャー海賊団はいよいよ、《この世界》の人類で初めての世界一周を目指して旅立った

道中ではシャンクス、バギーの2人とわたしはレイリーさんに指導を受けて

日々、成長をしていく。シャンクスはベルメールと同じく天才みたいね

右利きと左利きの差はあるけれど、年下の彼との手合わせで何度も負けそうになっただわ。

まだ、覇気を使えないのにとんでもない才能ね

バギーもとい、赤鼻くんはなんというか：あまり戦いは得意じゃないのかしら？

少なくとも剣士としては凡庸というのがレイリーさんの彼への評価ね

それよりも赤鼻くんの鼻が自前だというほうがわたしは吃驚したわ

思わず、赤鼻くんって呼んじやったのだけど、彼は怒りながらもわたしが

そう呼ぶのを認めてくれたのよね：所謂ツンデレなのかしら？

もちろんわたしもレイリーさんに剣の指導を受けている。

覇気も使って挑んでいるのだけど、正直なところ簡単にあしらわれているわね

お母様以上の力の差を感じるわ：海って本当に広いのね

旅の途中で赤鼻くんが能力者になったり、シャンクスとの手合わせで負けて凹んだり
と

退屈しない、楽しい毎日を過ごしていった

そして2年が経ち、ロジャー海賊団の旅路も半ばを越えて少しした頃、

わたしは15歳になり大人の仲間入りとなった

そんなわたしを祝うために、ロジャー海賊団のみんなが宴を開いてくれた



「改めて、成人おめでどうアカリ。これで君もロジャー海賊団の正規乗組員だ」

「ありがとうレイリーさん」

「しかし、今更だが男所帯のロジャー海賊団でなにか不便なことはないかな？」

「大丈夫よレイリーさん、楽しく過ごせているわ。まあたまにシャンクスや赤鼻くんが着替えを覗いてこようとしてくるけどね」

2人も年頃の男の子だからねえ……仕方ないわよね

「そうか、後で2人と話し合いをしなければいけないね……たつぷりと」

レイリーさんが眼鏡を光らせながら笑顔で言う……愁傷様、2人とも

「他にも何かあれば遠慮なく言ってくれ、師として責任があるからね」

なにかと世話を焼いてくれるレイリーさんが故郷のお父さんの姿と被る……

今生で初めてのエールを飲んで少し酔いが回っていたわたしは、意識せずに

言葉を漏らしてしまっていた

「ありがとう、レイ養父さん」

わたしの言葉に宴で騒がしかったみんなが静まる……え？わたし、なにかやつちやつた？

「ししし、レイリーが親父か！これはいいな！」

「ロジャー飲み過ぎなんじゃないか？」

「ししし、照れるな照れるな！」

大声でロジャー船長が笑うのだけど、レイリーさんのこめかみに青筋が…

「酔っ払った船長を諫めるのも副船長の役目か」

「お？やるかレイリー！」

そして唐突にロジャー船長とレイリーさんのケンカが始まった

病魔に侵されているのに衰えを見せないロジャー船長と3種の覇気を自在に扱う

レイリーさんのケンカは凄まじいの言葉しか出てこない

既に50歳を超えた2人だけど、この2年の冒険でさらに成長をしている。

まあ…ロジャー船長を追っているグループさんもなぜか強くなっているんだけどね…

さてと、とにかく2人の喧嘩を止めないとね。

わたしはレイリーさんに教わり、この2年で成長した霸王色の覇気を使って

ロジャー船長とレイリーさんの喧嘩を止めた

「いい加減にしなさい！」



「ししし、アカリも成長したもんだな！俺とレイリーの喧嘩を止めるんだからよ！」

「間違っても実行使で止めることはできませんけどね」

「なに、ああいった覇気の使い方をできるのもアカリの実力のうちだよ」

先ほどまで喧嘩をしていたとは思えない様子でエールを酌み交わす2人に

褒められて照れてしまう…本当に実力行使とか無理なただけだね

「さて、アカリに頼みがある」

そう言ったロジャー船長がわたしに頭を下げる…ちよつ、いきなりどうしたの!?

「レイリーを親父と呼んでやってくれねえか」

「え?」

「おいロジャー!」

宴を楽しんでいた時と違って至極真面目な顔つきになったロジャー船長がわたしに

話す

「俺がレイリーを誘った時からこいつは俺を船長として支えてくれている。

俺が何度無理をしようともそれをフォローしてくれてきたからこそ今があるんだ」

「俺には惚れた女がいるが、レイリーはそういう奴を作らずに、

ずっと一人だ…俺の冒険に、夢にずっと付き合ってきてな」

ロジャー船長の言葉が響く、仲間への、友達への思いに溢れた暖かい言葉だ

「だからレイリーのことを…親父と呼んでやってくれねえか?」

「ロジャーよせ、私はお前の夢に自分の夢を重ねて生きてきたことを後悔していない」

故郷のお父さんが泣いて悔しがる光景が目には浮かぶけど…

「いいですよ」

「なっ!？」

「ししし、それじゃ後は頼んだぜアカリ。俺は先に寝る」

手をヒラヒラと振り離れていくロジャー船長が不意に口を手で押さえて咳き込む。

押さえた手には赤が滲んで見えるが、それに気づいたクロツカスさんが付き添ってく
れた

「船長…大丈夫かしら？」

「クロツカスは名医だからね。それに、ロジャーなら意地でも夢を遂げるさ」

「そうですね…それじゃ、改めてよろしくねレイ養父さん♪」

「やれやれ…本当にそう呼ぶのか？」

困ったように頭を掻き出すレイ養父さんの様子がおかしくて笑ってしまう
バツが悪そうにジョッキを煽るも、それはカラで手酌でエールを注ぎだす

わたしも做つてエールを注ぎ、2人で改めて乾杯をする

夜空に浮かぶ三日月がとても綺麗な夜だった



あれから1年、ロジャー海賊団が世界一周の旅に出て3年、

遂にロジャー海賊団は偉業を成し遂げた

その後、ロジャー船長の一味解散の号令により、ロジャー海賊団が解散した後、わたしは故郷のワノ国に帰ってきて1年が経った

「それでそれで、その後どうなったですかアカリお姉ちゃん！」

しばらく見えない間に大きくなっていた妹のヒカリだけど…まだまだ子供ね

「ロジャー船長が歴史の本文（ポーネグリフ）に自分の名前を刻んじやったのよ…
歴史的な…考古学上重要な物だったのに当たり前のようにね」

この1年、わたしは毎日のようにヒカリに世界一周の話をしている。

語っても語っても尽きない、本当に夢のような楽しい日々だったわ

そんなわたしのところにシャボンディ諸島でコーティング屋を始めた

レイ養父さんが訪ねてきた

「久しぶりだね、アカリ」

「うん、久しぶりレイ養父さん」

お互いに笑顔で握手をするわたし達、そう言えばシャンクスは元気にやっているかしら？

「出かける準備をしてくれないかアカリ」

「どうしたのよレイ養父さん？」

レイ養父さんが神妙な顔をする……え？本当に何かあったの？

「1カ月後、ロジャーが処刑される」

その言葉にわたしは固まってしまう……今、なんて言ったの？

人類史上初の世界一周を成し遂げた《海賊王》ゴール・D・ロジャー

彼の処刑の報が世界に駆け巡る……世界は時代の変革を迎えようとしていた

第11話

『財宝？欲しければくれてやる！探せ！この世の全てを置いてきた！』

ロジャー―船長の最後を見ようとローグタウンに集まった人々が熱狂している

金獅子のシキが船長の処刑を止めようと襲撃してきているのに誰も逃げないほどに

…

「ロジャー…まったく、お前って奴は…」

「レイ養父さん…」

レイ養父さんが泣いている

「これで、世界は変わる…多くの者が海に夢を見るように、なるだろう…」

「海賊は絶対悪だという、政府、海軍の広めた認識が…夢に、自由に生きる

代償なのだ」と気づく者達が出てくる…時代が変わる…」

目を押さえていたレイ養父さんが涙を流しながら顔をあげる

「ロジャー…本当に…最後まで、退屈させない奴だ…」

レイ養父さんだけじゃない、ローグタウンに集まった元ロジャー海賊団の

みんなも泣いている…もちろん、わたしもだ

たった3年しか一緒にいなかったけど、それでも仲間だから凄く悲しい
覚めない熱狂の中、わたし達は涙を流し続けた



「マックス!？」

俺の恋人、ベルメールが走ってくる：格好悪いところ見られちまったな…

「誰か、軍医を、医者を呼んで！」

海賊王ゴール・D・ロジャーの最後に魅せられていた坊主が、金獅子のシキが

能力を使って投げた岩に潰されそうになったのを庇い、俺が潰された

潰された下半身はもう感覚が無い…さすがに今回はダメそうだ

「ベルメール…煙草を、とって、くれ…」

「こんな時に何を！」

「頼む…」

ベルメールが胸ポケットから煙草を取りだし、俺に銜えさせてくれる。

俺はまだ少しだけ動かせる特殊な手袋をはめた右手の指を擦り合わせ火花を出す

その火花を能力を使い操作して煙草に火をつける、慣れしたしんだいつもの動作だ

「…ふ〜」

元々はガープ中将…いや、ガープのおっさんにガキ扱いされるのがイヤで始めた煙草だけど、今じゃ俺のトレードマークの1つになった

「一仕事した、後の一服は、格別…だな」

こんな時だけど、ベルメールが膝枕をしてきている…ああ、悪くない

憧れた《ONE PIECE》の世界に転生が決まった時は、無双だ！ハーレムだ！
なんて、

思っていたのに、今では本気で惚れたベルメール一筋だ

「あり、がとう、ベルメール」

「何いってんのよマックス…」

水が顔に掛かる…ベルメールが泣いてくれている…ああ、悪くない

煙を吸い込み、吐き出す…意識が遠退いてきた…なんて言えればいい？

特典で前世の知識はそのまま残っているけど、浮かび上がってくる言葉は、どれも陳腐に感じてしまう…あんなに格好良いと思っていたのにな…

俺らしく言おう、誰の真似でもない俺の言葉で…

「ああ…悪くない」

身体から力が…熱が抜けていく感覚に死を感じるが、まったく怖くない

ベルメールが俺の顔に添えてくれている手の暖かさのおかげだ
ああ、悪くない…

ベルメール…ありがとう



マックスが落とした煙草を手に取り、一口吸う、煙が肺を刺激してむせてしまう
「…なんでこんなのを、美味しそうに、吸っていたのよ…」

彼が最後に残した言葉が頭に残っている

「悪くないって…当たり前でしょ、私が、恋人になったんだから…」

私の恋人、初めての恋人、愛しい人

「マックス！」

海兵という仕事柄、仲間が死ぬのは初めての事じゃない…

それでも私は、恋人がいなくなってしまう事が悲しくて人目を憚らずに泣いた



ロジャー船長の処刑が終わり落ち着いた頃、元ロジャー海賊団のみんなはそれぞれ道へと歩きだす

レイ養父さんを始めとした古参の人達は、ロジャー船長以外の人の下には着かないと海賊を引退することを決めている…わたしはどうしようかな…

思い悩んでいるわたしに、この1年で少し背が伸びたシャンクスが話し掛けてきた
「久しぶりだなアカリ」

「うん、久しぶりねシャンクス」

目を腫らしたシャンクスを見て、彼も泣いていたんだと安堵する

「アカリはこれからどうするんだ？」

「…どうしようかしらね？」

世界一周を成し遂げて、わたしのこの世界を見たい、楽しみたいという思いはほとんど満たされてしまっている…本当にどうしようかしら？

「…正直、何も考えてなかったわ」

「そうか…」

そう言うときシャンクスは少し俯いてから、意を決したようにわたしを見てくる

「なら、俺と一緒にこないか？」

「え？」

「俺は、自分の一味をつくる！そして、ロジャー船長みたいな大海賊になる！」

そうやって笑うシャンクスの顔は、ロジャー船長と同じく無邪気に輝いて見えた。「アカリ！もう一度、海賊にならないか？」

3年前にシャンクスに誘われた時を思い出す、

落ち込んでいたわたしを導いてくれたあの言葉だ

「うん、いいわよ」

「そうか！ありがとう！」

自然に誘いに応えていたわたしだけど驚きはない、それよりも嬉しそうに笑うシャンクスの笑顔が素敵だと思う。うん、格好良くなってきたわね

「それにしても、『俺と一緒にこないか』って、もしかして告白かしら？」

「え？あ、いや……」

「あはは、真っ赤になっちゃって、相変わらず子供よね」

こうしてからかうのも1年振りね、うん、やっぱりわたし達はこうじゃないと「からかうなよ！俺も来年には15で大人だ！」

「来年ってことはまだ子供じゃない」

そうやってからかっているとシャンクスは赤髪をガシガシと搔いて悔しがる。

1つ深く息をしたシャンクスは真面目な顔になりわたしを見る……何よ？

「アカリ、好きだ。俺の恋人になってくれ」

「…え？」

その一言にわたしは固まってしまふ、そして意味を理解して顔が熱くなる

「え、あ、その…」

応えようとするものの言葉にならない…落ち着きなさいよ、わたし！

「たぶん、一目惚れだったと思う。アカリを助けて、お礼を言われた時の笑顔を

俺はずっと覚えていて…あの時から俺は、アカリに惚れていたんだ」

わたしが返事をできない間もシャンクスの告白は続く

「でも俺は、その事にずっと気づかなかった…子供だったんだ、でも、

この1年の間もアカリを忘れたことはない…俺は、アカリが好きだ！」

胸の鼓動が速くなる、恥ずかしくて、でも嬉しくて速くなる。

わたしはシャンクスをどう思っているの？…うん、そんなの、わかっていたことよね

シャンクスがまだ子供だからってずっと誤魔化してきたけど…

もう、自分に正直なろう…わたしは…

「うん、わたしもシャンクスが好きよ」

「そ、そうか！」

「まったく、あのタイミングで告白して断られたらどうするつもりだったのよ」

「…考えてなかった」

「そういうところが抜けているわよね、シャンクスって」

「ははは、すまん」

照れているのを隠すように続けられるわたし達の会話…

まあ、これもわたし達らしいわよね

「それで、この後はどうするのかしら船長？」

「ああ、まずは仲間集めだ！行こう、アカリ！」

「あ、ちよつと、待ちなさいよ！」

もう！せつかく恋人になつたのなら手ぐらい繋いでいきなさいよ！

「仲間集めって、目星はついてるの？」

「ああ、見習い時代に目をつけていた奴がいる！」

自分の目で世界を見てみたいって言っていたものね、

その頃から考えていたのかしら？

「ほら、アカリ」

そう言つてシャンクスが手を差し出してくる…もう、シャンクスのくせに生意気よ！

わたし達は走り出す、新しい時代を…ロジャー船長が作った時代を

第12話

あの後、わたしとシャンクスは赤鼻くんを仲間に見つけたのだけど、手を繋いでいるわたし達を見て『派手に爆発しろ！』とか言つて、泣きながら走つて行つてしまつたわ…どうしたのかしらね？

それからは、副船長としてベックマン、狙撃手としてヤソップ等を仲間にしたわたし達は順調に赤髪海賊団として進んでいった

シャンクスが15歳になる頃には、『赤髪のシャンクス』なんて

二つ名で呼ばれて、一味の名が広まり始めてみんな嬉んだ

そして、シャンクスが15歳になって大人になつたから…その…

こ、恋人として、そういう行為も、その…するようになったわね…うん
初めての後、目が合うたびに顔を赤くしていたわたし達を、

故郷のシロップ村に恋人がいるヤソップと年長者のベックマンに

思いつきからかわれたわ…

まあ、その後はお祝いとして宴になつただけだね

そして、この頃にわたしの身体に異変が起きた…

違うわね、元々あった異変が悪化したのが正解かしら

ロジャー海賊団が解散してワノ国に戻った頃からわたしは咳をするようになった：

最近はその咳に血が混じるようになった

わたしは急いで自分の病気を調べた結果、

ロジャー船長と同じウイルスによる心臓病だとわかった

病気が死病だと知り落ち込んだけど、安堵もした

この病気はウイルスが原因だけど人から人への感染性がないからだ

まだ、しばらくはシャンクスと恋人として一緒にいられることに

わたしは涙を流して喜んだ

でも、この病気のことには副船長のベックマンにしか伝えていない：

わたしの我儘だ

それから1年、シャンクスとの冒険を始めてから2年ほどたった頃、

病気がさらに悪化してきたことで、わたしは1つの決断をする

わたしは船を降りることを決めた



「はい、シャンクス。これ飲んでね」

わたしとシャンクスは今、お互いに糸纏わぬ状態にいる

…まあ、恋人だからそういうことをしていたわけで…

「ん？アカリ、なんだそれ」

「まあ、薬つてどこかしらね」

「薬？そんなもの無くてもしたいなら…」

「そっちの薬じゃないわよ！エッチ！」

これが最後だからと、その、かなり求めたけど…そうじゃないのよ！

「いいから、飲みなさい！」

「アカリが言うなら飲むが…マズッ!!」

「良薬口に苦しつてところかしら」

舌を出して肩を竦めているシャンクスだけ…

これで憂いはなくなったわ

「なんだ、その言葉は？」

「さあ？なんとなく出てきたのよね」

「そうか、やっぱりアカリは頭良いな」

「ベックマンほどじゃないけどね」

そう言つて、わたしは苦笑いをする

ベックマンはレイ養父さんぐらい頭が良いんじゃないかしら？

「で、結局飲んだ薬つて何の薬なんだ？」

「うーん、予防薬つてところかしらね」

「予防薬？」

「そう、転ばぬ先のなんとやらつてね」

わたしがシャンクスに残せる数少ないモノがこれだったのよね

「念の為だから気にしないでいいわよ」

「そうか、じゃあ寝るか」

「うん、おやすみシャンクス」

おやすみシャンクス、わたしの愛しい人…



夜が明けて辺りが白み始めた頃、わたしは最低限の荷物を持ち船を降りようとした

その時、メインマストに寄りかかり煙草を吸うベックマンを見つけた
「行くのか？」

「うん」

本当にベックマンは察しが良いわね、降りることは誰にも言っていないのに

「シヤンクスのことお願いね、ベックマン」

「ああ…だが、いいのか？その病は移らないのだろうか？」

「あいつの夢の邪魔になりたくないからね」

「そうか…」

ベックマンは俯くようにして煙草を吸い込む…

強面だけど情に厚いのよね

「帰る宛はあるのか？」

「情報では明日、近くの島に海軍がくるんでしょ？」

「ああ」

「その船は親友の船みたいだから頼ってみるわ」

「おいおい、海軍の船に乗るのか？とんでもない度胸だな」

頭を掻きながら苦笑いしてベックマンが言う

「赤髪海賊団らしいでしょ？」

「俺はそこまで無理はしない」

「確かにね」

別れを惜しむように会話が続く…さて、行かなくちや

「それじゃ、元気でねベックマン」

「ああ…なにかシャンクスに言っておくことはあるか？」

「うん…愛してるとかは昨日、散々言ったからなあ…」

「おいおい、惚気は勘弁してくれ」

そしてお互いに笑い合う、海に生きる者は笑顔で別れるのが礼儀だから

「じゃあね、ベックマン」

「ああ、またなアカリ」

そして、わたしは船を降りた…頑張つてね、シャンクス



赤髪海賊団の船長であるシャンクスの恋人、アカリが船を去った

夢を邪魔したくないか…いい女だ

甲板で煙草を吸っていると、まだ寝惚けた様子の子のシャンクスが出てきた。

アカリが去ったことの説明をしなければならぬだろうな……世話が焼ける
「あく……ベックマン、アカリを見なかったか？」

「……アカリなら船を降りた」

「なっ!?!」

目を見開きシャンクスは俺を見てくる……ようやく目が覚めたようだ

「なぜ止めなかった!」

「アカリが望んだからだ」

「まだ近くにいるんだろ? ならー!」

俺はシャンクスの肩を掴み止める

「行くな」

「なぜだベックマン!」

「アカリは病を患っている」

シャンクスはこちらに向き直り掴みかかってくる

「病!?! なんの病だ!」

「ウイルス性の心臓病……ゴール・D・ロジャーと同じ死病だ」

シャンクスが胸ぐらを掴み、俺を引き寄せて叫ぶ

「なぜ知らせなかった!?!」

「アカリがそう望んだからだ。シャンクス…お前の夢を邪魔しないためにな」

シャンクスの手から力が抜けていく…シャンクスが

ここまで落ち込むのは初めて見たな

「アカリは、いい女だった」

「ああ」

「一目惚れだった」

「何度も聞かされた」

「ベックマン…」

「…なんだ？」

こちらを見据えるシャンクスの目は先程までとは変わっていた

「でかくなるぞ…俺達はでかくなって、アカリが世界のどこにいても

俺達の名前が聞こえるようにしてやる！」

また一つ、シャンクスは成長した…いや、アカリが成長させたんだ

「…それでいい、俺はお前についていくだけさ」

これで、赤髪海賊団は大きくなる…俺の予想を超えて大きくなるだろう。

まったく…アカリ、お前は俺の想定以上にいい女だったみたいだな



「久しぶりね、アカリ」

先程、部下が手紙を持ってきたのだけど、その差出人がなんとアカリだった
内容は海賊をやめたから船で送って欲しいって書いてあったのだけど…

手配書は無効になっていないから捕まる可能性は十分にあるのに
アカリは相変わらずみたいね

しかも、獲物である剣を赤髪の上に置いてきたらしい

無手でくるなんて、信頼されているのか、怖いもの知らずなのか…

「うん、久しぶりベルメール」

「海軍を足にしようだなんて、変わらないわね」

「お互い様でしょ?」

そして笑い合う私達、懐かしいわね、この感じ

「…うえっ!」

「ちよつと、大丈夫アカリ?」

「うゝん、陸酔いでもしたのかしら?」

「送っていくのは了解したから、出発前に船医に見てもらいなさい」

「は〜い」

アカリを見送って少し経ったとき、部下が慌てて私のところに来た

「ベルメール大尉！」

「どうしたのよ？ そんなに慌てて」

「はっ！ ご友人のアカリさんの事なのですが！」

「アカリになにかあったの!？」

部下の言葉に私に緊張が走る

「おめでたであります！」

「…は？」

…今、なんていったの？

「ですから、アカリさんは妊娠しております！」

その言葉と同時に私はアカリの元に走り出した



「アカリ！」

わたしの親友、ベルメールが血相を変えて部屋に入ってきた

「あはは…ベルメール、わたし妊娠してたみたい」

「このこと、相手は知ってるの？」

「えっと…わたしも今知ったばかりだから…」

わたしの言葉聞いたベルメールが頭を抱える…仕方がないじゃない！

「アカリ、あんたの故郷ってどこだったかしら？」

「ワノ国よ」

「遠すぎるわね…船医？」

「アカリさんの状態を考えると、そこまでの船旅は危険過ぎます」

危険なんだ…わたしの赤ちゃん…

「ベルメール、どうしよう？」

ベルメールが航海図を広げて考えだす

「船医、東の海はどう？」

「…この船の耐波性能では不安がありますね」

「そう…」

「あの…ベルメール、安定期に入るまでこの島に…」

「…ごめんなさい、食料がもたないわ」

そんな…どうしよう…

「アカリ、連れて行くのは私の故郷でもいいかしら？」

「え？別にいいけど」

「よし！誰か！電伝虫を準備して！」

「どうするのよベルメール？」

わたしがそう言うのと、ベルメールは笑顔で答えてくれた

「助っ人を呼ぶのよ。それも、とびつきりの人をね」



「まさかあの時、ガープさんと呼ぶとは思わなかったわね」

あの後、わたしはガープさんの艦隊に丁重に護送されて

ココヤシ村にやってきて、無事に出産することができた

ベルメールに聞いた話だと、ガープさんはベルメールの一報を聞いた後、

手続きなどをすつ飛ばしてすぐに艦隊を率いて来てくれたらしい

そのせいなのか、《英雄ガープ、白ヒゲとの決戦か!》なんて

噂が流れて、海賊達はてんやわんやの大騒ぎになったようだ

その噂を受けてセンゴクさんがあくまで海軍の示威行為の巡回として

色々と根回しをして噂の鎮静化をしてくれたみたい

…お手数をお掛けしました

「シユウ、ガープさんにお礼を言わなくちやね…コホッ！コホッ！」

口を押えた手に血が付く

「…もう少し持つてよね、わたしの身体」

海に出て色々な人達と出会い、お世話になつて今のわたしがある

残された時間はあまり多くないかもしれないけれど…精一杯生き抜こう

「わたし…まだ、《ママ》って呼んでもらつてないんだから」

本編・原作前

第13話

微睡んでいた意識が少しずつはつきりとしていく

もう少し寝ていたいと思うが、日々を追うごとに覚めていく

抱かれている暖かさに安心を感じながらも目覚めを自覚していく

——ああ…もう少しだけこのまま……——

彼の目覚めの時は近い



「うふふ」

わたしの息子、シユウを抱きながら、その寝顔を眺める

…うん、やっぱり可愛いわね！

「ちよつとアカリ、顔がだらしなことになってるわよ」

「ほつといてよ、ベルメール」

だって、シユウが可愛いんだもの、仕方がないじゃない

「しかし、本当に泣かないわね、この子は」

「シユウは良い子だもの、ねえ」

眠りを誘うように軽く揺らしながら愛する息子に話しかける至福の一時

これを邪魔するのなら、金獅子のシキだってぶつ飛ばす！…無理だけどね

「でも、隣村の子供達なんてゲンさんの顔を見ただけで泣き出すのよ？」

それなのにシユウはなんともないんだから、変わつてると思つても仕方ないでしょ」

「ベルメール、ゲンさんに失礼よ」

駐在のゲンさんは時折、隣村まで顔を出すことがあるんだけど、

その時にゲンさんを初めてみた子供達は決まって泣き出してしまふのよね

ゲンさんは強面な顔をしているけど子供好きだから結構シヨックみたい

「さてと、それじゃ洗濯でもしてこようかしら。アカリはゆっくりしてなさい」

「わたしも手伝うわよ、ベルメール。息子の服ぐらい自分で洗わないとね」

「…Dr. ナコーからあんたの病気のこと聞いたわ」

…ばれちやつたか

「それで、アカリはどのぐらい…」

「あと一年持てば御の字らしいわね」

「1年……」

ベルメールが俯いてしまう……もう、そんな顔は似合わないわよ
「大丈夫よ、痛みは能力で抑えてるし、シユウに《ママ》って

呼んでもらうまでは意地でも生きるからね」

「アカリ、あんたの能力でその病氣、治せないの？」

「残念ながら治せないわね。一時的に治せても、また悪化する過程で

体力を失っちゃやうから余計に寿命を縮めちゃうのよね」

これはロジャー船長の時にクロツカスさんと確認済みだからね

それでも、ロジャー船長は全力で戦わないといけない時に

わたしの能力で治して戦っていた……文字通りに命を削りながら

「ほら、洗濯をしに行くわよ。食っちゃ寝して体力を落としたら

逆に良くないんだから」

シユウをベビーベッドに寝かせながらベルメールに促す

それじゃ、ママはお外に行ってくるから良い子にしていね、シユウ



遠くに聞こえる波の音と潮の匂いが五感を刺激する
まるでそれらが目覚めを誘うように

微睡みは次第に薄くなり、夢のごとく感じていた日常が
やがてはつきりと現実へとなっていく

転生者《シラカワ・シュウ》の意識は今、目覚めの時を迎えた



目が覚めると、まず最初に感じたのは潮の匂いだ

続いて体の違和感、少し動かしてみると目に写るのは

小さなプニプニとした手だった

うん、小さな子供になっているな

寝ている状態なので自然と天井が目に入るが：

お決まりの言葉を言ったほうがいいだろうか？

「あうあうあゝ（知らない天井だ）」

まったく呂律が回らない：今、何歳ぐらいなんだ？

少しでも現状を把握しようと体を動かしてみるが

なかなかどうして、思うようにいかない

それでも、手足を動かしていると少しずつであるが

感覚のズレはなくなっていく

これならいけるかな？

少し勢いをつけて体を捻ると寝返りに成功する

「あうあー！（おおーできたー！）」

うつ伏せになり周りを見渡してみると柵が近くにある

…これはベビーベッドの柵なのか？

軽く這うようにして柵に近付き掴み、立ってみようとしますが

上手くいかない…

「あ〜うー！（バランス悪っ！）」

幼児の身体バランスと筋力のなさで掴み立ちの試みは

なかなか成功せずに何度も転がってしまう

それでも、前世の経験か、はたまた老人からもらった特典故か

急速にバランス感覚を掴み形になっていく

「あうあ〜！う〜あ〜！（ファイト——！いっ〇——っ！）」

前世で愛飲していた某製品のCMでお馴染みのセリフを口にしながら

遂に、柵に掴まりながらも立ち上がることに成功した

「うゝあゝ！（よっしやあ！）」

達成感と心地好い疲労感を感じながら柵に掴まりながら立ち続けていると
部屋の外から声が聞こえてきた

「シユウ、ただいま」

波打つ紫色の髪をした美女がそう言いつつ部屋に入ってきた

そして、俺のことは見ると目を見開いて固まってしまった

「う？（母さん？）」

首を軽く傾げながらそう言葉にする。この女性とは初対面のはずなのに

なぜか自然と彼女が母親なのだと理解してしまう

（これは、刷り込み現象みたいなものなのかな？）

そう思うと同時に俺はバランスを崩し転がってしまった。

身体バランスの悪さと幼い体の体力のなさでもう限界だったのだ

「大丈夫!?!シユウ！どこも怪我してない?」

いつの間に近付いてきていたのか、転がったと同時に母親に抱き上げられてしまう
体力の限界による疲労と彼女から与えられる安心感で抗えない眠気がくる

「あゝ…（おやすみ、母さん…）」

回らない呂律で言葉にならないが、それでも母親におやすみの挨拶をして俺はゆつくりと瞼を閉じて眠りについた



洗濯物を外に干して部屋に戻ってみると、わたしの息子シユウがなんと掴まり立ちをしていた……まさか……

息子の歴史的瞬間を見逃すだなんて!!

そして、シユウがわたしの方を向いて『う?』と首を傾げる姿を見て

わたしは口から吐血という名の愛が漏れそうになってしまった

……だって、可愛すぎるんだもの

わたしは映像伝電虫を持っていなかったことを凄く後悔したわ

……近くの海軍支部から奪っ……いえ、借りてようかしら?

そんな事を本気で葛藤していたら、シユウがバランスを崩して転がってしまったわたしは瞬時に足に武装色の覇気を纏い、床板を踏み抜かないギリギリの力で床を蹴って近付き、シユウを優しく抱き止めて助けた

シユウは安心したように『あゝ』って言いながら笑顔をわたしにくれた

天使よ！ここに天使がいるわ！

そのまま、わたしの腕の中でシユウは眠ってしまったのだけど、わたしはシユウが無事なのか確認するために見聞色の覇氣を使った
そして、シユウに感じたのは…

「これって…武装色の覇氣？」

そう、シユウの身体に僅かに残っていた武装色の覇氣の気配を感じたのよ
…もしかしてシユウは…

そんな事を考えながらも、安らかな寝顔のシユウを見て頬を緩めていたら
ベルメールが呆れたような声で話しかけてきた



「アカリ、まくただらしな顔になってるわよ」

部屋に戻ってみると、アカリがシユウを抱き上げながら

いつもの様に満面の笑みを浮かべていた

「あ、ベルメール！ちよつと聞いてよー！」

シユウを抱き上げている時のアカリはいつも機嫌がいいのだけど、

今回はいつも以上にいいみたいね…なにかあったのかしら？

「どうしたのよアカリ？」

「あのね、シユウが立っていたの！」

「…は？」

まだ、赤ん坊のシユウが立っていた？

「だから、シユウがベビーベッドの柵に掴まり立ちしていたの！」

「ちよつと待つてアカリ、シユウってまだ生後6ヶ月ぐらいよね？」

「そうよ！凄いでしょ！」

私は子育てしたことないけれど…そんなことありえるの？

「えっと、凄いことなんでしょうけど…それって、ありえるの？」

「本当に立っていたんだから！」

「いや、疑っているわけじゃないわよ」

えっと、普通はハイハイをしてからよね…？どういうことかしら？

「それに、シユウは武装色の覇気を使っていたみたいなのよ」

「…え？」

ちよつと、理解が追いつかないんだけど！

「それって、生まれつき武装色の覇気を使っているってこと？」

「そうよ、だからシユウは…」

そう言うと、アカリは俯くようにして真剣な顔つきになる

…なにか、シユウに重大な問題があるの？

生まれつき覇気を使える者がいるというのは聞いたことがあるけれど実際に目にしたことは一度もない

だから、どんな問題が起こるのか想像がつかない

時に強すぎる力は自らを傷つけたりするものだけ…

どのような問題があるのか…私は緊張しながらアカリの言葉を待った
「だから、シユウは天才なのよ！」

ただの親馬鹿だった

「…はあ」

「なによベルメール、そのため息は、凄いでしょ？」

自慢するように腕に抱いているシユウをアカリが見せてくる

心配して損した気分だわ…

「あ、この感動をゲンさんにも伝えなくちゃ！」

「はいはい、ゲンさんは私が呼んでくるから、アカリは大人しくしてなさい」

ぶーぶーと子供っぽく不満を口にするアカリに手を振り、ゲンさん呼びにいく

半年ぶりの帰郷でも変わらぬ親友の姿に安心した私は、気分良く走り出した

第14話

あの後、目を覚ましたら母さんの他に、独特な髪型をした美人さんとなにやら立派な髭を生やした強面な男性がいた

美人さんはベルメール、髭の人はゲンさんと言うらしい

ちなみに母さんの名前はアカリだ

3人して俺が立つのを待っていたみたいだが、お腹がすいて泣いてしまったそう、感情を抑えきれずに泣いてしまったんだ

これが、身体に感情が引つ張られているのか、まだ抑制の反動が残っているのか判断がつかないが、まだ言葉を話せないのだから

他に意志を伝える方法も無く、仕方がないのでそのまま泣き続けた

そうしたら、なんと母さんが服をはだけだした

ちなみに、ゲンさんはベルメールさんに耳を引つ張られて部屋を出ていったそう、まだ食事が授乳だったのさ……

離乳時期に意識が目覚めると言っていたあの老人に小一時間は説教したいだけで本能なのか、なんの葛藤も無しに飲むことができて助かった

食事を終えて一息入れると、また俺が立つのを待つ3人の姿があるだけど満腹感のせいかまた抗えない程の眠気がくる…おやすみ、みんな



俺が目を覚ましてから3ヶ月ほど経った

どうやら俺が目を覚ました時はまだ生後6ヶ月程だったらしい

そして、今は生後9ヶ月程だ

あれから、何度も掴まり立ちを繰り返し、それを母さんやベルメールさんに目撃されて驚き、喜ばれたのだが、そんなに凄いことなのか？

なにせ、前世では生涯独り身だったのだから育児知識なんて皆無なので知識と言えば、特典でもらうはずだった重力に関する知識なんだけど…

これっぽっちも無いってのはどういうことだ？

いや、前世での一般常識程度の知識はある…というか覚えているんだけど少なくとも博士号どころか、論文を書く知識なんて欠片も無いぞ

あの老人が優遇するとか言っていたけど…まあ無いものは仕方がない

そして俺は今、文字の勉強と発声練習をしている

母さんが本を読み、俺はそれを繰り返すように言葉にしている
なぜか母さんの膝の上で：



「ありがとうございます」

「あいあおうごじやーまう」

ここ3ヶ月程は立つことからヨチヨチ歩きまで出来るようになったのだが
いまだに滑舌はよろしくない：

そんな訳で、母さんに本を読み聞かせてもらいながら発声練習をしているのだ
「キヤー、可愛い！」

母さんはそんなことを言いながら膝の上の俺を抱き締めてくる
少し、いや、かなり子煩悩なのが今生の母さんだ

もう、歩けるようになったけど、話すのが苦手なのは大丈夫なのかと
ベルメールさんと母さんがDr. ナコーに確認していたのだが、

なんでも、俺があまり泣かなかつたのが原因じゃないかとのことだ
つまり、発声に必要な身体能力がまだ発達していないということだ

その為、母さんと一緒に日々発声練習に勤しんでいるのが現状である

「おはようございませす」

「おあおーございまう」

…先は長そそうだ



目を覚ましてから6ヶ月程経って1歳になった

今では走れるようになり、滑舌もかなり良くなった

だが、最近母さんの調子が良くない…よく咳きをするようになり

しかも、その咳きに血が混じっている…

Dr. ナコーの診療所まで走り、俺はベルメールさんと

ゲンさん、そしてDr. ナコーにそのことを告げた

3人はなんとか誤魔化そうとしてきたが、俺はただの子供では無い

少なくとも30年以上の人生経験を引き継いだ子供なのだ

だから、母さんの状態が良くないのははっきりとわかる

前世では親孝行と呼べるものを何一つしてこなかった…

だからというわけじゃないが、俺の事を溺愛してくれる母さんになにか1つでもしてあげられることはないのかと思う

俺の様子に誤魔化すことができないと思ったのかベルメールさんが答えてくれる
ウイルス性の心臓病…それが母さんの病気で、余命は半年ほど…

その事を聞いた俺は、涙が止まらなかった



《賢い》この子を、シユウを見て思ったことだ

まだ1歳だというのにこの子はアカリの状態が良くないことを知り

私達にその事を話してきた

そして、シユウはアカリが長くないことを明確に理解して泣いている

わずか1歳の子供が死を理解して泣いているのだ

アカリは常々、シユウは天才だと親馬鹿を發揮してきたけど

今なら私にもわかる。この子は私達の誤魔化しを察して

本当の事を聞いてきたからだ

でも、今はその賢いことが残酷だと感じる…

シユウはアカリの余命を知り涙を流している…その小さな手を握り締めながら「わたしに、なにか、かあさんにできることはないですか？」

本を読み聞かせて言葉を覚えさせたからなのか、シユウは日常的に

丁寧な言葉を用いて会話をする

これもアカリが凄く自慢をしていた

「…子供が変に気を使うんじゃないわよ」

「ですが…」

まだ滑舌はやや拙いが、明確に意思を持って会話をしてくる

本当に賢い子ね

「なら、子供らしくアカリに甘えてあげなさい」

「え？」

「いっぱい甘えて、思い出をたくさん作りなさい。それが、シユウが

アカリにしてあげられることよ」

「べるめるさん…」

悲しそうにしていた眼が変わった、うん、大丈夫そうね

「ほら、涙を拭きなさい。アカリに見られたら心配するわよ」

「はい…」

シユウにハンカチを渡そうとした時、外からアカリの声が響いた

「シユウ?ここに居るの?ママに返事をちょうだい」

「ほら、アカリが来たわよ。ちゃんと甘えてきなさい」

アカリが診療所に入ってきて目を見開いた

「シユウ!?なんで泣いてるの?どこか痛いところでもあったの?」

涙を流しているシユウに武装色の覇氣を使つて急いで近づくアカリにため息がでる

…なんて覇氣の使い方をしてるのよ

「Dr. ナコー!シユウは大丈夫なの?」

「どこも悪い所はない。健康体じゃ」

「じゃあどうしたのシユウ?ゲンさんの顔が怖かった?大丈夫よ、

ゲンさんはああ見えて良い人だから」

「おい」

ゲンさんが平手で空を叩いてアカリにツツコミを入れる

そんなゲンさんを放置してアカリはシユウを抱き上げた

それを見たゲンさんが項垂れる…愁傷さま

「ほら、もう大丈夫よ、ママが一緒にいるからね」

「はい…かあさん」

「もう、母さんじゃなくてママでしょ？」

子供のように頬を膨らまして軽く抗議するアカリを見たシユウが
涙を拭いて、ニツコリと笑顔でアカリに応えた

「は、ママ」

いつもは恥ずかしいからと呼ばない言葉を使いシユウがアカリを呼ぶ
念願の言葉で呼ばれたアカリはとても嬉しそうにシユウを抱き締めて
とても幸せそうだった

残された時間は少ないかもしれないけれど…思いつきり甘えなさい

第15話

「ママ、今日は何を作るのですか？」

「そうね、今日はビーフシチューを作るわ」

あの日、母さんをママと呼ぶようになってから6ヶ月程経った

俺がママと呼んだあの時から、ママの状態は安定して今に到る

Dr. ナコーが言うには、大きな感動が患者の病を改善することもあるとか：

そのおかげでママはまだ生きていられるが、それでも残された時間は少ないらしい
少しでも長く生きて欲しいと思う

「このビーフシチューはね、シユウのパパ、シャンクスも美味しいって

言ってくれたわたしの得意料理なのよ」

自慢するように胸を張るママがなんとも子供っぽく見える

実際、凄く若いのでその仕草も似合っている

「だから、この料理の作り方をシユウに教えてあげるね。いつかシャンクスに
会ったときに作ってあげて、わたしはもう作ってあげられないでしょうからね」

「ママ、そんなことは…」

ママが顔を横に振りながら言葉を続ける

「シユウのおかげで少しだけ長く生きることができたけど…多分、後半年ぐらいでわたしは死んじゃうでしょうね…ごめんね、シユウ」

「ママは死ぬのが怖くないのですか？」

ママが俺を優しく抱き締めてくれる

「怖いわよ。でもね、それ以上に幸せなの。生きてるって感じるの」

「周囲に流されるままに、常識に抑えられて惰性で過ごしていくのは

死んでいないだけで、今みたいに生きてるって感じなかったわ」

「だから、自分の思うままに、自由に生きてね…愛しているわ、シユウ」

ママの言葉が心に染み込んでいく…涙が溢れだす

「ふふ、それじゃビーフシチューを作ろっか、ベルメールがお仕事に

行っているのを後悔するぐらい美味しいビーフシチューをね」

「はい、ママ」

ママが自分の服の袖で涙を拭ってくれる、このこと一つで俺の心は晴れてしまう

母親というのは…凄いな

「あ、そうだ」

「どうかしましたか？ママ」

なにかイタズラでも思い付いたかのような顔をしているが…

「わたし、まだシユウに愛してると言ってもらってないわよ？」

そんなことを満面の笑顔で言われても…

「それは、父さんの役目ではないでしょうか？」

「シヤンクスにはいっぱい言ってもらったから大丈夫よ♪」

両親の惚気ってキツイんだな…

「ほらほら、ママに愛してると言ってよ」

「ええ…」

「あぁくくるしいく愛してると言ってくれないとママしんじやう」

そんな棒読み気味に言われても…

恥ずかしいという思いはある。でも、後悔はしたくない

なら、俺にできる限りの思いを込めてママに言おう

「私も愛しています、ママ」



「私も愛しています、ママ」

顔を赤らめながらもそう言ってくれる息子が愛しくて抱き締める

どこかその仕草がシヤンクスを感じさせて、あの人の子なんだと実感させてくれるふふふ、幸せだなあ…

シユウ、最後の時までママはいっぱい愛してあげるからね



「お帰り、ベルメール」

ベルメールが半年振りにココヤシ村に帰ってきたのを出迎える

ロジャー船長が創り出した大海賊時代により爆発的に増えた海賊に対処するため

今、海軍全体で人事が順次一新されていつている状態みたいね

それと、一年以上前に脱獄した金獅子のシキと、オハラの悪魔とされた

ニコ姉妹への対処もあって凄く忙しいみたいね

「ただいま、アカリ。あれ、シユウはどうしたのよ?」

ベルメールはわたしの命が短いことをガープさんに正直に告げて

優先的に休みを貰っているみたい…ありがとう、ベルメール

「お昼を食べたら寝ちゃったわ」

「そう?…そういうえば良い匂いがするわね」

「ビーフシチューを作ったのよ、シユウと一緒にね」

まだ背が低くて届かないから椅子の上に立って覗き込んでいる姿は可愛かったわ
「相変わらず1歳児とは思えない行動力ね」

「ふふん、シユウは天才だから♪」

本当に自慢の息子だわ

「あ、そうだベルメール、これ飲んでおいて」

「なによこれ?」

「まあ予防薬つてところね。さつきシユウにも寝る前に飲んでもらったから」

残された時間が少ないわたしが残せる数少ないもの…

これが發揮されないほうがいいんだけどね

「そうなの?じゃあ…マズッ!!」

「あはは!シユウも同じ反応してたわ」

「もう、口直しにビーフシチュー貰うからね」

そういつて、さつきと家の中にベルメールは入っていった

「ごめんつてばベルメール」

笑いながら後を追う。さてと、パンも用意しないとね



あれから時間は経ち、わたしの息子、シユウが2歳を迎えた頃

わたしは体に力が入らなくなってきた

体と意識が離れていくような感覚：見聞色の覇気を使わなくてもわかる：

いよいよ終わりの時がきたみたいね

わたしのベッドの横にシユウとベルメール、ゲンさんにDr. ナコーがいる

わたしの最後を看取ろうとこうして集まってくれた

「ママ、喉は渴いていませんか？」

「大丈夫よシユウ」

シユウが涙を流しながらわたしに話しかけてくる

わたしの死期が近いことを明確に理解して悲しんでくれている

本当に賢い息子だわ：

「アカリ、あの手紙は必ず届けるからね」

「うん、お願いねベルメール」

ベルメールに3通の手紙を預けた。相手はレイ養父さん、ワノ国の家族

そして、シャンクスだ

ただ、普通に送るとわたしが元ロジャー海賊団だったこともあり、

検閲される可能性があるなので手紙はレイ養父さんに届けてもらうことにした

その後は、レイ養父さんにワノ国の家族と、どこにいるかわからない

シャンクスの所に送り届けてもらう…お願いね、レイ養父さん

「それじゃ、私とゲンさん達は席を外すわね…最後までしつかりと

甘えなさいよ、シユウ」

「ふふふ、甘えるのはわたしの方よベルメール」

わたしの言葉を聞いた3人が部屋を出ていく、息子と2人してくれた

シユウは涙を流し続けている…ありがとう、シユウ

「シユウ、わたしになにか言うことはない？」

「…愛しています、ママ」

「ふふ、ありがとう」

ああ、幸せだなあ…前世よりも短いけれど、ずっと生きてと感じる一生だったわ

「シユウ、手を握ってくれる？」

「…はい」

医者 of 真似事をして、海軍に入って、海賊になって、本当に楽しい日々だったなあ

「シユウ、わたしの所に生まれてきてくれて、ありがとう」

「…はい」

お母様、お父さん、ユカリお姉ちゃん、ヒカリ、レイ養父さん…

わたし、ママになれたわ

シヤンクス、わたしの恋人になってくれてありがとう

シヤンクス、わたしを愛してくれてありがとう

そして…

「シユウ、愛してる」



その言葉を最後に俺の今生の母、アカリは目を閉じた…

ママが死んだ事が悲しくて、言葉もなく泣き続けた

まだ22歳の若さだ…それでも、その顔は幸せそうに微笑んでいた…

「ママ…私、の方、こそ…」

嗚咽で言葉がつかつかえてしまう…最後までちゃんと伝えるんだ！

「ママ、愛してくれて、ありがとう」

俺の言葉が届いたのか、アカリママの顔は微笑みが深まったように見えた…
俺が2歳になった年の7月3日、アカリママは眠るように亡くなった

第16話

海の見える岬にアカリママの墓を建ててもらった

ベルメールさんの船を見送る時に、ママとよく2人で見送った場所だ
簡素な墓だが、将来は俺の手で立派なものにしたいと思う

「それじゃ、そろそろ私は行くけど、ちゃんとゲンさんとかを

頼りなさいよ、シュウ」

「はい、大丈夫ですよ、ベルメールさん」

俺が応えると、ベルメールさんは俺の頭を手でクシャクシャと撫でてくる
アカリママと同じ波打つ髪がボサボサになってしまう

「いつてくるわ、シュウ」

「いつてらっしゃい、ベルメールさん」

挨拶を終えたベルメールさんは手荷物を持って、出掛けていった

…さてと、まだ幼いこの体では掃除などの家事も大変だけど頑張ろう
そして、少しずついい…余裕が出来たら走ったりして体を鍛えよう
アカリママと約束した、父さんにビーフシチューを食べさせるには

俺自身が海に出て、父さんを探さないといけなだらうからな…

俺にママや父さんのように冒険できるのか、海で生きられるのかはわからないけれど…それでも、ママの昔語りを聞いて憧れた世界を俺自身の目で見てみたいという思いがあるから…

「アカリママ、私も、頑張ります」

ママの墓に誓いをたてた俺は、家に向かって走り出した



「ゼハハハハ！女あー！やるじゃねえか！」

任務で航路を巡回中に近くの村が海賊の襲撃を受けていると連絡があり、私の船はそこに急行した

たどり着いた先では村が燃やされており、一刻の猶予もない状態だった
そして私は今、そこにいたこの巨漢の男と戦っている

部下達が村の人達を救出する時間を稼ぐために…

「…あんた、何者？」

「ゼハハハハ！俺様は、マーシャル・D・ティーチだ！」

その言葉と同時にティーチが踏み込み、殴りかかってくる左半身を前にして踏み込み、右手を振ってくるティーチを相手の前足の外に踏み込んで避ける

避けるために踏み込んだ足を基点として体を回し、武器であるライフルを振るって攻撃する

ティーチは空いている左腕で私の攻撃を受け止める

体格差が大きく、力で圧しきるのは難しいのですぐに次の行動へ移る

「ゼハハ！痛えじゃねえか！」

受けた左腕でなぎ払うようにしてきた攻撃を掻い潜るようにして避ける

下がった上体を起こす勢いを利用してライフルを振り上げる

「おっと、危ねえ！」

3メートルを軽く越える長身のティーチの顎を目掛けて振ったために

こちらの体が伸びきってしまうが、仰け反って前に出た

相手の腹を蹴り、反動で距離をとる

「エールを戻しちまうかと思っただけ、ゼハハハハ！」

しばらく続く攻防の中で、私はティーチの攻撃の間合いや

タイミングを測っていく

そして、機を見て仕掛けた私は首筋辺りにゾワリと寒気を感じた

私は反射的にライフルに武装色の覇気を纏わせ盾とした

ドガツ！

大きな音と共に私は吹き飛ばされる：吹き飛ばされながら目にしたものはいつの間にか《軸足》が入れ替わっていたティーチの姿だった

「ゼハハハハ！惜しい惜しい、後少いで仕留められたんだがなあ」

右半身を前にして左腕を振り切った姿のまま、ティーチは謳う

「だが、手応えは悪くなかった。横っ腹に力が入らねえんじやねえか？ゼハハハハハ！」

確かに直撃は避けることができたけど、武装色の覇気を乗せたティーチの拳は

ライフルでのガードを超えて私の腹にダメージを与えてきた

足が重い：

私とティーチの体格差を考えれば、足を止めての殴りあいなど自殺行為だ

私の顔に冷や汗が流れる：状況は悪いけど、まだ終わってない！

「確かに、良いのを貰っちゃったけど、まだいけるわよ」

「ゼハハハハ！気の強え女だ！」

それからは回避に専念するものの、足を使えないのでいくつかの攻撃は

受けざるを得ないため、少しずつダメージを重ねられていく

このままではじり貧ね：

私の覚えたての武装色の覇気ではティーチの覇気を防ぎきれずにダメージを重ねられてしまう

それに、先程から何度も軸足が入れ替わって間合いが変化するため予期せぬ形で攻撃を受けてしまうのも大きい

くつ、やりにくいわね！

人は利き腕、利き足、利き目などからある程度は構えが決まってくる

そして、構えは備えでもある。攻撃、防御をするための備えだ

剣術では上段、中段などの構えの変化はあるが左右の入れ替えというのは少ない

左右が入れ替われば足捌きも変わってしまうからだ

足元が覚束なければ簡単にやられてしまうだろう：なのに、ティーチは

それを当たり前のようにやっている

なんとか時間を稼ぎ、足に力が入るようになったけど、代わりに

上半身は内出血で所々に痣ができてしまった

そして、横腹はズキズキと痛みがある：肋骨をやっちゃったかしら？

どちらにしろ、もう余裕はないわね：

私は動くようになった足で六式の《荊》を使い、一度距離をとる

「お？動けるようになったか。でも、もうボロボロみたいだな」

「そうね、身体中痛いところだらけだわ」

「てめえは女だ、命乞いをすれば助かるかもしれないぜ？」

「冗談でしょう。村の惨状を見てそう考えられるほど、私は楽天家じゃないわ」

「ゼハハハハ！」

怪我や体力を考えて、チャンスは一度つてとどころかしら

失敗すれば私はティーチに殺されるでしょうね…

背中に冷たい汗が流れる…恐怖が体を包む

——いつてらっしやい、ベルメールさん——

シウウの言葉が頭に響く

「…そうね、帰らないと、アカリに怒られるわよね」

意を決して前を見据える

「おっ…くるか」

こちらの意図を察したティーチが言う

「ええ、悪いけど、待たせている男がいるのよね、

早く終わらせて帰らせてもらおうわ」

「ゼハハハハ！連れねえじゃねえか！」

ティーチは左右どちらを前にすることもなく、腰を落として構える

どう仕掛けても対応できるような備えだろう

…本当に面倒な相手ね

勝負は私がライフルの弾を眉間か心臓に撃ち込めるかだ

正面から狙って当たるような相手ではない…なら、裏をかかないと

持つてよね、私の体…ココヤシ村に帰るんだから

「勝負!!」

その言葉と共に踏み込む私と、迎え撃つティーチ

万全の状態ではないけど、私は生き残るために全力でティーチに挑んだ



「買い物を手伝っていただき、ありがとうございます。ゲンさん」

「まだ2歳の子供にこんな多くの荷物を持たせる訳にはいかんからな」

今、俺は食材の買い出しに来ている。前世と違い気軽にコンビニとはいかない

それに、食べることは身体作りに欠かせないことだから気をつける必要がある

前世は好き嫌いが激しく、不摂生に生きていたので反省しなければならぬ…

目標は高身長！夢の180cm以上だ！

「それで、この材料で何を作るんだ？シユウ」

「予定では来月にベルメールさんが帰ってくるようですよ、その時に

ビーフシチューを振る舞いたいと思つたのです。その練習といたつたところですね」

アカリママが亡くなったことで一人身になってしまったが、そんな俺を

ベルメールさんは一緒に暮らそうと話してくれた

父親の顔を知らず、祖父母の居住地も遠いとなれば

今の幼い身体ではどうしようもない

そんな時に、ベルメールさんの一言はとても助かった

それに、意識が目覚めてからは彼女を家族のように思つていたから

これからも一緒にいられるのは素直に嬉しい

「そういう訳なので、ビーフシチューの味見をお願いしますよ。ゲンさん」

「はっはっは！これは役得だな！」

そうして話しながら歩いていたら、不意にサンダルの紐が切れてしまった

「おっと…サンダルが壊れてしまいましたね」

「ふむ、シユウは最近、走り回るようになったからな。それで傷んでいたんだろう」

そう言いつつ、ゲンさんは俺の前で背を向けて膝をつく

「荷物を持っていただいているのですから、家まで裸足で歩きますよ」

「子供が遠慮するんじゃない。大人ならまだしも、子供の柔らかい足裏では

怪我をするかしれんからな。もし、怪我をしたことがバレたら

ベルメールにどやされてしまうだろう？」

やれやれ、相変わらず顔に似合わず優しいことで

「では、お願いしますゲンさん」

ゲンさんの背で揺られながら家路につくが、俺の心は何故か不安にかられていた

そう都合よく何かの予兆でサンダルが壊れるとは思わないが…

「どうかご無事で、ベルメールさん…」

俺の呟いた言葉はココヤシ村の潮風に持っていかれる

俺はベルメールさんの無事を祈りながら、ゲンさんと共に家に入っていった

第17話

「俺様の勝ちだなーゼハハハハ！」

全力でティーチに挑んだ結果、私は負けた

なんとか翻弄して眉間に銃口を突きつけることはできたのだけど、

引き金を引く寸前に脇腹の痛みで身体が硬直してしまった

その僅かの隙にティーチが銃口と眉間の間に右腕を差し込んだことで

発砲するものの右腕を傷つけるだけに終わりで、トドメを刺すことができなかつた…

その後も諦めずになんとか戦ったけど、すでに限界に近かつた私は

ほとんど抵抗できずにこうして叩き伏せられてしまった

「ゼハハハハ！安心しろ、殺しはしねえ」

「だが、俺様が海賊王になるためには名を上げる必要がある…」

だから、海軍に俺様のことを広めるために少しばかり痛い目にあつてもらう…ぜー！

その言葉と共にティーチは私の右足を踏み砕いた

「う、ああああああ!!」

「ゼハハハハ！てめえの動きは厄介だったんでな。まずはそれを封じてからだ！」

その後は全身を蹴り尽くされる…それでも、生き残るために急所だけは
まだ動く腕で防御するものの、少しずつ意識が遠退く

「ゼハハハハ！しぶてえしぶてえ、痛めつけがいがあるぜえ！」

今度は左腕を踏み碎かれたが、歯を食い縛り痛みに耐える

意識を失えばそのまま殺される可能性だつてあるからだ

ティーチは殺さないと言っていたが笑いながら村を焼くような男だ

信用するわけにはいかない

それから執拗に全身を蹴られ痛めつけられていく

シユウのことがなければ間違いなく心が折れていた

でも…

なんで私は海兵をやっているのだろう…

「なかなか折れねえな、目がまだ生きてやがる」

マックスはもういないのに…

「そうだ、いいことを思いついた。てめえも女だ、顔を潰されれば堪えるだろう？」

「…はっ、おあいにく様、私ぐらい、いい女なら、顔が、潰れても、

引く手数多、よ」

オハラで無抵抗の一般人を砲撃で吹き飛ばして…

「ゼハハハハ！そうか、なら試してみるか。加減を間違えて死ぬかもしれないねえがな！」
痛みで朦朧とする意識の中でティーチの足が顔に迫る

だが、顔を踏み碎かれる寸前に、赤髪の男がティーチを蹴り飛ばした



少し前に、かつてロジャー海賊団の見習いだったころの仲間であるレイリーさんが俺に手紙を持ってきた

手紙の送り主は俺の恋人、アカリだった

レイリーさんが言うには海軍の検閲を避けるためにレイリーさんに預けたらしい

アカリの手紙に書かれていた内容は自分が死んだこと

そして、息子が産まれていたことだ

アカリの病のことはすでに知っていたため、アカリが死んだことは残念だが

なんとか受け入れることができた

だが、俺に子供ができていたことは正直なところ吃驚したどころではなかった

慌て過ぎた俺は副船長のベックマンに宥められてなんとか落ち着いた

そして、アカリが死んだということは、俺の息子《シユウ》が1人に

なつてしまったということだ

いや、もしかしたらアカリの両親、シユウの祖父母と一緒にいるのかもしれないがそれでも会わなくてはと思った

シユウが祖父母と一緒にいることを望むか、俺と来ることを望むかはわからないが父親として：アカリが残してくれた息子に会いたい

俺は頭を下げて、俺の仲間達である赤髪海賊団のみんなに頼んだ
そして、俺達はアカリの故郷であるワノ国に向けて船を出したが

その途中で補給のためにとある島に立ち寄った
立ち寄った島にある村は燃えていた

海軍の兵士達が村人を助けるために奔走していたのを見て

俺は仲間達に手伝うことを指示する

俺達は略奪主義ではないが、それでも敵対組織に手を貸すのはと
ベックマンに一言告げられたが俺は譲らない

まあ、ベックマンも念のために確認したという程度だ

ここまで5年も付き合いがあるのでそこら辺の呼吸はわかっている
そして、海兵達を手伝っていると、海兵の1人が自分たちの隊長が

海賊と戦っていると言ってきた

相手は同業の海賊であり、ましてや敵対組織の海兵を助けるのとはいつもの俺なら思っただろうが、この時の俺はなにか予感めいたものを感じその海兵達の隊長の所へ走った

視界に入ったのは、今まさに頭を踏み砕かれようとしている女の姿だ俺は反射的に海賊を蹴り飛ばし、女の状態を確認する

「大丈夫か？」



「大丈夫か？」

ティーチ蹴りとばした男が私に話しかけてきた

赤髪が特徴的な若い男だ。どこことなく顔立ちがシウウに似ているように思う

「…あいにくと、大丈夫じゃ、ないわね」

右足と左腕を潰されて、身体中ボロボロにされているのだから

幸いというわけじゃないけど、それらの痛みのおかげで意識は保っている

「そうか、悪いがしばらく我慢してくれ、あいつと話をつけないとならないからな」

そう言った赤髪の男が視線を向けた方を見ると、ティーチが起き上がっていた

「痛えじやねえか、てめえ」

「俺は赤髪海賊団のシャンクスだ。悪いがこの女は俺に預けてくれないか」

「赤髪？聞いたことねえな」

「そうか、これでも最近はグラウンドラインでそれなりに名前が売れてきたんだが」

赤髪のシャンクス…この男がアカリの恋人でシュウの父親…

「俺様はマーシャル・D・ティーチ！白ヒゲ海賊団の2番隊の所属だ」

「ほう、白ヒゲか。大物だな」

「いいのか？白ヒゲの一味に喧嘩を売って」

「相手が白ヒゲだろうと世界だろうと自由に生きる。それが海賊だろう？」

「ゼハハハハ！そのとおりだ！」

「さて、どうするティーチ。この女を預けてくれるのか？」

シャンクスのその言葉にティーチは笑みを深めて応える

「海賊が獲物を譲るのか？」

「それもそうだな、なら…」

シャンクスがサーベルを左手で抜き、ティーチが徒手で構える

「力づくで押し通す!!」

どうやら戦いは避けられないみたいね…なら一応、私の味方である

シャンクスに一言だけでもティーチの印象を伝えよう

「シャンクス、気をつけて……ティーチは、得体が、しれない」

その一言で横目に私を見たシャンクスはニカツと歯を見せて笑った
多分、アカリはあの笑顔でやられたんでしょうね……

シュウも父親みたいに女誑しになるのかしら？

そんな命のやり取りの場に相応しくない事を考えていた私の前で
シャンクスとティーチの戦いが始まった

第18話

俺はサーベルに、ティーチは拳に武装色の覇気を纏って戦っているが
いい勝負になっている

先程、海兵の女がティーチを得体がしれないと言ったが
確かにそう感じている俺がいる

この違和感のようなものはなんだ？

「ちっ！痛えじゃねえか！」

軽く撫でるように、前に突き出ていた左腕の前腕部分を斬る

ティーチは3メートル以上のデカイ身体に樽のような体型をしているが

見た目以上に俊敏な動きで避けて皮一枚を斬るだけに終わる

見た目に合わない俊敏さ：違和感はこれか？

徒手で左腕を前にしているということは右利きなのだろう

なら、右の一撃に気をつけよう

相手の身体の大きさも考え間合いを調整していくが、

先程から感じている違和感は消えないままだ

「おうっ！」

ティーチが気合いを込めて右での一撃を振ってくるが余裕を持って避ける俺の得意な覇気はレイリーさん曰く、霸王色の覇気だ

だが、見習い時代とここまでの冒険で武装色、見聞色の覇気も身につけている見聞色はアカリに比べれば拙いが、殺意や戦意といったものを感じとり相手の攻撃の瞬間を察することができるので役に立っている

そして：

「ぐっ！痛えー！」

どうやら俺の武装色の覇気はティーチのそれを上回っているらしい

俺のサーベルと打ち合っているティーチの拳が少しずつ傷ついているのだこれならば無理をせずに勝てるだろう

白ヒゲの仲間思いは有名だ：ティーチとはどこか適当な所で決着としよう

俺は戦いながらも頭の中で勝ち筋を思い描いていくだが、その間も違和感が消え去ることはなかった：



強い

それがシャンクスの戦いを見た私の印象だ

私の武装色の覇気ではティーチのそれを上回ることは出来なかったけど

シャンクスは着実にダメージを与えている

アカリがまだ生きていた頃、惚気ながらシャンクスは天才だと

言っていたけど…その言葉に嘘はなさそうね

彼はまだ20歳になつてなかつたはず…その若さであそこまで

やれるだなんて…一体、どんな経験を積んできたのかしら

一見すると、シャンクスが圧倒的に優位だけど…

私の勘ではまだ勝負はついていない

ティーチの異常性をなんとか伝えたいのだけど…

私自身が理解できていないし、正直なところ、見届けるために

体を起こしているのも辛い状態だ

シャンクスに勝つてもらいたい…ココヤシ村に生きて帰るために



「そろそろ終わりにしないか？」

武装色を纏った腕だけでなく、体にも幾つもの傷を負い

満身創痍と言える状態になったティーチにそう告げた

「おう？なんだ、負けを認めるのか？」

「こちらが降参をすすめているんだけどな」

「ゼハハハハ！ようやく体が暖まってきたとこだぜ！まだまだこれからだ！」

「そうか…」

虚勢とも見えるが、奴から感じる違和感は消えていない…

油断はしないほうがいいな

「なら、もう少し戦おうか」

「その余裕顔が気に入らねえな…一泡吹かせてやるぜ！」

その言葉と共にティーチから仕掛けてくる

今までは俺から仕掛け、ティーチが受ける形だったが…

なにか策があるのか？

俺は集中を深めて対処していく

だが、一発逆転でも狙っているのか、ティーチの攻撃は

やや大振りが目立つ気がする

俺はサーベルでそれらの攻撃を弾いたり、体を後ろに反らして避けたりして少しずつティーチにダメージを重ねていく

奴の動きにも慣れてきた：そろそろ頃合いだろう

ティーチが右腕を弓を引くように振りかぶった

よし、これを体を後ろに反らして避け、腹に一太刀入れて終わりだ！

俺は体を後ろに反らしてティーチの一撃を避ける体勢になる

その時、総身に寒気が走る

なんだ！なにが来る!?

余裕を持つて避けたはずのティーチの右腕が伸びてくる

その右手の指を立てて：

「目ん玉もらったあー…いぎっ!」

ザリッ!

左目に焼けるような痛みが走る

やられたという思いで開いている右目でティーチを見る

ティーチの構えは、いつの間にか《右足》が前になっていた

そうか…構えが逆になっていた分だけ右の一撃が伸びてきたのか…

「ゼハハハハ！惜しい惜しい！右腕の痛みで体が固まんきや、てめえの

左目を潰すことができたんだがなあ！」

その言葉でティーチの右腕を見ると、弾痕のような丸い傷が見える

「その女に感謝しな！もつとも、片目で俺様に勝てたらな、ゼハハハハ！」

横目でチラリと海兵の女を見ると、近くにライフルが転がっていた

…どうやら助けに来たのに、借りが出来たようだ

「なあに、お前の状態を考えれば、片目はちよいどいいハンデだろう？」

「ゼハハハハ！言うじゃねえか！」

距離感を奪われたのは痛い、ティーチの消耗も大きい

勝ち目は十分ある

「シヤンクス!!」

遠くから俺の名を呼ぶ声が聞こえた…この声はベックマンか

「…ちっ、これはさすがに俺様でも分が悪りいな」

そう言うと、ティーチは踵を返して走りだす

「勝負は預けるぜ！あばよ、赤髪！ゼハハハハ！」

あれだけ負傷していながら、あの逃げ足か…タフな男だ

俺はこの日、俺の左目に傷をつけた男、マーシャル・D・ティーチの名を

心に刻み付けた。大きな警戒心と共に…

第19話

「シャンクス！大丈夫か!？」

俺の一味の副船長であるベックマンが走り寄ってくる

「ああ、大丈夫だ」

「とりあえず、これで止血しておけ」

そう言つてベックマンは手拭いを渡してくる

相変わらず用意がいい奴だ

「すまない、ベックマン」

「気にするな、シャンクス。それよりも、あのデカイのは何者だ？」

ティーチが走り去つた方を見ながらベックマンが問い掛けてくる

「奴はマーシャル・D・ティーチ、白ヒゲの所の2番隊の所属と言っていたな」

「白ヒゲか…大物だな」

ベックマンは腕を組み考え始めた…やはり頼りになるな

「ベックマン、あの村の惨状は白ヒゲの指示だと思うか？」

「…いや、噂では白ヒゲは一般人には手を出さない」

そう、白ヒゲは海賊でありながら一般人には手を出さない平和主義だ

だが、仲間達を家族と呼び、家族に手をだす海軍や海賊には容赦しない男だ
そして、俺が見習いの時も、ロジャー船長と幾度も競いあつたライバルでもある
そんな男が、あの村のようなことをするはずがない

「となると、ティーチの独断ということか…」

「おそらくな」

俺の言葉に同意するように言葉を合わせてくるが

完全には納得していないようだ

「ベックマン、お前にしてはハッキリしないな」

「俺は、奴と言葉を交わした訳じゃないからな。判断材料が足りなすぎる」

そう言つて、ベックマンは煙草に火をつけた

「ふく…それで、目はどうなんだ？ シャンクス」

「ああ、見えている。大丈夫さ」

そう言つて、左目を抑えていた手拭いを外して目を開けてみせる

ズキツと傷が痛み、少し顔を歪めてしまう

「一見した所、目には届いていないが、それなりに傷は深いな…」

船医に聞かない限りはハッキリとしないが、おそらく傷痕が残るだろうな」

「仕方ないさ」

「奴は…ティーチはそれほどに手強かったのか？」

「手強いというよりは、得体がしれない…といったところか」

そう、得体がしれないだ

油断したつもりはなかった

そもそも油断など、見習い時代にレイリーさんに、そしてアカリに

何度も叩き直されている

それでも、ティーチに一杯食わされた

この痛みも未熟な俺の自業自得だな

「その傷を見たら、あの《鷹の目》が何て言うかな？ シャンクス」

「…勘弁してくれ、ベックマン」

《鷹の目》こと、ジュラキュール・ミホークは、最近、俺とよく

手合わせをしている剣士だ

奴とは一進一退で決着がついていない、俺のライバルといった存在だ

「そろそろ船医がこっちにくるはずだ。ちゃんと診てもらえよ、シャンクス」

「ああ、だが先に彼女を…」

そう言って、海兵の女の方を見ると、彼女の体が淡く黄金色に輝きだす

その光りに包まれた彼女の傷が目に見えて治っていく
これは…

「あれは…アカリの能力か…?」

冷静なベックマンが銜えていた煙草を落としながら呟いた言葉は
俺の耳に入ってこなかった

彼女を包んでいた光りが消えたのを確認した俺は、彼女に詰め寄り
彼女の肩を掴んで感情に任せるままに言葉を叫ぶ

「あんた、アカリを知ってるのか!」



ティーチが走り去っていった…どうやら、生き残れたようね

先程、左目に一撃を受けたシャンクスは、強面の男と話し込んでいる
あの男は彼の仲間みたいね

そして、彼等は海賊だけど残虐非道ではなさそうね

そう考えて安心した私は、気が抜けてしまったのか傷の痛みが増してしまう

「…ツツ!!」

その痛みにも口から空気が押し出されるようにして声を漏らしてしまう
…これは、ちよつとキツいわね

体を横にしてしまえば、すぐにでも寝てしまいたいそうなので

なんとか体を起こしているのだけど…

歯を食い縛るように耐えていた私の体が不意に暖かさに包まれる

痛みが和らぎ、軽くなつていく

目を開き、自分の身体を確認してみると、淡く黄金色に輝いていた

「これは…」

この光りは知っているものだった

昔、アカリがまだ海軍にいたころに何度も見た光り…

その光りに包まれて折れた手足や身体が癒されていく

——まあ予防薬つてところね——

アカリの言葉が頭に響く

もしかして、あの時の…

光りが消え、身体が癒えた私が呆然としていると

シヤンクスが私の肩を掴み、叫んできた



「あんた、アカリを知ってるのか!？」

シャンクスが肩を掴んで揺さぶってくる

身体は治っているのだけど、クラクラしてしまう

「よせシャンクス、さっきの光りがアカリの能力によるものなら、
身体は治っても体力まで戻ってないはずだ」

「……すまない……」

そう言って離れてシャンクスは頭を下げてきた

こういつた時に、素直に頭を下げられるのは

流石にアカリが惚れた男ってところかしら

「気にしないでいいわ、むしろこっちが助けられたんだから

礼を言わせてもらおうわね、ありがとう」

彼に倣うわけじゃないけど、私も頭を下げる

先程までアカリのことと緊張していた空気が和らいだ気がした

「とりあえず、自己紹介させてもらおうわね。私はベルメールよ」

「俺は、シャンクスだ」

お互いに所属を言わないのは暗黙の了解というやつだ

困った時はお互い様というわけでもないけど、

紳士協定のようなものがあるのも事実だ

海軍では海賊は全て敵だとする勢力もあれば、ガープさんのように平和主義には比較的寛容な者達もいる

そして、私はガープさんの部下であり、寛容な海兵というわけね

今の大海賊時代に入る前から、陸の上の酒場では海賊と海兵が

一緒に飲んでいる場面はよくある光景で、昔から受け継がれている

お互いの私生活を守るための暗黙のルールでもある

勿論、海兵が任務として追っていた場合はその限りではない

色々やややこしい部分もある慣習だけど、私は悪いものだとは思っていない

「それで、さっきの光りだが…」

シャンクスが真剣な眼差しで問い掛けてくる…

恩人に嘘を言うわけにはいかないわね

「アカリとは、彼女が海軍時代に同期で親友だったわ」

「そうか…」

私の言葉にシャンクスの後ろで控えていた強面の男が話し掛けてくる

「もしかして、あの時にアカリを送ってくれたのは、あんたか？」

あの時というのは、アカリが彼等の船を降りたときのことでしょうね

「そうだけど、あなたは？」

「俺はベックマン、シャンクスの仲間だ」

なるほど、この男がベックマンか：

最近、シャンクスが率いる赤髪海賊団の名前は海軍でも有名になってきている

その彼等の一味を支える副船長であるベックマンは

《冥王》シルバース・レイリーの再来かと言われている

「あなた達のこととはアカリから聞いているわ。特にシャンクスのことは

アカリの惚気と一緒にね」

ウインクと一緒にそう告げると、ベックマンは笑いだし

シャンクスは顔を赤らめて手で顔を覆う

：へえ、これはからかうと面白そうな反応ね

「ククク、それで、アカリはどんなことを言っていたんだ？」

「おい、待てベックマン」

悪い顔をしながら、ベックマンが話を振ってくる

あら、話がわかるじゃない

「そうね、アカリがシャンクスと初めて出会った時に助けてもらった話しだけど…」
「…勘弁してくれ」

こうして私達は、私の部下が迎えにくるまで笑いながら話し込んだ
命のやり取りをしていたからこそ、生きていることを楽しむように…

第20話

あの後、しばらく話し込んでいた私達の所に私の部下が来たので
シヤンクス達との会話は終わりとなった

私の制服がかなりボロボロになっていながら

無傷な私を見て部隊の軍医が驚いていたのだけど

友人の悪魔の實の能力で治ったというとな得していた

そして、今は燃えていた村の消火も一段落したため

赤髪海賊団が村を去り海に出るということで見送りにきていた

「わざわざ見送りすまないな、ベルメール」

「村だけでなく、私の命も救ってもらったからね」

お互いの立場もあるので総出で見送りはいいかない

その為、海軍は私、あちらはシヤンクスとベックマンが

代表として最後の話し合いをしている

「それに物資まで分けてもらって助かった」

「さすがに燃えた村から出させるわけにはいかないからね」

書類上では燃えた村に支援したとなるがそこは建前上仕方ない

「それで、この後はどこに向かうの?」

「それを聞いてどうする?」

私の言葉にベックマンが反応する

シャンクスだと無条件で答えてしまうとと思ったのでしようね

「近海にいる海軍がこの村への支援物資を海賊との戦いで

失わないように、その動向を知っておこうと思つてね」

もちろん、これは建前であり、恩人である彼等を一時的でも見逃すためだ

「そうか…」

そう呟いたベックマンはシャンクスに目配せをする

それを受けたシャンクスが私の質問に答えた

「俺達はワノ国に行く」

「ワノ国?アカリの故郷に何をしに行くのよ」

私の言葉にシャンクスは少し照れながら話す

「俺の息子に会いに行くんだ」

シャンクスの息子…つて

「それつてシユウのことかしら?」

「知っているのか!？」

「アカリを送っていったのは私よ」

目を見開き驚くシャンクスに私は笑いながら答える

ワノ国か…アカリはこのことを予測していたのね

アカリに手紙を預かった時に、もしも任務でシャンクスに出会ったならと

遺言を預かっていた…それを告げるなら、今しかないわね

「シャンクス、シユウはワノ国にいないわよ」



「シャンクス、シユウはワノ国にいないわよ」

ベルメールの言葉に思考が止まる

俺の息子が…シユウがいない?ならどこに…

「シユウを探すのなら東の海を探しなさい」

東の海…シユウはそこにいるのか

「ベルメール、アカリを送っていったあんたなら

シユウの居場所を知っているんじゃないか?」

ベックマンがベルメールにそう問いたです

そうか、確かに彼女なら…

「その事で、アカリから遺言を預かっているわ」

「アカリから？」

アカリの名前が出たことで、俺は反射的に応えてしまう

「そうよ、アカリはこう言っていたわ、

『ヒントはあげたんだから、後は海賊らしく《宝》は自分で見つけなさい』ってね」

「あつはつはつは！」

彼女の物言いに俺とベックマンは笑ってしまった

ああ、アカリならそう言うだろうな

「なんとも、アカリらしい遺言だなベックマン」

「ああ、そうだなシャンクス」

顔を見合わせた俺達はまた笑いだす

アカリの言う通りだ、俺達は海賊だ。なら、宝は恵んでもらうんじゃない
冒険の果てに自分達で見つけだすものだ！

人助けなんてしたものだから、どこか調子が狂っていたのかもしれない

俺達は正義の味方なんかじゃない…自由に生きる海賊なんだ！

「アカリの言葉を伝えてくれて礼を言うよ、ベルメール」

「別にいいわよ、シヤンクス。それじゃ、航海の無事を祈るわ」

そう言つて彼女が敬礼をすると、それに倣い彼女の部下達も俺達に敬礼をする

「進路変更だベックマン！ 目指すは東の海！ 俺の《宝》を見つけ出すぞ！」

「あいよ、船長（キャプテン）」

ベックマンの言葉と共に赤髪海賊団の仲間達が一斉に出航準備に入る

頼りになる…自慢の仲間達だ

「出航だ——！！」

俺の号令で船は動きだす

俺の《宝》よ、シユウよ、必ず見つけ出すからな！



「…行つたわね」

シヤンクス達、赤髪海賊団の船が島を離れていく

さてと、私達は村の後始末をしないとね

「…はあ」

ため息が出てしまう

海軍として仕事をしようとするが、どうにもやる気がでない

左腕を見る

アカリの能力のおかげで、傷1つなく治っているけれど

ティーチに踏み碎かれた痛みの記憶は色濃く残っている

身体が震える

少し違えば死んでいたかも知れないという思いが頭を占める

こういったことは初めてではないけれど…心を奮い起したすものが見つからない

一緒に生きよう、戦おうと思った恋人、マックスはもういない…

一緒に頑張ろう、置いていかれたくないと思つた親友、アカリもいない

元々、ココヤシ村を出たのも、小さいころは色々とヤンチャをしていて

それを見たゲンさんが、私に海軍を勧めたのが切っ掛けだ

もう、10年以上上いるのでそれなりに愛着はあるけれど…

続ける理由が、戦う理由がない

心が沈んでいく…顔を上げられない

「…泣き声？」

沈んでいた私の耳に泣き声が…赤ん坊の泣き声が聞こえた

顔をそちらに向けると水色の髪の子が、その小さな腕で赤ん坊を抱き上げていた

私は赤ん坊の泣き声に引き寄せられるように近づいていく
覗きこむようにして赤ん坊を見た：オレンジ色の髪の子

「…キャハハ♪」

先程まで泣いていた赤ん坊が笑った
まるで、太陽のように明るい笑顔だ

「おねえちゃん、だいじよーぶ？」

水色の髪の女の子が、まだ辿々しい言葉で私に声をかけてきた

「…大丈夫って、何のことかしら？」

「おねえちゃん、ないてるよ？」

泣いている？

頬に触れると手が濡れる：私は涙を流していた
なぜ？

嬉しかったからだ、暖かかったからだ

あの赤ん坊の笑顔が：

この日、私は一人の海賊に命を助けられ、一人の赤ん坊に心を救われた

10年以上、海兵として生きてきた私が、新たな生き方を決意する運命の日だった

第21話

「ただいま」

あの日、ゲンさんにビーフシチューを試食してもらってからしばらく経ちベルメールさんが無事にココヤシ村に帰ってきた

なぜか子供を2人連れて…

「お帰りなさい、ベルメールさん」

「お帰り、ベルメール…ところで、その子供達は？」

俺と一緒に出迎えたゲンさんがベルメールさんに一緒にいた子供達の事を聞いたそれを聞いたベルメールさんは満面の笑みで答えた

「拾ってきたわ」

ベルメールさんの言葉に俺とゲンさんは顔を見合わせる

拾ってきたって…

「あつはつはつは…2人とも、なによその顔」

「笑い事じゃないだろ、ベルメール」

俺達の反応に笑いだしたベルメールさんに、ゲンさんは真剣な顔で返す

「それで、その子達をどうするつもりなんだ、ベルメール？」

「どうするって、うちの子にするのよ」

ベルメールさんの言葉にゲンさんが目を見開く

「うちの子にする…？」

「そうよ、私がこの子達の母親になるわ！」

そう満面の笑顔でベルメールさんは宣言する

アカリママが亡くなってから、どこか沈んでいたように見えたベルメールさんだが

どうやら、あの子達のおかげで元気を取り戻したようだ

うちの子にする宣言には驚いたけど、なんともベルメールさんらしいと思う

あの笑顔を取り戻してくれた、あの子達に感謝だ。ありがとう

しかし、どこかで見たことがある子達だな…

アカリママと勉強して、この世界の知識を得てからは前世の記憶が

かなり曖昧になってしまっているからな…

おそらく、この既視感はそのせいなんだろうな

ココヤシ村、ゲンさん、ベルメールさん、そしてこの子達に感じた既視感…

これが、何を意味しているのかはわからない…

そもそも、俺は前世の記憶と経験がある以外は凡人なんだ

なら、出来る範囲で…わかる範囲でやっていくしかない
とりあえず、今はベルメールさんに笑顔が戻ったことを喜ぼう
お帰りなさい、ベルメールさん



「そうよ、私がこの子達の母親になるわ!」

あの日、村が焼けたことで親を亡くしたこの子達を引き取ることを決意し
私の故郷であるココヤシ村に連れて帰ってきた

部下達には反対されたけど、私も引かなかった

あの村が焼けたことは私の責任じゃないと、何度も説得されたけど
私は、私の心を救ってくれたこの子達に恩返しをしたい

「無理だベルメール!」

「何が無理なのよ、ゲンさん」

なんとなく、ゲンさんには反対されるだろうと予想していたから
ゲンさんのこの反応には驚かない

シユウは…手を顎に当てて何か考え込んでいるみたいね

「子育てはそんな簡単なものじゃない！誰もが、シユウのように

手のかからない子というわけじゃないんだぞ！」

「わかっているわよ、そのくらい」

私は子供を産んだことはないけど、それでもシユウが特別だというのはわかる
アカリが散々、天才だって自慢していたものね

「ならば、無理だとわかるはずだ！」

ゲンさんが唾を飛ばしながら私に訴えてくる

ゲンさんの言うことも理解はできるけど、私の頭には

あの時のアカリの言葉が響いている

—— なって見ないとわからないわよ、ベルメール——

うん、そうよね、アカリ…

私はしっかりとゲンさんを見て、言葉を告げた

「なって見ないとわからないわよ、ゲンさん」



「なってみないとわからないわよ、ゲンさん」

ベルメールさんのこの言葉に、アカリママの姿を幻視したアカリママも俺をお腹に宿した時、そう言ったのだろうか：でも、ベルメールさんのように暖かさを感じる笑顔で言っていたんだろうと思う

さてと、あの子達を迎えるとして、何が必要なかを考えなければならぬ。元は三十路を過ぎた社会人だったんだ

ある程度は生活に必要な知識はある

なら、その知識をこの世界のものに置き換える感じであらう。曖昧になった前世の記憶から搾りださないと

もしかしたら、子供らしからぬ知識を持っているからと

よく思われないかもしれないが、それがどうした！

自由に生きると決めただ、約束したんだ！自重なんてしてられるか！

それに、ベルメールさんやゲンさんなら受け入れてくれると

信賴している、不安なんてこれっぽっちもないさ！

俺は思考を巡らしていく、ベルメールさんの為に、あの子達の為に

そして、これから一緒に暮らしていく家族の為に：

◆
「なってみないとわからないわよ、ゲンさん」

私の言葉にゲンさんは陸に挙げられた魚みたいに口をパクパクさせている
そんなに驚くような言葉だったかしら？

「あ、う、シユウは、シユウはどう思う、無理だと思うだろう？」

ゲンさん…子供に助けを求めてどうするのよ

その言葉に反応したのか、シユウは考え込むのをやめてこちらを向く
「そうですね、まずはその子達の名前を教えてくださいませんか？」

「えっと…シユウ？」

「これから一緒に暮らしていく家族なのですから」

名前を知ろうとするのは当然ではありませんか？ゲンさん」

その答えに慌てる様子のゲンさんに、シユウは言葉が続ける

「それに、アカリママもそうでしたが、こうなればベルメールさんも
意思を曲げないのではないのでしょうか？」

さすがシユウね、ゲンさんよりも私の事をわかっているわ

「だが、ベルメールは海軍の仕事で村を離れるのだぞ。その赤ん坊は

まだ乳飲み子だろう？誰が世話をする？」

「それは、ちゃんと考えてきたわよ」

私の言葉に2人がこちらを向く

「私、海軍を辞めるわ！」

その一言に、ゲンさんとシユウがまた顔を見合わせる

私がない間に随分と仲良くなったものね

また笑いがこみあげてきた

それに釣られたのか、私の腕の中の赤ん坊も笑った

私のズボンを掴んでいる女の子も笑顔だ

それを見たゲンさんが諦めたように項垂れていた

第22話

あの後、外で話し続けるのもということで家に入ったのだが

水色の髪の女の子がキョロキョロと見渡している

オレンジ色の髪の赤ん坊は大物なのかベルメールさんに抱かれて

太陽のような明るい笑顔を見せてくれている

あの子の笑顔を見ていると、こちらまで暖かい気持ちになる

話し合いということでテーブルにつくのだが、大人用の椅子なので高く、

幼児が席につくのは難しいため、水色の髪の女の子は

ベルメールさんに片手で抱えられ座らせてもらっていた

俺は最近、走り回って筋力が上がったのか、飛び上がる勢いを利用して

懸垂のように体を持ち上げて椅子に座った

「少し見ない間にそんなことまで出来るようになったのね、シユウ」

「ええ、ベルメールさんが海に出てから、家事の合間に体を鍛え始めましたから」

驚いているベルメールさんに気分よく応える

「それでは、まずは自己紹介をしましょうか。私はシラカワ・シユウです

これからよろしく願いますね」

俺がこの世界に転生してから一番驚いたのが自分の名前だ

前世で死ぬ瞬間まで遊んでいたゲームの登場人物と同じ名前だったからだ

これが、俺が望んだ特典の影響なのかはわからないが、アカリママに

名付けてもらったこの名前はとても気に入っている

「さあ、自分で紹介できる？」

ベルメールさんに促された水色の髪の女の子が頷いて口を開く

「わたし、ノジコー！」

まだ迪々しい口調だが元氣よく自己紹介をした

うん、元氣があつてよろしい

「よろしく願いますね」

「うん！」

お互いにテーブルに身を乗り出して握手をする

「そして、この子の名前は《ナミ》よ」

ベルメールさんが腕の中の赤ん坊を紹介する

「私はシュウです。よろしく願います、ナミ」

そう言つて赤ん坊であるナミに指を差し出す

「キャハハ♪」

そう笑いながら俺の指を掴んでくるナミを見て笑みが溢れる
太陽のように明るいナミの笑顔に心が暖かさと満たされる
アカリママが亡くなった事を乗り越えたと思っていたが
まだどこかで引きずっていたところがあつたのかもしれない
それが、ナミの笑顔で癒された気分だ

ああ、守ろうこの笑顔を

俺はいつか、父さんを追いかけて海に出るだろうが

その日が来るまではナミを守ろう

そんな事を心に誓っていたら、自己紹介をしたゲンさんが

ナミとノジコに盛大に泣かれて項垂れていた

…ドンマイ、ゲンさん



ゲンさんの強面にナミとノジコが泣いてしまい、それを宥めるのに
少し時間がかかっちゃったわ

「ゲンさん、あんまりナミとノジコに近づいたらダメよ」

「う…だが、その2人はこれからベルメールの家族なのだろう？ だったら…」

ゲンさんは見た目に反してというか、かなり子供好きなのよね

「気持ちは察しますが、少しずつ慣れてもらうしかないのではありませんか？ ゲンさん
シユウがそう言つてフォローするのだけど、やっぱり落ち込んでいるわね

もしかしたら、シユウが最初からゲンさんに物怖じしなかつたから

こうして仲良くなったのかもしれないわね

「さてと、それではこれからどうするかを話し合ひましょうか」

…まだ2歳なのに話を仕切れるものなのね

「そうだな、ではベルメール、海軍を辞めると言っていたが

この子達をどうやって養つていくつもりだ？」

そうゲンさんが問いかけてくるものの、シユウが言葉を挟んでくる

「少し待つていただけですか？ 海軍を辞めるにしても、引き継ぎなどに

どれほどの時間がかかるのでしょうか？」

…シユウは本当に2歳児なのかしら？

「なるほど、確かにその間、ベルメールはココヤシ村を離れることになるか…」

「ええ、ご近所にナミの乳母を頼むとして、期間がどのくらいなのかも

知っておいたほうがいいでしょうからね」

顎に手を当てて考えながら言葉を紡いでいくシユウの様子に

私はどちらが大人なのかと苦笑いをしてしまう

「実はね、もう辞表は出してきているのよ」

私の言葉に、シユウとゲンさんの2人がまた顔を見合わせる

「そういう訳で、今頃は私の上司が色々と手続きや調整をしてくれているわ」

「さすがベルメールさんと言うべきでしょうか、行動が早いですね」

「あつはつはつは！女は度胸ってね」

ウインクをしながらそう告げた私に、シユウとゲンさんは

顔を見合わせてから2人揃ってため息をはいた

…なによ、失礼ね

「そういう訳で、今回の休暇が終わって、一度海軍本部に戻っても

1ヶ月もしたらココヤシ村に帰ってこれるはずよ」

「1ヶ月ですか？随分と早いですね、海軍本部というのは近くにあるのですか？」

顎に手を当てて、首をやや傾けるようにしてシユウが疑問を口にする

賢いと言ってもまだ子供、知らないことも多いみたいね

「海軍の船はちよつと特殊だからね、だからそれだけ早く済むのよ」

船底に海棲石を敷くことで《風の帯（カームベルト）》と呼ばれる海域を

比較的 safely に航行する事ができる海軍の船は、航海日数において最優の性能を發揮する

他にも海賊と海上で戦闘なった際に、そこに逃げ込むことでやり過ぎしたり出来るので非常に優秀な船だ

その事を説明すると、シユウは目を輝かせながら聞いていた子供らしいその反応に思わず笑みが溢れる

「なるほど、機会があれば一度乗ってみたいですね」

「シユウはもう乗ったことがあるわよ」

「えっ？」

私の言葉に目を見開いてシユウが驚く

うん、私も楽しくなってきたわ

「シユウがまだアカリのお腹の中にいる時に、私と一緒に乗ったのよ」

呆然とするシユウにイタズラが成功した気持ちになり、笑いが込み上げてくる

シユウとのやり取りは、ココヤシ村に帰ってきたという気持ちになり

とても暖かく、楽しい時間だった

第23話

「それで、先程ゲンさんが言っていた仕事の件ですが

どうするのですか？ベルメールさん」

あの後、飲み物を取ってきてから一息入れて、ナミとノジコを

寝かせてから話し合いを再開した

まだ子供の2人は船旅で疲れが溜まっていたみたいね

そして、シユウとゲンさん、私の3人で話の続きをする事になった

「そうね、ミカンを育てようと思うわ」

「ミカン…ですか？」

ナミの笑顔に救われた私は、あの子を育てると決めた時に

あの子の髪色と同じミカンを育てようと思いつたのよね

「ゲンさん、ココヤシ村と近隣の村などのミカン農家の数はどのくらいでしょうか？」

「詳しくは知らないが…少なくともははずだな」

「そうですか…そうなるとミカンの供給に不足はなく

単価にはあまり期待できそうにないですね」

シユウのその言葉に私とゲンさんは目を見開いて驚く

今までも賢いと何度も思ってたけどここまでとは思っていなかった

「畑の管理に採取したミカンの販路、商人へミカンを売る際の相場…

やることは多いですね」

顎に手を当て、考えこむその仕草は経験豊富な大人を思わせるものだった

「まずは近くのミカン農家の方に相談してみるのが良いでしょうね。」

どの程度の期間で生活が成り立つようになるのか、初期投資にどのぐらい

必要になるのかなどの目処がほしいですからね」

驚愕を通り越して呆れるようにため息が出てしまう

アカリ…あなた、どんな教育をしたのよ

少し室内を見渡せば、明らかに私の知らない本が幾つも増えている

「ゲンさん、あそこら辺にある本って…アカリが買ったの？」

「…そうだな」

チラッと本の背表紙を見ると、《大海賊時代前後の海賊と経済の変化》や

《有名海賊列伝》とか《東の海における海域と海流》等々

明らかに子供に読ませるような本じゃないものが多数あるのよね

「…ゲンさん、もしかして？」

「アカリがすっかり読み聞かせたからなのか、シユウは理解したみたいだな…」

アカリ…あんだ、シユウを学者にでもするつもりだったの？

「供給が十分ということは…私達が新たにミカン畑を作るのを歓迎しないでしょうか？」

商売敵、ライバルになることになりましたからね…そうすると、なにかしら土産を？」

シユウの考察はまだ続いている…もう、凄いとしか言えないわね

「畑にする土地のこともありますね…そこら辺はアカリママに教えてもらってないので

わかりませんが…と、どうしましたか？ベルメールさん、ゲンさん？」

「なんでもないわよ」

そうやってシユウの頭をガシガシと撫で回す

…まったく、私達大人がすっかりとしないとね

「ゲンさん、近所のミカン農家への挨拶回り、お願いするわね」

「ああ、任せてくれ」

「私はノジコとナミの当面の着替えを買ってくるわ」

そうやって私は席を立つ

「あの…私はどうすれば？」

シユウの問いかけに、私とゲンさんは顔を見合わせて笑った後に答える

「子供が変な気を回すんじゃないわよ、大人に甘えておきなさい」

「ですが…」

「私達は一緒に暮らしていく家族なんでしょう？遠慮するんじゃないの」

「そうだとシユウ、ここはベルメールと私に任せておきなさい」

私とゲンさんの言葉にシユウは目を瞑り、少し考えた後に応えた

「…わかりました。それでは昼寝でもすることにします」

「そうそう、それでいいのよ。私が海軍本部に行くときには家の事を

お願いするから、それまではゆっくりしてなさい」

少し照れたように笑ったシユウは椅子を飛び下り、部屋に歩いていった

「…これでいいわよね、ゲンさん？」

「ああ、シユウのおかげでやるべきことも見えたからな。後は大人の私達の仕事だ」

ゲンさんの言う通りね。さてと、頑張ろうかしら

出掛けようと準備をしていると、なぜかシユウが戻ってきた

「どうしたのよ、シユウ？」

少し困ったような顔をしながらシユウが答えた

「私のベッドがノジコに占領されているのですが…」

「あゝ…一緒に寝たら？」

「私はともかく、ノジコがベッドから落ちたら危ないのではないのでしょうか」

シユウの言葉に、私は買い物リストにベッドを加えることにした



駐在であるゲンさんは顔が広く、ココヤシ村だけでなく近隣の村の

ミカン農家にも挨拶をしていったようだ

ただ、相手方もわかっているのか、新たにミカン畑を作るのは構わないが

協力に関しては否定的だと、戻ってきたゲンさんが項垂れながら言っていた

そこで俺は、農家の次男、三男の独立する際の予行練習としてはと提案した

搾り出した知識の中に家を継ぐのは長男といたものがあつた気がしたからだ

その線でゲンさんが話をしたらトントン拍子に話が進んだ

そして、村社会だからとでも言うのだろうか、その噂は広まり、多くの人が

我が家の庭に集まった：何故か、次男、三男だけでなく農家の娘さん達まで：

要するに畑を継ぐ男がいない農家が婿を見繕いに来たということだ

男衆により開墾されていく我が家の庭で、熾烈な婿取り戦を繰り広げる女衆

若者達の恋模様には暖かい目を向けるゲンさんとベルメールさん

そして、拳を握り見守る農家の方々

前世に比べて娯楽の少ないこの世界では

こういったことも祭りのようになってしまうようだ

賑やかになった我が家の庭であるが、俺はナミのオシメを換えたり

ノジコに簡単な本を読んであげたりして平和に過ごしている

カップルが成立するたびに歓声があがり、どの品種のミカンを育てるかの

議論で大声が飛び交う毎日だが、とても充実しているように感じている

そして日々は過ぎ、畑が完成して、休暇を終えたベルメールさんが

海軍本部に戻る時がきた



「それじゃ、行ってくるわね。ナミとノジコの事をよろしく、シュウ」

「ええ、いつてらっしゃい、ベルメールさん」

いつものように軍服を着たベルメールさんが、荷物を肩に言葉をかけてくる

「ビーフシチュー、美味しかったわよ。帰ってきたら、また作ってよね」

「まだ収入が安定したわけではないので、そうそう作るわけにはいかないのでは？」

ビーフシチューの要であるデミグラスソースを作るには、相応の材料が

必要になるので少々……いや、この世界ではかなり金がかかる

「それもそうね……じゃあ、行き掛けの駄賃に賞金首を2、3人捕まえて

小遣い稼ぎでもしようかしら」

アカリママ直伝のビーフシチューを気に入ってくれたのは嬉しいが

我が家の家長たる自覚をもってほしいものである

「本当に気をつけてくださいね、ベルメールさん」

「大丈夫よ、東の海の子に負けるほど海軍本部の佐官は柔じゃないから」

ウインクをして素晴らしい放つ様は素直に格好いいと思う

「そうだ、言い忘れてたわ」

ベルメールさんは屈んで俺と視線を合わせてきた……なんだろう？

「シユウ、あんたの父親、シヤンクスがあんたを探しに東の海に来ているはずよ」

……え？

ベルメールさんの言葉に呆然としてしまう

「その様子だと全く考えてなかったみたいね」

「ええ……そうですね」

父さんが俺を……？

「実はね、今回ココヤシ村に帰ってくる前に一度会っているのよ」

続けられるベルメールさんの言葉に思考を重ねていくが言葉が出てこない

「その時にアカリの遺言を伝えたから、東の海に来ているはずよ」

遺言…

「アカリママは、父さんにどう言い残したのですか？」

『『ヒントはあげたんだから、後は海賊らしく《宝》は自分で見つけなさい』ね」

なんともアカリママらしい物言いに笑みが溢れる

「シュウ、シャンクスがいつあんたを迎えにくるかはわからないわ

でもね、シュウがどんな答えを選ぼうとも私は応援するわ」

家族としてココヤシ村で暮らすのも、海賊として離れるのも…ということか

「だから、よく考えて、自分の意思で決めなさい。後悔しないようにね」

そう言つて、ベルメールさんはぐしゃぐしゃと俺の頭を撫でてきた

「…わかりました」

「まあ、そう言つても海は広いからねえ。いつになることやら…つてね」

「そうですね」

そして2人の笑い声が辺りに響く

「それじゃ、行つてくるわ。後はよろしくね、シュウ」

「はい、いつてらっしゃい。ベルメールさん」

踵を返し、手を振りながらベルメールさんは出かけていった

父さんが俺を探しにか…全く考えてなかったな

俺の方から探していくものと決めつけていたんだな、気をつけよう

父さんか…どんな人だろう？

ベルメールさんに言われたことで会いたいという気持ちが出てきたが

2歳の俺には待つことしかできない

…うん、家に帰ろう！

今の俺のやるべきことはベルメールさんがいない間、家族を守ることだ

考えるのはそれをやってからにしよう

その後、アカリママの墓に挨拶をしてから、俺は家族の待つ家に走って帰った



「ようやく東の海に入ったか…時間がかかっちゃまったな」

ベルメールと別れてから俺達、赤髪海賊団は東の海を目指したが

シャボンディ諸島でレイリーさんに会ったりと、少し寄り道をしていた

「それでベックマン、シユウを探すとして、どこを東の海の拠点にしたらい？」

「噂では最近、海軍中將の《英雄ガープ》がよく休暇を過ごす場所があるらしい」
以前は《拳骨のガープ》と呼ばれていた男は、ロジャー船長を捕まえた功績で
《英雄ガープ》と呼ばれるようになっていた

本当はロジャー船長が自分から出頭したんだが、海軍が色々と情報操作をして
世間ではそういうことになっている

面白くないところはあるが、ロジャー船長の偉業が消されているわけではないので
レイリーさんを始めとして元ロジャー海賊団のみんなは静観している

「そうすると、そこは避けるべきか？」

「いや、そこを拠点にするべきだ」

…ガープの縄張りを拠点に？

「どういうことだ、ベックマン？」

「どうやらそこは、近海の海賊や貴族なんかも干渉しない中立地帯になっているらしい
ゆつくりと《宝探し》をするには丁度いいだろう」

中立地帯か…

「なるほどな」

「ああ、俺達も《偉大なる航路（グランドライン）》で名が売れてきている。

最弱の海と呼ばれる東の海を荒らさないようにするにはそこを拠点にするほうがい

い

「わかった、で…そこは何処だ？」

「フーシヤ村だ」

俺はロジャー船長から譲り受けた麦わら帽子をかぶり直し、声をあげる

「よし、目指すはフーシヤ村だ！」

「あいよ、船長」

こうして俺達は船をフーシヤ村に向ける

そして、そこが東の海での赤髪海賊団の長年の拠点になるのだった

第24話

あれから4年ほど時間が経ち、俺とノジコは6歳、ナミは4歳になった。ミカン畑の方は、作るのを手伝ってくれた若者達がたまに見にきてくれる。どうやら自分達が手掛けた畑が気になるようだ。

そして、この4年で変わったところは、ゲンさんが帽子に風車をつけたことだ。子供好きのゲンさんは何度も赤ん坊のナミを構おうとするが

その度にナミに泣かれてしまっていた

それでも諦められなかったゲンさんは何故か帽子に風車をつけてきた

そんな子供騙しと思っていたのだが、ナミはゲンさんを見て笑っていた。思わず俺とベルメールさんは顔を見合わせていたが

ゲンさんは物凄く喜んでいた

それからは風車がゲンさんのトレードマークになり、近隣の村でも

《強面だけど愉快な駐在さん》と認識されて子供達の人気者になった

ノジコは女の子らしい女の子の子と言えればいいのだろうか…

女は度胸とでも言うような男勝りなベルメールさんの影響を多大に受けているので

オシャレなどに気をつかう女の子らしさもあるが非常に活発でもある
ベルメールさんは以前とは変わってニュース・クーと呼ばれるカモメが
持つてくる新聞を読むようになった

東の海の海賊被害や天候不順などの情報などから我が家の作物である
ミカンの相場変動を予測して商人と交渉するためだ

ミカン農家としてはまだまだ駆け出しだが、商人との交渉の際は
ココヤシ村の農家の元締め的な感じで商人とやりあっている

この光景はある種のココヤシ村の風物詩となっている

ナミは非常に好奇心旺盛な女の子だ

特に天候や海域、海流などに興味を持ち、それらの本を熟読している

そして、それらについてよく俺とベルメールさんに質問をしてきて困らせてくる
ベルメールさんは海軍時代の経験から、海域ごとの海流の特徴などを教えている
俺は前世のなけなしの知識を搾り尽くして、雨などのメカニズムを

簡単にだが説明をしている

気圧のことなんか簡単に説明したのだが、俺自身が前世の

高等学校レベルの知識を赤点ギリギリ程度しか持っていないため

これ以上は詳しく説明できなかつた

だが、ベルメールさんは俺が披露した知識は学者ぐらいしか知らないと言ってそれを聞いたナミが目を輝かせていた

アカリママはまだ俺が赤ん坊のころに雨が降ってきた時に、なんで雨が降るのかをニコニコと笑いながら説明してくれたので、俺はそれがこの世界の一般常識だと思っていたのだが、どうやら違つたらしい

それからはナミが俺によく質問攻めしてくるので非常に困っているただ、困っているのは質問そのものではなく、それをしてくる際に誰かさんの教育のせいで色仕掛けをしてくることだ

まあ、これはナミだけでなくノジコも近所の少年達にやつてよく商人から何かを買わせているのだが……

2人が色仕掛けをするのを見かける度にベルメールさんをジト目で睨むのだが当の本人は笑つて見守るばかりだ

ベルメールさん曰く、《いい女は強かなもの》だそうだ

まあ、ナミとノジコは可愛いのでおねだりされるのは嫌じやない

むしろ大歓迎なのだが、将来が心配になるのは老婆心なのだろうか？

赤ん坊のころからオシメを換えたりして、ナミと一番接してきたからなのか俺がナミと一番仲がいいと思う

俺が鍛練に行く時に、ナミはいつもついてくるのだ

鍛練の合間に、ナミとよく話をしているのだが、それがいい気分転換になり
また頑張ろうと鍛練にもさらに身が入るようになった

そして俺は、一年ほど前から漁をするようになった

ミカン畑は幾つかは分木をしてもらい、翌年から収穫できるようになったが
家族4人が暮らしていく分にはどうしても足りない

なので、ベルメールさんの海軍時代の蓄えや、アカリママが残してくれた
少しばかりの金銭でやりくりしなげばならない

ベルメールさんはアカリママが残したものは俺のだからと使わず

家計簿を見て頭を悩ませていた

そこで、少しでも食費の足しにしようと思い、やりだしたのが漁というわけだ
まだ、5歳だった俺が漁するのは危ないと反対されたが

そこは中身は元三十路オーバーの大人である俺なので口八丁で説得

ココヤシ村の漁師のご隠居監督の下、漁師の子供達の泳ぎの練習として
俺の素潜り漁に付き合わせることにしたのだ

漁師の子供としては泳げないと、ということ、この集いは歓迎されて
定期的に催されることになった

ご隠居の監修の下、潮の満ち引きが緩やかな入り江でその集いは行われることになり早一年

今日も家の手伝いを終えた俺は、いつも通りに漁に向かうのだった



「それではいつてきます、ベルメールさん」

「いつてらっしゃい、シユウ。わかっているとと思うけど、気をつけなさいよ」

煙草を銜えて軍手をしたベルメールさんがいつものように俺を見送る

「来年には収穫も増えるからミカン畑だけで貯えもしていけると思うけど」

ナミとノジコが、シユウの獲ってくる魚に期待しちゃってるからねえ」

苦笑いをしながらそう話すベルメールさんだが、水臭いというものだ

「体を鍛えるのにも素潜り漁は丁度いいですからね。気にしないでください」

ベルメールさんは元海軍ということで、戦いにも慣れているのだが

いつか海に出るために俺にそれを教えてほしいというのと、

まだ体が出来上がってないからダメと言われた

そんなこともあり、こうして生活の助けにもなる鍛練方法をとっているのだ

「ところで、シユウはシャンクスが迎えにきたらどうするのよ?」

「あれから4年ですか…本当に来るのでしょうか?」

俺の父さんが東の海に來ていると4年前に告げられたが、まだココヤシ村には來ていない

「《海賊王》ほどの大物でも世界を回るのに3年かかったからねえ…」

まだ時間がかかっても仕方ないんじゃないかしら」

世界一周の大偉業はいまだゴール・D・ロジャー以外には成し遂げられていない
それを考えれば、この東の海でも時間がかかるのは仕方ないのだろう

「それもそうですね」

「シユウ、漁に行くの?わたしも行く!」

本を読んでいたナミがこちらに気づき、ついてくると声をあげた

「わかりました。では、日射病にならないように帽子を持ってきてください」

「うん!」

元気よく返事をして走っていく後ろ姿を見て笑みが溢れる

「シユウ、まだ答えを聞いてないわよ」

「…その時がきたら、答えますよ」

父さんには、今まで一度も会ったことがない

だから、父さんと一緒に行くという答えがどうしても出てこないのだ
だが、会ってみたらどう感情が変化するのかわからないので
今もその答えを保留にしている

「シュウ、お待たせ！」

「では、行きましょうか、ナミ」

ナミが自然に俺の手を取って走り出す

この日常がいつまでも続いてほしいという思いと
父さんに会ってみたいという思いが入り混じる

「わたし、昨日の魚が食べたい！」

「やれやれ、わかりましたよ、ナミ」

どうするのか答えは出ていないが、今はこのお姫様の願いを叶えようか
ナミに遅れぬように並んで走る

初夏の日射しがミカン畑を鮮やかに照らし出す暖かい日だった



「はあく……今回も空振りだったか」

フリーシャ村を拠点としてシユウを探すようになってから4年

今だに息子を見つけることは出来ていない

「もう少し滞在日数を延ばすか？ シャンクス」

「…やめておこうベックマン、東の海を荒らすわけにはいかないだろう？」

一味のみんなを食わせるには相応に稼がなければならぬが

この4年でまた大きくなった俺達がグランドライン以外で海賊として動けば
それなりに騒ぎになるだろう

そのため、グランドラインで稼いでからフリーシャ村に滞在するのだが

それでも、およそ1ヶ月ぐらいが限度だ

それ以上は近海の海軍支部なども動きだす可能性もあるし

仲間のヤソップの故郷であるシロップ村に寄って、あいつの

息子に会わせてやらなくちゃならない

どうやらヤソップの嫁さんは身体が丈夫じゃないようだからな

「仕方ない、出航準備だベックマン。3日後には出るぞ」

「あいよ、船長」

「おおい、シャンクス！俺も海に連れていけ——！」

また来たか…

今回のフーシャ村滞在で出会った少年《ルフィ》がこちらに走ってきた

「さて、それじゃ出航準備をしてくる。ルフィの相手は任せませ、シャンクス」

「おいベックマン、それはないだろう？」

「船に乗せろって言ってるんだ。なら、船長の仕事だろう」

そう言つてベックマンは煙草を吸いながら、そそくさと離れていった

…薄情な奴め

「おい、シャンクス！俺も連れてけ——！」

満面の笑みでルフィが俺の前に来る

ベックマンにはああ言ったが、さて、どうやってからかってやろうか…

これがフーシャ村で出会った子供《モンキー・D・ルフィ》との

長い付き合いの始まりだった

第25話

3年ほど時間は過ぎ、俺とノジコは9歳に、ナミは7歳になった

あれから、まだ父さんはココヤシ村に来てはいない

だが、ニュース・クーが持つてくる新聞ではグランドラインで

活躍しているのをよく見かけている

つい先日、《鷹の目》と呼ばれている剣士との決闘の事が

新聞にデカデカと書かれていたのだ

この新聞には父さんの作った赤髪海賊団は年に2カ月ほどグランドラインで

活動しない時期があると書いているが、ベルメールさんがこの時期に

俺を探しているのだろうと以前に言っていたのを覚えている

船長である以上は一味の者を食べさせる義務がある

なので1年中、俺を探すわけにはいかないのです、これだけ時間がかかっているらしい

ただ、俺の名前がココヤシ村を始めとして、近隣の村でも知られるように

なってきたので、そう遠くないうちにその噂を聞いて迎えにくるのではと

ベルメールさんが言っている

俺の名前がと疑問に思ったものだが、なんでも《天才》として知られているらしい何を大袈裟など言ったのだが、2歳の時のやり取りなどが伝わったらしくそのように認識されてしまっているらしい

正直なところ頭を抱えたい思いだが、ナミを始めとして家族が喜んでくれているのでそれでよしとした

話は変わるが、最近、ナミがオシャレに気をつかうようになった

以前から服などにも興味を持っていたのだがここ最近はさらにといった感じだこの時期、ノジコの身体の成長に伴い服を買う機会が多く

代わりにノジコの服のお下がりをナミが貰うといった事が続いていたその事にナミが不満を言うようになったのだ

我が家の収穫は増え、俺も商人に干した魚などを売るようにしてからそれなりに貯えを作れたりして生活に余裕が出来てきたが

それでも、裕福というわけではない

なので節約できるところは節約しているのだが、やはりナミも女の子なのでオシャレがしたいのか駄々をこねることが増えてきた

そんなナミに俺とベルメールさんでサブライズを用意していたある日

ナミの感情がついに爆発してしまった

◆ 「なんでノジコにばっかり新しい服を買うの！」

ナミの誕生日プレゼントとして新しい服を用意していたのだが

そうとは知らないナミが、新しい服を着てはしゃいでいるノジコを見て怒ってしまった

「ここ2年ほどはお下がりがばかりなので大分、ご立腹のようだ

「あゝ…ナミ?」

サプライズとして服をプレゼントして驚かせたいと言っていたせいか

服の事を言えずにベルメールさんは歯切れの悪い言葉を溢す

「やっぱり、わたしの血が繋がってないから? 本当の子じゃないから!」

ナミのその言葉に驚き目を見開いた後、悲しそうな顔をするベルメールさん

それを見たナミは言い過ぎたと思ったのか、顔を俯かせていたが

涙を流しながら外に走って行ってしまった

「…はあゝ」

ベルメールさんがため息を吐き、かなり落ち込んでいる様子を見せている

「私はナミを追いかけますが、大丈夫ですか、ベルメールさん？」
「…あく、うん、よろしくね、シユウ」

この頑張ってきた7年を否定されたように感じているのかもしれないな

「1時間ほど、外でナミとゆっくりしてこようと思います」

「…わかったわ。ところでシユウ、あんたはどう思ってる？」

…改めて口にしようとすると、かなり照れ臭いな

「ナミも、ノジコも、そしてベルメールさんも家族だと思ってますよ」

「…そうか、うん、そうか！」

ベルメールさんに笑顔が戻ってきた…もう一息というところだろう

「ですが、ママの呼称はアカリママだけのものなので、私がベルメールさんを呼ぶのならば《母さん》と呼ばせていただきますよ」

「え？」

顔をあげてこちらを見てきたベルメールさんの目を見て話す

「なので、早く立ち直ってくださいね。ベルメール母さん」

その一言を言い残し、俺は走り出す

「あ、ちよつと、シユウ！」

ベルメールさんが呼び止めてくるが構わず走り続ける

俺だって恥ずかしいんだ！後は知らん！

俺はナミが行ったであろう場所を予想しながらその場所へと走り続けた



ベルメール母さん…ね

シユウの一言が何度も頭の中で繰り返され、その度に顔が綻んでしまう

昔、アカリがなんであんなに喜んでいたのかわからなかったけど

今ならわかる、これは凄く嬉しい

ナミの言葉で少し、いえ、もの凄く凹んだけど我ながら現金なものね

「ベルメールさん、どうしたの？」

新しい服で着飾ったノジコが話し掛けてきた

「なんでもないわよ」

「ふくん、そう？その割には顔がニヤけているんだけど、ベルメール母さん？」

…わかっているんなら、放っておいてよ

全く、誰に似たのか、ノジコは時折こうして人をからかって楽しむ癖があるのよね

「新しい服を喜んでくれるのは嬉しいけど、今度からはあまりはしやぎ過ぎないように

ね」

「は〜い」

反省の色が見えない返事に苦笑いをするしかない：強かに育ったものだわ

「プレゼント、喜んでくれるといいわね」

「ノジコ、ばらしちゃダメよ」

「わかつているわよ、ナミが驚く顔を見たいもの」

本当に：強かでない性格になったものだわ

「さて、それじゃ着替えてきなさい。畑の世話を手伝ってもらおうから」

「ええ〜…」

残念そうに言うものの素直に着替えに行つたノジコを見送り、私は自分の顔を両手で張る

「よし！気合い入つた！」

煙草をくわえ、軍手を着ける

これがこの7年で慣れたしんだ私のスタイルだ

「ベルメールさん、お待たせ〜」

汚れてもいい古い服に着替えたノジコが声をかけてきた

「それじゃ、シユウとナミが戻ってくるまで草むしりでもしましょうか」

「はあく、2人だけデートとかいい身分よね」

「あつはつはつは！そうね、後でそのことからかかってやろうかしら」

「ベルメールさん、それ、いいわね！」

血の繋がりはないが私の娘であるノジコと一緒に、いつも通りに畑の世話をしていく
シュウ、もう1人の娘、ナミをよろしくね

私はここで待つわ

あんた達が帰ってくる、私達の家で

第26話

「やはり、ここにいましたか」

わたしの2歳年上の男の子、シユウがわたしを追いかけてきた

「…なんでわかったの？」

「いつも一緒にいますからね。ある程度ですが、予想はできますよ」

ベルメールさんにひどいことを言ってしまったわたしは

感情がごちゃごちゃになってしまい、泣きながら家を出てしまった

どこに行こうとか考えてなかったのに、シユウにはお見通しだったみたい

「…わたし、ベルメールさんに酷いことを言っちゃった」

「そうですね」

わたしの隣に座りながら、シユウは頷いていた

「シユウ、どうしたらいい？」

「ナミはどうしたいのですか？」

わたしが聞いたのに逆に聞き返された…

「…ベルメールさんに謝りたい」

「では、そうすればいいでしょう」

そんな簡単に言わないでよ…

「ここに来る前に、ベルメールさんには少しゆっくりしてくと伝えました

なので、ナミが気持ち落ち着かせる時間はありますよ」

…どこまでお見通しなんだろう

シユウとはずつと一緒にいる。わたしに物心がつく前から一緒に

わたし達の家には本がいっぱいある。わたしもノジコも

シユウに本を読んでもらって文字や難しい言葉を覚えた

シユウはノジコと同じ年なのに色んな事を知っている

大人のベルメールさんやゲンさんよりもいっぱい色んなことを知っている

だからなのかココヤシ村の人達はシユウの事を《天才》って言っている

そして、シユウは凄く落ち着いていて大人みたいな男の子だ

ココヤシ村や近くの村にいる年の近い男の子達とは全然違う

スカートを捲ろうとしたり、虫を持って見せびらかしたりしてこない

それで嫌がる女の子を見つけると、優しく男の子を注意したりしている

そのせいなのか、シユウは村の女の子達に人気がある

大人っぽくて格好良いって、女の子達がよく口にしてている

わたしも家族としての鼻目無しに見ても格好良いと思う

波打つ紫の髪に整った顔立ち、落ち着いた物腰と優しい性格

それに漁をして魚を取ってくれたり、畑仕事や家事なんかも率先してやってくれる
そんな自慢の家族なのがシユウよ

「どうしました、ナミ?」

「え? なんでもないわ」

少し考え事をしていたらシユウの顔を見てポーっとしていた。気をつけないと
「風が気持ちいいですね。今日は雨の心配はなさそうですか、ナミ?」

「…うん、大丈夫よ」

目を閉じて風を感じ、わたしはシユウに返事をした

いつの日だったか、わたしは何となくだけで天気を感じられるようになった

言葉にはできないけれど、空気が乾いているとか重いかかがわかるのよ

シユウが昔、どうして雨が降るのかとかを教えてくれたから

一時期、ずっと空を見ていた時があった

そうやってずっと見ていたら、ふと、雨が降るって予感がして

洗濯物をしまったほうがいとベルメールさんに言ったことがある

空は雲一つない青空だったから信じてくれなかったけど

シユウがまた干せばいいと言って取り込んでくれた

洗濯物を取り込み終わって30分も経つと空模様が急に変わって雨が降ってきた
ベルメールさんは吃驚して、ノジコは偶然だと言っていたけど

シユウは頭を撫でて誉めてくれた

それが嬉しくて、それからはずっと天気を見るようにしている

他にもシユウは、わたしが海図に興味を持って、世界中の海図を

自分の目で見たいと言ったからすぐに応援してくれた

このわたしの夢はシユウだけじゃなくて、ベルメールさんも

ノジコも応援してくれたのが凄く嬉しかった

それからは、シユウが漁で獲った魚を商人の人に売ったお金で

ペンや紙をわたしにプレゼントしてくれる時がある

それだけじゃない、毎年わたしやノジコ、ベルメールさんの誕生日に

そのお金でビーフシチューを作ってくれる

それが凄く美味しいの

…思い出したら食べたくなっちゃった

「さて、そろそろ帰りましょうか、ナミ」

「うん」

そう言つて、先に立ち上がったシユウはわたしに手を差し出してくれた
3年前は意識せずに取つていた手、そして今は意識して取つている手
シユウと手を繋いでいると嬉しくて、暖かくて、少し胸がドキドキする
これが何なのかわからなくてベルメールさんに聞いてみたんだけど
なんかニヤニヤして教えてくれなかった

そして、何処かで聞いていたノジコがそのことをベルメールさんと
一緒にからかつてくるようになった

よくわからないけど恥ずかしいのでやめて欲しい
でも、シユウと手を繋ぐのをやめるつもりはない

村の女の子達が羨ましそうに見ていることがあるけど譲るつもりはない

「シユウ」

「どうしました、ナミン？」

この気持ちがあるのかまだわからないけど、精一杯の気持ちを込めて言おう
「ありがとう、シユウ」

目を見開いて驚いているシユウの手を曳いて家に帰る

暖かい風が気持ちいい日

ベッドもお日様の匂いがして今日はよく眠れそうね

その後、家に帰ったわたしはベルメールさんに酷いことを言ったことを謝ったでも仕返しなのか、シユウと手を繋いで帰ったこととかをからかわれて凄く恥ずかしかった



『ありがとう、シユウ』

ナミの一言とその時の笑顔が頭から離れない

太陽のように明るい笑顔

赤ん坊の頃から見せてくれていた笑顔、あの頃よりも魅力的に感じる笑顔

胸がドキドキしている：多分、顔も赤くなっているかもしれない

前世では一度も経験したことのないものだが、それでもこれが何なのかは察しがつく家族として守ろうと思っていた女の子、妹のように思っていた女の子

いいのか？俺は元は三十路過ぎの大人だぞ？

そんな葛藤が1年前から続いている：答えは出ていない

転生前には確かに恋人が欲しいと思った。それがナミのように可愛い女の子なら最

高だ

だが…

考えはずつと堂々巡りだ

俺は視線を下げて繋いでいる手を見る

ナミが無邪気に手を繋ぎ俺を引つ張っている

「シュウ！わたし、ビーフシチューが食べたい！」

ナミの言葉に心が落ちつく

「ナミの誕生日に、また作りますよ」

「え、シュウのケチ」

ナミが文句を言っているが、その顔は笑顔だ

胸のドキドキは止まらない、答えは出ない

でも…もう少し、このままで…



「うわあ——！腕が伸びた——！！」

俺はルフィのその声に振り向いて驚く

「おいルフィ！お前、こんな形の実を食ったか?！」

「ああ、デザートで食った。不味かったけどな」

俺はルフィの言葉に頭を抱える

一味の仲間であるラッキー・ルウがルフィに悪魔の実の能力者のデメリットを話している

泳げなくなったとわかったルフィは叫んでいた

ルフィ：…こつちが叫びたい気分だぜ…

「シャンクス、どうする？」

「ベックマンか…食っちゃまったもんはしょうがないだろう？」

シユウを探してもう7年になる

これだけ時間をかけてしまった以上、息子に手土産の1つでもと

グランドラインで悪魔の実を手に入れていたのだが

今回、フーシャ村で情報集めをしながら酒場で飲んでいたらルフィに食われてしまった

「それで、そつちはどうだった。ベックマン」

「ああ、目星はついた…ココヤシ村だ」

この7年で初めて具体的に村の名が出た

「ココヤシ村？」

「ああ、その村では《天才》と呼ばれている少年がいる。7年前の当時2歳だった時に大人顔負けの知識を披露していたらしい」

7年前に2歳……シユウと同じ年齢だ

「その少年の特徴は波打つ紫の髪らしいな……そして、その少年の名前はシユウだ」
アカリと同じ髪に息子と同じ名前……

「ベックマン！」

「ああ、今回は当たりだろう」

やっと見つけた！

「よし！今日は俺の奢りだ！飲むぞお前ら！」

「「宴だ——！！」」

俺は小樽型の杯に注がれているエールを一息で空ける

うまい！

今日のエールは一段とうまい！いくらでも飲めそうだ！

「それで、どうするんだ？シャンクス」

「……そうだな、迎えに行くのは来年にしよう」

「いいのか？」

驚いたようにベックマンが尋ねてくる

「シユウへの手土産はルフィに食われちゃったし、シユウを育ててくれた相手にも礼をしなくちゃならない。さすがに手ぶらというわけにはいかないだろう?」

「: シャンクスがそれでいいのなら構わない。なら、グランドラインでしつかりと稼がないとな」

そう言つてベックマンも杯を空ける

そうだ! こんな目出度い日には飲むのが海賊だ!

「なあシャンクス、また近い内に海に出るんだろ? 俺も連れてけ!」

いつものようにルフィが絡んでくる

ナイフで自分の頬を刺したりと色々と退屈しない奴だ

「はにふるんだー(なにするんだー)」

ルフィの怪我をしていないほうの頬を引っ張つてみるとゴムのように伸びる

「はっはっはっは!」

ああ、愉快だ! 最高の1日だ!

俺はまた杯を空ける

シユウよ、俺の《宝》よ! 待ってるよ!

第27話

あれから1年経ち、俺とノジコは10歳、ナミは8歳になった

畑の収穫、漁の成果も順調で少しづつ貯えはできている

そして、あの一件から俺達は家族として更に仲が良くなった

ナミも本を読み、海図を描く練習をするだけでなく、畑の手伝いもするようになった
服に関しては誕生日にプレゼントしたものを大事にしているが

お下がりの服を着合わせたりして、ノジコと一緒にオシャレを楽しんでいる

今日は畑の世話や漁も終わり、時間があつたので走り込みでもしようかと思つたが
ベルメールさんに呼ばれ、裏庭に顔を出したのだった



「お待たせしました、ベルメールさん」

裏庭に行つてみると、ベルメールさんがいつもの畑の世話をするときの格好ではなく
8年前に着ていた海軍の服で俺を待っていた

「女を待たせるものじゃないわよ、シユウ」

「申し訳ありません、ですが、その格好は？」

予想はできるが確実ではないので、あまり期待はしないでおく

「シユウに幾つか私の技を見せようと思ってね、気合いを入れる為に着替えたのよ」
「教えてくれるのではなく、見せる…ですか？」

「そうよ」

残念に思っていると、ナミとノジコも裏庭にやってきた

「シユウに教えてあげたいのだけど、私自身が誰かに教わった訳じゃなくて
見て覚えたからね。感覚的なことしか教えられないのよ」

昔、アカリママがベルメールさんの事を天才と言っていたけど

どうやら本当のことらしい

「それに、8年もブランクがあるからね…どこまで出来るかわからないのよ」
なるほど、確かにそれは仕方ないな

「それじゃ、向こうでナミ、ノジコと一緒に見ていなさい

母さんの格好良いところをみせてあげるから」

ベルメールさんがウインクをしながらそう告げてきた

「頑張れ、ベルメールさん！」

「無理しないでね、ベルメールさん！」

「期待していますよ、ベルメールさん」

ナミ、ノジコ、俺の順番でベルメールさんを応援する

「ちよつと、誰か一人ぐらい母さんと呼んでくれてもいいんじゃない？」

苦笑いしながら言ってくるが、屈伸運動などをして準備をしている

「それじゃ、いくわよ！《荊（ソル）》！」

その言葉と共にベルメールさんの姿が消えた

「後ろよ、後ろ♪」

なんと、いつの間にかベルメールさんが俺達の後ろに回り込んでいた

「すくすくいー！」

異口同音にナミとノジコが、ベルメールさんを賞賛する

「凄いですね…《荊》と言っていましたけど、どういった技なのですか？」

「そうね、簡単に言えば、一瞬で何度も地面を踏んで加速する移動方法ってところかしら」

「…はい？」

「…は？」

「…よくわからないのですが」

「うーん…走ったりする時も地面を蹴るでしょう？だから、それを一瞬で何度も

するのがこの《六式（ろくしき）》と呼ばれる超人的体術の《剃》よ

もうほとんど無い前世の記憶から《脳筋》の言葉が頭に浮かんだ

「そうですか…」

「海軍本部には六式を使える人が結構いるわよ。それに、グランドラインにいる海賊なら

見様見真似で六式を使えるようになる天才や化物もいるでしょうね」

…とんでもない世界だな

「だから、焦らずにじっくりと鍛えなさい。シユウが海に出るつもりならね」

「はい」

ベルメールさんの注告に素直に頷く

「よし…それじゃ、もう少しいいところを見せてようかしらー!」

その後は、空中を一步踏みしめて、文字通りに空中を駆ける《月歩（ゲツポウ）》と武装色の覇気を見せてもらった

ベルメールさん曰く、月歩は不完全で利き足で一步が限界で、本来なら

自在に空中を駆けるものらしい

武装色の覇気を纏ったベルメールさんの拳が黒く変色したことに驚いたが

今はそれが精一杯のようだ

これらを自在に扱う天才や化物がウジャウジャしているのがグランドラインなのか
…

改めて思うがとんでもない世界に転生したものだ…

俺の心は不安が半分、そして期待が半分というところだ

ベルメールさんの言う通りに焦らずに鍛えよう

アカリママとの約束を果たすために、世界を俺自身の目で見るために…



「シャンクス…腕がつ！」

「なに、安いものさ。友達を助けるためならな」

山賊に連れ去られ、フーシャ村の近海の主である海王類に食われかけていた

ルフイを助けたのだが、その代償として利き腕である左腕を食われた

事の経緯としては、今年、シユウを迎えにくくために一度、東の海の

拠点であるフーシャ村で休んでいたところ、付近を根城にしている山賊に

絡まれたのが発端だ

奴らは何度も俺達に喧嘩を売ってきたが、長年世話になっっているフーシャ村に

迷惑をかけるわけにもいかないので笑って済ませていた

もつとも、グランドラインで動いている俺達にしてみれば、少しはしゃいでいる小者なので

喧嘩を売ってきてても微笑ましい程度のものだった

だが、奴らは俺の友達であるルフィに手をあげた

ロジャー船長の麦わら帽子と共に継いだ俺の信念として見過ごすことはできなかつた

それからは一方的だった、何だかんだでルフィのことを気に入っていたベックマンが

山賊を一蹴してしまい、あつという間に決着だ

だが、山賊の頭領がしぶとく、ルフィを人質に小舟で海に逃げた

海賊相手に海に逃げてどうするんだと思つたが、ルフィが能力者だと考えれば

悪くない選択だったかもしれない

だが、山賊の頭領の悪運はそこで尽きた

近海の主に小舟ごと食われたのだ

そして、俺はルフィをかばい、近海の主を霸王色の覇気で威嚇して撃退し今に至る

「泣くなルフィ、助かってよかつたじゃねえか」

俺は足で泳ぎ、陸に寄っていきながらルフィに話しかけるが泣き止む気配は無い

「シャンクス！」

どうしたものかと悩んでいたところ、どうやらベックマンが来てくれたようだ
「おう、ベックマン！ルフィを引き上げてくれ！」

俺の状態を見て目を見開いたが、そのことを声に出さずにベックマンは
ルフィを引き上げてくれた



「大丈夫か、シャンクス」

引き上げたルフィを酒場の店主であるマキノに預けた後にベックマンが問いかけて
きた

「とりあえずはな」

「そうか…船医が今、針と糸を準備している。それまではそのまま止血をしておけ」
騒動と共に俺の気も落ち着いたからなのか、失った左腕の傷がズキズキと痛む

だが、その痛みはすぐに暖かさに包まれ無くなった

「おい、シャンクス！」

ベックマンの目線を追い左腕を見ると、淡く黄金色に輝いていた

「…アカリ」

アカリの名を呟き呆然としていると光が収まり、左腕が元に戻っていた

「なあ、ベックマン」

俺は空を見上げ言葉が続ける

「アカリは…本当に、いい女だな」

左腕を使い、麦わら帽子で顔を隠す…少しの間、誰にも顔を見られないように…



「また会おうな！ シャンクス——！」

悪魔の実を食い、ゴム人間になっていたルフィの怪我は軽く、心配がなかったので

俺達はすぐに出航準備に取り掛かった

そして、ロジャー船長から継いだ麦わら帽子をルフィに預け、俺達はフリーシャ村を出

航した

「ルフィは大物になるぞ、シャンクス」

「ああ、そうだな」

ルフィはどこか昔の俺に似たところがあるように感じる

だからというわけではないが、ルフィは大きな男になるような気がする
「さあ行くぞお前ら！目指すはココヤシ村だ！」

東の海の海原を船は進んで行く

シユウ、待たせたな！今行くからな！



ココヤシ村の沖合に複数の人影が在る

その泳ぎの速さは魚をも超えるものだ

人影はどんどん近づき、勢いのままに水面から陸へと飛び上がった

「シャハハハハ！」

平和なココヤシ村に危機が迫っていた

第28話

「なんだ！お前たちは?!」

私が駐在として村を見回っていると、見知らぬ者達がココヤシ村に入つて来た

「シヤハハハハ！俺達は魚人海賊団・アーロン一味だ！下等な種族の

貴様等を俺達魚人が支配してやる！光榮に思うんだな！」

「ふざけるな！」

平和に過ごしていたココヤシ村にいきなりやってきて何を言うか！

「シヤハハハハ！」

鼻がギザギザした大男が村の中へと歩き出した

「行かせん！」

私が大男の前に立ち塞がると、腕にヒレのようなものが付いた男が出てきた

「エイッ！」

ボガッ！

その男の拳による一撃で私は吹き飛ばされる

「シヤハハハハ！」

魚人の大男の笑い声が響き渡る

私はココヤシ村の平和の為に、歯を食いしばって立ち上がった



「…？誰かしら？」

見知らぬ男達がこちらに向かって歩いてくる

男達の特徴的な肌や体の部位に海軍時代の記憶が頭に浮かんだ

「もしかして魚人？なんでココヤシ村に？」

その魚人達の1人が誰かを引きずっていた

「…!?ゲンさん！」

私の言葉の後に、魚人がゲンさんをこちらに向かって放り投げた

「ゲンさん！大丈夫？」

「…ベルメール」

一見したところ命に関わるような怪我は見当たらない

私が安堵していたら、魚人が話しかけてきた

「女あ、税として子供5万ベリー、大人15万ベリーを納めろ！」

「あんた達、何者？」

私は魚人達を睨む

「俺達は魚人海賊団・アールン一味だ！ 下等な種族の貴様等を支配してやる！

命の保証として俺達に税を納めろ！」

「税を納めさせてから始末する…何てことはしないわよね？」

「下等な人間共と一緒にするな！ だが、俺達に逆らえばその限りじゃねえ」

侮辱されたつて顔をしているわね…取り敢えずは信じてよさそうだわ

「わかったわ、子供5万ベリー、大人15万ベリーね？」

そう言つて、私は家に入つていった

家の中には子供達が揃つていた

「シユウ、ノジコ、ナミ、あんた達は畑に隠れてなさい。万が一があるからね」

そう言い付けて私は部屋へと向かう

横目で子供達を見ると、シユウが2人を先導して表から見えない窓から畑に向かつた

「シユウ、後はお願ひね」

私は部屋から貯えと、隠していたライフルを取り出す

「シユウに教えるかもつて、整備しておいてよかつたわね」

正面からは見えないように背中にライフルを隠す

そして外に向かおうとすると膝が笑っていた

「…しっかりしなさい、母親でしょ！」

私は両手で頬を張り心を奮い立たせる

「さて、行きますか！」

私は胸を張り魚人達のところへ向かった



「持ってきたわ、確認して」

「そうか…ハチ！」

ギザギザした鼻の男がハチと呼んだ、タコらしき魚人がお金を確認していく

「にゆく、アーロンさん、15万ベリーあるよ」

「よし、女、テメエの命は保証しよう」

アーロンの言葉にゲンさんがホッと息を吐いている

「勘違いしてもらったら困るわ」

「…なに？」

私は不敵に笑い、話を続ける

「そのお金は私の子供達3人の分で、私の分じゃないわ」

「ベルメール！何を言っている！」

ゲンさんが目を見開き、私の言葉を止めようとしてくる

「ごめんゲンさん、私は母親なのよ。だから、あの子達を自分の子じゃないって言えないわ」

私は笑顔でゲンさんに告げる

こうして言葉にしてみたなら、改めて覚悟ができた

「女あ…死にたいのか？」

「そんなわけないじゃない…ところで、さっきアーンって呼ばれていたけど

あんたが一味の頭（カシラ）なのかしら？」

「それがどうした？」

私は背中中のライフルを引き抜きながら宣言する

「私の分の税は払わない、でも死ぬつもりもないわ。だから、抗わせてもらおうわよ！」

肩にライフルを乗せ、不敵に笑う

アーンがこちらに一步踏み込んできた瞬間

私は《薙》を使い一気に間合いを詰め、アーンの口に

ライフルの銃口を突っ込み地面に押し倒した

「さて、大人しくココヤシ村を出ていってくれるかしら？」

アーンンの目の色が変わる

まるで海王類のような目だ

その瞬間、私の背に寒気が走る

私は咄嗟にライフルに武装色の覇気を纏わせた

ガキン!!

アーンンがライフルを噛み砕こうとしていた…危なかつたわ

だが、その一瞬の間を利用してアーンンが右手を横薙ぎに振ってくる

私はライフルを支点にして体を横に倒す

バキッ!

ライフルに噛みついていたアーンンの歯が、槌子の原理で折れた

「どうやら自慢の歯は折れちゃったみたいね」

尖った歯が総入れ歯のようにライフルの銃身にくっついてた

「それがどうした？」

全て失った筈のアーンンの歯が生えてきていた

「歯なんぞいくらでも生えてくる。サメなんぞな

もつとも、下等な人間には真似できんだろうがな！」

…やれやれ、一筋縄じゃいかないみたいね

「あら、せっかくだいいい男にしてあげたのに、残念ね」

「シャハハハハ！」

笑いを収め、アーロンが私を睨み付けてくる

私はライフルを振るって、ライフルについていたアーロンの歯を落とす

…わずかにだけど、曲がったみたいね

銃身を握った手に伝わる違和感に、長年の相棒の異変を感じ取る

魚人の咬合力に、背中に冷や汗が伝わる

少しの間、無言で睨み合い、私とアーロンは同時に踏み込んだ

第29話

ベルメールさんとアーンという名の海賊が戦っている

俺は戦いは素人なので詳しくはわからないが、一見したところ

速さのベルメールさんに、力のアーンの勝負といったところだ

ベルメールさんはライフルの銃身を握り、打撃武器として使ってアーンと戦っている

ライフルを見たところ、マガジン…だったかな？弾を集めておく部分が見当たらないので

火縄銃のように単発式の銃なのかもしれない

前世でミリタリー系の知識も勉強しておけばよかったと思うが後の祭りだ

対してアーンは、素手で戦っている

戦闘スタイル…とでも言えはいいのだろうか？アーンの戦い方は喧嘩のように見える

一撃が豪快なのだ

その一撃を振るうごとに、畑に隠れている俺達のところまで風の音が聞こえるのだか

ら

アーロンの拳の威力はどれほどなのか恐ろしいものがある

現状を見る限り、ベルメールさんが優勢に見えるが決定打に欠ける

最初の押し倒した時に引き金を引いていれればと思うが：

：もしかして、俺達がいるからか？血を見せたくなかつた？

ベルメールさんを見る：少しづつだが動きが鈍ってきている気がする

当たり前だ、8年もブランクがあるんだ

持久力なんか落ちていても不思議じゃない

「頑張れ、ベルメールさん！」

隠れているのであればないように小声で応援しているナミを見る

思考を巡らせる

税はいくらと言っていた？ベルメールさんを助けるには？

これからのナミ、ノジコに必要なのは？

俺の中で1つの結論が出た：だが、決断ができない

ドガッ！

大きな音に顔を上げる

ベルメールさんが吹き飛ばされている光景が目に入った

ナミとノジコは悲鳴をあげないように両手で口を抑えている

俺は深呼吸を1つ入れて小声で2人に告げた

「2人共、このまま隠れていてください。私は少し席をはずします」

「シュウ、どこに行くの？」

先程の光景に涙目となっている2人に優しく言葉を返す

「ベルメールさんを助けます。だから、安心してください」

2人の頭を軽く撫で、俺は畑の奥に向かった



「ぐっ！」

アーロンの一撃をなんとかライフルで受けたのだけど、吹き飛ばされてしまった

空中で体勢を立て直し、しっかりと着地するがアーロンは抜け目なく距離を詰めてきている

アーロンは確かに強いけど、それ以上に戦い慣れている

そして、想像以上に私の体力が衰えているのが厳しい

アーロンがまた、その剛腕を振ってくる

私は《薙》を使って距離をとった

「その動き、見覚えがあるな。たしか海軍の奴らが使う《六式》だったか？」

「ええ、そうよ」

「なるほど、女、てめえは海軍の人間だったか」

「元、だけどね」

息を整えるのにアールンとの会話を続けていく

でも、アールンがそれを知っているってことは…

「アールン、あんた、グランドラインにいたの？」

「先月まではグランドラインにいた現役の海賊だ」

…なるほど、通りでキツイわけね

「しくじったな、女。俺を押し倒した時に引き金を引いていれば、てめえの勝ちだった」

アールンは文字通りに私を見下ろして言葉を続ける

「ガキが3人いるって言うていたな？血を見せたくなかったのか？…ぬるいな」

確かに、昔だったら直ぐに引き金を引いていたわね…

でも、後悔はしていない！

「確かに、現役のあんたから見たらぬるいでしょうね。でも、勝てばいいでしょう？」

「はっ、下等な人間風情がよく吠える」

その言葉を皮切りに、私とアーロンの戦いは再開する

少し休めた事と、戦いの勘を取り戻し始めた事で優位に戦いを進めることができたでも、アーロンは非常に頑丈でなかなか勝ちには繋がらない

私の武装色の覇気も、昔に比べれば衰えているのも原因でしょうね

「ちっ、埒があかねえな…：チュウウ！」

アーロンの言葉に唇が突き出ている魚人が、手に持っていた酒瓶をアーロンに放った
「あら、喉でも乾いたのかしら？」

「…ふんっ！」

私の挑発を無視したアーロンは、瓶を握り割った

握り割った手を開き、瓶の中にあつた液体を手の平に

そして、体を捻ったアーロンを目にした私は首筋に寒気を感じ、その場を飛び退いた
「…あつ、ぐう！」

アーロンが手を振るい、飛ばしてきた液体の礫が、まるで散弾のように私の体を打ちつけた

「手の平に一掬いの少量の水、それだけあれば俺達、魚人には武器になる

下等な人間には真似できないだろうがな。シャハハハハ！」

飛び退いた事で直撃は避けられたけど、散弾のように撒かれた液体に数発当たってし

まった

右の脇腹の痛みが8年前の記憶が甦る

ティーチに痛めつけられたあの時の記憶が…

「シャハハハハ！」

歯を食い縛り立ち上がる

それを見たアロンがこちらに走って向かってくる

「シャーク・on・ダーツ！」

体を真つ直ぐに伸ばし、ギザギザの鼻を突き立てるように飛び込んできた

「くっ！」

私は鼻を避けるが、飛び込んできたアロンの肩に当たり吹き飛ばされる

痛い

体の痛み動きが止まり、吹き飛ばされたままにうつ伏せに倒れてしまう

そして、ライフルを握っていた手を踏みつけられた

「女、勝負あつたな」

アロンが踏みつけていた足に力を込められ、ライフルを手放してしまふ

「せめてもの情けだ、てめえの武器で殺してやる。シャハハハハ！」

アロンは拾い上げたライフルを私に向ける

ノジコ、ナミ、シユウ…ごめんね
「待って下さい！」

私が諦めたその時、シユウが袋を持ってこの場に出てきた

第30話

「何の用だ、小僧」

アーロンがライフルをベルメールさんに向けたまま、俺を睨んでくる
心臓を握られたような感覚がしたが、強く息を吸い込み話し出した

「アーロン、貴方は税を納めれば命を保証すると言いました。」

なので、その税を持ってきたのですよ」

「俺達に逆らえばその限りじゃねえとも言ったはずだがな、小僧」

「ええ、そうですね。ですが、貴方は支配すると言いました。略奪主義ならば
殺して奪えばそれで済むはずです…何故でしょうか？」

横目で睨んでいたアーロンが顔をこちらに向けた

どうやら興味をひけたようだ

「貴方の目的が何なのかはわかりませんが、税を払う者を殺すのは
おそらく目的から外れるのではないですか？」

「小僧…」

…もう一息かな？

「私達人間を下等な種族と言っていた貴方が支配すると言うのなら、

生かしておいた方が優位を見せつけることができると思いますか」

「いいだろう、小僧。今回はその口車に乗ってやる。ハチ！金を確認しろ！」

腕が多い魚人が俺の持っている袋を取りにきた

「にゆく、それじゃ数えるから大人しくしているよ？」

「ええ、お願いします」

袋を渡した俺はベルメールさんに近づいていく

「なんだ小僧、まだ税は確認してないぞ」

「…すでに格付けは済んだと思いますが、話すことも認められませんか？」

少し目を見開いたアーロンが上機嫌に笑い出した

「シヤハハハハ！確かにその通りだ！いいだろう、話すことを認めてやる」

アーロンは踏みつけていた足をどかし、ベルメールさんから離れていった

「大丈夫ですか？ベルメールさん」

「…シユウ、何で出てきたのよ」

「家族を守るためですよ…もつとも、足が震えるほど怖かったので

出てくるのが遅くなってしまうました。申し訳ありません」

ベルメールさんは体を起こし、怪我をしていない左手で俺の頭を撫でてきた

「とりあえず助かったわ、ありがとう、シユウ…ところで、あのお金は？」

「アカリママが残したお金ですよ。なので、どう使おうと私の自由です」

ベルメールさんの顔に少しだけ笑みが浮かぶ

もつとも、この後で曇ることになるんだらうけどな…

ごめん、ベルメールさん

「ちゅう、ちゅう、たこ、かい、な…にゆる、アーロンさん、10万ベリーしかないよ」

「…どういことだ、小僧」

さて、ここからが正念場だな

「ええ、その10万ベリーで合計25万ベリーです」

「足りねえな」

声が震えそうになる…俺は、腹に力を入れて答えた

「大人1人15万ベリー、私を除いた子供2人で10万ベリー、合わせて25万ベリーです
すね」

「なっ?! シユウ、あんた何を言ってるの!」

ベルメールさんが食って掛かってくるが、これが最善なんだ

「死にたいのか、小僧」

「死にたくないですね。ですが、これが最善ですので」

「シユウ！それなら私が！」

ベルメールさんが俺をかばう様に抱き寄せるが、俺はそつと首を振る

「ベルメールさん、私達、子供3人が残されて、この先やっていけると思えますか？」

「みんな畑を手伝ってきたから、世話や収穫は大丈夫でしょう？だから！」

「ココヤシ村が支配されることで、商人との交渉にどんな影響がでるか想像ができません」

ベルメールさんが、ハツとしたような顔になる…気づいたかな？

「ベルメールさんなら、これまで何度もやり取りをしているので商人の信用もあります
が

私達では買い叩かれる可能性もあります。なので、ベルメールさんには

生き残って貰わないと困るのですよ」

「でも、それじゃあんたが！」

「…ありがとう、母さん。でも、これが最善なのですよ」

ベルメールさんが涙を流している

…覚悟は決めた筈なんだけどな

「アーロンは税を納めれば命は保証すると言いました。ですが、次回以降も継続して納めるには

私よりもベルメールさんの力が必要なのです」

「シユウ…」

ベルメールさんは項垂れ涙を流し続けている

母親を泣かせて、悪い子になった気分だ

「さて、そう言うわけです。なので、貴方に処断されるのは私ということになります」

「…そうか」

俺はそう言いベルメールさんから離れると、アーロンがライフフルを俺に向ける

「シユウ！」

この状況に我慢できずにナミとノジコが出てきてしまった

「隠れてなさいと言った筈なのですがね…」

ナミとノジコがこちらに向かって来るので、手を向けて制する

すると2人はベルメールさんの元へ行き、すがり付いた

「ベルメールさん！シユウが！」

「ごめん…ごめんね、ナミ、ノジコ…」

ベルメールさんが2人を抱き締める

「小僧、言い残すことはあるか？」

「おや、思ったよりも情があるのですね」

「シャハハハハ！足を震えさせながらよく言うな、小僧」

ほっとけ鮫野郎！でも、格好つけたのなら最後までやらないとな

俺は両手で顔を張る

ベルメール母さんがよくやっている行動だ

うん、痛いけど足の震えは止まったな

「ゲンさん、お世話になりました」

「シユウ…すまん！」

「ノジコ、あまりナミをからかいすぎてはいけませんよ。お姉さんなんですから」

「うう…う、うん！」

「ベルメールさん…いえ、ベルメール母さん、ありがとうございました

ナミとノジコをよろしくお願いしますね」

「シユウ…ごめん、ごめんね…」

「ナミ…」

「シユウ！やだあ！」

ナミが食いぎみに言葉を返してくる

さて、こんな場面だけ…いや、こんな場面だからこそ、ちゃんと気持ちを伝えよう

後悔しないように…

「ナミ、好きです」

「……え？」

「家族としても、もちろんそうです。私は一人の男としてナミが好きです」

「え……あ、シユウ……」

ナミが顔を赤らめている……うん、眼福である

こんな時だけど、笑いそうになる

「素敵な女性になつてくさいね」

ナミに微笑んだ後にアローンへと向き直る

アローンはライフルを俺の左胸辺りに狙いをつけてくるが

不思議と恐怖を感じない

「下等な人間にしておくには惜しい《男》だったぜ、小僧」

その言葉と共にアローンが引き金を引いた

パァン！

どこか乾いたような音が耳に残り、強い衝撃で後ろに倒れてしまう

「「シユウ——！！」」

ベルメールさん、ナミ、ノジコの声がなんか遠く聞こえる

一瞬遅れて、腹に熱さが来る

我慢できずに両手で抱え込むようにして抑える

「ん?…運が良かったな小僧、俺が銃を嚙んだことでどうやら曲がついていたらしいもつとも、余計に苦しむ羽目になったようだがな! シヤハハハハ!」

腹の熱さで思考が回らない

「喜べ小僧、いいことを思いついた。てめえは見せしめがどうか言っていたな?

腹に穴の空いたてめえを海に捨ててやる。魚達の人気者になれるだろうよ、シヤハハハハ!」

腹の熱さが強烈な痛みに変わってきた…これならまだ我慢できる

アーロンが倒れている俺の頭を鷲掴み、持ち上げる

「もつとも、さっきのように運がよけりや生き残るかもなあ、小僧、シヤハハハハ!」

…可能性があるなら抗ってやるさ

死ぬ覚悟は決めていたが…アカリママとの約束を忘れたわけじゃない!

「…では、生き残り、貴方達へ、報復、するとしましょう」

「シヤハハハハ!」

アーロンが俺の言葉を笑い飛ばし、俺を掴んでいる腕を振りかぶる

「「シユウ!」」

みんなの声が聞こえる

俺は精一杯の笑顔をして声を発した

「…いってきますー！」

ブオン！

アーロンが俺を全力で海へ向けて投げる

みんなが俺の名前を呼ぶが、声が遠くなっていく

俺は今日の出来事を記憶に刻み込んでいく

俺の家族の自由を奪った怒りと共に：

第31話

バシヤツ！バシヤツ！ザパーン！

アーロンに投げられた俺は遠くまで飛び、石で行う水切りのように水面で何度も跳ねた

「くっ……くっ……は？」

辺りを見渡すも水平線しか見えず、近くの島がどちらに在るのか見当がつかない
とりあえず俺は、左手で腹の傷を抑える

出血を少しでも抑えて生き延びないといけない

「さて、どちらに進めばいいのでしょうか？」

着衣のまま海にいるが、素潜り漁で泳ぎ慣れているので問題はない

だが、海水が体温を奪っていくので、なるべく早く陸にあがり止血をしないと……

俺は意を決して泳ぎだす

方向は勘だ

それ以外の方法がないのだから仕方ない

どれほど泳いだのだろうか……

ふと嫌な予感がして立ち泳ぎでその場に止まる

「…これは何でしょうか？敵意？」

何かに見られているような感覚があり、そのように感じる

「…下!？」

俺は不意に水上へとはね飛ばされた

はね飛ばされながら水面へと目を向けると特徴的な背ビレが見える

「…今日はなにかと鮫に縁がある日ですね」

暢気に言葉を溢すが、心臓は緊張で音が聞こえるほどに鳴っている

バシヤツ!

水面に叩きつけられ腹の傷が痛む

なんとか水面に顔を出し呼吸をする

先程目にした鮫の背ビレに、アーロンの顔が頭に過り怒りが沸いてくる

「そう簡単に喰らえるとは思わないことですね。抗わせてもらいますよ」

ずつと感じている敵意に集中し、鮫の接近を察する

鮫が口を大きく開け、喰らおうとしてくるが鮫の鼻っ面に右手を伸ばし

それを支えとして口との距離を詰めさせない

ザリツ!

鮫が水中へと潜る際に、右手が鮫肌で削られる

腹の傷とは違う新たな傷の痛み顔に顔を歪める

それからは何度も同じ攻防が続く

俺を喰おうとする鮫に、喰われまいとする俺

だが、腹の傷と削られていく右手、そして冷たい海水が体力を奪っていく

どうして敵意を感じるのかわからないが、それが無ければ既に喰われていただろう

不意に敵意が小さくなるのを感じる

…諦めたか？

バシヤツ！

鮫は最初の時のように俺を水上へとはね飛ばしてきた

「ぐっ！」

水面に叩きつけられる衝撃で腹の傷がまた痛む

そして大きくなる敵意

鮫が口を大きく開けて飛びかかってくる

右手を鼻つ面にやり、なんとかやり過ぎす

また、はね飛ばされる

「…鮫も随分と賢いものですね！」

新たな攻防に一気に体力を削られていく

最早、アーンへの怒りだけで意識を保っている状態だ

「…諦め、ませんよ…必ず、ココヤシ村に、帰るのですから!」

鯨が口を大きく開け飛びかかってくる

だが、意思に反して体は動かない

鯨の歯が俺を捕らえようとしたその時

「ぬうえいっ!」

どこからともなく大きな老人が文字通りに飛んできて、鯨を殴り飛ばした

「ぶわっはっはっは! よう頑張ったな坊主! もう大丈夫じゃ!」

大きな老人のその言葉に気が抜けた俺は、意識を失った



「まったたく、赤髪め…孫をたぶらかしおって…彼奴は立派な海兵になるんじや!」

休暇をフーシヤ村で過ごしていたが、少し騒動があり出発が遅れてしまった

「あの山賊ぐらいの小者なら、東の海の家軍支部もさっさと引き取ればいいものを…

とんだ時間をくってしまったわい」

海軍本部へ向けて船を走らせている中で儂が文句を垂れていると見張り台にいる部下が叫んできた

「大変です！子供が鯨に襲われています！」

部下が指差す方向へ目を向ける

あれか！

儂は船を飛び出し《月歩》で助けに向かう

子供が鯨に水上へとはね飛ばされ、水面に叩きつけられる

鯨が口を開き子供へと飛びかかる

…ダメじゃ、間に合わん！

だが、子供は右手を使い、鯨の鼻つ面を叩くようにして巧くいなした

ようやくた！

再び子供が水上へとはね飛ばされた

そして、鯨が子供に飛びかかるが、儂は全力で鯨を殴り飛ばす

「ぶわっはっはっは！よう頑張ったな坊主！もう大丈夫じゃ！」

儂の言葉を聞いた坊主は意識を失ってしもうた

後は任せておけ坊主！

儂は坊主を抱え、《月歩》を使い船へと向かう

その最中で、坊主の状態を見ていく

…かなり危険な状態じゃな

船にたどりついた儂はすぐに指示を出す

「右手は重度の擦過傷！腹を銃で撃たれており、体温も低い！血を多く失っておりそうだ！」

船医は急ぎ治療の準備を！それと、毛布を持ってこい！」

部下達が一齐に動き出す

頑張れ坊主！死ぬんじゃないぞ！

「ガープ中将！近くに船は確認できませんでした！」

副官のボガードが報告をしてくる

「ふむ、この坊主はどこから来たのかのう？」

「わかりませんが、まずは命を救わないといけません」

「そうじゃのう」

儂がボガードと話をしていると、儂の腕の中で坊主が淡い黄金色の光に包まれた

「っ！これは！」

見覚えのある光…かつての部下、アカリの能力の光と同じものだ

光が収まると、坊主の傷は無くなっていたが、血を失いすぎたのか顔が白い

「これなら助かるぞ坊主！船医！点滴の準備じゃ！急げ！」

儂の指示で船医が坊主に点滴をしていく

儂は安堵の息を漏らした

「これで一安心じゃのう」

「ガープ中将、この少年は如何でしょうか？近くの村に寄る時間はありませんが…」

ボガードの言葉にすぐに答えを返す

「なら本部まで連れて行くしかないじやろう」

「よろしいので？」

「責任は儂がとる、センゴクに連絡をしておけ」

「はっ！」

儂は船医に運ばれていく坊主を見る…波打つ紫の髪…

「ボガード、念の為にシャボンディ諸島にも連絡を入れておけ」

「…《冥王》にですな」

「そうじゃ、レイリーなら何処からか今回のことも知りおるじやろう…」

なら、本部に乗り込んでくる際に先触れの1つも出させた方がいい」

「では、そのように」

ボガードが敬礼をして離れていった

あの坊主がアカリの子ならば、ブンタの奴にも教えたほうがいいのじやろうが
まだ確定したわけじやないからのう：後でいいじやろう

たしかアカリはベルメールの故郷に送っていったはずじやが：何かあったのか？

何かあったにしろ、海軍支部の縄張りを荒らすわけにもいかんか：情報待ちじやな
「船の進路は海軍本部のままじや！早く帰らんとセンゴクにどやされるからのう！」

部下達の笑い声が響く

東の海にしては高い波が船を揺らしていた

第32話

やっとココヤシ村が見えてきた

シユウを探して8年…ようやく会うことができる

「やつとだな、ベックマン」

「ああ…シヤンクス、何かが近付いてくるぞ」

ココヤシ村の沖合いにまで船を進めた時、ココヤシ村の方から何かが近付いてきた

「あれは…魚人か？」

人型の何かが泳いできている…一見したところタコのようにも見えるが…

「にゆく、お前ら、海賊か？」

「ああ、そうだ」

船長として魚人と会話をする

「そうか、俺は魚人海賊団・アールン一味のハチつて言うんだ」

「俺は赤髪海賊団のシヤンクスだ」

魚人海賊団？グランドラインで聞いたことのある名だが…何故ここに？

「それでな、あそこのココヤシ村は俺達アールン一味の縄張りだから

「近付かないでほしいんだ」

「そうか…人を探しに来たんだが」

「人探し？」

「ああ、シユウという少年だ」

ハチが8本の腕を器用に絡ませながら考えはじめた

「にゆく、もしかして、紫の髪の奴か？」

「知ってるのか？」

「子供なのに凄く頭がよくて、アーロンさんとも対等に話をしていたから覚えてるんだ」

一介の海賊相手に臆せず会話をする子供か…さすがアカリと俺の息子だな

「にゆく…でも、ごめんよ…その子供、7日前にアーロンさんが海に捨てちゃったんだ」

「捨てた!？」

息子が…シユウが海に捨てられた？

「ハチと言ったな、その子供はどの辺りに捨てられたかわかるか？」

「にゆく、向こうの方角だけど…アーロンさんが思いつきり投げたから

どこまで飛んだかわからない」

「そうか…」

ベックマンが俺と代わり、ハチと話をしているが耳に入っていない

「それに、アーロンさんがその子供のお腹を銃で撃つていたから、なるべく早く人間の船に拾ってもらわなきゃ助からないと思うよ」

シユウを撃った…?…アーロン!!

「そうか、助かったぜハチ、ありがとよ」

「にゆく、礼なんていいよ、でも、最近海軍支部の連中の船がよく来るから

あんた達も早く離れたほうがいいよ」

そう言つて、ハチはココヤシ村に戻つていった

俺は船上で歯を噛み締め怒りに耐えている

「落ちつけ、シャンクス」

「…落ちついてる」

「なら、霸王色の覇気を抑えろ、見習いが気絶している」

見渡すと、一味の旗揚げ当時の者以外は気絶していた

「すまない…」

「いいさ、落ち着いてきたら答えを出せ」

…ベックマン?

「どういふことだ?」

「簡単なことだろう、引き続きシユウを探すのか、あの魚人達にケジメをつけるかだ」

後者はわかるが…

「シユウを探す?」

「ああ、ハチはシユウが殺されたとは一言も言っていない」

「だが、海に捨てられたんだぞ?」

ベックマンが煙草に火を付け、間をおいてから話し出した

「グランドラインの海なら子供のシユウでは無理だろうが…ここは東の海だ」

ベックマンの言葉に拳に力が入る

「じゃあ!」

「可能性は0じゃない」

俺は船上を見渡す、そして、一味の頭として決断する

「一度グランドラインに戻る、そして、一稼ぎして休んだらシャボンディ諸島に行くぞ」

「《冥王》か?」

「ああ、あの人ならもう今回のことを知っていても不思議じゃない。頼ることにする」

ベックマンが紫煙を吐き出し、俺に問いかけてくる

「いいのか?」

「ああ、2、3発殴られるのも覚悟の上さ。息子に会えるのならどうってことない」

「そうか…」

俺は改めて皆に指示を出す

「よし！グランドラインに帰るぞ！」

「あいよ、船長」

船は進み出す

俺はココヤシ村を一瞥した後、船内に入っただけ



誰かが泣いている…あれは、ナミ？

なんで泣いているんだ？

ベルメールさんにノジコ、ゲンさんまで泣いている

なんで泣いているんだ？…誰が泣かせた？

酷く耳障りな笑い声が聞こえる

—— シャハハハハ！ ——

笑い声の主を見ると怒りが沸いてくる

俺の意識は怒りと共に目覚めていった

◆
「アーロン!!」

その声と共に起き上がる

だが、回りを見渡すとまったく見覚えの無い場所だった

「……」

目線を落とすと、ベッドが目に入る

「助かったのでしょうか？」

俺が独り言を呟いていると、誰かがノックも無しにドアを開けて部屋に入って来た

「お、目が覚めたようじゃな、坊主！」

「貴方は？」

「儂か？ 儂はモンキー・D・ガープ！ 海軍本部の中將じゃ！」

寝起きだからなのか、ガープと名乗った老人の大声で頭がクラクラする

「おお、すまんな。坊主が病み上がりなのを忘れとったわ」

思い出した…確か、この老人がああを殴り飛ばしたんだ

「いえ、助けていただきありがとうございます」

「なに、海兵として当然のことをしたまでじゃ…とここで、坊主の名は…」

ガープ中将の話の途中で、なにやら蝸牛のような生物が口で『ぷるぷる』言い出した
「おっと、ちよつと席を外すぞ」

「ええ、お構い無く」

何やら蝸牛に繋がっているマイク？受話器？のような物を持ってガープ中将が
蝸牛と話している…物凄くシユールな光景だ

どうやら話が終わったようだ

「すまんが客人を迎えに行つてくる。横になってゆつくりしとつてくれ

それと、その瓶は飲み水じやからな、自由に飲んでいいぞ」

「お氣遣い、ありがとうございます」

俺が頭を下げると、ガープ中将は部屋を出ていった

…とりあえず、水を貰うか。喉がカラカラだ

俺は水を飲んだ後、ベッドに横になる

まだ疲れが残っていたのか、すぐに眠ってしまった…



俺が海軍本部の入り口に来ると、死屍累々と言える状況になっていた

眼鏡をかけた懐かしい顔がこちらに向かつて歩いてきている

儂は声を張り上げた

「レイリー！ 霸王色の覇気を抑えんか！ 若いのが皆、気絶しておるわ！」

「ガープ、若い連中の鍛え方が足りないのではないかな？」

レイリーは悪びれもせず返答をしてくる：相変わらずじやのう

「まずは礼を言わせてもらおう、連絡をしてくれて助かったぞ、ガープ」

「礼を言うのはまだ早いわい。坊主はさつき起きたばかりで

まだ身元の確認をできておらんからな」

「そうか…」

レイリーが安堵の息を吐いている：坊主が目を覚ましたとわかったからじやろうな

「今頃はもう一寝入りしておるじやろう：起きるまで儂のところまで茶でも飲んで

ゆっくりとしておけばいい」

「ああ、世話になる」

「気にせんでいいわい、戦争を起こされるよりはマシじゃからな」

儂はレイリーと離れたって本部の建物の中へ入っていく

回りを一瞥するが、若い連中がまだ気絶しとる

…後で鍛えなおさんといかん

儂は氣絶をしていない者に後始末を任せ、レイリーを部屋に案内した

第33話

ふと目が覚めたので、体を起こし伸びを一つ

うん、寝る前に感じていた怠さは殆どない。かなりスッキリした

「おはよう、どうやら目が覚めたようだね」

優しいな声色がした方へ顔を向けると、眼鏡をかけ理知的な目をした老人がいた

「おはようございます」

「うん、礼儀もしっかりしているね。初めまして、私はシルバース・レイリーだ」

この人が《冥王》シルバース・レイリー…

アカリママに何度も聞かされた伝説の海賊の一人…

俺が驚いていると、またノックも無しにガープ中将が部屋に入ってきた

「おお、目が覚めたか坊主」

手には何やら煎餅のようなものを抱えている

「腹が減っておるじゃろう？今連絡して何か持ってきてさせるわい」

「ありがとうございます」

そして、ガープ中将がまた蝸牛と話し出す…やっぱりシユールな光景だ

「あれは《電伝虫》という特殊な生物でね、番となる電伝虫と通話できるんだ」

レイリーさんがあの生物（なまもの）の解説をしてくれる

電伝虫って…ダジャレか？

…まあ、そういう生物だと納得しておこう

「待たせたのう、しばらくしたら飯を持つてくるからのう…」

それで、坊主の事を教えてもらえるかのう」

俺はレイリーさんを見る

海軍本部の中将与《冥王》が一緒にいるんだが…いいのか？

「私はガープに呼ばれてここにいるからね、気にしないでもいい」

「そうですか…では、私はシラカワ・シユウです」

俺が自己紹介をすると、ガープ中将与レイリーさんが目を合わせて頷いていた

「やはり、アカリの子じゃったか」

「知っていたのですか？」

「儂が坊主を助けた時、坊主の傷がアカリの能力で治ったのじゃよ」

アカリママの能力？

「そして、アカリと同じ髪だからと、ガープが私に一報をくれたんだ」

「そうですか」

「傷は治ったが、7日も目を覚まさなかったからのう、さすがに焦ったわい」

…そんなに寝ていたのか

「ご迷惑をおかけしました」

「迷惑などと思つたらん、だが心配はしたのう、ぶわっはっはっはっは！」

ガープ中将が豪快に笑う

なんとも気持ちのいい御仁だ

「それで、シユウがどうしてここにいいのか…聞かせてもらっても構わないかな？」

「…わかりました」

レイリーさんの言葉に、俺はココヤシ村で起こった事を話した

「なるほどのう…アーロンが…」

「知っているのですか？ガープ中将」

「坊主、お主は海兵じゃない、ガープで構わんわい」

「では、ガープさんと」

ガープさんは頷き、お茶を一口飲んでから話し出した

「アーロンは先月、海軍大将のボルサリーノが捕らえたんじやがな

アーロンの元仲間である《海侠》のジンベエが《七武海》に入るのを条件に釈放したんじや」

「その後にはココヤシ村に…ですか」

「なぜ東の海のココヤシ村に向かったのかはわからんがの」

アーロンは人間を下等な種族と呼び、支配をしてきた

その行動の理由を知るには、魚人がどういった存在なのか知らないとならないだろうな

「シャボンディ諸島では、魚人を始めとして奴隷が多くいる。そして、魚人は

長い間そういった待遇で虐げられてきた種族だね」

レイリーさんの説明に少し合点がいった

「なるほど、おそらく劣等感や復讐心で人の支配へと動き、海軍本部の大將に敗れたことで

その影響の少ないであろう東の海にやってきた…そして、ココヤシ村が襲われたのは運が悪かったといったところでしょうか」

俺の考察に、ガープさんは目を見開き、レイリーさんは興味深そうに見てくる

俺はガープさんの反応が少し懐かしく、思わず笑いが溢れてしまう

「ククク…失礼しました。ガープさんの反応が懐かしくて、つい…」

「つまり、以前からこういったことをしていたんだね、シユウ」

「ええ、アカリママの教育の賜物です」

そして、レイリーさんと目を見合わせると、どちらともなく笑いだす

「ガープさんが呆れるようにため息を吐くと、ドアをノックする音が聞こえた

「ガープ中将！お食事をお持ちしました！」

「おお、ご苦労！話の続きは飯を食ってからでいいじゃろう」

そして、俺の前にスープと白パンが置かれた

7日も食べていないので消化にいいスープに、柔らかい白パンというのがとても助かる

この世界では日持ちする黒パンが主流だからな

心遣いがとても嬉しい

ぐうぐ

スープの匂いを嗅いだら腹が鳴った

早く栄養を寄こせの大合唱だ

「いただきます」

俺は手を組んで祈り、食事を始める

暖かいスープが喉を通り、胃へと落ちていく

スープのおかげで体の芯から温まっていく

死にかけてたからだろうか……こんなことで生きていると感じられる

深く息を吐いたら、不覚にも涙が流れてきた
そんな俺を、老人2人は暖かい目で見守っていた

第34話

「ご馳走さまでした。おかげで一心地つきました」

不覚にも涙を流した食事も終わり、食後のお茶をしながら話の続きをすることになった

そういえば、この世界にも緑茶ってあるんだな…

出されているお茶で喉を潤しながら、ふと、そう思う

確か、紅茶とは発酵させるかどうかの違いだけだったかな？

珈琲もあるのかなど、そんなことを思いながら話の続きは始まった

「まずは、シユウが寝ていた間にココヤシ村がどうなったか知っておいたほうが

いいだろう…：ガープ、それは報告書だろう？シユウに教えてあげてくれ」

「そう急かすなレイリー、まずココヤシ村はまだ支配されたままじゃ…」

レイリーさんが促し、ガープさんが教えてくれるのだが…：いいの？

「報告書と言われましたが、軍事機密にあたると思うのですが…：宜しいのですか？」

「シユウは当事者じゃからな、構わんじやろう。それに、なにかあったら

儂が責任をとるから気にせんでいいわい」

なんとも男前な物言いだ

上司に持つのならこういった人物がいいと思う

「続きを話すぞ？アーロンはココヤシ村の近隣の村も支配下にしたようじゃ

東の海の海軍支部が軍を派遣したものの、船を沈められて返り討ちあつとる

じゃが、人的損失はないようじゃな」

船を沈められて人的損失がない？

「アーロンは相当に本部を警戒しているようだな、ガープ」

「そうじゃのう…支部が泣きついてくれば儂等も動けるんじやが…

支部の連中の顔を潰してヘソを曲げられると面倒じゃからのう」

なんとも世知辛い大人の世界の会話だな

「そう言うわけでの、ココヤシ村の解放に本部は動けんのじや、すまんもう」

「いえ、お気になさらずに…」

い
ナミ、ベルメールさん、ノジコ、ゲンさんやココヤシ村のみんなが無事ならそれでい

「それで、海軍支部はこの後、どのような方針で動くのですか？」

「…これ以上支配領域を拡げられないように交渉するようじやのう」

「交渉…ですか？」

正義を標榜している海軍が海賊相手に交渉？

「人的損失は無いとはいえ、多くの軍船を失つとるからのう…

戦力の回復等の長期戦を見据えての準備といったところだのう」

「ココヤシ村を始めとした人々は必要な犠牲か？海軍は相変わらずだな、ガープ」

「…返す言葉もないわい」

ガープさんが大きなため息を吐いている

「納得いかんじやろうが…理解してほしい、すまん、シユウ」

「いえ、ある意味で都合だと思っておりますので大丈夫ですよ」

「どういふことかな？シユウ」

俺の言葉にレイリーさんが問い質してくる

「アーロン達には、私自身の手で報復したいと思っております」

ガープさんがまた、ため息を吐く

「海兵としての立場上、止めるべきなんじやろうがな…」

「自身の手でケジメをつけるか…流石だね、シユウ」

レイリーさんが微笑ましそうに俺を見てくる

「それで、シユウはこの後、どうしたいのかな？」

「どうしたい…ですか？」

俺は顎に手をあて、少し考える

「強くなりたいです」

「そうか、ならば私から提案するのは2つだ」

レイリーさんが指折りながら言葉を続けていく

「1つ目は、ガープの世話になることだね。ただし、これは海軍に入ることと同じで君の目的を果たすには少し面倒なことになるだろう」

《英雄》ガープの指導か…自由は失うが、魅力的な提案と言えるだろう

「2つ目は、私と共に来ることだ。メリットは、私は既に隠居した身の上だからね
ガープ以上に指導の時間を作ることができ。デメリットとしては、海軍と違い
安定した収入を得ることができない…といったところだろうね」

強くなれるのならば収入は大きな問題じゃない

後は…

「少し、考えさせていただけますか？」

「ああ、ゆつくり考えなさい」

レイリーさんの言葉を受け、俺は思考に没頭した



賢い

シユウと会い、感じた印象だ

アカリも年齢以上に聡明なところがあつたが、シユウはそれ以上だろう
アカリがシユウを産んでから亡くなるまで2年程：

どんな教育をすればこうなるのか、興味深いものだ

私の提案に対する手応えは悪くなかつた

だが、アーロンの一件で海賊に悪感情を持つていても不思議では無い
願わくば、私と共に来てもらいたいものだ

ロジャー海賊団が解散し隠居をしてから世界を見守つてきたが

老け込むにはまだ早いだろう：

シユウを育てるのは良い刺激になる

私は、久方ぶりに昂る己の心に喜びを感じていた



「お待たせしました。お答えする前に質問してもよろしいですか？」

「構わんぞ」

「私も、もちろん構わない」

俺は考えたことを質問していく

「私の2人目の母であるベルメールさんが使っていた技術、《六式》の

《荊》や《月歩》の指導は出来ますか？」

「出来るぞ」

「私も可能だね」

「では、覇気の方は如何でしょうか？」

「儂は武装色と見聞色ならいけるのう」

「私は3種類可能だね」

これで腹は決まった

「ガープさん、命を助けていただきありがとうございます。この御恩は忘れません

ですが、私はレイリーさんと一緒に行こうと思います」

「そうか…残念じゃのう」

ガープさんが肩を落とした

申し訳ないと思うが、ココヤシ村に帰ることが出来ないのなら意味がない

「そう言うわけだガープ、シユウは私が引き取らせてもらうぞ」

「仕方ないのう」

ガープさんが頭を掻いている。レイリーさんはどこか嬉しそうだ

「シユウ、まずは私が身を寄せているシャボンディ諸島に向かおうか

ガープ、送っていつでもどうぞ。私がここにいることを快く思わない輩が

暴走しないとも限らないからな」

「わかっとなるわい」

こうして俺は、アカリママが養父と呼んだレイリーさんの世話になることになった

ココヤシ村を、家族を救う為に、そしてアーロンに報復する為に

必ず強くなることを決意した

第35話

ガープさんの船でシャボンディ諸島に送ってもらったのだが

その道中はとても楽しいものだった

1つはベルメールさんに聞いていた特殊な構造の船で海域を気にせずに航行できる
為

熟練の航海士でも難儀するグランドラインの天候に左右されずに

順調に船が進んでいったこと

もう1つが、《風の帯（カームベルト）》と呼ばれる海域を航行していた時の事だ

運悪く(?) 船が《海王類》と呼ばれる巨大な海洋生物に発見されてしまったのだが

その海王類をガープさんが拳の一撃で倒してしまったのだ

強くなりたいと思っていた俺は興奮しながらガープさんを称賛したのだが

かつての好敵手として対抗心が沸いたのか、レイリーさんも海王類を

倒し始めてしまったのだ

そして、唐突に始まった2人による狩りの競争は凄いいものだった

《月歩》を使い縦横無尽に空を駆ける2人のその姿は前世で憧れた

アニメや漫画の世界その物の光景だったのだ

その光景に、恥ずかしながら肉体年齢相応にはしゃいでしまった

今思い出しても赤面ものである

そんな楽しかった航海も終わり、俺達はシャボンディ諸島に到着したのだった



「世話になったな、ガープ」

「お世話になりました、ガープさん」

「なに、気にせんでいいわい」

シャボンディ諸島に降り立った俺とレイリーさんはガープさんに挨拶をしている

「少しぐらいゆつくりとしていったらどうだ？」

「そうもいかん、早く帰って若いのを鍛えなおさんとな」

どうもガープさんは、レイリーさんが海軍本部に来たときの海兵の対応に御立腹のようだ

「そう言うわけだな、これで失礼するわい」

「そうか、今度はゆつくりとできる時に来い。一杯奢るぞ」

そして、2人は軽く拳を合わせて離れた

その様子が海に生きる男の姿なのかと格好良く思った

そして、ガープさんの船がシャボンディ諸島を出航していった

俺は精一杯の感謝を込めて手を振り見送った

そんな俺を微笑ましそうに見ていたレイリーさんが話し掛けてきた

「慣れていない船旅は疲れただろう？まずは落ち着ける場所で休憩しようか」

「…はい」

「どうやら気掛かりな事があるようだね、話してみなさい」

船旅中もそうだったが、ちょっととした仕草や表情から色々と察する事ができる

レイリーさんの洞察力がとんでもないと思う

これが《冥王》と呼ばれるこの人の力の一端なのかもしれない

「…私は、私自身の力で報復を望みました」

「そうだね」

「ですが、ココヤシ村のみんなの事を考えると、それでいいのかと思ひまして…」

「…なるほど」

俺はアーロンが言った『税を納めれば命は保証する』という言葉を信じた

殺されかけた相手を信じるのもどうかと思うが、それを前提として

俺自身の力で報復をすると決めたのだ

だが、それは力をつけるまでの間、家族やココヤシ村のみんながアーロンの支配下に置かれ続けるという負担を強いることでもある

もちろん、俺が力をつける間に誰かがココヤシ村を解放する可能性もあるがそれは俺の努力や力が及ばなかっただけの事なので仕方ない

むしろ、家族やココヤシ村のみんなが解放されるので喜ばしいことだろう
俺はこういつた考えをレイリーさんに話した

「ふむ、なるほど、よく考えているね、シュウ」

そう言つてレイリーさんは俺の頭を撫でてくる

船旅の間にレイリーさんとはアカリママの話で随分と仲が良くなったのだ

「私の考えだが、シュウが自身の手で報復をと思うのは間違いだはないと思う」

「ですが、ココヤシ村のみんなの事を考えると…」

「優しいね、シュウ。だけど、まずは聞きなさい」

レイリーさんが優しくも強い眼で俺を見てくる

「世の中には、自らの手で成し遂げなければ先に進めなくなる…といったことがある

これが、今回のシュウに降りかかった出来事なのかもしれないね」

レイリーさんの理知的な眼が、深い知性を宿し俺の目を見ている

「だから私は、シユウの思いが間違いだとは思わない」

レイリーさんがまた頭を撫でてくる

「故に、シユウが強くなるための手伝いをしよう。私の力が及ぶ範囲でね」

涙が出てくる

自分勝手な思いが認められたのが嬉しく、非力なのが悔しい

「故郷の家族を信じなさい。これまで一緒に暮らしてきた、自慢の家族なのだろうか？」

「はい……」

俺は改めて誓う

俺は俺自身の手で報復をする事を、ココヤシ村のみんなを救う事を

家族の為に……何よりも、俺自身の為に……



少しばかり説教臭いことを話してしまったな……私も年をとったということだろう

シユウは年相応に感情的なところもあれば、そうでないところもある

アカリもそうだった……親子なのだと感じる

私はシユウの父親であるシャンクス的事を考える

今頃は、ココヤシ村の事を、シユウの事を知っただろう

さて、シャンクスならばどう動く？

…おそらくは、私の所に来るだろう

もつとも、感情的になり、アーロンにケジメをつけている可能性もあるが…

一味を率いる頭として成長している事を期待しよう

シャンクスが顔を出したのならば、一発殴るとしようか

8年も掛けてシユウを探し出せなかった上に、こうも泣かせたのだから…

鈍っていた身体も丁度良く解れている

シユウがガープを称賛する光景に妬いたのは大人気なかったがな…

私はシユウを見る

まだ涙を流しているが、シユウの才を考察してみる

鯨との死闘の際に、おそらくは見聞色の覇気を使っていたようだ

武装色の覇気を無意識で纏っていることから、その才もあるだろう

そして、アーロンの話の際に、怒りの感情と共に僅かながら霸王色の覇気も感じた

つまり、シユウは覇気の才能を3種類所持していることになる

シユウの両親であるアカリやシャンクスと同じくだ

…どうやら、これから予想以上に楽しい時間を過ごせそうだ

私は涙を流し続けるシユウの手を引き、行きつけのバーに向かった

第36話

レイリーさんに手を引かれ酒場に到着した

子供が入る場所ではないと思わないでもないが、それ以上に気になることがある
看板に堂々と『ぼったくり』と表記してあるのだ

思わず目を擦り見直してしまった

「さあ、入りなさい。支払いは勿論、私が持つ」

『シャツキー、SぼったくりBAR』と記されていた店に入ると

若く見える女性が煙草を吹かしてカウンターにいた

「あら、可愛らしいお客さんね」

「やあ、久しぶりだねシャツキー」

「いらつしやい、レイさん。その子はレイさんのお孫さんかしら？」

「まあ、そんなところだね」

顔馴染みらしい2人の会話が続いていく

俺は散々泣き顔を見られたこともあり、少しの悪戯心でレイリーさんをこう呼んだ

「レイ養祖父さん（じいさん）、席に着きませんか？」

悪戯は成功したのか、レイリーさんが目を見開いて俺を見てきた

「あらあら、レイさんがこんな驚くだなんて、坊やもやるじゃない」

「ありがとうございます、お姉さん」

「お姉さんだなんて、嬉しいことを言ってくれるわね。」

私はシヤクヤク、シヤツキーって呼んでね」

「私はシラカワ・シユウです。よろしくお願いします、シヤツキーさん」

「シラカワちゃんね、よろしく」

シヤクヤクことシヤツキーさんが、頬に手をあて嬉しそうに笑っている

「あゝ…シユウ?」

「アカリママがレイリーさんを養父さんと呼んでいたと聞いたことがあるので

私も養祖父さんと呼んでみたのですが…いけませんでしたか?」

「…いや、それで構わないよ」

片手で顔を隠すように覆い、レイリーさんが顔を逸らす

「随分と嬉しそうね、レイさん」

「…取りあえず、なにか腹に入れようか。シヤツキー、適当に頼むよ」

「ふふふ、わかったわ」

シヤツキーさんが料理を始めたのでカウンター席に座りながらレイ養祖父さんの顔

を見る

…心なしか、赤くなっているように見える

「…ゴホン、それじゃ、これからどうやってシユウを鍛えるか考えようか」

「はっ」

誤魔化すように咳払いしたが、顔は赤いままだ

「まず、シユウはどのように強くなりたいたいのかな？」

「私は素人ですので、具体的にどうとは言えないのですが…取りあえず、覇気と

六式を使えるようになりたいと思います」

俺の言葉にレイ養祖父さんが頷く

「なるほど、覇気はこのグランドラインを生きるには必須とも言える技能だ

それに六式を使えるほどに身体能力を鍛えるのも悪くない」

伝説の海賊であるレイ養祖父さんの肯定に安堵する

「では、戦いの際の得物はどうするのか、シユウ」

「…得物、ですか？」

「一例として挙げるのなら、君の両親は共に剣士だ。そして、私も剣士の端くれだね

故に、剣を指導するのなら相応に応えてみせるよ」

剣士か…厨二、いや、男心を撥られる

「では、剣を得物としたいと思えます」

「だが、剣といつても直剣、曲剣、刀と種類があるが…どれにするのかな？」

俺は少し考え込む

元日本人としては刀にロマンを感じるが…

「…直剣にしようかと思えます」

「ほう…何故かと聞いてもいいかな？」

俺は自分の考えを整理しながら話す

「私自身が素人なのではつきりとは言えませんが、曲剣や刀で『斬る』というのが想像しにくかったというのが一番でしょうか」

「ふむ、戦いは素人だと言っていたが知識はあるようだね」

「聞きかじり程度ですが…それで、私にもできるだろう事が剣で

『叩き斬る』事だと思っただのです」

レイ養祖父さんは一つ頷き言葉を返してきた

「簡単に思えるかもしれないが、実際のところ刃筋を立てなければならぬからね

直剣も相応に技術が必要だということを理解しておきなさい」

「はい」

レイ養祖父さんの言葉に素直に頷く

そうしていると、料理を作り終えたのか、シャツキーさんが話し掛けてきた

「あら、2人だけで楽しそうに話しているなんて、妬けちゃうわ」

「どうやら料理が出来たようだね。続きは食べてからにしようか」

樽に似たジョッキを掲げながら、レイ養祖父さんは俺に食事を促してくる

「いただきます」

食事の礼をして食べ始める

身体を作るには食事も大切だ：しつかりと食べないと

何が面白いのかわからないが、黙々と匙を進める俺を

大人2人が楽しそうに眺めていた



シユウは得物にアカリと同じ直剣を選んだ

血は争えないのだと思う

もつとも、父親であるシャンクスは残念な事だろうがね

しかし…レイ養祖父さんか…

頬が緩むのを抑えられない

私はこんなに単純な人間だっただろうか？

…きつと、アカリの影響を受けたのだろうか？

だが、そんな己を悪くないと思っている

さて、直剣となると、やはりシラカワ流を教えたほうがいいだろう

アカリを指導していた際に概ねは理解している

…或いは、ワノ国に行くのも悪くないだろう

シユウが基礎を修めた時に考えてみよう

私は食事が続いているシユウを眺める

シユウはそれが必要な事だとしても言うように食べ進めている

まるで、身体作りには食事も肝要なのだど知っているようだ

…いや、おそらくは知っているのだろう

我が養孫は、やはり賢いようだ

私は思考していく

この養孫をどのように育て、鍛えていくのかを…

その時間は、近年感じることが無かった程に楽しい時間だった

第37話

「いつてらつしやい、レイさん、シラカワちゃん」

「行つてくるよ、シャツキー。1ヶ月もしたら一度戻るつもりだ」

「いつてきます、シャツキーさん」

修業プランがある程度固まり、レイ養祖父さんの縄張りである無人島に行くことになった

そして、今はシャツキーさんが見送りに来ているというわけだ

「さあ、行こうかシユウ。道中で航海術なども教えていくからね」

「お願いします、レイ養祖父さん」

俺とレイ養祖父さんは小舟で海に出ていく

波やら海洋生物やら大丈夫なのかと思うが、そこは歴戦の海の男であるレイ養祖父さんだ

天候を的確に読んだり、霸王色の覇気で海洋生物を撃退したりと大活躍である

それらの冒険的な光景に少し：いや、かなりはしゃいでしまったが仕方ないだろう

そんな感じで半日も船を進めていると、目的の無人島に到着したのだった

「さて、ここでシユウを鍛えていくのだが、まずは覇気を理解してみようか」
「覇気ですか？」

レイ養祖父さんの説明が続いていく

「覇気というのは《人の意思の力》だ。まずは私が手本を見せよう

それで覇気のイメージを掴んでみなさい」

「はい」

「その後は、シユウの資質を確認してみよう。私が見たところ、シユウは3種類の覇気

全てに資質を持っているが、どの系統が得意なのかまではわかっていないからね」

得意な系統…転生前にあの老人から貰ったものが確かなら武装色の覇気の筈だが…

「まずは、武装色の覇気だ」

袖を捲ったレイ養祖父さんの腕が黒くなっていく

ベルメール母さんは拳だけだったので、流石は《冥王》といったところだろうか

「その様子だと知っていたのかな？」

「はい、ベルメール母さんに見せていただきました」

レイ養祖父さんが頷きながら話を続ける

「そうか、武装色の効果は主に身体能力の強化だね。そして、自然系の

悪魔の実の能力者への数少ない攻撃手段でもある」

俺はレイ養祖父さんの言葉に頷く

転生前にあの老人に聞いたことと同じだ

…ん？前世のことはあまり思い出せないのに、あの空間の出来事は思い出せるな
どういうことだろう？

今考えても仕方ないか…まずはレイ養祖父さんの話を聞いて強くなることだ

「なにか思考していたみたいだが、こちらに集中してくれたみたいだね

それじゃ、軽く武装色の覇気を実践してみせようか」

そう言つて、レイ養祖父さんは石を持つと握り潰してみせた

…マジですか？

「…凄いですね」

「私が得意としているのは霸王色の覇気だが、武装色でもこのぐらいは出来るね」

得意な系統だったらどうなるんだ？

「次は見聞色の覇気を使つてみようか…だが、これは見た目ではわかりにくいので

シユウにも少し手伝つて貰おうかな」

そう言つて、レイ養祖父さんは手拭いを顔に巻き始めた

「見ての通り目隠しをした。シユウはそこに落ちている石を拾つて

好きな場所から投げてください」

そうは言うけど…大丈夫か？

「遠慮はしないでいい」

「…わかりました。では、失礼します」

俺は念のため足音を発てずに横へと回り込み、投げる態勢になった…すると

「左方向から投げようとしているね。しかも、手には小石を複数握り込んで

散弾のように撒き散らそうとしている…うん、中々いい考えだ。素人とは思えない発想だね」

俺がいる方向までは、気配だのなんだのでわかるとして…それ以外はなんでわかるんだ!?

「ああ、そのまま投げても構わないよ、シユウ。安心しなさい、これでも元は

《海賊王》の相棒だったのだからね」

レイ養祖父さんの言葉に頷き、俺は小石を投げつける

だが、レイ養祖父さんは一歩その場から下がるだけで避けてしまった

「これで少しは見聞色を理解できたかな？」

目隠しを外しながらレイ養祖父さんが話すが、正直なところ凄いとしかわからん

「見聞色を得意とする者の中で、時には相手の心の声まで聞くことが出来る者がいるといふ…」

もつとも、それほどの才を持つものは私も数えるほどしか知らないがね」

リアル悟り妖怪がいるとおっしゃるのか

「さて、最後は霸王色の覇気だが…大丈夫かな、シユウ？」

憧れのファンタジーも目の前にすると動揺して心が追いつかないんだな…

俺は落ち着くために両手で顔を張る

「…お待たせしました」

「うん、まだ若いのに見事な気持ちの落ち着けようだね。それでは霸王色を使う。

加減はするが、しっかりと腹に力を入れておきなさい」

俺はレイ養祖父さんの忠告に従い、腹に力を入れた

すると、急に空気が重たくなったように感じた

「ふむ、まだ大丈夫なようだね…では、もう少し強くしてみようか」

無意識のうちに汗が出てくる…冷たい汗だ

寒くないのに震えが止まらない

「ほう…これは予想外だが、さすがに死線を越えただけはあるということかな？

では、また少し強くしてみよう…頑張りなさい、シユウ」

重圧が更に強まり、膝が笑いだす

アーロンの時の覚悟と、鯨との戦いの経験が無ければ間違いない気絶していただろう

俺は歯を食い縛り耐える

「素晴らしいね、シユウ…今回はここまでにしておこうか」

レイ養祖父さんの言葉と共に身体に纏わりついてきた重圧が消える
気が抜けた俺は地面にへたりこんでしまう

「よく頑張ったね、シユウ。霸王色の覇気がどういったものか、体験できたかな？」

「…はい」

なんとか返事をするのが精一杯な程に疲労してしまっている

「続きは一休みしてからにしようか」

「いえ、大丈夫です」

レイ養祖父さんは首を横に振る

「休むのも修業の1つだよ…焦らなくてもいい、一歩ずつ進みなさい」

その言葉に、俺は地面に身体を投げ出す

余程疲れていたのか、目を瞑った俺はすぐに眠ってしまった



「…眠ってしまったようだね」

私はシユウを持ち上げ歩きだす

「風邪を引かせてはアカリに申し訳ないからね」

拠点に向かう中で先程までの事を思い出す

養孫の想像以上の出来の良さに思わず笑みが浮かぶ

見聞色の時は点ではなく面で私を狙おうとしていた

この発想の良さは実戦でも役に立つだろう

そして、霸王色の時は私の想像を超える胆力を見せてくれた

かつて、アカリやシャンクス達を指導した時も同じようにしたが

2人は最後の時には膝をついていた

もつとも、バギーは2段階目で気絶していたが：

あの時の2人と同じぐらいの年齢のシユウがこれを超えたのは経験もあるだろうが

何よりも、既にある種の覚悟が出来ていたのが大きいだろう

だが、それでもシユウが見せた意思の強さは見事なものだった

これからが実に楽しみだ

拠点にたどり着いた私はシユウを下ろし、食事の準備を始める

ふと目に入ったシユウの寝顔に感じたものは、とても暖かいものだった

第38話

目を覚ました俺は、レイ養祖父さんが作ってくれていた食事を食べ

その後、覇気の資質を調べた

レイ養祖父さん曰く、武装色を得意系統として3種類の覇気の資質を有しているらしい

この結果にはレイ養祖父さんが驚いていた

霸王色の覇気の資質は非常に珍しく、有している者は少ないのだがそれを有する者は霸王色を得意な系統とするのが通常らしい

らしいというのは、そもそも霸王色の資質を持つものが少ないので所謂、サンプルとなる情報がほとんど無いからのようだ

だが、アカリママも見聞色を得意な系統としながらも霸王色の資質があったのでおそらくは遺伝なのではとレイ養祖父さんは言っている

そんな感じで覇気の資質を知った俺は、レイ養祖父さんの指導で覇気の扱い方を学びながらも身体を鍛えている

他にも航海術やグランドラインの知識を学び、思考力を鍛える為に

チェスをしたりしながら日々を過ごしている

この世界にもボードゲームがあることに驚いたが、レイ養祖父さんによるとカードやルーレットなどの賭博も有るらしい

俺と会う前はコーティングという仕事で得たお金で、チェスを含めた賭け事をして何日も家に帰らないといった生活をしていたみたいだ

一緒に暮らしているシャツキーさんの事も考えてあげて欲しいものだ

気になったのでシャツキーさんとの関係をレイ養祖父さんに聞いてみたのだが恋人や夫婦と言ったものではないようだ

海賊を現役でやっていた時の古い知り合いとのこと

…古い知り合いって、シャツキーさんの年齢はいくつなんだ？

まあ、女性の年齢に関することはいつの世も禁則事項なものだ

この話題は止めておこう

そして、この無人島に来て1ヶ月近く経った頃、俺はいつものように

砂浜を走り足腰を鍛えていたのだが、波打ち際に見慣れぬ物を発見したのだ



「あれは、宝箱でしょうか？」

この島には危険な野生動物がないので一人で砂浜を走っていたのだがその時に、波打ち際に宝箱らしき物が打ち上げられているのを発見した俺は少し速度をあげ宝箱に近付く

周りを見渡すが船や人は見当たらない

「心踊るものがあります……取りあえずはレイ養祖父さんのところに持っていくことにしましょうか」

俺はバスケットボール程の大きさの宝箱を抱えて、拠点に向かい走り出した



「おや、面白そうな物を持って帰ってきたね、シユウ」

「ただいま、レイ養祖父さん」

レイ養祖父さんが興味深そうに宝箱を見ている

「ふむ、どうやら鍵がかかっているようだね。シユウ、教えた通りにやってみなさい」
「勝手に開けてよろしいのですか？」

「誰の物か証明できないのだから、それは拾ったシユウの物だよ」

なんとも元海賊らしい言い分である

レイ養祖父さんは腕に時計のようにつけている《箱貝（ボックスダイヤル）》から針金を取りだし俺に渡ししてきた

《箱貝》とは、この世界特有の不思議な貝で、その貝殻の内にその大きさ以上の物を収納できる物凄く便利な貝（死んだ貝の殻）である

前世の薄れた記憶から表現するのなら《魔法の道具袋》に似た貝である

レイ養祖父さんは世界一周の旅の時にこの貝を見つけたと言っていた

とても希少な貝だが、電伝虫なども含めてこの世界はなんとも

ファンタジーな生物（なまもの）が溢れる世界だと思う

さて、それじゃ宝箱を開けるか

レイ養祖父さん曰く、解錠技術は海に生きる男のたしなみらしいので

箱貝に入れていた空の宝箱で解錠の練習をさせられたのだ

「それでは開けますね」

針金を使いカチャカチャと弄っていく

この時間が楽しく感じるのはレイ養祖父さんに毒されたのかもしれない

カチツ！

どうやら鍵が開いたようだ

宝箱を開けると中にはパインアップルのような形をした物が入っていた

だが、その色は青と黒で彩られており禍々しきすら感じさせる

俺は、この宝箱に入っていた物に運命的な何かを感じた

これは…俺が望んだ物だ

「おそらくは悪魔の実だろうね…さて、どうするのかな、シユウ？」

レイ養祖父さんが俺に問いかけてくる

「悪魔の実を食べれば常人には無い異質な力を手にすることができる…

だが、その代償として海に嫌われ泳ぐことができなくなる」

泳げない…海で生きるには致命的な事だ

だが…

「食べます」

「ほう…だが、どのような力を手にするかはわからないよ？」

「焦っているつもりはありませんが、これには何か運命のようなものを感じています」

レイ養祖父さんが興味深そうに俺を見てくる

「悪魔の実はその力を宿すものを己で選ぶ…という話をどこかで聞いたことがあるが

もしかしたら、この悪魔の実シユウを選んだのかもしれないね」

レイ養祖父さんの言葉を受け、悪魔の実を手取る

そして、俺は悪魔の実に思いきり齧りついた



シユウがいなくなつてから1ヶ月以上経つた

あれからナミはずつと部屋で塞ぎこんでいる

私とノジコも立ち直つたというわけではないけど、ナミに比べればマシね

ナミはあの時、自分の恋心に気づいたのにシユウと離れることになつてしまつたのだから…

「おはよう、ベルメールさん」

「おはよう、ノジコ…ナミの様子は？」

私の言葉にノジコは首を横に振る

…まだダメみたいね

私達もあの時の事は今でも鮮明に思い出せてしまう

シユウがアールンに海に投げられた時の事が頭に浮かぶ

『…いつてきますー！』

腹を撃たれていたのに笑顔でそう言いきつた

…シユウが、あの状況で？

この1ヶ月で多少は心を整理出来たからなのか、そう思い立つシユウなら…

これまでシユウと暮らしてきた記憶が甦る

生後6ヶ月で立ち上がったこと

わずか2歳で大人顔負けの知識を披露したこと

5歳で一介の海の男と変わらない泳ぎを見せて素潜り漁をしたこと

10歳でアロン相手に堂々と交渉して見せたこと

どれもシユウがやった常識はずれな出来事だ

他にも、あの土壇場で見せた運の良さ

赤ん坊のころから無意識に纏うほどの武装色の覇気の才能

そして…かつて私の傷を癒したアカリが残してくれた能力…

希望的観測かもしれない…でも、私は確信に近い思いを抱いた
ガチャ！

私がそう思い至った時、ナミが部屋から出てきた

「…おはよう、ベルメールさん、ノジコ」

目の周りが赤い…また、泣いていたみたいね

「おはよう、ナミ。顔を洗ってきなさい、可愛い顔が台無しよ」

「…別にいいわ」

私は先程、思い至ったことをナミに話すことにした

「そんな顔じゃシユウが心配するわよ」

「でも…シユウは…!」

シユウの名前が出たことで、ナミがまた泣きそうになっている

「あの時、シユウは最後になんて言っていたかしら?」

「え?」

私の言葉にナミだけでなく、ノジコまで私を見てくる

「ノジコはわかるかしら?」

「え…と?」

「シユウは『…いつてきます!』って言ったわ」

私は2人に視線を合わせる為に屈んで話を続ける

「あのシユウが、自分に出来ないことを言うかしら?」

「でも…!」

「いつてきますって言ったのだから、帰ってくるでしょ?」

ナミとノジコは困惑したように、でも少し表情が明るくなりながらお互いを見ている

「どうやって帰ってくるのかまではわからないわ。でも、シユウなら帰ってくる…
2人もシユウの事を信じられるでしょう?」

「うん!」

2人に以前までの…いつも通りの笑顔が戻った

「よし!それじゃご飯を食べたら畑に行くわよ!私達でシユウの帰ってくる家を
守らないといけないんだからね!」

「うん!」

ナミが元気に顔を洗いに行き、ノジコはパンを取りに台所に向かった

言葉に試みて改めて思った…シユウは帰ってくる、シユウを信じようと

「頑張りなさいよ、シユウ…私達も、頑張るからね」

この日、ようやくわが家に笑顔が戻った

私達は信じて待つ…いつの日か、また家族全員が揃うことを…

第39話

悪魔の実にかじりついた俺の口中は大惨事になっていた
苦い、酸っぱい等の酷い味が口の中で大戦争をしている

一言で言えばもの凄く不味いのだ

だが、2歳の時から決して裕福とは言えない家庭環境で育ち

身体作りの為に好き嫌いせずに、食べ物を残さずに食べてきた習慣が

この口中の物体を吐き出すことを拒否している

俺はなんとか咀嚼して悪魔の実を飲み込んだ

だが、手にはまだ悪魔の実が残っている

口直しをしたい衝動にかられながらも残った悪魔の実を口に押し込んでいく

そして、俺はこの戦いに勝利することができた

「うっ…予想もしなかった程に…酷い味でした…」

「言い忘れていたんだが…悪魔の実は一口食せば力を得られた筈だね…すまない、シユウ」

レイ養祖父さんの物言いに俺の奮闘は何だったのかと言いたくなるが

終わってしまったものは仕方がない

俺は口直しに水を飲んでから口を開いた

「…既に済んだことですから」

「そうか、改めてすまない、シユウ…さて、それでは外に出て能力を試してみようか」

「はい」

俺は口を濯ぎながらレイ養祖父さんについて外に出た

「それで、能力はどのように使うのでしょうか？」

「私自身は能力者では無いからハツキリとは言えないが…感覚的にそれが

わかるというのが私の知るところだね」

感覚的か…

俺はその言葉に意識を自分に向けてるように集中する

すると、なんとなくだが自分に今までと違うものがあるのがわかる

「…これでしようか？」

「そういえば、能力も覇気と同じく、使用者の意思が大切だと聞いたことがあるね」

意思…要するにイメージするのが大切なのだろう

俺はあの空間で老人に求めた能力を思い出す

さて…何を使ってみようかな？

…よし、まずは使えたら便利なワームホールをやってみるか

「それでは、能力を使ってみます」

「ああ、フォローは任せておきなさい、シユウ」

レイ養祖父さんの言葉に微笑みを返し、俺は直感的に手に意識を集中すると、身体の内側から何かが生み出されるような感覚が沸き上がってきた

…これか？

そのまま集中を続けていくと、手から紫を帯びた黒い塊が出現し

目の前の空間に穴のようなものを掘げていく

「…っ!?!」

だが、その穴に身体の内側から何かを無理矢理引き出されるような感覚を感じた俺は意識を失ってしまおうのだった



倒れ行くシユウの身体を私は抱き止める

意識を失っているようだが、身体に怪我などはないようだ

私は安堵の息を吐く

おそらくだが、シユウは疲労の限界に達したのだろう

まだ子供の身体に慣れない環境下での修業：

私が想定していた疲労の限界に達する1ヶ月に近かったこともあるが
今回の能力の使用が引き金になったのだろう

しかし…あの黒い穴のようなものは何の能力なのだろうか？

知的好奇心を刺激されるが、今はシユウを休ませることを優先しようか
それに、私の予想が正しければ、そう遠くない内にシャンクスが

私を訪ねてくるだろう

ならば、シャボンディ諸島に戻るとしようか

私はシユウを拠点に寝かせた後に荷物を《箱貝》に収納していく

荷物を収納し終えた私は、シユウに負担がかからないように抱き上げ

《月歩》を使い空を駆け、シャボンディ諸島に向かった



「準備の方はどうだ、ベックマン?」

「《冥王》への土産に酒もたんまりと積んだ…いつでも行けるぞ、シャンクス」

グランドラインに戻り一稼ぎを終えた俺達は、シャボンディ諸島へ向けて
出航準備をしていた

「これを終えたら、いよいよ《新世界》だな、ベックマン」

「…《四皇》を狙うのか、シャンクス？」

「ああ、シユウを散々待たせたからな…見せるのなら、大きな背中を見せてやりたい」
ベックマンが煙草に火を付け、話を続けてくる

「気が早いんじゃないか、シャンクス」

「今回は会える気がしているんだ」

「…根拠は？」

「勘だ」

ベックマンがため息をするように紫煙を吐き出す

だが、この海で生きるには勘もバカにしたものじゃないのは身に染みているはずだ
「…そうか」

「ああ、それじゃ行くぞベックマン！出航だ！」

「あいよ、船長」

船は帆に風を受けて進んでいく

まるで俺の気持ちを表すかのように、船は軽快に波を掻き分けていった



意識が浮かび上がるようにして目を覚ます

まず目に入ったのは満天の星空だった

「綺麗なものですね…ですが、空が見えるということは拠点の中ではないのでしょうか？」

俺は体を起こすと周りを見渡す

そして、目にしたのは異常な光景だった

周囲全てが、足下までもが星に囲まれていたのだ

「…どういうことでしょうか？それに…この星々に感じる違和感は？」

俺は観察と思考を続けていく

そして気づいた

「これは…星が瞬いていない…」

地上では空気の層等の関係で星が瞬くと、何処かで聞いた覚えがある

そうすると、此処は宇宙である可能性がと考えるが、呼吸は出来ているし

何よりも無重力であるのなら浮遊感のようなものもあるはずだ

「…そうなるよ、此処はどこなのでしょうか？」

俺が一人言を話しながら思考を続けていると、不意に声をかけられた

「どうやら目を覚ましたようですね、我が半身」

その声に振り向くと、そこには波打つ紫の髪が特徴的な美男子が立っていた

第40話

「どうやら目を覚ましたようですね、我が半身」

その声に振り向くと、俺は驚愕のあまりに動きが止まる

俺と同じ波打つ紫の髪と白衣を思わせる服装

美男子としか形容出来ない容貌に特徴的な低い声

二次元と現実の違いはあれども間違う筈がない…

「シュウ・シラカワ博士…」

俺は無意識に博士の名を呟いていた

「やはり、私を知っていましたか…いえ、まだ覚えていたというのが

正しいでしょうね」

博士が発していく言葉は、俺の少しばかり残っている前世の記憶に

あるように、少々謎めいた表現をしてくる

だが、何故か心当たりがあるのが面白い

「その言い方ですと、私の前世の記憶が薄れている理由をご存知なのですか？」

「ええ、それはあらゆる世界に共通する事象ですからね」

博士の言葉に知的好奇心が刺激されていく

「我が半身、貴方の記憶が虚憶へとなったのは、世界の防衛本能によるものですね」

「虚憶？世界の防衛本能？」

「虚憶は前世や並行世界の記憶が既視感や既知感となることですね…心当たりがあるのではありません」

心当たりどころか、俺に起こっていることそのものである

「はい」

「世界の防衛本能ですが、これは世界の存在意義にも関係していますね」

「存在意義…」

「ええ、世界は例外なく魂の輪廻を受け入れる存在です。故にその魂が無ければ

世界も又存在し続けることが出来ないのです」

ふむ、つまりは…

「前世の世界と比較して里心のようなものを出され、別世界に転生されると

世界にとっては困ることになる…といったところでしょうか？」

「ほう…中々の理解力ですね、我が半身」

「やばい、博士に誉められてめっちゃ嬉しい！」

でも…

「ところで、先程から私を半身と呼んでいますが、どういうことでしょうか？」
「それは、貴方を此処に喚ぶことが出来たことにも関係しているので

簡単にですが教えて差し上げましょうか」

是非とも教えて差し上げて下さい

「貴方は、前世での生き様から私の因子を魂に生じさせた希有な存在なのです」

「…？」

うん、わからん

「我が半身、貴方は前世において、その多くの時間を私と関わった筈ですよ」

俺は何とか記憶を搾り出していく

…もしかして、あのゲームのシリーズを全部やっていたことか？

「どうやら心当たりがあるようですね」

「はい…ですが…」

確かに博士はあのゲームのシリーズに登場するキャラで一番好きだったし

使い込み、やりこみもしたけれど…

「博士、因子とやらが生じたと言われましたが…私はどういった

存在になったのでしょうか？」

「言葉通りに我が半身、もしくはは並行世界のシユウ・シラカワたる存在ですね」

いやいやいや、俺は博士のような天才じゃないよ！

「ですが、貴方はあくまで貴方であり、私とは別の人間ですよ」

そう言われて正直、ほっとした

博士のような人類最高峰の天才と同じだと言われてもどうしようもないのだから
「さて、貴方に私の因子が在るが故に、此処に喚ぶことが

出来たことは理解できましたか？」

「はい…ですが、此処はどこなのでしょう？」

「ククク、何処だと思いますか？」

む、ここにきて逆に問い返されるとは…

今までの会話に何かヒントでもあるのかな？

今生、前世の記憶を掘り返しても確信となるものは出てこないが…

「…太極でしょうか？」

あのゲームのシリーズの1つでそんなワードがあつた気がする

正直なところ、勘で答えただけだ

「ほう、見事ですな我が半身。正直なところ、貴方を見誤っていました」

…え？マジで？

俺は博士の反応に周囲を見渡す

此処は本当にそうなのかと確認するように何度も見渡す

「ククク、では理解できたところで、貴方を喚んだ理由を話しましょうか」

「あ、はい、お願いします」

博士は上機嫌に笑いながら話を続ける

「一言で言えば、あの老人に頼まれたからですよ」

あの老人って…

「貴方は私の知識を望んだのでしょう？」

「そうですか…」

「少なくとも、私の知識は一朝一夕に理解出来るほど軽いものではないと自負しています
す

故に、私の知識を得るのならば、相応に学んで頂かなければなりません」

博士が俺を見据えてくる

「ですので、私自ら貴方に講義をして差し上げましょう」

Oh…

「…宜しいのですか？」

「ええ、それがあの老人からの依頼ですからね」

あの時言っていた優遇ってこういうことか！

「ですが、1つ問題があります」

「何でしょうか？」

「我が半身、貴方は今、魂だけの状態で此処にいます」

魂だけ？

「魂がその器たる肉体から離れていられる時間は限られています。

それ故、貴方にはその有限の時間で知識を学んで貰うこととなりますね」

「…どれぐらいの時間ででしょうか？」

博士は一度目を瞑り、俺の質問に答えた

「此処は貴方の世界と時間の流れが異なりますが、およそ10年が限度でしょうね」

「10年…」

「ええ、貴方の世界では10日程になります。それ以上は貴方が戻れなくなりますので

…」

10年で博士の知識を学ぶ…高校を赤点ギリギリで卒業した俺に出来るのか？

「ククク…心配せずともいいですよ。私が貴方に知識と其れを活用するための

知恵を叩き込んで差し上げましょう」

こうして俺は、特典で望んだ知識を得るのではなく学ぶことになった

憧れたシユウ・シラカワ博士本人の講義によって…

第41話

シラカワ博士の講義が始まったが、まず最初にやったのは俺の学力の確認だ
まあ、俺自身が正直なところお察しレベルだと思っていたのだが

博士に思いっきりため息を吐かれてしまった

…申し訳ありません

「最低でも、国立大学卒業程度の学力は身に付けていただきます

…それでもなければ到底理解出来ませんよ？」

そして始まったのが俺の基礎学力の向上だ

小学生レベルから勉強を始めた時は、流石にバカにし過ぎだと思ったが

出来ることと理解していることは違うとのことだ

テストで点をとるための知識ではなく、日常的に利用できる知恵となつて

初めて理解したと言えるものらしい

そうして講義を進めていけば、もう赤面ものの事態が何度も出てくる訳で…

勉強ができる者とそうでない者、頭の良い者とそうでない者の差が

骨身に染みて理解出来る時間が過ぎていった

だが、老人に貰った《神速のインパルス》のおかげか、一度教えて貰った事は忘れることがなかった：もつとも、理解出来るとは限らなかったが：

そんな感じで博士の講義を受けて1年程が経った頃、高等学校レベルの学力はようやく博士から合格のお達しを頂くことができた

「先ずは一区切りと言ったところでしょう。ですが、ここからが本番ですよ我が半身
：

知識だけでなく、思考力も鍛えて差し上げましょう」

泣き言など許されないスパルタ講義を頭に叩き込んでいく中で

レイ養祖父さんと同じようにチエスをして思考力も鍛えていく

だが、レイ養祖父さんは手加減していてくれたんだなとわかるほどに

チエスでフルボッコにされていく：

心が折れそうだ：

大学レベルの講義も進んでいくがその内容は科学だけではない

数学、英語やドイツ語等の語学を始めとして、医学や物理学等も学んでいく

それらは必要なのかと思うが、博士は

『我が半身ならばこの程度修めてみせなさい』

との言葉を残し、一切容赦をしてくれない：

俺は魂の状態なので食事をする必要はないのだが、代わりに気分転換となるものが博士とのチエスぐらいしかないのが玉に瑕だ

まあチエスは毎度フルボッコにされるので気分転換どころではないのだが博士に一泡吹かせてやろうとチエスの内容を検討していくのはとても楽しいそして、大学レベルの講義が始まり2年、博士にレポートで及第点を貰うことが出来るようになった

素直に嬉しい

チエスに関しては漸く敗着の原因となった一手がわかるようになり成長を実感していると、博士に暖かい目で見られた

…絶対に一泡吹かせてやる！

それからは大学院レベルの講義となり内容も一層難しくなっていた大学レベルまで3年でいけたことからどこか軽く考えていたが

博士の講義のおかげなのだと改めて思い知ることが出来た

そして、博士から及第点が貰えるまで2年かかり、いよいよ重力に関して講義をして貰えることになった

だが、驚いたことに重力以外に博士の世界の魔術や

人型機動兵器についても教えて貰えたのだ

ゲシユペンストに始まり、果てには博士の愛機であるグランゾンまで……
何故教えて貰えるのか聞いたのだが、知識に無駄なものはなく、それだけで武器になる

そして、武器ならば使えない事と、使わない事には大きな違いがあると……
故に使わない事、もしくは使えないふりを選択出来るようになりなさいと
これまでに無い優しい表情で言われた

博士には感謝してもしたりないな……

重力や魔術、グランゾン等の事を学び始めて2年、この場所で7年程経った頃
俺は博士による全ての講義で合格を貰う事が出来た
そして、俺は博士との最後のチエスの勝負を始めた



「……ステールメイトですね」

「ククク、お見事ですすよ我が半身」

博士はお見事と言ってくれたが、私は全力で挑んだのに対して

博士は余裕を持ってこの結果なのだ……

「今日までの数多の勝負で、貴方は全て敗北してしまいました：ですが、今日貴方は私から初めて引き分けを得る事が出来たのです：自身の成長を誇りなさい、我が半身」

博士にそう言われて気持ちが悪れてきた：我ながら現金だと思ふ

「貴方は私の予想を超えて、7年で学び終えることが出来ました

もつと自信を持つても良いのですよ？」

私は凡人だ：この結果は博士のおかげなのだから：

「やれやれ、謙虚なのは美德ですが、卑屈なのはいただけませんね：」

：私自身成長の自覚はあるが、心にしこりのようなものが残っている

「どうやら貴方が自信を得るには、貴方自身の手で成し遂げなければ

ならない事があるようですね」

：アーロン！

私の脳裏に色褪せることのないあの日の光景が甦る

「我が半身、私から一つ、最後に教えて差し上げましょう」

私は博士の言葉の続きを待つ

「貴方が生きている世界に近くて遠い世界で起きた事象なのですが

10年後にアーロンと呼ばれている魚人が何者かに倒されます」

10年後…

「ですので、貴方が自身の手で報復を成し遂げ、自由を取り戻すつもりならばその事を覚えておきなさい」

「…教えていただき、ありがとうございます」

私は最大限の感謝を込めて博士に頭を下げる

「では、行きなさい我が半身。貴方の生き様を見守らせていただきますよ」

「はい！本当にお世話になりました！」

私はもう一度頭を下げる

この場所での7年が頭を過り涙が出てくる

「さあ、目を閉じなさい。次に目覚めた時には、貴方の世界に戻っていますよ」
博士の言葉に応じて目を閉じる

目を閉じる前に見えた博士の表情は、とても暖かいものだった

第42話

目を覚ますと、始めに目に入ったのは満天の星空ではなく、木目の天井だった。どうやら、無人島の拠点ではないようですね…」

少し寝惚けたような感覚の中で思考を巡らせていく

すると、少し慌てたような足音と共にドアがノックされて

レイ養祖父さんが部屋に入ってきた

「…目が覚めたようだね、シユウ…よかった」

心底安堵したようにレイ養祖父さんは息を吐く

「かなり心配をかけたようですね、申し訳ありません」

「いや、私がシユウの疲労具合を読みきれなかったのが悪いんだ…すまなかった」

そう言ってレイ養祖父さんが頭を下げてくる

太極で7年過ごしたのならば、この世界では7日経っているということだ

レイ養祖父さんには相当に心配をかけたのだろう

私は少し思案する

太極で多くの知識を学んだことを話すかどうかだ

…リスクはありますが、ある程度話した方が今後動きやすくなるでしょう
「なにか考えているようだが、どうかしたのかな、シユウ?」

「だいたい慌てていたというのに、この察しの良さは流石といったところだろう」

「そうですね、寝ている間に不思議な体験をしました」

「ほう、どんな体験かな?」

「夢の中でもう1人の私に能力について教えて貰ったのですよ」

私の言葉にレイ養祖父さんが興味深そうに見てくる

「それで、シユウの能力は何なのかな?」

「私の能力は重力を操るものですね」

レイ養祖父さんは髭をしごくようにして思案していく

「能力者の中にはふとしたきっかけで能力への理解を深め次なる《ステージ》に

進む者がいるという話を聞いたことがあるね」

「次なる《ステージ》ですか?」

非常に興味深いワードをレイ養祖父さんが溢した

「もしかしたらだが、シユウは疲労の極限状態で能力を使ったことで

そこに至ったのかもしれない…というのが私の見解だ」

「なるほど…面白いものですね、悪魔の実という物も」

機会があれば研究してみるのも悪くありませんが、今はやるべきことがあります
「それで、重力を操ると言ったが、どういったことが出来るのかな？」

「あくまで理論的なことを学んだだけなので実践できるとは限らないのですが…」
そして、私は能力で出来ることを話していく

「私を知る能力には、自重を操作したり、シキのように物を浮かすことが出来たりと
いったものがあるが…ワームホールというものは聞いたことがないね」

レイ養祖父さんは眉を寄せ手を組んで考えている

「私が気を失う前に使おうとしたのがワームホールになりますね」

「あれか…興味深いが、病み上がりのシユウに使わせるわけにはいかないな」

私としては寝過ぎてフワフワとした感覚があるぐらいなので問題ないのですが

これ以上レイ養祖父さんを心配させるのは得策ではないでしょう

「それで、私の修行はどうなるのでしょうか？」

「3日程はゆっくりしなさい。それが過ぎるぐらいには

待ち人も来るだろうから丁度いいだろう」

3日か…でも

「待ち人ですか？」

「ああ、私の予想が正しければ君の父親であるシャンクスが訪ねてくるだろう」

父さんが…

「レイ養祖父さん、少し剣呑な雰囲気を感じますが、父さんをどうするのですか？」
「おや、察しがよくなったねシユウ、見聞色の練度が上がったかな？」

茶化すように話してくるが私は目を反らさずに見続ける

「やれやれ、降参だ。私はシヤンクスを一発殴るつもりだよ」

「何故でしょうか？」

「一言で言えば…養祖父としてのケジメだね」

私も父さんに思うところがないわけでもないですが…

「レイ養祖父さん、私は3日は大人しくしていなければいけないのですよね？」

「そうだね、でもチェスをするぐらいならば構わないよ」

ふむ、なら少し父さんに助け船を出しましょうか

「賭けをしませんか、レイ養祖父さん」

「賭け？何を賭けるんだい、シユウ」

「3日間のチェスの勝負で勝ち越した方が父さんを殴るといふのはいかがでしょう」

私の提案にレイ養祖父さんが笑いだす

「ふふふ、いいね。だが、賭けならば容赦はしないよ、シユウ」

「ええ、望むところです」

こうして私は、目を覚ましたその日からレイ養祖父さんと賭けチエスをする事になった



シユウが気を失ってから7日、ようやく目を覚ましたことに私は深く安堵したしかし、目を覚ましたシユウが告げたことに私は驚く事になった
なんと寝ている間に能力のことを学んだというのだ

正直なところ聞いたことがないものだが、嘘を言っているようには見えないそれに、シユウの目は7日前に比べて深い知性を宿しているように見える
もし、シユウが学んだというのが本当ならば他にも何かを学んでいるだろう
やれやれ、アカリに似て常識外れなところがある子だな

こうも楽しませてくれるとは：師として冥利に尽きるというものだ
さて、チエスの勝負を申し込まれたが：どうしたものか
シユウにシャンクスを殴らせるのも一興だが：

ベットを上げてシユウが他に何を学んだのか聞くのも悪くないか
この時の私は知るよしもなかった

この後、シユウとのチェスで彼の驚異的な成長を知ることになることを…

第43話

あれから3日、私はレイ養祖父さんとチェスに明け暮れた

結果としては私の負けだ

1勝も得る事が出来なかったが幾度も引き分け、あと一歩までいけたのは大きな経験となったと思う

しかし、レイ養祖父さんが途中で賭け金の吊り上げを申し込んできた

内容としては私が勝てば2勝分の勝ちを献上、代わりに負ければ

私が寝ている間に学んだことを話すというものだった

元々、幾つかは話すつもりだったがそれが言う前に察してしまわれたことに私は少なからず動揺してしまった

レイ養祖父さんの洞察力はとんでもないですね

結果として、この世界にもある医学や科学のことを学んだと話すことになった

レイ養祖父さんはココヤシ村にいたころに学んだのではないかと疑ったが

博士号を得た学者などでない限り知り得ないような知識を持つていることで

私が寝ている間に学んだと納得したようだった

そして、この3日で最後の勝負を終えた盤面の前で検討をしていたのだった



「ステールメイトですね」

「驚いたね、まさか寝ている間にここまで腕を上げているとは想像もしなかったよ」

まだ余裕を残した様子のレイ養祖父さんが私を称賛してくる

「何が足りなかったのでしょうか？」

私は盤面を見つつ思考を巡らせていく

検討を重ねレイ養祖父さんの手筋を読み、戦術を修正していったのだが

この3日間で勝ちを得る事は出来なかった

漠然とだが何か足りないとは感じているのですがそれが何がわかりません…

「私の私見になるがいいかな？」

「お願いします」

レイ養祖父さんが頷き話しを続けていく

「シユウに足りないもの…それは、勝負勘だね」

「…勝負勘、ですか？」

言われて考えてみる

どこか攻めきれないところがあつたり良いところで抑えられたりした場面が何度もあつた

「チエスに限らず、戦いには勝負所が幾重にも存在する。それを掴めるかが勝ち負けを左右するといつても過言ではない」

勝負の流れというやつでしようか？

「時にそれは、力や技術といったものを覆すほどの重要なものとなる…

シユウにはそれがまだ足りなかったね」

「…それは鍛えることが出来るのでしようか？」

レイ養祖父さんは微笑み私を見てくる

「生まれながらにその勝負強さを持つ者もいるが、経験でそれを

鍛えていくことも出来るね…私がその例だ」

「ちなみに、生まれ持つていた者は…」

「私を知るところでは、ロジャーやガープがいい例だね」

「これはまたとんでもない大物の名前が出てきました

「正直なところ、若い時にはあの2人の戦いにはついていけないところがあつた…

だが、グランドラインで揉まれていく内に、私も負けないうようになったのだよ」

当事者から聞くと説得力がありますね

「だから、慌てず、諦めず、前に進みなさい。人の意思の力は可能性に満ちているのだからね…」

私はレイ養祖父さんの言葉に感銘を受けながら素直に頷くすると、レイ養祖父さんは外に目を向けた

「どうやら待ち人が来たようだ。それでは、席を外すよシユウ」
賭けの通りに父さんを殴りにいくようだ

私は父さんの無事を祈ることにした



レイリーさんを訪ねてシャボンディ諸島にやって来た俺達だが、

レイリーさんがいるという酒場の前に来たならレイリーさんが中から出てきた
どうやらレイリーさんに予想されていたみたいだな

「さて、先ずは久しぶりというべきかな、シャンクス」

「はい、久しぶりです、レイリーさん」

挨拶をしながらレイリーさんが俺に向かって歩いてくる

「歯を食い縛りなさい」

その言葉と同時に俺はレイリーさんに殴り飛ばされる

一緒に来ていたベックマンが構えるが、俺は手でベックマンを制する

「何故殴られたのかは、言わなくてもいいだろう?」

「…はい」

その通りだ、今更ノコノコと顔を出したのだからな…

「用件は察しているが…聞いておこうか、シャンクス」

「…息子の居場所を知りたい」

レイリーさんが霸王色の覇気で威圧してくる

「知ってどうする?」

「…色々と謝りたいのもあるが、それ以上に会いたい」

レイリーさんは1つため息を吐くと、酒場の方に顔を向けた

「出てきなさい、シユウ」

レイリーさんの言葉に俺は酒場の入り口に目を向ける

出てきた人物は、アカリと同じ波打つ紫の髪少年だった



レイ養祖父さんの言葉で外に出てみるとそこには頬を腫らした赤髪の男がいた
初めて会うのに私は直感した…この人が私の父親だと

「初めましてですね、シラカワ・シユウです」

私が名乗ると父さんは土下座をした

「…すまない、シユウ」

「…顔を上げてください、父さん」

顔を上げた父さんは目を見開いて私を見てくる

「…俺を、父と呼んでくれるのか？」

「それ以外になんとお呼びすればいいのですか？まさか、アカリママのように

パパと呼べとは言わないでしょう？」

父さんは少し困ったように頭を掻いている

「パパなんてのは柄じゃないな…しかし、アカリはママと呼ばせていたのか」

「ええ、母さんと呼ぶと頬を膨らませて拗ねるので困ったものでした」

「アカリらしいな」

顔を見合わせた私と父さんはどちらともなく笑いだす

「さて、お互いに積もる話もあるので、まずは食事でもしましょうか」

お連れの方も遠慮せずどうぞ」

そう言ってシャツキーさんの店に誘う

立ち上がった父さんが私の頭に左手を載せてきた

父さんの手はとても暖かいものだった

第44話

シャツキーさんの店で食事をする事になったが

父さんは一味のみんなも呼び宴になったのだった

なにせ8年も私を探したのだから祝わないでどうするとのことで

父さんの船から酒樽を運び込み飲み飲めや歌えやの大騒ぎだ

あいにく私はまだ酒を飲めないのみかんジュースを飲もうとしたのだが

父さんが紅茶の茶葉を持ってきて奨めてきた

なんでもアカリママは紅茶が好きだったらしい

：ココヤシ村では自家製のみかんを使ってジュースを作っていたのだが

これからは紅茶を飲むのも悪くないですね

お互いのこれまでのことを肴に食事は進んでいく

食後の一服として紅茶を飲んでまったりしていたら父さんの一味の副船長である

ベックマンが目敏くチェス盤に気付いた

そこでなんやかんやがあつて私とベックマンがチェスで勝負することになった



「…ステールメイトだな」

「ありがとうございます」

勝負は引き分けだ

序盤は様子見の気配が伺えたので油断している内に仕掛けたのだが
中盤の手痛い一手で劣勢に追い込まれた

だが、博士やレイ養祖父さんとの対戦の経験のおかげか

なんとか劣勢を捲り引き分けに持ち込むことができた

「…シユウ、お前は本当に10歳か？」

「はっはっはっは！さすが俺の息子だ！」

盤面を見詰めるベックマンと上機嫌な父さんの対比が面白い光景だ

「さて、宴の最中だが確認しておこうか。シユウ、君はこの後どうするのかな？」

私とベックマンの勝負を見物していたレイ養祖父さんが声をかけてきた

「どうとは？」

「シヤンクスと行くか、ここに残るかということだね」

レイ養祖父さんの言葉に父さんだけでなく一味のみんなが私を見てくる

「シユウ、お前がどちらを選ぼうと俺はそれを尊重する

それと、俺に出来ることならば何でも言ってくれ」

父さんがそう言うてくる

私はレイ養祖父さんが父さんとやりあっている間に考えたことを話すことにした
「確認ですが、アーロンはまだココヤシ村を支配しているのですかね？」

「ああ、シユウが望むのなら俺達が……」

「結構です、私自身の手で報復するので手を出さないでください」

私の言葉に一味のみんなが笑いだす。さすがは頭の子だと囁し立ててくる

「そして、申し訳ありませんが私はレイ養祖父さんに鍛えてもらいますので

父さんと一緒に行くことは出来ません」

「……そうか」

父さんが肩を落としている……ごめん、父さん

「それと……幾つか頼み事をしてもいいでしょうか、父さん」

「ああ、何でもいってくれ」

予想はしていたが間髪入れずに応えた父さんに苦笑いがでる

「医療関係の本や器材、それと研究のための資金をお願いします」

「構わないが、何をするんだ？」

「アカリママの命を奪った病への報復とココヤシ村への報せ…その両方を同時にやろうと思っています」

私の言葉に父さんは首を傾けたがレイ養祖父さんとベックマンは興味深そうに私を見てくる

さて、博士から学んだ知識を私がどこまで使えるか…

残された時間は10年程です…自重なんてしている暇はありません！
私はチェス盤に目をやる

これから成すべき事を一手、また一手と頭の中に積み上げていった…



シユウが居なくなつてから2年程経つた

まだ報せは届いていない…

シユウが生きていることを信じて、畑の世話を続け家を守っている

今年もココヤシ村の皆が無事に税を納めることが出来た

細やかながら身内で祝いをしている

派手にやればアーン達目の目に入り嫌がらせに家を逆さにされたりと

面倒なことをされてしまうからだ

祝いの食事も終わり、食後の一服で煙草を吸っている時、ニュース・クーが新聞を持って家にやってきた

「どうしたのよ、今日の新聞はもう買ったわよ？」

「クー！」

首を振っているのを見ると、どうやら違う新聞らしい

「号外？」

号外は情報の特急で報せるためのものなだけけど、その分だけ割高の新聞だ

いつもなら買わないけど、この時の私は何か予感めいたものを感じて買うことにした

お金を受け取り飛び立つニュース・クーを見送り、家に入る

自分の席に座り号外を広げると、大きな写真が目に入った

「こんなに大きな写真を一面に貼るなんて、随分と気合いが入っ……て……？」

その写真に目を見開く

写真に写っている人物は、波打つ髪に、切れ長で知性を感じさせる目……

「ナミ——！ノジコ——！」

私は号外を握りしめ養娘達を呼ぶ

この時に発した声は、喜びに満ちていた



この日の号外は世界に衝撃を与えた

僅か10歳の時に博士号を手にした若き天才が、2年の歳月を研究に費やし

世界三大死病と呼ばれる心臓病、労咳、癌、それぞれの特効薬を造り出したのだ

その若き天才の名は《シラカワ・シユウ》

この若き天才はこの特効薬の製法を開示すると公言したが

臨床試験等が不十分との理由から世界会議にて議論されることになっている

近々、シラカワ博士は世界会議に招かれるだろう

シラカワ博士は本紙のインタビュにこう答えている

『私が未熟な子供であることは重々承知しています。ですから、私が20歳に

なるまでに足りないものを埋めてみせましょう。そして、それが成った暁には

私は在るべき場所に帰り、成すべき事を成すでしょう』

既に三大死病の特効薬を造り出すという偉業を成し遂げた若き天才だが

更なる向上心を見せている

シラカワ博士も参加する世界会議はどういった結論をだすのか

世界に朗報をもたらした特効薬の製法はどうなるのか
本紙は情報を追っていくことを宣言する

第45話

父さんと会ったあの日から2年程経った

太極で学んだ博士の知識を用いて死病の特効薬を造ったのだが

その道のりはトライ&エラーの繰り返しだった

薬や成分などの名前が違ったりと調べるのが山ほどあり

予想以上に時間がかかってしまったが楽しい時間でもあった

それに知識を用いることの難しさを知ることができたのも良い経験だった

修行の合間に研究をしていたのも気分転換になりよかったと思う

修行の方は能力を使い熟すことを中心にやっていった

現在ではあの老人に求めた能力をほぼ使えるようになってる

自身にかかる重力を増やし、空気を濃くすることで修行の効率をあげている

空を飛ぶこともできるようになっているし凄く便利な能力だ

だが一部の能力はある程度の制限のようなものがある

ワームホールによる長距離転移は私が能力を得た後に、私が行ったことがある場所に

しか

転移することが出来ないのだ

短距離転移は俺が視認している範囲内ならばできる

湾曲フィールド：所謂バリアは正直使えない

いや、使えないことはないのだが戦闘においてバリアの役割は果たせない
というのが正しいだろう

日光や風を遮ったりすることで比較的快適な空間を作るのがバリアの役目だ
能力は現在のところこんな感じだ

覇気に関しては武装色以外は大きな成長は感じられない
無意識に纏っていた武装色を意識的に使えるようになった程度だ

レイ養祖父さんや父さんは今の年齢でそれだけで十分だと言ってくれるが
周りにいるレイ養祖父さんや父さんとどうしても比べてしまうので

まだまだ足りないと思ってしまうも無理もないだろう
私の近況としてはこんな感じだ

そして、特効薬を造ったことで世界会議に参加することになった
そろそろ迎えがくるはずだ

噂をすればなんとやら、酒場の入り口が勢いよく開かれた



「シユウはおるか——！」

2年前と変わらなず壮健そうに見えるガープさんが勢いよく酒場に入ってきた

「あら、いらつしやいガーさん」

「おお！ シャクヤク、元気にしとつたか！」

シャツキーさんとガープさんはどうやら顔見知りのようだ

「お久し振りです、ガープさん」

「久しいのおシユウ。しかし、とんでもないことをやらかしおつたな」

「悪いことをしたように言わないでいただきたいですね」

「ぶわっはっはっは！」

私の言葉をガープさんが豪快に笑い飛ばす

恩人の変わらぬ姿に安堵する

「相変わらずだな、ガープ」

「おう、レイリー！ お前は少し若返つたんじやないか？」

「張りのある生活をしているからな。それに、お互いに老け込むのはまだ早いだろう？」

「その通りじゃ！ ぶわっはっはっは！」

老いて益々盛んという言葉がよく似合う2人だ

「ガープさん、お聞きしたいことがあるのですが」

「ん？なんじゃ？」

「今回、私が世界会議に呼ばれることになった経緯です」

ガープさんが渋面をする

ガープさんにとっては面白くないことのようにだ

「グランドラインに医療大国と呼ばれるドラム王国があるのじゃが、知つとるか？」

「名前だけは知っていますね」

「その国王が『医療大国の我が国で特効薬の確認を』とかなんとかごねおったのが

今回の事の発端じゃのお」

ガープさんの言葉に私とレイ養祖父さんは顔を見合わせる

「レイ養祖父さんの予測が当りましたね。お見事です」

「シユウもあの国の情報を持っていれば予測できただろうね」

「その知識や情報を持っているかも当人の器量ですからね。私もまだまだです」

私達の会話をガープさんが呆れた様子で聞いている

「相変わらずじゃのう、お主らは」

頭を掻いているガープさんを見て私とレイ養祖父さんは笑った

「さて、そろそろ行くぞい、シユウ」

「ガープ、シユウの帰りはワノ国に送ってくれ」

「ブンタの所か？」

「ああ、シユウの基礎も出来上がってきたからな」

ブンタ…私の祖父ですか

「わかったわい。それでレイリー、お前は どうするんじや？」

「私は一足先にワノ国に向かうとするさ」

ガープさんは肩を竦めて答えるレイ養祖父さんから私に目を移した

「しかし、残念じやのう」

「なにがでしようか？」

「特効薬じやよ。シユウの思う通りに製法は広まらんじやろう」

ガープさんの言葉に私は笑いで答える

「なんじや？」

「ククク…失礼しました。実は特効薬は1年前には出来ていたのですよ」

ガープさんが目を見開いて驚いている

「出来上がってから1年…父さんに頼んで知己を得ている医者の方々に

特効薬のサンプルと製法を記した資料を届けてもらっています」

「…レイリー、お前の差し金か？」

「まさか、シユウが考えたことだ」

ガープさんの反応にレイ養祖父さんは愉快そうに笑っている

ガープさんはジト目で私を睨んできた

「それでは行きましょうか、ガープさん」

「はあく…レイリー、シユウを借りていくぞ」

「ああ、いつてらっしやいシユウ」

こうして私はガープさんの案内で世界会議に赴くことになった

この世界を統べる王族や貴族がどういった者達なのか…

私は少しの楽しみを胸に船旅を楽しんだ



医療大国と呼ばれるドラム王国に、かつて西の海で大盗賊と呼ばれた男がいる

その男の名はヒルルク

盗賊として多くの富を集めた男だが、その身に起きた奇跡により改心

無償で患者を治療する心優しき医者へと転身した

もつとも、その腕前は患者が治療を拒否する程のヤブなのだが……
そんな心優しきヤブ医者の子ルルクは、かつて己が身を蝕んだ病に
再びその身を侵され、死期が迫っていた



「俺あ、死ぬだろう?」

ヒルルクが己の手にベツタリとついた血を見て呟く

「ヒーヒツヒツヒ、死ぬねえ」

ヒルルクの呟きに応えたのは魔女と呼ばれる名医くれはである
このくれはは、名医であるが莫大な治療費を要求してくることで
ドラム王国では有名な老婆である

顔に刻まれた年輪は年相応だが、その身体は非常に若いことも
彼女が魔女と呼ばれる所以の1つだろう

「もつて3カ月つてところか……」

「おや、死期がわかるなんて腕をあげたねヒルルク、ヒーヒツヒツヒ!」
くれははの物言いにヒルルクが驚く

「お前が誉めるなんて珍しいな、上機嫌だが何かあったのか、くれはは
「ヒーヒツヒツヒ！」

くれはが笑いながら何かをヒルルクに放り投げる

「ん？新聞か？」

ヒルルクは手についた血をハンカチで拭ってから新聞を開く

「ほく、10歳で博士号たあ凄い坊主だな」

「そこじゃないよ、もつと先さね」

ヒルルクが新聞を読み進めていく

「えくと、2年の歳月を研究に費やし、三大死病の特効薬を…特効薬!」

驚愕のあまりに叫びながらくれはを見たヒルルクが目にしたのは

ガラスの小瓶を上機嫌に持っているくれはだった

「これがその特効薬のサンプルだね」

「くれは…何故お前がそれを…」

くれはが『ヒーヒツヒツヒ!』と上機嫌に笑う

「古い知り合いの所で見習いをやっていた男が、このサンプルと

製法が書かれた資料を持ってきたのさ」

彼女は上機嫌に言葉を紡いでいく

「あたしが調べた所、この資料に間違いはないね…つまり、これは本物の特效薬さ」
僅か12歳の少年が、目の前の天才でも造れなかった薬を造り出す…

その事実をヒルルクは正確に認識出来ているのか自信がなかった

「それで、どうするヒルルク…この薬、試してみるかい？」

「あ、ああ…」

心此処に在らずといった具合のヒルルクを見てくれはが笑い出す

「そうだ、あんたの所のトナカイ、文字の読み書きぐらい仕込んであるんだろう？」

あたしの手伝いをさせるから連れてきな」

「チョッパ―をか？…どういう風の吹き回しだ？…くれは」

ヒルルクの知るところでは少なくともくれはが自分から弟子をとるような

性分ではないと思っっている

そこに自分の息子のように思っているチョッパ―を連れてこいと言われたのだ

ヒルルクの疑問も当然のことだろう

ちなみに、チョッパ―とは《ヒトヒトの実》を食べた青鼻のトナカイである

その容貌などからトナカイ、人間共に仲間外れにされていた所を

ヒルルクが引き取り一緒に暮らしているのだ

「なにせ世界初の新薬だからね、経過観察を余すところなく取らないとね

あたしの研究の為に、ヒーヒツヒツヒ！」

またも上機嫌にくれはが笑い出す

医者をしていることから彼女も心優しい人間なのだが、如何せん素直ではない

「ハッピーかい？ヒルルク」

死期が迫り、残される養息子であるチョツパーのことを真剣に

思い悩んでいた日々に再び舞い降りた奇跡

ヒルルクは呆然とするしかなかった

「若さの秘訣かい？」

「いや、聞いてねえ」

第46話

3日前の号外でシユウの無事を確認できた私達は以前にも増して自然に笑顔になるようになった

畑の世話を終えたナミは今日もあの日の号外に載っている

シユウの写真を見ながら満面の笑みになっている

間違いなく恋する乙女の表情だ

「まくたそれを見てるの？熱いわね〜ナミ」

「ほつといてよ、ノジコ」

いつものようにナミをからかうノジコだけど、そのノジコも嬉しそうに笑っている

「さあ2人共、そろそろ商人が来る頃よ、手伝ってもらうから着替えてきなさい」

「は〜い」

ノジコは部屋に向かったけど、新聞を片付けていたナミは動きを止め私を見てきた

「ねえ、ベルメールさん」

「どうしたの？ナミ」

ナミは意を決したように一呼吸置いてから話し始めた

「わたし、アーロンの一味に入ろうと思うの」



「どういうこと、ナミ」

ベルメールさんがわたしを睨んでくる

仕方ないと思うけど…ちよつと怖い

「シユウが頑張ってるから、わたしも頑張ろうと思つて」

「…それが何でアーロンの一味に入ることになるのかしら？」

わたしはシユウがいなくなつてからすつと考えていたことを話すことにした

「わたし、アーロンからココヤシ村を買おうと思つてるの」

わたしの言葉にベルメールさんが驚いている

「あの時から、アーロンは約束を守ってるでしょ？だから、ココヤシ村を

買うことも約束すれば守ると思うわ」

「アーロンが約束を守るとしても周りもそうとは限らないわよ…」

それに、どうしてそれがアーロンの一味に入る事と繋がるの？」

わたしは自分の考えを纏めながら話していく

「ココヤシ村を買うならいっぱいお金が必要だね。でも、畑の世話をしているだけじゃそんなに貯めることが出来るとは思えない…」

わたしの話をベルメールさんは腕を組んで聞いている

「そうすると、外に稼ぎに行かないといけないうだけ…アーロンがただで外に出すとは」

思えないわ。だからアーロンの一味に入って外に出れるようにするの」

「ナミ…外で稼ぐってどうするつもり？」

「海賊から盗むわ」

ベルメールさんがため息をついてる

「ナミ、海賊を…海を舐めすぎよ」

「でも…」

「でも、じゃないわよ。航海術も戦闘技術もないあんたが海に出ていったら

海で遭難か海賊に殺されるだけだわ」

ベルメールさんの言うこともわかるけど…

「殺されるのならマシな方よ。あんたは女の子なんだから、最悪の場合

どうなるか想像がつくでしょう？」

その言葉に嫌な想像が頭に浮かぶ

シユウ以外の男になんて絶対に嫌!

「ナミ、新聞に書いてあったシユウの言葉…覚えてる?」

「うん、覚えてるわ」

「あれは多分、私達に向けたメッセージよ。そうになると、後8年でシユウは帰ってくるわ…それまで待てないの?」

わたしの頭にシユウがいなくなつた日の事が浮かぶ

「…シユウは、アローンと戦うつもりよね?」

「おそらく、そうでしょうね」

「勝てるの?」

ベルメールさんが目を瞑つて考え始めた

元海軍本部の大佐だったベルメールさんが勝てなかつたアローンに

シユウが勝つ想像ができない…

それだけじゃない…また、シユウがあんな目にあつたらと思うと…

わたしの身体が震えだす

好きな人が目の前でいなくなつたあの光景を繰り返したくない

あの日から何度も思つた、何度も考えた、わたしに出来ることを

もう、大切な人を失わないで済む方法を

「…はあく、これ以上は言っても聞きそうにないわね」

ベルメールさんが頭を掻きながら話した

「まったく…その頑固なところは誰に似たのかしらね」

ベルメールさんが話しながら屈み、わたしと目を合わせてきた

「ナミ、3年我慢しなさい」

「え？」

3年？

「3年であんたに航海術と戦闘技術とかを叩き込んであげる

少なくとも、この東の海で生き残れるようにならないと、母親として認めないからね」

3年で…わたしに出来るの？

「他にも盗む為の技術も必要ね」

「それも知ってるの？ベルメールさん」

「昔、ちよつとヤンチャをしていた時期もあるからね」

ベルメールさんが笑いながら答えてくる

ヤンチャって…何していたの、ベルメールさん？

「それと、女としての魅力も磨かないとね。シユウが帰ってきたら

メロメロにしてやりなさい」

ウインクをしながらベルメールさんが言ってくる
メロメロって…

わたしはその想像をして顔が熱くなってしまうた

「あらあ、何を想像したのかしらね、ナミ？」

「な、何も考えてないわ…」

もう！どうしてノジコとベルメールさんはこうしてからかってくるのよ！

わたしはベルメールさんから目を逸らすことしか出来なかつた

「あつはつはつは！さあ、着替えてきなさい。商人との交渉が終わったら

すぐに鍛え始めるから覚悟しておきなさい」

「うん！」

わたしは着替えるために部屋に向かつて走り出す

ノジコはもう着替え終わって待っていた

…見られていたわよね？

着替えている最中、ノジコにからかわれそうだわ…

こうしてわたしは、アーロンからココヤシ村を取り戻すために

修行を始めることになった

わたしは好きな人の事を思い浮かべる

シュウ、わたしも頑張るわ
だから、無事に帰ってきてね

第47話

ガープさんの案内で世界会議が行われる場所にやってきました
さすがに王族等が来る場所と言うべきか凄く広い場所だ

私を送り届けたガープさんはそのまま警護の任につくらしい

《英雄》ガープの警護とは贅沢なものです

ガープさんの副官であるボガードさんに待機場所に案内して貰っていると
水色の髪の少女が走り回っている光景を目にした

少女の髪の色がココヤシ村のノジコを思い出させてくれて
心に暖かいものが溢れてくる

私はその暖かいものに改めてアロンへの報復を誓った

子供故の不注意か、その少女がふくよか過ぎる体型の男とぶつかってしまった
レイ養祖父さんから注意されていたので見聞色の覇気を使っていたのだが

見聞色で感じ取った男の感情は稚氣と怒気だった

男の感情から良からぬ行動を予測した私は能力を使い少女の近くへ轉移した



「無礼な小娘が——！」

初めてアラバスタ王国の外に出た私は浮かれてはしやぎ回っていた

そのせいで、王族の人達がいつぱいくるこの場所で誰かにぶつかってしまった

その人の怒りを買ってしまった

手を振り上げる男の人の姿が怖くて目を瞑ってしまった

バシッ！

大きな音がしたけど痛みがこない……

私は不思議に思っ顔をあげた

「失礼しました。物珍しさのあまり、目を周囲に奪われていました

不注意と無礼をお詫び致します」

私の目の前に片方の頬を赤くした紫の髪の男の子がいる

私は何が起きたのか知りたくてお父様とイガラムを探した

「まっはっはっは！無礼な小娘の代わりに不注意で殴られるとか、カバじゃなーい！」

大きな男の人が大笑いしながらそう言った

この男の子が私の代わりに殴られた？

「おい小僧、お前はどこの国の奴だ」

「私は王族でなければ貴族でもありません。今日の世界会議に呼ばれた只の科学者ですよ」

科学者？この人が？

白衣のような白いコートを着ている男の子を見る

この人が三大死病の特効薬を造った人…

「ほほう…おい小僧、無礼を働いた詫びとして特効薬を寄越せ！」

三大死病には世界中の人々が苦しんでいる

特効薬が出来たことは間違いなく吉報だけど、それにより人々に混乱が起きる

可能性もあるってお父様が言っていた

今回の世界会議はその混乱が起きないように皆で話し合うためのものなのに

この大きな男の人はそれを独占しようとするなんて…

「お断りします」

男の子が微笑みながら断った

…大人が怖くないの？

「小僧…このドラム王国の国王であるワポル様に逆らうのか！」

「特効薬の事を話し合うのが今回の世界会議の主題であったと思いますが

貴国の独断で利を独占するかのような発言：他国との戦争をお望みですか？」

ワポル国王が怒りで顔を真っ赤にしている

ワポル国王がまた手を振り上げようとしたその時、お父様が2人の間に割って入った

「ワポル殿、ここは私の顔に免じて引いてくれないか」

「あん？おっさん、誰だ？」

「私はアラバスタ王国の国王、ネフェルタリ・コブラだ」

お父様が名乗ると男の子が頭を下げた

子供とは思えない対応力に私は驚く

「おっさん、お前には関係ない。引っ込んでろ！」

「世界の民の行く末を左右しかねない問題だ。引くわけにはいかぬ」

お父様とワポルの間に険悪な雰囲気の流れた時、侍女の様な人が

ワポルのお付きの人になにかを話しかけた

「ワポル様、お食事の準備が整ったようです！」

「おお！そうか！行くぞ、チェス、クロマリーモ！」

そう言ったワポルはドスドスと大きな足音を立てながら走って行ってしまった

「ご助力、ありがとうございます。コブラ国王」

「公人として当然のことをしたまでのこと。感謝には及ばない」

男の子が頭を下げながらお父様に感謝をしている

「それで、自己紹介をして貰えるかな？博士」

お父様の言葉に私は男の子を見る

「申し遅れました。私はシラカワ・シユウです。以後、お見知りおきを」

微笑みながら名乗るシユウさんに私は見惚れてしまう

これが私、ネフェルタリ・ビビとシユウさんとの初めての出会いだった



水色の髪の少女にノジコの姿を見たことで放っておけなくてかばったのだが

どうにかなって正直ほっとしました

しかし、ドラム王国の国王ワポル：あそこで直球に特効薬を要求してくるとは…

レイ養祖父さんがとんだドラ息子が国王になったと評していたけど

正にその通りの人物だった

ああいった人物が王となっても国としての体を為しているのだから

政治というのはわからないものですね

あまり関わりたいと思いません

対してというのも失礼だがアラバスタ王国の国王であるコブラ国王は出来た人だ
世界でも類を見ない長い歴史を持つ大国を統べる人物なだけはあると思う

そのコブラ国王の娘、ネフェルタリ・ビビ王女は呆然としていた

まあ、自身の軽挙で国際問題になりかけたのですから無理もないでしょう

コブラ国王、ビビ王女、そして2人のお付きのイガラムさんとの挨拶もそこそこに
私はボガードさんの案内で待機場所に向かった

「あまり無理をなさらないでください、シラカワ博士」

待機場所に向かう道すがらボガードさんが話しかけてきた

「申し訳ありません。ですが、無理はガープさんで慣れているわけではありませんか？」

「その通りですが、だからといって歓迎するものではありませんな」

ボガードさんの物言いに思わず笑いが溢れてしまう

「少しは反省していただきたいですね、シラカワ博士」

「ククク…していますよ。ですが、後悔はしていませんので」

ボガードさんが呆れたようにため息を吐いた

その後、待機場所についた私は紅茶を楽しみつつ会議が始まるのを待つのだった

第48話

特效薬の事を決める為に世界会議が始まったのだが、その内容は

ワポルがひたすらに駄々を捏ねるといったものだった

医療大国であることを声高に語り特效薬の効能や服用方法を確認すると話せば
コブラ国王が大人の対応で場を宥めていく光景が続いている

他の国々の代表達は公式の場での失点を考えてか発言を控えているのが現状だ
時間的にそろそろ休憩でも挟むのではと考えていたところ

ワポルが上から目線で私に命令を下すように話しかけてきた

「小僧！俺様の話でわかったはずだ！特效薬を受け取ってやるから
ありがたく差し出せ！」

その体型でどうやってその椅子に座っているのか疑問なワポルを見つつ私は少し考
える

さて…どうしましょうか？

「ワポル殿、シラカワ博士はまだ若い、性急に答えを求めるのは如何なものかな」
「砂しかない国のおっさんは引っ込んでろ！これは俺様と小僧の話だ！」

一国の代表としてあるまじき振るまいをするワポルだが
各国の代表は知らん顔をしている

医療大国の名の通りに多くの医薬品を扱うドラム王国に輸出を止められれば
自国において病が蔓延しかねないのだ

…そろそろ良いでしょう

この品性に欠ける愚物に冷水をかけて差し上げるのも一興

私は特効薬を完成させてからの1年でやったことを話すことにした



「発言、宜しいでしょうか？」

シラカワ博士が声を上げた

ドラム王国の国王であるワポルが我が儘を言いたい放題にしていた世界会議だった
故

私とその調整に奮闘せざるを得なかったのだが、そこでワポルが
直接シラカワ博士に特効薬を要求してしまった

世界の多くの医薬品はドラム王国製であることが足を引っ張る

自国民のことを考えれば意地を張り続けるのも難しい

会議の前ではワポルの要求を断ったシラカワ博士だが……どうなる？

「発言を認める」

「ありがとうございます、議長」

王族が集まる故に、平民であるシラカワ博士が発言するには許可がいる

我らがシラカワ博士に求めた話し合いの場だというのに……嘆かわしいことだ

「王たる皆様にお配りした資料に記してあるように、特效薬は病が完治するまで

服用を続けなければなりません。つまり、完治を見極めることができる医者目と服用を続けることができる十分な数の薬が必要ということですよ」

シラカワ博士が確認するように会議場を見渡す

……子供とは思えない堂々たる振るまいだ

「だから、俺様の国が特效薬を貰ってやると言っているんだ！」

少しは控えんか！馬鹿者が！

ん？シラカワ博士が笑っている

「申し出、大変ありがたい事ですが、その必要には及びません」

「どういふことだ、小僧！」

シラカワ博士が冷笑するようにワポールを見る

「既に、特効薬のサンプルと製法を拮めているからですよ。ワポル国王」

シラカワ博士の発言にワポルは目を見開き口を大きく開けて驚愕している表情に出さないようにしているが、各国の王達も同様に驚いているようだ

「私の知人に頼み配っていただいた特効薬は、既に民間レベルで

使用が始まっているでしょう：後は、自国において追証し製造をどうするかで国民からの支持を得られるかが決まるでしょうね」

シラカワ博士の静かな笑いが会議場に響く

子供とは思えぬ凄みが私の身を貫く

「ククク、そう言う訳ですので、この会議は特効薬は既に拮まっていると王たる皆様には認識していただく形になりました。特効薬が皆様の国の繁栄の一助となることを願っています。以上で私の発言を終わりにさせていただきます」

そして、シラカワ博士は着席した

その後、ワポルが叫び声をあげながら椅子を破壊し、会議場を出ていったことで今回の世界会議も終わりとなった

本来ならこの後で《革命家ドラゴン》の事を話し合う予定だったのだが

各国の王達も足早に会議場を去っていく

シラカワ博士の発言にあつた自国民の支持を獲得するために躍起になるのだろう

もちろん私とて無視できるものではない

いや、砂の国たる我が国では民との共生こそが大事なのだ

早く国に帰り、特効薬の扱いを決めねばならぬだろう

だが、あのワポルに醜態を晒させたこの若き天才に一言礼を言っても遅くはあるまい
私は、まだ席に残っているシラカワ博士と話をすることにした



「少しいいかな？シラカワ博士」

各国のお偉方が足早に会議場を去っていく中でコブラ国王が私に話しかけてきた

「お苦しい立場でありながら御助力いただき、感謝します」

「礼を言うのはこちらの方だシラカワ博士。我が国の民、そして世界の民に代わって

礼を言わせてもらう…ありがとう」

そう言つてコブラ国王は私に頭を下げてきた

一般人である私に一国の代表たる王が頭を下げた状況に焦りが出る

「どうか頭を上げてください、コブラ国王」

「王たる者として当然の事をしているだけだよ…それに、ワポルのあの顔は痛快だった

からね」

頭を上げたコブラ国王が茶化すように笑う

「あの方は、少々品性に欠けていましたからね。頬への一撃の報復といったところでは」

「品性に欠けるか……シラカワ博士も中々に手厳しいな」

「おや、あの方と言っただけなのですが……コブラ国王には心当たりがあるようで」

「はっはっは、これは一本取られたな」

先程の敵かとも言える雰囲気を霧散させ一転、気さくな様子を見せてくる

ワポルとは役者が違いますね……素直にそう思います

「さて、こちらから話しかけておいて何だが、そろそろ失礼させて貰おう

我が国の民に朗報を届けなければならぬからね」

「道中の無事をお祈り致します」

頭を下げた私にコブラ国王は軽く手を振って去っていった

ワポルの印象が強かったですが、ああいう御仁もいるのですね……

勉強になりました

閑散としている会議場で私は自身の打った一手が成功したことを喜ぶ

そして、私はワノ国に行くためにガーブさんの所へ向かうのだった

第49話

ガープさんの船に揺られワノ国にたどり着いた私は

レイ養祖父さんと他2人の男女に迎えられた

「船旅お疲れ様だね、シユウ。世界会議はどうだったかな？」

「中々に面白かったですよ、見物する側としてはですが」

少なくとも政治家等としてああいった場に参加したいとは思いません

「レイリー殿、早く拙者達を紹介して欲しいのだ」

「ええ、私も早くシユウちゃんとお話しをしたいわ」

その言葉で2人に顔を向ける

1人は黒髪に鬚をして腰に直剣を帯びた壮年の男性

もう1人はアカリママと同じ紫の髪の三十路程に見える着物を着たお姉さんだ

「シユウ、この2人は君の実祖父母で、ブンタ殿とシオリさんだ」

私はレイ養祖父さんの言葉に驚く

男性がブンタ御祖父さんであるのは納得だがこのお姉さんがシオリ御祖母さん？

「初めましてなのだ、シユウ。拙者はシラカワ・ブンタなのだ」

「初めましてシユウちゃん。私はシラカワ・シオリよ」

2人が優しい表情で挨拶をしてくる

レイ養祖父さんの言うことに間違いはないようだ

「初めまして、ブンタ御祖父さん、シオリ御祖母さん。私はアカリママの息子で

シラカワ・シユウです」

「あら、アカリったら、私のことをママって中々呼ばなかったのに

シユウちゃんにはママって呼ばせていたのね」

シオリ御祖母さんがクスクスと上品に笑っている

「さて、3人共初めて会えた感動はあるだろうが、まずはブンタ殿の家に向かおうか」

「レイ養祖父さんはどうするのですか？」

「私はガープに礼でも言ってくるさ」

レイ養祖父さんの言葉を皮切りに、私は祖父母に伴われアカリママの生家に向かった



「やれやれ、ブンタの奴はだらしのない顔をしとるのお」

「そう言うなガープ、血の繋がりの無い私でもシユウと会えた時は感動したものだ

なれば、ブンタ殿やシオリさんの感動は一層のものだろう」

茶化すように言っているガープだが、僅かに目に涙が伺える

相変わず情に脆い奴だ

「まあ、農も休暇で孫に会えた時は似たようなものじゃからな、ぶわっはっはっは！」

ガープは家族への思いが非常に強い男だ

もつとも、ガープの息子はその思いとは別の道へ進んでしまったが：

「さて、そろそろ行くわい」

「ああ、世話になったな、ガープ」

互いの拳を軽くぶつけ、別れの挨拶とする

かつての好敵手とこういった時を過ごせるとは…人生わからないものだ

そして、ガープの船を見送った私は、ブンタ殿の家に向かった



祖父母の家でレイ養祖父さんを交えて食事を済ませた私は
祖父母の家にある道場で今の俺の力を祖父母に見せていた

「あらあら、凄いわねシュウちゃん。まだ12歳なんでしょう？」

「既にここまで覇気を使えるとは見事なのだ」

祖父母の称賛がむず痒い

「シユウ、レイリー殿から伺っているが、得物は直剣でよいのだな？」

「ええ、お願いします。ブンタ御祖父さん、シオリ御祖母さん」

ブンタ御祖父さんが道場の壁に立て掛けてある木剣を手に取る

「拙者の剣の腕は海で揉まれたレイリー殿には及ばないのだ

だが、剣を扱う技なればその限りじゃないのだ」

そう言ったブンタ御祖父さんは木剣を振っていく

踏み込んで振るう、踏み込んで振るう

それを繰り返していく姿はどこか芸術を思わせるものだった

「刀を扱う流派の多くは『後の先』を旨として守りを重視した脚捌きとなるのだ」

「守りですか？」

「うむ、打たせずに打つ、斬らせずに斬る。得物をぶつけ合うことを避け

相手を斬る……これが刀を扱う流派の主な特徴なのだ」

ブンタ御祖父さんの言葉に違和感があるがおそらくは虚憶による

先入観のせいでしょう

「対して、シラカワ流は攻めの流派なのだ。武器破壊も視野に入れ

相手の得物と打ち合っっていくのだ。攻めのための防御なのだ」

話ながらも剣を振り続けていくブンタ御祖父さんだが息に乱れは無い「負けない為の剣ではなく、勝つための剣…それがシラカワ流なのだ！」

ボツ！

一際鋭い音を立てて剣が振るわれブンタ御祖父さんの演武は終わりになった「剣の上達に一段飛ばしの成長はあれども、近道は無し…覚悟はいいのだ？」

「はい、お願いします」

ドヤ顔を決めるブンタ御祖父さんに私は頭を下げた教えを乞う

「うむ、では後は頼むのだシオリ」

「はい、任されたわ」

おや？ブンタ御祖父さんが教えてくれるのではないのでしょうか？

そう思ってブンタ御祖父さんを見てみると、ブンタ御祖父さんは顔を逸らした「…シオリがシラカワ流の師範で拙者よりも指導は上手いのだ」

「あら、剣の腕でも負けた覚えはありませんよ、ブンタさん？」

「少しは孫の前で格好をつけさせて欲しいのだ…」

項垂れるブンタ御祖父さんに、楽しそうに笑うシオリ御祖母さん

尻に敷かれるとはこういう関係を言うのだろうか

「ふふふ、今まで会えなかった分、シユウちゃんには一杯甘えて欲しいのだけど
劍の事では一切容赦しませんからね♪」

何故か恐怖を感じるシオリ御祖母さんの笑顔

そのシオリ御祖母さんの笑顔を見たレイ養祖父さんとブンタ御祖父さんが
私の事を暖かい目で見てきたのだった

第50話

シオリ御祖母さんの指導で剣の修行が始まったが言葉通りに容赦ないものだった
「どんな場所でもしつかり踏み込めるようにならないとダメよ。」

それが剣士の生命線になるんですからね♪」

八方向への踏み込みをひたすらに反復していく

少しでも形が崩れたり手を抜けば

「ダメ♪」

と、可愛い言葉と共に木剣で軽く打ち据えられる

もつとも、軽くなのはシオリ御祖母さんにとってなので

もの凄く痛い一撃だ

おかげで毎日青痣が増えている

剣の指導以外にもこれまでの身体能力の向上、覇気の修行も続けているので

毎日疲れきって泥のように眠っている

チエスでレイ養祖父さんと勝負もしているので体だけでなく

頭も疲れきってしまう毎日だ

半年ほどは木剣を持つことも許されず只々踏み込みを続けていく

能力を使って身体にかかる負荷を増やしているおかげか踏み込みの形が出来てきた
「そろそろ木剣を持つてもいいかしらね」

シオリ御祖母さんの許可が出た時は感慨深いものがあつた

「シラカワ流は基本的に突きは使わないけど、それも含めた9つの斬撃を
体得してもらうわ。使えないのと使わないのは大違いだからね♪」

それからは踏み込みに加えて9つの剣の振りをしていくことになつた

鉄芯が入つた真剣と同じ重さの木剣をひたすらに踏み込みながら振つていく

足の裏は皮が捲れて血塗れになりながらも止めることは許されない

「身体のどこかが痛いからって敵は加減してくれないわ。むしろ好機だと

攻めてくるでしょうね。だからこそどんな状態でも動けるように心も鍛えないとね

♪

それはもう楽しそうに笑うシオリ御祖母さんの笑顔が印象的だつた

ブンタ御祖父さんとレイ養祖父さんはチェスをしてこつちを見ないようにしている

「あいや・その一手待って欲しいのだ!」

「ふふふ、もう五回目の待つただけどね、ブンタ殿」

…楽しそうだなによりです

それから只々剣を振る毎日を繰り返していった

足の裏だけでなく、木剣を握っている手も皮が捲かれてボロボロになっていった
そんな手や足の裏が固まり始めて1年程

遂にシオリ御祖母さんから手合わせの言葉が出てきた



袈裟斬り、横風ぎ、切り上げとしつかり踏み込みながら振っていく
頭で考えずとも行われていく剣撃はこの1年半で身に付いたものだ

素早く体を入れ替え今度は左足を前にして剣を振っていく

つばぜり合い等でこういった状況になるからと指導された成果だ

脚の後ろ側の筋肉を総動員して身体を前方に送り出す

踏み込み、足の裏で地面を掴んだ反動で股関節を回し

腹、背、胸の筋肉を用いて剣を振るう

ブンッ!

1年前にはどれほど振っても聞こえなかった風切り音がする

成長を実感して修行に熱が入っていく

そして、最後の1振りを終え残心をしていた時、私の耳に拍手が聞こえてきた
「この1年半で見違えるように成長したわね、シユウちゃん」

「うむ、修行を始める前にある程度の基礎が出来ていたが、それでも
凄い成長なのだ。シユウ、見事なのだ」

祖父母の称賛が素直に嬉しい

「ありがとうございます、シオリ御祖母さん、ブンタ御祖父さん」

レイ養祖父さんは今、シャボンデイ諸島でコーティングの仕事をしている為
ワノ国にはいない。私が月に一度、転移で送迎しているのだ

「シユウちゃんも、変に考えたりせず自然と剣を振れるようになったから
そろそろ手合わせも修行に加えていこうかしら」

…遂に次のステツプですか！

「それじゃ、ブンタさんお願いね」

「任せるのだ、シオリ」

道場の中央でブンタ御祖父さんと対峙する

同じ構えだが急造の私と違い至極自然な形に見える

ブンタ御祖父さんの構える剣が不意に大きく見えた

「では、行くのだ」

ブンタ御祖父さんの言葉と同時に私の肩口に衝撃が走る

あまりに自然に振るわれたその一撃は私の未熟な見聞色の覇気では起こりをも察することが出来なかったのだ

私は慌てて距離を取ろうとするが身体に力は入らず前のめりに倒れていく
そんな私をブンタ御祖父さんは優しく受け止めてくれた

「シユウ、海は広いのだ。レイリー殿やガーブ殿のように、拙者では

勝つ事はおろか、負けぬ事さえ難しい御仁達が当たり前のようにいるのだ」

ブンタ御祖父さんの話が続いていくが凄く臉が重い：

「だから、焦らずに修行を重ねていくのだ。拙者も及ぶ限り力を貸すのだ」

ブンタ御祖父さんに優しく頭を撫でられた私はそのまま気を失ってしまった



腕の中に在る孫の寝顔に暖かいものを感じる

家内のシオリとの間に産まれた子供達を初めてこの腕に抱いた時も

このように感じたものだと思懐かしく思う

今ではユカリもヒカリも嫁に行ってしまい寂しく感じていたが

シユウが来てくれたことで人生に張りが戻ってきた

もちろん、シオリと2人の生活に不満など微塵も無いが

それはそれ、これはこれなのだ

「あらあら、寝ちやつたわね」

「うむ、初めてにしては上出来なのだ」

拙者の一撃を受けても意識を保ち、反撃に転じようとしていたのは見事なのだ
流石は拙者の孫なのだ

「あの一撃を受けても意識を保つ…シユウの武装色の才はガーブ殿に

匹敵するかもしれないのだ」

「ふふ、そうかもしれないわね」

シオリも近付いてシユウの頭を撫でている

昔と変わらぬ優しい笑顔に惚れ直す思いなのだ

「ところでブンタさん？」

不意にシオリの雰囲気が変わる…これは、いかんだ

「もう少し、シユウちゃんに加減してあげてもよかつたんじゃないかしら？」

「いや、シユウに海の広さを知ってもらおうと…」

「あまりの力の差に、心が折れちゃったら意味無いわよね？」

ニッコリ笑っているシオリの笑顔に冷や汗が止まらない

「シユウちゃんを寝かせたら、少しお話しをしましょうね♪」

「…はい、なのだ」

その後、シユウが目を覚ますまでシオリのお話しは続き

正座による脚の痺れと共に拙者の心をへし折っていくのであった

第51話

目を覚ました私が最初に目にしたものは正座をしたまま項垂れ

目から光が消えていたブンタ御祖父さんの姿だった

「生まれてきてごめんなさいなのだ…」

…私が寝ている間に何があったのでしょうか？

「おはよう、シユウちゃん」

ブンタ御祖父さんを見ていた私にシオリ御祖母さんが話しかけてきた

「ブンタさんの事は放っておいていいわ」

ニツコリと笑顔で告げてくるシオリ御祖母さんの言葉に頷く

…うん、気にしないようにしましょう

本能的に関わらないほうがいいと悟った私はシオリ御祖母さんと

気を失う前の手合わせの事を話し合っていく

…放置してすいませんブンタ御祖父さん

「シユウちゃんの心構えは悪くなかったわね。でも、実力が足りなかったから

ああいった結果になってしまったわ。気圧されないように自信をつけていきましょ

う

「はこ」

その日はそのままゆっくりと休憩をして翌日から修行を再開した

修行に加わった手合わせは終始情けない結果と言えるものになった

構えるブンタ御祖父さんに撃ち込むことができずにいるのだ

遠慮をしている訳ではない：むしろ私の実力ではブンタ御祖父さんに

敵わないのはわかりきっているのだから全力で撃ち込んで問題無いのだ

それなのに撃ち込めないのは私が少しなりとも剣に慣れたからというのが

シオリ御祖母さんが話してくれたことだ

「霸王色の覇気を用いずとも、大きな力の差を感じとつたのなら

生物としての本能で身体が萎縮してしまうこともあるわ。それを跳ね返すには

積み重ねた努力や経験による自信、もしくは覚悟が必要ね」

努力や経験はそれなりに積んできた覚えがある

覚悟はアーロンと対峙した時に出来たつもりですが…

「シユウちゃん、死ぬ覚悟、生きる覚悟、そして戦う覚悟は別物よ」

シオリ御祖母さん曰く、私にはまだ戦う覚悟が出来ていないとの事

「多分だけど、アーロンの事で無意識に自分を信じられなくなっているんでしょね」

太極で博士に言われた自身で超えるべきものですか…

「剣もそうだけど、覇気も意思の力が大きく関わるわ。これからシユウちゃんが更に成長を続けるには超えなきやいけない事よ」

私を諭すようにシオリ御祖母さんが語りかけてくる

「少なくとも、ブンタさんに撃ち込めないと修行を終わりにするわけにはいかないわね」

シオリ御祖母さんが頬に手を当てて悩んでいる

手のかかる孫ですいません…

「ふふ、慌てなくてもいいわ。少しずつでいいから頑張つてね、シユウちゃん」

そして修行は続いていく

踏み込み、剣を振るい、己を鍛えていく

それから更に1年半程、ワノ国で修行を重ねて3年程たった頃

遂にブンタ御祖父さんに撃ち込むことが出来たのだった



いつもの様に道場の中央でブンタ御祖父さんと対峙する

周囲の空気が重さを伴い身体に纏わりつく

だが、それはこれ迄に比べて幾分か軽く感じる

相変わらずブンタ御祖父さんの剣は大きく見えるがそれでも確信する

行ける！

私は踏み込み、袈裟懸けに撃ち込んだ

カッ！

木の乾いた音が道場に響き渡った

「…見事なのだ！」

手にしていた木剣で私の一撃を受け止めたブンタ御祖父さんは

満面の笑みで私を称賛した

「格好良いわよ、シユウちゃん」

「頑張ったね、シユウ」

シオリ御祖母さんとレイ養祖父さんも称賛してくれる

私は1つの壁を超えたことを実感した

「これで手合わせは終わりよ、シユウちゃん」

「終わり…ですか？」

成長を実感したものの、まだまだこれからだと思っただけなんです…

「ここから先は実戦で学んでいきなさい」

「何故でしょうか？」

「私達の剣は、相手も剣であることに慣れてしまっているの。シユウちゃんが

これから海に出ていくのならそれでは足りないでしょう？」

確かにアーロンは素手だったし、ベルメールさんはライフルを武器にしていた

「この3年でシユウちゃんはシラカワ流の剣を身に付けたわ。後は実戦の中で

自分の戦い方を見つけていきなさい」

自分の戦い方…

「剣だけじゃない、覇気、能力も使ったシユウちゃんだけの戦い方をね♪」

シオリ御祖母さんの言葉に頷く

「さて、それじゃ今日はご馳走を作らないとね。アカリも好きだった物を

一杯作ってあげるわ」

その日の夕飯はシオリ御祖母さんの言葉通りに豪華なものとなった

これでワノ国での修行も終わりかと思うと寂しく感じる

15歳になっていった私は今生で初めての酒を飲んだ

海賊王の創り出した時代の影響で成人と認められる年齢は17歳となったが

酒は以前までの時代と変わらず15歳で飲める

初めての酒を祖父母達と酌み交わしていく
それは苦く、そして旨い酒だった



「頑張つてね、シユウちゃん」

「レイリー殿、シユウをよろしく頼むのだ」

翌日、私とレイ養祖父さんはワノ国を出発することになり

こうして祖父母に見送られているところだ

「いってきます、シオリ御祖母さん、ブンタ御祖父さん」

「いつでも来てね、シユウちゃん」

「うむ、シユウ、これを受けとるのだ」

ブンタ御祖父さんが布に包まれた何かを渡してきた

「開けてもよろしいでしょうか？」

「うむ」

ブンタ御祖父さんの返答を受け、布をとっていく

中にあつたのは直剣だった

「無銘の数打ちなれど、他所で直剣は手に入りにくいのだ
故に拙者からはそれを贈らせてもらうのだ」

「…ありがとうございます、ブンタ御祖父さん」

飾りの無い無骨な剣だが初めて手にする真剣は重く感じた

「私からはこれよ、シユウちゃん」

「コート…ですか？」

特効薬を発表する際にレイ養祖父さんにそれなりの格好をと言われたので

太極で出会った博士と同じような白衣に似たコートを着るようになっていた

「この3年でシユウちゃんは背が一杯伸びたからね。だから仕立てておいたのよ」

まだ15歳だが170cmぐらいままで身長が伸びた

「ブンタさんもシユウちゃんと同じ年頃の時には、今のシユウちゃんと

変わらない背丈だったわ。だから少し生地之余裕を持たせてあるから

成長したら私の所に持つてきてね。コートを仕立て直してあげるから♪」

ブンタ御祖父さんは180cmを超える長身…私も夢の高身長に…！

私は食事と睡眠をしつかり取ることを心の中で誓った

シオリ御祖母さんが新しいコートを着せてくれる

古い物と違い、今の私にピッタリだった

「よく似合ってるわよ、シユウちゃん」

「ありがとうございます、シオリ御祖母さん」

祖父母の暖かい饒別に名残惜しくなる

私は顔を両手で張り気持ち切り替える

「レイ養祖父さん、行き先はどこでしょうか?」

「まずはシャボンディ諸島に戻ろうか。後はついてから話そう」

私はレイ養祖父さんの言葉に頷き、祖父母に向き直る

「いってきます、シオリ御祖母さん、ブンタ御祖父さん」

能力でワームホールを開き、私とレイ養祖父さんはシャボンディ諸島に転移した

第52話

ワノ国から転移でシャボンディ諸島に戻った私とレイ養祖父さんは

シャツキーさんの店でお茶を飲むことにした

「ただいま、シャツキーさん」

「おかえり、シラカワちゃん、レイさん」

「ああ、ただいまシャツキー。私とシユウにお茶を頼むよ」

いつものカウンターの席に座った私達はお茶を待ちながら

今後の予定を話し始めた

「それで、今後の修行予定はどうするのでしょうか？」

「そうだね、シユウには賞金稼ぎとして実戦を経験していつて貰いたい」

賞金稼ぎ？

「海賊と戦っていくということでしょうか？」

「その通りだよ」

これから実戦で……命のやり取りをしていくことに不安を覚える

「シユウ、君はブンタ殿の剣の圧力を超えることが出来た。自信を持ちなさい」

そのことについては成長の実感があるのだが……実戦は未経験なのだ

「始めの内は私が戦う相手を見繕うから安心しなさい。もつとも、楽に

勝てる相手を選んだりほしくないから油断はしないように」

私はレイ養祖父さんの言葉に頷いた

「それじゃあ、お茶を飲んだら海軍本部に向かおうか」

「ガープさんに海賊の情報を貰うつもりですか？」

「流石だね、シユウ。その通りだ」

レイ養祖父さんが機嫌良さそうに笑う

その後、お茶を飲みながらレイ養祖父さんとチェスをした

結果は……辛うじて引き分けだった

いつかは勝つてやると心を燃やした



一服を終えた私とレイ養祖父さんは準備を整え小舟で海軍本部を目指した

海軍本部は私が能力を得てから訪れた事が無いので転移出来ないのだ

道中の船の進路は私がついていく事になった

航海術等、これまで学んだ海で生きる術を試す為だ

初めての事だったので四苦八苦しながらの旅路となったが

レイ養祖父さんは微笑ましそうに私を見ていた

途中でサメや小型の海王類が船を襲ってきたのだがレイ養祖父さんの提案で

私が戦う事になった

ブンタ御祖父さんから貰った剣を抜き、私は迎え撃った

波に揺れる小舟の上だったがシオリ御祖母さんの修行の成果なのか

足元に不安を覚えずにしっかりと剣を振るう事ができた

刃筋が通り、振るわれた剣は肉を斬る感触を手に伝えてくる

その感触に驚くも振りきった剣はサメを倒すことに成功した

小型の海王類は武装色を剣に纏わせて振ってみたのだが

サメの時のような感触を感じなかった事で空振りしたかと思ってしまった

だが、目にしたのは首と胴体が別れた海王類の姿だった

今までは身体能力の強化にしか武装色の覇気を使ってこなかったのだ

この結果には目を見張ることになった

レイ養祖父さんはそんな私を見て愉快そうに笑っていた

そんな色々な経験を積むことができた船旅も終わりを告げ

私とレイ養祖父さんは海軍本部に到着したのだった



「お疲れさま、シユウ」

「いえ、時間がかかってしまい申し訳ありませんでした」

「初めての航海でグランドラインを無事に渡る事が出来たんだ、上出来だよ」

そう言つてレイ養祖父さんが私の頭を撫でてくる

「さて、先触れも無しに来てしまったからね。海兵にガープを

呼んでもらうとしようか」

レイ養祖父さんは近くを歩いていた海軍の制服を着た男に声をかける

「あ、なんだジイさん。何か用か？」

「すまないがガープを呼んでくれないか」

声をかけた男は私よりも若く見え、少年と言つていい男だった

「あ、なんで俺がジジイを呼ばなきゃなんねえんだよ！」

レイ養祖父さんが困つたように息を吐く

「申し訳ありません。ガープさんにシユウが来たと伝えて欲しいのですが……」

「モブは黙ってる！」

片眉を釣り上げ、私を睨みながら少年は叫ぶ

「お前らのようなモブがオリ主である…」

ゴンツ！

少年の言葉は頭に振り下ろされた拳骨で遮られた

「…いつてえ——!!!」

「バカ者が、少しは礼儀を弁えんか！」

少年の頭を殴りつけたガーブさんが少年を叱る

「すまん、レイリー」

「構わんさ、ガーブ」

少年は見事な金髪の頭を押さえその赤い瞳に涙を浮かべている

「なにすんだ、くそジジ…」

少年の言葉はまたも途中で遮られた

「本当にすまん、2人共。後で礼儀を叩き込んでおくわい」

少年はよほど痛かったのか頭を押さえながら地面を転がり回っている

「それじゃあ農の部屋に行くか。ライト！お前は演習場を走っておれ！」

「ふざけんな！なんでオリ主の俺が！」

ガープさんが拳骨を握りライトと呼ばれた少年に見せる

「くっそ——！」

少年は叫びながら走っていった

「待たせたの」

「ガープ、あの少年は何だ？」

「儂が休暇で東の海に行った時に、ライトが東の海で海賊の真似事をしておったんじやが」

彼奴は航海術も持たずに海に出て迷子になつとつた……そこを拾つたんじや」

ライト少年が走って行った方向を見ながらガープさんが呆れるように話す

「さて、それじゃ行くぞ。儂に話しがあつてきたんじやろ？」

ガープさんに促されついていく

モブにオリ主ですか……

どこかで聞いた覚えがあります

そうすると虚憶に關係しているのでしょうか？

確信はありませんが、おそらく彼は……

私はガープさんの部屋に向かう中で、ライト少年の事を考察していった

第53話

「適当に座ってくれ。今、茶を持ってこさせるわい」

私がガープさんに助けられた時以来の部屋の風景に懐かしさが込み上げてくる

ガープさんは2、3言葉を電伝虫に話すところらにやつてきた

「待たせたの。で、話はなんじゃ?」

「略奪主義の海賊の情報欲しい」

レイ養祖父さんが簡潔に用件をガープさんに伝えた

「どういうことじゃ?」

「シユウに実戦経験を積ませる為に賞金稼ぎをさせる」

レイ養祖父さんの言葉にガープさんが腕を組んで考え始めた

「儂の一存では難しいの」

「ダメか?」

「いや、海軍にも利はあるからの。センゴクに話してみるわい」

そう言ったガープさんはまた電伝虫で話し始めた

「レイ養祖父さん、センゴクさんとは誰でしょうか?」

「センゴク元帥：海軍のトップの者だね」

レイ養祖父さんの言葉に驚きガープさんを見るが電伝虫でいつも通りに話しているように見える：相手は元帥ですよね？

「センゴクはガープの新人時代からの同期の海兵だね。若い頃は2人のコンビに私とロジャーも手を焼かされたものさ」

レイ養祖父さんが昔を懐かしむように語る

「手を焼かされたのはこっちの方じゃ、レイリー」

気がつけばガープさんが話しを終えてこちらに来ていた

「それで、どうだったガープ？」

「話し合いには応じるそうじゃ。というわけで、今からセンゴクの所に行くぞ」

ガープさんに連れられ私とレイ養祖父さんはセンゴク元帥の執務室に向かった



「ダメだ」

センゴク元帥の執務室に到着した私達はさっそく話し合いを始めたのだが

ガープさんが事の経緯をセンゴク元帥に伝えたところ断られてしまった

「儂等にも利はあるじやろうが、ケチケチするなセンゴク」

「はあく…：ガープ、他の賞金稼ぎはどうやって情報を得ている？彼等だけを

特別扱いにするわけにはいかん」

至極真つ当なセンゴク元帥の言葉だがレイ養祖父さんが絡んでいった

「センゴク、賞金稼ぎの中には海兵に金を掴ませて情報を得ている者もいる筈だが？」

「それは否定しない。だがなレイリー、海軍本部で扱う情報は機密のものも多いのだ。

下手にそれを漏らせば戦争に発展しかねん。認める訳にはいかん」

自由奔放と言えるガープさんのイメージがあり海軍もそういった気風なのかと思っ

たが

センゴク元帥のように規律を重んじる人もいる…：まあ、当然ですね

「センゴク、現実問題として海兵の手は足りとらんのじゃ。略奪主義の連中を

間引いてくれるのなら大助かりじやろうが」

「ガープ、シラカワ君はまだ15歳なのだろう？成人していない子供を

海軍が率先して修羅場に送っていると噂が立つたらどうする？それこそ世間の

非難は避けられないものとなる…：リスクが高過ぎるな」

保守的と言えるがセンゴク元帥の言うことは組織を率いる長として当たり前の事だ

「海賊も海軍も、見習いを修羅場に連れて行き経験を積ませているのは当然の事だろう

「？」

「レイリー、現実的にはそうだが建前というのがあるんだ」

セングク元帥がため息を吐きながら頭を搔く

世知辛い大人の事情ですな

さて、そうなるかと私が賞金稼ぎをしても問題ないと証明するか

建前に目を瞑るメリットを提示しないといけないでしょう……どうする？

力を示すのが手っ取り早いか……よし

「よろしいでしょうか、セングク元帥」

「何かな、シラカワ君」

「私が賞金稼ぎをしても問題無いと証明出来れば、世間の非難も

少なくなるのではないのでしょうか？」

セングク元帥が腕を組みながら私を見てくる

「確かにその通りだが……どう証明するのかな？シラカワ君」

「《英雄ガープ》と《私のセングク》……お二方の前で力を示すのは証明になりませんか？」

私の言葉にガープさんが大笑いをする

「ぶわっはっはっは！儂等のお墨付きなら問題無いのう、セングク！」

「簡単に言うな、ガープ」

非難するようにセンゴク元帥はガープさんを睨むが
ガープさんはどこ吹く風と笑い飛ばす

「それで、証明の方法どうするのか？ シラカワ君」

「何方かと手合わせ…という形では如何でしょうか」

私の言葉にセンゴク元帥が目を瞑る

相手を考えているのでしょうか？

すると、何かを思い付いたのかガープさんが話し出した

「相手はライトがいいじやろう。今頃は演習場でサボっとるじやろうから丁度いいわ
い」

「ガープ、ライトは見習いだが能力者だぞ。危険ではないか？」

「センゴクはそう言っとるが…どうじや、レイリー？」

ガープさんの言葉を受けてレイ養祖父さんが不敵に笑う

「ライト少年が、ブンタ殿の剣を前にして動けるのならば危ないかもな」

「ほう、とするとシユウは」

「ああ、見事に正面から踏み込んで見せたよ、ガープ」

「ぶわっはっはっは！これは面白くなってきたわい！」

当事者である私をそっちのけて盛り上がる不良老人が2人

センゴク元帥も呆れるようにため息を吐いた

「よし！そうと決まれば演習場に行くぞ！」

「待てガープ。処理をしなければならぬ書類が残っている

手合わせは昼飯を食べてからでいいだろう」

「なんじゃ、そんなもの後にせい」

ガープさんの言葉にセンゴク元帥が眉を釣り上げた

「ガープ、お前も今日中に提出する報告書があるはずだが？」

センゴク元帥の言葉にガープさんは鼻をほじりながら顔を反らす

「さつさと提出せんかバカ者が！出さんと立ち会わせんからな！」

もの凄く嫌そうな顔をしながらガープさんは執務室を出ていった

「レイリーとシラカワ君は食堂で昼飯を食べていてくれ。部下に案内させよう

会計の時には私の名を出してツケておいてくれ」

そう言うのとセンゴク元帥は書類の処理を始めた

私とレイ養祖父さんはセンゴク元帥の部下の人の案内で食堂に向かい

タダ飯を楽しむのだった

第54話

「肩が凝ってしまったわい」

「いつもちゃんと提出せんか、バカ者が」

書類の処理を終わらせたガープさんとセンゴク元帥に連れられて

私とレイ養祖父さんは演習場に向かっていた

そして、演習場にたどり着くとそこには大きな男性がアイマスクをして寝ている姿と

隣で寝ているライト少年の姿があった

「何をサボっているんだ、バカ者共が！」

センゴク元帥の怒声が演習場に響く

「あらら、言われちゃったよ、ライト」

「俺の事じゃなくてクザンさんの事だろ、常識的に考えて」

「2人共だ！」

悪びれる様子もなく起き上がる2人に私達は歩いて近付いていく

「それで、ガープ中将とセンゴク元帥が揃い踏みですが…何かあったんで？」

「クザン、ちよいとライトを借りるぞ」

「あらら、ライトも大変だねえ……自由になんぞ、ガープ中将」

気の抜けるような声でクザンと呼ばれた男性はガープさんに応える

「ちよ、クザンさん！俺を売るのかよ！」

「若い内の苦勞は何とかって言うでしょ？頑張んなさい、ライト」

眠そうに欠伸をしながらクザンさんはライト少年を押し出す

「ちつ、それでジ…ガープ中将、俺に何の用で？」

「おう、ライト。お前に手合わせをしてもらいたい相手がいるんじゃ」

「はあ？なんで俺がそんなこと…」

そう言いながらもライト少年は私とレイ養祖父さんの方を見てくる

「で、どっちが相手なんだ？」

ふむ、傲慢と言える態度ですが察しは良いようですね

「シユウが相手じゃな」

「シユウ？聞いた事ねえな…一応聞くけど、ジイさんの方じゃないだろ？」

「そつちはレイリーじゃな」

ガープの言葉にライト少年が目を見開く

「は!?!レイリーって、シルバース・レイリーか!?!」

「そうじゃ」

「なんで《冥王》がこんなところにいるんだよ！

シャボンディ諸島にいるんじゃないのか？！」

ライト少年が驚愕の表情のままに叫んでいる

「センゴク、海軍では彼のような少年兵にまで私の情報が廻っているのかな？」

「…いや、将校かシャボンディ諸島に赴任する一部の者達だけだ」

レイ養祖父さんが見定めるようにライト少年を見ている

「…何だよ、原作でこんな事あったか？俺がガーブに捕まったから

展開にズレが出たのか？いや、そもそも海賊を始めていきなりラスボスの

ガーブに遭遇するとかどんな無理ゲーだよ…」

ライト少年が何かぶつぶつと呟いている

「そうすると、彼個人が私の事を知っていたのか」

「ライトは勉強嫌いだが物事を良く知っている…だが、後先考えずに

突っ走ってしまうところがあるが、若い故に仕方ない事だろう」

センゴク元帥がライト少年の人物をそう評していく

「ガーブは彼を拾ったと言っていたが？」

「まだ12歳だというのに海賊の真似事をしていたのは事実だ。ガーブがライトの

故郷に送っていったのだが、ライトの親御さんに落ち着かせたいと言われたようにな

それで礼儀見習いとしてガープが海軍本部まで連れて来たのだ」

12歳ということは私の3つ下ですか

「言動はアレだが、根は善良だ…だが、少々人見知りが激しくてな

それを悟らせまいとああいっただ態度をよくとる」

まるで手の掛かる息子を語るようにセンゴク元帥が話していく

「相変わらず苦労しているようだな、センゴク」

「ああ、だがそれに見合うだけの物をライトは持っているのだぞ、レイリー」

「ほう？なにかな、センゴク」

センゴク元帥は不敵に笑いながらレイ養祖父さんに告げる

「ライトは三大将すら持たない霸王色を含めた3種類の覇気の才を持っている」

「ほう…あの少年がね…」

レイ養祖父さんがライト少年を興味深そうに見る

「そして、海兵として有用な悪魔の実の能力も持っている…将来の海軍将校候補だ」

「なるほど…と、いうことらしいよ、シユウ」

どうやらレイ養祖父さんは私の為に情報を引き出してきていたようだ

だがセンゴク元帥の表情を見るとその事をわかっていたようだ

「話してよろしかったのですか？」

「ライトは自分の才能を理解している。そのせいか、少々傲慢になつてゐる所があつてな…」

ガープの言葉じゃないが、シラカワ君がライトに勝てるのなら

ライトの鼻つ柱を折るのに丁度いいだろう」

《仏のセンゴク》

その頭脳を持つて数多の修羅場を潜り抜け海軍元帥にまで登り詰めた男

世の噂程度しか聞いた事がありませんでしたが…どうやら喰えない御仁のようです
ね

「それじゃそろそろ始めるかのう。クザン！暇なら審判でもせんか！」

「あらら、これはさっさと撤退してた方がよかつたかねえ…」

クザンさんが頭を掻きながら演習場の中央に向かう

「それじゃ、向こうに模擬戦用の武器があるから適当にとつてきてちょうだい」

クザンさんの指差す方向を見ると幾つもの木製の武器があつた

私は木剣を手にして演習場の中央に向かう

そこには既にライト少年が待つていた

「はあ？武器を使うのかよ、だつせえ！男なら素手だろうが！」

ライト少年が挑発するように私に言ってくる

だが、見聞色で感じるライト少年の気配は侮りに近いもののように感じる

「それに、刀なら未だしも直剣？なんだそりゃ！流行も知らないのかモブが！」

これが狙って挑発しているのなら大したものですが…さて、どうでしょうか？

「生憎、これしか扱い方を知らないものでして」

「はっ、すかしやがって！オリ主のこの俺が、モブのお前を

きつちりと踏み台にしてやんよ！」

そう言ったライト少年が構えるがブンタ御祖父さんのような圧力は全く感じない

いや…むしろ隙だらけですね

だが、彼は3種類の覇気に悪魔の実の能力も有している男です…

油断しないようにしましょう

私もワノ国の修行で身に付けた構えをとる

「あく、ケガしないようにね。面倒だから…それじゃ、始め」

なんとも気の抜けるクザンさんの開始の合図で私とライト少年の手合わせが始まっ

た

第55話

あゝ、面倒だ…なんで俺が手合わせなんてしないといけねえんだ…

シユウとかいう子供が武器を取りにいった

なんだ、素手じゃねえのかよ。つまんねえ奴だな

あくあ、ほんと…なんでこんなことになっちゃまったんだか…

俺はこれまでのことを思い出していた



俺はライト

所謂、転生者だ

前世で大学受験に追われていた時に何故か死んじまった

好きなアニメも漫画も封印して勉強三昧の日々を送って

やっとの事で志望大学の予想合格判定でAを取って受験に挑もうとしていた矢先の事だ

これまでの苦勞が完全に水の泡だった

神様にこれ以上無いくらいに文句を言っちゃった

まあ、それでも大好きなワンピースの世界に転生させてくれるって聞いた時は人生で最高の手の平返しをしたけどな

それで、なんだかんだあつて転生したんだが…退屈な日々だったな

文字なんかは英語を覚えるような感覚で簡単に覚えられた

受験戦士を舐めるなつてんだ!

計算なんかは四則演算ぐらいしか村では教えられなかったから

鼻歌を歌いながら今生の親にやってみせたら大喜びしてやがった

…まあ、悪い気分じゃなかったな

でだ、なんで退屈な日々だったかつていうと、なぐんにも無いからだ

漫画もテレビもパソコンもねえ、夜になれば明かりの油が勿体無いから

さつさと寝るしかねえ…いつ以来だろうな、こんなにゆっくり寝れたのは…

まあ、そんなに何もないと夜だけじゃなく昼間も暇でな

漁師である親父の仕事についていく事が多くなつた

元大学受験生としては今生の同じ年頃の子供と遊ぶのは…精神的にキツかつたから

な

それで、親父の船で遊び代わりに釣りをするようになったんだが

何を勘違いしたのか、親父は俺が仕事を手伝つてると思いやがった

ゴツゴツした手で俺の頭を撫で回しながら漁師仲間に大声で自慢しやがるんだ
恥さらし以外のなんでもなかつたぜ：

親父の船で俺が初めて釣り上げた魚は、親父がその場で捌いてくれた

七輪みたいな奴で塩焼きにした魚を食つたんだが：まあ、悪くなかつた

手が魚の油まみれになっていた俺を親父が大笑いしやがった

ムカついたから親父の服で油を拭いてやった

そんな日々を過ごしていたある時、いつものように親父の船で釣りをしていたら
沖で何かが浮いているのを見つけた

宝箱だつた

親父に言つて船を宝箱に近付けてもらい、俺が宝箱を釣り上げた

5年も毎日のように釣りをやっていたら、針を引っかけるのなんか簡単だ
村に宝箱を持つて帰り開けてみると、中には悪魔の実が入っていた

その時、俺はこの悪魔の実が、俺が望んだ物だと直感した

一応、親父にこの悪魔の実をどうするか聞いてみたが、好きにしろと言われた
お袋に聞いても同じ答えだ

悪魔の実を売れば、最低でも一億ベリーにはなる

家は余り裕福と言えねえのに俺に好きにしろと言つてきやがる：

こつ恥ずかしかつたから小声で礼を言つたんだが、親父の野郎は

耳に手を当てて、もう一度と抜かしやがつた

親父の横顔に拳をくれてやつた

そのまま親父と喧嘩になつたが、お袋に飯抜き沙汰を言い渡された

それは卑怯だぜ：お袋：

翌日、俺は悪魔の実を食べて能力者になつた

そして、俺は村を出ることを決めた

漁師は荒くれ者が多く、喧嘩が絶えない

その影響もあり、前世では一度も喧嘩をしたことがなかつた俺だが

まだ12歳だというのに既に喧嘩慣れしている

転生特典で六式を使える才能を貰つていたせいか身体能力も高く

年の近い連中との喧嘩は一度も負けた事が無い

そして、漁師の親父について行つていた事で船にも慣れていた俺は

愛用の釣竿を持つて小船で海に出ていった

今思えば考え無しだったと思う

だが、豪快な生き方の漁師連中と長年付き合っていていれば勢いで行動するようになっても仕方ねえだろう？

言葉使いだって前世に比べれば荒いものになっちまった

敬語なんてまともに使った日には、背中が痒くなっちまう

まあ、そんなこんなで海図も持たず海に出た俺は…あつても読めねえけど…

ものの見事に海で迷子になった

釣竿のおかげで食い物には困らなかつたのは不幸中の幸いだったな

芸は身を助けるってな！

そして、迷子になって3日、大型船が遠くに見えた

俺は自分の船を大型船に向けて進めて拾いあげて貰った

助けて貰った義理はあつたが、曲がりなりにも海賊になろうとして海に出た俺は

その大型船を乗っ取ろうとして喧嘩を売った

喧嘩を売った相手が悪かつた…

なんで初遭遇の相手がガープなんだよ…

ああ、ゲンコツ一発で気を失つたさ

その後は、ガープに俺の村まで送って貰った

道中、ガープに話を聞くと、休暇でフーシャ村に行っていたその帰りだったらしい

俺は自分の村が東の海にあることを初めて知った

親父：それぐらい教えろよ：

そして、村にたどり着いた俺を待っていたのは、親父の本気の拳だった

親父の拳も痛かったけど、お袋の涙はもつと痛かった：

それからは両親がガープに何度も礼を言っていた

俺はただその光景を眺めているだけだった

そして、ガープが出航するかという時に、俺の両親がガープに

俺を連れて行って欲しいと頼み込んだ

何故かと問い質したら、俺がどこか退屈していることに気付いていたらしい

だから、海に出て勉強してこいと言われた

前世での親は、兄貴にばかり構っていたから、見返してやろうと

大学受験を頑張っていたんだが

今生の親は、俺を真剣に見てくれる事に漸く気づいた：

泣いちゃまったのは一生の不覚だった

ガープは両親の申し出を二つ返事で快諾した

そして、海軍本部に向かうことになったんだが：

親父！嫁を連れて帰って来いって、俺はまだ12歳だぞ！

それと！まだ7歳の弟の前で下ネタ全開で囃し立てるんじやねえよ！

そんなやり取りがあつたが俺は無事に海軍本部に到着した

だけど、それからまた退屈な日々だつた

座学では航海術程度しか勉強することが無く、訓練にしても

同年代の連中は相手にならなかつた

やる意味を見出だせずに釣りをしてサボっていたら、クザンさんと

知り合えたのはよかつたけどな

そして、海軍本部にやって来て3ヶ月、演習場でクザンさんと寝ていたら

ガープに見知らぬ奴と手合わせをしろと言われた



俺は昔を思い出していたが、どうやらシユウとかいう奴の準備は終わつたらしい

木剣を振つて具合を確かめるなんて、如何にも自分、剣を使えるアピールを

しているのを目にした時は吹き出しそうだつた

海軍本部には親が海兵の子供達もいるんだが、そういった連中は

親に戦い方を学んでいるものの手合わせ経験は無い連中ばかりだつた

要するに喧嘩一つまともにしたこもないお坊ちゃんばかりなんだ

荒くれの漁師達との喧嘩に慣れている俺にしてみれば

一発殴っただけで涙目になるモヤシ共なんて相手にならねえ

レイリーがいたことには吃驚したが、こんなすかした奴に負けるわけねえ！

喧嘩の基本としてまずは口喧嘩から始めたが、シユウの野郎は

変わらなすかしたままだ

ちつ、これじゃ俺が小者みてえじゃねえか

クザンさんの気が抜ける合図と同時に俺は能力を使う

バチバチッ！

音を立てて俺の手から能力が溢れだす

俺の悪魔の実の能力：それは、電気だ

超人系悪魔の実：その名は《ビリビリの実》

これが俺が求めた力だ

理由としては、前世で好きだった某忍者漫画の忍術の一つを再現できると思ったから

だ

俺は電気を手に纏わせて殴りかかる

某忍者漫画のように相手を貫くなんて事はまだ出来ないが

電気のおかげで防御不可なのが自慢の技だ

振りかぶり殴りかかった一撃を、シユウの野郎は横に一步動いて避けやがった
バシツ！

拳を避けられた直後、俺の腹に衝撃が走る

その衝撃で息が出来なくなり、体が前のめりに倒れていく

倒れた俺が目にしたのは、背中を見せて歩いていくシユウの野郎だった

…おい、逃げんじやねえよ！

歯を食い縛り起き上がろうとする俺だったが、体に力が入らず気を失ってしまった

第56話

ライト少年との手合わせが終わりました

正直なところ拍子抜けです

初手で能力を使用して突っ込んできたのは驚きましたが

余りにも素直に突っ込み過ぎでした

能力は一見した所、電気や雷のように見えたので弾かずに避けたのですが
思いっきり振りかぶり殴りかかってきた時はフェイントかと疑いました

ライト少年の能力に当たらないように距離に余裕を持って避け

から空きだった腹に一撃見舞ったのですが、手応えの良さにまたも驚きました
センゴク元帥が覇気の才があると云っていたので武装色を纏っているのを

想定していたからです

結局、手合わせはその一撃で決まってしまう消化不良といった気分です

「見事な一撃だったが納得していないようだね、シユウ」

「どうやらレイ養祖父さんにはお見通しのようなだ」

「ええ、武装色の覇気を纏っているだろうと想定していたので」

一撃で終わってしまい、些か消化不良ですね」

「シユウ、君は物心ついた時から武装色を無意識に使っていたようだが

覇氣の才を有した他の者もそうだとは限らないよ」

ブンタ御祖父さんがアカリママも物心ついた頃には得意な系統の見聞色を

使っていたと言っていたのでそれが普通なのだと思いますが違うようです

「むしろ、アカリやシユウのようなケースは珍しい部類だ。その事を認識しておきなさい」

「はい、レイ養祖父さん」

レイ養祖父さんの言葉に頷いた私はライト少年を見る

…大丈夫でしょうか？

「心配せんていいわい」

「ガープさん…」

「命に関わるような攻撃じゃったら儂やクザンが止めとったからのう」

審判をしていたクザンさんならまだしも距離のあったガープさんでも間に合うのですか？

「それにしても、想像以上に強くなったのお：レイリー、シユウに何をさせたんじゃ？」

「なに、良く食べ、良く動き、良く寝る…たったそれだけの事だ」

泥のように眠る毎日をそのように表現するのは如何なものでしょう

「取りあえず文句の無い結果だのう。そうじゃろう、センゴク?」

「:シラカワ君の特効薬製造の功績を考えれば止めたい所だがな」

「心配性じやのう、センゴクは」

「お前はもう少し考えろ、ガープ」

どうやら情報は貰えそうですね

「それじゃセンゴクの執務室に戻るか。クザン、ライトの事を頼んだぞ」

「はいはい、任せましたよっと」

クザンさんが肩にライト少年を抱えて歩いて行ったのを見届け

私達もセンゴク元帥の執務室に向かった



「くそっ!逃げ:いつ:」

「ああら、もう起きたんだ。もう少しゆっくりしなさいな、ライト」

クザンさんの声が聞こえるがそれどころじゃない:なんでこんなに腹が痛いんだ?

それに、なんで俺は医務室にいるんだ?

「クザンさん…なにが…？」

「あたら、覚えてないのか？」

覚えてない？…あ…

「クザンさん！あの野郎はどこだ！まだ勝負は終わっちゃ…」

「ライトの負けだよ」

何を言ってるんだよクザンさん！

「俺は負けてねえ！」

「一撃で気絶させられちゃったからねえ…納得しろとは言わないけど

もう勝負は終わったのは理解して欲しいね」

理解できるかよ！俺があんな…

「あんなすかした野郎に負けるはずがねえ！」

「あたら…取りあえず、水でも飲んで落ち着きなさいな」

クザンさんが水を俺に寄越した

俺はそれを一気に飲み干す

「クザンさん、あの野郎はどこにいる？」

「それを知ってどうするんだ、ライト」

「決まってるんだろ！あのすかした野郎の顔面に一発…」

クザンさんがあからさまなため息を吐く…なんだよ？

「それで、また良いのを貰って気絶するっていうのか？」

「そんなわけねえだろ、クザンさん！」

「今のライトじや何回やつても当たらないだろうな」

「そんなの…！」

「やつてみねえとわからねえだろ、クザンさん！」

「…少しは大人の言うことを聞きなさいな、ライト」

そう言つてクザンさんはまた水を俺に渡す…今度は氷入りだ

「それを飲むなり、頭にかけるなりして落ち着け」

「いや、頭にはかけねえよ」

今度は水をゆつくりと飲んでいく

冷たい水が腹に染み渡つていく

頭が冷えてきた

…おかげで、嫌でもクザンさんの言うことが間違いないってわかつちまった

「なあ、クザンさん…俺はなんで負けたんだ？」

「奴さんの方が強かった…それだけの事さ」

「そうか…」

「俺は弱いのか？」

「海は広い…無名でも強いなんていくらでもいる」

「そうか…」

悔しい…ここまで悔しいのは今生で初めてだ…

「…くそっ！」

「泣きたければ泣きなさいな、ライト」

「なに言ってるんだよ、ガキじゃあるまいし」

クザンさんが俺の頭に手を置く…親父みたいにデカイ手だ

「泣く程悔しい事は大人でもある」

クザンさんがワシワシと俺の頭を撫で回す

「相手を舐めていても本気で勝ちにいったんだろ？負けて悔しいのは当たり前だ」

目頭が熱い…涙が溢れてくる

「ああら、本当に泣いちゃったよ」

「慰めるのか、ふざけるのか、どっちかにしろよ！」

俺のツツコミに笑うクザンさんの前で、俺は泣き続けた



「情報ありがとうございます、ガープさん」

「儂等にも利があることじゃからな。気にせんでいいわい」

セングク元帥の執務室で賞金首の情報を買った私とレイ養祖父さんは

早速出発する為に海軍本部の建物の外に出ていた

そこをガープさんが見送りに来てくれているのが今の情況だ

「シユウ、相手は生死を問わずの賞金首じゃ…下手に手心を加えようものなら

お前の首が取られる事を肝に命じておくんじゃぞ」

「ご忠告、ありがとうございます」

私はガープさんの忠告に頭を下げる

「レイリー、わかっとするだろうが無理はさせるなよ」

「お前の口からそんな言葉が出るとはな、ガープ」

ガープさんとレイ養祖父さんが笑い合っている

「おいー！」

そんな2人を眺めていたら不意に私を呼ぶ声があった

「お前、名前は！」

声の主を見るとライト少年だった

「私の名前はシラカワ・シユウです」

「俺はライトだ！次は負けねえからな、シユウ！」

そう叫んだライト少年は走り去っていった

「ぶわっはっはっは、ライトの奴もようやくやる気になりおったか！」

ガープさんが豪快に笑っている

手合わせ前に言っていた狙い通りということでしょう

「シユウ、頼みがあるんじゃが」

「なんででしょうか？」

ガープさんが真剣な顔で私に話してくる

「情報を貰いに等で海軍本部に来たときに、出来るだけ

ライトと手合わせをしてやって欲しいんじゃ」

命の恩人のガープさんの頼みとあれば吝かではありませんが…

私はレイ養祖父さんを見る

「好きにきなさい、シユウ」

「よろしいのですか？」

「ああ、ガープやセンゴクも認める才能を持つ者が相手なんだ

シユウにも得るところがある筈だ」

私はレイ養祖父さんの言葉に頷く

「それに、好敵手となれる存在は得難きものだ…私やロジャーも
ガープやセンゴクと鎬を削り大きくなっていったのだからね」

好敵手ですか…

「もつとも、ライトの奴にはまだシユウの相手は早いじやろうかの」

「仕方ないさ。シユウは曲がりなりにも修羅場を生き抜いた経験を持ち

さらに5年もの時を本気で修行に費やしたのだからな」

老人2人が楽しそうに話している

さて…どうしましょうか？

能力者との手合わせの経験は悪くありませんね…

「ガープさん、手合わせの件お受けします」

「そうか、感謝するぞシユウ。ぶわっはっはっは！」

ライト少年がどれだけ成長するか、私の好敵手となるのか…楽しみですね

「それでは、そろそろ失礼します」

「達者でな、ガープ」

「儂かセンゴクが話を受けると通達をしておくからの。何時でも気軽に来ればいい」

挨拶を終えた私達は小舟に乗り込み出航する

そして、小舟を少し沖に進めた所で私は能力を使いワームホールを開く
私とレイ養祖父さんが転移する時に見たガーブさんの顔は驚愕に彩られたものだっ
た

第57話

シャボンディ諸島に戻った私とレイ養祖父さんは貰った情報を元に
さっそく賞金首を狙うことにした

レイ祖父さんが選んだ賞金首はおよそ2000万ベリーから3000万ベリーの賞
金首だ

レイ養祖父さん曰く、グランドラインにデビューしたてのルーキーは情報に乏しい為
多少は情報が揃っている相手の方が良いとの事だ

そして、ブンタ御祖父さんから貰った剣を用いていざ実戦
結果としては私の勝ちです

傷一つ負うことなく勝てたので完勝と言っていいでしょう
ですが、賞金首を討ち取った証拠を海軍本部に提出して賞金を受け取った際に
私はその時の剣の感触を思い出して吐いてしまった…



「見つけたぞシユウ！勝負…って、どうした？」

胃が空になっても吐いている私を見つけたライト少年が勝負を挑んできたが

正直なところそれどころじゃない状態だ

「ライトか…シユウは今、新兵病になつとる所じゃ」

「ガープ中将、なんだそれ？」

「初めての实战を経験した多くの者になる心の病じゃな」

人を斬つた際の感触がずっと手に残っている

それが今も治まらぬ吐き気となつて私を蝕んでいるのだ

「じゃあ、シユウの奴は…」

「ああ、賞金首を討ち取つた証拠を持ってきおつたわい」

ライト少年が驚いた表情で私を見てくる

「シユウ、少し休んでいけ。医務室には儂が連絡しておくからのう」

「…いえ、レイ養祖父さんが待っているので帰ります。心遣い感謝します、ガープさん」

そういつて私は立ち上がる

これ以上海の魚達に撒き餌をするわけにもいきませんからね…

「お見苦しい所をお見せしました。では、失礼します」

そして、ワームホールを開き私はシャボンデイ諸島に転移した



「は？なんだあれ!? ワープか？チートじゃねえか!」

さつきまで海に撒き餌をしていたシユウの奴が、あいつの手から出た

黒い何かに入ったらその姿が消えていた

「詳細はわからんが、あれがシユウの能力なんじやろうな」

事も無げにガープが話すが、少しは驚けよ!

「待てよ、ということとは…あの時の手合わせはどんだけ手加減してたんだよ!」

「能力も覇気も使つとらんかったからな。文字通り手を抜かれとったわい」

ガープの言葉に愕然とする

…くっそ——!

「チートになんて負けねえぞ!ちくしよ——!」

「ライト…お前は時折、よくわからん言葉を使うのお」

ガープが呆れるように俺に言う

「そうだ、ガープ…中将、今回はシルバーズ・レイリーが来てなかったけど…」

「レイリーは引退したとはいえ、手配書はそのままじゃからな…サカズキを始めとして

色々とうるさいのも多いんじゃないよ」

「じゃあ、なんで前はシユウの奴と一緒に来たんだ？」

「センゴク辺りにやり込められたりしないか心配したんじゃないやろうな」

そう言ったガープは大笑いしている

冥王も丸くなったとかなんとか面白がつてやがる

「なあ、ガープ中将。シユウとレイリーってどういう関係なんだ？」

「それを知ってどうするんじゃない、ライト」

どうするってわけじゃねえんだが…

「…漁師の息子が針にかけた魚をバラしたまま終われねえだろう？」

「ぶわっはっはっは！」

「笑うな！悪いかよ！」

くそっ！センゴク元帥とガープ中将はこうして時折、俺をからかうように笑いやがる

「ライト、すまんすまん。そう拗ねるでないわ」

「拗ねてねえよ！悪いと思うなら教えやがれ！」

背中をバシバシ叩くな！痛いんだよ！

「そうじゃのう…2人の関係を話すなら、シユウの母親の

アカリの事を話さないといけないのお」

その後、アカリという人物の事をガープ中将から聞いた

ワノ国で《神童》と呼ばれたり、海兵を止めてロジャー海賊団に入ったり果てにはシャンクスと恋人になって一味を旗揚げしたりと：

お前は一体どこのオリ主だとツツコミをいれたくなるような人物だ

「：シユウの奴が転生者だと思つたが、母親の方だろこれ：」

「ライト、時折ブツブツと一人言をいう癖は直したほうがいいぞい」

ほつとけ、ジジイ

「とりあえず、レイリーがシユウの奴に肩入れする理由はわかつたぜ」

「そうか」

「だが、なんであんなになつてまで頑張るんだ？」

吐くほどキツイなら少しぐらい休んだつていいだろうに

「シユウは故郷を海賊に襲われたんじゃ」

「：は？」

「その報復の為に、シユウは覚悟を決めて動いとる」

いやいや、ちよつと待てよ

「そこまでわかつていて、なんで海軍は動かねえんだよ？」

「本部とは管轄が違うからのお：動くに動けんのじゃ」

なんだよそれ…

「ガープ中将ならなんとか出来るんじゃないやねえのか？」

「派閥問題もあるからそう簡単に動けんわい…センゴクにも止められとるからのお」
「でもよお…」

「それに、シユウは儂等が動くのを望んでおらんのじゃ」

「シユウが？」

「どういふことだ？」

「自身の手で報復を…それがシユウの望みじゃ」

「へえ…すかして行くせに、いい根性してるじゃねえか！」

見た目と違つて気合が入つてるじゃねえか！

「ライト…生半可な覚悟ではシユウに勝てんぞ」

「はっ、上等だぜ！」

俺は左の掌に右拳を叩きつける

「俺が本気を出して釣れなかつた魚はいねえんだ！きつちり踏み台にしてやんよ！」

「ぶわっはっはっは！その意気じゃライト！」

故郷の親父が腰を抜かす程のサクセスストーリー…見せてやんよ！

「よし！それじゃ、早速特訓といこうかのお」

「…いや、今日はもう訓練もしたし、明日からでも…」

「ぶわっはっはっは！」

俺はガープ中将に首根っこを掴まれて引き摺られていく

「離せジジイ！」

「ついでに礼儀も叩き込んでやるわい！」

その後、演習場に連れていかれた俺は、ガープ中将に文字通りにぶっ倒れるまでしごかれた

…いつか、絶対にぶん殴ってやる！

「まだ大丈夫そうじゃのう。もうーセット追加じゃ」

「ふざけんな——！」

第58話

シャボンディ諸島に戻った私はレイ養祖父さんに休養を言い渡された

私は抗議したが受け入れて貰えなかった

休養も成長する為には必要だと言われたので渋々することにした

もつとも、実戦をしないだけで今まで通りに修行は続けていった

無人島で身体能力向上に励み、ワノ国でシオリ御祖母さんに剣の型を見てもらいなが

ら

休養を過ごしていく。その合間にレイ養祖父さんとチエスもしていくが

精神的に参っていたのが影響したのか連敗してしまった

その事で私は改めて自分の状態が良くない事を認識した

こんな事ではアールロンに勝てないと更に修行にのめり込んでいく

そして1ヶ月程たった頃、シャボンディ諸島のシャッキーさんの店に

父さんが一味を率いて宴をしに来たのだった



「シユウ、飲んでるか？」

父さんがジョッキを片手に私に絡んでくる

「出来れば修行をしたいのですが」

「そう言うな、たまには付き合え」

紅茶を飲んでくれた私に父さんはエールが入ったジョッキを渡してくる

「…仕方ないですね」

「そうだ！時にはパーッと騒がないとな！」

父さんが店に響き渡る大きな声で笑う

その声に煽られるようにして私は一気にエールを飲んだ

…苦い

ワノ国で祖父母と飲んだ時はもう少し旨く感じたはずだが今日のエールは苦く感じる

「レイリーさんから聞いた。賞金首を斬ったってな」

父さんの言葉にあの時の感触が甦る

「…父さんはどうやってこれを超えたのですか？」

「俺は超えてないな」

その言葉に私は父さんを見る

「だが、付き合い方はわかったつもりだ」

「付き合い方…ですか？」

父さんは私にジョッキを掲げてみせる

「ああ、こいつを飲んで、騒いで、忘れる…それだけさ」

そう言った父さんは一気にジョッキを飲み干す

「プハー！ほら、シユウもやれ！」

そう言うって父さんは私のジョッキにエールを注ぐ

「乗り越えるだの、抱え込むだの、小難しい事は俺にはわからない

だがな、敵を倒さなきゃ大事な奴等は守れないんだ」

そして、父さんは自分のジョッキにエールを注ぐ

「だから戦う、それだけの事さ」

父さんはまた一気にジョッキを飲み干す

「シユウ、難しく考えるな。何が一番大切なのか…それだけを理解しておけばいい」

何が一番大切なのか…

「そうすれば、自然とその感情との付き合い方もわかってくる…

そして、それが出来ればお前も一人前の海の男さ」

ニツと笑った父さんが私の頭を撫でてくる

「だから飲め。今は飲んで忘れろ。そして、明日からまた大切なものの為に頑張ればいい」

私は父さんの言葉を受けてジョツキを飲み干す

…変わらず苦いが先程よりも飲みやすく感じた

「今日はたつぷりと酒を持ち込んできたからな、幾らでも付き合つてやるさ」

そして、父さんは私と自分のジョツキにエールを注ぐ

2人でジョツキを掲げる

「乾杯！」

父さんと交わしたジョツキに注がれていたエールは苦く、そして旨かった



ジョツキを干していくシユウを見る

…少しは気が晴れたようだな

20日程前に、レイリーさんからシユウが人を斬つたと連絡がきた

シユウがかなり参っていると知った俺は、一味の仲間たちに話をして

こうしてシャボンディ諸島までやってきた

思わぬ形で息子と飲むことになったが、父親として少しは

シユウに何かをしてやれたことで今日のエールは一段と旨く感じる

「父さん、遅くなりましたが、『四皇』になった事、おめでとうございます」

「ああ、ありがとうな、シユウ」

2年前に俺達、赤髪海賊団はグランドラインの後半の『新世界』において

その頂点の一角である『四皇』になることができた

これで、俺達は『白ひげ』に並ぶ大海賊になったわけだ

「そう言えば、最近『鷹の目』との決闘の話がありませんが…どうしたのですか？」

…そんな事まで知っているのか

息子に気にしてもらえている事が素直に嬉しい

「鷹の目が言うには、俺は壁を超えたら嬉しいな」

「壁…ですか？」

シユウが不思議そうに首を傾げている

特効薬を作っちゃまう程の天才の息子にもわからない事があるとは、世の中面白いものだ

「海軍の三大将やガープ、そしてレイリーさんやロジャー船長のような大物達…」

それらと他の連中には一線を画す壁があるらしいな」

シユウが興味深そうに聞いている

レイリーさんも興味を引かれたのかこっちに向かってきた

「鷹の目曰く、超一流の壁らしいが、俺がそれを超えたことで

俺と決闘の決着をつけるなら自分もそれを超えないといかんのだとさ」

「超一流の壁……」

シユウが顎に手をやり考えている

……ベックマンも時折する仕草だが、頭のいい連中は皆こうなのか？

「面白そうな事を話しているね」

レイリーさんが俺とシユウがいるテーブルの椅子に座った

「レイ養祖父さんは今の話、わかりますか？」

「……わかるというよりは、実感があるといったところだね」

俺自身はその実感がないからレイリーさんの言葉に興味があるな

「私が昔、ガープやロジャーの戦いについていけなかったと話した事があるだろう？」

「はい」

へえ……俺は初耳だが、レイリーさんにもそんな時期があつたんだな

「冒険を続けていく中で、私も三種の覇気を身に付けていったが、ロジャーとガープは

いつも私の一つ先を進んでいった」

レイリーさんが懐かしむ様に話していく

「ニューゲートやガープと渡り合うロジャーは自慢の相棒だったが

その相棒の戦いについていけない己にどこか後ろめたさを感じていた」

白ひげをニューゲートと、その名前を呼ぶのは広い海でもロジャー船長やガープ

そしてレイリーさんぐらいだろう

「ロジャーはそんな私の感情に気づいていたようだな…その事でちよつとした口論になり

そして、本気の喧嘩になってしまったんだ」

俺の知るロジャー船長とレイリーさんの喧嘩はアカリが止めていたが…どうなったんだ？

「その時の喧嘩は、昼に始めて、翌日の朝日が昇るまで続いたんだ」

ロジャー船長と一昼夜喧嘩し続けたのか…すげえな

「お互いに顔がボコボコになっていてな。夜が明けるまで気づかなかつたんだが

朝日にお互いの顔が照らされてね、2人で大笑いしたんだ」

レイリーさんがジョッキを傾けて喉を潤していく

一息吐いたレイリーさんが続きを話し出す

「そしてロジャーが言ったのさ……」

『俺とこんだだけ殴りあえるんだ！引け目を感じてるんじゃないやねえ相棒！』とね」

レイリーさんの話に、俺は改めてロジャー船長のデカさを感じる

「思えばその時からだろうね……目の前が晴れたように感じた私は

ガープやニューゲートとも渡り合えるようになったんだ」

「そして、気づけば《冥王》等という二つ名で呼ばれるようになっていた」

レイリーさんがエールを飲み干す

「こんなところが私の経験談だが……少しは役立ったかな？」

「はい、ありがとうございます。レイ養祖父さん」

シユウだけじゃない、俺もレイリーさんの話は為になったと思う

「年寄りの昔語りはここまでにしようか。今は酒を楽しもう」

そして、レイリーさんが俺とシユウのジョッキにエールを注いでいく

俺は返礼としてレイリーさんのジョッキにエールを注ぐ

「さあ、乾杯しようか」

レイリーさんが音頭をとる

「乾杯！」

打ち鳴らされる三つのジョッキ

そして、飲み干していくエールは一際旨い酒だった

第59話

シャツキーさんの店での宴の翌日、父さんは二日酔いの頭を抱えながら出航した。どうやらレイ養祖父さんからの連絡で私に会いに来てくれたらしい。

おかげで気持ちの整理ができました。

2人には頭が上がらない思いです。

父さんが出航してから3日程が経ち、私は賞金稼ぎの活動を再開した。

斬ることへの嫌悪感のようなものは相変わらず無くならないが、

少なくとも戸惑うことは無くなった。

父さんの言葉通りに何が一番大切なかを考えるようにしたからだ。

うん、ナミやベルメールさん達に比べれば賞金首の事など、どうでもいい。

そうやって気持ちに折り合いをつけていけるようになってからは、

精力的に実戦の経験を積んでいった。

そして、賞金稼ぎとして活動を始めてから2年程経ち、私は17歳になった。



「ぎやあああああ！いつてえ——！」

叩き斬った賞金首の左前腕が甲板に落ちる

これで、やっと五分に持ち込めたといったところですね

私は今、賞金首の《千剣》のシエードと戦っている

シエードはグラウンドラインにデビューして間もないルーキーだが

その賞金額は5000万ベリーになる大型ルーキーの賞金首だ

「くっそお、てめえ、俺になんの恨みがあるってんだ！」

「やれやれ、貴方は自身が賞金首だという事を忘れているのですか？」

戦いが始まった時は高笑いをしながらこちらを攻撃してきたというのに…

「くっそ！ふざけんな！モブ如きが俺に逆らうんじゃねえ！」

そう叫んだシエードはその身体中に剣を生やす

「串刺しになれや！」

その言葉で身体中に生やした剣を私に向けて飛ばしてくる

事前の情報ではシエードの能力は超人系《ブキブキの実》のモデル《剣》との事

その情報通りに多くの剣を自在に生み出し、こうして私に飛ばしてきている

私はこの2年で使えるようになった《剃》を使い甲板を所狭しと動き回る

——転移が使えればもう決着がついているのですがね……——

今回、私がシエードと戦う前に私はレイ養祖父さんから一つ枷をつけられたそれは能力の使用禁止だ

私の能力は重力を操るものだがその中でもワームホールを開き転移する事は距離の概念を無視する事が出来るので戦いにおいて大きなアドバンテージとなるそれが出来ないことがシエードとの戦いで苦戦する要因の一つになっているがシエードの能力で行われているこの剣群による物量戦もやっかいなものだ

「モブ如きが避けてんじゃねえ！」

間断無く射出され続ける剣群は船体を破壊しながらも海に投げ出されていく

そして、海に入った大量の剣は泡のように消えていく

そんな不思議な光景を横目にしつつ私はシエードとの間合いを詰めていく

「くそっ！来るんじゃねえ！」

間合いに入った私は直剣を振りかぶる

対してシエードは幅広の短剣を片手に受けようとしてくるが

私は短剣ごとシエードを叩き斬る

バキーンッ！

短剣の碎ける音と共にシエードに袈裟懸けの傷が走る

ガキツ！ガキツ！

残心しつつシエードから距離をとった私が耳にしたのは
鉄が打ち重なるような音だった

「くそっ！いてえ！ふざけんじゃねえよ！」

袈裟懸けに斬った傷は鉄色に覆われシエードの出血が止まっていた
よく見るとシエードの左腕の傷の出血も止まっている

「ぐっ！いてえ！こんな事させやがって…絶対に許さねえ！」

どうやらシエードは能力を用いて傷を剣で覆い出血を止めたようだ

「貴方に限った事ではありませんが能力者というのは存外しぶといものですね」

私は脇腹に刺さっていた剣を抜く

出血するが武装色の覇気を使い傷を締め付け止血する

覇気は意思の力でもあるからか傷の痛みも緩和されていく

「くそっ！なんで腹を刺されて普通に動けるんだよ！」

シエードの能力で負った傷は腹だけではない

直撃はしなかったものの全身に切り傷が出来ている

「この程度の傷には慣れていきますので」

「ふざけんな！モブは大人しくやられていろよ！」

アーロンの銃撃以外にもこの2年の賞金稼ぎ生活で多くの傷を負っていった
楽な戦いばかりではなかった：その経験が私の血肉となりこうして立っている
「さて、そろそろお仕舞いにしましょうか」

「くそっ！くそっ！モブが俺のハーレム計画を邪魔しやがって！」

そして、シエードの全身から撃ち出される剣群に向かって私は踏み込んでいた



「よう！そろそろ来ると思ったぜ、シュウ！」

シエードを討伐した証拠を持ち海軍本部に転移した私をライトが出迎えた

「ライト、最近よく私を待っているようですが、なにか根拠があるのですか？」

「漁師の勘だ！」

胸を張って言い切るライトに私はため息を吐く

「シュウ！釣竿一本で日々の糧を得ていく漁師の勘を舐めるなよ！」

「舐めているわけではありませんよ、ライト」

少なくとも私はそういった類いの勘を持っていないので理解し難いだけだ

「まあいいか、シュウ！勝負だ！」

「それは構いませんが、先にこれを提出してからにしましょうか」

そう言つて私は血が滲む皮袋を掲げる

「うえっ！そんなもん見せんな！」

「以前に実戦を経験したと伺いましたが、ダメですか？」

ライトは少し顔色を悪くしている

「俺は基本的に素手だからな、そういうのは経験がねえ…それに、海軍では相手をぶつとばせば海楼石の手錠で能力者も捕まえられるからな」

ライトが皮袋から目を反らしつつ私に答える

「なあ…シユウはどうやってそれを超えたんだ？」

「超えてなどいませんよ」

「は？」

ライトが驚き目を見開いている

「父さんに助言を受け、何が一番大切なのかを考えるようにしました
それで、折り合いをつけられるようになったのですよ」

「折り合いか…」

「誰もが、物語に語られるような英雄や偉人のように

背負つたりできるわけではありませんからね」

「…確かにそうだよな」

「今でも完全に嫌悪感が消えたわけではありませんが、それでも戸惑わずに戦える程度にはなりました」

「すげえな…はあ、俺も頑張んねえとな」

この2年の間に何度もライトとは手合わせを重ね友と呼べるぐらいには仲良くなった

そして、負けず嫌いのライトがこうして相手を認める事が出来るようになったのは間違いなくライトが成長した証でしょう

「それで、今回の獲物は誰だったんだ？」

「《千剣》のシールドですよ」

「まじか！5000万ベリーの大型ルーキーじゃねえか！」

ガープさん曰く、最近良く学ぶようになったライトはこういった賞金首の情報にも詳しくなっているようだ

「たしか、ブキブキの実の能力者だろ？よく勝てたな」

「無傷ではありませんよ。腹を刺されてしまいましたからね」

そう言っつて私は自身で縫い合わせた傷をライトに見せる

「おい！何してんだ！早く医務室に行けよ！」

「処置はしてあるので問題ありませんよ。それに、外科処置の腕ならそこいらの医者よりも上だという自負はありますから」

この2年の賞金稼ぎ生活はこういった生傷が絶えない日々だったその為、太極で学んだ知識を用いて自分で処置をしていく内にレイ養祖父さんも認めるぐらいに外科処置の腕が上がったのだ自身を処置していくのだから失敗など出来ない：そんな状況が

私の外科処置の腕を急上昇させた要因だろうとレイ養祖父さんが言っていた「まったく…このチート野郎！絶対に負けねえからな！」

「ライト…貴方は時折わからない言葉を使いますね…」

既知感を感じているのだが詳しくはわからないのでこう言っておく「あく…細かい事は気にすんな！」

「そうですか…ですが、シエードも似たような事を言っていましたね」
「…へ？」

ライトが面白い顔をしている

「貴方と初めてあった時のように、私の事をモブと呼称してきました」
「…マジか？」

驚いたライトは何やらブツブツと呟き始めた

「…シエードは転生者だったのか？ そう思えばブキブキの能力って

前世のアレに似ているよな？…それにモブとか言つて…踏み台じゃねえか…」
何やら思案しているようだ。友として注意しておきましょう。

「ライト、そのブツブツと呟く癖は止めたほうがいいですよ」

「ほっとけ」

そう応えるライトにため息が出る思いだ。

気を取り直して私は周囲を見渡すと、いくつもの海賊旗を掲げた船を見つけた。

「ライト、今日はなにやら海賊船が多いようですが…なにかあったのですか？」

「ん？ ああ、今日は《七武海》を招集して会議があつたんだ」

「七武海ですか？」

七武海は父さんの好敵手である《鷹の目》も就任しているもので

海軍が海賊行為を公認している海賊達の事だ。

「ああ、最近の海軍は《革命軍》の相手で忙しくてな…それで、海賊達を

適当に間引いてくれと依頼するってガープ中将が言つてたな」

革命軍は世界政府に反旗を翻す組織で最近の新聞をよく騒がせている

「それより知つてるか、シュウー！」

「何をですか？」

「ハンコックだよ！ボア・ハンコック！すごい女だぜ！」

ライトは興奮したように私に言い寄ってくる

「顔も美人で背がスラツと高くてよ！しかもこう、ボン！キュツ！ボン！」

テンションが上がり過ぎですよ…ライト

「ライト…貴方と話していると、時折貴方が私と歳が近い事を忘れそうになります」

「なんだよ！健全な十代なら、こういう話で盛り上がるだろうが！」

ライトが拳を握り力説してくる

「それを悪いとは言いませんが、もう少し周囲を気にはどうですか？」

「うえ？」

ライトが周囲を見渡すと船を見張っていた女性海兵の白い目に気付き

冷や汗を流し始めた

「…やっちゃまったあ——！」

「やれやれですね…ん？」

私がライトに呆れていると海軍本部の建物の方から鋭い目付きの男が歩いてくる

そして男が私達に近付いた時、その背にある獲物を抜き放ったのだった

第60話

「…いきなり斬りかかってくるとは穏やかではありませんね。どういふつもりですか？」

鷹のように鋭い目をした男が背負っていた剣を抜き放ってきたが
私も腰の剣を抜きなんとか受け止めることができた

「暇潰し」

目の前の男はさも当たり前のように言う

男の理不尽な物言いにライトが怒りの声をあげた

「てめえ！俺のダチになにしゃがる！」

剣を合わせたままに男はライトに視線を向ける

「貴様に興味はない。去れ、弱き者よ」

「俺が弱いだとお！」

男の言葉に激昂したライトは両手に電気を纏う

私は今にも殴り掛かりそうなライトを止めた

「止めなさい、ライト」

「シュウ、でもよお！」

劍を合わせたままに視線をライトに向けている目の前の男だが

その劍からはまったく隙が見当たらない

ズキリと縫い合わせたばかりの傷が痛む

間違いない……この男は万全の状態でも勝機を得られるかわからない格上の相手だ

「覇気も六式もまだ扱えないライトでは、この男の相手は無理です」

「おい、シュウ！」

「申し訳ありませんが、見た目程余裕はないのですよ」

ライトは驚き目を見張る

「くそっ！今助けを呼んでくるからな！」

そう言い残しライトが走り去っていった

「直剣とは珍しいな、名乗るがいい」

「私の名はシラカワ・シュウです！」

その言葉と共に男の劍を弾き距離をとる

男は様子見だったのか仕掛けてはこない

「シラカワ？貴様はシラカワ・アカリに縁有る者か？」

「……ええ、シラカワ・アカリは私の母です」

私の言葉に男は驚いた様子を見せる

「そうか、貴様は《赤髪》の息子か」

「父さんの知り合いですか？」

「我が名はジュラキユール・ミホーク」

いきなり斬りかかってきた男は《鷹の目》だったようだ

私はよく生きていましたね…

「そうですか」

「貴様の事は酒の席で赤髪からよく聞かされる」

やや迷惑そうな声色で告げられる…私の父が絡んですみません

「だが、なるほど。加減をしたとはいえ、俺の一太刀を受け止めたことに合点がいった」

そう言いながらミホークは片手で剣を構える

その構えから受ける圧力はブンタ御祖父さんに匹敵するものがあつた

私はその圧力に転移での逃走も思考に加えていく

「臆すか」

「ええ、臆して逃げようかと考えています」

「ほう、それを認められる程度には強き者であつたか」

鋭い目はそのままにミホークは面白そうに口元を吊り上げる

「こちらは少しも面白くありませんがね！」

「さて、赤髪の子よ。少し暇潰しに付き合ってもらおうぞ」

その言葉と共に踏み込んでくる気配を見せたミホークに対して

私は自分からミホークに踏み込んでいく

「ほう、流石はシラカワ・アカリの息子…中々の剛の剣だ」

踏み込み、何度も撃ち込んでいくが手応えはなく軽いなされていく

ゾワッ！

背筋に冷たいものを感じた刹那、私は《荊》使い距離をとる

ヒュッ！

距離をとった直後、私がいた場所をミホークの柔らかくも鋭い一太刀が通りすぎた

「勘か見聞色か…よくやるな、赤髪の子よ」

避けきったかに思えたミホークの一太刀だが私の胸に一筋の傷を作っていた

「骨には届かなかったか…見事だ」

称賛してくるミホークを見据えたままに武装色で傷を締める

「くくく…その若さでそこまでやれるか」

傷は浅いがシールドとの戦いでの消耗もあり本当に余裕がなくなってきた

「では、次はこちらから行くぞ」

先程まであの大きな黒刀を片手で操っていたミホークが両手で構え直した……ここまでですね

私は転移で逃走の準備に入る

「そこまでじゃー！」

場を制する大声と共にガープさんが私とミホークの間に割り込んできた

「これ以上海軍本部で暴れるのなら儂が相手になるぞ。鷹の目」

「…それも悪くないが中々に楽しめた。今日はここまでにしておこう」

「どうやら生き残れたようですね…」

「赤髪の子よ、酒はいける口か？」

「嗜む程度には…」

「そうか、適当なところに案内しろ」

そう言ったミホークは棺桶のような船に乗り込んでいく

私はため息を一つ吐きガープさんに礼を言う

「ガープさん、助かりました。これはシールド討伐の証です」

「ぶわっはっはっは！気にせんでいいわい。賞金はどうする？」

「後日受け取りにきます。それまで預かっておいてください」

頷いたガープさんを確認した私はミホークの船に乗り込む

「私の能力で案内します。そのまま船を進めてください」

「赤髪の子よ、貴様は能力者か？」

「ええ、その通りですよ。ミホークさん」

ミホークが剣呑な目付きで私を見据えてくる

「なぜ先程の戦いで能力を使わなかった？」

「…さて、何故でしょうかね？」

私の言葉で不満を露にするミホークに少しはやり込める事が出来たかと笑いが溢れる

「ククク…失礼しました。それでは行きましょうか」

私の言葉でミホークは棺桶に似た船を出航させる

その船の進路に私は能力を用いてワームホールを開いた

ワームホールを見たミホークは驚きに目を見張る

その顔を見た私はさらに留飲が下がる気持ちとなりまた笑いが溢れる

その中でも船はワームホールへと進んで行き、私達はシャボンディ諸島に転移した

第61話

「おや、珍しいお客だね、シユウ」

「お帰り、シラカワちゃん」

ミホークを連れてシャボンデイ諸島に転移した私は、

そのままシャツキーさんの店まで案内していた

「ただいま、レイ養祖父さん、シャツキーさん」

店に入ったミホークはレイ養祖父さんの顔を見て固まっている

「シャツキーさん、糸と針をお借りします」

「どうぞ、シラカワちゃん」

今も武装色の覇気で止血しているがミホークの一太刀の傷の処置を

終えたわけではないのだ

「ふむ、見聞色で観たところ全身18箇所、軽い切り傷に、腹と胸に大きな傷か…

どうやら想像以上にシエードに苦戦したようだね」

「胸の傷はその御仁との手合わせで負ったものですよ、レイ養祖父さん」

「…ほう？」

レイ養祖父さんが眼鏡を光らせながらミホークを見る

その視線を受け固まっていたミホークが動き出した

「赤髪の子よ、貴様は冥王の縁者か？」

「レイ養祖父さんは私の養祖父であり、師でもありますね」

私はカウンターに入り針と糸を消毒しながらミホークに答える

「シャツキーさん、ミホークさんに酒をお願いします」

針と糸の消毒の合間に塩を取り生理的食塩水も作っていく

「わかったわシラカワちゃん。鷹の目さんはワインでいいかしら？」

「ああ、構わん。馳走になるぞ、店主」

シャツキーさんが棚から取り出したワインは私のワームホールで10年程熟成させた物だ

ワームホールでの転移以外でも倉庫のように使えるようになり

今回のシェードとの戦いの後のように傷の処置の為の道具を持ち運ぶ事が出来るようになった

他にも食糧や飲料等も私のワームホールに入れてある

このワームホールはある程度だが中の環境を選ぶ事が出来るので非常に便利だ
但し、完全な時間停止などは出来ないので一定期間事に

ワームホールの中を整理する必要がある

現状で出来るワームホール内の環境設定は太極と同じ時間の流れ

もしくはその逆の流れと気温や湿度ぐらいだ

「…そう言えばワインを息子にプレゼントされたと赤髪が自慢していたな」

父さんが喜んでくれるのは嬉しいが酒の席で話題にされるのは恥ずかしいものだ

「さて、鷹の目のミホークだったね。飲むのならこちらに来てはどうかな？」

「…よかろう」

やや剣呑な雰囲気醸し出すレイ養祖父さんに臆せずミホークはカウンター席に座った

「シユウが世話になったようだね」

「暇潰し程度のもりだったが、想像以上にやる男だった」

グラスを打ち合わせ飲みながら2人が話していく

そろそろ消毒もいでしょう

私はカウンターの奥で上着を脱ぎ生理的食塩水で傷口を洗っていく

「あの齢でやるものだと思つたが冥王の弟子だったか」

「ああ、自慢の養孫さ」

傷口を洗い終わった私は傷口の癒着後に筋肉や皮膚に影響が出ないように

気を付けて傷口を縫い合わせていく

「…顔色一つ変えずに自ら傷を縫い合わせるか。大した胆力だ」

ミホークの称賛は嬉しいですがただ慣れているだけの事です

傷口縫い合わせた私はワームホールから予め作っておいた軟膏を取りだし塗っている

そして、清潔な布を処置した部位に当てて包帯を巻いたら処置完了だ

軟膏には薬効成分を染み込ませてあるので後は能力で空気を濃くして休めば

3日程で傷は完治するでしょう

「シャツキーさん、今回はそれなりに血を流してしまったので

何か食べるものをお願いします」

「ふふ、わかったわ、シラカワちゃん」

シャツキーさんに食べるものを頼んだ私は紅茶を淹れてカウンター席につく

「ワインの味はいかがですか？ミホークさん」

「旨いな…もしま、貴様が何か手を加えたのか？」

「おや、察しがいいですね」

私の言葉を受けても顔色を変えずにミホークはワインを味わっている

「そのワインは10年程熟成させてあります」

「10年？それも貴様の能力か？」

「ククク、さて…どうでしょうかね？」

深く突っ込んで聞く気が無いのかミホークはワインを飲み干しお代わりを頼んだ

「店主、もう一本頼む」

ミホークの注文を受けてシャツキーさんがワインを出す

「はい、シラカワちゃん」

どうやら食事も出来たようですね

胃袋が早く栄養を寄越せと煩いのでさつそく匙を持ち食べていく

その食事の途中で私はミホークに尋ねた

「ミホークさん、一つ聞いてもいいですか？」

「…なんだ？」

私は紅茶を一口飲んでから話を続ける

「以前、父さんからミホークさんが壁にぶつかっていると伺いましたが

それは今も変わらないのでしょうか？」

私の言葉にミホークはグラスを置きこちらを見てくる

「それを知ってどうする、赤髪の子よ」

「…私は、ある目的の為に強さを欲しています。それ故の疑問といったところですね」

ミホークがワインが入った瓶を掴みそのまま飲みだす

「…今だ壁にぶつかつたはまだ」

あれ程の強さなのにまだ壁にぶつかつているのですか…

私は先の見えない強さのため息が出そうになる

「冥王よ、貴様はどのようなにして先へと至つた。俺と赤髪の何が違う？」

ミホークがワインを煽りながらレイ養祖父さんに問う

その言葉には静かながらも強い感情が込められていた

「私とシャンクス、そして君の強さは種類が違う。残念ながら君の

参考にはならないだろうね」

「種類？」

ミホークと同じく私も疑問を頭に浮かべる

レイ養祖父さんがワインで喉を潤しながら言葉を紡いでいく

「私やシャンクスの強さは海賊としての、海の男としてのものだ。対して君の求めるものは
純粹に剣士としてのものだろうか？故に種類が違うといったのだ」

なるほど、完全に理解ができたわけではないですが納得しました

私はミホークや賞金首と戦つた時、剣技だけで勝とうとは思わなかつた

剣技も使つて勝とうとはするがそれはあくまで選択肢の1つとしてだ

「…そうか」

「だが、君が先に至る為の手伝い程度なら出来ないこともない」

「なに？」

ミホークがレイ養祖父さんを強く見つめる

「シャンクスは壁を超えたがそれでも一步程度…まだロジャーやニューゲートの

領域には遠く及ばない」

レイ養祖父さんがグラスのワインを飲み干しミホークへと顔を向ける

「故に、シャンクスが更なる成長を遂げるためには、好敵手の存在は欠かせないだろう」

レイ養祖父さんはまるで試すような目をミホークへと向ける

「私の頼みを聞いてくれるのなら、その手伝いをしよう」

「…よかろう、望みを言え、冥王」

レイ養祖父さんは小さく笑いを溢す

「なに、大した事ではないよ。時折で構わない、シユウと手合わせをしてやって欲しい」

レイ養祖父さんの言葉に私は目を見開く

「その礼として、私が君と立ち合おう」

「冥王が？」

「私はシュウの師だが、シャンクスの師でもある…

君にも得られるものは十分にあると約束しよう」

ミホークが鋭い目のまま口を吊り上げる

「受けよう」

「そうか、それはありがたいね」

レイ養祖父さんが笑顔のまま私を見る

「シュウ、そういうわけで、君の修行に鷹の目との手合わせを追加だ。頑張りなさい」

ミホークが獲物を見つけた鷹のような目で私を見据えてくる

私は突然降りかかった新たな試練に冷や汗が止まらなかった



東の海のとある海域で、小船が海賊船に追われていた

小船に乗るのは1人の可憐な少女

絶望的と言えるような光景だが、小船は海賊船をどんどん引き離していく

少女は海流を、風を的確に読み小船を操ることで常識では考えられないような

速度を小船で出し、海を進んでいく

遂には海賊船を水平線の彼方へと振り切り、少女は見事に逃げ切ったのだった



「ふう、しつこい連中だったわね」

少女は一人、言葉を溢す

太陽に照らされるその美しいオレンジ色の髪と健康的な体は

少女の容貌も相まって世の男達を振り向かせる事は間違いないだろう

だが、悔るなかれ…この可憐な少女は非常に強かな女性なのである

「さて、今回の収穫はどうかしら？」

小船に乗せていた宝箱を少女が慣れた手付きで開けていく

「あら、50万ベリーの海賊にしては溜め込んでるじゃない、ラッキー♪」

そう、この少女…海賊船から宝を盗み出して追われていたのだ

「うくん…これで合計3000万ベリーは集まったかしら」

少女の故郷は海賊に襲われ、支配されてしまっている

その故郷を買い取り戻すために、こうして少女は日々奮闘しているのだ

「あと7000万ベリー…頑張らないと」

少女は言葉と共に決意を露にする

その目には強い覚悟があつた

「あと3年か…」

少女は新聞を手に取り拵げる

その新聞には、波打つ紫の髪が特徴的な若い男性の写真が掲載されており

グラントラインの大型新人海賊を討ち取つたと書かれていた

「ふふふ♪」

微笑みながらその新聞の人物を見る少女の目は、間違ひなく恋する乙女のものであった
「私も頑張るわ…だから、無事に帰ってきてね、シユウ」

海上に暖かな風が吹く

その風を受けた小船は、少女を応援するかのように力強く海を進んでいった

第62話

レイ養祖父さんがミホークとの手合わせの口約をしてから3日経った
ミホークはその間、シャッキーさんの店に入り浸りワインを飲んでいた
熟成させたワインが余程気に入ったのかレイ養祖父さんとの手合わせが
楽しみなのはわかりませんが怪我が治ったばかりで
ミホークと手合わせをしたくないものです
そんな私の心の嘆きなど知ったことかと言わんばかりに
無人島でミホークと手合わせをすることになったのだった



「ご苦労だね、シユウ」

レイ養祖父さんが労いの言葉をくれるがまともに返事が出来ず
砂浜に横たわったままだ

「ふむ、どうやら鷹の目との手合わせは相当に消耗したようだね」

レイ養祖父さんのいう通りで体の疲れ以上に精神的な疲労で動けないのだ

互いに木剣、木刀を使って手合わせしたのだがこの手合わせを一言でいうならば『死なない程度に手加減された』とでもいうべきでしょう

なんとか全力を懸けて頭への直撃は避けたのだが代わりに腕、腹、肩と

頭を除いて上半身を余すところなく打ち据えられたのだ

勿論やられるばかりではなくこちらからも打ち込んだのですが

結果は一発も当てることが出来ませんでした…

「枷をしたままでこの結果ならば上出来だよ、シユウ」

「枷?…あ、忘れてましたね」

「赤髪の子よ、貴様は俺との手合わせで手を抜いたか」

「いえ、全力で挑みましたよ…ただ、忘れてただけです」

何を忘れていたのかというと私の重力を操る能力で、

私は日常的に自身にかかる重力を増やしているのですが

それが当たり前になっていたので解除するのを忘れていたというわけですね

もつとも、枷を外しても然程結果に差は出ないでしょうが…

「次回からは枷の解除も選択肢に入れて挑もうか」

「はい、レイ養祖父さん」

私達のやり取りを不満気にミホークは見ている

「さて、待たせたね。それでは口約通りに相手になるるか」

レイ養祖父さんの言葉にミホークが口を吊り上げる

「この緑豊かな島が荒れることになるが、構わんのか？」

「ああ、構わないよ。もつとも、今の私と君の力の差では問題ないだろうがね」

キンツ！

レイ養祖父さんの言葉を受けミホークが背負っていた黒刀を抜き打ちした

いや、正確には抜き終わっていたところしか見えていない

だが、そんな一太刀をレイ養祖父さんは微笑みながらサーベルで受け止めていた

「シユウ、今の君では参考にもならないほど力の差を感じるだろうが

それでも、こういった世界があるということを学びなさい」

そこからは私には理解しきれない領域の戦いが始まった

ミホークが打ち込めばレイ養祖父さんが涼しい顔で受けミホークの腹を

蹴り飛ばして距離をつくる

レイ養祖父さんが打ち込めばミホークが歯を食い縛り受け止めていく

私が打ち込んだ時のように柔らかく流さないのだ

…いや、流せないのでしょうか？

瞬きすらもつたいたいと感じる高次元の戦いが眼前で行われていく

そして、それまで距離が離れてもすぐに踏み込み斬り結んでいた2人が

距離をとったまま動きを止めた

「流石だ、冥王。赤髪以上の力の差を感じる」

「それは光栄だね」

よく見るとミホークが汗を流している

ミホーク程の男でもレイ養祖父さんの相手は消耗するようだ

「そして、貴様の言葉に偽りはなかった。俺はこの戦いに手応えを感じている」

ミホークは左手を握り締め口角を吊り上げている

「だが、この世界最強の黒刀はまだしも、これ以上は俺が持たん。」

故に、次の一撃で終わりにさせてもらおう」

「ああ、構わないよ」

ミホークが黒刀を両手で構えるがレイ養祖父さんは片手でサーベルを持ったままだ

「…行くぞ、冥王！」

ミホークが袈裟懸けに、レイ養祖父さんが横に剣を振り抜いた状態で交差している

ミホークが剣を振り抜いた先に砂柱が、そしてその先の海にまで至り水柱も上がって

いる

「…見事！」

ミホークが一言発すると胸に一筋の傷が浮かび血を吐いた

そして、ミホークはゆっくりと砂浜に倒れていった

「若いというのは羨ましいものだ。僅かの間にも成長するのだからね」

レイ養祖父さんがサーベルを鞘に納めながら言う

「シユウ、鷹の目の傷の処置を頼むよ」

「わかりました」

「それと、《ビール》をくれるかな？久しぶりに動いて喉が渴いたからね」

「はい」

私はワームホールから小樽に入った冷えた《ビール》をレイ養祖父さんに渡す

「ありがとう、シユウ」

小樽を受け取ったレイ養祖父さんは木陰まで歩いていき一杯やり始めた

さて、私もミホークの治療に取り掛かりましょうか

私はワームホールを開き、その中から医療道具を取りだし

ミホークの治療に取り掛かり始めた



うん、旨い：やはり、エールとは一味違うな

私は一杯やりながら、鷹の目の治療をしているシユウを見る

我が養孫ながら不思議な子だと思ふ

少し前に、商人へと転身したかつてのロジャー一味の仲間が訪ねて来たのだが

その時にその仲間が『小麦が豊作で大麦がだぶついている』と嘆いたのが

この『ビール』が産まれるきっかけとなったのだ

かつての仲間の嘆きを聞いたシユウが『大麦を酒作りに使つてはいかがですか？』と

事もなげに言った時は仲間と顔を見合わせてしまったものだ

商機と感じたかつての仲間はだぶついていた近隣の大麦を買い占め

シユウのいう通りに酒作りに使った

これが大当たりだった

エールとは違う深い旨味にキレのいい苦味：新しい酒が誕生した

たまたまシャボンディ諸島に来ていたシャンクスが初生産分を

全て買い占めていった事からも『ビール』の旨さがわかるだろう

しかし、この酒の名付けも傑作だったな

シユウが『Aの次なのでBにでもしましょうか』等という理由で

《ビール》と名付けてしまった時は笑ったものだ

だが、この《ビール》という名称は妙にしっくりとくるものだった
シャンクスが買い占めた事でまだ市場には出回っていないが

いずれは名酒として広まることだろう

私はまた一口ビールを煽る

ああ…この喉ごしがたまらない

よく冷えたビールが体の火照りを冷ましていく

一息ついた私は、シュウが治療している鷹の目を見る

まだ壁を超えたわけではないが、その縁に手をかけることは出来た

この先も精進を続けていけば、その先へと至るのもそう遠いことではないだろう

しかし、3日前のシュウと同じ傷をつけたのは少々大人気なかったかもな

シャンクスは息子と出会い、四皇へとなった事で最近落ち着きを見せている

そんなシャンクスの尻を叩くには今回の件は丁度良い出来事だった

鷹の目よ、すまないがシュウとシャンクスの成長に利用させてもらおうよ

しかし、私も衰えたものだな…

あのまま戦いを続けていれば半日で息が切れていただろう

かつてはニューゲートやガープと一昼夜戦った事もあるというのに…

ゲーブも私と同じように衰えを感じているのだろうか？

いや、ゲーブはまだ現役を続けている

私程の衰えは感じていないだろう…

ふむ、シユウやシャンクスの成長は望むところだが、そう簡単に超えられるのも問題
だな

鷹の目との手合わせもあることだ…少し鍛えなおすとしようかな

若者達の成長が刺激となり、この老骨の血を滾らせる

私はその滾りを冷ますようにビールを煽った

第63話

目を覚ましたミホークは私とレイ養祖父さんに一言礼を言う

棺桶に似た船に乗って出航していった

手応えを忘れぬ内に己を鍛え直すらしい

出航する際に3ヶ月に一度程シヤボンデイ諸島を訪ねてくれるとの事で

これからもまだ暫くはミホークとの手合わせは続くようだ

私自身も目指すべき強さの先がレイ養祖父さんとミホークの戦いのおかげで見えたので

それらをイメージしながら修行をしていく事にした

未だ影すら踏めぬ遙か先の領域だがアーンに確実に報復するためにも

少しでもその領域に近付かねばならない

私は改めてアーンへの報復を誓い修行に打ち込んでいく

賞金稼ぎとして実戦経験を積み修行とミホークとの手合わせで己を高めていき1年

私は18歳になった



「いつもご苦労だね、シラカワ君」

「私自身の為ですから劳いの言葉は不要ですよ。センゴク元帥」

賞金首討伐の証を提出し次の情報を貰いに来たことでセンゴク元帥と会うことになった

以前までは基本的にガーブさんが情報をくれる窓口となっていたのだが

ここ最近はライトを演習や航路の巡回に連れていくことが増えて不在であることが多い

その為、こうしてセンゴク元帥と会う機会が増えているのだ

「シラカワ君が求める情報はこの書類に記してある。記憶したら破棄してくれ」

私は書類に目を通していく、一通り見たら書類を破り灰皿の上へと置く

「もういいのかね？」

「ええ」

大抵のものは一目見れば覚えられるので問題ない

もつとも、理解できるとは限りませんが…

「相変わらず優秀なようだ。どうか、シラカワ君も海軍に…」

「入りませんよ、センゴク元帥」

「ここ最近、センゴク元帥と会う機会が多いのだがその度にこうして誘いを受ける

「ふむ、ライトも友が近くに在れば嬉しいだろう。それに、お互いに切磋琢磨することで

更なる成長を望めるのではないかな？」

「何度情や利を語ろうとも私の優先順位は変わりませんよ、センゴク元帥」

私の返事を受けてセンゴク元帥が大きなため息を吐く

見聞色で感じる感情やセンゴク元帥の為人から半分本気で半分演技のため息だろう

「それでは、これで失礼します」

私はセンゴク元帥に軽く頭を下げて執務室を退室した



シラカワ君が退室し執務室に沈黙が拡がる

わかっていることだが、重々残念なことだ…

コンコン！

執務室のドアが叩かれる

私は背筋を直し、声をかける

「入りなさい」

「失礼しますと」

クザンが気の抜ける声を出し、頭を掻きながら執務室に入ってきた

「何の用だ、クザン」

「あちら、書類を催促したのはセンゴクさんでしょうが」

「催促せんでも提出せんか！」

まったく、ガーブとクザンは目を離せばすぐに書類を放り出すのだからな

「今日は随分とご機嫌斜めで：シユウの奴にふられましたか？」

「：わかつているのなら放っておけ」

クザンは察する事のできる男だが世話焼きであるのが時折面倒になる

「いい加減に諦めたらどうですか、センゴクさん」

「あれほどの人材をか？」

「サカズキが色々と吠えているのは知っていますように」

『徹底的な正義』を掲げるサカズキはシラカワ君の事をよく思っていない

「奴さん、アカリと赤髪の子であり冥王とも近いシユウがお気に召さないようですよ」

「シラカワ君は賞金稼ぎをしているが海賊のような明確な悪ではない。

生い立ちだけで裁く訳にはいかないだろう」

「それがわかっているのなら抑えてくださいよセンゴクさん。そのうち奴さんの部下が暴走するかもしれませんよ？」

海軍の中でも過激派なサカズキはその部下達も同じような考えを持っている

だが、サカズキも海兵の家族が海賊に襲われる前はあれほどではなかったのだ

「私ばかりに任せずに自分で動かんか！」

「どうも雉と犬は相容れないようでした」

「オハラ的一件か……」

サカズキが躊躇せずに一般人をも巻き込んでバスターコールで吹き飛ばした事が今現在もクザンとサカズキの間に溝を作っている

「そういうわけなんでよろしくお願いしますよ、センゴクさん」

「……はあく、仕方ない」

私は大きなため息と共にサカズキに釘を刺すことを了承する

書類を置いて退室したクザンを見送った後、私はもう一度大きなため息を吐くのだった



「ただいま、レイ養祖父さん、シャツキーさん」

賞金首の情報を得た私はライトがいなかったこともあり

早々にシャボンディ諸島に転移で戻ってきた

「おかえり、シラカワちゃん」

「おかえり、シユウ。君に客人がきているよ」

レイ養祖父さんの言葉を受けビールを飲んでいた人物がこちらを向いた

「あんたがシラカワ博士かよい」

「そうですか…貴方は？」

「俺は白ひげ一味の一番隊長のマルコっていうよい」

白ひげ一味の《不死鳥のマルコ》がなぜここに？

「これはご丁寧に、私はシラカワ・シユウです」

「単刀直入にいうよい博士。親父があんたに会いたがつてるんだよい」

「…白ひげがですか？」

「どういうことでしょうか？私は何かをやらかしてしまったのか？」

「そうだよい。親父の病があんたの造った特効薬で治ったんだよい。」

その礼を言いたくて親父は博士を呼んでるんだよい」

なるほど、そういうことですか

私は賞金稼ぎの活動の中で白ひげの関係者を討ってしまったかと思つたが違つたよ
うだ

そして、本来なら白ひげから礼を言いくるところなのだろうが

白ひげ程の大物が動くところか海軍まで動く大騒ぎになりかねない
その事もあり、こうして信頼する部下であるマルコを私のところに寄越したのだらう
さて、この誘いは断れないですね

白ひげ程の大物の顔を潰すわけにはいきません

それに、いざとなれば転移で逃げればいいだけですからね
改めて思います私が私の能力はとても便利なものですね

あの悪魔の実を与えてくれた老人には本当に感謝しかありません

「マルコさん、その誘い受けましょう」

「話が早くて助かるよい、シラカワ博士」

嬉しそうに満面の笑みを浮かべたマルコは残っていたビールを一気に飲み干した

「マルコ君といったね、その誘いには私も参加して構わないかな？」

「冥王もかい？ いいよい。親父は宴をやるからその気だったら冥王も

連れてきて構わないと言っていたよい」

ミホークでもレイ養祖父さん相手ではどこか緊張を見せていたのだが

このマルコという御仁はその様子を見せない：

流石は現役の海賊達の中で世界最強の海賊と言われる白ひげ一味の隊を率いるだけはあるということでしょう

「それじゃ、案内するから準備が出来たら声をかけてくれよい」

そう言ったマルコはシャッキーさんにもう一杯ビールを頼んでいた
どうやらビールを気に入ったようだ

市場に出回り始めたばかりですが彼もいとお得意様になるでしょう
こうして私は白ひげと会うことになった

レイ養祖父さんと同じく生きる伝説である人物と会える事に、私の心は高揚したのだった

第64話

私とレイ養祖父さんはマルコに案内されてグランドラインにある

白ひげの縄張りの無人島にやってきた

その無人島には白ひげ一味が集まっているのか多くの船が停まっていた

「これは壮観な絵ですね」

「嬉しい事を言ってくれるよい。親父自慢の家族達だよ」

船での旅路と同じく無人島でもマルコが先導して進んでいく

そして拠点となる場所にたどり着くと、そこには帽子を被った一人の若者が待っていた

「お疲れさん、マルコ」

「おお、エース。親父はいるかよい？」

「ああ、中で待つてるぜ」

エースと呼ばれた若者が親指で拠点の中を指し示す

「そうかよい。それじゃ博士と冥王、親父に報告してくるから少し待っていてくれよい」

そう言ったマルコは拠点の中に入っていった

そしてマルコを見送った若者は私の方を見て話しかけてきた

「あんたがシラカワ博士か？」

「ええ、私がシラカワ・シユウです…貴方は？」

「おっと、すまねえ。俺はポートガス・D・エースだ。よろしくな博士」

ニツと満面の笑みを浮かべてエースは挨拶をしてくる

だが私の横でレイ養祖父さんが微かに驚いているように感じる…どうしたのでしょうか？

「博士、ありがとう」

エースが突然大きく頭を下げながら礼を言ってきた

「博士の薬のおかげで親父の病気が治った。本当にありがとう」

エースは真摯に礼を言ってくる

彼にとって白ひげはそれだけ大切な存在なのでしょう

「気にする事はありませんよ、エースさん」

「博士、さん付けは勘弁してくれ。どうも堅苦しいのは苦手です…」

エースが頭を掻きながら苦笑いをしている

「では、私もシユウで構いませんよエース。見たところ歳も近そうですね」

「お、そうか。改めてよろしくなシユウ！」

その後、マルコを待つている間にエースとの会話が続いていく

その会話の中で彼が私と同年である事がわかった

他には彼が白ひげ一味に入るまでの経緯を話してくれた

1年程前に東の海で海賊として旗揚げした事

旗揚げ後に仲間と冒険していく中で悪魔の実を手に入れた事

その悪魔の実の能力を使い僅か半年足らずでグランドラインに到達した事

だが、順調だった旅路の途中で白ひげと遭遇した事

白ひげとの戦いは一方的にやられてしまい体を張って仲間を逃がそうとした事

そんな自分達を白ひげは一味丸ごと家族として迎え入れてくれた事と話が続いた

特に白ひげに家族として迎えられた事を嬉しそうに話してきたのが印象的だった

そこまで話が進み今度は私の事を話そうかとなった時、マルコが戻ってきた

「待たせたよ。それじゃ親父の所に案内するからついてきてくれよ。」

エースは宴の準備を手伝ってきたくれよ。」

「おう、わかったぜマルコ！それじゃシユウ！宴を楽しんでいってくれよな！」

そう言ったエースは走り去っていった

「エースが一味の者以外にあそこまで心を開くのは珍しいよ。」

「そうなのですか？」

私の印象では人懐っこい若者でしたが…

「仲間や友と認めた相手にはああした人懐っこい奴だけど、そうでない相手には刺々しい態度をとるんだよい」

私には最初から気軽に接してきましたが…白ひげの恩人だからでしょうか？

「エースはどこかで人恋しいと思ってる奴だからこれからもよろしく頼むよい、博士」

「同じ年の同性の友人は少ないので、こちらこそよろしく頼みますよ」

「ありがとうだよい博士。それじゃ、ついてきてくれよい」

マルコが先導して歩き始めた時、私はレイ養祖父さんに話しかけた

「エースの事が気になるのですか、レイ養祖父さん？」

「気づいていたのか」

「8年の付き合いですからね、何となくですが察することはできます」

私の言葉にレイ養祖父さんはどこか嬉しそうにしながらも苦笑いを見せる

「そうか、もう8年か」

レイ養祖父さんは感慨深そうに遠くを見つめる

一つ小さくため息を吐いたレイ養祖父さんは私の疑問に答え始めた

「シユウ…エースはロジャーの息子だ」

私はレイ養祖父さんの言葉に驚愕する

確か、エースは私と同一年の筈だ…

海賊王が処刑された時を考えればエースの年齢と合わない…どういうことでしょうか？

「計算が合わないかな？」

「はい」

どうやらレイ養祖父さんは私の考えをお見通しのようだ

「ロジャーは処刑の前にエースを宿した母親…ポートガス・D・ルージュをガープに預けた」

そうでなければエースは生まれていない…ですが、それでは計算が合いません

「ルージュは世界政府の捜索からエースを守る為に出産日を越えても

エースをその腹に宿し続けた…20ヶ月の間ね」

「その結果、ルージュはエースを産み落とした後に力尽き、亡くなってしまった」

「その後は風の噂程度しか知らないが、エースはロジャーをひどく嫌っていると聞いている

その事もあり、私はエースは海賊にならないだろうと考えていたんだが…」

レイ養祖父さんは眼鏡に手を当て位置を直す

「こうして会ってみればエースは海賊になり、しかもニューゲートの一味に入っていた」

レイ養祖父さんの話を聞いてみると、確かにそれならエースが海賊になるとは思わな
い

「なるほど、確かにそれは驚きますね」

「だが、今の道も彼が自分で選んだものだ……これ以上の詮索は無料だろう」

レイ養祖父さんと話ながらマルコについていく

案内された先の部屋には立派な白いひげを生やした偉丈夫が私達を待っていた

第65話

「おう、あんたがシラカワ博士か？」

目の前に立派な白ひげを生やした偉丈夫がいる

身の丈はガープさんやセンゴク元帥と同じくらいででしょうか？

だが、その身に刻まれている数多の傷がこの偉丈夫の戦歴を物語っている

「初めまして、私はシラカワ・シユウです」

「俺はエドワード・ニューゲートだ。白ひげの方が通りがいいだろうな、グララララ！」

少し特徴的な笑いかたで白ひげが笑う

「息子達から聞いた、お前えの薬で俺の病が治ったってな、礼を言うぞ博士」

流石に大人物である白ひげ

頭を下げるその姿も威厳に満ちています

「久しいな、ニューゲート」

「おう、まだ生きていたかレイリー」

「先が楽しみな若者と出会ったからな、そう簡単に死ねんよ」

「そうか！グララララ！」

かつては覇を競った間柄の2人だが、こうして見る限りではそうとは見えない
「新酒のビールをたっぷり用意してある。浴びるほど飲んでいけ」

「ほう？ビールは市場に出回ったばかりの筈だが…流石だなニューゲート」

「ビールを知っているか、相変わらず耳が早いなレイリー」

「ビールはシュウが発案者だ。知っていて当然だろう」

レイ養祖父さんの言葉で周囲の視線が私に注がれる

白ひげも私を興味深そうに見てくる

「特効薬に続いてビールもか…海にはこういった天才もいるもんだな、レイリー」

「ああ、自慢の養孫さ」

そして顔を見合わせたレイ養祖父さんと白ひげが笑いあう

「よおーし！息子達よ！宴だ！」

「「おお——！——」」

白ひげの号令で一味の者達が一斉に動き出す

そして、白ひげの完治を祝う大宴会が始まった



「ぶは——！腹に染みる！やはり酒はこうじゃねえとな！グララララ！」

白ひげがビールを大樽のまま豪快に煽っていく

彼の体軀を考えれば不思議ではないが、それでもこうして目の前で

見せられると圧倒されるものがある

「その言い方だと酒を飲んでなかったのか？ニューゲート」

「飲んでたぜ、レイリー。だが、病の痛みを誤魔化すだけの酒で旨いとは感じなかった」

白ひげが大樽を置いて私の方を向く

「こうしてまた酒を味わう事が出来るのもお前のおかげだ。改めて礼を言うぜ博士」

私は手にしている杯を干してから声をあげる

「ではその礼として一杯いただきましようか」

「グララララ！おう、飲め飲め！まだまだたつぷりあるからな！」

豪快に笑いながら白ひげの手で私の杯に酒が注がれていく

私は注がれた酒を一気に飲み干す

「ふう、これで礼は受けました。ここからは堅い事を言わずに楽しみましょう」

「グララララ！このふてぶてしきは誰に似たんだろうな、レイリー！」

「さて、父親のシャンクスではないのかな？」

白ひげの問いにレイ養祖父さんは惚けて答える

「息子達よ！じゃんじゃん酒を持ってこい！今日は倉に酒を残さねえぞ！グララララ！」

大人一人が簡単に入れる大きさの樽が所狭しと積まれている

あれを全部飲み干すとしてもいうように白ひげはどんどん飲み進めていく

酒だけでなく、豪快な海賊料理もどんどん並べられていく

心の底から楽しんでる白ひげ一味の雰囲気にあてられ

私とレイ養祖父さんも酒が進んでいく

そんな中で不意に白ひげが私に言葉を投げかけてきた

「博士、酒の席の戯れとして聞いちゃくれねえか？」

「何でしょうか、白ひげさん」

「さんなんざいらねえよ。恩人のお前えは気軽に白ひげと呼んでくれ」

「わかりました。それでは改めて、何でしょうか白ひげ？」

大樽を煽り一つ間をとってから白ひげが話しを続けた

「お前え、俺の息子にならねえか？」

レイ養祖父さんだけでなく白ひげの言葉を聞いた一味の者達も私を見てくる

今日はよく注目を浴びる日だなと思うと笑いが込み上げてくる

私も白ひげに習い杯を飲んで一つ間をとってから言葉を返す

「お断りします」

「そうか、グララララ！」

私の返事を白ひげが笑い飛ばす

この話はあくまで酒の席の戯れとして流すためだ
白ひげの一味の者達も酒を飲みながら笑っている

だが、唯一人だけ私に嘸みついてきた者がいた

「なんで断るんだシユウ！親父に恥をかかす気か！」

オレンジ色の帽子と顔にそばかすが目立つ青年：エースが私に嘸みついてきたのだ

「よせよいエース。お前、親父の恩人である博士に嘸みついて親父に恥をかかせるのか

よこ」

「離せ、マルコ！」

私に近づこうとしていたエースをマルコが掴んで止めている

エースを見ると顔を赤くして目も垂れぎみになっている

どうやらかなり酔っているようですね

「シユウ！なんで親父の誘いを断るんだ！答えろ！」

酔っている事もあるのだが、拠点の前で話した時のエースとは大分様子が異なる

何かエースの琴線に触れることがあったのでしょうか

「エース…どうやら貴方にとって白ひげと家族達はとても大切な方達のようなですね」

「当たり前だ！」

エースがはつきりと私の言葉に答えてくる

エースを抑えているマルコはまるで手のかかる弟を見るような目でエースを見ている

「ですが、私にも何よりも優先する人達がいるのですよ、エース」

「うっ…だけだよ…」

私の言葉でエースの体から力が抜けるのが見える

そして、エースはマルコに抑えられながらも目を伏せて何かを考え始めた

私はビールを飲みながらエースの言葉を待つ

これで素直に収まってくればいいのですが…

「決闘だ！」

…はい？

私は杯を口につけたままエースの方を向く

「決闘だシユウ！俺が勝ったらお前は親父の息子になれ！」

俺が負けたらならなくていい！」

揉め事を解決する手段として決闘を提案するのは悪くないのですが…

「どうだ！受けるかシユウ？」

「…私にその決闘を受けるメリットがありませんね」

エースが提案した条件では私は失うものがあるのにエースは何も失わない

そして、白ひげは笑って流しているなのでこの決闘を受けずとも何も問題がない

私に決闘を受けるだけのメリットはないのだ

「あゝ…そうだ！俺が負けたら養兄弟になってやる！俺が弟でいい！どうだ？」

ふむ、エースと縁が出来れば身内を大事にする白ひげ一味との繋がりにもなります

まだ一味に入ったばかりのエースに提示できる最大の条件なのでしょうが…

エースが改めて出した条件にも正直な所魅力を感じていない

私が最優先するものはココヤシ村の解放とアーロンへの報復を自身の手で成し遂げる事だ

エースには悪いですが…この決闘は断りましょう

ドンツ！

腰抜けだと罵られても構わないと思いつい定め口を開こうとした時

白ひげが飲み干した大樽を床に大きな音をたてて置き注目を集めた

「博士、2億ベリーでどうだ？」

白ひげの言葉を聞いてそちらを向くと、白ひげは新たな酒樽を掴み一口煽ってから話を続けた

「エースの首には1億8000万ベリーの賞金がかけられてる…そいつに色をつけて2億ベリーで決闘を受けてやっちゃくれねえか？」

なるほど、今の私は賞金稼ぎです。その事を踏まえれば賞金分の金を出すというのは悪くない提案ですね

それに、私の拒否を一度は笑い飛ばした白ひげがこうしてこの話に絡んでくる事は自分の手で顔に泥を塗るような行為

それを承知の上でエースに助け船を出している

…ここら辺が落としどころですね

受ける気はなかったが白ひげの顔を立てて決闘を受けるとしましょう

「私が勝てば2億ベリー…その条件でお受けしましょう」

「なっ?!?待てシュウ!親父は関係ねえ!これは俺とお前の…!」

エースの抗議の言葉は白ひげの一睨みで止まった

おそらくは霸王色の覇気で威嚇したのだろう

「マルコ、エースに酒でも飲ませて頭を冷やさせておけ」

「わかったよ、親父」

「待つてくれ親父！離せよマルコ！親父！親父——！！」

エースはマルコに首根っこを掴まれ、部屋の外に引き摺られていった

「すまねえな博士、喧嘩の売り方も知らねえバカ息子だよ」

「いえ、気にしていませんよ」

私は白ひげが注いでくる酒を杯で受ける

「それで、静かにしていたが博士が決闘を受けてもよかつたのか？レイリー」

「2億ベリーが手に入るのだから構わんさ」

不敵に笑うレイ養祖父さんに白ひげも笑つて応える

「グララララ！俺の息子は強えぞレイリー！」

「私の養孫だつて負けてないさ、ニューゲート」

若者の話を肴に老人達が酒を飲んでいく

そして、白ひげ一味の者達が決闘の勝敗に賭けを始めた事で宴はまた盛り上がりつつい

く
そんな楽しい宴も酒が尽きて終わりを迎える

翌日、夜が明けて拠点の外に出た私が見たものは

土下座をして私を待つていたエースの姿だった

第66話

「昨日はすまなかつた！シユウー！」

抛点の外に出た私を見つけたエースが土下座で謝罪をしてきている

「酒に酔っていたとはいえ、宴の席であんなことをしちまつたのは詫びても詫びきれねえ！」

あの後、マルコが酒で潰したと言ってきたのだが

どうやらエースの記憶はハッキリとしているらしい

「頭を上げてください、エース」

「すまねえ！」

「そんな状態ではまともに話しも出来そうにないので頭を上げてください」

エースが地面に手をつけたままで頭だけを上げた

エースの顔を見ると今にも泣きそうに見える…見聞色でエースの感情を感じとつてみるが

どうやら演技ではなさそうですね

「謝罪を受け入れます。なので立っていただけますか？エース」

「すまねえ、シユウ」

エースが地面から手を離れたところでその動きが止まる

「どうかしましたか？」

「いや…足が痺れていてな…」

苦笑いをしてくるエースに私も笑顔を返す

「あ…シユウ？」

私の笑顔を見たエースの顔が引き吊っている

私はゆっくりとエースに近寄っていく

「ちよ、ちよつと待てシユウ！話せばわかるー」

エースの言葉による制止を無視してそのまま近づいていく

この時の私の顔は愉悦に満ちていたでしょう

私はエースに近づきその痺れている足に指を伸ばしていく

私の指が足に触れた時、エースの叫び声が拠点に響き渡った



「くっそ、ひどい目にあつたぜ…」

エースの叫び声で、すわ敵襲か！と白ひげ一味が拠点の外に出てきたのだがそこにいたのは私と痺れた足をつつかれて悶えているエースだけだった

事態を理解した一同は大笑い

そして我先にと痺れているエースの足をつつきにきたのだった

「まったく、みんな大人気ねえぜ」

「先に大人気無く決闘を仕掛けたのは貴方でしょう？」

私の言葉にエースが項垂れる

「それで、決闘はどうしますか？エース」

「…受けてくれるのか？」

「そういう約束ですからね」

酒の席の戯れ言として無かった事にされると思っていたのかエースが驚いている

「なあシユウ、決闘を受けてくれるのなら条件を変えてもいいか？」

「…話だけでも聞きましょう」

昨日は白ひげの一言で決闘の条件が決まったがそれを覆す程の条件なのでしょう

？

「もう親父の息子になれとは言わねえよ」

エースが頭を掻きながら苦笑いをしている

そして一呼吸置いたエースは帽子を指で弾いて私に条件を告げた
「俺が勝ったらシユウは俺の義弟になる」

ニツと笑いそう告げてきたエースを見た私は笑いが込み上げてきた

「ククク…失礼しました。では、私の方も条件の変更を願いますか」
「ああ、何でも言ってくれ」

私はエースが出した条件に見合うだろうものを告げる

「私が決闘に勝つたのなら、エースは私の友となっていたくださいよう」
「おし！その条件飲んだぜ！」

その言葉と共にエースが拳を突きだしてくる

私は自身の拳をエースのものと合わせる

これで決闘の約定の成立ですな

「こういう話となりましたがよろしいですか？白ひげ」

「グララララ！当事者同士で話が纏まったのなら文句はねえよ！」

白ひげが認めた事でこの決闘は正式に私とエースのものとなった

「よっしゃ！それじゃ決闘を始めようぜ、シユウ！」

「ええ、ですが見届け人はどうしますか？」

「あゝ、親父でいいんじゃないか？」

勢い込んだものの私達の決闘はいきなり躓いてしまった

「ニューゲートは病み上がりだ。見届け人は私が引き受けよう」

悩んでいた私達にレイ養祖父さんが名乗りを上げてくれた

「ではお願いします、レイ養祖父さん」

見届け人が決まったことで私とエースは距離を取って見合う

「おつとシユウ、昨日の詫びつてことで一つ俺の情報を教えるぜ」

「…謝罪なら先程受けましたよ、エース」

「あれだけじゃ俺の気が済まねえんだ…」

エースは頭を搔いて私に願ってくる

どうにも憎めない相手ですね…

昨日の一件でも面倒だとは思ったが嫌いにはなれなかった

そして、決闘前に相手に情報を伝えるという非効率な事をするエースに

私は好感を抱いている

これがエースという人間の魅力なのでしょう

「…わかりました。ですが、これで貸し借り無しとしましょう」

「ありがとよ、シユウ」

一言礼を言ったエースが手を顔の横まであげる

そして、エースの手が火へと変化した

「俺が食った悪魔の実は自然系《メラメラの実》だ」

エースの火への変化は手から腕へ、そして体全体へと拡がっていく

「見ての通り俺の体は火そのもの…そして火を自在に操る」

帽子等の衣服まで火へと変化していたが次第にエースの形を構築していく

何事も無かったように元の姿に戻ったエースは斜に構える

そして、左手を腰に当てて右手の人差し指で帽子を弾き不敵に笑って宣言する

「油断していると、火傷するぜ」

キザな立ち振舞いだがエースがやると不思議と嫌味には見えない

「さて、そろそろいいかな？」

見届け人であるレイ養祖父さんが私とエースに確認をとる

双方が頷きいよいよ決闘が始まる

「それでは、始め！」

レイ養祖父さんの合図でエースが構えをとる

私は初めての自然系能力者との戦いに気を引き締める

「まずは挨拶代わりだ。火傷するなよ、シユウ！」

エースが右拳を引いて構える

「火拳！」

気合い一閃の声と共にエースが右拳を突き出す

そして、エースの突き出された拳から放たれた火の大波が私へと押し寄せてくるの
だった

第67話

「火拳！」

俺が放った火の大火がシユウがいた場所を飲み込んでいく

だが、目に見える光景と違って手応えは感じなかった

「流石に自然系能力といったところでしようか。予想以上の規模の火でしたね」

後ろから聞こえた声に反応して、俺は素早く振り向く

そこには煤一つない無傷のシユウの姿があった

「あれだけの規模ならば小型船はおろか、中型船をも一息で飲み込むでしょうね」

右手を顎にあててシユウは考察を披露していく

よく見れば、その左手には決闘前にはなかった木剣があった

「勘違いするなよシユウ、本気でやれば大型船だって飲み込めるぜ」

「なるほど、エースが海賊となつてから僅か1年で1億8000万ベリーもの

賞金をその首にかけられた事に納得がいきました」

特効薬を造った天才だつてのは知つてたが、本当に頭の回る奴だな

「ところで、その木剣はどこで調達したんだ？シユウ」

「ククク…さて、何処でしょうかね？」

不思議な所がある奴だけど嫌な奴じゃない

それに、教えないって事はこの決闘に本気で勝ちにきてるって事だ
そうこなくつちやな！

「それでは、今度はこちらから行かせていただきますよ」

「おう！」

俺が返事をするとしユウの姿が消えていきなり目の前に現れた

そして、既に木剣を振りかぶっていたしユウはそのまま俺を叩き斬ってきた

ボツ！

俺の体は上下左右の4つに分断される

距離をとったしユウは油断なく俺を見据えている

「なるほど、情報では知っていましたが本当に効果がないのですね」

分断された俺の体は一つになり元に戻る

「正に攻防一体…最強の系統と呼ばれるにふさわしいものですね」

「ああ、いい能力だろ？」

しユウが右手にある木剣を見て、その感触を確かめるかのようにして話している

「ええ、敵とすればやつかいな能力ですな」

そんな事をシユウは言うが、その表情は特に困った様子を見せていない
「諦めて俺の養弟になつてもいいんだぜ？」

「それも悪くない提案ですが、もう少し足掻くとうしましょうか」

またシユウの姿が消える

俺は直感に任せて横に拳を振るう

ガッ！

手応え有り！

だが、シユウは俺の拳を木剣で受けていた

「お見事です」

俺の拳はシユウの木剣に弾かれて無防備な状態になる

ボッ！

また体が分断される

俺は分断された体をシユウの近くに誘導して体を再構成してそのまま殴りかかる

殴りかかった右の腕を肘の辺りで断たれる

そして、そのまま首、腰と分断されていく

「おいおい、容赦ねえなシユウ」

体を捻りシユウの頭上から右脚の踵を落とす

右脚を膝の辺りで断たれる

拉致があかないと思つたのか、シユウが一度距離をとる

「シユウ、こいつを忘れてるんじゃないのか？」

俺は右の拳を引き、突き放つ

「火拳！」

火の大波がシユウのいる場所を飲み込んでいくが、また手応えはない
俺は直感に従つて右を向く、するとそこにはまた無傷のシユウがいた

「エース、私の動きが見えているのですか？」

「いや、見えてないぜ」

俺の答えにシユウが首を捻っている

「直感でわかるのさ、なんとなくだけだな」

俺の言葉にシユウが大きなため息を吐いた

「やれやれ、天才というのも面倒なものですね」

「お前が言うな！」

お前は特效薬だのビールだの造つた天才だろうが！

「ところでよ、その動きってどうやってるんだ？」

「決闘が終わったら教えますよ、エース」

ケチンボめ

「しかし、能力だけでなく随分と戦い慣れているようですね」

「ああ、ガキの時から鍛えてきたからな！」

フーシャ村で過ごした日々は俺の財産だ

「なるほど……ですが、その割りには防御がおろそかですね」

「効かねえんだから別にいいだろ？」

何故か親父やマルコの拳骨は痛えんだけどな

「……その認識は友として正した方がいいでしょうね」

「友？ 義弟の間違いだろうシユウ」

シユウとは気が合うのか、決闘の最中だつていうのにも話弾んじまう

「ククク、それでは行きますよ。エース」

「おう！ かかってこい、シユウ！」

シユウの姿が消える

だが、何度も見て慣れてきた

直感でどこに来るのかなんとなくわかる

シユウは動きだけじゃなくて剣もすげえ

俺の攻撃を当てるには相撃ち狙いで行くしかねえな

直感に従って拳を振るう

ガッ！

俺の拳はまたシユウに木剣で防がれたがこれは仕方ない事だ

拳がシユウの木剣で弾かれてまた無防備になる

本命はここだ！

俺は弾かれた拳を引き付ける勢いを利用して反対の拳でシユウを殴ろうとする

ゾクッ！

俺の全身に寒気が走る

何だ？

何がくる？

ここにいるな！

避ける！

動け！

動け！

俺は直感に突き動かされるように横に跳ぶ

ドガッ！

その直後、シユウの木剣が横に跳んだ俺を捉えていた

◆

木剣に武装色の覇気を載せてエースに打ち込んだのだがその手応えは浅いものだった

今ので決めるつもりだったのですけどね：

私はこれまでの攻防や会話でエースの対応を読んでいた

私の動きの速さ、剣の技量、そしてエースの立ち回りや防御の認識から

エースは相撃ちでのカウンターを狙ってくるだろうと予測した

だがエースは私が木剣を打ち込む瞬間、横に跳んでいた

天然物の天才の直感というのは本当にやっかいなものです

私の一撃で吹き飛んだエースが地面を転がる

すぐに追撃しようと構えるがエースは片手で脇腹をかばいながら

空いている手で拳を作り頭上へと振り上げる

：何をするつもりでしょうか？

「火拳！」

エースは拳を地面に叩きつけその場に火柱を巻き上げた

…なるほど、いい対応ですね

地面から20メートル程の火柱が出来ている

距離はそれなりにあるがここまで熱がくるほど凄いものだ

エースは直感がいいだけじゃなく咄嗟の機転の良さも持ち合わせている

私は少し思案する

この1年、ミホークとの手合わせのおかげか能力も強くなっている

その能力の一つである湾曲フィールド：つまりバリアならあの火柱の熱を

数秒の間遮断して追撃することも可能でしょう

…止めておきましょう、リスクが高い

それに、私はエースと決闘をしているのであつて殺し合いをしている訳ではありません

ん

大人しく火柱が収まるのを待つとしましょう

後でレイ養祖父さんから甘いと言教されそうですが…その時は仕方ないと割りきる

それから一分ほど経ったでしょうか、火柱は収束していきエースが姿を見せた

片手で脇腹を押さえ脂汗を流している

手応えは浅かったですですがそれなりにダメージを与えられたようだ

「…すげえなシユウ、どうやって俺を捉えたんだ？」

ダメージは何えるものの見聞色で感じるエースの氣勢は少しも衰えが見えない
「覇気と呼ばれるものですね」

「…覇気？」

エースが表情に疑問を浮かべている

…やはり知らなかったのですか

「ええ、この海で強者と呼ばれる方々なら大抵は身に付けている技術です」

「そうか、やっぱすげえなシユウは」

エースが賞賛してくれるが私などまだまだの領域です

「まだ続けますか？エース」

「さっきのシユウの言葉じゃねえが、俺も少し足掻かせてもらうぜー！」

そう叫んだエースは拳を握り締め私に跳びかかってきたのだった



手、腕、脚、腹と全身余すところなくシユウに打ち据えられていく
頭だけは死に物狂いで剣を受けないようにしている

目の前がクラクラして立てなくなったり気絶したりするからな

俺の攻撃は一発も当たってない

シユウのすげえ速い動きに直感で合わせて拳や蹴りをやるんだが全部剣で受けられたり弾かれたりしている

火拳を混ぜたりしてるんだがそれも当たらねえ

火の大波で見えねえんだけど、シユウは消えてるんじやねえかと感じてる

それまで直感でどこにいるのかはなんとなくわかつてるのに

火拳を避けられる時はたまにわからなくなることがある

そして、急に横や背後に現れたように直感が働くから混乱しそうになる

なんとなくだけど、シユウは能力者でそれが能力に関係あるんじやねえかな？

ここまで散々シユウにやられてわかったこともある

今の俺じやあシユウに勝てねえ

それでも、諦める訳にはいかねえ

一発だ

たつた一発でいい…シユウを殴らないといけねえ…

そうじやねえと俺は…シユウと対等のダチになれねえ！

膝が震える

目がチカチカする

それでも、俺は諦めずに拳を振るっていく

もうボロボロの状態の俺の拳にキレなんてものはない
ただ諦めずに振り回しているだけだ

そして、シユウ相手にそんな拳は当たるはずもなく…

バシッ！

鳩尾の辺りを強かに打たれたことで肺の中の空気が強制的に押し出される

俺の膝から力が抜けて目の焦点が合わなくなる

そして、俺の体はゆっくりと倒れていく

ギリッ！

歯を食い縛り左足を一歩前に出して無理矢理体を支える

もう体を起こすどころか、顔を上げる力も残ってない

それでも、直感シユウが近くにしていると教えてくれている
なら諦めるな！

手を出せ！

俺はただ拳を振り回す

ぺちっ

それはとても小さな音だった

子供だつてもつとマシな音を出せるだろう小さな音

だがひどく耳に残るその小さな音ともに拳に残る確かな手応え

俺の拳は間違いなくシユウに届いた

全てを出しきつた俺は自身の体を支えることが出来ずに倒れていく

ガシッ！

だが、誰かの手が俺の体を支えた

「お見事です、我が友よ」

シユウの言葉が耳に残る

その言葉が妙に嬉しくて、誇らしくて…

俺は満足感に包まれたまま目を閉じた

第68話

いい決闘だった

シユウの腕に抱かれているエースを見てそう思う

シユウは自然系能力者との戦いの経験を得た

そして、エースはこの決闘で一つ大きくなった

決闘前は覇気を扱うどころか、知識すらない未熟者だったが今後はかわることだろう
ニューゲートが私のところへ歩いて来ている

その歩みは老いによる衰えを感じさせない堂々たるものだ

「いい決闘だったな、レイリー」

「ああ…だが、エースに対して随分と過保護だったように見えるぞ、ニューゲート」

「なに？」

「覇気を扱うどころか知識すら教えていないんだ。過保護と言つて間違いではないだろう」

私の言葉にニューゲートが鼻を鳴らす

「エースは負い目を抱えていた」

「負い目？」

「ああ、自分のせいで母親が亡くなったとな…」

…なるほど

「そのせいでエースは自分を信じきれず、覇気を教えても意味がなかった」

「だが、防御の必要性ぐらい教えてもよかったのではないか？」

「俺はただ息子達を背負うだけよ…どう育つかは息子達次第だ」

やれやれ、相変わらずの男だ

「レイリー、てめえの方こそ養孫と呼ぶ男にどれだけの修羅場を潜らせてきたんだ？」

「さてな、100を超えてからは数えてないさ」

この3年、シユウが賞金稼ぎとして超えた修羅場は優に三桁に達している

六式も《荊》だけでなく《月歩》も身につけた

もつとも、シユウ自身の能力で飛べるので空中で踏み込むために

使う程度の意味合いしかないが…

「一体博士の何がそうさせる？博士は恩人だ、俺に出来ることなら…」

「シユウのやる事に手出しをするなら戦争だぞ…ニューゲート」

私は霸王色を込めてニューゲートを睨む

「…わかった、手出しはしねえ。だが、何かあればいつでも言えレイリー」

「ああ」

私との話を終えたニューゲートはシユウ達の方へ歩いていった



我が友ですか…

自然に口から出た言葉でした

実力差は明らかですがエースは諦めずに戦い続けた

勝機など欠片もないのに戦い続けたのだ…

私はエースの意思の強さに感動している

そして、私にも同じことが出来るだろうかと考えている

…ノジコやベルメールさん、そしてナミの為なら出来るでしょう

だが、私自身の意地を張っては出来ないと思う…

どこかで転移を使って逃げるはずです

私は腕の中で眠る友を誇りに思う

「息子が世話になったな、博士」

いつの間にか白ひげが側に来ていた

「どうやら思考に没頭し過ぎたらしい…」

これは後でレイ養祖父さんに説教されますね

「いえ、私の方こそ良い経験をさせていただきました」

「そうか…今の言葉はエースも喜ぶだろうよ」

白ひげが私の腕の中にいるエースを抱き上げる。まるで宝物のように…

「博士、帰る前に2億ベリイを受け取っていつてくれ」

「…私とエースの約定とは違いますね」

私の言葉に白ひげが首を振って答える

「息子を成長させてくれた礼だ」

私は白ひげの腕の中で満足そうに微笑み眠っているエースを見る

「博士との決闘でエースは一つ大きくなった。親として嬉しい限りだ」

白ひげがエースを見るその眼は世界最強の名を冠する男とは思えない優しいもの

だった

「…わかりました。遠慮なく受け取りましょう」

「それでいい、グラララララ！」

白ひげが豪快に笑う

そして、白ひげ一味の者達も家族の成長を喜ぶように笑うのだった



不意に目が覚める

体が怠い、あちこち痛え…

俺は何とか体を起こすと周りを確認する

「ここは…拠点の中か？」

体を起こしたのはいいものの、まだ強烈な眠気が残っている

「何がどうなって…!？」

思い出した！

「シユウは…決闘はどうなった!？」

ガチャ

俺が寝ている部屋に誰かが入ってきた

「エース、目が覚めたかよい」

「マルコか！決闘はどうなったんだ！」

マルコが俺を宥めるように手を前に出す

反対の手には飯があるようだ

「落ち着けよいいース、決闘はお前の負けだよい」

「…そうか」

マルコの言葉で体から力が抜ける

「…シユウはどうしてる?」

「3日前に帰ったよい」

「そうか…って3日前?!」

「そうだよい。エースは3日眠ってたんだよい」

まさかそんなに眠っていたとは思わなかったので言葉が出てこない

「それとエース、博士から伝言を預かってるよい」

俺は頷いてマルコに続きを促す

『機会があればまたやりましょう。我が友よ』だってよい」

我が友よ…

その言葉で拳にあの時の感触が甦る

だからこそ…置いて行かれる訳にはいかねえ!

「マルコ…シユウの言ってた覇気ってやつ…出来るか?」

「出来るよい」

俺はベッドの上で土下座をする

「頼む！教えてくれマルコ！」

「よせよいエース、水臭いよい」

俺はマルコの言葉で顔を上げる

「まずは怪我を治すことだよ。そうすれば親父が教えてくれるよ」

「親父が？」

マルコが一つ頷いてから話を続ける

「そうだよ。俺はエースが得意な霸王色の覇気を使えないから親父が教えてくれるよ
い」

「霸王色？」

俺の言葉にマルコが笑う

「その事も含めて親父に教えてもらおうといいよい。だから飯食って早く寝るよ」

そう言うとマルコは持っていた飯を俺に渡してくる

パンと肉だ

臭いで腹が鳴る

俺は早速かぶりついた

「それじゃ俺は行くよ。それを食ったら大人しく寝るんだよ」

俺はマルコの言葉に片手をあげて応える

「まったく…世話の焼ける弟だよい」

部屋を出ていく前にマルコが言った言葉を俺は聞こえない振りをして飯を食い続けた

第69話

「だあ——また負けたあ——！」

エースとの決闘から1年程が経って私は19歳になった

そして、今年でライトが海軍本部から異動するということが
こうして最後の手合わせにやってきたのだった

「まだまだ未熟じやのうライト」

「くっそ——そう思うならもつと鍛えてくれよガープ中将！」

今回の手合わせにはガープさんが立ち会っていた

何かと私を海軍に誘うセンゴク元帥の事を考えてくれたの配慮だ

「それで、ライトはどうじゃった？シユウ」

直接手合わせをした者の意見をライトに聞かせたいのだろう

「六式の《剃》を使えるようになり、武装色で身体の強化もしています

ライトの年齢を考えれば十分だと思いますよ」

もつとも、今のライトの武装色の覇気では自然系能力者を実体として

捉えることはできないでしょうが……

ガープさんは私の言葉に頷いているがライトはそうではないようだ

「でもよお、シユウは16の時にはもっと出来ていたじゃねえか」

ライトが少し拗ねたように話す

「ライト、お前とシユウでは経験が違うわい」

「経験？」

「シユウは賞金稼ぎとしてどれだけグランドラインで戦ってきたと思うとる」

そう、私とライトに差があるとすれば超えた修羅場の数だ

それがライトと手合わせをするようになったこの4年で出来た差でしょう

その差が一つ一つの動きの差となりこうして勝敗を分ける結果となっている

「だからこそ今回の異動となったのじゃ。お前がこれからも海兵として生き抜くために」

「わかってらあ、でもよお…一度ぐらい勝つてからがよかったぜ」

ガープさんやセンゴク元帥、そしてクザンさんからライトの努力の程は伝え聞いているが

私とてこれまで遊んでいた訳ではないのでそう簡単には負けられない

「そうだ、シユウなら転移でこれるだろ？たまには手合わせに来てくれよな！」

「何処かわからなければ転移しようがありませんよ、ライト」

今更だが私の転移には条件があるのだ

そして、その事はライトとガープさんには教えてある

友人と命の恩人である故に教えた

ちなみにセンゴク元帥には教えていない

そして、ライトとガープさんもセンゴク元帥に話していないようだ

「俺が異動する場所はローグタウンだな」

「ローグタウン…たしか、海賊王の縁の地ですね」

「そうじゃ、ロジャーに肖ろうとグランドラインにデビューしようとする

海賊のルーキー達の多くがローグタウンに集まる…

ライトに経験を積ませるには丁度良いというわけじゃ」

なるほど、ライトにとって悪くない話ですね

「それに、今の時期からローグタウンにいれば関われそうだしな…」

何やらライトがニヤケながらブツブツと呟いている

「そのクセは変わりませぬね、ライト」

「ほっとけ」

「やれやれですね…そうだ、ガープさん。食堂の厨房をお借り出来ますか？」

「構わんが何故じゃ？」

「ライトの船出を祝って料理を作ろうかと思ひまして」

私の言葉にガープさんがニツと笑顔になる

「儂も相伴するぞ」

「ええ、アカリママ直伝のビーフシチューですので楽しみにしてください」

ガープさんがいつものように豪快に笑う

「ビーフシチュー!?! シュウ、作れるのか!?!」

ライトの剣幕に私とガープさんは顔を見合わせる

「ライト、ビーフシチューを知っているのですか?」

「え? あ、ああ」

私はガープさんを見て問い質す

「何処かにビーフシチューを出している食事処があるのですか?」

「いや、儂も海で長い間生きておるがアカリが作ったもの以外見た覚えはないのう

じやから、儂はアカリのオリジナルだと思つとつたんじやが…」

其処まで話すと私達はライトを見る

「あ、いや、本部の食堂にシチューってのがあるじやねえか! それでビーフは肉だろ?

だから旨いんだろうなって思つて…」

ライトが慌てるように言葉を捲し立てていく

「確かに本部の食堂にアカリの料理を真似てシチューの名前がついた料理はあるが
ビーフシチューとは似ても似つかん代物じゃぞ」

ガープさん曰く、アカリママが海軍時代に同僚の誕生日に食堂の厨房を借りて
シチューを作ったのだが、そのレシピがわからずポトフのような感じになってい
るらしい

「アカリが出汁をしつかりとればと助言してからは寒い時期に人気のスープになったが
儂にしてみれば、少なくともシチューの名を借りただけの別物じゃな」

ガープさんの言葉にライトの視線は落ち着かずに泳いでいる

「…まあライトの不思議発言はいつもの事ですからね」

「そうじゃのう」

私達の言葉にライトは安心したように息を吐く

…隠すつもりがあるのならもう少し上手くやって欲しいものです

友人ながら少し心配になる

「それでは行きましようか。仕込みは済ませてあるので後は温めるだけです
「ぶわっはっはっは！腹一杯食うかのう！」

「おい、ガープ中将！これは俺への餞別だぞ！シウウ！俺には大盛りな！」

私の後ろでギャーギャー騒ぐ2人を連れて食堂に歩いていく

ビーフシチューを食べたライトは旨いと言いながら何度もお代わりをした
ガープ中将と競うように食べていくその姿に、かつてココヤシ村でナミの誕生日に
ビーフシチューを振る舞った時を思い出して心が暖かくなったのだった

第70話

ライトの壮行会を兼ねた食事を終えて3日、私は海上の人となっていた

私は来年20歳になるが、その時にはアロンへの報復の為にココヤシ村に帰る

その為、比較的ココヤシ村に近いローグタウンに同行することにした

ローグタウンからなら半日程飛ばばココヤシ村にたどり着ける事と

ライトと手合わせをするのに転移する為にも一度ローグタウンに行っておく必要があるからだ

そして、現在グループ中将率いる艦隊の船上にいる私だが

今はライトと実験のような事をしている

「それじゃ軽く能力を使うぜ。気を付けろよ、シユウ」

「ええ、大丈夫ですよ。ライト」

実験の内容はライトの能力である電気がどれだけ武装色の覇気に効果があるかだ

その為、今は腕一本を武装色で黒化した私とライトが握手をしている

パリッ

小さく空気が弾けるような音がしてライトの手から放電が始まる

「大丈夫かシユウ？」

「ええ、少しずつ強くしてみてください」

パチパチ！

ライトが電気の出力を上げたが腕を伝わって行かずに手首の辺りで散っている
バリバリ！

完全に可視出来るほどに電気の出力が上がったが、やはり手首辺りで散ってしまう
「う〜ん…やっぱり武装色にはほとんど効果が無いんだな」

ライトが眉を寄せながら言葉を溢す

これ程の規模の電気なら接触している手以外から感電してもおかしくないのだが
ライトは完璧に制御してみせている

友人の成長に驚くばかりだ

「武装色を弱めてみますか？そうすれば手首より先に至る可能性もありますよ」

「う〜ん…ダチにこれ以上危ない橋を渡らせたくねえから止めとくぜ」

そう言ったライトは能力を止めて手を離す

「実験に付き合ってくれてありがとよ、シユウ」

「いえ、私も興味がありましたから構いませんよ」

私の言葉にライトはガーブさんのようにニツと笑う

その後は腕を組んで考え始めた

「やっぱり覇気使い相手には黒化してない場所を狙うしかねえか」

「ですが、当たりさえすればダメージを与えられるライトの能力は優秀だと思いますよ」
ライトの能力は直接的な破壊力は乏しいが生物に対しては絶対的な力を有するものだ

武装色が使えなければ防御することすら許されない

これは戦いにおいては大きなアドバンテージとなる

「でもなあ…俺の能力の天敵がいるんだよなあ…」

ライトが呟くように言葉を溢す

天敵か…

海兵であるライトが言うならば相手は海賊ということだろう

「絶縁体を装備として使う海賊がいるのですか？」

「あ、いや、そういうわけじゃねえんだけど…」

ふむ、ライトの能力は電気である事から絶縁体を防具か武器の一部として

使う相手がいるのかと思いましたが…

ライトは何かを考え込んでいる

「…たぶん今なら勝てると思うんだが、そうすると先がわかんなくなっちゃうんだよ

なあ」

ライトがいつものように何かをブツブツと呟いている

「なあシユウ、戦いたくない相手と出会ったらどうする？」

唐突にライトが質問をしてきた

「戦いたくない相手とはどういった相手でしょうか？」

「あゝ…敵なのは間違いないんだけど、気が合うというか…」

ライトは言葉を探るように頭を掻いている

「例えばですが、ガーブさんとレイ養祖父さんのような感じでしょうか？」

「…そうだな、そんな感じだ」

なるほど、海兵であるが故に例え相手がいい奴でも海賊であるならば

戦わなくてはいけない時があります

そこに思い悩んでいるのですか

私の考えが参考になるかはわからないが答えるとしましょう

「その者が己の道を邪魔するのならば叩き潰しますね」

「道？」

「ええ、生き方と言い換えてもいいでしょうか」

「生き方…」

ライトが私の言葉を受けて考え込む

「相手を思いやる事ができるのは美德だと思いますが、まずは自分にとって大事なものは何かを考えるべきでしょう」

「自分にとって大事なもの…」

「妥協できるのか、曲げないのかはライト次第ですが、過去を振り返った時に

嘆かずに笑う事ができればこれに勝るものはないと思いますよ」

ライトが私の言葉に何度も頷いている

「後悔をしない選択というのは難しいですが、それでも己に恥じない

選択をしていきたいものですね」

失敗なんて誰にでもある事だ

だから後悔をしないなんて事は出来ないといっても過言ではないだろう

それならば私は、いつかアカリママが言っていた生きているという実感を持てる

人生を生きて行きたい…

「…うん、そうだな。そうするか」

心を決めたのかライトが顔を上げる

「決めただけ、シユウ」

「そうですか」

「ああ、あれこれ考えるのは性に合わねえからな。その時に思ったままに行動するぜ！」
いきあたりばったり宣言をするライトだがその表情は晴れやかだ

「ですが海兵である以上、時には命令に従わなくてはいけない事もありますよ」

「そのぐらいわかつてるぜ。だから俺はガープ中将みたいにワガママ言える程に

大きくなつてやるさー！」

拳を突き上げてライトが宣言する

真つ直ぐに生きているように見えるその姿が眩しく感じる

「そういうわけだ！特訓につきあつてもらおうぜシユウ！」

「おおいライト！休憩は終わりじゃ！甲板の掃除をせい！」

ガープ中将に横槍を入られた事でライトがこげそうになっている

「いいところで邪魔すんじゃねえよガープ中将！」

「うるさいわい！サボつとらんで甲板の掃除をせんか！」

「ガープ中将だっていつも書類を提出しないでサボつてるだろうが！」

「ぶわっはっはっは！」

2人の掛け合いに思わず笑ってしまう

そんな2人の掛け合いはガープ中将の副官であるボガードさんが来るまで続くの
だった

第71話

海上の人となつてからさらに4日が経ち無事にローグタウンに到着
カームベルトを突つ切つて進むことができる海軍船の面目躍如という早さだ
その後、ガープさんとライトに挨拶をした私は転移でシャボンデイ諸島に戻り
これまで通りに賞金稼ぎと修行の日々を送っていく
そして1年程時間が経ち、私は20歳になった



「いいぞシュウ！鷹の目をぶつ飛ばしちまえ！」

父さんがビールを片手に囃し立ててくる

いえ、父さんだけでなく赤髪海賊団の皆が囃し立ててきていますね

20歳になった私はいよいよアロンへの報復に動くのだが

その前に無人島でミホークとの最後の手合わせをすることになった

ガッ！

私の木剣の一撃をミホークが木刀で受け止める

ミホークとの手合わせをするようになって3年経つが私の剣の腕が上がったのか
戦いが上手くなったのかわからないがこうしてミホークを相手に戦いの形を作れて
いる

ガッ！

もう一太刀打つがまたミホークが木刀で受け止める

そこで私は一度距離を取るために後ろに下がる

だが、逃さんとばかりにミホークが踏み込み距離を詰めてくる

私は能力の一つである重力球：相手の重力を増やすものをミホークに飛ばす

ポッ！

武装色を纏わせた木刀で重力球が断ちきられ霧散する

一手分の間を得た私は転移で距離を取る

転移した場所はミホークの後ろだ

私が転移を終えた瞬間ミホークは振り向く

この3年で壁を超えたミホークの覇気の技量はさらに磨きがかかっている

父さんの副官であるベックマン曰く、壁を超えたミホークはその勢いのままに

父さんを猛追しているようだ

一息入れることが出来た私は思考していく

正直なところ私の実力ではミホーク相手に勝ち筋が見えない
だが、かつてのエースのように一撃は当てたいと思う

「わずか3年でよくもそこまで腕を上げたものだ赤髪の子よ」

ミホークは一度も私の名を呼ぶことはなく父さんの子と呼称してくる

…なんとかしてこの男に認めさせたいものですね

「かつての俺や赤髪が貴様の齢で果たしてそこまで出来たかどうか…」

紛れもない称賛だが私がいる場所は既に父さんやミホークが過ぎ去った場所だ

「一本この俺から取って見せろ。さすれば貴様の名を呼んでやる」

ええ、呼ばせてみせます！

剃を使い踏み込み、打ち込む

武装色を纏わせて打ち合う音は木製武器とは思えぬものだ

転移で横に、後ろに回り込む

だがミホークは即座に反応し私の剣を受けるところか逆に踏み込み打ち込んでくる

一合、二合と打ち合い戦いは進んでいく

そして私はまた転移で距離をとった

「3年前は暇潰し程度…そして冥王との立ち合いのついでだったが

今では貴様との手合わせを悪くないと感じている」
それは光栄です

ですがこつちは喋る余裕がないのですよ！

私は息を整えながら思考していく

一太刀見舞う為の布石は出来た

3年前は余りの実力差に死なないようにとしか考えられなかった

だが、2年前のエースとの決闘を経験して私の中の何かが変わった

それから2年…ミホークに一太刀見舞う為に全力を尽くしてきたが

実力が足りずその布石を打つことすら敵わなかった

私は一つ息を吐く

ここまでは辿り着きました…後は覚悟だけです！

木剣を握り直し構える

私の変化を感じ取ったのかミホークも木刀を両手で構える

…行くぞ！

覇王色の覇気による威嚇でフェイントをかける

即座に踏み込むがミホークはわずかに反応しただけだ。これでは一太刀には届かな

い

私は木剣から左手を離し重力球を放つ

ミホークは一振りで重力球をあっさり霧散させる

その隙に両手で木剣を持ち直し袈裟斬りの為の構えに移るが

ミホークは既に態勢を整えている

私は間合いに踏み込む寸前でワームホールを開き転移する

そして転移した先は：間合いの一步外側だった

「むっ！」

今まではミホークの後方や側面にだけ転移をしてきた

離れるにしてもそれなりの距離を転移でとってきた

だが今回の私の転移は一步後ろに下がっただけなのだ：踏み込みの勢いを残したまま
まで：

フエイントや牽制で勢いを落とさずに掛け値なしの全力の一撃を振る為の転移

だが、これまで積み上げた布石でこの転移はミホークの反応を僅かに遅らせる一手となる

ボツ！

袈裟掛けに振られる音が重なるようにして鳴る

そして私とミホークの剣は：互いの肩口寸前で止まっていた

私の全力を尽くした一太刀はミホークから引き分けを得たのだ

「…見事だ、シラカワ・シユウ」

ミホークが口端を引き上げ笑いながら私の名を呼ぶ

そして、その一言がこの手合わせを見守っていた父さん達から歓声を引き出した
ミホークが私の名を呼んだことで呆けてしまっていた私はその歓声で我に返る

ミホークは本来の得物である黒刀ではないというハンデを負っていた

得物の間合いの違いは使用者の感覚に大きな違いを与えるものだ

それでも…私の一太刀は確かにミホークに届いた

ミホークが私の名を呼び認めてくれた事は私に確かな自信を与えてくれた

私は少しの間、その余韻に浸るのだった…

第72話

「10年…よく頑張ったね、シユウ。後は事を成すだけだ」

ミホークとの手合わせの後、私を送り出す宴となった

ちなみにミホークは宴に参加せずに酒樽だけを持ってすぐに出航した

なんでも近々海軍の七武海定期招集があるらしく、それに参加するのが面倒なので
適当に海をフラフラするつもりらしい

そのついでに暇潰しで適当に海賊を狩るとの事だ

そうすれば七武海として活動しているので海軍も文句を言っていないようだ
暇潰しでミホークに狩られる海賊は運がないですね

そして宴を終えた翌日、今はレイ養祖父さんから激励を受けている

「はっ」

「手加減していたとはいえ、シユウは鷹の目との手合わせで引き分ける事が出来た…

自信を持ちなさい」

私はレイ養祖父さんの言葉に頷く

これまでは自信を持ってと言われても頷く事が出来なかった

だが、昨日のミホークとの手合わせで得た経験が私に確かな自信を持たせてくれている

「シユウは既に壁に到達している。後は自信を持ち、多くの経験を積んでいけばその先に至る事も出来るだろう」

正直なところ壁にまで至った実感は無い

だが、この10年の出来事は確実に私の血肉となつていく

「私からは以上だ。それと、いつでも遊びにくるといい」

優しく微笑むレイ養祖父さんの表情に少し鼻の奥がツンとする

「俺からはこれだ、シユウ」

父さんが一振りの剣を差し出す

「その剣は？」

「これは、アカリが俺の船を降りる時に置いていった剣だ」

「アカリママの剣……」

「無銘だがロジャー船長の世界一周の冒険にも耐え抜いた逸品だ。持つていけ」

「よろしいのですか？アカリママとの思い出の品の筈ですが」

父さんがニツと笑って私の頭をクシャクシャと撫でる

「息子の船出を祝うのにこれ以上の物はないからな」

「…ありがとうございます、父さん」

私の頭から手を離れた父さんは今度は私の肩に手を置く

「初めて会った時は俺の腹ぐらいまでしかなかったが…大きくなったな…」

この10年で私は180を超える長身になった

そんな私を父さんが感慨深そうに見てくる

「…行つてこい、シユウ！」

「はい、いつてきます父さん」

父さんから剣を受け取りワームホールを開く

そして、父さんとレイ養祖父さんと拳を合わせた私はこの10年で

世話になった人達に挨拶をしていく為にワノ国に転移をした



「はいシユウちゃん、これを受け取って」

ワノ国ではブンタお祖父さんとシオリお祖母さんに挨拶をした

そして、シオリお祖母さんから今では私のトレードマークとも言える白衣に似た

白いコートを贈ってもらった

私の為に誂えられたコートは丈がピッタリで身を引き締めてくれる

「遠慮せずにもいつでも遊びにきてね、シユウちゃん」

「シユウ、成せば成るのだ」

挨拶を終えた私は祖父母と軽く抱擁してからワームホールを開く

次の行き先は命の恩人であるガープさんの所だ



「シユウを海で助けてからもう10年か、早いものじゃのう」

「その節はお世話になりました」

「海兵として当然の事をしただけじゃ。気にせんでいいわい」

海軍本部に転移した私はガープさんの部屋で旅立ちの前の挨拶をしている

ガープさんの部屋にくる前にクザンさんとセンゴク元帥とも軽く挨拶をした

「シユウ、センゴクに確認をとってもらったがココヤシ村は今もまだ

アーロンに支配されとるらしい」

私はガープさんの言葉に頷く

「10年経つても開放出来なかった支部の事なんて気にせんでいい…

思いつきりアロンをぶっ飛ばしてくるんじゃ!」

「はー!」

その通りです、これまでの10年はその為に積み上げて来たのですから…

私は決意を新たにし拳を握り締める

「そうじゃ、東の海に行くついでに使いを頼んでもいいかのう?」

「使いですか?」

「ああ、手紙を二枚届けて欲しいんじゃ」

そう言ったガープさんは制服の胸ポケットから手紙を取り出す

「1つはローグタウンにおけるライト宛じゃ」

そう言って差し出された手紙を受け取る

「もう1つは儂の孫宛じゃ」

「お孫さんですか?」

「ああ、モンキー・D・ルフィという…これを孫が海に出る前に届けて欲しい」

私はルフィというガープさんの孫宛の手紙も受け取る

「構いませんが…お孫さんがいる場所と期日はいつまででしょうか?」

「ルフィはフーシャ村におる。期日は…明後日の朝までじゃな」

ガープさんの言葉に私は頭を抱える

「海軍の船でも無理な行程をさらつとさせようとししないでください」
「ぶわっはっはっは！じゃが、シユウの能力なら間に合うじゃろ？」

この後ローグタウンに転移をしてライトに手紙を渡した後に一眠りをし翌日に1日飛び続ければ十分に間に合うでしょう

だが、そうするとココヤシ村に向かうのが遅れることになる…

…ガープさんは命の恩人です

恩返しと考えれば受けるべきですが…

私は考える

ガープさんの孫よりナミ達の方が大事なのは当たり前だ

だが、これを断つて胸を張ることができるか？

私は1つため息を吐く

…急がば回れですか

「わかりました。手紙をお預かりします」

「助かるわい。頼んだぞ、シユウ」

その後、ガープさんに挨拶を終えた私はローグタウンに転移しライトに手紙を渡す
そして一眠りをした私はフーシャ村を目指して飛び立った



「おー、今日は絶好の船出日和だな！」

17歳になった俺は海賊王になるために、シャンクスとの約束を果たすために海に出る

今日はその船出の日だ

「それじゃ、行ってくるー！」

俺を見送りに来てくれたフーシャ村の皆が応援してくれるんだけど

村長だけは『海賊に…』とか文句を言ってる

そんな村長の隣にはマキノがいる

マキノには一杯飯を食わせてもらったからな

冒険して宝を見つけたらちゃんと宝払いするからな！

俺はシャンクスから預かった麦わら帽子を片手で抑えて船に飛び乗ろうとする

でも、なんか空が気になったから跳ぶのを止めた

空を見てみると何かフーシャ村に飛んできてた

「なんだあれ？鳥か？」

よく見てみるとその飛んできていた何かは人間だった

「すっげえ——！どうやって飛んでるんだ？あれか！不思議人間か?!」

船出前からすげえのが見れてワクワクが止まらねえ！

その飛んできていた奴はどんどんフーシャ村に近づいてきて、そして俺の近くに降りてきた

「船出の邪魔をして申し訳ありません」

「いいよ別に、それよりお前すげえな！どうやって飛んできたんだ！」

「ククク、秘密です」

予感がする……こいつはすげえ奴だ！

そして空を飛べる面白い奴だ！

……決めた！

俺はこいつを仲間にする！

「俺はモンキー・D・ルフィ！海賊王になる男だ！」

俺の名乗りに飛んできた男は目を大きくして驚いている
ししし、ワクワクが止まらねえ！

ここから俺の大冒険が始まるんだ！

本編・原作開始

第73話

「俺はモンキー・D・ルフィ！海賊王になる男だ！」

目の前の麦わら帽子を被った青年がどうやらガープさんの孫のようだ

だが、自らの名乗りで海賊王になると宣言した事に驚いてしまった

どれほどの自信家や楽道家でも海賊王ゴール・D・ロジャーの偉業を知るものなら

そう簡単に海賊王になるとは口にしない

それを考えればこれから海に出るルーキーの彼がそれを宣言するのは無理を通り越して

無茶な事だが、一点の曇りのない笑顔で言い切る彼の純粋さが羨ましく感じる

「私はシラカワ・シユウです。ルフィさん、貴方に手紙を預かってきました」

私はガープさんの手紙を彼に渡す

「手紙？誰からだ？それと俺の事はルフィでいいよ」

ルフィが手紙を受け取りながらそう言う

「げっ！じいちゃんからだ！」

舌を出して嫌そうな顔をしながらルフィが手紙の差出人の名を口にした

「ほくん…」

ルフィが左手の小指を鼻に突っ込みながら手紙を読んでいる

「…おつ？」

手紙を読み進めていたルフィが何を讀んだのかはわからないが満面の笑みになる
さて、役目は終わったからそろそろ行くか

「それではこれで失礼します」

ココヤシ村に行くには一度ローグタウンに転移した方が早いですね…

そう思いワームホールを開こうとした私にルフィが声をかけてくる

「ちよつと待った！」

制止の声をかけてくるルフィに振り向くと彼は満面の笑みを浮かべて私に告げてきた

「シユウ！お前、俺の仲間になれ！」

ルフィの物言いに周囲のフーシャ村の人達がざわめく

そんな中で私はルフィに一言で返事をした

「お断りします」

私の返事にフーシャ村の人達が嘆息していたがルフィだけは変わらずに笑顔のまま

だった



ココヤシ村のとあるミカン畑の一角にはお宝が埋められている

魚人海賊団に支配されてから10年

一人の少女がココヤシ村を奴等から買い戻す為に集め続けた財宝である

「あと一千万ベリーってところね」

少女が革袋に入れられている財宝を目利きしながら独語する

「今年にはシユウが帰ってくる…早く集めないと…」

革袋をこれまで集めていた財宝と同じ場所に埋めていく

その場所には少女がここ5年で集めた財宝が埋められている

その総額はおよそ九千万ベリー

最弱の海と呼ばれる東の海でこれだけの額を集めるのは並大抵の事ではない

だが、少女は愛する故郷を開放する為に今日まで頑張り続けてきた

「お帰り、ナミ」

そんな少女の元に刈り上げられた独特な髪型をした女性がやってきた

「ただいま、ベルメールさん」

「今回も結構な収穫だったみたいね。それでビールでも…」

「ダメよ。あと少しで集め終わるんだから」

ベルメールの願いをナミは取りつく島もなく断る

「いいじゃない別に。今年にはシユウも帰ってくるんだから前祝いってことで」

「…シユウがアールロンに勝てるとは限らないでしょ？」

元海軍軍人であったベルメールは新聞で得られる情報からシユウと呼ばれた

青年の力を大体察しているのだが、ナミは10年前の一件がトラウマとなっており

彼がアールロンと戦う事をよしとしていない

「…もう目の前で好きな人がいなくなるのを見たくないわ」

ナミの言葉にベルメールはため息を一つ吐く

ナミが言うことには自分も同感であるのだが、血の繋がらない息子の事を

もう少し信じてあげて欲しいとも思うからだ

もつとも、ナミがシユウに本気で惚れているからこそその言葉なのは理解している

だからこそ、ナミが無理をしないか心配になる

「それで、次は誰を狙うのかしら？」

「オレンジの町に『道化のバギー』がいるって聞いたわ。そいつは凄い派手好きな奴って

噂だから相応にお宝を貯めていると思うのよね」

ナミの言葉にベルメールがまた一つため息を吐く

「お宝を得る為なら狙いは悪くないわ。でもバギーは能力者よ」

ベルメールの言葉にナミが少し目を見開く

「どんな能力かわかる？ベルメールさん」

「確か超人系の《バラバラの実》の能力者ね」

「バラバラの実？」

「自分の身体をバラバラに出来る能力で剣士の天敵といえる能力ね」

ナミが顎に手を当てて考える

彼女の思い人と同じ仕草をする養娘にベルメールは笑いが溢れる

「ベルメールさん直伝の棒術じゃキツイかしら？」

「バギーは今では東の海で燻っているけれど、かつてはグランドラインで

生き抜いてきた海賊よ。無理はしないで逃げる事を優先しなさい」

「うん、そうするわ」

ナミがココヤシ村を買い戻すと決意してから8年

今日に至るまで海軍時代の経験を元にベルメールはナミを鍛え上げてきた

その事からナミは東の海を十分に生き抜けるだけの力をつけたと

ベルメールは認識しているが海では絶対は無いのだ
用心するにこしたことは無い

それを考えればナミを止めるべきなのだろうが、彼女は一度言い出せば止めたりはしない

ベルメールは一体誰に似たのやらと苦笑いをするが、ナミを強かな女性に育て上げたその張本人はベルメール自身である

「それじゃお風呂に入ってきちやいなさい。その間に何か食べる物を用意しておくから」

「うん、お願いねベルメールさん」

ナミは埋め終えたお宝の場所を軽く均してミカン畑の他の場所と

見分けがつかないようにしていく

「この8年で女として磨きあげた魅力でシユウをメロメロにしないとね♪」

ベルメールの言葉にナミは顔を赤くしながら髪を弄っている

「あらあく？その様子じゃ逆にメロメロにされちゃうかしら？」

「もう！お風呂に入ってくるから食べる物を用意しておいてよね！」

走り去っていったナミの初々しい反応にベルメールはご満悦である

その後、ベルメールは幾つかのミカンを収穫して家に戻っていった

第74話

「やだ！俺はシユウが断る事を断る！」

私はルフィの勧誘を断つたのだが逆に断られるというおかしな状況になっていたその様子を見ていたフーシャ村の人達はため息を吐いている

「だから、俺の仲間になれ！」

「私にはやるべき事があります。なので、なんと言われようと貴方の仲間になりませんよ」

そう言った私にルフィは満面の笑みのままガープさんの手紙を渡してきた
意図はわからなかったが渡された手紙を読む

手紙には海賊になんてならずにといった感じでルフィを海兵にしようとする

ガープさんの言葉が書かれている

手紙を読み進めていくと最後の方で今までと違う事が書かれていた

『どうしても海賊になって海に出るのならシユウを頼れ。ルフィの事じゃから

航海術は持つておらんじやろ？ルフィが海兵にならんのは残念じゃし諦めておらんが

航海早々に遭難されるよりはマシじゃからな。

『じいちゃんより愛を込めて』

手紙を読み終えた私は頭を抱える

そして確認の為にルフィに聞いたのだした

「ルフィ…貴方は航海術を持っていないのですか？」

「おう！持ってねえ！」

腕を組み胸を張って言い切るルフィにまた頭を抱える

「だから俺の仲間になれ！」

ガープさん…わかっていて私を手紙の使いにしましたね…

恩人のあの豪快な笑い方が今は憎たらしく感じる

さて…どうしましょうか？

私は顎に手を当てて考える

ルフィが航海術を持った者を仲間にするまで同行するのは構いません

ですが、その前にココヤシ村を開放したい

ルフィにその間待たせましょうか？

…何故かルフィは待たずに海に出ていくと確信してしまいますね

私是因为息を一つ吐き頭を抱える

まんまとガープさんの企みに乗せられた思いがある

ガープさんとて数十年の間、人を率いる立場にあつた人です
このぐらいはやつても不思議ではないですね…

私はチラツとルフィを見るとルフィがニツと歯を見せて笑う

その笑顔にはガープさんの面影がある

殴りたい、その笑顔

私はまた、ため息を吐いてしまう

ルフィを見捨ててココヤシ村に向かいましようか？

それで私は胸を張ってナミ達に会うことが出来るのか？

…仕方ないですね

これも私がガープさんの手紙を届けると決めたから起きた事です

その責任は取らなければなりません

私はまた少し思考する

ココヤシ村を救うことは譲れない。そしてルフィに同行する…

この2つを果たす条件を考える

思考を纏めた私はルフィに考えを告げた

「ルフィ、貴方の仲間にはなりませんが行はしても構いません」

私の言葉にルフィはしししと笑う

私は条件を受け入れなかった場合は即座に転移することを決めてルフィに話しを続けるのだった



「ルフィ、貴方の仲間にはなりませんが行はしても構いません」

「なんだ、シユウは仲間になってくれねえのか」

「でも一緒にくるならその間に仲間に誘えばいいや」

「ですが、同行するにあたって幾つか条件があります」

「条件？なんだ？」

「シユウが仲間になるなら何でもいいぞ」

「一つは船の進路を必ずココヤシ村に向ける事です」

「ココヤシ村？」

「私にはココヤシ村で成すべき事があります。その為にココヤシ村に向かう事を

譲る事は出来ません。これを認められないのならば立ち去らせていただきます」

「俺はシユウの言葉に頷く」

「別にいいぞ。俺はココヤシ村がどこにあるのかわからねえけどな」

「私が知っているのでそこは問題ありませんよ」

へえ、俺は海図を見ても方角とかぜんぜんわかんねえのにやっぱシユウはすげえな
「なんかココヤシ村でやる事があるって言ってたけど、俺も手伝うか…」

そこまで俺が喋るとシユウからの凄い圧力がきた

「例え貴方がガープさんの孫であろうと私の成すべき事に

手を出すのならば…叩き潰しますよ」

シユウの圧力で力が抜けて地面に膝をつきそうになる

俺は腹に力を入れて耐えた

「…わかった。悪かったな、シユウ」

「いえ、私も大人気ない対応でした」

そう言ったシユウからは圧力が消えた

…背中中の冷や汗が止まらねえ

だけど顔が笑つちまう

…思った通りシユウはすげえ奴だ！

「もう1つの条件ですが、道中で補給の為に他の村などに寄った時に

航海術を持った者を仲間にした場合、私は単身ココヤシ村に向かわせてもらいます」

そうすると、シユウを仲間にするには航海術を持った奴を仲間にする前に

シユウを仲間にしなくちやならねえって事か
「いざぞ」

「それではその条件で同行させていただきます」

シユウが差し出してきた手を握り返す

ししし、絶対に仲間にするからな！

「おーいマキノ！シユウの分も食料をくれ！宝払いな！」

「ふふふ、はいはい」

マキノが笑いながら港を離れていく

「食料代は自分で持ちますよ、ルファイ」

「いいから俺に任せろって、船長だからな！」

俺の言葉にシユウがため息を吐く

しばらく待つっているとマキノが村の男衆を使って食料を入れた樽を持ってきてくれた
た

「ルファイ、お待ちせ」

ししし！いよいよ冒険の始まりだ！

「出航だ——！」

俺の号令で船は動き出す

フーシヤ村の皆は船が見えなくなるまで手を振ってくれていた

第75話

フーシヤ村を出航し沖合いまで来たところで私は次の目的地を考える
ここからだとしエルズタウンが近いですね…

そこまで考えた時、海中から迫る気配を感じた

「…これは海王類でしょうか？」

「海王類？…そうか、出たか近海の主」

ルフィの言葉に釣られたかのように海王類が船の進路上に姿を表した

「どうしますか、ルフィ？」

「俺がやる」

そう言ったルフィは立ち上がり左の手の平に右拳を打ちつける

「ししし、10年の修行の成果をみせてやる！」

ルフィは左足を前にして半身になって構える

「ゴムゴムのお——！」

気合いの声と共に後方に振られた腕が文字通りに伸びていく

「ピストル！」

収縮した勢いのまま前方に伸びていった拳は海王類を捉えてその身を吹き飛ばした
「ししし！どうだ見たか！」

満面の笑みでルフィは私を見てくる

「お見事です、ルフィ」

「だろ？だから俺の仲間になれ！」

「なりませんよ」

ルフィは諦めずに何度も私を仲間を誘ってくる

面倒だとは思いますが嫌だとは思わない

その感覚はどこかエースを思わせる

「ちえり、まあいいか！シユウ、俺が舵を取るぞ！俺は船長だからな！」

そう言ったルフィがこちらにくるので場所を譲る

そして船はルフィの舵によりししばらく進んでいくのだった



「先程の海王類を撃退した時に見ましたが、ルフィは能力者だったのですね」

「ああ、俺はゴムゴムの実を食ったゴム人間だ」

舵から片手を離して空いた手でルフイは自分の顔を引っ張る
すると、言葉通りにゴムのように伸びた

「なるほど、全身ゴムとは中々面白い能力ですね」

「ししし、なら俺の仲間になれ！」

「話の脈絡がわかりませんがお断りします」

口を突き出してブーブー言ってくるルフイを放っておいて私はルフイの能力を思考
をする

ゴムの能力ですか…ルフイにも言いましたが中々面白い能力ですね

自身の身体1つで近距離、中距離の戦いをこなすことが出来る

もつとも、能力で伸ばせる距離をしっかりと把握して離れた相手に攻撃を

当てるための当て勘が必要です…

そこまで考えた時、不意に波の音が変化したのを聞き取り前方を見る

「…ルフイ、進路を変更してください」

「なんだ？何かあったのか？」

私はルフイの問いに答える

「前方に大渦を見つけました。このままでは飲み込まれますよ」

「本当か!？」

舵を放り出したルフィが大渦を見るために船の前に行く

そして、大渦を見つけたルフィの目はキラキラと輝いてみえた

…嫌な予感しかしない

「よし！大渦を見に行くぞ！」

「…この船で巻き込まれたら脱出する事は出来ませんよ？」

「ししし、大丈夫！なんとかなるさ！」

私はため息を吐く

…最悪、巻き込まれた時は私の能力で空を飛べばいい

そしてその時は転移でルフィを海軍本部に連れて行ってガープさんに突き出そう

船はルフィの舵で真っ直ぐに進んで行く

そして案の定、大渦に捕まってしまった

「ししし、おんもしれえー！」

「…はあ、ルフィ掴まってください。空を飛んで脱出しますよ」

ルフィは私の言葉を聞かずに樽の中の食料を捨て始めた

「ルフィ、何をしているのですか？」

「ん？このままじゃ渦に飲み込まれるだろ？だから樽に入ってやり過ぎそうと思って

な」

…ふむ、この状況での機転としては悪くありません
正直なところ運任せの要素が強いですが…

はあ…仕方ない、もう少しルフィに付き合いますか

「ルフィ、樽を貸してください」

私は樽を片手で掴んで逆さまにし、中の食料をワームホールに入れていく

「おお！なんだその穴！あれか？不思議穴か！」

「ククク、食料は私が預かっておきますよ。それで、この後はどうしますか？」

「ああ、ちよつと待ってください」

そう言ったルフィは2つの樽をロープで結んでいく

「大渦で流されてはぐれないようにしないと！」

ルフィは慣れた手付きでロープを結んでいく

「航海術は無いと言っていました、こういっただ事は出来るのですね」

「ああ、まだ小さい頃にじいちゃんに無人島に放り投げられてサバイバルしたからな」

…自分の孫に何をしているのですか、ガープさん

「よし出来た！それじゃ樽の中に入って渦をやり過ぎすぞ！」

そう言つてルフィは樽の中に入って蓋を閉めた

私はため息を1つ吐いてからもう1つの樽に入って蓋を閉める

その後、私達が乗っていた船は大渦に飲み込まれて海に沈んだ



現在、私が入った樽は大渦にシエイクされている真つ最中である

このままではまずいかと考えて私はルフィと俺の樽に湾曲フィールドを張る
ついでに空気穴も要るかと双方の樽に極小のワームホールを展開して外に繋ぐ
だが、このワームホールは海流で動く樽に合わせて動かさないといけないため
常に見聞色でルフィの気配を探り調整を続けていかなければならないので疲れる
まあ窒息させるわけにはいかなないので仕方ないでしょう

そこまでした後に私は1つため息を吐く

興味を引かれてしまいこうしてルフィに付き合ってしまったがこの後はどうするか

…

…1日だけ樽の中で我慢しましょう

その間に誰かの船に拾われるかどこかに流れつかなければ当初の予定通りに
ルフィをガープさんに突き出す事にしよう

「ククク…貴方に運があるか楽しみですね、ルフィ」



「ししし、おんもしれえー！やっぱ冒険はこうでなくちやな！」

俺は樽に残してあつた干し肉にかじりつく

うん、味が染み出してきてうめえ！

そうやって干し肉を食つていた時、なんか樽の雰囲気が変わつたことに気づいた
「なんだ？シユウが何かしたのか？」

何となくそう思つて口にしてみた

『おや、随分と勤が良いですね』

いきなりシユウの声が聞こえて吃驚したけど面白く感じた

「おお！なんだ！なんでシユウの声が聞こえるんだ！すつげえー！」
『ククク、樽に入る前に見せたワームホール：貴方が不思議穴と

呼んだものを応用したのですよ』

へえ、やっぱシユウはすげえ！

そしておもしれえ！

「ししし、そつか！ありがとなシユウ！」

『礼には及びませんよ。それでは流れついた先でまた会いましょう』

流れついた先かあ…大丈夫な気がするんだよなあ

干し肉にまたかじりつく

すると、シユウが不思議穴から俺の樽に食料を送ってくれた

ししし！

シユウ！絶対に仲間にするからな！



「コビー！サボらずにしっかり甲板の掃除をやんなー！」

「はいいい！アルビダ様！」

僕はため息を一つ吐く

「はあ…なんでこんな事になったのかなあ…」

僕は海軍将校になるのが夢だ

その夢を果たす為に海軍支部のあるシエルズタウンに向かっていた途中で

船が海賊である《金棒のアルビダ》に襲われてしまった

僕は生き残る為にアルビダの一味に見習いとして入り、こうして雑用をさせられてい

る

「はあ…海軍将校になりたかったのになんで海賊の見習いを…」

仕方なかった事だけど自分の現状にまたため息を吐いてしまう

そして、甲板の掃除をしていて船の端まで来た時、偶然海面に浮かぶ何かを見つけた
「あれ？何でこんなところにロープで繋がれた樽が2つ流されているんだ？」

どこかで船が難破したのかと思つたが2つの樽はこちらに向かつて流れてくる

「…お宝が入つてるといいなあ」

そうすればアルビダに貢献を認められて船を降りられるかもしれない

僕は僅かな望みを託して道具を使って樽を引き寄せる

「う——！重い！やつぱり僕一人じゃ無理かなあ！」

でも、他の船員の手を借りたら横取りされるかもしれないし…

そうやって考えながらも歯を食い縛つて引き上げようとしてしていると不意に樽が軽く
なつた

「あれ？急に軽くなつた？樽の中の海水でも抜けたのかな？」

もしそうなら樽の中身にはあまり期待出来ないなと思いつつも引き上げていく

そして、漸くロープで繋がれた樽2つを甲板に引き上げ終わった

「はあ…疲れた…」

僕は甲板にへたりこんで息を吐く

すると、樽の1つがガタガタと動き始めた

「うわっ！な、なんなんだ！」

ガタガタと動いていた樽の蓋が外れる

そして、樽の中から人が出てきた

「ぶは——！やっとなられた——！」

樽の中からは麦わら帽子を被った青年が出てきた

「僅か1日の漂流で船に拾われるとは……貴方も悪運が強いですね。ルフィ」

「ししし……」

僕が麦わら帽子の人に気をとられていた間に波打つ紫の髪の子が出てきていた

あれ？もう1つの樽の蓋は開いてないけど……紫の髪の子が閉めたのかな？

「お？お前が引き上げてくれたのか？ありがとな！」

麦わら帽子の人が僕にお礼を言ってきた

引き上げた樽の中から人が出てきた事に、僕はまだ混乱したままだった

第76話

「お？お前が引き上げてくれたのか？ありがとなー！」

ルフィの言葉に眼鏡をかけた青年が驚いたままこちらを見ている

まあ漂流していたであろう樽の中から人が出てくれば驚くのも仕方ないだろう
反応のない眼鏡の青年にルフィが首を傾げだした頃、眼鏡の青年が動き出した
「す、すいません！お二人ともこっちにきてくださいー！」

そう言った眼鏡の青年が俺達を船内へと案内していく

「はあ……こころなら大丈夫……」

「なあ、いきなりどうしたんだ？」

ルフィが眼鏡の青年に対して素直に疑問を口にする

眼鏡の青年が答える前に私がルフィの疑問に答えた

「私達は招かれざる客ですからね。それを彼が拾ったとなれば

彼に色々面倒な事が起きてしまうのでしよう」

「そうーそんなんですよー！」

我が意を得たりとばかりに眼鏡の青年が頷く

「ふうん、まあいいか」

「よくないですよ！何を言っているのですか！」

私達を隠そうとしているのに大声で話すとは…まだ驚きが冷めていないのかな？

「ししし、俺はモンキー・D・ルフィ！海賊王になる男だ！助けてくれてありがとな」
ルフィの名乗りに眼鏡の青年が口を開けて驚く

「か、海賊王って…本気で言ってるんですか!？」

「当たり前だろう？お前こそ何を言っているんだ？」

眼鏡の青年の問いかけにルフィが意味がわからないとばかりに答える

「海賊王の異名はあの《ゴールド・ロジャー》が誰も成し遂げた事のない

世界一周の大偉業を成し遂げたからこそ呼ばれたものなんですよ!？」

「ああ、だから俺も世界中を冒険して《一繋ぎの秘宝（ワンピース）》を見つけだすんだ
！」

2人の会話はまだ続いているが私は気になる言葉があったので思考に耽る

《ゴールド・ロジャー》

海賊王の正式名は《ゴール・D・ロジャー》なのだが現在ではゴールド・ロジャーと呼ばれる事が多くなっている

これは世界政府や海軍が海賊王が知る秘密や彼が成した偉業等が世界にもたらす

影響を考えて意図的にゴールド・ロジャーという誤った名称を流したからだ
元ロジャー海賊団の者達は船長の偉業が消えるわけではないからと

今のところは静観しているがロジャーの名を消すような事があれば戦争をする気らしい

閑話休題

思考に耽つて周りが見えなくなるのは私の悪い癖だ

ルフィ達の方に意識を戻そう

どうやら自信満々に言い切るルフィの説得に眼鏡の青年が諦めて
肩を落としているところのようだ

「ところで、お前の名前はなんて言うんだ？」

「あ！名乗るのが遅くてすいません！僕はコビーつていいます！」

「そっか、よろしくなコビー」

「はい、こちらこそよろしくお願ひしますルフィさん！」

どうやら2人は打ち解けたようだ

「あの…貴方の名前はなんていうのでしようか？」

少し遠慮がちにコビーが私の名を聞いてきた

「これは失礼しました。私はシラカワ・シユウです」

「はい！シラカワ…シユウ…？…ええ——！？」

私の名を聞いたコビーが驚いて声をあげる

その時ルフィは船室にあった食料を遠慮なく食べていた



「ちよいと！そこのお前！こつちにきな！」

甲板にアルビダの大声が響き渡る

「なんでしようかアルビダ様！」

「コビーはどこに行つたんだい？」

「さあ？甲板の掃除をしているのでは…？」

ドン！

アルビダが金棒を甲板に叩きつけて威嚇する

「いないから聞いてんじやないか！」

「はっ！」

「さつさと探してきな！」

アルビダ一味の一人がコビーを探しに走る

「コビーの奴……このあたしの言いつけを守らないなんて……ただじゃおかないよ！」
アルビダが再び金棒を甲板に叩きつける

その様子を見ていたアルビダ一味の者達はコビーの冥福を祈るのだった



「コビー、何を驚いてるんだ？」

「何をつて、あのシラカワ博士ですよ！ルフィさんこそなんで平然としてるんですか！」
ルフィが果物をかじりながら首を捻る

「ああ！勝手に食べないでください！」

「いいじゃねえか、早く食わないと果物は腐っちゃうだろう？」

「それはアルビダの物なんですよ！ルフィさん殺されちゃいます！」

コビーの言葉にルフィは笑って応える

「ししし！大丈夫さ、俺は強いからな！」

そう言い切るルフィにコビーは言葉が出てこないのか口をパクパクさせている
俺は強いか……

一見ただけだからはつきりとは言えないがそれほどではないと思う

少なくともエースどころかライトにも及ばないだろう

いや、ライトならば相性の問題で能力者としては優位だから勝負の形にはなるかもな
そう言えばライトが天敵がどうのと言っていたがルフィの事を知っていたのか？

ルフィが海賊王になるという夢を果たすならばいざずればローグタウンに行くだろう
そこでライトと対峙したら十中八九ライトの勝ちだ

そしてルフィの冒険はローグタウンで終わることになる

：何を考えているんだ私は：ルフィの仲間になつたわけではないのに：

ここ2日程一睡もしていないから少し思考が変になつてしまつたかもしれない
たつた2日の徹夜で情けないとは思ふが落ち着くために紅茶を飲もうか

あらかじめ淹れておいた紅茶をワームホールから取りだし一口飲む

そんな私の耳には何かを諦めるようなコビーのため息が聞こえた

第77話

「いいですかルフィさん、シラカワ博士は凄い方なんですよ！」

気を取り直したコビーがルフィに説明していく

「8年前には世界三大死病と呼ばれていた病の特効薬を造りだし、その製法も

開示しちゃったんです！秘密にしておけば莫大な富を手にした筈なのにですよ！」

やや興奮して捲し立てるようにコビーは話していく

「そして5年前からはグランドラインで賞金稼ぎとして活動を始めて

数多の賞金首を討ち取ったんです！グランドラインにデビューしたばかりの

ルーキーだけでなく億超えの大物達だって何人も討ち取っているんです！」

「センゴク元帥が根回しをしたからなのか賞金稼ぎの時は結構な頻度で新聞に載って

いた

おそらくは海兵に相応しい人物として内外に伝えていたのだろうが

私に海軍に入る意思が無いのだから意味がない

「そして！それらの功績で海軍からは敬意を込めて《天才》海賊からは畏怖の念で

《魔人》と異名をつけられ、呼ばれているほどの凄い人なんです！」

正直なところ異名の事はまったく知りませんでした

時折、レイ養祖父さんや父さんが私を見てニヤニヤしていたのだがそういうことですか

「新聞にだつて数えきれないぐらい載っているのにルフィさんはなんで知らないんですか！」

「俺、新聞読まねえし」

ルフィが左手の小指を鼻に突つ込みながら言うときコビーが項垂れる

「まあコビーのおかげでシユウが改めてすげえ奴だつてわかつたよ。ありがとな」
「いえ…どういたしまして…」

軽くいよいよ放つルフィにコビーが疲れきつた声で応える

「ししし、シユウ！そういうわけで仲間になれ！」

「どういうわけかわかりませんがお断りします」

ルフィが口を突き出しながらブーブー言ってくる

だがその時、見聞色でこの部屋に近づいてくる気配を感じた

そしてその気配の主はドカドカと大きな足音をたてながら部屋の前で止まる

バンツ！

勢いよく部屋の扉を開けた気配の主は怒りの表情を浮かべながら声を張り上げた

「ここにいやがったかコビー！てめえ甲板の掃除をサボって！…なんだお前ら？」
私とルフィに気づいた男がこちらを見て問いかけてくる

「ううん」

私は笑っているルフィを見ると、ルフィの目は面白いものを見つけたようにキラキラと輝いているように見えた

…またですか

大渦を見つけた時のような反応を見せるルフィに私は頭を抱えるのだった



「コビー！一体どこで油を売って！…なんだいお前ら？」

あの後、船室にやってきた男に促され甲板にやってきた

ちなみにその男は私達の後ろでサーベルをちらつかせている

ハッキリ言って構えも雰囲気も素人同然なのでまったく怖くないのだが

コビーは震えてしまっている

コビーはルフィとの会話で海軍将校になるのが夢と語っていたのだが…

こんなことで大丈夫なのでしょうか？

それはそれとして後ろの男が持つているサーベルが気になって仕方ない
何故ならばそのサーベルに錆びが浮いているからだ

剣士の端くれとして後ろの男に手入れをしろと説教してやりたいですね

「誰だ？この敵ついオバサン」

私が後ろの男のサーベルに気をとられていた時、ルフィが前方にいる

巨体の女性に暴言を吐いていた

私を除いた甲板にいる全員が口を開けて驚いている中で私は件の女性を見る

確かにルフィの言葉に間違いはないですが直接的に言い過ぎ…でもありませんね
少々品性に欠けるが相手が敵対するのなら言葉を選ぶ必要もなしと

ルフィは考えているのかもしれない

いえ、ルフィの事ですからそこまで考えてないでしょう…

巨体の女性がコメカミに青筋をたてながら話し出す

「コビー…あたしが誰か言ってみな？世界で一番美しいのが誰か言ってみな！」

ルフィが敵ついと評した顔を思いつきり歪めながら女性が話している

「なあシユウ、あのオバサン何を言ってるんだ？」

ルフィが首を傾げながら私に聞いてくる

…ルフィに習って私も素直に答えるのでしょうか

「さて…私達とは美醜の感覚が違うのかもしれないね」

「ふくん、海には色んな奴がいるんだなあ」

私達の会話に件の女性が歯を剥き出して金棒を甲板に叩きつけた

「お前ら！この《金棒のアルビダ》様に向かつてなんて言い草だい！」

私とルフィはお互いに顔を見合わせた

「俺達何か悪い事を言ったか？」

「悪いかどうかはわかりませんが、間違った事を言った覚えはありませんね」

「だよな」

ルフィの仲間になったわけではないがこういつた場面で妙に息があつてしまう

その感覚に我が友であるエースの事を思い出した

「コビー！お前が誰の下にいるのか言ってみな！」

甲板にいる者達の視線がコビーに集まる

「ぼ、僕は…」

項垂れながら消え入りそうな小さな声でコビーが話し出す

「もつと大きな声で！海軍将校になるとかいうふざけた夢を持ったお前が

世界で一番美しいのは誰か言ってみな！」

アルビダの言葉にコビーは拳を握り締める

そして、齒を食い縛りながら顔を上げたコビーは甲板に響く大きな声をあげた
「アルビダは敵ついオバサンだ——！」

夢をバカにされたコビーが男をみせる

そして、響き渡ったコビーの言葉にアルビダ一味の者達が口を開けたまま固まった
「コビー——！」

憤怒の表情を浮かべてアルビダがコビーに向かって叫ぶ

だがコビーは膝を震えさせ小さな悲鳴をあげながらもアルビダから目を離さない

「ししし、よく言った！コビー——！」

ルフィがコビーを庇うように前に出る

「どきな！麦わらの小僧——！」

アルビダが手にしていた金棒を振りかぶり勢いよく振りおろす

ゴンツッ！

金棒がたてた音が周囲に響き渡る

その金棒の下には頭が体にめり込んでいるルフィの姿があった

「ひっ！ルフィさん!?!」

コビーが泣きながらルフィの名を呼ぶ

しかし私の見聞色ではルフィの気配に些かの衰えも感じない

「効かないねえ、ゴムだから」

金棒の下から聞こえるその声に甲板にいる者達が驚く
アルビダが二度金棒を振りかぶりルフィに叩きつける

だが、今度の一撃は横に一步動いたルフィに簡単に回避される

「ゴムゴムのお——！」

今度はこちらの番とばかりにルフィが右腕を伸ばす

その右腕はアルビダの船の幅を軽く超えて遠くまで伸びていく

そして、伸びきった右腕は勢いよく収縮していき……

「ピストル！」

その勢いのまま前方に突き出されたルフィの拳がアルビダの身体を捉えて
アルビダを船の外に吹き飛ばした

「「アルビダ様——！？」」

甲板にアルビダ一味の者達の叫び声が響き渡る

ルフィの一撃は力によって支配されていたアルビダ一味の者達の

戦意まで打ち砕いたのだった

第78話

ルフィがアルビダを殴り飛ばした後、アルビダの船にあった財宝の一部と

小舟を頂戴して、ルフィ、私、コビーの3人でシエルズタウンに向かっていた

「この方向に向かって船を進めていけばシエルズタウンにたどり着く筈です

私は仮眠しますので舵取りの方は頼みましたよ、コビー」

「はい、シラカワ博士はゆっくり休んでください」

海賊船で見習いをさせられていたコビーだが最低限の航海術を修めていたので

こうして操船を任せることが出来たのは助かった

フーシャ村の沖合いの時のように海王類が襲ってくる可能性もあるので

見聞色を使いながら横になる

万が一海に投げ出されても大丈夫なように湾曲フィールドを張っておくのも忘れな

い

「しかし驚きましたよルフィさん。アルビダに殴られた時は死んじやったかと思いまし

た」

「ししし、大丈夫さ。俺はゴムだからな」

「でも、次の一撃は避けてましたよね？避けられるなら初めからそうしてくださいよ
口から心臓が飛び出るかと思っただんですから」

「効かないんだから別にいいだろ？」

…やれやれ、ルフィもエースのような考えを持っているのですか

私は体を起こしてルフィに近づく

そして、ルフィの額を指で軽く弾いた

弾く瞬間、指に武装色を纏わせて…

「いてえーっ!? いてえー!」

「ゴムだから打撃は効かない…その認識は誤りですよ、ルフィ」

額を抑えて痛がっているルフィをそのままに私は元の位置に戻って横になる

「海は広いですからね…今のようにルフィに打撃で攻撃を効かせる事が出来る者はいま
す」

これから先は油断せずに戦ってください」

横になりながら大渦に飲み込まれてからここに至るまでの過程を思い出す

大渦に飲み込まれたものの結果としては最上となった

アルビダの船に拾われた事で新しい小舟と幾ばくかの金を手に入れた

更にフーシャ村からシエルズタウンまでの航海日数まで短縮している

：ルフィのあまりの運の良さに頭を抱えたくなる

そして、危ういと感じてしまう

私はゴムの能力の利点を甘く見積もっていたようだ

ルフィは腕が伸びるだけの能力者ではない

骨も、筋肉も、内臓、神経に至るまで全てがゴムなのだ

改めて想定した通りならルフィは常人より遙かに無理が出来てしまう

例えば斬撃や刺突で負傷しても、皮膚や筋肉、血管などの収縮で

自然に傷を塞ぐ事が出来るかもしれない

私のように武装色で筋肉をしめて止血をするのではなく無意識でだ

そして傷が塞がった事で治ったと思い、無理を重ねてまた負傷をする

そうやって無理を重ねて冒険を成功させていつても何時かはその

無理が通らなくなる時がくる…

私は1つため息を吐く

ルフィの仲間になったわけではないのになんでこんなに心配しているんだか…

寝不足のせいでしょう…早く仮眠をとるとしますか

小舟が波で揺れている

私はその揺れに身を任せるように眠りにつくのだった



「お〜いてえ」

シユウのデコピンで痛むデコを擦ってる

じいちゃんのゲンコツも痛かったけどなんでシユウのもいてえんだ？

シユウは他にも出来るのがいるとかいってたな…

ししし、やっぱ海は面白え！

「は〜…シラカワ博士は凄いですね。さすが《天才》と言われるだけがありますよ」

さっきのを見てコビーもシユウをすげえって思ったみたいだ

でも…

「天才？ 《魔人》だろう？」

「その異名もありますが《天才》の方がいいじゃないですか」

コビーは何を言ってるんだ？

「《魔人》の方がカッコいいだろお」

「何を言ってるんですか！天才の方がいいですよ！」

「魔人！」

「天才です！」

こんな感じでシユウの異名はどっちがいいかってコビーと言いつつたら時間はあつという間に過ぎていつて俺達はシエルズタウンに到着した



目を覚ましたころ、ちょうどシエルズタウンに到着した

そして一眠りしたおかげでかなり頭がスッキリした

グランドラインで賞金稼ぎをしていた時はもつときつい状況もあつたが

やはり思考が鈍るのは出来るだけ避けていきたい

シエルズタウンを歩きながら私は思考していく

私が優先するべき事はなにか、大切なものはなにかを考えていく

…うん、整理ができた

考えがまとめ終わった頃、シエルズタウンにある海軍支部基地前を通りかかる

そして基地に目を向けると、海軍支部基地内の広場には一人の男が磔にされていた

「ああ！あの男は！」

磔の男を見てコビーが声をあげる

「コビー、知ってんのか？」

「あの男は《海賊狩りのゾロ》です！賞金稼ぎとして東の海では有名な男ですよ！」
ルフィとコビーの会話を耳にしながら思考する

有名と言われても俺は知らない

こうして考えるとココヤシ村の状況以外の東の海の事情を何も知らないな…

ココヤシ村の解放を終えたらゆつくりと東の海を巡ってみるのもいいかもしれない
出来ればナミと一緒に…

そんな事を考えていたらルフィが張り巡らされたフェンスを越えて

ゾロという男と何やら話をしていた

「ルフィさん何をしているんですか…」

ゾロの雰囲気にあてられたコビーが会話をしているルフィを心配している

…どれほどの期間礫にされていたのかはわからないが、彼から感じる圧力は

それほどでもないので問題ないだろう

もし戦うことになっても弱っているゾロが相手なら間違いなくルフィが勝つので心

配はない

そんな感じで会話をしているルフィ達をコビーと一緒に見ていたら

1人の女の子がおにぎりを持ってフェンスを潜りゾロに近づいていった

「ああ！危ないよ君！」

コビーが女の子を心配するが見聞色で感じとれるゾロの感情は悪いものではない女の子がゾロにおにぎりを食べさせようとしていた所

キノコのような髪型をした男が海兵を伴い広場に現れた

そのキノコ君は女の子のおにぎりを一口食べると地面に落として踏み潰した

「なんて酷い事を…」

コビーがフェンスを強く掴みながら声を出す

ルフィも剣呑な雰囲気を出しているがキノコ君は取り巻きの海兵に女の子を

フェンスの外に摘まみ出させると笑いながら去っていった

「…事情はわかりませんが、あのキノコ頭は品性に欠けるようですね」

海軍支部基地内の広場に磔にしているということは何らかの見せしめだと思うが

小さな女の子の善意を無下にするのは個人的にいただけない行動だ

キノコ君が去った後、ゾロがルフィに何かを言って踏み潰されたおにぎりを拾わせ食

べた

遠目で見ても砂と一緒に食した事で吐き気を催しているのが見えるがそれでも吐か

ない

それを見たルフィが満面の笑みでこちらに戻ってきた

「ししし、決めた！俺はゾロを仲間にするぞ！」

第79話

「へ〜…海賊狩りのゾロは見た目と違って優しい人なんですな」

コビーが水を飲みながらそう言葉を口にす

その後、ルフィとコビー、それとおにぎりを持っていった女の子と一緒に酒場に行き食事をしている

その食事の最中に女の子や酒場の店主からゾロが磔になった経緯を聞いていたのだ
あのキノコ頭はこのシエルズタウンにある海軍支部基地司令のモーガン大佐の息子
で

その立場を利用してやりたい放題していたようだ

そして、あのキノコ頭は躰のなっていない犬を連れて歩いていたところ

その犬が女の子に襲いかかろうとしていたのをゾロが斬って助けたそうだ

自分の犬を斬られたキノコ頭は怒って何か条件をつけてゾロを磔にした

女の子を助けてくれたゾロをシエルズタウンの住人は助けたいと思っっているのだが
武功を立てて成り上がったモーガン大佐が権力と暴力でシエルズタウンを
支配している事もあり手出しが出来ない

こんなところが女の子や酒場の店主から聞いた大まかな事の経緯だ
「ししし、そうだろ？だから俺の仲間にするんだ！」

ルファイがモリモリと食事をしながら話す

女の子はデザートを食べて笑顔になっている

ちなみに食事代は私の奢りです

「よし！飯も食ったしそろそろ行くか！」

私が食後の紅茶を楽しんでいた時、ルファイが席を立つ

「どこに行くんですか、ルファイさん？」

コビーの疑問にルファイが笑顔で答える

「ゾロの所に行ってくる！」

ルファイの言葉にコビーが慌てる

海軍に喧嘩を売るのはと言っているがルファイは海賊だ

「シラカワ博士、いいんですか？」

私はティーカップを置いてからルファイに話しかける

「ルファイ、手助けは必要ですか？」

「ししし！いらねえ！」

そう言っつてルファイは酒場を出ていった

「本当にいいんですかシラカワ博士！ルフィさん、いつちやいましたよ!?」

私は紅茶を一口飲んでからコビーの言葉に答える

「コビー、貴方は勘違いしているようですが私はルフィの仲間ではありませんよ」

「ですが…」

私はまた一口紅茶を飲んでから話し出す

「ルフィ自身が決めた事です。それに、ここで潰されるようならこの先、ルフィが海賊王に

なるという夢を果たすことも出来ないでしょう…今回の一件はルフィを試す試金石として

ちやうどいいと思います。コビー、貴方がルフィの友ならば邪魔をせずに見届けなさい」

私の言葉を聞いたコビーはグツと拳を握り締める

そして、一息で水を飲み干してから酒場を駆け出していった

「思いだけではこの広い海の荒波に飲み込まれてしまいます」

これからルフィが海賊として生きていくのなら賞金稼ぎだけでなく

海軍や同業の海賊とも戦う機会はいくらでもあるでしょう

その時に必要なのは思いや夢、野望ではありません…生き残る為の力です

私はライトと手合わせをした時にした話を思い出す

海軍支部ではその階級が持つ権力は本部に比べて2つ下の階級に相当するらしい
そして、強さに関してもおよそ同じぐらいの事だ

もつとも、これはあくまで目安なので実際にそうとは限らない

戦闘以外で功績をたてて出世した海兵もいるからだ

「ルフィ…貴方にこの海を生き残るだけの力があるのか…」

海賊王に至る器があるのか…楽しみですね」

私は紅茶を飲み干し席を立つ

そして、酒場の店主に支払いを済ませて海軍基地内の広場に向かうのだった



海軍支部基地内の広場に到着すると既に戦いは始まっていたようで

ゾロが両手と口にそれぞれ刀を持った態勢で海兵達の剣を受けていた場面だった

「…二刀流はわかりますが刀を口に銜えるとは…呆れるような咬合力ですね」

その態勢のままゾロは何かをルフィと話している

ルフィが満面の笑みになっているのを見るとどうやらゾロを仲間に出来たようだ

そして、ゾロが受け止めていた海兵達の剣を力任せに跳ね返した事で戦いは再開される

ルフィが能力を活かして海兵を薙ぎ倒していけばゾロも三刀を使い海兵を斬つていく

もつとも、殺さぬように加減はしているようだ

そうして戦っている内にモーガン大佐が広場に出てきた

モーガン大佐は自分の息子のキノコ頭を殴り飛ばし、部下達に自決しろと言つた手を出そうかと思つたがルフィがモーガン大佐に仕掛けていつた事で

海兵達の自決は止まつた

ルフィとモーガン大佐の戦いが始まつたがルフィが優勢に戦いを進めている

モーガン大佐は武功を立てて成り上がったと聞きましたが…本当でしょうか？

右手代わりの斧を躊躇なくルフィに振っているが、正直な所それだけにしか見えない
そうこうしている内に、ゾロが殺さぬように加減してモーガン大佐を斬り倒して決着
シエルズタウンを暴力で支配していたモーガン大佐が倒れた事で広場は大歓声に包
まれた



「プハー！食った食った！生き返ったぜ！」

モーガン大佐を捕縛した後の事後処理等を海兵達に任せてルフィとゾロは酒場に飯を食いにやってきた

というカルフィ：貴方は先程食べたばかりじゃないのですか？

まあルフィがゾロを仲間に加えた事のお祝いとして私が飯を奢ろうかと思ったのだが

酒場の店主の計らいで2人はタダ飯を楽しんだ

「ロロノア・ゾロでしたね？1つ質問をしてもいいでしょうか？」

「あ？お前は誰だ？」

「私はシラカワ・シユウです」

私が名乗るとゾロは目を見開いた

「《魔人》がなんでこんな所にいるんだ？グランドラインで賞金稼ぎをしている筈だろう？」

「やるべき事があるのでこうして東の海に来たのですよ」

私は一息入れてから話を続ける

「それで、質問をしてもいいでしょうか？」

「…ああ、俺に答えられる事だったらな」

「シエルズタウンに程近い次の場所はオレンジの町ですが、そこまでの道程を貴方に任せても大丈夫でしょうか？」

「ゾロは異名がつく程に賞金稼ぎとして活動をしていた事を考えれば航海術は問題ないと思うが一応確認しておく」

「あ？…まあ、なんとかなんだろ」

ふむ、少し怪しい感じもしますが言質はとれました

「それではルフィ、私はこれで失礼しますよ」

「ええ、仲間になれよシユウ」

また口を突きだしながらルフィがブーブー言ってくる

「…ルフィ、ハッキリと言っておきますが…私は誰の下にもつく気はありませんよ
なのでこれでお別れです」

私はこの世界に転生する前に感じた渴望を思い出す…自由への渴望を…

「この広い海でも、縁があればまた会うこともあるでしょう…」

その時は再会を祝して一杯やりましょう」

「俺は酒よりも肉の方がいいな」

モリモリと食事が続いているルフィの尽きぬ食い気に笑いが溢れる

「ククク：わかりました。その時は肉を御馳走しますよ」

そこまで話した私は酒場を出る為に立ち上がる

「コビーも海軍将校になる夢：頑張ってください」

「はい！シラカワ博士もお元気で」

酒場の外に出る為に歩き出すと後ろからルフィに声をかけられた

「シュウ！今までありがとうがと！それと！お前を仲間にするのを諦めてないからな！」

私はルフィの言葉に笑みを返し酒場を出る

酒場を出た俺は目を閉じて一息つく

脳裏に浮かぶのはあの時の光景

『シャーハハハ！』

色褪せぬ怒りを胸に、私はココヤシ村に向かって飛び立った

第80話

「オレンジの町への行き掛けの駄賃で海賊からお宝を盗んだけど…

これは大した金額にはならないわね」

オレンジの町にいるという《道化のバギー》のお宝を狙ってここまで来たんだけど道中で海賊を見つけたからついでお宝を貰ってきたのよね

小型船だったからあまり期待はしていなかったけどそれでも落胆しちゃうわね…

「さて、オレンジの町も見えて来たしまずは情報集めね」

オレンジの町の港に大きな船が見える

その主帆には大きな鼻をつけた海賊のマークが描かれている

「よし…道化のバギーの一味はまだオレンジの町にいるみたいね」

後は船員の数とかを知ることが出来れば忍びこめるんだけど…

ベルメールさんはバギーが能力者だって言っていたからなるべく見つからないようにして

お宝を盗み出したいところだわ

「より安全に行くなら協力者が欲しいところね…さすがにオレンジの町の

人達は無理かしら？」

相手が能力者でなければ色仕掛けでもよかつたけど、能力者は予想外な事も起こる可能性が高いから色仕掛けはやらないようにベルメールさんからキツク言われているのよね

道化のバギーの一味に見つからないように港から離れたところに船を止めて上陸する

「さて、オレンジの町の人達はどこかしら？」

オレンジの町を見ると所々に吹き飛ばされたような家がある

「…やっぱり海賊って最低ね」

オレンジの町の光景に、アーロンにひっくり返されたココヤシ村の人達の家を思い出す

「大雑把で不潔で下品で…シウウの爪の垢でも飲ませてやりたいわ」

そんな事を呟きながらオレンジの町に入っていくと頭上から人の声が聞こえた

「…何かしら？」

空を飛んでいる鳥の嘴から人の体が生えているのが見える

「何あれ？」

人の体はジタバタと暴れているから生きているようだけど…

「どうすればあんな状態になるのかしら？」

愉快な状態になっていた人が鳥に落とされる

落とされた人はそのまま地面に土埃をたてながら落下した

「ちよつと！大丈夫!？」

土埃を払いながら立ち上がった人は、麦わら帽子を被った青年だった

「あくビックリした」

何事もなかったようにその青年は麦わら帽子の埃を払っていく

「ん？お前誰だ？」

その青年がわたしが誰かを聞いてきたけど…聞きたいのはこっちの方よ！

「…わたしはナミよ」

「俺はルフィだ。で、ここどこだ？」

まあ鳥に銜えられて来たんだから知らなくても無理はないわね…

「ここはオレンジの町よ」

「おお、よかった。無事にオレンジの町についたぞ！」

「鳥に頭を銜えられて来て落とされるのを無事には言わないわよ」

呆れながらルフィに言ってみるけどまったく気にした様子は見えない

「いや、俺も仲間も海図の見方がわかんなくて困ってたんだけどな

鳥のおかげで辿り着けてよかつた。」

「仲間もつて……あんだ、航海術ぐらい覚えてから海に出なさいよね」

わたしは海で生きる術をベルメールさんに8年前からずつと叩き込まれてきたおかげでそこいらの海賊には負けられないぐらい強くなつたし、船の操船も帆さえあれば小船で中型のガレー船だつて振りきる自信があるわ

「そういうナミは航海術を持つてんのか？」

「当たり前じゃない。それに5年はこの東の海を巡つてきたからそこいらの奴に負けるつもりはないわ」

わたしの言葉を聞いたルファイが満面の笑みになる……なによ？

「ナミ、俺の仲間にならないか？」

「仲間つて……あんだ、何者なの？商人や軍人には見えないけど」

航海術も持たないで仲間と海に出るなんてところを考えると賞金稼ぎかしら？

「俺はモンキー・D・ルファイ！海賊王になる男だ！」

ルファイが大きな声で名乗りをあげた

海賊王……つまり、ルファイは海賊つて事ね

わたしは先程までの緩んでいた気持ちを引き締める

悪い奴には見えないけど、海賊なら油断は出来ない

「どうだナミ、俺の仲間になれよ」

「断るわ」

「えー、なんでだよー」

わたしはルフィを睨みながら告げる

「わたし、海賊が嫌いだから」

ルフィが口を尖らせながらブーブー言ってくる

…子供みたいな奴ね

わたしはハツとして考えだす

…ここから見える町の状況じゃあオレンジの町の人達に協力をお願いするのは無理

そうだわ

でも…こいつなら利用しても構わないわよね？

少なくとも悪い奴には見えないし…一時的に手を組むぐらいなら…

それに、シユウがいつココヤシ村に帰ってくるかわからないから

急ぐ必要があるものね…よし！

「ルフィ、あんたの仲間にはならないけど手を組んでもいいわ」

「ん？なんでだ？」

「あれを見なさい」

そう言つてわたしはオレンジの町中を指差す

「なんで所々家が崩れてるんだ？」

「今、オレンジの町には《道化のバギー》の一味がいるのよ。

あれは多分バギーの仕業でしょうね」

「そうか、バギーは悪い奴だな」

よし！乗つてきた！

「そこでバギーに一泡吹かせるのに手を組みましょう」

「いいぞ」

ここまでは順調だわ…後は作戦だけ…

「ルフィ、あんた仲間がいるつて言つてたけど…どこにいるのよ？」

「ん？その内来るんじゃないか？」

ルフィが首を傾げながら言つてくる

「はあ…それじゃ戦力として考えない方がいいかしら…」

わたしはため息を1つ吐いてからルフィに問いかける

「それで、仲間つて何人いるのよ？」

「1人だ。後もう1人仲間にする予定の奴がいる」

…これは予想外の少なさね

でも、モンキー・D・ルフィなんて海賊は聞いた事がなかったし

デビューしたてのルーキーなんでしょうね

…仲間もルーキーかしら？

「ルフィ、あなたの仲間の名前はなんて言うの？」

「ゾロだ。ロロノア・ゾロ！」

ロロノア・ゾロ？…って！

「もしかして、《海賊狩りのゾロ》!？」

「ゾロの事知ってんのか？」

「…まあね」

狙ってた獲物（海賊）を何度か先に狩られた事がある商売敵だからね…

「でも、なんで海賊のあんたが賞金稼ぎを仲間にしてるのよ？」

「しししー！」

ルフィは楽しそうに笑うだけで答えを返してこない

はあ…

「ついでに聞いておくけど…仲間にする予定の奴って誰？」

「ん？ああ、シユウだ」

…ええ？

「…シユウ？」

「ああ、シラカワ・シユウ！ グランドラインで賞金稼ぎをしてたつていうすげえ奴なんだ
！」

「ルファイ！ シユウは…シユウはどこにいるの!？」

気がつけば、わたしはルファイの肩を掴んで大きな声を出していた

第81話

「ナミ、シユウの事を知ってるのか？」

気がつけばわたしはルフィに大きな声でシユウの事を聞いていた

「シユウはわたしのこ…想い人よ」

10年前のあの時に自分の想いに気づいてからずっと変わらない…

違うわね、今はもっと強くなってるわ

「そ、それよりもシユウの事よ！どこにいるの!？」

「シユウならココヤシ村って所に飛んでいったぞ」

「どこから？どこからココヤシ村に向かったの!？」

「シエルズタウンからだ」

わたしはルフィから離れて顎に手を当てて考え始める

今、わたしの脳内にはこの5年で巡った東の海の海図が拡げられている

「飛んでいったと言う程に急いで向かったのなら途中で補給はしないかしら？」

シエルズタウンからココヤシ村に向かう際の航海日数を考える

シユウが1人なら乗っている船も相応に小さいはずだから…

「シユウは航海術を持っているだろうけど…東の海の流れとかは知らないはず…」
わたしは頭の中でシユウがココヤシ村に辿り着くまでの日数を計算していく
「ルフィ、シユウはいつココヤシ村に向かったの？」

「ん？昨日だな」

ルフィの言葉を受けてまた考える

「シユウはアーロンを倒すつもりだから無理な行程で航海はしないはずよね…」
そうだと仮定すれば今日中にバギーからお宝を奪って出航すれば
シロップ村で物資補給の余裕はとれる

…かなり強行になるけどシユウがココヤシ村に帰るまでに追い付けるはず！

よし！後はバギーのお宝で目標額まで到達すればシユウを

危険な目に会わせずにココヤシ村を解放することができるわ！

…そうと決まれば急がなくていいわ！

「ルフィ、早速だけど手を貸してもらおうわよ」

「ああ、いいぞ」

急ぐ必要があるからわたしはルフィを囮にする作戦を考えていく

「ルフィ…やっと見つけたぞ！」

わたしが作戦を考えていた時、ルフィの名を呼ぶ声がした

「ああゾロか、遅かったな」

「遅かったなじゃねえ！てめえが鳥に連れて行かれたからこうなったんだろが！」
「どうやらこいつが海賊狩りのゾロみたいね」

：仲間が来ちやつたからルフィを縛ってバギーに差し出して囹にするのは無理ね
なら、2人には正面から行つて暴れてもらおうかしら
こうしてわたしはバギーからお宝を盗む作戦を考える
いつもよりも強引だけど時間がないから仕方ないわね：
シユウ：お願いだから無理はしないでね：



1日飛び続けてようやくココヤシ村が見えてきた

アーロンへの怒りとは別に懐かしさが込み上げてくる
ふと目に入るのは10年前には無かった建物

かつて素潜り漁をしていた入り江にある大きな建物だ

その建物にはギザギザの鼻が特徴的なマークが描かれている

：おそらくはココヤシ村や周辺の村から徴収した税で建てた物でしょう

逸る気持ちを抑えてココヤシ村の中へと飛んでいく

そして、見慣れた家の前に降り立つ

先程までの怒りは霧散して胸がドキドキする

私のワガママで10年も待たせました…

そんな私を皆は許してくれるでしょうか？

意を決して扉をノックする

「はいはい、今行くからちよつと待ってて」

聞き覚えのある声に体が震える

帰って来たという実感が全身を駆け巡る

ガチャ

扉が開かれ、刈り上げられた独特な髪型をした女性…ベルメールさんが出てきた

「お待た…せ…?」

ベルメールさんは私を見上げて目を見開いている

いつの間にか、私はベルメールさんよりも背が高くなっていたんですね…

「…シユウ?」

10年振りなのに私だと一目で理解してくれた事が嬉しくてたまらない

私は万感の想いを込めて言葉を出した

「ただいま、ベルメールさん」

ベルメールさんが私を抱き締めてくれる

10年前と変わらない暖かくて優しいその手で…

「…お帰り、シユウ」

ベルメールさんの言葉で顔が熱くなる

頬を何かが流れ落ちるのを感じる

私はそれをそのままにベルメールさんを抱き締め返すのだった



「改めてお帰り、シユウ」

ベルメールさんが私の前にお茶を置く

あの後、懐かしの我が家に入りベルメールさんがお茶を淹れてくれたのだ

「ありがとうございます。一息入れたらアールロンを倒してきます」

「慌てなくていいわよ。今、ノジコが畑仕事を終えてシャワーを浴びているから

出てきたら少し話をしましょう」

畑仕事ですか…後でミカン畑を見に行ってみましょうか

「覗いてきてもいいわよ」

「…相変わらずで安心しました」

養娘がシャワーを浴びているのを覗けという母親はベルメールさんぐらいだろう

「ところでベルメールさん、ナミはどこですか？」

「その事も含めてノジコが出てきたら話すわよ。心配しなくても

ナミは元気だから安心しなさい」

ベルメールさんの言葉に安堵のため息を吐く

落ちつくためにお茶を一口飲む

うん、たまには紅茶以外も悪くないですね

「ベルメールさんお待たせく。あがったからシャワー…」

10年前とは声が、背丈や体つきが変わっているがラフな格好をした

青髪の女性は間違いなくノジコだ

「…シユウ？」

「ただいま、ノジコ」

首に架けていたタオルを放り出してノジコは私に抱きついてくる

「お帰り、シユウ！」

タンクトップから見える肩などには10年前にはなかったタトゥーが見える

「感動の対面が終わったたらノジコも座りなさい。シユウにこの10年の事を話すから」
ノジコは私から離れ、涙を拭いながら席につく

懐かしい10年前の席位置だ

「それじゃ話すわね。質問したい事もあるでしょうけど、それは話が終わってからよ」
そしてベルメールさんが私がいなくなつてからの事を話始めた

私がいなくなつてしばらくは皆塞ぎこんでいたこと

そして、少し経つてから俺がいなくなる前に残した言葉で私が生きていると信じ始めた事

8年前の特効薬の一件で私が新聞に載り生きていると確認がとれて喜んだ事

私がアーロンと戦う事を嫌がり、ナミがアーロンからココヤシ村を買い戻すと決意した事

決意したナミをベルメールさんが鍛えた事

買い戻すお金を集めにココヤシ村の外に行くためにナミがアーロン一味に入った事
一味のマークを焼き印されたナミを見てノジコがタトウーをした事等と話は続いた

「ナミは今、ココヤシ村を買い戻すお金を集める為にオレンジの町に向かったわ」

「なるほど、私と入れ替わりになつてしまったようですね」

もしかするとナミはルフィ達と会っているかもしれないですね

「では、アールロン一味を倒してナミを迎えに行く事にしましょうか」

「シュウ、ちよつと待ちなさい。アールロンに関係する事でまだ話があるのよ」

私は頷きベルメールさんに続きを促す

「シュウ、海軍支部の一部がアールロンと手を組んでいるわ」

第82話

「シユウ、海軍支部の一部がアーロンと手を組んでいるわ」

ベルメールさんの言葉に私は拳を握り締める

「わかっている範囲で構わないので教えていただけますか？ベルメールさん」

「海軍第16支部のネズミ大佐がアーロンと癒着しているの。ネズミ大佐はアーロンから
賄賂を受け取っているわ。その見返りとして海軍の艦隊派遣の情報を流しているわ
ね」

なるほど、事前に知っていれば魚人であるアーロン達ならば海中で艦隊を待ち伏せす
れば
簡単に沈めることができますね…

「他にもネズミ大佐はナミがアーロン一味に入っている事を知っているわ。

ナミがココヤシ村を買い戻す為にお金を集めている事も含めてね…」

海賊と癒着している男が知っている…

「つまり、ネズミ大佐はナミが集めたお金を奪いにくると？」

「まず間違いないでしょうね。ナミが外に出るためにはアーロンに一言言う必要があるし」

少し前にネズミ大佐がアーロンの所に来ていたからね」
そうなるよ…

「アーロンを叩き潰すだけでなく、ネズミ大佐にも対処する必要があるという事ですね？」

「そうよ。元海軍の私が何とか出来ればよかつたんだけど、18年前に引退した身の上では

海軍支部に対して何かを働きかける事も出来なくてね…」

ベルメールさんが申し訳なさそうな顔をしながら言う

私はそれを受けて顎に手を当てて考え始める

さて…どうする？

私が考えていると何故かベルメールさんとノジコが笑い始めた

「どうかしましたか？ベルメールさん、ノジコ？」

「いや、だって…ねえ？」

「今、シュウがしている仕事をナミもするようになったから可笑しくて…」

ノジコとベルメールさんがからかうように言ってくる

「私としては真面目に考えている所なんですが？」

「あつはつはつは！ごめんごめん、シユウが戻って来たから何とかなると安心してついでね」

信頼してくれるのは嬉しいが今は自重して欲しいものである

私はため息を一つ吐いてからまた考え始める

「さすがにネズミ大佐をアロンと一緒に叩き潰すのは止めた方がいいでしょうね」

「そうね、それをやればシユウはココヤシ村に居られなくなるわ」

やれやれ、面倒な相手ですね

「ネズミ大佐を叩き潰した目撃者がいなければ問題ないのですが、その為にはネズミ大

佐と

一緒にいる部下の方々を残らず始末する必要がありますね…

これは最後の手段としましょう」

「随分と物騒な事を言うようになったわね…さすがに5年も賞金稼ぎとして

活動しただけはあるのかしら」

私の言葉にベルメールさんとノジコが苦笑いしている

「躊躇すればやられるという世界で生きてきましたからね。もつとも、アロンに報復する

為には必要な事でしたので後悔はありません」

「そう…強かでない男になったわね」

ベルメールさんが今度は優しい笑みを浮かべながら言ってくる

「ありがとうございます」

「それで、さっきの方法は最後の手段にするって言ったけど

他にはどんなのがあるのかしら？」

ネズミ大佐に対処する上での問題は奴が海兵であるという事だ

ならば…

「コネを使いましょうか」

「コネ？」

ベルメールさんとノジコが同時に疑問を口にする

「ええ、この10年で色々な方々と知り合えましたのでそのコネを使います」

「具体的に誰とのコネを使うのかしら？」

私はベルメールさんの疑問に答える

「海軍本部の中将…：ガープさんに交渉を持ちかけます」

「ガープ中將？ シュウはガープ中將とどういった知り合いなのかしら？」

「ガープさんは私がアーロンに海に投げ飛ばされた後に助けていただいた命の恩人です

よ

私の言葉にベルメールさんが驚いた顔をする

「へえく…これも縁なのかしら」

「どういうことですか？」

「シユウがまだアカリのお腹にいる時に私が送ったっていう話を昔にしたでしょう？」
確かにその話は覚えている

「その時、私の船ではお腹の中にいたあんたが危険だったのよ。そこで船を出して送ってくれたのがガープ中将よ。つまり、シユウは2回ガープ中将に命を助けられた事になるわね」

ベルメールさんの言葉に今度は私が驚く事になった

「それは知りませんでした…」

「コネを使う時に会うんでしよう？その時に改めてお礼を言えばいいわ」
「ええ、そうしましょう」

そこまで話して一口お茶を飲む

「ナミがココヤシ村に帰ってくるまで後5日ぐらい、ネズミ大佐もそれに合わせて

ココヤシ村にくる筈よ…時間が無いけど、シユウはどうやって

ガープ中将と繋ぎをとるつもり？」

ベルメールさんの言葉を受けて私はワームホールを開く
「…それはなに？」

「私の能力で開いたワームホールですよ、ベルメールさん」
「ワームホール？」

ベルメールさんとノジコの言葉が重なる

私は自分が持つ能力を2人に簡単に説明する

「へへ、便利な能力ね」

「そう言うわけで、ガープ中将に繋ぎをとるのは問題ありません」

そこまで話して私はまた一口お茶を飲む

お茶はすっかり冷めてしまっていた

「交渉の材料としてアローン一味の身柄と討伐の手柄を差し出すつもりです」

「…シュウはそれでいいの？」

「本来ならアローンの首を獲ることを考えていましたが、害獣駆除も考えると

アローン達は殺さずに捕らえた方がいいでしょうからね」

私の目を見ていたベルメールさんがため息を一つ吐く

「シュウがいいのなら構わないわよ」

「ありがとうございます。もっとも、全ては私がアローンに勝てたのならの話ですが…」

ベルメールさんとノジコが笑い出す

「大丈夫よ、シユウなら勝つわ」

「そうね、絶対勝つわ」

ベルメールさんとノジコがそう言ってくる

「勝負に絶対はありませんが…根拠はなんでしようか？」

ベルメールさんとノジコが顔を見合わせてから同時に口にする

「女の勘よ！」

2人の言葉に今度は私が笑ってしまう

「いい女が2人も保証したんだから絶対に勝ちなさいよ」

「ククク…わかりました」

ノジコの言葉に私は笑いながら頷く

「それでは、アーロン達を倒してきますね」

「わかったわ。ノジコはゲンさんや村のみんなに声をかけてきて」

「りよ〜かい！」

私は2人の言葉に首を傾げてしまう

「何をするつもりですか？2人共」

「養息子の勇姿を見届けるに決まってるじゃない」

「私も養姉として見届けるわ。それと村の皆に宴の準備をしてもらおうのよ」
私は2人の言葉にため息を吐く

「なんと言ってもついてくるのでしようね…」

「あら、さすが家族。よくわかってるじゃない♪」

ベルメールさんとノジコが鼻歌を歌いながら動き出す

準備を終えたベルメールさんとノジコ、そして駆けつけてきたゲンさんを伴い
私はアールンパークと呼ばれている奴等の根城に向かうのだった

第83話

ベルメールさん、ノジコ、ゲンさんを伴いアールンパークまで歩いてきた

「シユウ、早く倒しちやいなさい！今日は浴びる程に飲むわよ！」

「ベルメール、安心するのはまだ早い……」

「もう、ゲンさんは心配しすぎよ。シユウなら大丈夫だから」

ベルメールさん、ゲンさん、ノジコがアールンパークを見上げながら会話をしている
「シユウ、本当に大丈夫なのか？」

「その為に10年も皆に待っていたので……必ず倒しますよ」

ゲンさんの言葉に私は決意を込めて答える

「それでは、行ってきます」

私はアールンパークの門に向かって歩いていきながらワームホールを開く

そして、ワームホールからアカリママの剣を取り出す

手にした剣に武装色の覇気を纏わせて一閃

鉄で出来た門を叩き斬った

ズンッ！

門が地面に落ちた音が拡がりアーロンパークの中から魚人達が出てくる
「にゆく、誰だお前？」

タコの魚人、ハチが俺に問いかけてくる

ハチは首を傾げているが、キスの魚人のチュウとエイの魚人のクロオビはニヤニヤと笑っている

そして、奥からゆつくりとアーロンが歩いてきた

その姿を目にしてブルツと体が震える

武者震いと歓喜の感情が全身を駆け巡る

「私はシラカワ・シユウ……10年前にアーロンに海に投げ飛ばされた者ですよ」

私の言葉にハチ達の後ろにまで歩いて来ていたアーロンが鼻を鳴らす

「そうか、あの時の小僧か……俺の城の門を壊すとは……今度こそ命がいらぬようだな」

私はアーロンの言葉を笑う

10年前には震えるほど怖かったアーロンからまったく圧力を感じないからだ

「なんだ？ 恐怖で気でも狂ったか？」

「ククク……いいえ、この時を待ちわびていたのですよ、アーロン」

私は右手に持っている剣を魚人達に向けて宣言する

「貴方達、魚人による支配を今日で終わりにして差し上げましょう」

私の宣言に魚人達は笑い出す

一頻り笑い終えた魚人の3人、ハチ、チュウ、クロオビが手や首の骨を鳴らしながら私に向かって歩いてくる

私は3人の魚人達に向けて霸王色の覇気を叩きつける
霸王色を受けた3人の魚人達はその瞬間、足が止まる

顔から汗を流し、膝を震えさせる

私が霸王色による威圧をさらに強めると3人の魚人達は白目を剥き地面に倒れた
倒れた3人の魚人達を見てアールオンが驚愕している

私の後ろで見守っているベルメールさん、ノジコ、ゲンさんも見聞色で感じる限り
アールオン同様に驚いているようだ

「てめえ…俺の同胞に何をしたあ！」

アールオンが激昂して海王類のような目をしながら私を睨みつけてくる
「ククク、少々威圧をしただけですよ」

私が笑いながら答えるとアールオンが踏み込み、殴りかかってきた

…遅いですね

私は剣を使わず空いている左手でアールオンに顔にカウンターを入れる
歯が砕け散りながらアールオンは吹っ飛んでいった

アーロンは体を起こしながら自らの歯を手で抜き取り、新しい歯を生やす
「まだ続けますか？次は遠慮せずに叩き斬りますよ」

私の言葉を受けたアーロンはアーロンパークの建物内に走っていく

見聞色で感じる限りではアーロンの戦意は変わらないので逃げたわけではないよう
だ

ドガンツ！

建物の壁を壊しアーロンが外に出てくる

アーロンの手には巨大なノコギリの様な物が握られていた

「キリバチだ。てめえの自慢の剣…叩き壊してやる」

「ククク、ご随意に…」

アーロンがキリバチを思いつき振りかぶり叩きつけてくる

私は半歩横に動きアーロンの一撃を避ける

ドガツ！

キリバチは石畳を砕き突き刺さる

ガガガツ！

アーロンは突き刺さったキリバチを石畳を砕きながら強引に横殴りに振り回す

私は剣を上段から振り下ろしキリバチを叩き斬る

バキーンッ!

私の一振りでキリバチは中程から折れた

「ククク、どうやら壊れたのは貴方の得物のようですね」

私の言葉にアーロンは歯ぎしりをする

アーロンは後ろに飛び退き距離をとる

そして、アーロンは建物内で調達したであろう酒瓶を腰から取りだし

中の液体を手の平に受ける

ブオンッ!

腕を振る音が聞こえる程の勢いで飛ばされた液体が私に迫る

私は液体を剣で斬り払う

だが、アーロンは液体を投げ飛ばすと同時に私に向かって駆け出していた

「シャー・ク・オン・ダーツッ!」

10年前、ベルメールさんとの戦いで止めとなった技でアーロンは私に突っ込んでく

る

私は剣の柄でアーロンの顔を横殴りにする

バキッ!

二度、アーロンは歯が砕け散りながら吹き飛ば

アーロンは石畳の上で大の字に仰向けで倒れる

体を起こそうとするアーロンを見ながら私は左手に重力球を作り出す

「グラビトロンカノン、発射！」

私は作り出した重力球をアーロンに叩きつける

すると、アーロンが自重で石畳に沈む

「…ガハッ！」

アーロンが石畳に沈み込みながら口から血を吐く

私は動けなくなったアーロンにゆっくりと近づいていく

「貴方の首を獲れないのは残念ですが…これで決着としましうか」

私は剣をワームホールに収納して右拳に武装色の覇気を纏わせる

「…小僧！」

動けぬ身ながらアーロンが声をあげる

「眠りなさい…アーロン！」

武装色の覇気を纏わせた右拳をアーロンの腹に叩き込む

衝撃で周囲の石畳を割るほどの一撃を受けたアーロンは意識を失う

そして、アーロンパークにベルメールさん達の歓喜の声が響き渡るのだった

第84話

「それではアーロン達を連れて行きますので後はお願いします」

あの後、私がアーロン一味を倒した事はすぐに広まり、アーロンの支配下にあった村々で歓喜の声があがったのだった

アーロン達を拘束していた時に海獣の海牛が出現したが、こちらの言葉を多少理解でききる

ようだったのでココヤシ村と周辺の村に被害を与えるのならば捌くと話し合いをしたら

海に向こうに去って行ったので大丈夫だろう

そして、今は交渉の為にアーロン一味を海軍本部に連れて行く所だ

「わかったわ。アーロンパークの中に残されていたお金はちゃんと分けておくわね。

もつとも、今回の宴やアーロン達のせいで出来なかった結婚式なんかでパーツと使うから

どの村でもほとんど残らないでしょうけど」

私の言葉にベルメールさんが応えてくる

これからはアーロンに搾取されないので戻ってきた税はあぶく銭として使う予定のようだ

「それと、アーロンパークの打ち壊しの方は大工の親方を集めて相談しておくわ」
アーロンの支配の象徴であったアーロンパークは支配下にあった村々が合同で打ち壊しを行うことに決まった

これを祭り、宴として大々的に行うのだがその為の準備とココヤシ村を守る為に奮闘していた

ナミを待つため少し時間がかかることになる

だが、ココヤシ村を始めとして他の村の人達も笑顔で準備に奔走している

「おそらくですが、ゲストを一人連れて帰ると思いますのでそれをお願いします」

「わかったわ、こっちの事は気にせずにシユウの思う通りにやっちゃいなさい」

ベルメールさんが私の肩を叩きながらそう言ってくる

ベルメールさんの言葉に私は笑顔で頷き、アーロン達を連れて海軍本部に轉移した



海軍本部に轉移した後はちよつとした騒ぎになった

賞金稼ぎをしていた時は毎回討伐の証だけを持って海軍本部を訪れていて

賞金首を生かして連れて行った事がなかったからだ

なんだかんだと少し問答があったが今はアーン達を引き渡してガーブさんの執務室にいる

「すまんがもう少し待つとつてくれ。センゴクもキリのいい所で書類整理を終えて

こつちにくるじやろうからな」

既にガーブ中将には今回の交渉の事をおおまかにだが伝えてある

事の詳細はセンゴク元帥を交えて詰めるとの事でお茶を飲みながら待っている

そして、しばらくお茶を飲みながらガーブさんと雑談しているとセンゴク元帥がやってきた

「待たせたね、シラカワ君」

「いえ、予定も伺わずに訪れたのは私の方ですから」

「うむ、その謙虚さを少しでもガーブが持つてくれるといいのだが……」

そう言いながらセンゴク元帥がチラリとガーブさんを見るが、ガーブさんはどこ吹く風と

言わんばかりに鼻に小指を突つ込んでいる

……この祖父にしてあの孫ありといった所ですか

「さて、ガープからある程度聞いているが…改めてシラカワ君から聞かせてもらおうか」
私はセンゴク元帥の言葉に頷き話始める

「海軍第16支部のネズミ大佐…彼の対処に手を貸していただきたいのです」
私の言葉にセンゴク元帥とガープさんが頷く

「その対処にあたって東の海の海軍支部の上層部と話し合いとなると思いますが
その際にアーロン達の身柄と討伐の手柄を手札としてお使いください」

「それは助かるが…本当にいいのかね？」

私はセンゴク元帥の言葉に頷く

「私自身の手でアーロン達を倒しココヤシ村を解放する事が出来ましたので構いません
よ」

そう言いながら私はお茶を一口飲む

「ですので、解放後のお祭り気分には水を差す輩の対処をお願いします」

ガープさんにはネズミ大佐がアーロンと癒着していた事、ナミが集めた財宝を奪いにくるだろう事、そしてアーロンが集めた税を証拠品として取りにくるだろう事を話した

そして、ガープさんからその事をセンゴク元帥に伝えてもらってあるのだ

「それと、アーロン達から証言を得るために司法取引で1人ぐらい

解放してしまっても構いません」

「…いいのかね？」

私はセンゴク元帥の言葉に微笑みながら答える

「私は今回の事の当事者ですから事の顛末をそれとなく知ること出来るかと…

そして、解放されたアロン一味の者が過去の恨みから何者かに討たれて

海に消えてしまうのもよくある話しかと…」

私の言葉にセンゴク元帥がため息を吐き、ガープさんが豪快に笑う

「ぶわっはっはっは！強かになったのう、シユウ！」

「…はあ、そこまで君の想定範囲なのかね？」

センゴク元帥が少し疲れ気味に言ってくる

ふむ、どうやら日々の激務で疲れているようですね

私のせいではありませんよ

「それと、ネズミ大佐が接収にきた現場を抑える方を派遣願います」

「センゴク、儂が行くぞ」

ガープさんの言葉にセンゴク元帥が頭を抱える

「…仕方ない、書類は私の方で処理しておく。ガープ、お前の隊を後発させて東の海に

送るから出発前に一言伝えておけ」

「わかったわい」

センゴク元帥が眼鏡を外して眉間を揉む

「シラカワ君、すまんがしばらくガープの世話を頼む」

「ええ、ガープさんは二度も私の命を救ってくれた恩人ですので歓待させていただきま
すよ」

私の言葉にガープさんが豪快に笑う

「…これは一人言なのですが、シエルズタウンにコビーという青年がいます。」

その青年は明らかな力の差がある海賊を相手に膝を震えさせながらも啖呵をきる胆
力と

正義感を持っています。その青年は海軍将校を夢見ているシエルズタウンの海軍に
入ったと

思いますが、東の海で埋もれさせるには惜しい人材かと…」

私の言葉にセンゴク元帥が今日初めての笑みを見せる

「異動の手続きはこちらで進めておく。ガープ、お前の目に止まる相手ならば

電伝虫で私に一報入れろ」

「センゴク、其奴を預かるのは儂だろうか？」

「お前の所にはライトがいるだろうか」

「ライトはローグタウンに行つとるから暇なんじゃ」

「暇ならちやんと書類を提出せんかバカ者が！」

変わらぬ2人の掛け合いに私は笑つてしまう

その後、私達の話し合いは終わり其々がネズミ大佐対処の為に動き出す

私は副官のボガードさんに話しを伝えたガーブさんを伴いココヤシ村に転移した

第85話

「久しぶりじやのう、ベルメール」

「久しぶりですね、ガープ中将」

ガープさんを伴いココヤシ村に転移した私は、ひとまずガープさんを家に案内した。そして、元上司と部下の2人が再会した事で握手をしている所だ

「しかし、儂がいきなり来て驚かんのか？ベルメール」

「シユウが事前に誰かを連れてくると言っていましたからね。心構えは出来てましたよ」
ベルメールさんの言葉にガープさんは私を見ながら頭を掻く

「シユウ、お前はレイリーに似て凄みを増してきたのお」

「レイリーって《冥王》の事ですよ？ガープ中将」

「そうじゃ。グランドラインでのシユウの師でもあるのお」

ベルメールさんが驚きながら私を見てくる

「…これもアカリの縁なのかしらねえ」

「なんじゃ？シユウ、お前まだ話しておらんかったのか？」

「ええ、家族が揃ってからと思ひまして…」

本当はココヤシ村に帰ってきたらアーロンの事で頭が一杯だったとは言えません…

「さて、取り合えず中にどうぞガープ中将。養息子の命の恩人を歓迎させてもらうわ」「ぶわっはっはっは！それじゃ、世話になるぞ」

私はその様子を見届けて踵を返す

「シュウ？どこに行くつもりかしら？」

そんな私にベルメールさんが目敏く気付いてしまう

「ナミを迎えに行つてきます」

私の言葉を聞いたベルメールさんが俺に近付き両手で顔を包んでくる

「…シュウ？あんたちゃんと休んでるの？」

私の目を見ながらベルメールさんが言ってくる

「三時間程ですが休みましたよ」

嘘は言っていない

ですが、ベルメールさんは私の状態に気付いているようです

「そんな寝不足の顔をしてナミに会いに行くのかしら？」

…自分ではわかりませんが、そんなに酷い顔をしているのでしょうか？

「なんじゃ？シュウは寝ておらんかったのか？」

家の中からガープさんまで出てきた

「ガープ中将、シユウが東の海に向かって来たのはいつかしら?」

「…5日ほど前じゃのう」

ローグタウンで1日休んだがココヤシ村に戻ってくるまでは仮眠しかしていない
「その5日で3時間しか寝てないのかしら?」

笑顔のベルメールさんが凄いい圧力を感じる

「いえ、1日はゆっくり休みましたよ」

「…どちらにしろほとんど寝てないのね」

ベルメールさんがため息を吐く

「シユウ、今日はゆっくり休んでナミを迎えに行くのは明日にしまさい」

…だが、ナミが1人で海に出ていると思うと焦りが出る

「ナミを心配しなくても大丈夫よ。私が8年みっちり鍛えたから東の海で生き抜くには
十分な力を身に付けたわ」

元海軍本部大佐のベルメールさんが鍛えたのならその言葉に嘘は無いでしょうが…

「それに、ナミは覇気を使えるようになってから平気よ」

「覇気をですか?」

それは正直予想外ですね

「ええ、見聞色を使えるようになったわ。もともと、武装色は身体強化ぐらいしか

出来ないから能力者と出会ったら逃げるようにしつこく言い聞かせてあるけどね」
なるほど、それなら確かに心配は無さそうですか…

「早く逢いたい気持ちはわかるけど、今のあんたじゃ逆に心配されるわよ」

私はベルメールさんの言葉にため息を一つ吐く

「わかりました。寝不足を解消してからナミを迎えに行きます」

「うん、それでいいわ」

ベルメールさんは私の顔を包んでいた手で今度は肩を叩いてくる

「それに、ココヤシ村を解放してくれたあんたがいないんじゃないじゃない！」

「…それが本音ですかベルメールさん？」

ベルメールさんとガーブさんが笑いだす

私はまた一つため息を吐いてから大人しく家に入っていった



「おお、はええはええ！」

バギーの船からお宝を頂戴して私はルフイ、ゾロを伴ってシロップ村に向かっている

バギー達との戦いでゾロが負傷したけど、致命傷じゃないし応急処置だけで急いでオレンジの町を出航したわ

ルフィ達の小舟は私の船で曳航している

「ナミ、お前すげえな！俺の仲間になれよ！」

「嫌よ、わたしは海賊が嫌いだって言ったでしよう」

この2人が航海術を持っていればお宝を奪った時点で別れていたんだけど手を貸してもらった義理もあるし次の場所まで同行する形にした

「この調子なら今日中にシロップ村につくわ。そこで医者にゾロを見せて明日1日を補給にあてるわ。その後はココヤシ村に向かうけどそれに

文句があるならシロップ村で別れるわよ」

「ししし、ココヤシ村にはシユウもいるんだろ？だったら文句ねえよ」

まったく…シユウも変な奴に気に入られちゃったわね

「ゾロ？適当に傷を縫っただけなんだけど…血は止まったかしら？」

「あ？…問題ねえ…それと、恩に着る」

「あら？わたしの恩は高いわよ」

「てめえは鬼か！」

消毒液も糸も無料じゃないんだから当然じゃない

「血を結構失っているんだし、今は大人しくしてなさい」

「ちっ…わかった」

そう言つてゾロは横になる

航海術の無い2人に舵を任せたら遅くなるからわたしが舵を取るけど…

少しは覚えようとしなさいよ！

「ナミは医術も出来るんだな」

「はあく…あのね、この程度は海で生きるんなら常識よ、常識」

ルフィとゾロは興味なさそうにしている

「ちよつとした外傷程度ならわたしでもなんとかなるけど、内臓まで達するような

深い傷だどうしようもないわ」

ルフィは小指を鼻に突っ込んでいる

…少しは危機感を持ちなさいってば！

「じゃあ次に仲間にするのは医者だな。それと音楽家」

「まずは迷子にならないように航海士を仲間にしなさいよ！それとなんで音楽家なのよ

！」

「海賊は歌うんだぞ！」

なんでそんなに自信満々に言ってるのよ…

「それに、航海士ならナミがいるじゃねえか」

「わたしは仲間にならないって言ってるでしようが！」

ルフィの相手をしていると本当に疲れるわ…

シユウも大変だったでしょうね…

風を読み、潮流を感じとりながら舵を取っていく

船は波を掻き分けて勢い良く進んでいく

そして日が頂点を過ぎ西へ傾き始めた頃、シロップ村に到着するのだった

第86話

「それでは行つてきます」

あの後、ワームホールからビールの入った大樽を取りだし家で飲み始めた

ガープさんは食べるのがメインだったが、私はベルメールさんとノジコに絡まれガッツリと酒を飲まされる事になった

2人共美人だし絡まれるのは嫌ではないのだがウワバミなので飲むのに付き合うのは

少々：いや、かなり疲れる

まあ、ナミを迎えに行く事もあったので私は早々に寝たのだが、寝る前に追加の酒樽を要求されて渡したら朝まで飲んでいたようだ

「行つてらっしゃい。私達は畑仕事をしたら一寝入りするわ」

「私に寝不足を注意しておいて自分達がなつてどうするのですか…」

「あつはつはつは！久しぶりに思いつきり飲めたもんだからついね！」

私はベルメールさんの言葉に頭を抱える

「シユウ、行く前にビールの樽を置いていってよ」

「…後でナミに文句を言われても知りませんよ、ノジコ」

そう言いながらも私は酒樽を置く

「ガープさん、後はお願ひします」

「おう！シユウがいない間にネズミめが来たたらお灸を据えてやるわい！」

頼もしいガープさんの言葉を受けて私は踵を返す

「さて、オレンジの町に行くにはシエルズタウンから向かう方が早いですね」

そう呟きながら私はワームホールを開きシエルズタウンに転移した



「なんとか準備が終ったわね」

わたしは今、シロツプ村の北側の坂の上にいる

昨日シロツプ村に到着すると、私達を鼻の長い青年のウソツプが待ち構えていた

どうやら海を見ていたら私達の船を見掛けたみたいね

その後、色々あつてルファイがウソツプを気に入ったようで行動を共にしていたのだけ
ど

そうしたらとんでもない事がわかってしまったわ

今日、シロツプ村を海賊が襲う計画をウソツプが聞いてしまったの
その事をウソツプがシロツプ村の人達に教えたのだけど、普段からウソをついていた
ので

ウソツプの言葉はシロツプ村の人達に信じてもらえなかった

そこでウソツプは海賊がシロツプ村を襲う事をいつも通りのウソにする為に

1人でシロツプ村を守る事を決意する

そんなウソツプを粹に感じたのかルフィとゾロがシロツプ村の防衛に参戦したわ

わたしは…早くココヤシ村に帰りたいけど、シロツプ村が海賊に襲われる事が

どこか昔のココヤシ村に重なってしまったってシロツプ村を出る事が出来なかった…

だから仕方ないと腹を括って私もシロツプ村の防衛に参戦する事にしたわ

そして、今回襲ってくる海賊達の上陸予定地点である北側の坂に

私、ルフィ、ゾロ、そしてウソツプが陣取っているというわけ

「ししし、早く来ねえかなあ?」

「ああ、ずつと寝てたせいで体が鈍っちゃまったからな。解すのにちょうどいい」

「お前らあ!もう少しマジメにしろお!」

ルフィとゾロの会話にウソツプがツッコミを入れている

でも、膝が震えてるわよウソツプ

「ウソツプ、あんたよくこんなに油を集められたわね」

北側の坂には油が満遍なく撒かれている

この坂を登ろうと思うなら砂を撒いたりと手間がかかるでしょうね

「ふふん、俺様は日々芸術（アート）に余念がないからな。他にも落書き用のペンキや落とし穴を掘るためのスコップの場所等、シロツプ村で俺が知らない場所は無いぜ

！」

「あんた…普段からそんなにイタズラしてるの？」

シロツプ村の朝はウソツプが大声で村中にウソをつくことから始まると

聞いた時は頭が痛くなつたわ…

「ししし、いいじゃねえか面白えし」

「手応えのある奴がいるといいんだがな」

わたしは2人の言葉にため息を吐く

ルフィとゾロは東の海のルーキーとしては間違いない強いわでも、覇気を使っている気配がまったく感じられないのよね

もし襲ってくる海賊達にルフィみたいに特定の方法じゃないと攻撃が効かない相手がいたらと考えると不安になる

後は2人が防衛を忘れて敵に突っ込んでいく事ね

…なんか2人が突っ込む未来しか見えなくて不安になってきたわ

そんな事を考えて頭を抱えていると、どこからか雄叫びのような声が聞こえてきた

「…何この声？」

わたしは見聞色の覇気を使って気配を探る

風に乗って流れてくる多くの気配を南側に感じる

「あ——っ!？」

ウソツプがいきなり大声をあげた

「どうしたのよ？」

「南側にも上陸出来る場所があるのを忘れてた——!？」

こんな時になんで忘れるのよ！

ウソツプが振り向く時に大きく腕が振られる

その腕はわたしに当たりそうになるけど見聞色を使っていたのが幸いして避ける事が出来た

「もう、危ないわね！」

「悪い！俺は先に南側に行く！お前らも早く来いよ！」

そう言つてウソツプは1人で走つて行つた

「南側って行ったら暖かそうな方だな！」

「こっちが北側ならあっちの方だろ」

続いてルフィとゾロが走り出すのだけど、2人共明後日の方向に走り出した
「本当に…何をやってるのよあんた達は！」

時間が無いのでルフィとゾロを放っておいてわたしも南側に走り出す

8年もの間ベルメールさんと海賊専門の泥棒として鍛えられた脚力で直ぐに
ウソツプに追い付き、南側の上陸地点の坂で海賊達を迎え撃つのだった

第87話

南側の上陸地点の坂の上に辿り着くと、眼下には海賊達の姿が見えた

「「ウオオオ——！」」

海賊達の雄叫びで空気が震えている

そして、横にいるウソツプの膝も震えているわね…

「ちよつと、しつかりしてよね！」

「お、おとお、おう、ここに、このキャプテンウソツプにままかせろ」

…はあ

わたしはため息を一つ吐いてからウソツプの背中を平手で張った

バチツ！

痛みか音かはわからないけど、ウソツプがその場で跳び上がった

「な、なんだ!？」

「少しは落ちついた？」

「俺は最初から落ちついてるぜ！なんたって俺はキャプテ——ンウソツプだ！」

虚勢もここまで張れたら立派よね…

「はいはい、それじゃ坂の下を見て」

「おう！」

坂の下を見たウソツプは目を見開きドンドン顔を青くしていく

「ななな、ナミ、ルフィとゾロはどこだ!？」

「2人なら明後日の方向に走っていったわよ」

わたしの言葉にウソツプが口を大きく開けて驚く

「だからあいつらが来るまでは私達であの海賊達を抑えるしかないわね」

「そそそ、そうか、よし！行けナミ！」

「あんたも戦うのよ！」

いい加減に覚悟を決めなさいよ！

坂の下を見ると海賊達が下品な笑いを浮かべているのが見えた

見聞色で感じるのは侮りやわたしに向けてくるゲスな感情だ

不快ね…思いつきり殴り飛ばしてやりたいわ

でも、わたしはあくまで防衛の手伝いだからウソツプを差し置くわけにもいかないわ

ね

「ほら、何か言いなさいよウソツプ」

「な、何かって何だよ？」

「わたしやルフイ達はあくまでもあんたの手伝いな。つまり、あんたが主役ってこと」

わたしの言葉に焚き付けられたのかウソツプが顔を紅潮させる

そして、一歩前に進み出て高らかに宣言した

「俺の名前はキャプテン・ウソツプ！お前らの上陸は既に知っていた！坂の上には俺の部下が100人待ち構えている！大人しく去れば見逃してやろう！」

ウソツプの虚言が辺りに響き渡る

坂の下にいる海賊達は顔を見合わせた後に大きな声で笑いだす

そして、下品にニヤニヤと笑いながら坂の上を目指して歩き始めた

「な、なんだ?! 100人だぞ! 今去れば見逃してやるんだぞ?!」

海に生きる男達の多くは見栄を張って生きている

そんな男達が名も知らない相手に何もせずに逃げ出す筈がない

「ほら、覚悟を決めて戦う準備をしなさい」

わたしは背中中に隠していたライフルを取りだしながらそう告げる

「お、おおお、おう！」

ウソツプがスリングショットを手に取りながらなんとか言葉を返してくる

「ラ、ライフル!? なんてお前そんな危ないもんを!」

「海で生きるんなら自衛手段の1つや2つは持っていて当たり前でしょう?」

このライフルはベルメールさんから受け継いだもの

最初はシユウを傷つけた物だから嫌だったけど、今ではあの時にシユウを生かしてくれた物として受け入れている

そして東の海に出て5年の間、わたしと一緒に生き抜いてきた相棒よ坂を歩いて登って来ていた海賊達が雄叫びをあげながら走ってくる

初手を取ったのはウソツプだった

「必殺！ 《鉛星》！」

ウソツプが鉛の球をスリングショットで弾き飛ばすと先頭の海賊の鼻っ面に当たり後ろに倒れた先頭の海賊が何人か巻き込みながら坂を転げ落ちていった

「へえ、やるじゃない」

わたしが誉めるとウソツプは長い鼻をさらに長くする

「そんな偉そうにしている暇があるんならさっさと次を撃ちなさい」

わたしは坂をライフルで指し示しながらそう言う

「へ？ うお!？」

坂は側面が崖のようになっているので幅は其れほど広くないけどそれでも巻き込まれなかった海賊達が坂を駆け上がって来ている

「な、鉛星！ 鉛星！ 鉛星！」

ウソツプが何度も撃ち込むが多勢に無勢で押し返しきれない

「な、鉛……うわあ——！」

そして遂にウソツプの所まで海賊が辿り着いてしまった

海賊がサーベルを振りかぶる

わたしはライフルの銃身を手に持ち、打撃武器として使い海賊を殴り飛ばす

殴り飛ばされた海賊は数人を巻き込みながら坂を転げ落ちていった

「ああ——……ん？」

両手で頭を庇いながら後ろを向きしやがみ込んでいたウソツプが顔をあげる

斬りかかって来ていた海賊が坂を転げ落ちているのを見たウソツプは

立ち上がり高らかに叫ぶ

「はっはっは！見たか！これがキャプテン・ウソツプの力だ！」

「バカやってないでさっさと迎撃しなさい！」

九死に一生を得て開き直ったのかウソツプの怯えの感情が薄くなった

坂の中盤まではウソツプが、登って来た奴はわたしだが相手をして海賊達を抑えていく

幾人かは気絶しているのか動かないけどやはり多勢に無勢なのが厳しい

「や、やべえ！鉛星が無くなりそうだ！」

「そこから辺に落ちてる小石でもなんでも適当に使えばいいじゃない！」

わたしは近くにきた海賊の顎をライフルで下からカチあげる

その一撃で意識が飛んだ海賊をなるべく多く巻き込めるようにして坂に蹴り飛ばす
「おまつ！ 正確な射撃にはいい球が必要なんだぞ！」

「そんな贅沢言つてられる場合じゃないでしょう！」

坂の端から抜けようとしていた海賊にわたしは足下に落ちていた

サーベルを拾つて投げつける

横回転しながら飛んでいったサーベルが海賊の横つ面に当たる

顔を抑えて足が止まった海賊に近づきライフルで殴り飛ばして坂の下に転がす

「……れじゃ罅が開かないわ」

海賊達がわたしかウソツプに向かつてくるのならどうとでも出来るんだけど

シロツプ村に向かおうとされると途端にキツくなる

「うわあ——！」

ウソツプに海賊が向かつたのでわたしは援護に行く

だけど、数人の海賊が逆側から坂を抜けようとしていた

わたしはそれを気にせずそのままウソツプの援護をする

何故なら、見聞色の覇気でここに近づく気配を感じ取っていたからだ

ドガッ！

坂を抜けた海賊達が勢いよく吹き飛ばされる

その光景に足が止まった海賊達に注意しつつ後ろを向くとルフィとゾロが息を切らしながら立っていた

「ウソツプ！南側つてどつちかちやんと行って行けえ！」

若干涙目のルフィがそう叫んでいる

とにかく、これで人数は揃ったわ

さあ！ここから反撃よ！

第88話

「ワン！ツー！ジャンゴ！」

ルフィとゾロが合流して破竹の勢いで海賊達を蹴散らしていったのだけど海賊達の船長であるジャンゴもこの場所に到着してしまった

「「うおおおおお——！」」

ジャンゴは催眠術を使うことができ、その催眠術の思い込みにより自分の仲間達を強化した

だけ…

「うおおおおお——！」

なぜかルフィまで海賊達にかけた筈の催眠術にかかってしまった

「なにやっつてんのよあのバカは…」

雄叫びをあげているルフィを見てわたしは頭を抱える

思い込みで強化されたルフィはゴムの体を伸ばし海賊達を薙ぎ倒していく周りを気にせず到大暴れしてるわね…

そのせいなのかゾロがわたし達の所まで避難してきた

「つたく、なにやっつてんだルフィの奴は」

ゾロもジト目でルフィを見ているわね

「ゾロ、あれが船長であんたも大変ね」

「あ？お前もしつこくルフィに付きまとわれるだろうよ」

ゾロの言うことがありありと想像できてわたしはため息を吐いてしまふ

粗方海賊達を蹴散らしたルフィが今度は海賊達の船の船首をもぎ取ろうとしている

「ワン！ツーン！ジャンゴ！」

船首をもぎ取ったルフィはまた催眠術をかけられて寝てしまった

「おい！ルフィの奴が船首に潰されちまったぞー！」

ウソツプが心配しているのかそうわたし達に叫んでくる

「大丈夫だろ、ルフィなら」

「そうね、ゴムだし大丈夫でしょ」

何も心配していないわたし達にウソツプがツツコミを入れてくる

そんな事していると海賊達の船から2人の男が飛び出してきた

「ほう？」

その2人を見たゾロが声をあげる

「ようやく手応えのありそうなのが出てきたな。あいつらは俺がやる」

刀を一本抜き放ちながらゾロが前に進み出ていく

「お、おい！2人相手だけどいいのかナミ？」

ウソツプがゾロを心配してわたしにそう言ってくる

「別に手伝いに行ってもいいけど…ウソツプ、あんた1人になって

あいつが襲いかかってきてもなんとか出来るの？」

そう言っつてわたしは坂の横の崖の上にいるジャンゴを指差す

「よ、よーし！ゾロなら大丈夫だ！ナミは俺を守れ！」

「女に護衛させるんじゃないわよ…」

まあ、ウソツプは今まで普通に村人として生きてきたのだから仕方ないか…

ジャンゴがニヤーバンブラザーズと呼んだ男達を相手にゾロが戦っていく

だけど、ニヤーバンブラザーズの細い方が隙を見てゾロの刀を二本盗んでしまった

「へえ、海賊の癖に中々やるじゃない」

まあ、わたしの盗みにはおよばないけどね

ニヤーバンブラザーズの細い方が盗んだ刀を遠くに放り投げる

刀が一本のゾロは二人がかりで襲いかかってくるニヤーバンブラザーズに

手数で圧されて防戦一方になってしまった

「おいおい、やばいんじゃないか？」

確かにウソツプの言う通りこのままじゃ危ないでしょうね

…はあ、仕方ないか

「ウソツプ、ジャンゴが来たら逃げなさいよ」

「うえ!? ナミはどうするんだよ!?!」

「わたしはあそこに落ちている刀をゾロに届けるわ」

そう言つてわたしは坂を駆け下りる

あと少しで刀の所まで辿り着きそうになったその時、見聞色の覇気で迫る敵意を感じる

ジャンゴがわたしを邪魔しようとしてチャクラムを投げたみたいね

走りながらわたしは考える

このまま行けば刀を蹴り飛ばしてゾロに渡すことは出来る

だけど…チャクラムは避けられないわね

おそらく、当たるのは左肩辺り…

はあ…

この借りは高いわよ、ゾロ!

走っている勢いのまま、わたしはゾロに向けて刀を二本蹴り飛ばす

そして、迫るチャクラムを受ける覚悟をしてわたしは歯を食い縛った

キンツ!

甲高い金属の音がわたしの耳に響く

訪れない肩の痛みに疑問を持ちながらわたしは顔を音がした方に向ける

そこには1人の青年が立っていた

白衣のような白いコート

波打つ紫の髪

「怪我はありませんか、ナミ?」

耳に響く低い声にわたしの胸が高鳴る

先程まで聞こえていた周囲の喧騒が聞こえなくなる

彼の声しか耳に入らなくなる：彼の姿しか見えなくなる：

彼がこちらに振り向く

その動作は至極ゆっくりと見えてわたしを焦らしてくる

向き直った彼の顔立ちはこの8年で何度も新聞で見たものだ

彼と目が合うとわたしの顔が不意に熱くなる

目が離せない：

ずっと：

ずっと逢いたいと思っていた人がわたしの目の前にいる

わたしを優しい眼差しで見詰めていた彼の口が動き出す

「素敵な女性になりましたね、ナミ」

彼の言葉が耳に響くとわたしの目から涙が溢れ出す

わたしは今の状況を忘れて、わたしの想い人シユウに抱きついた

第89話

「…シユウ」

私の想い人であるナミが泣きながら私に抱きついてきている

「…シユウ」

「はい、なんですかナミ?」

ナミのオレンジの髪を撫でながら私は応える

「逢いたかった…ずっと、逢いたかった…」

「私もですよ、ナミ」

10年の時を越えて漸くこの瞬間を迎えることが出来たと思うと感慨深いものがある

「「うおおおおお——!」」

坂の下側にいる男達が雄叫びをあげている

「やれやれ、不粋な方達ですね」

私はため息を1つ吐きながらそう呟く

「ナミ、あの者達を無力化してくるので離れてくれませんか?」

ナミが涙でグシャグシャになった顔をあげる

そのナミの顔を手でそつと拭う

「シユウ？」

「すぐに戻ってきますので安心してください」

ナミの頭を撫でながらそつと離れる

ナミの名残惜しそうな様子に笑いが溢れる

月歩を使い坂の上空に行き能力を用いてその場で浮かぶ

…東の海に戻ってくる前では無理だったが今では出来るという確信がある

左手に重力球を造り出す

左手を振り上げ重力球を頭上に飛ばし無数の重力球へと分ける

見聞色の覇気で範囲内の敵を認識し狙いを定め解き放つ

「グラビトロンカノン、発射！」

振り下ろした左手に従い海賊達に重力球の雨が降り注いでいく

そして…

「「ぎやああああああ！」」

重力球を受けた海賊達は地面に這いつくばる事になったのだった

海賊達の無力化を終えた私はナミの方にゆっくりと降りて行く

「さて、これでゆつくりと話が出来ますね。ナミ、どういった状況なのか教えていただけますか？」

私の言葉にナミが反応を示さず呆然としている

私は軽く苦笑いをしてからゾロへと話しかける

「その者達はあえて無力化しませんでしたか、それでよろしかったですか？」

私の言葉を受けてゾロが動き出す

「ああ、問題ねえ」

ゾロが三刀流の構えをとり対峙していた2人の海賊との戦いを再開する

「あ、ごめんシユウ…ちよつと混乱しちゃって…」

私はナミの頭をまた撫でる

「構いませんよ、ナミ」

私の言葉を受けてナミが笑顔になる

その笑顔は昔以上に輝いて見えた

「取りあえずはあそこで寝ているルフィを起こす事にしましょうか」

戦いの最中だというのに何故かルフィは船首を掛け布団として寝ている

ワームホールに剣を収納し、ナミに手を差し出す

「では行きましょうか」

私の意図を察したナミが私の手を取り腕を絡めてくる

幸せな感触を味わいながらナミと共に坂を歩いて下っていく

「ウソツプ〜！あんたも下りてきなさいよ！」

ナミに呼ばれた鼻の長い青年がおそろおそろ坂を下りてくる

「シユウ、どうやってこいつらを無力化したの？」

「私の能力ですよ、ナミ」

ルフィの所へ向かいながらナミに能力を簡単にだが説明していく

「へ〜、便利な能力ね」

ナミと話しながら歩いて行くとルフィの元に辿り着く

それと同時に、ゾロの方も対峙していた相手を斬り伏せた

「ルフィ、いい加減に起きてください」

私は膝を曲げ、寝ているルフィの額を武装色の覇気を込めた指で弾く

「いてっ！…おお、シユウじゃねえか！なんでここにいるんだ？」

「私はナミを迎えに来たのですよ」

私はルフィと会話をしながら、ルフィに乗っかっていた船首を蹴り飛ばす

「ししし、ありがとな」

服についた砂埃を払いながらルフィが立ち上がる

そして、ウソツプとゾロが俺達に合流したその時、坂の上に怒気を纏った執事服の男が現れた

「てめえら……俺の計画を台無しにするつもりか？」

執事服の男の言葉を受けて海賊達が動こうとするが、私の能力により動けずにいるその様子を見た執事服の男がコメカミに青筋を立てる

「あの者は何者ですか？」

「ひつじだ、悪ひつじ！」

私の言葉にルフィが答える

なんとなく敵だということは認識出来た

「シュウ、あいつはキャプテン・クロ……海賊よ」

ナミがシロツプ村で起きた出来事を説明してくれた

「なるほど、そういう事ですか」

ゾロに斬られた大きな男がクロの怒気にあてられて上体を起こす

「ジャンゴ船長！俺に催眠術をかけてくれ！」

坂の上にいたサングラスの男が震えながら体を起こす

「おや、あの者には少しばかり強く重力をかけたのですが……火事場の馬鹿力でしょうか？」

ジャンゴと呼ばれた男は、ナミを狙ったので地面にめり込む程度には重力をかけたのですが…

チャクラムを持つ手を反対の手で支えながらジャンゴが大きな男に催眠術をかける

催眠術をかけられた大きな男はゾロに斬られた傷が塞がり力強く立ち上がった

「ほう…催眠術もバカにしたものではないですね」

大きな男は強烈な思い込みにより身体強化程度だが武装色を纏った

「…俺がやる」

ゾロが三刀流の構えをとり大きな男を迎え撃つ

本能のままに戦う大きな男をゾロが危なげなく斬り捨てた

その様子を見ていたキャプテン・クロが坂をゆつくりと下りてくる

爪の部分が刀となった特殊な手袋を嵌めたキャプテン・クロは

手の平で眼鏡を押し上げる

その眼鏡の奥で光るキャプテン・クロの瞳は怒りに満ちていた

第90話

「使えない奴等だ…俺自らの手で計画を修正しなくちゃならねえとはな…」

手の平で眼鏡を押し上げながらクロが話す

「ウソツプくん、特に君には念入りにお礼をいたしましょう」

執事としての礼をとりながらクロが言い放つ言葉に、ウソツプが顔を青くする

そんなウソツプを庇うように、ルフィが指の骨を鳴らしながら前に出る

「ししし、悪ひつじ！俺が相手だ」

クロは眼鏡を手の平で押し上げながら斜に構える

対してルフィは腰を落として構えた

クロの姿が音も無く消えて見えるほどの速さで動き出す

六式の剃に匹敵する速さでルフィに近づき猫の手のような武器で撫でるように斬る

斬られたルフィは歯を食い縛って反撃するがクロは持ち前の速さですぐに距離をと

る

「な、なんだく？何が起きたんだ？」

ウソツプが目を見開き驚いている

「シユウ、今のクロの動き…：剃かしら？」

ナミが首を傾げながら私に聞いてくる

「おそらくは剃とは別のものでしょう。剃はその性質上、地を踏む音がしますが

クロの移動術にはそれがありませんからね」

暗殺術の類いだと思うが正確な所はわからない

「おいおい、ルフィの奴…：大丈夫かよ？」

ウソップが顔を青くしながら言葉を溢す

「心配はいらないですよ、ウソップ。一見しただけですがあの移動術には

デメリットもあるようですから」

「デメリット？」

ウソップが疑問の声をあげるとナミとゾロも私を見てくる

「初動が小さく音も出さずに動くあの移動術を見切るのは難しいですが、その反面として

あの移動術は体重を乗せた攻撃には向いていないようですね」

その事から首等の急所を防御しておけば早々にやられることはない

ルフィが素早いクロの動きを捕らえようとしますが、中々上手くいかない

そして反撃で殴りかかったルフィの手に、クロが乗り悠々と立って見下ろした

「そこのお前の言う通りに俺の攻撃には重さが欠ける…だが、それがどうした?」

クロがルフィの顔を蹴り飛ばして音もなく地面に下り立つ

「麦わらは俺に一撃も当てることが出来ずに翻弄されている…格が違うということだ」
クロの言葉を遮るように、ルフィが足を伸ばし鞭のように使いクロの体を薙ぎ払う
だが、クロはルフィの足に乗って駆け寄り二度ルフィの顔を蹴り飛ばす

「麦わらが終われば次はお前達だ…覚悟しておけ!」

クロの言葉にウソツプの膝が震える

そして、蹴り飛ばしたルフィにクロが追撃しようとした時、坂に少女の声が響き渡つた

「クラハドール!」

坂の上の少女に注目が集まる

「カヤ…なんで…?」

ウソツプの眩くような声が私の耳に届く

「これはカヤお嬢様…:そのような格好で外に出られては風邪をひいてしまいますよ」

クロが執事としての礼を取るが、その顔は海賊としての凄みを持ったままだ

「…メリーを斬つたのは本当に貴方なの、クラハドール?」

カヤという少女の言葉をクロが鼻で笑う

「そんな…」

クロが崖の方を見て声をあげる

「ジャンゴ！何をしている！さっさと計画通りに動け！」

クロの言葉に反応してジャンゴが動こうとするが、私の能力により地面に這いつくばる

「…ダメだ！紫の髪の毛の男のよくわかんねえ能力で動けねえ！」

ジャンゴの言葉でクロが私の方を向く

「…そうか、ならばてめえから…っ！」

クロの言葉を遮るようにルフィの伸ばされた拳がクロの顔に叩き込まれる

「お前の相手は俺だ！悪ひつじ！」

ルフィの拳により割れた眼鏡をクロが投げ捨てる

そして、両手をダラリと下げて体の力を抜く構えをとった

「「うわああああ！助けてくれえええええ！」」

クロの構えを見た海賊達が叫んだ

「…杓死！」

クロが今まで以上の速さで動き出す

ガリッ！

ザリッ！

その速さのまま所構わずに斬っていく

地面に這いつくばる自分の仲間達までも…

「ぎゃああああああ！」

「いでええええええ！」

斬られた海賊達から悲鳴があがる

「お、おい、あいつら助けなくていいのか？」

ウソツプが私にそう言ってくる

「別に能力を解除しても構いませんが…そうしたら坂の上のお嬢さんが狙われますよ。

それでもよろしかったら能力を解除しましょう」

私の言葉にウソツプが唇を噛む

「シロツプ村を襲おうとしなければこうはならなかったんだから、あいつらの自業自得

よ」

ナミの言葉に私は頷く

だが、ウソツプは納得がいかないようだ

キンッ！

こちらまで流れてきたクロの攻撃をワームホールから取り出した剣で弾く

それを見たゾロが驚いた様子を見せる

「…見えてるのか？この動きが」

「この程度でしたら知覚することは可能ですね」

キンツ！

またクロの攻撃が流れてきたので剣で弾く

「お前！仲間をなんだと思ってるんだあああああ！」

ルフィの怒りの声が響き渡る

その時、ルフィの体に斬り傷が出来るがルフィは手を伸ばして

クロの体を掴み地面に投げ飛ばす

「ぐっ!？」

地面に投げ飛ばされたクロが苦悶の声をあげる

「お前！なんで仲間まで斬るんだ!？」

「…仲間？あいつらは只の駒だ」

投げ飛ばしたクロにルフィが馬乗りになり殴っていく

だがやられっぱなしとはいかないとばかりに、クロがルフィの脇腹を撫でるようにし

て斬る

「ぐぎっ!？」

一瞬動きが止まったルフィの隙をついて、クロが馬乗り状態から抜け出し立ち上がる。高速で動き続けた事と、ルフィに何度も殴られた事で体力を消耗したクロが肩で息をしている。

「杓死！」

またもや高速で動きながらクロは周囲を斬り刻んでいく。

背中を斬られたルフィは手を伸ばしてクロを掴むと、両手両足を使いしがみつくようにしてクロを拘束する。

「ゴムゴムのお——！」

その態勢のままルフィは首を伸ばす。

そして…

「鐘！」

ルフィがゴムの収縮の勢いを利用してクロの顔に頭突きをする。

その一撃で意識を飛ばしたクロは、地面にゆっくりと倒れていった。

第91話

「いてて…もつと優しく治療してくれよシユウ」

クロネコ海賊団の襲撃は失敗に終わり、キャプテン・クロを海賊達に引き渡して解放した後

カヤお嬢さんの屋敷で怪我人であるルフィと執事のメリーを治療している所だ

「治療終わりましたよ、ルフィ」

「ししし、ありがとなシユウ」

「私も改めてありがとうございます、シラカワ博士」

ルフィと共に執事で羊なメリーも礼を言ってくる

「シラカワ博士、メリーを助けていただきありがとうございます」

2人の治療を終えるとカヤお嬢さんも私に礼を言ってきた

「私は科学者ではありませんが医者ではありません。ですので後で医者の方に

診てもらった方がいいでしょう」

本来なら医者に診せた方がいいのだろうが、今回の海賊襲来を秘する為に

こうして私が治療することになった

「はい、重ねてありがとうございます」

お嬢様らしく清楚な振る舞いでカヤが礼を言ってくる

その姿は薄幸の美少女といった所だろうか

「ところでカヤ、クロの奴を逃がしてよかったのか？」

ウソツプの言葉にカヤが頷く

「はい、ウソツプさん。クラハドールが執事として私の世話をしてくれたのは

打算があつての事ですが、それでも一緒に過ごした家族のような人でしたから……」

カヤお嬢さんの判断は甘いと思えるものだが今回の一件の当人がそれでいいと言
のなら

こちらが何かを言うのは不粋な事だろう

パンツ！

場の空気を変えるようにカヤが拍手を打ち話し始める

「そうだわ！皆さん、今日はお礼に夕食をご馳走させていただきますね」

「それは良いアイデアですお嬢様。このメリー、腕を振るわさせていただきます」

こうして、私達はカヤお嬢さんの計らいで夕食をご馳走になることになった

そして、夕食まで時間があるので私はナミと話し合う事にした



「この場で言うのはおかしいかもしれませんが…ただいま、ナミ」

「う、うん…おかえり、シユウ」

カヤの家で夕食をご馳走になるまでの合間にシユウと話をする事になった
シユウが笑顔でただいまと言ってくるとわたしの顔が熱くなる

「ナミ…アーロンは私が倒しました」

シユウの言葉にわたしの体が固まる

「そ、そうなんだ…」

「ええ、ココヤシ村を始めとして支配されていた村の皆が解放の宴の準備をしています
…夜が明けたら私と一緒にココヤシ村に帰りましょう」

「…うん」

わたしはなんとかシユウに返事をするけど体が震えてしまう

無力感が体を包み涙が溢れてくる

「…ナミ？」

「…ごめん、ごめんねシユウ…わたし、何もできなかつた…」

ココヤシ村を買い戻す為に、シユウがアーロンと戦わずに済ませる為に

お金を集め続けて来たけれど…間に合わなかった

…わたしは、何もできなかった

そんな思いがグルグルとわたしの中を巡り感情を掻き乱していく

ギョツ

わたしの体が暖かい手と体に包まれる

シユウがわたしを抱き締めてくれている

「ナミ…貴方は何もできなかったわけではありません」

「でも…」

「ナミが8年もの間、皆の為に頑張っていたことはココヤシ村や

他の村の人達もよく知っています」

わたしの言葉を遮るようにシユウがわたしの頭を撫でながら言葉が続ける

「ナミが頑張ってきたその姿を皆が見てきたからこそアローンの支配に耐えてこれたのです」

顔を上げてシユウを見ると、シユウが指で優しく涙を拭ってくれる

「ナミ、良く頑張りましたね…ありがとうございます…」

シユウの言葉にまた涙が溢れ出す

報われたという思いがわたしの体を包み込む

わたしの涙が止まるまで、シュウが優しく抱き締めてくれていた



夜が明けて翌日、南側の上陸地点にキャラベル型の船の姿が見える

ゴーイングメリー号

それがこの船の名前だ

先日の一件のお礼としてカヤお嬢さんとメリーがルフィ達に贈った船だ

「なあシュウ、ナミ、俺の仲間になれよ〜」

ゴーイングメリー号の船上からルフィがそう話しかけてくる

シロップ村の青年、ウソツプを仲間に加えたルフィとゾロが出航準備を整えたので

私とナミが見送りをしているのだ

「以前にも言いましたが、私は誰の下にもつく気はありませんよ、ルフィ」

「わたしは何度も海賊は嫌いだから仲間にならないって言ってるでしょう」

私が話した後にはナミが呆れるような口調で話す

「それに、わたしはシュウと一緒に行くからお断りよ」

ナミが私の腕に体を預けるようにして絡みながらそう言い放つ

私の腕は幸せな感触に包まれている

「ちえ〜」

「ククク…：そう拗ねなくてもいいではありませんか。航海術ならばウソツプが持つていると言っているのですから」

私の言葉にウソツプがビクツとしながら反応する

「お、おう！任せとけ！何故なら俺は…キャプテ——ン・ウソツプだからな！」
「…ねえ、シユウ。ウソツプは嘘をついていると思うんだけど？」

ナミが小声でそう聞いてくる

「例え嘘でも、己の言葉には責任を持つていただきましょう」

「…それもそうね」

私の言葉にナミは笑顔で頷く

「ルフィ、貴方達がココヤシ村に来たときは歓迎しますよ」

「おう！肉を一杯食わせてくれ！」

「ククク、わかりました」

一通り話を終えてルフィがゾロとウソツプを見て声をあげる

「出航だ——！」

ゴーイングメリー号が海原へと旅立って行く

それを見届けた後、私とナミはココヤシ村に転移した

第92話

「あら、2人揃って朝帰りだなんて…何をしていたのかしらね？」

私とナミは転移をしてココヤシ村に帰って来たのだが、家に戻って開口一番
ベルメールさんがからかうような言葉を口にした

「も、もう、ベルメールさん！」

「あつはつはつは！ほら、早く家に入りなさい」

ナミがベルメールさんの言葉に顔を真っ赤にするがその様子を見た
ベルメールさんは満足そうだ

「おう、戻ったかシユウ」

「…誰？」

ガープさんを見てナミが疑問の声をあげる

「初めましてじゃなお嬢ちゃん、俺はモンキー・D・ガープ！海軍本部の中将じゃ！」
「モンキー・D？ルフィの関係者かしら？」

ナミの言葉に今度はガープさんが疑問の表情を浮かべる

「お嬢ちゃん、ルフィを知っとるのか？」

「少しの間だけど一緒に行動したわ」

「そうか、孫が迷惑をかけたのう」

ナミがルフィと行動した時の事を思い出したのかため息を吐いている

それを見たガーブさんは申し訳なきように頭を掻いていた

「わたしはナミ、よろしくねガーブ中将」

「おう、よろしくのうナミ」

ルフィの事でわかりあえたのか2人が握手をした

「ところで、なんでガーブ中将が家にいるのかしら？」

「ナミ、アーロンは倒しましたがまだ終わってないのですよ」

私がガーブさんの代わりに答えるとナミがこちらを見ってくる

「その事を話すと少し長くなるのでお茶でも淹れましょうか」

お茶を淹れている間に畑仕事を終えて家に戻ってきたノジコも交えて話を始める

ネズミ大佐の事を一通り話すとナミが頭を抱えた

「はあ…結局、お金を集めてもココヤシ村を解放できなかったのね…」

「ネズミ大佐を殴り飛ばしてお金をアーロンに渡せば解放されたかもしれませんが

腹いせにネズミ大佐はナミを指名手配していたでしょうね」

私の言葉にベルメールさんとノジコが頷く

ガープさんは顔を歪めてご立腹のようだ

「ネズミめ…仲間を売ったあげく守るべき人々にまで手を出そうとは

海軍軍人の風上にもおけん奴じゃわい！」

ガープさんは不機嫌そうにお茶請けとして出した煎餅をかじる

バリボリと咀嚼してお茶で流し込み一息入れてからガープさんが話し出した

「シユウ、ネズミめの件じゃが…粗方根回しが終わったとセンゴクから連絡があったわい」

「そうですか」

私の返事に1つ頷いてガープさんは話を続ける

「それと、ネズミの件とは別にシユウに頼まれとったお嬢ちゃんの件なのじゃが

センゴクと相談してそこのお嬢ちゃんは儂等の協力者としてアローン一味に

潜入してもらっていたとする事にしたわい」

「ありがとうございます」

私が頭を下げるとナミも慌てて頭を下げた

実は海軍本部に交渉に行ったときにガープさんにこの事を頼んでいたのだ

私はナミが指名手配されなければいいとお願いしていたのだが、故郷の為に体を張つ

て

頑張るナミの行動を粹に感じたガープさんが張り切ってセンゴク元帥と話し合いをしたのだ

「それと…シユウが捕らえたタコの魚人を司法取引で解放する事になったわい」

「…そうですか」

「そのタコの魚人はアールンがまだタコの魚人が小さい頃に引き取っていたらしくてなアールンとその仲間の2人が情報を話す条件としてその魚人の解放を願ったんじゃないよ」

「どのような事情があれど支配された当人達にしてみれば面白いものではない
「それと、ネズミめがココヤシ村に来るときは魚人の誰かが必ず沖合いにまで

迎えに行っていたそうでの…奴を捕らえるのに一役買ってもらおう事にしたのじゃ」

…なるほど、理解はした

だが…

「そのタコの魚人が今回の一件を終えて海賊に戻るようなら…」

「その時は遠慮することないわい」

私はガープさんの言葉に頷く

そして、一通り話を終えた私達はベルメールさんの提案で家族が揃った事を祝って陽が昇っている内から飲む事になった

◆ 「いやー！やっぱビールは何杯飲んでも旨いわねー！」

ベルメールさんとノジコが何度目かわからない乾杯を交わす

私がワームホールから取り出した大樽は3個目が空になろうとしている
昼前から飲み始めて夜になっているのだがまだ飲み続けている…

…我が家の女性達は皆ウバミのようだ

「ゲンさんとガープ中将にもお裾分けしないとね♪ノジコ、行くわよー！」

「は〜い♪」

ガープ中将はゲンさんの所で寝泊まりをしている

そして、今回の祝いは家族水入らずで楽しめと席を外しているのだ
立ち上がったベルメールさんは何かをナミに耳打ちしている

耳打ちされたナミは顔が真っ赤になっていた

「それじゃ、しゅっく〜う♪」

「お〜♪」

あれ程飲んでいのに酔っているように見えない2人だが妙に機嫌が良い…

そんなベルメールさんとノジコは2人でゲンさんの家に向かった

ちなみにベルメールさんが武装色で身体強化してビールの樽を担いでいった

「…大丈夫でしょうか？」

「う、うん…大丈夫、だと思っわ」

ナミの言葉の歯切れが悪い

それにまだ顔を真っ赤にしている

…酔っぱらったのか？

「…シユウ？」

「はい、何ですかナミ？」

ナミが私の隣に座りながら話しかけてくる

私が返事をするとなミが1つ深呼吸してから話始めた

「わたし、シユウが好き！」

不意打ちのように放たれたナミの言葉に私の思考は止まってしまふ

「10年前、シユウがアーロンに投げ捨てられる前にわたしを好きって言うてくれた時

わたしは自分の気持ちに気がついたの…」

胸が痛いと感じるほどに胸が高鳴っている

「わたしの気持ちはあの時から…あの時以上にわたしはシユウが好き！」

ナミの告白で顔が熱くなる

「だからね、シユウ…わたしの…！」

私はナミの言葉を遮るように指をナミの唇に当てる

「そこから先は私から言わせていただきます」

頬を赤く染めたナミが頷くのを見てナミの唇から指を離す

「ナミ、好きです…私の恋人になってくれますか？」

「…うん！」

了承の返事と共にナミが抱きついてくる

少しの間見つめあった私達はその後、自然に唇を重ねていたのだった

第93話

「う〜ん…なんだったかしらねえ〜…」

翌日、ゲンさんの所で夜通し飲んでたベルメールさん達が家に帰って来た

そして、朝飯を食べて食後の一服をしていた時、急にベルメールさんが

何かを思い出そうとしているのだ

「どうしたのですか？ベルメールさん」

「昔、アカリに言われた言葉が思い出せなくてねえ…」

「アカリママのですか？」

腕を組みながら思い出そうとするベルメールさんの言葉に私は首を傾げる

そんなベルメールさんの言葉に興味を持ったのかナミとノジコもベルメールさんを見ていた

「う〜ん…あつ！思い出したわ！」

ポンツと判子を押すように手を叩いたベルメールさんに皆の注目が集まる

「シユウ、ナミ？」

私とナミは紅茶を口にしながら目でベルメールさんに続きを促す

「昨夜はお楽しみだったわね♪」

「っ!? ケホッ!... ケホッ!」

紅茶を飲んでいたナミが咽ている

「あつはつはつは!」

「ぶっ! その反応だと昨日はうまくいったみたいね、ナミ?」

大笑いするベルメールさんとノジコの言葉にナミが顔を真っ赤にして俯く

そんなナミの反応も可愛いと思うのは惚気なのだろうか?

しかし...なんて事を言っているのですかアカリママ...

「それで、私はいつ孫の顔を見る事ができるのかしらね?」

「も、もう! ベルメールさん!」

ニヤリと悪い顔をしながらベルメールさんがナミをからかう

「あつはつはつは! それで、シユウはその事をどう考えてるの?」

「: : : しばらくは2人の時間を楽しみたいと思います」

私の言葉にベルメールさんとノジコがニヤニヤとした笑みを浮かべる

「これは今日もゲンさんの所でお世話になろうかしらね? ノジコ」

「そうね、その方が良さそうだわベルメールさん」

ベルメールさんとノジコの言葉にナミが2人に頬を赤くしながらもジト目を向ける

「さて、私とノジコはシャワーを浴びたら一眠りするから2人は畑をお願いね」

そう言ってベルメールさんとノジコが席を立つ

残された私とナミは顔を見合わせるとため息を吐くのだった



「もう、いつも2人でわたしをからかってくるんだから…」

ナミが畑仕事をしながら愚痴を溢している

軍手をして畑仕事をするその姿を懐かしいと感じながら私はナミと並んで作業をしていく

「ククク、まあいいではないですか」

「良くないわよ、もう」

「おかげで今夜も二人きりになれるのですから」

私の言葉でナミが顔を赤くする

「…エツチ」

ナミは顔を赤くしながらもジト目で私を睨んでくる

「ククク、否定はしません。それにナミと2人になれるのは嬉しいですからね」

「そ、それはわたしも嬉しいけど…」

まあ明日の朝にはまたベルメールさんとノジコにからかわれるのは

目に見えているからなあ…

「はあ…ここ数日で色々な事が起こり過ぎて疲れたわ」

「ご苦労様です、ナミ」

「もう、シユウだつてその色々を起こした一人なんだからね」

ナミが頬を膨れさせながらそう言ってくるがそんなナミも可愛いものだ

「…ねえ、シユウ」

「何ですか？」

「ネズミ大佐の件が終わったらシユウはどうするの？」

ふむ？

「わたしは世界中の海図を描きたいっていう夢があるけど…」

「一緒に行きますよ、ナミ」

私の返事にナミは花開いたような笑顔になる

「私の夢は世界をこの目で見える事ですからね。その夢はナミの夢と一緒に成せますか
ら」

「うん、ありがとうシユウ」

ナミがそう言ってくるのがありがとうと言いたいのは私の方だ

「ねえシユウ、わたし達の船はどうする?」

ナミの言葉に私は顎に手を当てて考える

「とりあえず一億ベリーはあるけれどそれで足りるかしら?」

「そうですね…グランドラインを巡れる船を建造するには少々足りないでしょうね」

「ふくん…じゃあもう少し稼がなきゃダメね」

ナミが残念そうにため息を吐く

「大丈夫ですよ、ナミ。私が賞金稼ぎとして得たお金で船を造れますから」

「でも、それじゃあ…」

「そのぐらいの甲斐性はあるつもりですが、私とナミの船を造るのならば

ナミにもいくらかお金を出していただいた方が良さそうですね」

私の言葉にナミは笑顔になり腕を絡めてくる

「シユウ、どんな船にする?」

「船の設計図は頭の中にありますが、それを形にするには少々実験が必要ですね」

ナミが可愛らしく首を傾げて私を見てくる

「実験?」

「ええ、風を帆に受けずとも自走可能な船にするつもりですから」

「へえ、面白そう！」

その船が完成したらこの世界の技術に変革を起こす可能性がある
だが、私とナミの夢を成すために自重するつもりはない
ふと、ナミと目が合う

至極自然に2人の距離が近付いていく

私達はミカンの香りに包まれながら軽く触れ合うように唇を重ねた



時は過ぎ、ココヤシ村の沖合いに海軍の船が姿を見せる

海軍の船は錨を下ろしその場に留まるようだ

その船からチチチと厭らしい笑い声が響く

ココヤシ村を中心としてアローンの支配から始まった一連の出来事に
終わりの時が近付いてきたのだった

第94話

「1億ベリーか……よくもそんなに溜め込んだものだね、チチチ！」

ココヤシ村の沖合いにて留まる軍船の船上にて1人の男が笑う

海軍第16支部ネズミ大佐

それがこの男だ

「まあ小娘にはご苦労とでも言っておこうか……私の為に1億ベリーを

集めたのだからね！チチチ！」

この男は長年アーロンと癒着をしており、その癒着で得た資金で上層部への根回しや出世争いの相手をアーロンに潰させたりして大佐の地位まで登り詰めていた

それだけに止まらず、ココヤシ村周辺で商いをする商人達からアーロンに襲われな
いと

称して賄賂を要求して私腹を肥やしてきたのだ

「にゆく、ネズミの旦那、いらっしやくい」

「ハチか、出迎えご苦労」

沖合いに止まる軍船にタコの魚人がネズミ大佐を出迎える為にやってきた

「それで…小娘は戻っているのか？」

「にゆく、ナミなら戻ってきてるよ。でも、アーロンさんがいないからお金は渡してないよ」

ハチの言葉を聞きネズミ大佐が笑う

「チチチ…それで、小娘はどこにいる？」

「家でゆつくりするって言ってたよ」

「それは好都合だ」

髭をしごきながら笑うネズミ大佐は部下に小舟の準備を命令する

そして、数人の部下を伴い自ら小舟に乗り込むとハチに命じて小舟を曳かせた

「チチチ、一億ベリーか…何に使うべきかな？」

ネズミ大佐は思考する…更なる甘い蜜を味わう為に

「本部への栄転に使うべきかな？いや、コネが無くなるのは痛い…」

ならば准将への昇進が妥当だな、チチチ！

「そうなるよ、いよいよ私も閣下と呼ばれる身分になるのか…チチチ！」

ネズミ大佐の笑い声が海原に響く

この小舟が進む先は更なる栄光へと続くのだとネズミ大佐は笑い続けるのだった



「にゆく、それじゃ帰りにまた声をかけてくれよ。ネズミの旦那」

「チチチ、ご苦労！」

タコの魚人であるハチはネズミ大佐を見送るとため息を吐く

理由は自らに与えられた役目を果たし終えたからだ

「モ——ム——！」

ハチは自身の口をラツパのように使い海獣の海牛を呼び寄せる

「モ〜♪」

「…行こう、モーム」

ハチはモームと並び海原へと泳いでいく

「海賊は廃業だぞ、モーム…アーロンさんとの約束だからな」

「モ〜…」

「たこ焼き屋をやるう…長年作り足し続けた秘伝のソースがあるんだ…旨いぞ〜」

「モ〜♪」

「うんうん、モームにも一杯食べさせてやるからな」

1人と1匹が海を行く

新たな人生を思い海原を泳ぐその姿は、やがて水平線へと消えて行ったのだった



「チチチ、邪魔をするよ」

ノックも無く開けられたドアの向こうには海軍の軍服を着た小男がいた

「あら、ネズミ大佐…なんの用かしら？」

「ベルメールか…お前の小娘に用があつてきた」

「残念ね、小娘なんて名前の人は家にはいないわよ」

「チチチ、相変わらず強気な女だ」

小男が上機嫌に笑う

「だが、近いうちに閣下と呼ばれる私に少しは媚びを売っておいたほうが身のためだぞ」

「あら、口説かれてるのかしら？でも、私程のいい女を口説くにはあんたじゃ

役者不足よ。出直してきなさい」

脅しともとれるネズミ大佐の物言いに、いつもと変わらぬ様子でベルメールさんは切り返す

ベルメールさんの言う通りに役者不足だ

「ふん！まあいい…それで、ナミはどこにいる？」

「ナミに何のようかしら？」

「ナミが不当に金銭を集めていると情報が入った。ならば海軍として見過ごせまい？」

予想通りのネズミ大佐の行動に呆れのため息が出る

「はあ…その熱意を少しはアーロン討伐に向けたら？」

「チチチ、高度な柔軟性を持つて対処にあたっているのだ…素人の口出しは控えてもらおう」

この男はベルメールさんが元海軍本部の大佐だと知った上で言っているのか？

「ん？その男は見覚えがないな…誰だ？」

「私の養息子よ。最近になって漸く帰って来たのよ」

「ほう？では納める税が増えるのか、それは大変だな」

ネズミ大佐は少しの劳いの様子も見せずに軽く肩をすくめながら言う

「それは問題ありませんよ、ネズミ大佐」

「なに？」

「アーロンは私が倒しましたのでもう税を納める必要はありません」

私の言葉にネズミ大佐は少しの間呆けると途端に笑いだした

「チチチ！面白い冗談だ！」

「冗談？ハチにアーロンはもういないと伝言を頼んだ筈ですが…」

私の言葉にネズミ大佐は首を傾げる

そして、1つ舌打ちをしてから口を開いた

「チツ！確かにアーロンはいないと言っていたが…」

ネズミ大佐はそこで言葉を切ると醜悪な笑みを浮かべた

「それはそれで都合がいい…：そのお前、アーロンの身柄を寄越せ、これは命令だ」

ネズミ大佐の言葉に私とベルメルさんはため息を吐く

「アーロンが倒されたのなら奴が支配していた証拠として奴が集めた税も

回収しなくてはな…：チチチ！」

「これで私は准将どころか少将に…いや、中将だつて夢ではない！チチチ！」

もはやため息もでないその醜悪な姿に我慢の限界を超えたのか

海軍の軍服を纏ったガープさんが奥から姿を見せる

「チチチ…？誰だ!？」

「ここまで腐つておるとは思わんかったのお…」

拳の骨を鳴らしながらガープさんがネズミ大佐に近付いていく

「なんだ!？私は海軍第16支部のネズミ大佐だ！階級と姓名を明らかにしろ！」

「…よかろう、儂はモンキー・D・ガープ！海軍本部の中将じゃ！」

ガープさんの言葉にネズミ大佐は固まり、彼の部下は直立して敬礼する

「歯を食い縛れえ！」

ガープさんの拳により、ネズミ大佐は開け放たれたままのドアから外へと殴り飛ばされる

こうしてアーロンの支配から始まった一連の出来事に終止符が打たれたのだった

第95話

「世話になったのお、それじゃこれで失礼するぞい」

害獣駆除をした翌日、ココヤシ村に後発していたガープさんの船が訪れたので

ネズミ大佐を船に放り込んでからこうして出航前の挨拶をしている

「もう少しゆっくりしていても構いませんよ、ガープさん」

「いや、ネズミの後始末やらをせんといかんからな、そうゆっくりとしておれんのじゃ」

面倒そうに鼻を鳴らしながらガープさんがそう言う

「それに、シエルズタウンにも顔を出さんといかんからな」

「そうですか…：ガープさん、良い旅を」

私はガープさんと握手を交わす

「出航じゃ——！」

ガープさんの号令で船は東の海の家原へと旅立っていった



明けて翌日、私は想定している船の完成の為に試作品の制作に取りかかっていたもつとも、賞金稼ぎをしていた時の休息の時に暇潰しである程度作っていたので組み立てて試用してみるだけだった

「あはは！面白ーい♪」

試作品の試験運用をナミがしている

その様子はとても楽しそうだ

ナミが方向を切り替えてこちらに向かってくる

近付くに従って独特な駆動音が聞こえてくる

ザバツ！

ナミはドリフトをするようにして海水を飛ばし、その抵抗力で船体にブレーキをかける

そして、飛ばされた海水はシャワーの様に私に降り注いできた

「ふふ、シュウごめくん♪」

バリアを張ったので濡れてはいないが、まったく悪いと思っていない

ナミの口調に苦笑いをするしかない

「いかがですか、その試作品は？」

「最高よ！すつごく面白いわ！」

私がつつたのは電動機式の水上オートバイクだ

金属の加工は私の能力で重石となる部分の重量を増やすことで、簡易的にプレス成形を

することが出来たのでそれほど苦労する事はなかった

この時は過去の私によくこの能力を選んだと喝采を送ったものだ

それと動力を得るのに問題となった電力の確保はこの世界特有の物で解決ができた

その物の名称は《衝電貝（エレパクトダイヤル）》である

この衝電貝は衝撃を吸収、放出する《衝撃貝（インパクトダイヤル）》の亜種で

衝撃を電気へと変換する特殊な貝である

これは賞金稼ぎをやっている時に手に入れたものだ

私が試作した水上オートバイクは、稼働前に衝電貝に衝撃を与えて蓄電する必要があるが

稼働してからは電動機の震動等で蓄電出来る様に設計したのである種の半永久機関となった

もつとも、金属疲労やらを考えるとそうもいかないのだが…

「ねえシユウ、もう一回りしてきてもいい？波のリズムが掴めてきた所なの」

「ええ、いいですよ。楽しんできてください」

ウインクを1つしてからナミはハンドルを捻り、水上オートバイクを走らせる。後で点検して色々データを取る必要があるが、これで私とナミの船に目処が立ったと思うと自然と笑顔になる。そして、楽しんでいるナミを見て私もまた楽しむのだった



「ねえ、たまには外食でもしない？」

水上オートバイクの試験を終えて家に戻ると、ノジコが新聞を片手にそうやってきた。私はナミと顔を見合わせてから口を開く

「それは構いませんが、どこに行くのですか？」

「はい、よ」

そう言つてノジコは持っていた新聞を突き出してくる

「『海上レストランバラティエ』？」

私とナミの言葉が重なる

「前々から行つてみたいと思つてたんだけど、アローンのせいで行けなかったのよね」
ノジコの言葉に私とナミはまた顔を見合わせる

「ベルメールさんはどう思いますか？」

私は煙草を吸って一服していたベルメールさんに話を振る

「いいんじゃないかしら」

フーッと紫煙を吐き出してからベルメールさんが言葉が続ける

「宴の準備は粗方終わったけど、残りは明日商人が来るまで買えないからねえ」

会場の準備は終わっても食料やお酒が揃ってないのでまだ宴を出来ないのだ

「それに、シユウの能力を使えば日帰りできるし問題ないでしょ？」

ウインクをしながらそう言ってくるベルメールさんの言葉に頷く

「確かにその通りですが、バラティエの場所を知らないので転移出来ませんよ」

私の言葉にナミがテーブルの上に新聞を拡げる

「シユウ、新聞に載っている海図に印があるわ」

ナミの言葉で新聞に目を向けると確かに印がある

「シユウ、ちよつと待ってて」

ナミが自室に小走りで向かう

戻ってきたナミは手にしていた自筆の海図をテーブルに拡げた

「シユウ、ココヤシ村がここだからバラティエはこの辺りよ」

ナミが自筆の海図に指で指し示す

一見で位置を把握するナミの能力に私は称賛の言葉を贈る

「ナミ、お見事です」

「5年も東の海で海賊相手に泥棒をしていればこのぐらいはね♪」

そう言つて微笑むナミに惚れ直す思いだ

「それでは、私が一度バラテイエの場所まで飛んでいき確認をしてくるので

皆は出掛ける準備をして下さい」

私の言葉にナミ達は喜びの声をあげながらハイタッチをする

そして、シャワーを浴びに行ったり服を選んだりと各々出掛ける準備に取り掛かる
そんな皆の様子に笑いを堪えながら私はバラテイエに向かつて飛び立ったのだった

第96話

「へー、ここがバラティエなのね」

私の能力で家族揃ってバラティエまで転移すると、ノジコが関心したように声をあげる

その声に引かれるようにそちらを向くと、タンクトップにジーンズのいつもと変わらないノジコの姿がある

目を移してベルメールさんを見ると、チエツクのシャツに片側だけ短いジーンズ姿でこれもいつもと変わらない

最後にナミを見ると少し前と変わり肩を出している

肩の焼き印は俺が処置をして、今では風車にミカンのタトウーになっている

そして、海賊専門の泥棒として活動してきた影響なのか。動きやすさを重視して

ホットパンツスタイルとなっている

ホットパンツから伸びる健康的な脚は、恋人であつても目を引き付けられる程に魅力的だ

転移前にはオシヤレをと色々悩んでいたようだが、バラティエには海軍も含めた

荒くれ者達が集まるとの事なので、結局はいつも通りの動きやすい服にしたようだ
だが我が家の女性陣は皆美女、美少女なのでどんな服でも映えるというものだ

「それでは行きましようか」

私が促すとナミが自然に腕を組んでくる

その光景を見てベルメールさんとノジコがニヤニヤとするが、放つておいて歩き出す
入口を開けてみると、既にそれなりの客が入っているようだ

客層としては指にゴテゴテとした宝石がついた指輪をしている者や、

その者に何かを強請る化粧の濃い女性といった人達が目につく

「あ？いらつしや…い…ませ…」

バラティエに入ると来客に気づいたのか、特徴的な眉毛をした金髪の青年が挨拶をし
てきた

だが、私達を見たその青年は目を見開き呆然としている

そして、一瞬俯いたかと思うと勢いよく顔を上げ…

「いらつしやいませ〜お姉様方♪」

鼻の下を伸ばしただらしない顔で、踊るようにクルクルと回りながら近付いてきた

そんな青年の様子を見たベルメールさんとノジコの眼光が鋭く光る

その眼は獲物を見つけた狩人のものだった…

「あら、お姉様だなんて嬉しい事を言ってくれるわね、お兄さん♪」
 「はあああああいいいい♪」

ベルメールさんが右手で金髪の青年の顎を撫で上げながら声をかけると、

金髪の青年は鼻息を荒くしながら返事をする

「ベルメールさんだけずるいわ。さあお兄さん、案内してよ」

「喜んで——！」

ノジコが胸を押し当てるようにして金髪の青年と腕を組むと、

金髪の青年は飛び上がるような勢いで背筋と鼻の下を伸ばした

そして、金髪の青年に案内されて店内を進んで行く2人の姿に、私とナミは

顔を見合わせると同時に肩を竦めてから後を追う

後を追う私に出来るのは、金髪の青年の財布が空にならないように祈ることだけだっ

た



「まずはこちらのワインで喉を潤してください。もちろんこちらの奢りです」

そう言って金髪の青年は、肩を組むようにして俺を除いた3人にワインを差し出す

私には水だ

このあからさまな扱いの差にむしろ感動を覚える

「あら、ありがとう」

「いえいえ、すぐにメニューをお持ちしますので少々お待ちください」

そう言った金髪の青年は、スキップをするような軽やかな足取りで店の奥へと消えていった

「うーん、他人の奢りで飲むワインは美味しいわね♪」

「そうね♪」

そう言い放つ我が家の強かな女性達にため息が出る

「シユウも飲む?」

「いえ、私は自分で用意しますので結構ですよ、ナミ」

ナミが心優しく言ってくれるが、私のワームホールには熟成した物がたっぷりあるので遠慮する

「お待たせしました、お姉様方♪」

私がワームホールからワインとグラスを取り出していると、金髪の青年が戻ってきた
「あ? おい、それは何処から持ってきた」

「私の能力で用意したものですよ」

私の手にあるワインとグラスを見た金髪の青年が問い質してきたので答えると、
金髪の青年は首を傾げた

「能力? どうでもいいが下手な酒じゃあ店の味が台無しになる。」

悪いがそいつの味を確かめさせてもらおうぞ」

「どうやらこの青年は、料理人としてのプロ意識が高いようだ

金髪の青年は店の奥に戻りグラスを持ってくると、鮮やかな手付きで
ワインボトルの栓を開ける

そして、グラスに注いだワインを口にすると目を見開いた

「なんだ、こいつは…!」

口に手を当て口内に残った味わいを確かめるように青年は話し出す

「華やかな香りに深みのある味わい…このワインはどこ…!」

そう話しながらワインのラベルを見ると、青年はまたもや目を見開いた

「同じワイン?!」

青年が口にしたのは、ベルメールさん達に奢ったワインと同じ物

だが、私の方は長期間熟成させてあるのだ

「おい、こいつは中身だけ違うものか?」

「いえ、同じ物ですよ。私の能力で15年程熟成させてありますがね」

「15年……」

呟くように言葉を溢した青年はもう一口グラスを煽る

「こいつに合わせる料理は……」

青年は先程までののだらしない顔から一転して真面目な顔で思考している

「おい、このワインをうちの店に卸す事は出来るか？」

「大樽で10個は確保してあります」

「……なら5個仕入れたい」

「ちよつと、シユウ？こんなな美味しいのを隠してるなんて酷いじゃない」

その声に顔を向けると、私が出したワインボトルを手にしたベルメールさんがいた

「どうやら家の女性陣のお気に召したようなので3個でいいでしょうか？」

「ああ……で、いつ卸せる？」

「今すぐでも可能ですよ」

私はワームホールからもう一本ワインを取り出す

それを見た青年は驚いた様子で目を見開く

「これは手付けとしてプレゼントしましょう」

「ああ、オーナーに話を通してくる」

そう言つて背を向けた青年に私は話しかける

「今日の食事を奢っていただけるのでしたら二個分の値段でお売りしますよ」

私の言葉に青年は背を向けたまま手をあげる

青年が店の奥へと歩いていく姿を見ると、見聞色の覇気で高速で接近する何かを感知する

即座にナミ達にバリアを張ると同時に、店内に大きな音が響き渡るのだった

第97話

「…っ!?クソジジイ!」

高速で飛来した何かがバラテイエに直撃し、轟音と衝撃をもたらしてから直ぐに金髪の青年が走り出した

「…聞こえた音から察するに大砲の弾だと思うけど、大丈夫かしら?」

ベルメールさんが元海軍軍人らしく、落ちついた様子で言葉を発する

「ええ、上部で音がしたので沈む事はないでしょう」

「そうね、じゃあ続きを楽しもうか♪」

女は度胸とでも言うように、ベルメールさんはグイツとワインを飲み干す

そんなベルメールさんを見たノジコとナミは、肩を竦めてから同じようにワインを飲み干した

ドタバタとバラテイエのコック達が店内を動き回っているが、我関せずとばかりに私達はワインの味を堪能していく

そうしてしばらく飲んでいると、頭に包帯を巻いた老人と金髪の青年が私達の所にやってきた

「あんたがああのワインを店に卸してくれるんだって？」

「ええ：それより怪我の方は大丈夫でしょうか？」

「この程度でどうにかなるほど海のコックは柔じゃねえさ」

大きなコック帽を被った老人は、ニヤリと不敵に笑う

「お客人方！迷惑をかけちまったな！詫びに店から一品奢らせてもらうぜ！」

老人の言葉に店内にいた客達から拍手が起こる

だが、手にゴテゴテと宝石をつけた男が立ち上がり怒鳴り声をあげた

「この店では埃が入ったスープをそのままにその程度の詫びしかないのか！」

「あ？それはクソすいませんでしたねお客様」

怒鳴る男に金髪の青年が対応するが、その言葉遣いは謝罪というよりも

喧嘩は買うとでもいうようなものだ

「客に向かつてなんだその態度は！」

ドンッ！

男が拳をテーブルに叩きつける

すると、叩きつけた衝撃でテーブルの上の料理が床に落ちた

金髪の青年が落ちた料理を見つめている

「詫びに膝をついて頭を下げる：そして店で一番上等な……」

男の言葉が金髪の青年の蹴りで遮られる

「食い物を粗末にしてんじゃねえよ、クソ野郎！」

腹を蹴られた男が床に膝をつきそうになるのを堪えて拳を振るう

だが、あつさり回避され今度は顔を蹴られる

金髪の青年は崩れ行く男の胸ぐらを掴んで引き寄せる

「海の上でコックに逆らうんじゃねえ！」

そう言った金髪の青年は、男を店の外へと叩き出す

それを見ていた店内の客達は喝采の声をあげた

「悪いな客人、この程度はうちの店じゃあ日常茶飯事なんだな」

老人は客を叩き出した青年を咎める様子を見せない

そして、店内の客達もまるで見世物が終わったかのように食事を再開していた

「それで、例のワインなんだが……樽これでどうだ？」

そう言つて老人が指を一本立てる

周りにいる客に配慮して、百万ベリーの値段を指で示したのだ

「安過ぎますね」

そう言つて私は指を五本立てる

「それじゃうちの大損だ」

老人が指を二本立てる

私は無言で指を四本立てると老人が指を三本立てた

「交渉成立ですね」

本来ならこの値段はあり得ないものだが、この世界ではワインは腐りにくい事で水以上に常飲されるので安く、このぐらいいでも利益が出るのだ

「サンジ！この客人を倉庫まで案内しろ！」

サンジと呼ばれた金髪の青年がこちらに歩いてくる

「あ？クソジジイが命令してんじやねえよ」

「それと、あの見習いも適当にこきつかっておけ」

そう言つて老人は店の奥へと歩き始める

「サンジ、その客人達に振る舞う例のワインに合わせる料理…任せるぞ」

背中を向けたまま言い放つ老人の言葉にサンジが驚く

だが、次の瞬間には不敵に笑つた

「上等だ…クソジジイはのんびりと静養してやがれ」

「ふんっ！」

老人は一つ鼻を鳴らすと足早に去つていった

「そういう訳で悪いが、あんたにはちよいとご足労願うぜ」

「わかりました」

私は席を立ててサンジについていく

「ワインを倉庫に置いたらすぐにクソうめえ料理を作つてやる」

「ククク、楽しみにしておきましょう」

紫煙を吐き出しながら歩いていくサンジについていきワインを倉庫に置く

そして席に戻つて行くと、そこには見覚えのある麦わら帽子を被つた男がいた

「ん？ようシユウ、元気だったか？」



「なるほど、それで借金を返すためにバラティエで働くわけですか」

なぜかエプロンをつけたルフィと再会したので理由を聞いてみたのだが、

自業自得としか言えないものだった

ルフィ達はシロップ村を出航した後、ウソップが四苦八苦しながら本で航海術を学び
なんとか航行していたようだ

その途中でゴーイングメリー号の大砲を試し撃ちすると、大砲の目標にした
岩場で休んでいたゾロの知り合いを巻き込んでしまったらしい

その巻き込んだ相手の1人が、原因不明の病だったので取り合えず栄養をとらせようと、比較的近くにあったバラティエに進路を変更したそうだ

ゴーイングメリー号がバラティエの近くまで来ると、海軍の船と遭遇して戦闘になったのだが、

その戦闘でルファイが大砲を使うと、目標を外して別の場所に着弾してしまったらしい
その着弾したのがこのバラティエだったようで、店の修理費と先程の老人、オーナーのゼフの

治療費を払う事を要求されたのだが、金が無かったのでルファイが働いて返す事になったそうだ

「博士！相棒を助けていただきありがとうございます！」

そう言つて賞金稼ぎのジョニーが、土下座をして床に頭をつける

「礼ならばライムの絞り汁を用意してくれたバラティエの方に言つて下さい」

ジョニーの相棒であるヨサクは原因不明の病ではなく、壊血病になつていたので
ビタミンの補給が必要だった

なのでそれを店に伝えてライムの絞り汁を飲ませたのだ

「あんた達……海に出るならそのぐらいの知識は最低限必要なのよ」

ナミが呆れながらそう言うが、隣のテーブルで食事をしているゾロとウソップは

聞く耳を持つ様子は無い

「じゃあ次に仲間にするのはコックだな」

ルフィがウソツプとゾロの料理を盗み食いしながらそう言う

「てめえ、なにサボってんだコラア！」

私達のテーブルに、サンジが料理を運びながらルフィを注意する

「…どうだ？」

私達がテーブルに置かれた料理を口にすると、サンジが私達に問いかけてくる

「うん、美味しいわね」

「そうね、初めて食べるけど凄く美味しいわ」

ベルメールさんとノジコの言葉に、サンジはホツと一息つく

「本当に美味しい。でも、わたしはシユウが作ってくれるビーフシチューの方が好きだ

わ」

「ビーフシチュー？」

ナミの言葉に反応してサンジが私の方を見てくる

サンジに答えようとしたその時

バンツ！

店のドアが勢いよく開け放たれ、痩せ衰えた男が姿を見せる

足早に店内に入ってきたその男は、椅子に座ると両足をテーブルの上に投げ出したの
だった

第98話

「クリーク海賊団ですか：記憶にありませんね」

痩せ衰えた男はバラティエのコックに叩き出された

先程までテーブルの近くにいたサンジは、その男を見て厨房の方に歩いていったままだった

「《ダメし討ちのクリーク》って異名を持った男で懸賞金1700万ベリーだった筈よ」

そう言つてナミがクリークの情報を教えてくれる

「先程の男がそうなのですか？」

「違うわ。さっきの男は《鬼人のギン》という男で敵対した相手を情け容赦なく倒す

残虐非道な男つて聞いたわ」

「随分と詳しいですね、ナミ」

「東の海でアローンの次に懸賞金の高い一味だから相応にお宝を持つてると思つて

狙っていた事があるのよ。でも、5000人の部下を率いてるつて聞いて諦めたわ」

5000人とはかなりの大所帯だな

「そんな連中があんな状態になつてるだなんて：何があつたのかしら？」

そう言ったナミは首を傾げる

そんな仕事も可愛いと思つてしまう私は、既に尻に敷かれているのかもしれない

「はいはい、海賊の話はそこまでにして食事を楽しみなさい。早くしないと

私とノジコでワインを全部飲んじやうわよ？」

ベルメールさんの言葉に、私とナミが顔を向けると既に空になったワインボトルが数

本ある

「もう、2人だけで飲んでずるいわよ！」

「なによ、ナミとシユウがイチヤイチャしてるのが悪いんじゃない」

「あつはつはつは！」

ナミの言葉にノジコが反論しベルメールさんが笑う

そんな3人を見ながら、そつとワインを追加して私も食事を楽しむのだった



ゆつくりと食事を楽しんでいた所、不意に店内が騒がしくなる

バラティエの近くにポロポロの巨大ガレオン船が姿を見せたからだ

どうやらあれはクリーク海賊団の本船らしい

「…本当に何があったのかしら？」

ざわつく店内の様子が気になり、私達は店の外に出てきていた

少し離れた所では、坊主頭のコックがサンジに怒鳴り散らしている

話の内容を盗み聞くと、どうやらサンジが飢えていたクリーク海賊団に食料を提供したようだ

「略奪主義の海賊相手に施しをするなんて随分と甘いよね」

ナミが呆れたように言う

「別にいいじゃない、面白くなりそうだから」

ワインボトルを片手にベルメールさんがそう言うのと、ナミがため息を吐く

しばらくそのまま待っていると、巨大ガレオン船から雄叫びが聞こえてくる

「…案の定って所かしら」

雄叫びを聞いたナミが頭を抱える

巨大ガレオン船が動き出し、バラティエに更に近づく

そして、巨大ガレオン船から大男が姿を見せた

「《赤足のゼフ》！てめえが持つ日記を差し出せ！」

声をあげた大男がドン・クリーク本人のようだ

クリークの話によると、グランドラインに入って僅か7日で一味が壊滅してしまった

らしい

その理由として自らの知識不足をあげ、それを補う為にグランドラインで1年無傷で過ごしたバラティエのオーナーであるゼフの日記を求めているそうだ

クリークの要求をゼフが断るとバラティエが振動する

バラティエは魚の様な外観をしているのだが、そのヒレの部分が

海面へと姿を見せて足場となる

そして、足場となった場所に武装をしたバラティエのコック達がぞろぞろと出てきた
どうやら徹底抗戦するようだ

「壊滅したとはいえ、まだ100人はいるクリーク海賊団と海のコック達の戦いかあ…

うん、見応えがありそうだわ」

この戦いを酒の肴にする気満々のベルメールさんである

「一応聞いておきますが、避難をする気はありませんか？」

「あいつらが襲つてきてもシユウなら大丈夫でしょう？」

私はベルメールさんの言葉に頷く

「じゃあ、問題ないわね」

「ねえ、ベルメールさん。シユウに手伝わせた方がいいんじゃない？」

ノジコがベルメールさんに助太刀を提案する

「男達が自分の家を守ろうと意地を張っているんだから、

それを信じて見守るのがいい女ってものよ」

ベルメールさんの言葉に私達は顔を見合せる

「シユウ、諦めて観戦しましょう」

「…そうしましょうか」

ナミの言葉に返事をした私はため息を一つ吐いてから、目を戦場となる足場へと向け
る

武装をしたコック達が待ち受ける足場に、クリーク海賊団の者達が次々に下りていく
双方がしばらく睨み合うと、一つ強い風が吹く

「行けえ！」

クリークの号令で海賊達がコック達に襲い掛かる

だが、日常的に荒くれ者達との喧嘩をしているコック達は戦い慣れしており、

クリーク海賊団が仕掛けた攻撃の第一波をあつさりと押し返す

「海のコックを舐めるな！」

坊主頭のコックの一喝が響き渡ると、バラティエのコック達が胸を張る

押し返され海に叩き落とされたクリーク海賊団の者達は、驚愕に目を見張っていた

「へえ、中々やるじゃない」

飲む酒をワインからビールに変更したベルメールさんがそう称賛する

「シラカワ、俺にも一杯くれねえか？」

私がワームホールから出した中樽から、ビールを汲んで飲みながら観戦している我が家の

女性陣を見たゾロが酒を集りにきた

ゾロの要求に応えようとしたその時、私は覚えのある気配を見聞色で感じ取る

その気配の持ち主は、一振りで巨大ガレオン船を真つ二つに斬り捨てたのだった

第99話

「な、何が起きたの？」

ナミが真つ二つになり沈んでいくクリーク海賊団の本船を見ながら声をあげる
「斬ったのか、あの巨大な船を……」

眩くように言葉を溢すゾロの言葉に私は頷く

「ええ、その通りですね」

「その通りって……シユウは驚かないの!？」

「あの程度でしたらグランドラインでは日常茶飯事ですよ」

私の言葉にナミとゾロは目を見開く

「確かにグランドラインの住人なら難しくありませんけど、一振りですつ二つに
出来る奴なんてそう多くはないでしょう？」

「ええ、ですがあの人なら可能ですね」

ベルメールさんの言葉に私は答える

すると、ゾロが問い質すように私に聞いてきた

「……誰だ？」

「《鷹の目のミホーク》：私の知る限り純粋な剣士として最強の男です」

ガレオン船が沈む際に起きた水飛沫で覆われた視界が晴れていくと、小さな船が姿を見せる

その船に乗る男の背負う大刀が十字架のように目に映り、その影は墓を思い起こさせる

「奴だ！ 奴が追ってきたぞ——！」

「鷹の目だ——！！」

ミホークの姿を目にしたクリーク海賊団の者達が、恐怖の叫び声をあげる

沈み行くガレオン船からバラティエの足場へと飛び移ったクリークが、

仲間達を落ち着かせるように前に進み出た

「落ち着け！ 今のは悪魔の実の力だ！」

クリークの言葉が辺りに響き渡る

「…：そうなの？」

「いいえ、純粋な剣技ですよ」

ナミの疑問に答えるとゾロの肩が震える

だが、そのゾロの目は戦意に満ちたものだった

「鷹の目！ てめえは何が目的で俺達を狙った?!」

クリークの言葉にミホークが億劫そうに顔をあげる

「暇潰し」

さも当たり前のように言ったミホークの言葉を耳にした者達は言葉を失う

言葉の意味を咀嚼するように少しの間静寂が続くが、クリーク海賊団の者達によって破られた

「「ふざけるな——!!」」

ミホークの言葉とクリーク海賊団の憤慨の言葉に、私は思わず笑ってしまう

「ククク…相変わらずですね」

私に気づいたのかミホークが視線をこちらに向ける

私はワームホールを使い双方に声が届くようにした

「久しいなシラカワ」

「ええ、久しぶりですねミホークさん」

私達の会話にナミを始めとした周囲の人達が驚く

「東の海まで出向くとは珍しいですね」

「先程も言ったが暇潰しだ。でかい船が数多く揃っていたのでな、斬り応えがあると
思った」

暇潰しで壊滅させられらクリーク海賊団は、ご愁傷様といった所ですね

「しかし、丁度いい所で会った。酒を融通してくれ」

「大樽で渡した筈ですがもう飲み尽くしたのですか？」

「代金はその者達が落としていった宝を俺の船に積んである。適当に持っていけ」
暇潰しで手に入れた泡銭とはいえ、随分と豪気な事だ

「ナミ、そう言う事ですので宝の選定に付き合ってくださいますか？」

「あら、シユウは目利き出来ないの？」

「ええ、残念ながら」

ワームホール内に賞金稼ぎをしていた時に手に入れたお宝がかなりあるのだが、
価値がわからない上に賞金だけで事足りていたので死蔵したままである

ナミを伴いミホークの近くに転移しようとしたその時、ゾロが勢いよく飛び出して行く

そして、ゾロがヒレの足場へと辿り着くと、先程まで争っていたコックと

海賊達が道を譲るように別れていった

「お前が鷹の目か？」

「…そうだ、弱き者よ」

酒の受け取りを邪魔されたからなのか、ミホークがやや不機嫌にゾロの言葉に応える
その後2人が2、3言葉を交わすとゾロは左腕に巻いていた手拭いを頭に巻き直す

そして、ゾロが3本の刀を使う独特の構えをとると、ヒレの足場に跳び移ったミホークが首飾りにしていたナイフよりも小さい短刀を手にした。そんなミホークを目にしたゾロはコメカミに青筋を浮かべ、舐めるなどばかりに斬り掛かる。

ゾロが刀を交差して豪快に斬り掛かって行くが、ミホークは短刀を片手で突き出してあつさりを受け止めてしまう。

「…嘘でしょう?」

その光景を見たナミがそう呟く。

だが、幾度もミホークと手合わせをしてその腕前を知る私にしてみれば、

この光景は当然の事だ。

「シユウ、鷹の目と知り合いたいんだけど、どういった関係かしら?」

「賞金稼ぎ等をして修行をしていた事は知っていますよね?」

「そうね」

「その修行の一環として幾度も手合わせをしていただいた間柄ですね」

私とベルメールさんの会話を聞いていた周囲が、驚きの表情を浮かべる。

眼下では焦燥の表情でゾロがミホークに打ち掛かって行くが、軽くあしらわれている。

「我が息子ながらあんな男と手合わせをしてきてよく無事だったわね」

「無事？数えるのが嫌になるほどボロボロにされましたよ」

手合わせの度に死なない程度にボロボロにされた事は記憶に新しい

「…アーロン達を一蹴したのも納得ね」

ノジコが呆れたように言葉を溢す

ミホークとゾロの戦いに動きが出る

ミホークが短刀をゾロの左胸に突き立てたのだ

「…勝負ありね」

ナミがそう呟くが、短刀を突き立てられたゾロはその場を退こうとしない

ゾロを兄貴と慕うヨサクとジョニーが、その光景を見て飛び出そうとするのをルフィが抑え込む

だが、抑え込んだルフィも歯を食い縛って飛び出さぬように耐えているようだ

左胸を突かれて退かぬゾロにミホークが問い掛けると、ゾロの答えが気に入ったのかその場を飛び退き背中黒刀に手を掛ける

ゾロとミホークが改めて対峙すると場は静寂に包まれた

そして、ミホークが踏み込む姿勢を見せると、ゾロが両手の刀をプロペラのように回転させる

「三・千・世界！」

ゾロとミホークが交差する

だが、ゾロの渾身の奥義はミホークの黒刀による一撃で打ち碎かれた

ミホークの一撃により三本の内の両手に持っていた二本の刀を失ったゾロは、口に銜えていた

刀を納刀して止めの一撃を加えんと迫るミホークに振り向く

そして、ミホークを見据えて不敵に笑うとミホークが称賛の言葉を口にした

「…見事！」

その称賛の一言と共に、ミホークが黒刀による一撃でゾロを斬り捨てる

ミホークの一撃をその身に受けたゾロは、海にゆっくりと落ちていったのだった

第100話

「うおおおおおおおー」

ゾロの戦いを見届けたルフィが、我慢の限界を超えたのかミホークに飛び掛かって行く

だが、ルフィの奇襲はあっさりミホークに避けられてしまう

二度ルフィが飛び掛かろうとするが、ミホークが指で海を指し示すと、

ヨサクとジョニーに抱えられて意識のあるゾロが海面へと浮上してきた

「ゾロー」

ゾロが生きていた事を知ったルフィの戦意が薄れる

それを確認したミホークが私に視線を送ってきたので、ワームホールを開き

双方の声が届くようにした

「聞こえるか、シラカワ」

「ええ」

「奴の治療をしろ。ここで死なせるには惜しい」

私はため息を1つ吐くと、ナミに目線で合図して2人でゾロの近くに転移する

「博士！ゾロの兄貴をお願いしやすー！」

ジョニーの言葉に頷き、ワームホールから道具を取り出して治療を始める
既に慣れた作業なので5分程で治療を終える

「後は清潔な布を当てて包帯を巻いておいてください」

「へい！了解しやした！」

ミホークの剣を向けられては堪らないと思っっているのか、クリーク海賊団の者達が大
人しい

そんな中をナミと一緒に歩いてミホークに近づいて行く

酒樽を渡すためだ

「ナミ、宝の選定をお願いします」

「わかったわ」

私が酒樽を渡し終わると、ナミは臆する事なくミホークの横を通り過ぎてお宝の物色
を始める

物色している最中の笑顔が素晴らしい

「シラカワ、ついでにーっ頼みがある」

私はミホークの言葉を受けて顔を向ける

「俺と手合わせをしろ、真剣でな」

「…随分と彼を気に入ったようですね」

照れ隠しなのかミホークが鼻を一つ鳴らす

さて…手合わせの申し出を受けるのは構わないが、どこまでやれる事やら…

「シユウ、これを収納しておいて」

ナミが満面の笑顔で両手一杯に宝を持ってきた

「わかりました。それと、ミホークさんと手合わせをするので

ベルメールさん達の所まで戻って行ってください」

「…大丈夫なの？」

ナミが心配そうに問い掛けてくる

正直な所、勝つ自信は無い

だが、恋人の前で格好を付けたいという思いがある

「ええ、大丈夫ですよ」

そう言いながら私はナミの頭を撫でる

「うん、信じるわ」

ナミが撫でていた手を掴み、私を引き寄せる

そして、私の頬に口付けをすると、ナミは悪戯が成功した子供のよ様な笑顔を見せた

「いい女が3人も応援するんだから負けたら許さないからね！」

私はナミがベルメールさん達の所に走って行くのを呆然と見送る

「やれやれ、負けられなくなりましたね」

ため息を一つ吐きワームホールから剣を取り出す

準備を終えた私を見たミホークが声をあげた

「ロロノア！意識あらば刮目せよ！」

ミホークの声が周囲に響き渡る

「今より剣士の頂！その一端を見せる！それを糧としてこの俺を超えてみせよ！」

ミホークの声を聞いたゾロがフラフラと体を起こすと、ヨサクとジヨニーに支えらるる

背中の黒刀を手にとったミホークが私と対峙する

私は息を一つ吐いて力を抜く

武装色で身体強化をした私は、剃を使ってミホークへと仕掛けていった



「…すげー」

ベルメールさん達の所に戻ったわたしは、シユウの戦いを見守っている

こうして改めてシユウの戦いを見ると、グランドラインの住人の凄さがよくわかる
いえ、凄すぎてその強さを把握出来ないわ

「ベルメールさん…2人の戦いはどうなの？」

シユウの戦いだというのに、ベルメールさんは相変わらずビール片手に観戦をしてい
るわ

「正直な所、凄すぎてわからないわね」

「ベルメールさんも海兵時代はグランドラインにいたんでしよう？」

わたしの言葉に、ベルメールさんはビールを一口飲んでから応える

「確かにグランドラインにいたけれど、グランドラインの住人の強さもピンキリだから」

そう言ってベルメールさんは苦笑いしている

「ナミ、よく見ておきなさい。これからシユウと一緒に海を巡るんでしよう？」

わたしはベルメールさんの言葉に頷く

「恋人に甘えるのは構わないけど、足手まといになるのはいい女とは言えないわ」

わたしはシユウと一緒に夢を追いたい

シユウの隣を歩いて行きたい

「だからよく見て学びなさい。ああいった世界があるという事をね」

バラティエの足場では、幾度もシユウが鷹の目と剣を打ち合っている

「ナミ、あんたならシユウと歩いて行けるって信じてるわ。私の養娘だからね」
わたしは何度もベルメールさんの言葉に頷く

「まあ少しの間はシユウに引っ張ってもらおう必要があると思うけど、シユウにはそのぐらいの甲斐性はあるだろうからそこは素直に甘えておきなさいな」

ベルメールさんの言葉に昔を思い出す

まだ小さかった頃、シユウと手を繋いで歩いた時の事を

あの時のシユウは、わたしの歩く速度に合わせてくれた

これからもシユウは、わたしに合わせてくれるのかもしれない

そんなシユウの優しさが嬉しいけれど、悔しくもある

いい女になろう、強かでない女に

シユウの恋人だと胸を張って歩けるように

今はまだ難しいけれど、必ずなってみせるわ

驚愕の力を見せたシユウと鷹の目の手合わせも、遂に終わりの時を迎える

2人はお互いの肩口に剣を置いて動きを止めていた

わたしの恋人は、世界最強の剣士との手合わせで引き分けを勝ち取ったのだった

第101話

「もう、二度と負けねえ！鷹の目にも！シラカワにも！」

ゾロが刀を天に突き上げ号泣しながら誓っている

圧倒的な力量差を目の当たりにしても心折れないその信念は称賛ものだ

だが、何故に私にも負けないと言うのだろうか？

私は剣を使うが純粋な剣士ではありませんよ

「シラカワ、良き手合わせだった」

黒刀を背中に背負ったミホークが私に話し掛けてくる

今回はなんとか引き分ける事が出来たがこれが命のやり取りとなる決闘だったら

この結果にはならなかっただろう

「まさか既に壁を超えているとは思わなかったがな」

ニヤリと笑いながらミホークがそう言ってくるが正直な所自覚はない

「貴様の父親もそうだった……1つ海を超える度に大きくなっていった」

私の父さんも？

「シラカワ、貴様が何を成したのかは知らぬがこちら側に來た事を自覚しろ」

成した：アーロンを倒した事でしようか？

確かにアーロンを倒したあの時、目の前が晴れたような感覚がありましたか：

「奴に良い土産話が出来た。シラカワやあの麦わらの小僧の事を肴に酒を飲むとしよう」

どうやらミホークは父さんに酒を集りにいく気らしい

「さらばだシラカワ。機会があればまた手合わせを頼もう」

そう言つてミホークは踵を返す

「ロロノア！高みにて貴様を待つ！」

ミホークはそう言い残して己の船に乗り込む

そして、私が渡したワインを楽しみながらミホークは海に向こうへと去つて行つた

ミホークが去るのを見届けた私はナミ達の所へと転移をして戻る

戻つた私を待つていたのはクリーク海賊団を含めた注目の視線だつた

「この場にいる全員があんたの動向が気になるのよ」

首を傾げていた私にベルメールさんがそう言つてくる

「東の海では明らかに異質とも言える力を持ったあんたがここにいるんだから

海賊達が二の足を踏んでも仕方ないでしょう？」

どうやらこの場を取り巻く微妙な空気は私とミホークが色々とやり過ぎた結果のよ

うだ

私が一人納得をしているとナミが私のコートの裾をそつと掴んでくる

「いかがでしたか、ナミ?」

「…格好良かったわよ、シユウ」

ナミは少しの間俯いていたがすぐに笑顔を見せてくれた

「シユウ、ゾロの治療をしてくれてありがとうな」

ナミの笑顔に見惚れているとルフィが近くに来て礼を言ってきた

「構いませんよ、ルフィ」

「そうか、じゃあ仲間になれよ」

「話の脈絡が繋がってませんよ、ルフィ」

相変わらず勧誘をしてくるルフィに苦笑いをするしかない

「そのためえ! ためえは俺達と敵対すんのか?!」

そんな声に振り向くとクリークの姿があつた

「うちの客に手を出すな!」

私が答えようとしたその時、オーナーのゼフが代わりに声を上げていた

「今回の一件はうちのボケナスが発端だ。悪いが客人は手を出さねえでくれ」

「わかりました。こちらに手を出されない限り静観しましょう」

私がゼフの言葉に返事をするとかクリークが笑い声を上げる

「てめえでてめえの首を締めるとはな！」

そう言つて笑うクリークに続いて海賊達も笑う

「そう言う訳だ！奴は気にしなくていい！行けえ！」

クリークの号令でバラティエを巡る戦いが再開される

戦いが再開されるとルフィはゾロ達の所へと向かった

海賊狩りとして東の海では名が売れているゾロを討ち取り

名を上げようとする輩がいるからだ

ゾロを狙い押し寄せる海賊達はルフィに次々と海に叩き落とされている

ウソツプもスリングショットを用いて活躍を見せている

シロツプ村で別れてそれほど時が経っていないが海での経験が彼を成長させたよう

だ

目をコック達の方へと移すとしばらくの間はバラティエのコック達が優勢だったが、

パールと名乗る全身に盾を纏った大男が姿を見せると戦況は逆転した

パールが両手に持った盾でコック達を薙ぎ払って行く

そんな状況を見たサンジが動き出した

「フ……クソジジイは大人しくしてろよ」

「ふん！ボケナスが」

パールが暴れているヒレの足場へとサンジが跳び下りる

煙草を吹かし、ズボンのポケットに両手を入れたままサンジがパールを見据える

「鉄壁！故に無敵！」

パールが両手の盾でサンジに殴り掛かるがサンジは余裕を持って避ける

そして、パールの盾に覆われていない顔を蹴り抜いた

「鉄壁がなんだって？」

紫煙を吐き出しながらサンジが言う。パールが二度サンジに殴り掛かる

だが、先程の光景の繰り返しのようにサンジはパールの顔を蹴り抜く

体が大きい故かパールは打たれ強いようで倒れないが鼻血を流した事で慌て出す

「危険！危険！」

パールは両手に持った盾を打ち合わせるとそれで起こった火花で盾に火をつけた

そして、パールは隠し持っていた鉄球にも火をつけると辺りにばらまき出した

「あいつらバラテイエを奪うんじゃないの？」

「たまにいるのよねえ……後先考えずに本能で動いちゃう奴が」

ナミの疑問にベルメールさんが答えを返す

パールを止めようとサンジが蹴り飛ばすがそれが逆効果となりパールは更に暴れだ

す

暴れるパールが投げた火のついた鉄球がバラティエの店内に向かつて行く

だが、オーナーのゼフが義足の右足を一振りするとその風圧で鉄球の火を吹き飛ばした

「片足でもこの程度は造作もねえ」

そんなゼフの様子を見たサンジは頭を一つ掻いてからパールとの戦いを再開する

そして、サンジがパールを圧倒して行くのだが俺はこちらに近づく気配を見聞色で感じとる

その気配に目を向けるとクリーク海賊団の一人であるギンがゼフに奇襲を仕掛けて

ゼフの義足を折ることに成功する

義足を失ったゼフを人質にとったギンはサンジに抵抗を止めることを要求した

そして、ゼフを人質にとられたサンジはパールにボロボロにされていくのだった

第102話

「ギン……さん……？」

「寝てろパール、後は俺がやる」

ゼフを人質にとり、何度もサンジに降伏を促していたギンだが折れないサンジの姿を見て

せめて恩人は自らの手で倒すと仲間であるパールをトンファアーの様な

武器を使い一撃で気絶させた

パールによつて満身創痍にされたサンジだが気丈にも立ち上がり、上着の胸ポケットから

煙草を取り出して火をつける

「サンジさん……！」

サンジが紫煙を一つ吐き出したのを機にギンがサンジへと仕掛ける

既に満身創痍のサンジは動きに精細を欠き、ギンに圧倒されていく

そして、遂にサンジはヒレの足場へと叩き伏せられる

サンジへと止めを刺すべくギンがサンジに馬乗りする

だが、トンファアの様な武器を振り上げた態勢でギンの動きが止まった
「俺には出来ません！ドン・クリーク！」

ギンが号泣しながら独白していく

略奪主義の海賊として活動し、鬼人の異名を得た男が初めて受けた優しさ
サンジが振る舞った一皿がギンの心に届いていたのだ

だが、クリークはそんなギンの姿に額に青筋を浮かべている

「ギン…マスクを捨てろ…！」

クリークは話しながら身に付けていたマントの中から武器を取り出す

大型の銃器の様な武器を見たクリーク海賊団の者達が目を見開き大声を上げた

「「毒ガスだ——！」」

そう叫んだクリーク海賊団の者達は次々と海に飛び込んだりマスクを身に付けたり
する

私は家族を抱えて空へと飛びバラティエを離れる

「MH5！」

その直後、クリークが放った毒ガス弾から毒ガスがヒレの足場を中心に散布された

「さすがは《ダメし討ちのクリーク》なんて異名を付けられるだけあってえげつないわ
ね」

右腕で抱えているベルメールさんがそう言葉を溢す

「シユウとナミの知り合いの海賊は大丈夫かしら？」

「見聞色で感じる気配では大丈夫のようですね」

私は左腕で抱えているノジコにそう答える

「シユウ、これってクリークはわたし達に手を出した事になるのかしら？」

正面から私の首に手を回し抱き着く様な態勢のナミがそう話す

「よく見ると、さっきまで私達がいた所までは毒ガスは届いてない様だからセーフかしら」

ベルメールさんの言葉通りにヒレの足場にはまだ毒ガスが蔓延しているが

ゼフがいる場所は無事のようにだ

「シユウを敵に回す程クリークはバカじゃなかったって事ね」

ナミがそう話すとベルメールさんとノジコが意味深な笑みを浮かべる

「それにしても随分と情熱的な態勢ね、ナミ」

「本当、見せつけてくれちゃって♪」

ベルメールさんとノジコの言葉にナミが慌てる

「し、仕方ないじゃない！」

「え、背中側でもよかったと思うんだけど？」

ナミの反論にノジコが畳み掛ける様に言葉が続ける

こんな状況でもいつも通りの我が家の女性達が頼もしい限りだ

「毒ガスが晴れてきたので戻りますよ。喋っていると舌を噛むので静かにしてください」

私の言葉に皆静かになるがナミは顔を赤くしながらノジコを睨んでいる

可愛い

毒ガスが晴れてヒレの足場の状況が明らかになるとギンがマスクを

サンジに押しつけている姿が現れる

そして、毒ガスを吸ったのかギンが吐血して倒れた

「おい、ギン！しっかりしろ！」

倒れたギンにサンジが声を掛ける

「お前、マスクありがとな！それと大丈夫か？」

倒れたギンの元にルフィも駆けつける

能力者であるルフィは海に潜って毒ガスを回避する事が出来ないため

マスクが必要だったのだがルフィの分をギンが提供したようだ

「ボケナス共、そいつを空気が新鮮な所に移動させろ。それと、マスクを当てておけ
少しだろうが解毒作用があるかもしれねえからな」

ゼフの指示を聞いたサンジとルフィが動き出す

その光景を見ていたクリークの高笑いが響き渡った

「おっさん…あいつぶっ飛ばしたら借金チャラにしてくれねえか？」

ギンをゼフの近くまで運んでマスクを当てる等の処置をしていたルフィがゼフに申し出る

「…好きにしろ」

ゼフの言葉を聞いたルフィは麦わら帽子を深く被るとニツと笑う

だが、直ぐに顔を引き締めるとヒレの足場へと跳び下りる

「お前、仲間をなんだと思ってるんだ!!」

ルフィの一喝が響くとクリークが不敵に笑って答える

「俺の駒だ」

クリークの言葉を受けたルフィは『ゴムゴムの銃（ピストル）』をクリークの腹に叩き

込む

だが、ルフィの一撃を受けたクリークは何事も無かったように仁王立ちをしている

そして、クリークは高笑いすると上着を脱いで纏っていた鎧を頭にした

ルフィをゴムの能力者と知ったクリークは銃器に似た武器を一つ取り出す

クリークが引き金を引くと武器から杭が発射された

また毒ガスかと一瞬思ったのかルフィは反応が遅れて太股に杭を受けてしまう
後手に回ったルフィに畳み掛ける様にクリークは次々と杭を発射していく

ルフィは転がりながら杭を避けていく

そして、太股に刺さった杭を抜いたルフィはクリークへと一直線に駆けていく

「ゴムゴムのお——！」

その身に杭を受けても怯まずにルフィは腕を伸ばしながらクリークへと走り寄る

ルフィが近付くとクリークは棘を満遍なく帯びたマントを被るようにして身を守る

「これでめえは殴れねえだろ！」

そう言い放ちクリークが自信満々に笑う

「銃弾（ブレット）!!」

だが、ルフィは棘の上からクリークを全力で殴り飛ばしたのだった

第103話

棘のマントの上からルフィに殴り飛ばされたクリークだったが流石に5000人の部下を

率いていた一味の頭だけあつて直ぐに立ち上がる

そして、強い衝撃を与えると爆発を起こす『大戦槍』を手にしたクリークは身に付けている

総重量1トンを超える武装とそれを扱う自らの力を『武力』と称した

それらの武力を用いてクリークが戦いを優位に進めて行くが死を恐れぬルフィの信念に少しづつ押され出していく

「ゴムゴムのお——！」

ヒレの足場に座礁していたクリーク海賊団本船のメインマストをルフィが駆け上がって行く

狭い足場を踏み外せば能力者には致命的となる海へ落ちるといふ状況を作り出しルフィへ重圧を掛けようとクリークが誘い込んだのだ

この様な状況を作り出したクリークの戦いの巧さは海の男として

確かな経験を積んできたからだろう

駆け寄ってくるルフィにクリークが大戦槍を振り下ろし爆発が起ころ

だが、ルフィは怯まずに踏み込んでいく

そして：

「バズーカ！」

ルフィのゴムの収縮を利用した諸手での掌底突きがクリークの腹に叩き込まれる
ルフィの一撃に寄りメインマストから弾き出されて海に落ちていくクリークだが
鎧の恩恵に依りダメージが無いからか高笑いをしている

「ゴムゴムのお——！」

そんなクリークを意に介さずにルフィは二度諸手を伸ばして飛び上がる

後先を考えないルフィの行動にクリークが目を見開き固まる

「バズーカ！」

二度叩き込まれたルフィの諸手での掌底突きはクリーク自慢のウーツ鋼の鎧を破壊
して見せた

だが：

「てめえも一緒に落ちやがれ、カナツチ野郎！」

クリークはルフィを海に引きずり込むべく網を投げてルフィを捕らえる

捕らえられたルフィだが網の隙間から手足を出すと全身を捻り上げて両足でクリークの顔を挟み込む

「たまにいますのさ、一度敵と決めたら死ぬまで戦っちゃおうバカな奴が」

どんな状況でも怯まないルフィに驚愕しているサンジにゼフが教える

「時には100の兵器よりも腹に据えた1つの槍が勝ることがある。それが信念だ！」
信念…と、サンジが反芻するように呟きルフィの戦いを見届けて行く

「ゴムゴムのお——！」

両足でクリークの顔を挟み込んだルフィが全身を使ってクリークの巨体を持ち上げる

捻られたゴムの反発作用によって横回転を加えられながら

クリークが空高く持ち上げられていく

そして…

「大槌!!」

勢い良くヒレの足場に頭から叩きつけられたクリークは意識を失う

だが、この一撃により戦いの決着がつき緊張が解けたルフィも全ての力を

出しきっていたために意識を失ってしまう

ゆつくりと目を閉じたルフィはそのまま海へと落ちていったのだった

◆
「世話になったな、サンジさん」

海に落ちたルフィをサンジが助け出した後、賞金首ですら無いルーキーに敗れたクリークが

自暴自棄になつて暴れだすがギンが腹に一撃入れてクリークを抑え込んだ

そして、戦いに敗れたクリーク海賊団をまとめ上げたギンが立ち去る前に

サンジに挨拶をしている所だ

「もう一度、俺が憧れた男であるドン・クリークとやり直してみろ…命があつたらな」

そう言ったギンは口から血を吐き出す

「なあ博士。あんた、あいつの毒を治す薬とか持つてないのかよお？」

ウソツプの言葉に答えるように私はワームホールから錠剤を1つ取り出す

賞金稼ぎ時代に毒を使う賞金首と戦う機会があつたので

休養の時に既存の毒の中和剤を少しずつ製薬していたのだ

私が錠剤を取り出すのを見たサンジが私の手から錠剤を

引つたくるようにして取るとギンに錠剤を投げ渡した

「サンジさん……」

「いいから、とつとと飲んじまえ」

サンジに促されギンが毒の中和剤を飲み込む

「あくあ、薬だつて無料じゃないのに……」

「ククク、戦いの見物料としておきましようか」

呆れるように言うナミを私が宥めているとクリークを担いだギンが踵を返す

「達者でな、サンジさん」

そう言ったギンはクリーク海賊団が立ち去る為にゼフが提供した小船に乗り込む

未だに気絶しているクリークに代わりギンが指揮をして船を出航させて

クリーク海賊団は海の向こうに去って行くのだった



「なあ、俺の仲間になれよ」

クリークとの戦いを終えてボロボロになったルフィを代金を持つと言ったゼフの依頼で

治療するとルフィが目を覚ました

そして、戦いを見届けた私達はココヤシ村に帰ろうとしたのだが

こうしてルフィに勧誘を受けている所である

しかし、このルフィの諦めないしつこさというか信念を見てみると彼は将来大物になるのではと思えてくるから不思議だ

「い・や・よー！」

ハッキリと断るナミにルフィが口を尖らせながらブーブーと言っている

「ルフィ、近々ココヤシ村を中心として宴をするので良かったら立ち寄ってください」

「おう！肉を一杯用意しておいてくれ！怪我を治すには肉が一番だからな！」

確かに筋肉の栄養としてたんぱく質が必要だがルフィはそれを知っているのか？

…多分、直感とか本能だろうな

「わかりました。では、また会いましょう」

その一言を皮切りに私とナミはベルメールさん達と合流する

サンジが涙を流しながらベルメールさんとノジコとの別れを惜しんでいる

手を振ってくるバラティエのコック達に手を振り返した私達は

ワームホールによる転移でココヤシ村に帰還したのだった

第104話

バラティエでの一件から明けて翌日、ココヤシ村に商人達が訪れた

商魂逞しい彼等はどこで聞いたのかココヤシ村を含めた村々が解放された事を知つて

ここぞとばかりに食料や酒、他にもアローンの支配下では嗜好品となっていた物品を大量に持ち込んだのだった

最早お祭り気分全開の村人達は勢い良く散財していく

中には商人から買い付けたその場で酒を飲み始める強者までいる始末だ

「おやおや、随分と気が早い人達ですね」

「それだけ解放の時を待ちわびていたのよ」

ベルメールさんの言葉に私のワガママで長い時を待たせた事に罪悪感が湧いてくる
「…待たせてしまつてすいません」

「シユウが謝る事じゃないわよ」

ナミがそう言ってくれるが手段を選ばなければもつと早く解放する事が出来たのだ
「シユウ、村の人達は村の関係者であるあんたが解放してくれた事を感謝しているし

その事を誇りに思っているわ。だから、胸を張りなさい」

ベルメールさんの言葉を受けて私は顔を上げる

「よし！それじゃ私達も買い出しをして明日の宴の準備をするわよ！間違っても料理や

酒が足りないなんて事にならないようにしっかりとね！」

ベルメールさんの言葉が合図となり私達だけでなく村の人達も動き出す

丸一日かけての準備となったが皆笑顔で動き続けたのだった



明けて翌日、いよいよ宴当日となり開始のイベントとしてアーロンパークの打ち壊しをするのだが、その時にココヤシ村の沖合いに海賊船が現れた事で村の人達の間には緊張が走ったのだった

だが、その海賊船の特徴的な船首で沖合に来たのが誰なのかわかった事で宴は再開される

そう、沖合いに来た海賊船は私やナミの知り合いであるルフィ達のものだったのだ

「よう、シュウ。肉食いに来たぞー！」

そう言うって気軽に姿を見せたルフィ達だがそこには新顔が含まれていた

「またお会い出来ましたね、お姉様方〜♪」

なんと、バラティエのコックであったサンジがルフィ達の仲間になっていたのだ。彼の料理の腕前、知識は一流であるので栄養面での体調不良はルフィ達と無縁となるだろう。

もつとも、食欲旺盛なルフィが食料を食いつくさなければの話だが…

閑話休題

ルフィ達を交えて宴が始められる

まずはアロンパークの入口である門や塀に縄を掛けて村人達で引き倒していく。門が、塀の一部が倒れる度に村人達から歓声が上がっていく。

そして、門や塀を倒し終えていよいよアロンパークの建物を打ち壊していく。これは建物の倒壊を考えて女性、子供は不参加だ。

日々の漁や畑仕事で鍛えた肉体美を魅せつけるように上半身をはだけた男衆がアロンパークの要所に打ち込まれている楔に順番に木槌を振るっていく。そんな男衆に媚取りを考えている村の女衆が熱い視線を送っている。

既にお相手がいる者は誰が建物を倒壊させるのか賭けをしている状態だ。

「ししし、面白そーだなー！」

そうやってルフィ達、麦わら海賊団も飛び入りで参加する事になった。

ルフィとゾロが豪快に木槌を振るいサンジが楔に蹴りを入れる事で建物に罅が入っていく

大見得を切ったが少しへっぴり腰で木槌を振るったウソップの姿は笑いを誘うものだった

そして、木槌はナミの元を持ってこられる

「え？わたしも？」

「ナミは何年もココヤシ村を始めとした村々の為に頑張ってきたんだ。誰も文句は言わんざ」

ゲンさんが差し出す木槌をナミが戸惑いながら受け取り俺を見てくる

俺が1つ頷いて見せるとナミは笑顔になり木槌を肩に担いで建物に向かって歩き出す

そして、武装色で身体強化をしたナミが木槌を楔に向けて振るうと

ゴンツ！

見事な音が周囲に響き渡り、ゾロやサンジと変わらぬ大ききの罅が建物に入ったのだった

「…マジかよ」

目を見開いたウソップがそう言葉を溢すが村の人達はナミに歓声を贈る

木槌を振るってスッキリした顔のナミが今度は俺に木槌を差し出してくる
その様子を見た村の人達は囁し立てるように歓声を上げる

「シユウ、最後の一撃をお願いね♪」

「…ええ、任せてください」

ナミの言葉に頷くが私は木槌を受け取らずに建物に向かって歩いていく

そんな私を見た村の人達がザワつくが私がワームホールから剣を取り出すと
ザワつきがどよめきとなりやがて固唾を飲んで見守り始める

ボツ！

風を斬り裂く音を出して剣を振り抜くと時が止まったように静寂に包まれる

そして…

ズズツ…！

袈裟懸けに振られた一撃をなぞるように建物が滑るとそれを機に

罅が広がり建物は崩れだして行く

埃が辺りの視界を埋めて行きながら建物は大きな音と共に崩れ続ける

やがて埃が晴れるとそこには完全に倒壊したアーロンパークが姿を見せる

それを見た人々が今日一番の歓声を上げて解放の喜びを表現していくのだった

第105話

アールンパークの打ち壊しを終えたので今度は飲めや歌えやの宴に突入した村の人はアールンパークを派手に壊した私の事を話のネタにしたり

男顔負けの一撃を見せたナミの事を話したりしている

海賊に対して良くない感情を持っていた人達もルフイの裏表の無い人柄に心を開き
麦わら海賊団の者達を受け入れて宴を楽しんでいる

そして、宴に飛び入りで参加したルフイ達も各々宴を楽しんでいるようだ

ルフイは宴に用意された料理を全種類制覇する勢いで色んな所に

顔を出して食事を楽しんでいる

ゾロは村の男衆と酒の飲み比べをしているようだ

ウソツプはシロツプ村やバラティエでの出来事を色々と脚色して自身の英雄譚として子供達に話した事でキャプテン・ウソツプと呼ばれている

そして、麦わら海賊団の新顔であるサンジはというと：

「へえ、こいつがビーフシチューか」

バラティエでナミが言った一言を覚えていて自身が知らない料理である

ビーフシチューを試食しに私の所に来たのだった

「ええ、幼少時に母親に教えていただいたものです」

「そうか…まあ、何はともあれ食ってみるか」

匙を手にとったサンジはビーフシチューを口に運ぶ

その瞬間、匙を口に銜えたままサンジの動きが止まった

「…うめえ」

コックであるサンジの称賛の一言が素直に嬉しい

サンジは添えてあったパンをビーフシチューにつけてから食べる

「パンとの相性もいい…」

ワインを一口飲むとサンジは味を確かめる様に目を閉じる

ワインの余韻を楽しんだサンジは一心不乱にビーフシチューを味わい続ける

皿に残ったビーフシチューをパンで拭い取るようにして完食すると

サンジは一つ大きな息を吐いた

「シラカワ、こいつのレシピを教えてください」

椅子に座ったままではあるがサンジが私に頭を下げてくる

「こいつを味わいながらもずっと考え続けてた…だけど、こいつの要だと思うスープの

レシピがどうしてもわからねえ…」

コンソメスープに独力で辿り着けというのも厳しいでしょう…

それに、コックとしての誇りよりも向上心を優先させたサンジに好感が持てます
「貴方が言った要となるもの…コンソメスープのレシピは教えましょう」

「…コンソメスープ？」

私はサンジの眩きに頷いてから話を続ける

「そのスープは色々と応用が効くものですので工夫をしてみてください。」

それが貴方のコックとしての腕前を成長させる糧になる筈です」

私の言葉にサンジが不敵に笑う

「上等だ！」

席を立ち上がったサンジが手を差し出してくるので握手を交わす

「さて、話がついた所でビーフシチューのお代わりをくれ」

「ククク、構いませんが他の料理を口にしないでよろしいのですか？」

「ルフィにこいつがバレたら鍋そのものを独占されそうだからな」

その様子がありありと想像出来た私はワームホールに閉まっておいた鍋から

ビーフシチューのお代わりをサンジに差し出しながら笑ってしまう

食事の合間にレシピを教えつつ、スープの談義でサンジと盛り上がるのだった



お代わりを堪能したサンジが他の料理や女性を求めて動き出した頃

男衆と飲み比べをしていたゾロが私の所にやってきたのだった

「シラカワ、ちよつといいか？」

「ええ、構いませんよ」

私の近くに座ったゾロが手にしていたジョッキを煽ってから口を開く

「明日にでも俺と手合わせをしてくれ」

ゾロの言葉に私はワインを一口飲んでから答える

「ミホークさんとの戦いの傷が癒えてないと思いますが」

「これぐらいなんともねえ」

綺麗に斬られていたから傷の回復は早いだろうがそれでもまだ完治には至らない筈だ

「常に万全の状態で戦いに挑める訳でもなし」

「わかりました。それほどの覚悟なら手合わせをしましょう」

「恩に着る」

そう言っって頭を下げたゾロが去って行く

残された私はため息を一つ吐いてからワインを飲み干す
そして、席を立てて宴の場所から離れて行ったのだった



「もう、主役が宴からいなくなったらダメじゃない」

シユウが何処かに行くのが見えたからついて来たのだけど、シユウが向かった場所は
シユウの産みの親であるアカリさんのお墓だった

「それで、アカリさんに何を話していたの？」

「色々ですよ」

「色々？」

「ええ…色々ですよ」

そう言つてシユウは優しい瞳をアカリさんのお墓に向ける

「父さんの事、レイ養祖父の事、ブンタお祖父さんやシオリお祖母さんの事…」

「一つ一つ思い出すようにシユウが語っていく」

「そして…ナミの事です」

「わたしの事？」

「ええ、素敵な恋人が出来たと報告していました」

シユウの言葉に顔が熱くなる

恋人としてシユウと過ごして来たけど、こうして改めて言われると照れてしまう
それ以上に嬉しいけどね

「さて、それでは戻りましょうか」

そう言つて立ち上がったシユウと一緒に宴の会場に戻つて行く
だけどその途中でわたしはシユウのコートの裾をそつと掴んだ

それに気づいたシユウは立ち止まってわたしの方を見ながら首を傾げている

「さっきはああ言つたけど…少しぐらいなら宴の席を外してもいいんじゃない?」

せつかくこうして2人きりになれたのだからもう少しぐらい一緒にいてもいいわよね?
ね?

「…そうですね。そうしましょうか」

わたしはそう言つたシユウにゆっくりと抱きつく

そして、しばらくシユウと見つめ合っていたわたしはそつと目を閉じたのだった

第106話

「くっ…もう一本だ！」

解放の宴が終わった翌日、二日酔いでダウンしたり新たな恋人達が誕生したりするココヤシ村で私とゾロは手合わせをしている

ゾロが三刀流で私に斬り掛かってくる

ゾロはミホークとの戦いで刀を二本失っていたので賞金稼ぎ時代の戦利品の中から刀を二本貸している形だ

三本の刀を交差して斬り掛かってきたゾロに私は木剣を片手で持って受け止める
ギンツ！

ゾロの三本の刀が大きな音を立てるが私の木剣はビクともしない

「ぐっ！」

ミホークに斬られた傷が痛むのかゾロが顔を歪める

その瞬間を狙ってゾロの刀を横に弾き、怪我をしていない肩に木剣を打ち込む

「ガッ……！」

口に銜えている刀を噛み締めてゾロが痛みに耐える

だが、隙だらけになって首に木剣を添えて決着だ

口に銜えた刀を噛み締めて耐えていたゾロが地面に膝をつく

「なんだ、負けっぱなしじゃねえかクソマリモ」

「ああ!?!黙ってるクソマユゲ」

サンジは発破をかけたつもりなのかそう言うがケンカは買うとでも

言うようにゾロが噛みつく

「…バラティエでも見たけどとんでもねえな」

「ししし!」

手合わせを見学していたウソップとルフィは慣れているのかゾロとサンジを放置だ

「あんた達、あの2人を放つといていいの?」

「いいよ、別に」

「いや、俺は止められねえし」

ナミがルフィとウソップに確認しているがどうやらバラティエからココヤシ村まで

の

航海でゾロとサンジの睨み合いは当たり前前の事になったようだ

パンツ!

私は柏手を1つ打って注目を集める

「貴方達、麦わら海賊団が旅立つ前に餞別として1つ知識を教えましょう」
勉強でもすると思つたのかルフィを始めとした麦わら一味は嫌そうな顔をしている
それを気にせずに私はコート袖を捲つて腕を出し、武装色の覇気を纏つて黒化させ
る

「おお！なんだそれ？」

面白そうな気配を感じたのかルフィが食いついてくる

「これは《武装色の覇気》と呼ばれる技術です」

「『《武装色の覇気》？』」

麦わらの一味が異口同音に疑問の声をあげる

私は武装色覇気を始めとした三種の覇気の説明をしていく

「今すぐに物にするのは不可能でしょうが、グランドラインの奥に進んでいくのならば

必ず必要になると言つても過言ではない技術です」

麦わらの一味の皆が腕を組んで真剣に話を聞いている

「本来なら誰かを師と仰ぎしつかりと修行するべきなのですが、貴方達は前に
進んでいくつもりなのでしょう？」

「おうー！」

私の言葉にルフィがハッキリと答える

「では、覇気というものがあるという事だけでも覚えておいてください」

ルフィ達が領いたのを確認して今日の手合わせを終わりにする

その後はゾロとサンジがケンカをしたり、それをルフィが囓し立てたりして時間が過ぎ

麦わら海賊団がココヤシ村を出航する時がやってきたのだった



「海賊にしてはいい奴等だったわね」

ココヤシ村を離れて海を進んでいくゴーイングメリーを見ながらナミが話す

「ええ、そうですね」

本当にルフィ達はいいい奴等です

何かが少し違えば彼等の仲間になっていたかとも思います

だが、こうして此処にいることは私自身で選んだ事

胸を張って夢を追いかけていきましよう

「シユウ、これからどうするの？」

ナミの言葉に少し考えてから答える

「取りあえずは私が設計した船を作れる船大工を探してみましようか」

「宛はあるの?」

「ええ、賞金稼ぎ時代に訪れた事のあるウォーターセブンに行ってみようかと」

私の言葉を聞いたナミが腕を組んでくる

「当然、わたしも一緒よね?」

「ええ、勿論です」

ゴーイングメリー号が水平線彼方に去つたのを見届けてナミと家に戻る

そして、私とナミは船大工を訪ねる明日に備えてゆつくりと休むのだった



翌日、ナミと共にウォーターセブンに転移した私は造船会社『ガレーラカンパニー』を訪ねた

「ンマー、いらつしやい。俺はガレーラカンパニーの社長、アイスバーグだ」

眼鏡をかけた秘書に船の設計図の確認、及び見積りを頼んだ所、こうして社長である

アイスバーグの前に通された

「社長、その髭の剃り後はセクハラです」

「ええ!？」

秘書の言葉にアイスバーグ氏が吃驚している

そんな2人のやり取りに俺の隣に座っているナミが苦笑いをする

「話を進めてもよろしいでしょうか？」

「ん? ああ、すまない。続けてくれ」

アイスバーグ氏の言葉を受けて懐から取り出す振りをしてワームホールから

私が描いた船の設計図を2枚取り出す

「これは私が描いた船の設計図なのですが、グラントラインを航行する際にどちらの

船が良いか船大工として判断、そして造船の際に如何程の値段となるのか見積りを

出していたいただきたいのです」

「失礼」

そう言つてアイスバーグ氏は私が描いた船の設計図を手にとって見ていく

「ンマー、大したものだね」

アイスバーグ氏の声は軽く感じるが設計図を見る目は真剣なものだ

「一枚目はキャラベル型を基本としたものか……この電動機つてのがよくわからないが

本職の船大工が描いたと言われても信じられる出来だな」

アイスバーグ氏の称賛が素直に嬉しい

「ンマー、この2枚目だけど…メインマストが無いこの型は珍しいな…」

アイスバーグ氏が食い入るように設計図を見ている

ちなみに2枚目の設計図はクルーザー型だ

「この電動機でスクリューとかいうのを回して進むのか？」

「ええ」

「こいつでどれだけの速度が出るのか、船が進む際に何処にどれだけ負荷がかかるか他にも色々確認しないと判断のしようが無い」

アイスバーグ氏が腕を組みながらそう言ってくる

「ンマー、という訳で悪いが電動機とかいう物の現物を含めてこの目で

確認してみない事にはこの仕事を受ける訳にはいかないな」

そう言うアイスバーグ氏の言葉を受けて私はワームホールから電動機等を取り出す

「これが現物となります」

ワームホールから物を取り出した事でアイスバーグ氏と

秘書さんが目を見開いて驚いている

だが、次の瞬間には電動機等を見たアイスバーグ氏は新しいオモチャを与えられた

子供のような目になった

「10日、それで答えを出そう」

「わかりました」

私は手付けとして五千万ベリをテーブルに置いて席を立つ

「カリファ、全員に集合をかけてくれ」

「社長、その言葉はセクハラです」

「なんで!?!」

そんな漫才をする2人を放っておいて私とナミはガレーラカンパニーを後にする

そして、思ったより早く話が終わったのでそのままデートをする事にした私とナミは
ローグタウンに転移したのだった

第107話

「ブリリアントでございます！」

ローグタウンに転移した私とナミはデートとして今は服屋に来ている

そこでナミが服屋の全ての服を着こなしていきファツションショーのようなものをしてるのだが、ナミが着替える度に服屋の店員が称賛しているのである

「シユウ、なんか一言ぐらい言ってくれてもいいんじゃない？」

「どれも良く似合っていますよ、ナミ」

私の言葉にやや不満な顔をしているナミだがそれ以外に言い様が無いのだ

「似合っているのですが、グランドラインでは1日の間に四季が移り変わる事も

あるのでそれらの服は適さないですね」

私の言葉にナミがハツとしたような顔をする

「ですが、普段使いの物として買うのなら構わないと思いますよ」

「うん…やめとくわ。船を造るんだし無駄遣いはダメよね」

散々試着して買い上げの雰囲気を見せておきながら何も買わずに服屋を去った事で

店員に涙を流しながら見送られる事になった

…今度、機会があつたら家族で見に来る事にしよう

服屋を後にして食事でもしようかとナミと腕を組んで歩いていたら

久しぶりにライトと出会つた

「よう、シユウ！」

聞き覚えのある声に振り向くとライトと眼鏡をかけたショートカットの女性がいた

「…誰？」

「彼はライト。賞金稼ぎをしていた時に知り合つた友人ですよ」

「おう！そして、シユウのライバルだ！」

へ々と関心するナミにライトが得意気に話す

「で、その姉ちゃんはシユウのコレか？」

そう言つてライトは小指を立てる

私が頷いて肯定するとライトはその場で地団駄を踏み始めた

「くっそお！リア充爆発しろ！」

「シユウ、リア充つて何？」

「…彼は時折よくわからない言葉を使うのです」

私が苦笑いしながらナミに答えるとナミは不思議なモノを見るようにライトを見た

「…まあ、いいか。俺はライトだ。よろしくな姉ちゃん」

「わたしはナミよ。よろしくね、ライト」

ナミが自己紹介をするとライトは目を見開いた

「：シユウ、お前の故郷って何処だ？」

「ココヤシ村ですが：それがどうかしましたか？」

ライトの疑問に答えるとライトは口元を抑えてブツブツと呟き始めた

「ナミがシユウの恋人？：これ、この先どうなるんだ？」

ライトは呟きを止めると私の方を見てきた

「なあ、シユウ：お前、まだ賞金稼ぎだよな？」

「ええ、辞めた覚えはありませんね」

二度ライトの疑問に答えるとライトが頭を抱えてブツブツと呟き始めた

「彼、大丈夫かしら？」

「いつもの事なので大丈夫でしょう」

そのままナミと共にライトを眺めていると眼鏡の女性がライトを止め始めた

「ライトくん、こんな場所でダメですよ！」

「航海士無しでルフィ達はグランドラインを渡って：え？何だ、たしぎ？」

「ご友人を待たせたら失礼って言っているんです！」

ハツとした顔をしたライトが俺達の方を向く

「悪いな、シユウ」

「構いませんよ、ライト」

「そうだ！一緒に昼飯食わないか？俺、少尉に昇進したから奢ってやるぜ！」

ライトの誘いを受けた私とナミはオープンカフェの様な場所に向かった

「よっしゃ！それじゃ好きな物を注文してくれ！」

「ライトくん、あまり無駄遣いしたらダメですよ？」

「たしぎ、お前だつて休日は刀屋に入り浸っているじゃねえか」

「私はライトくんと違って散財せずに刀を見るだけです！」

「よけい性質が悪いじゃねえか！スモーカーさんに刀屋から苦情を言われる前に

連れ戻せつて言われてたしぎと休みを同じにされてるんだぞ！」

「いいじゃないですか、休日はどう過ごそうと！刀の波紋を見ていると癒されるんです
！」

「どう見ても危ない奴だろうが！今日だつて二時間もたしぎの刀鑑賞に付き合わされた

俺の身になりやがれ！おかげで釣りが出来なかつたじゃねえか！」

「ライトくんだつて最初は興味深そうに見てたじゃないですか！」

眼前で繰り広げられるこの夫婦漫才にどう反応すればいいんだろうか？

「ねえ、2人は恋人なの？」

ナミの言葉に反応した2人は顔を見合わせた後、揃って手を横にブンブンと振って否定した

「い、いやいや！ねえよ！こんな刀剣マニアと！」

「そ、そうですよ！こんな釣りバカとこ…恋人だなんて…！」

そう言う2人だがその顔は双方とも赤く染まっている

初々しい反応を見せる2人に私とナミは暖かい目を向ける

「め、飯だ！飯を食おうぜ！ほら、たしぎ！お前も選べよ！」

「そ、そうですね！早く食べましょう！」

そう言う隣に座っている2人は1つのメニューを2人で見ていく

「やっぱり力をつけるには肉と魚だろ！」

「野菜も食べなきゃダメですよ、ライトくん」

「野菜じゃ力が出ねえよ」

「好き嫌いしていたら大きくなれませんよ？」

「うっせえ！俺の成長期はこれからだ！」

そんなやり取りをするいいコンビの2人を微笑ましげに見ながら私とナミも食事を

選んでいく

豪快に食べて口周りを汚すライトを自然に世話をすたしぎの姿に何故恋人じゃな

いのか

私とナミは不思議に思いながらも食事を楽しんでいくのだった

第108話

「だあー！勝てねえ！」

ライト達との昼食を終えた私とナミだがライトから手合わせの誘いを受けたので今は海軍の演習場でライトと手合わせをしている所だ

「はあ…シユウ、お前また強くなつてねえか？」

「ククク…さて、どうでしょうかね？」

ミホークが言ったように私が壁を超えているのならば成長しているのだろうか

「ですが、ライトも武装色の覇気で黒化できるようになっているのですから

十分に成長していると思いますよ」

「だろう！スモーカーさんにだつて勝てるようになったんだぜ！」

ライトが言うスモーカーという人物が誰かはわからないが相当な強者なのだろう

「シユウ、最後にもう一本！」

「ええ、構いませんよ」

私の返事を聞くと同時にライトが踏み込んでくる

そして、全力で振るってくるライトの拳を私は木剣で受け流すのだった



「うわあ…シラカワ博士強いですね…」

わたしと一緒にシユウとライトの手合わせを見ているたしぎがそう話す

「まあ、シユウの方が年上だから」

「私だってライトくんの年上ですけど、手合わせで勝てないんですが…」

たしぎが落ち込んだ様子でそう言ってくる

「たしぎは帯刀しているけど、得物は刀だけなの？」

「はい、これでも剣士の端くれですから、ナミさん」

そう言ってたしぎは愛刀を自慢するように話し続けていく

わたしはあまり興味が無いので適当に相づちを打って話を聞いていくしかない

「そう言う訳で私は悪党達が持っている名刀を…って、聞いてくれますか、ナミさん？」

「え？うん、聞いてるわよ」

「ごめん、ほとんど聞いてなかったわ」

「それよりも、たしぎ？わたしに『さん』はつけなくていいわ」

「ですが、ナミさんの方が強いし…」

わたしとたしぎも手合わせをしたんだけど、わたしが勝っちゃったのよね…

シユウ曰く、覇気の有無と経験の差が大きかったみたい

それと、たしぎの剣技は刀と刀の戦いを想定しているものだからもつと経験を積まないと

なんでも有りの実戦では後れをとる可能性が高いつて注意していたわね

「それに…ナミさんはシラカワ博士みたいな素敵な恋人がいて女としても負けてますし…」

シユウが素敵な恋人なのは間違いないけど、なんでライトと恋人じゃないのか

不思議でしょうがないのよね…

「とにかく、わたしに『さん』は禁止よ、たしぎ」

「はい、ナミさん」

そう言ってくるたしぎにわたしはジト目を向ける

たしぎは1つ咳払いをしてから口を開いた

「ナミ」

「うん、これからよろしくね。たしぎ」

わたしとたしぎは握手を交わす

「だあ——！また負けたあ——！」

その時、ライトの叫び声が聞こえた事でわたしとたしぎは目を見合わせてから笑ってしまう

地面に大の字になるライトを介抱しにたしぎが向かったので、わたしも恋人であるシュウの元に向かうのだった



「シュウ、また来いよな！勝ち逃げはダメだからな！」

「ククク……ええ、またナミと一緒に来ようと思います」

ライトとの手合わせを終えて少し世間話をしていたらいい時間になったのでこうして別れの挨拶をしている所だ

「ナミ、また刀談義をしましょうね！」

「刀談義はちよつと遠慮したいかしら……」

どうやらナミとたしぎは友人と言える程に仲が良くなったようだ
そろそろ帰ろうかとした時、不意にナミが空を気にし始めた

「たしぎ、ライト、話半分でもいいから聞いてくれる？」

たしぎとライトが頷いたのを確認してからナミが話を続けた

「多分だけど2日後、ローグタウンに嵐がくるわ。それも、かなり大きなものが」
たしぎは不思議そうに首を傾げるがライトは眉を寄せて真剣な顔で聞いている

「2日後なのか？」

「多分だけどね」

「わかった。スモーカーさんに話を通して色々と準備をしてみる」

ライトは全く疑う様子も見せずにナミの言葉を受け入れた

「注意しておくのはわかりますけど、スモーカー大佐にまで進言するんですか？」

「たしぎ、嵐を甘くみる漁師は二流だぞ」

「私は漁師じゃありません！」

船が流されたり転覆すれば仕事にならない事を考えればライトの言葉に納得だが…

「自分で言っておいてなんだけど、簡単に信じ過ぎじゃないかしら？」

「あく…ナミはシュウの恋人だし天気を言い当てても不思議じゃねえと思つて…」

「ライト、貴方は私を何だと思つているのですか？」

「チート」

ライトの言葉に私とナミは顔を見合わせる

「ライトくん、『チート』って失礼な言葉じゃないですよね？」

「たしぎ、細かい事ばかり気にすんなって」

「ライトくんが大雑把過ぎるんです！」

また始まった夫婦漫才に私とナミは笑ってしまふ

「ククク、それではそろそろ失礼しますよ」

「あ？おう！また来いよ！」

私がライト達の夫婦漫才を止めるように言葉を掛けるとナミが小走りでたしぎに近寄って何かを耳打ちする

耳打ちされたたしぎは何故か顔を真っ赤にしていた

「行こう、シユウ」

「もう、ナミ！」

こちらに戻って私と腕を組んだナミは顔を真っ赤にしながら

抗議の声をあげるたしぎに手を振る

諦めた様のため息を吐いてから手を振ってくるたしぎと一緒に手を振るライトに手を振り返した後、ワームホールを開いてナミと共にココヤシ村に転移をした

第109話

「う……ん……」

閉じられた瞼に朝陽が射し込んでくる

促される目覚めに寝返りを打つと抱き締めていた彼の腕の温もり感じて目を開ける

「おはようございます、ナミ」

シユウの言葉でぼんやりとした意識が目覚めていく

「おはよう、シユウ」

体を起こすと掛けられていたシーツが小さな音を立ててベッドに落ちる

朝の開眼一番に目にするのはシユウの身体

瘦身ではあるけれど一部の隙もなく鍛え抜かれたその身体は匂い立つ程の色気を感じさせる

じさせる

お互いに一糸も纏っておらずに寝ていたのは……まあ、恋人だから

昨夜はそういう事をしていた訳で……

「そろそろ起きましようか。ベルメールさん達が帰ってくる前に色々と

後始末をしないといけませんからね」

「うん、わかったわ」

シユウと軽く触れ合うように口付けをしてから動きだす

シャワーを浴びたり等をしてベルメールさん達が帰ってくる前にギリギリ後始末を終えると

わたし達一家は揃って朝食を食べ始めたのだった



「ほう…遂にルフィも賞金首ですか」

朝食を終えて食後の一服をしながら新聞を読んでいると見知った顔が

新聞の一面を飾っていたのでつい口に出ってしまった

私の言葉に反応したナミが私に体を預けるようにして後ろから

肩越しに新聞を覗き込んでくる

「あら、初手配から700万ベリーだなんて結構な額じゃない」

「昨日の嵐に乗じてローグタウンで一暴れしたことが原因らしいですね」

背中の幸せな感触を堪能しながらナミの言葉に応える

そんな私達を見てニヤニヤとしているノジコとベルメールさんは放置だ

「えっと……『道化のバギーの一味と共にローグタウンを騒がした《麦わらのルフィ》を指名手配する。ルーキーとしては異例の700万ベリーでの指名手配であるが、麦わらの

ルフィはスモーカー大佐とライト少尉の追撃を振りきった事を懸念しての事である」

ナミが読み上げた通りであるが新聞にはもう少し詳細が載っている

嵐は雷を伴う大きなものでその雷が海賊王の処刑台に落ちたのだが、その付近でバギーの一味とルフィ達が争っていたらしい

雷が街中に落ちた事で嵐に乗じた強盗を警戒していた海兵達が処刑台のあった広場に

集合したのだがそこでルフィ達とバギーの一味は争いをやめて各々散っていったようだ

ルフィ達を追ったライトとたしぎ、そしてスモーカー大佐は一度ルフィ達を捕らえるものの

突然嵐による突風が吹いた事でルフィ達の拘束が外れて逃がしてしまっただけらしい
ルフィの天運の良さに目眩がしそうだ

そして、実際にルフィ達の捕縛にあたったスモーカー大佐を始めとした三人が

そんなルフィやゾロを警戒して指名手配に踏みきったというのが新聞に書かれています

ちなみにゾロは500万ベリーでの指名手配だ

「そういえばサンジくんとウソップは指名手配されていないわね？」

「2人はゾロと違い少し前までは一般人でしたからね。海軍にも情報が無いのでしよう」

「うん、納得したわ」

そう言つてナミは後ろから私を軽く抱き締めてくる

「ねえ、シユウ。たしぎとライトは大丈夫かしら？」

「ククク、ルフィ達の心配はしないのですね、ナミ？」

「あいつらは海賊よ、何かあつても自業自得だわ」

ルフィ達を良い奴と知つてもナミの海賊嫌いは変わらないらしい

「それよりも、もう一度ローグタウンに行かない？」

「構いませんよ、ナミ」

「あら、また2人だけでデートだなんて妬けるわね」

ベルメールさんが茶化すようにして会話を割り込んでくる

「恋人なんだから別にいいでしょう？」

「あつはつはつは！ナミも言うようになったわね」

「そうね。少し前なら顔を真っ赤にしてたのに、これじゃ面白くないわ」

ナミの切り返しにベルメールさんとノジコは物足りないようだ

「いつまでもからかわれてばかりだと思わないでよね」

「そろそろ新しいネタを探さないとダメそうね、ノジコ」

「そうね、ベルメールさん」

悪びれる様子も見せないベルメールさん達にナミがジト目を向ける

「さて、私とナミはローグタウンに行きますがベルメールさん達も一緒に行きませんか？」

「あら、馬に蹴られるつもりはないのだけど？」

「ローグタウンに品揃え豊富な服屋があったので新しい服でもどうかと思ひまして」

私とベルメールさんの会話にノジコが反応をみせる

「いいわね。一緒に行こうよ、ベルメールさん」

「私が今更着飾つてもねえ…」

「綺麗なんだから勿体ないわ、ベルメールさん」

ノジコの誘いにベルメールさんは否定的だがナミがノジコに賛同する事で

ベルメールさんは戸惑いを見せる

ベルメールさんは今更と言うが家族としての鼻肩目無しでベルメールさんは綺麗だ
と思う

それこそ20代後半と言つても疑問に思わない程に健康的で美人なのだ

「はあ…はいはい、降参よ。一緒に行くわ」

ベルメールさんがため息を一つ吐いてから誘いを受けるとナミとノジコがハイタツ
チをした

「ノジコ、ベルメールさんにはどんな服がいいかしら？」

「大人の女を意識した物でいいんじゃない？」

「あんだ達…私はいいから…」

「ダメよ、ベルメールさん」

「そうよ、そろそろベルメールさんもいい男を捕まえないと」

「あのね、私は男がいらないんじゃないのよ」

こんな感じで我が家の女性陣の会話は盛り上がっていく

そして、出掛ける準備を終えた私達は家族揃ってローグタウンに転移したのだった

第110話

「おつ？よく来たな、シユウ！歓迎するぜ！って言いたい所だけどよ、色々忙しくてな
悪いけどあんまり相手をしてやれねえんだ…」

家族揃ってローグタウンに転移した私達はベルメールさんとノジコが買い物に
そして、私とナミはライト達に会いに行った

ローグタウンにある海軍基地に向かう途中で海賊王の処刑台の広場に寄ったのだが
そこでライトに会うことが出来た

「いえ、私達も新聞を見て様子見に來ただけなので気にしないでください」
「そうか、心配してくれてありがとな」

ライトはグループさんの様な満面の笑みで礼を言ってきた

「シユウ、近いうちに俺はローグタウンを離れるんだ。そう言う訳だからこれからは
手合わせが出来なくなると思う」

「異動の辞令が出たのですか？」

「いや、違うぜ」

そう言つてライトは首を横に振る

「スモーカーさんが部隊を率いてある海賊を追うことを決めてな…俺は元々はガープ中将の

部下だからこれで本部に戻る事になっていたんだけどよ…」

そこまで言ってライトは頭をうつ掻いてから話を続ける

「短い間だったとはいえ一緒に修羅場を潜ってきた仲間をなんか見捨てられなくてな…」

俺もスモーカーさん達と一緒に海賊を追うことにしたんだ」

「追う海賊は《麦わらのルフィ》ですか？」

「ああ…知ってるのか？」

「ええ、ガープさん関連の事で少々縁が出来まして…」

「そうか…」

ライトは少し俯くが直ぐに顔を上げる

その顔は意を決した海の男の顔だった

「シユウ…悪いけど、お前の知り合いだろうと捕まえるぜ」

「ええ、構いませんよ」

私があつさりと返事をするるとライトにとっては意外だったのか動きが止まる

「…いいのか？」

「ええ、それが彼の選んだ道ですからね」

「そうよ、海兵なんだから海賊を追うのは当然じゃない」

私の言葉を肯定するようにナミが言葉が続ける

「ハツハツハツハ！」

そんな私達の言葉を受けたライトが笑い始める

「なんだよ、悩んで損したぜ」

「ライト、ルフィ達に返り討ちにされる可能性だつてあるのですよ?」

「ハツ！ 覇気も使えねえ未熟者に負けつかよ！」

ライトは自信に満ちた顔でそう言いきる

「ライトくん！ そろそろこちらに：あ、お久しぶりですシラカワ博士、ナミ」

どうやらたしぎがライトを呼びに来たようだ

だが、たしぎの後ろで幾つもの葉巻を吹かしている男は誰だ？

「なんだ、スモーカーさんまで来たのかよ」

「テメエがこんなところで油を売ってるからだろうが」

どうやらこの葉巻の男がスモーカー大佐らしい

「ライト、引き継ぎは終わったからそろそろ出航するぞ」

「おう！ わかったぜスモーカーさん！」

どうやらライトとの話もここまでのような

「そういう訳で悪いがライトを貰っていくぞ」

「ええ、旅の無事を祈ります」

「シユウ！ やつと見つけたわ、荷物を回収…あら？ 懐かしい顔ね」

私がスモーカー大佐と話していると買ひ物を終えたらしいベルメールさんとノジコが

両手一杯に買ひ物袋を提げてこちらに向かつて来ていた

よく見るとベルメールさん達の後ろにいつぞやの店員の姿もある

両手にベルメールさん達以上の荷物を持っている所を見るに御大尽の為に

荷物運びをしているようだ

「あ？…ゲツ！ もしかして、あんたは…」

ベルメールさんを見たスモーカー大佐が狼狽えた姿を見せる

「その反応はちよつと失礼なんじゃない？ スモーカー」

「…やつぱりベルメール大佐か」

「元よ、今は一般人だから階級呼びはいらないわ」

ベルメールさんはいつもと変わらぬ様子だがスモーカー大佐は苦虫を噛み潰した様な顔だ

「お？ なんだスモーカーさん、この美人な姉ちゃんを知り合いなのか？」

ライトの言葉にこの場にいる者達が様々な反応をする

「ライトくんは年上が好みなのでしようか？」

「よかつたじゃない、たしぎ」

「そ、そう言う意味ではありませんよ、ナミ！」

「姉ちゃんだなんて、私もまだまだ捨てたもんじゃないわね」

「海兵は収入も安定しているし、いいんじゃない？ベルメールさん」

「海兵の男はもうコリゴリよ」

ライトの言葉をきっかけに女性陣の話が盛り上がっている

「で、スモーカーさん。その美人な姉ちゃんとはどういった知り合いなんだ？」

「…俺の新人時代の教官だ」

スモーカー大佐の言葉にその場にいる皆が関心を寄せる

だが、ここでベルメールさんがとんでもない言葉の爆弾を落とした

「あら、一緒に寝た仲だつていうのにその紹介は連れないんじゃない？」

ベルメールさんの言葉にライトとたしぎの動きが止まる

スモーカー大佐は紫煙を吐き出しながら頭を抱えている

「スモーカーさん！あんた、ヒナさんという人がいながら何やってんだ！」

「スモーカー大佐！不潔です！」

「うるせえ！勘違いだバカ野郎共が！」

海兵である3人が混沌とした状態にベルメールさんがさらに言葉の爆弾を投下する
「勘違い？一緒に寝た後、私に花束を持ってきたのは誰だったかしら？」

ベルメールさんの言葉にライトとたしぎが驚愕して目を見開く

「スモーカーさん！」

「不潔です！」

「ベルメール大佐！あんたは少しも変わらねえな、シヤレにならねえぞクソツタレ！」
どうやら昔はスモーカー大佐がベルメールさんにからかわれていたようだ

その後、ベルメールさんが満足して真相を話すまで混沌とした状況が続くのだった

第111話

の
大きなため息を吐くスモーカー大佐と頭に見事なタンコブが出来たライトとたしぎ

船出を見送って早七日、私とナミはウォーターセブンにある
造船会社『ガレーラカンパニー』を訪ねていた

「ンマー、いらっしやい。待ってたよ」

特徴的な口癖のあるアイスバーグ氏に招かれて応接室に通されると早速話が始まっ
た

「こつちのメインマストが無い珍しい型の船、個人的には造ってみたいと思うが

電動機の故障時のリスクを考えるとオススメ出来ない」

トントンと応接室の机の上に置いた設計図を指で指し示しながらアイスバーグ氏が
話す

「というわけで、我が社で造船をオススメするのはキャラベル型だ」

「わかりました。では、改めてキャラベル型の造船依頼を出しましょう」

私の言葉を聞いたアイスバーグ氏が驚きの表情を浮かべる

「見積りを聞かなくていいのかな？」

「ええ、内装や部屋割りの事は私の恋人と相談していただきますが、竜骨の素材以外は指定しませんのでそちらの裁量で自由にやってください」

私が応接室で出されたお茶を飲みながら話すとアイスバーグ氏は二度驚きの表情を浮かべる

「ンマー、流石は世に名を知られる《天才》シラカワ博士と言った所かな」

前回訪れた時はアイスバーグ氏は私の事を知らなかったと思いましたが…

「ンマー、うちの社員にシラカワ博士を知っていた奴がいてね。電動機という新しい発明を

ポンと渡してくるなんて、特効薬の製法を秘匿しなかった博士らしいって話していたんだ」

隣に座っているナミは私が評価された事で嬉しそうな表情を浮かべる

「さて、博士の恋人さん。細部の詰めにご協力願いますよつと」

「わたしはシユウみたいに甘くないわよ。内装や部屋割りはわたしの支払いだからキッチリと値切らせてもらおうわ」

「ンマー、これはまた手強そうな客人だ」

そう言ってアイスバーグ氏は笑った後、ナミと話を進めていく

「シャワー室と海図を描くための製図室は絶対に欲しいわ」

「ンマー、じゃあこういう具合でどうかな？」

そう言つてアイスバーグ氏はフリーハンドでスラスラと内装や部屋割りの設計図を描く

「悪くないけど、それだと高くつくんじゃない？」

「海上での揺れを考えるとこれが無難だと思ふけどねえ」

「こつち側に作れない？」

「海水の濾過装置とかの配置を考えると船全体のバランスがねえ……」

「内装に使う素材だけど、もっと安いのに……」

「ンマー、博士が指定した竜骨の素材を考えると素材の格の違いで船の美観が……」

「それじゃあ、この値段で……」

「ンマー、うちの大損になるから値段は……」

アイスバーグ氏ナミの話し合いは続いていく

私はゆつくりとお茶を飲んで2人の話し合いに決着がつくのを待つのだつた



ガレーラカンパニーに造船依頼を出して数日過ぎた頃、ココヤシ村にいる私の元に
レイ養祖父さんからの手紙が送られてきた

「シユウ、手紙にはなんて書かれてるの？」

朝の畑仕事を終えてお茶を飲んで一服しながら手紙を読んでいると、その内容が
気になったのかナミが私に聞いてきた

「新聞でココヤシ村が解放された事を知って、そのお祝いの手紙といった所ですね」

少し前に東の海の海軍支部がアーンロンを捕らえて支配下にあつた村々を解放したと

新聞に載つたのだが、どうやら手紙を見るにレイ養祖父さんは真相に気づいているよ
うだ

「手紙を見て思い出しましたが、無事に事を成せたと報告するのを忘れていましたね……」
ナミとの恋人生活を楽しんでいてすっかり忘れてましたね

「色々と慌ただしい事もあつたし、仕方ないんじゃない？」

「確かにそうですが、思い出した以上は報告に向かおうかと……」

ココヤシ村の解放に少なからず関わつたガープさんを除いて報告に行こう

「わたしも行くから少し待っててね」

そう言つてナミは立ち上がり出掛ける準備をし始めた

「お土産ヨロシクね」

「私は孫の顔がお土産でもいいわよ」

ノジコとベルメールさんは私とナミと一緒に出掛けるのを当たり前のように見送る
ベルメールさんの希望にはいつかは応えるがもう少しの間は2人の時間を楽しみた
い

その後、準備を終えたナミと共に私はかつて世話になった人々へ報告を
兼ねた挨拶廻りに向かうのだった

第112話

「やあ、よく来てくれたね、シユウ」

ナミと共にシャボンディ諸島にあるシャツキーさんの店にやってくると

レイ養祖父さんが以前と変わらずに酒を飲んでる姿があった

「シユウ、そちらのお嬢さんを紹介してくれるかな？」

「彼女の名はナミ、私の恋人ですよ、レイ養祖父さん」

私の言葉にレイ養祖父さんは興味深そうな目をナミに向ける

「シユウの事をよろしく頼むよ、お嬢さん」

「は、はい！」

流石に伝説の海賊を前にしてナミは少し緊張しているようだ

「さて、酒でも飲みながら話を聞こうか。シャツキー、シユウ達に酒を」

「ふふふ、わかつたわ、レイさん」

シャツキーさんに酒を出された事で私とナミは席について酒を飲んでいく

レイ養祖父さんにココヤシ村の解放の報告をして帰る際に

ナミが「緊張しちやっってお酒の味がわからなかったわ」と言ったのが印象的だった

◆
レイ養祖父さんに報告をした翌日はワノ国のブンタ祖父さん、シオリお祖母さんに報告した

2人にナミを恋人だと紹介すると曾孫の顔が見れると大喜びしていた

だが、そんな2人にしばらくは恋人としての生活を楽しむと言うと目に見えて落ち込まれた

私とナミは苦笑いをするしかなかった

その日はそのままワノ国の祖父母の家でゆっくりとしたのだが夕飯に出された物が妙に精のつく料理ばかりだった

さらに私達の寢床を離れに用意して布団は1つとか狙いが明らか過ぎである

明けて翌日、来年には曾孫の顔を見せに来いとニツコリと笑って言うシラカワ祖父母と別れ

◆
今度は父さんの所に向かった

「見聞色で気配を感じて誰かと思つて来てみればシユウか……」

「久しぶりですね、ベックマン」

グランドラインにある父さんのアジトの1つに転移すると赤髪海賊団の副船長である

ベックマンが私達の所にやつてきた

「父さんはいますか？」

「ああ、中で鷹の目と酒を飲んでいる」

ベックマンの先導でアジトの中へ進んでいくとベックマンの言葉通りに

父さんとミホークが酒を飲んでいた

「お？シユウか！よく来たな！お前もこっちに来て一緒に飲め！」

目敏く私の姿を発見した父さんが飲みを誘つてくる

私はナミを伴い父さんの近くに座った

「それで、隣のお嬢さんはシユウの恋人か？」

「ええ、そうですよ、父さん」

私の返事に父さんが口笛を1つ鳴らす

私はナミに目で合図を送る

「初めましてね、お養父さん。わたしはナミって言うの、よろしくね」

「ああ、息子をよろしく頼む」

そして、ナミと父さんは握手代わりにジョッキを打ち鳴らした

「どうやらレイ養祖父さんと酒を飲んだ事でナミは父さんを前にしても緊張しないようだ」

「よおーし！息子の祝いだ！飲むぞお前ら！」

「「おお———！」」

既に飲んでいた赤髪海賊団の者達が父さんの音頭でジョッキを掲げた

その後は報告も含めて父さんと色々と話していく

バラティエでミホークと真剣で手合わせをして引き分けた事の話になると

父さんは驚いた表情を見せた

だが、「流石は俺とアカリの子だな」と父さんは嬉しそうに頷いた

そして、その事で父さんがミホークに絡むとミホークが背中の黒刀に手を掛けて

決闘になりかけたのは酒の席のご愛嬌だろう

用意された酒や料理が一通り片付いた頃、私とナミはそろそろお暇しようと

席を立つと父さんに声を掛けられた

「シュウ、この後はどうするんだ？」

「明日、白ひげの所にも報告に行こうと思つています」

私の返事を聞いた父さんが真面目な顔になる

…何かあつたのか？

「シユウ、黒ひげに気をつけろ」

「黒ひげ…ですか？」

私は首を傾げながら父さんに聞き返す

「マーシャル・D・ティーチ…白ひげの所の2番隊に所属している男だ」

「2番隊というとエースの部隊ですね」

父さんは私の言葉に驚いたような表情をする

「シユウ、エースを知っているのか？」

「ええ、決闘をして友となりました」

父さんは私の言葉に一瞬目を見開くと大きな声で笑いだした

「はっはっはっは！そうかそうか！」

そう言つて父さんは少しの間笑い続ける

そして、笑いを収めるとまた真剣な顔をして話始めた

「ティーチの奴は得体が知れない所がある男だ」

「父さんがそれほど警戒をする相手なのですか？」

「ああ、俺の左目に傷をつけたのはティーチだ」

今度は父さんの言葉に私が驚いた

私だけじゃなく話を聞いていたナミも驚いている

「…わかりました。黒ひげに注意を払っておきます」

「ああ、気をつけていけ」

そこまで言うとう父さんは表情を変えて笑顔になる

「それと、いつでも気軽に飲みに来い」

「ええ、ありがとうございます、父さん」

「孫の顔も見せに来いよ」

「その前に結婚式になると思えますよ」

「はっはっはっ！それは楽しみだ！」

私と父さんの会話を聞いていたナミは顔を赤くしている

結婚式を想像したのだろうか？

「いつてきます、父さん」

「ああ、いつてこい、シュウ」

私は父さんと軽く拳をぶつけ合う

そしてナミを伴い一度ココヤシ村に転移で戻るのであった

第113話

父さんに報告をした翌日、私はナミと共に白ひげのアジトに転移した

「おう、いらつしやい博士。良く来てくれたよい」

白ひげのアジトに転移するとマルコが迎えに出てきた

「さつそく親父の所に案内するからついてきてくれよい」

マルコの先導に私とナミはついていく

「…何やら穏やかな雰囲気じゃない方々がいますね」

マルコの先導についていく途中、少々殺気立つ者達がいた

「…ちよつと揉め事があつたんだよい。気になるなら親父から聞いてくれよい」

私に返事をする時のマルコは無表情だった

その後、マルコの先導で白ひげの所に辿り着くと驚きの光景を目にする

白ひげの身体に痛々しく包帯が巻かれていたのだ

「おうーよく来たな博士！見苦しい姿で悪いが歓迎するぜー！」

怪我など無いとでも言うように白ひげは快活な声を上げる

「何があつたのでしょうか？」

「なに、ちよつと息子の反抗期があつただけさ」

白ひげがニツと笑いながら言ってくるが白ひげに怪我を負わせるとはただ事では無
い

「…詳しく伺つても？」

「まあそう焦るな博士。まずは一杯やつてくれ」

そう言つて白ひげはドンツとジョッキを私の前に置く

「それに、そつちの嬢ちゃんの事も紹介して貰わねえとな、グララララ！」

白ひげがナミの前にもジョッキを置くとナミが一息に飲み干した

「わたしはナミ！ シュウウの恋人よ！」

「そうか、俺はエドワード・ニューゲートだ！ 白ひげの方が

通りがいいだろうな、グララララ！」

どうやら白ひげはナミの飲みっぷりが気に入つたようだ

「どうやら事は成せたようだな、博士」

白ひげが大樽で酒を煽りながら私にそう言ってくる

「ええ、おかげさまで」

「纏う雰囲気が違うからな、一目でわかつたぜ、グララララ！」

白ひげ程の男になるとそついつた事から読み取れるようになるのか…

「それで、何があったのでしょうか？」

「…息子の一人が仲間を殺して悪魔の実を奪って逃げたのさ」

白ひげはジョッキを煽りながら言うが表情は消えている

「博士、1つ頼みがあるんだよい」

「マルコ、黙ってろ」

「親父、エースの事を頼むなら博士が一番だよい」

マルコが珍しく白ひげとの会話に口を挟んできたが聞き捨てならない言葉があった

「マルコ、エースがどうかしたのですか？」

私の言葉にマルコは白ひげに伺いをたてる様に目を向けるが白ひげは目を瞑るだけだ

「さっき親父が言った逃げた男っていうのがエースの部隊の奴なんだよい」

マルコの言葉に私は大体の事情を察する

「つまり、エースは落とし前をつける為に件の男を追っていったと？」

「察しが良くて助かるよい」

エースらしいと言えらばらしい行動だ

「それで、頼みというのはエースの手伝いをすればいいのですか？」

「違うよい。エースを連れ戻して欲しいんだよい」

連れ戻す？

「どういうことでしょうか？」

「エースが追った男は20年以上親父の息子としてグランドラインで生き抜いて来たんだよ」

「今のエースが相手にするのは荷が重いんだよ」
なるほど

「それに、落とし前をつけるのに博士に手伝って貰ったら俺達の立場が無いよ」

「それは失礼しました」

「いいよ。気にしないでくれよ」

そう言つてマルコが私に笑顔を見せる

「マルコ、エースが追った男の事を聞いてもいいでしょうか？」

「…マーシャル・D・ティーチって言うよ」

私はマルコが口にした男の名に驚く

「博士、知ってるのかよ？」

「先日、父さんから聞きました」

「なるほど、赤髪とは因縁があるから博士が知っていても不思議じゃないよ」

「どうやら白ひげ一味は父さんとティーチの因縁を知っているようだ」

「マルコ、エースはどこにいるのか情報はありますか？」

「アラバスタ王国付近で見たって報告が来ているよい」

大所帯の白ひげ海賊団の情報網はグランドライン全域に及び、その情報の早さは海軍をも上回るというのを以前レイ養祖父さんに聞いた事がある

「砂漠を探し回る事を考えると少し準備が必要ですね」

「博士、エースを連れ戻す事を引き受けてくれるのかよい？」

「ええ、友が危険かもしれないと聞いたのならば断れませんが」

さて、砂漠を探し回る事を考えるとナミはココヤシ村に帰した方がいいな

「ナミ……」

「シユウ、わたしも行くわよ」

ナミが私の言葉を遮るように言い切る

「ですが……」

「わたしとシユウはこれから世界を巡るんでしよう？　こういう事はこれから日常茶飯事に
なるんだから今の内に慣れておいた方がいいんじゃない？」

私はナミの言葉に降参の意を込めて両手を上げる

すると、それを見た白ひげとマルコが笑い出す

「グララララー！度胸があるいい女じゃねえか！大事にしてやれよ、博士！」

マルコとの会話の間、黙して表情を消していた白ひげが笑顔を見せる

そして、不意打ちの様に白ひげが私に頭を下げてきた

「博士、息子を…エースを頼む」

私は白ひげの言葉に頷く

「わかりました。それと、連れ戻すのに少々手荒くなるとは思います、構いませんか？」
「グララララー！一言も言わずに飛び出したバカ息子に灸を据えるのに丁度いいぜ！」

こうして私はティーチを追って白ひげ一味を飛び出していったエースを連れ戻す依頼を受けた

その後、白ひげの計らいで必要な物資を補給した後、ナミと共にアラバスタ王国へと向かったのだった

第114話

「本当に暑いわねえ…このロープを脱ぎたいわ」

ナミと共にアラバスタ王国へとやってきた私は今、ナミと共に砂漠を歩いている

「ロープを脱いだら文字通りに肌を焼かれてしまいますよ」

「はあ…最初は見渡す限りの砂原に感動したけど、そろそろ食傷気味ね」

砂漠を飛んで越える事も出来たがナミが経験を積む為にこうして砂漠を歩いているのだ

「では、そろそろ飛びますか？」

「…そうね、エースって人を探さないといけないし」

そう言つて近づいてきたナミを抱き上げて能力を使って空に浮かび飛び始める

「シユウ、どのぐらいでつくのかしら？」

「そうですね…次の町までは30分ぐらいでしょうか」

ナミと会話をしながら飛び続けていく

そして、休憩の為に町に辿り着くと目的の人物であるエースを見つけるのだが

エースと一緒に思わぬ人物達とも再会するのだった



「見つけたぞ！ 麦わら！」

「ゲッ！ ケムリン！」

アラバスタ王国にあるとある食堂に立ち寄ったスモーカー大佐はローグタウンで逃がしてしまい、その行方を追っていたルフィを見つけた

「待ちやがれ！」

「ししし！」

スモーカー大佐が食事の中のルフィに仕掛けたのでルフィが逃げ出す

思わぬ形でルフィの罪状に食い逃げが追加される事になった

「逃がすか！」

スモーカー大佐が両手を煙に変えて飛ばしルフィの体を捕らえる

「またこれか！」

ルフィは自身に纏わりつく煙を殴るが一向に拘束が解ける気配が無い

「ルフィ！」

「ルフィさん！」

そこにゾロやアラバスタ王国までの航海の途中で仲間になったアラバスタ王国の王女であるビビが駆け付けてくる

だが、ルフィの仲間が駆け付けてくると共にスモーカー大佐の仲間も駆け付けてくる

「スモーカーさん！助太刀するぜ！」

「ライト！たしぎと部下を指揮して麦わらの一味を捕らえろ！」

麦わらの一味の冒険もここまでかと思われたその時……

「火拳！」

火の大波が横切り、スモーカー大佐の煙の拘束を解き放ったのだった

「悪いな、目の前で義弟の冒険の邪魔はさせねえよ」

火の大波を放った男はオレンジ色のテンガロンハットを指でピンツと弾いて笑う

「エース！」

ルフィが男の名前を呼ぶとその場にいた海兵達からざわめきが起こる

「《火拳のエース》……白ひげ一味の者がここで何をしている？」

「ちよつと人探しをな」

スモーカー大佐の疑問の声にエースは不敵に笑って答える

「ちっ！」

スモーカー大佐は舌打ちをしながら煙にした両手を二度ルフィへと伸ばす

だが、エースの火によって遮られる

「俺の火とあんたの煙じゃ勝負はつかねえよ…覇気も使えないみたいだしな」

エースの言葉にスモーカー大佐は銜えていた葉巻を強く噛み締める

自分よりも10以上も年若いライトとの手合わせで負けた原因が覇気だからだ

《モクモクの実》を食べて自然系能力者になって以来の初めての敗北が

スモーカー大佐の脳裏に鮮明に浮かび上がる

「…スモーカーさん、あいつは俺がやる!」

ライトが前に進み出るとスモーカー大佐は拳を握り締めて震える

部下にこの場でもっとも手強い相手を任せなければいけない自身の不甲斐なさに…

だが、己は部下を率いている軍人である

率いている部下達を1人でも多く無事に連れて帰る為には年若いライトに頼る必要

がある

スモーカー大佐は葛藤を抑え込む為に深く紫煙を吸い込む

そして、紫煙を吐き出すとライトに指示を出す

「…任せた」

「おう!」

己の両拳を打ち合わせて気合い十分にライトがスモーカー大佐の言葉に応える

場の空気が詰まり沸騰しようかというその時、場に似つかわしく無い冷静な声色が降り注ぐ

「おやおや、随分と剣呑な雰囲気になっていきますね」

辺りに響く声に反応して顔を上げると、オレンジ色の髪の毛の美少女を抱き上げている紫色の髪の毛の男が空に浮いていた

「海兵、海賊の双方共に成すべき事があるとは思いますが、私も目的があつてこの場に参りましたのでお邪魔させていただきますよ」

その言葉と共に男はゆっくりと空から降りてくる

《天才》、《魔人》と呼ばれ称される男、シラカワ・シユウ

その男は姿を見せただけでこの場を支配してしまったのだった

第115話

アラバスタ王国にやってきてエースを発見したのはいいもの

まさかライト達とルフィ達が争っている場面だとは思いませんでしたね

「な、なんだ!? 賞金首になった俺達を狙ってきたのか!？」

私とナミが地面に降り立った所でウソツプがそう声を上げる

「ウソツプ、貴方はまだ指名手配されてなかったように記憶してますが?」

「お、おう…」

ウソツプは勇敢な海の男になるのが夢なのだが現在は指名手配される程に

海軍や政府に注目されていない

「それと、私は賞金稼ぎですが狙う相手は略奪主義の者と決めています。

なので、今の貴方達は私の獲物ではありませんね」

ルフィが船長である間は問題無いでしょうがそれ以降はどうかはわかりませんから

ね

「シラカワ博士!」

ウソツプと会話をしているとルフィ達と一緒にいた水色の髪的美少女が私の名を呼

んできた

「…誰？」

ナミが私と腕を組み少々不満な声を上げる

そんなナミも可愛いですが本能的な部分で恐怖を感じるのは男の性でしょう

「さて…？」

私は水色の髪的美少女の顔を見据える

…確かにどこかで見た覚えがありますね

そもそも何故彼女はここに？

アラバスタ王国に何かが…アラバスタ王国？

「ひょっとして、ビビ王女ですか？」

私が名を呼ぶと彼女は笑顔になる

だが、それを見た海兵達は驚きの表情を浮かべた

「8年振りですね、ビビ王女」

「昔の様にビビで構いません、シラカワ博士」

「では、そのように」

私がビビと会話をしているとナミが私の腕を掴む力が強くなっていく

「…シユウ、なんで王女様と知り合いなの？」

「8年前の特効薬を造った一件を覚えていますか？」

「うん」

「その時に世界政府の会議に呼び出されたのですが、そこで彼女とお会いしたのですよ」

私の言葉にナミは理解を示した

「なるほどねえ…」

「どうかしましたか、ナミ？」

「別に、何でもないわよ」

ナミが拗ねているのがわかると私は思わず笑ってしまふ

「こういったナミを見るのは初めてだったからだ」

「あの、シラカワ博士！私に力を貸していただけませんか？」

私とナミはビビの方へと顔を向ける

「状況を見るに海軍から助けて欲しいと？」

「いえ、そうではありません！」

ビビの言葉に私達だけでなく海軍からも注目が集まる

「アラバスタ王国を救うのに力を貸して欲しいのです！」

ビビ王女の言葉を聞いて私は首を傾げる

「七武海のクロコダイルがアラバスタ王国の乗っ取りを計画してるんです！」

「…確か、サー・クロコダイルはアラバスタ王国の英雄だったと記憶してますが？」
私の言葉に海軍の幾人かが頷く

「それは…」

「真実がどうかはわかりませんがここに仕事熱心な海軍の方々がいるので
相談してみてもどうでしょうか？」

ローグタウンからルフィ達を追ってくる程の気概を持った海兵達なのだから
事が有れば七武海と一戦交えるぐらいはやるでしょう

それに彼女の言葉が真実であった場合、政府に海賊行為を容認されている七武海を
討伐するとなると政治的問題が発生する可能性があります

それに、歴史が長く大国であるアラバスタ王国を個人的に救ったとすると
海軍の面子を潰す事になりますからね

ならばスモーカー大佐達を巻き込んでしましましょう

「そう言うわけですので彼女の相談に乗ってはいただけませんか、スモーカー大佐？」
「…麦わら達を見逃せというのか？」

「それとはまた話が別かと」

私がスモーカー大佐に話を振ると海兵達からざわめきが起こる

「久しぶりに会ったと思えば相変わらずだな、シユウ」

「そちらこそ変わりないようですね、エース」

先程までライトと対峙していたエースが気軽な様子でこちらに歩いてくる

「なんだ？エースとシユウは知り合いだったのか？」

私とエースの会話を聞いていたルフィがそう話す

「ああ、2年前からの付き合いだな」

「ふ〜ん」

エースの言葉にルフィが頷く

「さて、私が用事があるのは貴方なのですよ、エース」

「俺か？」

「ええ、貴方を白ひげの元に連れ戻すのがここに来た理由ですね」

私の言葉にエースが不満な表情を浮かべる

「シユウ、俺にはやる事が…」

「何も言わずに飛び出したと伺いましたよ？」

エースの言葉を遮りそう言うのとエースは表情をひきつらせる

「た、たしかにそうだけだよ…」

「マルコと白ひげは大分ご立腹でしたよ」

私の言葉にエースはうめき声を上げながら後ずさる

「で、でもよ…」

「言うことを聞かない時は手荒な手段を取っても良いと許可を得ています」

「マジかよ…」

私の言葉にエースは頭を抱えてため息を吐く

「エースの事ですからこのまま素直に帰るのに納得がいかないのでは？」

「…まあ、たしかにそうだな」

そう言つてエースが拳を突き出してくるので私も拳を突き出して合わせる

「そんじゃ決闘やるか！」

エースの言葉に周囲の者達は驚きの表情を浮かべる

どうやら急展開過ぎてついてこれないようだ

「ライト、意を決していた所を悪いのですが…」

「あく…気にすんな！いきなり来て散々引つ掻き回して今更だろ！」

ライトの言葉に私は苦笑いするしかない

「ナミ、そう言うわけですので少し離れていてください」

「負けちゃダメよ、シユウ」

そう言つてナミはビビに見せつけるようにしてシユウの頬に口付けをする

シユウから離れる際にナミはビビの方へと向かったのだがその表情は勝ち誇つたも

のだった

情況についていけずに呆然としているたしぎをライトが引つ張つて場から離す
他にも情況についていけない海兵へとライトは声を上げて離れさせていく

ルファイ達とライト達が町外れの砂丘へと身を隠して決闘の場が出来上る

海賊と海兵が見守るといふ奇妙な情況の中で《魔人》と《火拳》の決闘が始まるのだつ
た

第116話

「行くぜ、シユウ！」

まずは挨拶代わりとばかりにエースが代名詞でもある《火拳》を繰り出す以前に見たものよりも大きく、武装色も込められた火の大波が迫ってくる

「成長しましたね、エース」

だが、そんな状況でも慌てずに私は言葉を続けていく

「ですが、成長したのは貴方だけではありませんよ！」

手にする木剣に武装色を込めて振り抜く

すると、火の大波は断たれて散っていった

「ヒューー！やるじゃねえか！」

「ククク、この程度ではありませんよね、エース？」

私が挑発するように言葉を掛けるとエースが不敵に笑う

「ああ、今日こそ勝ってみせるぜ！」

エースは全身を火に変えるところちらの至近に飛び込んでくる

そして火が人の形を成すとそこには武装色を拳に纏わせて振りかぶっているエース

の姿が

私は呼応するように木剣に武装色を纏わせて迎え撃つ

そして、互いに撃ち合った衝撃で周囲の砂に波紋が出来上がるのだった



「…すごい」

わたしの近くでシュウの決闘を見ているビビ王女がそう呟く

…わたしがシュウの姿を見守っていた時もビビ王女みたいに見えていたのかしら？

これじゃあベルメールさん達にからかっつてと言っているようなものよ

わたしは少し頬を赤くしているビビ王女の横顔を見る

陽に焼けたから赤くなっていると思いたいんだけど…それは楽観的過ぎよね

「ねえ、ビビ王女でいいのよね？」

わたしが声を掛けるとビビ王女はハツとしたような表情をしてわたしを見てくる

「はい」

「初めましてね。わたしは《シュウの恋人》のナミよ。よろしくね」

牽制の意味を込めて恋人と強調しながらわたしはビビ王女に手を差し出す

「ビビで構いませんよ、ナミさん」

「そう?」

「はい、こちらこそよろしくお願ひしますね」

そう言つてビビはわたしと握手をする

「ナミさん、シラカワ博士は協力してくれるでしょうか?」

「ごめんね、ビビ。わたしにもわからないわ」

個人的にはココヤシ村みたいに海賊に支配されようとしているアラバスタ王国を

守るのを手伝つてあげたいと思うけど…

「なーなー、お前!あの人がシラカワ博士なのか!」

わたしは声が出た方向を向く

「…たぬき?」

そこには青い鼻のたぬきがいた

「たぬきじゃねえ!トナカイだ!」

「ナミさん、トニー君はルフィさん達の船医なの」

「へえ」

ビビの話によるとリトルガーデンと呼ばれる島でウソップが七日病に罹つてしまい

それを治すためにドラム王国に向かった所でこの青鼻のトナカイを仲間にしたみたい

い

「おれ！博士と話がしたいぞ！」

「ふふ、そうね。私も話がしたいわ、トニー君」

ビビと青鼻のトナカイの会話を聞いてわたしは少し警戒する

ビビがシュウと会話したいのは王女としてなのか女としてなのか：

わたしのそんな警戒に気づかず、トナカイとビビの会話は弾んでいく

それを聞き流しながらシュウの決闘を見ていくと遂に決着がついたのだった



「あー、ダメだ！もう動けねえ！」

そうやってエースが砂の上に大の字に倒れる

「私の勝ちですね、エース」

「ああ、大人しく帰って親父達にドヤされるとするさ」

私はエースに手を差し伸べる

「もう少しなんとかなると思ってたんだけどなあ」

「ククク、覇気は使えるようになったのですから後は経験を積むだけですよ」

エースが私の手を掴んだのでエースを引き起こす

「いって…」

「その痛みは自業自得という事で」

「ハハハ！その通りだ！」

私はボロボロになり身体に力が入らないエースに肩を貸す

「それで、シユウはどうすんだ？」

「どうするとは？」

私が聞き返すとエースがため息を吐いてから話を続ける

「わかって聞き返してるだろ」

「ククク」

決闘を終えてエースと話しているとナミがこちらに近づいてくる

「ナミが手助けをすると言えばそうしましょうか」

「海賊の俺が正義を気取るつもりはねえけど…それでいいのか？」

「七武海を相手にするのならナミに相応の覚悟をしていただく必要がありますから」

首を傾げながら聞いてきたエースが私の言葉に理解を示す

「あの嬢ちゃんに経験を積みませるとしても当人に相応の覚悟をか…」

「ええ、その通りです」

「シユウ、お疲れ様」

「どうやらナミが来たようですね」

「では、エースを白ひげの所に連れていきましようか」

「待ってください!」

「転移をしようとした私達をビビが呼び止めてくる」

「博士、アラバスタ王国を…!」

「その件はナミ次第ですね」

「わたし?」

「話を振られたナミが少し驚いている」

「ええ、ナミに七武海と戦う覚悟があるのならばビビを手伝いましょう」

「私の言葉にナミは顎に手をやって考え始める」

「正直に言えば怖いわね…」

「そう言ったナミだが笑顔を見せてくる」

「でも、シユウと一緒に行くなら七武海程度に怖気付く訳にはいかないわよね!」

「本当にナミは強かで素敵な女性になりましたね」

「ではエースを送り届けてきますので一旦失礼します」

「そう言つて私はワームホールを開く」

「ビビ、海軍の方々の説得は任せましたよ」

「はい！」

「それと、おそらく白ひげに歓待されると思いますので合流は明日になると思います。

なのでその間はそちらの判断で自由に動いてください」

ビビが頷いたのを確認して私とナミはエースを連れて白ひげの元に転移した

第117話

エースを送り届けて白ひげの一味に歓待された翌日、頭に見事なタンコブが出来た
エースに見送られて私とナミは再びアラバスタ王国にやってきた

「ビビ達はいないわね」

エースと決闘した場所に転移したのだがそこには誰の姿も無かった

「ではサー・クロコダイルが拠点としていたオアシスへ向かってみましょう」

「そうね、ビビ達の狙いがクロコダイルならそこに向かったのかもしれないし」

そう言つて自然に側に寄つたナミを抱き上げてアラバスタの空を飛んでいく

オアシスにある街にたどり着くと私とナミは見聞色の覇気を使ってビビ達を探した
が

2人揃つて首を傾げる事になった

「ねえ、シユウ？わたしにはビビ達の気配がカジノから感じられるのだけど？」

「奇遇ですね、私も同じ場所から感じます」

そう言つて私とナミは顔を見合わせる

「…遊んでいるわけじゃないわよね？」

「さて、どうでしょうかね？」

私とナミはカジノへと入っていく

カジノは東の海では見られない豪華絢爛な場所だった

「へく、時間があれば少し遊んでみたいかも」

「おや、お金に敵しいナミがギャンブルに興味を持つとは思いませんでしたね」

私の言葉を受けてナミが肩を竦める

「シユウなら必勝法を知ってるかと思っただけど？」

「ククク、ゲームの種類によつてはそれなりに勝てると思いますよ」

カードゲームならカウンティングを用いてそれなりの勝率を出せるでしょう

「流石ね♪それじゃ、早く片付けて遊びましょう」

「立地場所からこのカジノのオーナーはクロコダイルだと思つたのですが…彼を倒した後でも」

経営は続けられるのでしょうか？」

「儲かるんでしょう？なら王家が運営をするんじゃないかしら？」

「…そこまで国力に余裕が残ればいいのですがね」

国の乗っ取りをするのならば内乱を起こす可能性が高い

そして、古今もつとも国力を失うのが内乱だ

カジノ等の娯楽施設を運営出来るほどに余裕が残るかどうか…

私とナミはカジノの奥へと進んでいく

そして地下室に辿り着いて目にしたものは牢に入れられているライト達とクロコダイルに捕らわれたビビの姿だった



予定が狂った

私は目の前の牢に入れられた者達を見てそう感じている

「流石はサー・クロコダイルって言っているのかしら、姉さん？」

「彼等が間抜け過ぎるだけじゃない？ロビン」

ルフィ達が案内板にバカ正直に従ってこの地下室の牢に自分から入るのは原作通りなのだけど

そこに本来いるはずのナミの姿が無いのは気掛かりね

代わりに海兵のライトとかいう青年がスモーカーと一緒に牢に入っているのだけど

…

私はそのライトに目を向ける

この状況に頭を抱えて悶えているわね
顔立ちは：うん、悪くないわね

ライトなんて名前に覚えはないし、彼は私と同じ転生者かしら？

もしそうなら彼と協力を結べるかもと考えるけど私は頭を振ってその考えを否定する

無理ね、私はロビンと一緒に指名手配されている《オハラが悪魔姉妹》だもの
彼は私を追う立場にある海兵：：やっぱリルフイ達が無難ね

はあ：：エース様に逢いたかったのにもういないなんて：：運が無いわ

「ため息をついてどうしたの、姉さん？」

「なんでもないわよ、ロビン」

そう言つて私は妹のロビンに笑顔を向ける

オハラをバスターコールで吹き飛ばされてから妹のロビンと一緒に続けた逃亡生活
私一人だったら間違いなく心が壊れたかやさぐれていたわね

それにしても：：我が妹ながら凄い身体に育ったものね：

前世の知識で成長期には栄養関係に気を付けていたのだけど、その結果ロビンは
原作以上に凄い身体に育ってしまった

対して私はスレンダーな身体：

そうスレンダーなの！

決して小さいわけじゃないわ！

平均よ！平均！

ロビンが大きい過ぎるのよ！

心の平穩を保とうと悶えているとそんな私を見たロビンが首を傾げる

プルンツ♪

首を傾げた拍子に凶悪な圧力を持つ2つの物質が揺れる

「くっ！」

「姉さん、本当に大丈夫？」

妹の見事過ぎる肢体が妬ましいのに妹の純粹な優しさのせいで妬めない！

もう！そんな凶悪な身体をしているのに無防備過ぎよ！

私が悪い男に捕まらないように守るしかないじゃない！

決してロビンに先を越されたくないわけじゃないわ！

…わけじゃないわ！

そんな事を考えているとルフィやライトと話していたクロコダイルが高笑いをする

高笑いと共に私の耳に斜め後方にある地下室の扉が開く音が聞こえてくる

バロツクワークスの誰かが報告にでも来たのかと目を向けるとそこには違う人物の

姿がある

長身瘦軀で紫の髪に白いコートを来た男

私達姉妹にとって最悪の相手の一人であるシラカワ・シユウがこの場に現れたのだつ
た

第118話

地下室に入り状況を視認すると私は1つため息を吐いた

「海兵と海賊が一緒に牢に入っているとは面白い状況ですね」

私の皮肉な言葉にルフィ以外の知人達が目を逸らす

「……てめえはシラカワ・シユウか？」

「こうして会うのは初めてですね、サー・クロコダイル」

クロコダイルとは直接の面識は無いが賞金稼ぎをしていた時に勧誘された事がある

私はクロコダイルと会話をしながら周囲の状況を確認していく

すると、クロコダイルの近くにいる2人の黒髪の女性の内の1人が

私を強く警戒しているのを感じた

どこかで見た覚えがありますね……

「俺の部下になりにきたのか？」

「その件では使者の方にお断りを伝えた筈ですが？」

「ほう？じゃあ何をしにきた？」

流石は七武海と言った所でしようか。腹が据わってますね

「人探しですよ」

「ほう？誰を探しにこんな所まで入り込んだんだ？」

「白ひげの依頼で《火拳》のエースを探しているのですよ」

私の言葉に黒髪の女性が驚きの表情を浮かべた

そして、私の言葉を聞いたルフィが首を傾げている

私がアラバスタ王国に來た理由に嘘はありませんが既に終わった事ですからね
出来ればクロコダイルとの腹の探りあいの邪魔をして欲しくないのですが…

「なあ、エースの…」

ルフィが口を開いたその時、ライトが見事な早さでルフィの口を手で塞いだ
私の後ろに控えているナミがライトの行動を見てホツと一息吐いている

「麦わら！暴れんじゃねえ！」

「モガガ！モガモガ！」

牢の中で2人はゴロゴロと転がり回っていく

クロコダイルが訝しげな目を向けるが…さて、どう誤魔化しましょうか？

「…そう言えば、その《麦わらのルフィ》はエースの義兄弟と聞いていますね」

「ほう？グランドラインに來たばかりのルーキーの事まで知ってるとはな…」

クロコダイルが私に関心したような表情を見せる

「やはり、てめえは欲しいな」

「私は誰の下にもつく気はありませんよ」

私がクロコダイルとのやり取りを続けていると黒髪の女性が目を見開いて驚いている
る

その視線の先を辿ると…ナミ？

彼女は何故ナミを見て驚いたのでしょうか？

気になる所ですが…今はクロコダイルに捕まっているビビをなんとかしましょうか

「さて、8年前の縁もあるのでコブラ国王に挨拶をしたいのですが…そちらにいる

ビビ王女をお貸しいただけませんか？サー・クロコダイル」

クロコダイルは私の言葉に目を細めて何かを思案している様子を見せる

「…それには及ばねえ、俺が案内してやる」

「貴方がアラバスタ王国の英雄だということは存じていますが、国王との謁見に

関与出来る程の権限を有しているとは思いませんでしたね」

「コブラは王族にしては腰が軽いからな」

「確かにコブラ国王は名君と言える広い見識の持ち主でしたね」

先程まで不安な表情をしていたビビがコブラ国王を称賛されたからなのか笑顔を見せる

「ですが、そんなコブラ国王だからこそ狙う輩もいるようですね」
「…何が言いたい？」

私は見聞色で初めてクロコダイルに警戒の感情を感じとる

「貴方が私を勧誘するために放った部下を有する組織…確かバロックワークスでしたか？」

「そうだ」

「七武海…つまり貴方は海賊ですが、その海賊の貴方が海賊としての仲間や部下ではなく

別の組織を作る…一体、どのような心境の変化があつたのでしょうか？」

私の言葉を聞いたクロコダイルが歯を噛み締める

見聞色で感じるクロコダイルの感情は動揺や怒りといったものだ

「てめえ…何を知っている？」

「ククク、私は知っている事を知っているだけですよ」

余裕を見せていたクロコダイルから余裕を感じ取れなくなつた

今のクロコダイルは強かさは感じるのですが海に生きる男達が持つ自信が感じられ
ませんね…

気になる所ではありませんが、機会が訪れたのですから畳み掛けましょうか

「もう一度伺いましょう…：ビビ王女をお貸しいただけますか？」

クロコダイルはコメカミに青筋を浮かべる程に歯を強く噛み締めている
たつぷり30秒程間が空いてからクロコダイルが口を開いた

「…わかった」

そう言つてクロコダイルはビビから離れる

その状況に驚いているのかビビは戸惑いながらこちらに歩いてくる

「あ、あの…：シラカワ博士？」

「では、コブラ国王への取り次ぎをお願いしますよ、ビビ王女」

そう言つて私は踵を返して部屋を出ていく

自然に腕を組んでくるナミと共に歩き出しながら一瞥した地下室の牢には

私に向けて親指を立てるライトとルフイの姿がある

さあ、人質は助け出しました

後は自分達で何とかしてください

私は親指を立てる2人に軽く微笑みを返して地下室を後にするのだった

第119話

「あ、あの…シラカワ博士？」

オアシスにあるカジノからビビを連れ出すとビビが疑問の声を上げた

「なんですか、ビビ？」

「ルフィさんやライトくん達を助けなくてもいいんですか？」

「ライト達ともかく、ルフィ達は自業自得でしょ？」

ビビの言葉にナミが答えるとビビは納得がいかないのか渋い表情をした

「ナミの言葉通りですが彼等を助けるだけの時間的猶予はあるのですか？」

「それは…」

「優しいのは結構ですが目的を忘れてはいけませんよ」

ビビは「目的…」と眩くと強く頷いた

「ではビビが納得した所で行動を開始しましょうか」

「シユウ、どうするの？」

「先ずは知っている事を教えていただけますか、ビビ？」

私の言葉を受けてビビがクロコダイルの計画を話していく

要約すると反乱軍を扇動しているようだ

「なので反乱軍を止めたいのですが…どうでしょうか、シラカワ博士？」

「…それだけでは弱いですね」

「弱い…ですか？」

私の返答にナミとビビが顔を見合わせて首を傾げている

「でも、反乱軍のリーダーは私の知り合いで…」

「ビビ、クロコダイルはバロックワークスを率いているのをお忘れですか？」

私の言葉にビビが目を見開く

「私がクロコダイルの立場なら反乱軍を表に立たせて自分達は裏でコブラ国王を暗殺し

ます」

「で、でもお父様が死んだら誰が国を…」

「ビビ、貴方を傀儡にする、もしくは貴方を妻とするなど方法は色々ありますよ」

私の言葉にビビが唇を噛む

「反乱軍を表に立たせてコブラ国王を暗殺、そして自らの手で反乱軍を鎮圧すれば

アラバスタ王国国民には救国の英雄として迎えられるでしょうね」

「そうなつてしまえば貴方が何と訴えてクロコダイルを否定しようともアラバスタ王国

民は

貴方の言葉を聞き入れないでしょう」

ビビが手から血を滴らせる程に強く握り絞めている

「クロコダイルの計画の全容はわかりませんがコブラ国王の安全を確保するのが最優先です」

「でも、それでは反乱軍と正規軍の戦いを止める事が…」

ビビは反乱軍の者達もアラバスタ王国民として考え救おうとしているようだ

ビビのこの優しさは平時においては間違いない美徳でしょう

ですが、今の状況においては少し行動の枷になってしまいますね

「ビビ、貴方の目的は何ですか？」

「…クロコダイルからアラバスタ王国を守る事です」

「ならば、優先するべき事がわかるはずですよ」

「ねえ、シユウ？反乱軍の方は何とか出来ないの？」

ビビの葛藤を見兼ねたのかナミが私にそう聞いてくる

「それをするにも先ずはコブラ国王の身柄をこちらで確保しなければなりません」

「どういうこと？」

「コブラ国王の身をクロコダイル側に確保されると影武者を用意される可能性があります」

私の言葉にナミとビビが顔を見合わせる

「バロックワークスにどのような人材がいるのかは存じませんが、今回の乗っ取りの為に

クロコダイルが周到に準備をしてきたのなら変装が得意な者、もしくはコブラ国王に容姿が似ている者の1人くらい用意していてもおかしくはないですからね」

私の言葉を聞いてビビが口を開いて驚く

「ミスター・2…」

「ビビ」

「《マネマネの実》を食べた能力者で右手で顔を触れた相手に変身出来る能力者です…」

それはまた随分と今回のアラバスタ王国乗っ取りに有用な能力者ですね

「では、ますますコブラ国王の身をこちらで確保する必要がありますね」

私の言葉にビビが強く頷く

「では案内をお願いしますよ、ビビ」

先導をするビビに私とナミはついていく

そしてコブラ国王のいるアルバーナ宮殿に辿り着くと

私は8年振りにコブラ国王と再会するのだった



一方、シユウ達が去った地下室ではクロコダイルが目に見える程の怒気を発していた
「…計画の変更だ。オフィサー・エージェントに直ぐに繋ぎを取れ」

クロコダイルの言葉を受けてニコ・ルビーとロピンの姉妹は顔を見合わせる

「ボス、まだ反乱軍が動いていませんが？」

「ビビ王女がシラカワ・シユウをコブラ国王の所に案内するまで何も話さないと思うか
？」

ルビーの疑問に答えるクロコダイルの言葉にニコ姉妹は首を横に振る

「もしくは既に話していてその牢の連中と組んでいた可能性もある」

「では、何故ビビ王女を？」

「…ここは場所が悪い。俺の能力を十全に発揮できないからだ」

クロコダイルはロピンの言葉にやや目を逸らすようにして答える

「ともかく計画の変更だ。直ぐに動け」

「わかりました。それと、彼等はどうしますか？」

ルビーの言葉を受けてクロコダイルは牢を一瞥するが鼻を一つ鳴らしてから

地下室のドアへ向かって歩き出した

「バナナワニの餌にでもしておけ」

そう言ってクロコダイルは鍵束をルビーに投げ渡して足早に去っていく
クロコダイルの姿を見送ると原作と違う展開になったと
ライトとルビーは頭を悩ませるのだった

第120話

私は投げ渡された鍵束を握り締めながらクロコダイルが去っていった

ドアを見て頭を悩ませ続けていた

クロコダイルが4年の時間を費やした計画を変更する？

原因は？

やはり《シユウ・シラカワ》のせい？

反乱軍による混乱無しにクロコダイルの計画は成功するの？

私は考えを巡らせていく

私はクロコダイルの計画が成功する確率が高いのならばそれに乗つかるのも

悪くないと思つて彼の計画を手伝つてきた

妹のロビンと共に世界政府に世界の敵として認定された事で追われ続けた日々

その日々に一時的に安寧をもたらしたのが七武海のクロコダイル

お互いに利用する関係だったとはいえその事に感謝はしているわ

でも、そろそろ潮時のようね

《シユウ・シラカワ》という《ラスボス》に目をつけられるなんて冗談じゃないわ

クロコダイルとはそれなりに長い付き合いだけどあんなにアツサリとやり込められたのは初めて見たわ

例え原作知識があつたとしても：私はあんなふうにクロコダイルを

アツサリとやり込める事は出来ないわ

それに、あのどこか思わせ振りの言い方は私の知る《シユウ・シラカワ》に似ている

：

私と同じ転生者かどうかはともかく本人と違って行動した方がいいわね

さて、ここでルフィ達を助けて恩を売るとして：問題は転生者と思わしきライトつて

奴ね

彼がルフィ達の仲間だったら話は早かつたんだけど：海軍なんだから面倒よねえ：

安定した収入でも求めたのかしら？

そう言えば《シユウ・シラカワ》と一緒にいた女性つて：ナミよね？

なんでナミが《ラスボス》と一緒にいるの？

というかルフィ達は航海士無しでここまで来たの？

私は頭が痛くなりそうだった

でも、航海士がいらないならその立場で仲間に入る事は出来そうね

私とロビンはグラウンドラインを渡れる航海術を持っているから

大きなアピールポイントになるわ

残る問題は：なんかライトとルフィが仲良さそうに見えるのよねえ：

クロコダイルの言うようにもう手を組んでいるのかしら？

確認する必要があるわね：

万が一クロコダイルの計画が成功した時の保険も残さないといけないわ

はあ：《シユウ・シラカワ》が来てから本当に滅茶苦茶よ：

私は考えを巡らせていく

私達姉妹が生き残る為に必要な行動を



流石シユウだぜ！

アツサリとビビを人質から救いだしやがった！

それに、すかしたクロコダイルの奴があんな表情をするなんてな

ざまあみるだぜ！

でもよ、反乱軍が動く前にオフィサー・エージエントが動くつて：

これ、この先どうなるんだ？

まあ、シユウの奴が関わるんならなんとかするんだらうな

そうなると俺達はここを脱出して取り合えずオフィサー・エージェントをぶつとばすつて事でいいのか？

でも、反乱軍も抑えないといけねえよな？

数の多い反乱軍を抑えるとなるとこつちも数を揃えた方がいいな

う〜ん…：たしぎに部下を率いさせて任せるか？

でもたしぎはちよつと抜けてるから心配だしなあ：

俺がアレコレと考えているとルビーつて女の声が聞こえてきた

「ロビン、貴女はオフィサー・エージェントの所に向かつてちようだい」

「姉さんはどうするの？」

「そろそろ潮時だと思つてね…：だからそこのお兄さん達と『お話し』をしていくわ」

「そう…：気を付けてね、姉さん」

「お互い様にね、ロビン」

2人がそんな会話をしていたが話が終わったのかロビンが地下室から出ていった
「聞いていたんでしよう？それじゃ、ちよつと話に付き合つてくれるかしら？」

そう言つてニコ・ルビーがニコツと笑う

俺は原作にいなかった奴であるニコ・ルビーの行動に警戒するのだった



「おお！シラカワ博士か！久し振りだな」

「ええ、コブラ国王も御壮健の様で」

「ハツハツハツ！国民の事を思えば臥せっている暇など無いからな！」

「ビビの案内でアルバーナ宮殿にて無事にコブラ国王と会うことが出来た

「お父様！」

「ビビ！無事だったか！」

「再会を果たした親子が抱き合っている

「お父様、お話しがあります」

「…反乱軍の事か？」

「それもありませんが…」

「コブラ国王はビビの言葉を遮るように頭を撫でる

「もし国民が私が王で在ることを望まないのならば私はそれを受け入れるのも

「悪くないと思っている」

「お父様！」

「だが、そうではないのだろうか？ シラカワ博士？」

コブラ国王が強い意思を宿した瞳を私に向けてくる

「ご存知だったのですか？」

「私も国政を担う王の端くれだ。今のアラバスタ王国の情勢でシラカワ博士が
ビビと共に私の所に来たことに何かがあると考えるのは当然だよ」

コブラ国王の言葉を受けてビビが事情を説明していく

「なるほど…それで、シラカワ博士は今後はどう推移していくと思うかね？」

「クロコダイルは強行策に出るのではないかと…」

「つまり、反乱軍が動く前に私の暗殺を狙うと？」

「暗殺とは限りませんが御身を狙う事は間違い無いでしょう」

コブラ国王は目を瞑るとため息を一つ吐く

「アルバーナが荒れる事を考えれば王たる私が逃げるわけにはいかんだろう」

「ですがお父様！」

「ビビ…民が混乱した時、誰がそれを鎮めるのだ？」

自らが狙われているというのにそれでも民を思うのですか…変わりませんね、コブラ

国王

「では、アルバーナ宮殿でコブラ国王を護衛する事にしましょうか」

「シラカワ博士？」

「大丈夫ですよ、ビビ。ルフィはどうかわかりませんがライトならばクロコダイルとも渡り合えると私は思っていますから…遊撃は彼等に任せましょう」

私の言葉にビビが心配そうな表情を浮かべる

「シュウ、本当にライトは大丈夫なの？」

「彼は私の好敵手を公言していますからね。それぐらいはやってみせてもらいましよう」

私とナミの会話を聞いたコブラ国王が笑い声を上げビビはため息を吐く

私はクロコダイルの計画を読む為に考えを巡らせる

単純にコブラ国王の身を狙うだけとは思えない…

ならば…？

私はこのアルバーナでクロコダイルが起こすだろう出来事を考え続けるのだった

第121話

「ワニー」

レインベースからアルバーナに向かっていたクロコダイルだが

そこに待ったをかける者が現れた

「…麦わら、何故てめえがここにいる？」

「ん？でけえワニが牢屋を壊してくれたぞ」

クロコダイルを追ってきたのはルフィだった

そのルフィがクロコダイルの質問に答えるのだがルフィは目を逸らして

口笛を吹きながら棒読みで答えた

明らかに嘘である

だが、シラカワ・シユウに心を掻き乱されたクロコダイルは気付く事が出来ない

「ちつ…それで、何をしにきた麦わら？」

「お前をぶっ飛ばしにきたー」

指の骨を鳴らすルフィにクロコダイルは舌打ちを1つしてから対峙する

砂漠にて七武海と新人海賊（ルーキー）がアラバスタ王国の行く末を賭けて

戦いを始めたのだった



時は少し戻り、カジノの地下室ではニコ・ルビーが主となつて話し合いがされていた。「それじゃ、交渉を始めましょうか。お兄さん方♪」

美女であるルビーがウインクをしながらそう言うがその場にいる

男達の中に反応する者はいなかった

ルビーは内心で舌打ちをしたくない思いを抑える

胸なの？ やっぱり男は女に胸を求めると!?

そんな風に胸中で葛藤するルビーだが無事に牢を出れるかどうかという場面であるので

男達は真面目になっているだけである

姉妹は似るものなのか妹は天然の気があり姉はどこか抜けている残念美人である

「…それで、何を交渉するつもりだ？ ニコ・ルビー」

ルビーの葛藤に気付かぬスモーカー大佐が話をきりだす

ルビーは胸中を悟られぬように一拍おいて気持ちを落ち着けてから言葉を返す

「そうね、私が手に持っているものが何かわかるでしょう?」

話し合いの主導権を取るべくルビーが鍵束をチャラツと音をさせてちらつかせる

「まどろっこしいのは性に合わねえ。何が望みだ?」

「あら、早い男は嫌われるわよ?」

「美人なんだからそういうのは自重しろよ!」

スモーカーとルビーの会話に初心なライトがツツコミを入れる

そんなライトの反応にルビーは意味深な流し目を送る

すると、ライトはその目を避ける様にスモーカーの後ろに隠れだした

「ライト…てめえは何がしたかったんだ?」

「…何も言わないでくれ、スモーカーさん」

男には人に言えぬ悲しみを背負っている事があるのだ

「その強面さんに習って単刀直入に言わせてもらうわ。私達姉妹を見逃して欲しいの」

「…《オハラの悪魔姉妹》を見逃せと?」

「その異名、好きじゃないわ」

異名を口にしたスモーカーをルビーは睨みつける

「お前、仲間を売るのかよ!」

「クロコダイルは仲間じゃないわ。上司ではあるけどお互いに利用しあうだけの関係よ」

ライトの言葉にルビーは両手をひろげながら首を横に振る

「ここから出ないとその麦わらさんを捕まえたりとかお仕事が出来ないでしょう?」

「…今回の一件が終わるまでは見逃す。だが、俺の部隊以外は関与出来ねえぞ」

「それでいいわ。自然系能力者の貴方以外なら逃げきれぬ自信はあるもの」

ルビーの言葉にスモーカーは舌打ちをする

「さて、海兵さん達とは話がついたから今度は海賊さん達ね」

そう言つてルビーはルフィへと目を向ける

ルフィは腕を組みながら首を傾げてルビーの言葉を待つ

「麦わらさん、貴方達がクロコダイルに勝つたら私達姉妹を仲間に入れてくれないかしら?」

「いいぞ」

「いいぞ」

ルビーの言葉にルフィは間髪いれずに了承の言葉を口にす

「おい、ルフィ!」

「いいじゃねえか、ゾロ。どうせ俺はワニをぶつ飛ばすんだし」

麦わら一味の中では比較的冷静なゾロがルフィに抗議の声を上げるがルフィは笑い

飛ばした

「それで、お前は何か出来るんだ？」

「これでもそれなりの時間をグランドラインで生きてきたから航海術ぐらい持つてるわよ」

「じゃあお前はうちの航海士だな！」

ルビーの言葉にルフィはニツと笑って応える

「ルフィ、航海士はナミにするんじゃないのか？」

「うん…シユウ達は中々仲間になってくれねえからなあ…それにウソツプが

『早く航海士を仲間にしろー！』っていつも言ってるからちようどいいだろ」

ここまで付け焼き刃の航海術で麦わら一味の航海を支えてきたウソツプは間違いない

く
麦わら一味で一番の貢献者だろう

だが、刻一刻と移り変わるグランドラインの気候に常に気を張り続けるウソツプは

チヨツパーが仲間になってからは毎日の様に胃薬を求めていたのだった

「それじゃよろしくな、ルビー！」

「あら、随分と気の早い船長さんね」

「ししし！俺はワニに勝つからな！」

海楼石製の鉄格子の隙間から手を伸ばしてルフィとルビーが握手を交わす
こうしてルフィとライト達はルビーの手引きで無事に牢を脱する

その後、各々の役割を話し合った後にアラバスタ王国を救う為に奔走するのだった

第122話

「ちっ！手間取らせやがって…」

クロコダイルが右手でルフイを掴み上げている

掴み上げられているルフイの身体は常識では考えられない程に水分を失っていた

「ワ…ワニ…」

クロコダイルが右手に力を入れるとルフイはさらに渴いて気を失ってしまった

「ふん、小者はこのまま砂漠で渴いていけ」

クロコダイルはルフイを無造作に投げ捨てると歩き始める

4年の時を費やした計画を成すためにアラバスタ王国の首都アルバーナを目指すのだった



クロコダイルが去った砂漠に1人の女性が姿を見せる

「…やっぱり初戦は負けるのね」

姿を見せた者は黒髪の美女、ニコ・ルビーだった

「《スナスナの実》の対処法を教えてもダメだった事を考えると本当に勝てるのか疑問ね」

そう言いながらもニコ・ルビーはルフィの口の上で手を開く

「まあ、いいわ。《シユウ・シラカワ》と敵対するよりはマシなものね」

ルフィの口の上にあるルビーの手から水が溢れだす

意識の無い筈のルフィが生存本能なのかガブガブと水を飲んでいく

「人間ってこんなに早く水分補給出来たかしら？」

ニコ・ルビーは自身の能力で造り出した水を飲んで急激に潤っていくルフィを見て首を傾げる

「…スポーツドリンクだからかしら？」

ここでニコ・ルビーの能力を簡単にだが説明しよう

ニコ・ルビーは超人系悪魔の実の能力者であり、その能力は経口摂取した事のある飲み物を

自在に産み出せるようになる能力なのだ

そして、経口摂取した飲み物とは前世をも含むのである

「プロテイン入りの飲み物を飲ませたらパワーアップして復活とかしたりする？」

コテンと首を傾げるルビーの仕草は三十路近くには見えない

大の字に倒れているルフィの指がピクリと動くとルビーは呆れたようにため息を吐く

「…知ってはいたけどこうして目の当たりにすると呆れる程のタフネスね」

パチリと目を開けたルフィはガバツと勢いよく起き上がる

「ワニは!？」

「多分だけどアルバーナに向かったわ」

自分の言葉に答えが返ってきた事でルフィはルビーがいる事に気付いた

「ルビーが助けてくれたのか？」

「そうよ」

「ししし、ありがとなー!」

そう言つてルフィはパンパンと砂を払いながら立ち上がる

「ルビー、アルバーナまで案内してくれ」

「ええ、わかったわ」

ルビーの案内に従つてルフィが歩き出す

手酷く敗れたというのに臆する様子を見せないルフィにルビーは笑顔を見せる

ルフィは次は勝つと手を打ち鳴らしながら思考を巡らせるのだった



「よう、シユウ！手際よくビビ王女を助けたのは流石だったぜ！」

アルバーナ王宮にてコブラ国王の護衛としてナミと共に待機していると
牢を脱したライトが姿を見せた

「そちらも無事に脱出出来たようですね」

「まあな！と、言っていてえんだがなあ…」

ライトが苦笑いしながら牢を脱した経緯を話す

「なるほど、どこかで見た覚えがあると思えばニコ姉妹だったのですか」

「知ってたのか？」

「グランドラインの賞金首の手配書は一通り目を通していますからね」

私の言葉にライトが「へ〜」と感心の声を上げる

「さて、それではどう動いているのか教えていただけますか、ライト？」

「おう！任せとけ！」

「スモーカーさんは部隊を率いて反乱軍の抑えに回ってもらった。スモーカーさんの能力は

「手を捕らえるのに向いているからな」

「代わりつてわけじゃねえがたしぎにオフィサー・エージェントの
抑えに回ってもらったことになった」

「ちよつと、たしぎは大丈夫なの？」

「たしぎが前線に出ることをナミが心配する」

「心配すんなよ、ナミ！たしぎはずつと俺と手合わせをしてきたからな。ローグタウン
では」

「ロロナア・ゾロと互角に渡り合ったんだぜ！…負けただけ」

「最後の一言が無ければもう少し安心出来たのですがね…」

「ですが、ローグタウンでナミとたしぎが手合わせをした時に」

「いい勝負となっていた事に納得がいきましたね」

「麦わらの一味もオフィサー・エージェントの抑えだな」

「妥当な戦力配分ですね」

「それと、麦わらが先にクロコダイルと戦いに行っている」

「…ルフィが？」

「勝てるのですか？」

「いや、どつちかっていうとクロコダイルの足止めが目的だな」

私を知る限りではルフィはまだ覇気を使えない事を考えるとクロコダイルとの相性は悪く勝ち目は薄いのですが…

「ルフィを使い捨てたの？」

「いや、その…ルフィがクロコダイルをぶっ飛ばすって言って譲らなくてよ…」

ナミの言葉にライトが頭を掻きながら答える

己の意思を曲げないのはルフィらしいですね

「それで、ライトの役割は何でしょうか？」

「麦わらが負けたらクロコダイルはここに来るだろう？その時にクロコダイルを

ぶっ飛ばすのが俺の役割だな」

そう言ってライトはため息を吐く

「俺、王族相手の礼儀とか知らねえんだけど…大丈夫か？」

そう言いながらライトは不安そうな表情を浮かべる

「コブラ国王は寛容な方ですので問題無いですよ」

「そうね、ビビの父親だけあって凄い気さくな人だったわ」

私とナミの言葉にライトは胸を撫で下ろす

そんなやり取りをしてた時に不意に強い敵意と共に風の音が入ってきた

「…何事でしょうか？」

私は窓の方へと歩みを進める

外を見てみるとアルバーナを覆いつくさんばかりの巨大な砂嵐が近付いて来ていた
「うそっ!?!砂嵐の兆候なんてまったく無かったわよ!?!」

私の隣にやってきて外を見たナミがそう叫ぶ

「…そうなるにあの砂嵐は意図的に起こされたものになりますね」

私の言葉にナミとライトが表情を引き締める

「コブラ国王とビビの所へ行きましょう」

私達はコブラ国王達の元へ走る

突如襲って来た巨大な砂嵐はアルバーナを巡る戦いを告げる鐘となるのだった

第123話

「おお！シラカワ博士！ちようどいい所に来てくれた」

私がナミとライトと共にコブラ国王達がいる謁見の間に赴くとコブラ国王が
変わらぬ様子でそう言ってきた

「今、巨大な砂嵐がアルバーナに向かつて来ていてな。その対処に兵が動いているのだ。
すまぬがしばらくは外に出ないでくれ。砂まみれになってしまうからな、ハツハツ
ハツ！」

流星は砂の国の住人といった所なのか砂嵐が来てもコブラ国王を含めた
者達に慌てた様子はない

「コブラ国王、その砂嵐についてなのですが」

「…何かあつたのかな？シラカワ博士」

先程まで朗らかに笑みを浮かべていたコブラ国王が表情を引き締めた

「ナミが砂嵐の兆候を感じなかったと言っているのです」

「シラカワ博士の恋人さんがかね？砂嵐は砂の国の民といえどもそう簡単に

察知する事は出来んのだが…」

「ナミは数日先の嵐を予報出来る程に稀有な感覚を持っています。そのナミが予兆を感じ取れなかった事を考えると今回の砂嵐は意図的に起こされた可能性が高いのです」

私の言葉をコブラ国王は戯れ言と捉えずに真剣に聞いている

「つまりシラカワ博士は今来ている砂嵐がクロコダイルによつて起こされたものだと思いませんか？」

「はい」

私の返事にコブラ国王が目を瞑る

「そうか……」

「そう言う訳ですのでビビと共にコブラ国王を護衛させていただきます」

「……すまないがよろしく頼む」

コブラ国王の返事を聞くとナミが直ぐに動いてビビを連れてくる

ナミとビビがこちらに合流したちようどその時にアルバーナ王宮にまで

砂嵐が到達したのだった

「うへえ、すげえ音だな」

砂嵐がアルバーナ王宮を叩く音が大きく響いている

「ハツハツハツ！砂の国であるアラバスタでは日常茶飯事だよ、ライト君」

私はライトとコブラ国王の会話を聞きながらも考えを巡らせていく
「シユウ、どうしたの?」

そんな私に気づいたナミが声を掛けてきた

「なぜ砂嵐を起こしたのかと思ひまして」

「クロコダイルの能力を考えれば自分に有利な状況を作る為じゃねえのか?」

「それには私達に自身が来た事を知られるのを上回るだけのメリットがあるのでしようか?」

私の疑問にライトがそう答えるが私にはどうもしつくりとこない

「ライト、クロコダイルの目的は何でしょう?」

「アラバスタ王国の乗っ取りだろ?」

ライトが首を傾げながら言う言葉は私は首を縦に振って肯定する

「ですがコブラ国王を捕らえる、もしくは暗殺をして反乱軍を潰すだけではクロコダイルは
ルは

アラバスタ王国を手にする事は出来ないのですよ」

私の言葉にナミとライト、そしてビビが首を傾げる

「正確にはそれでアラバスタ王国を乗っ取ってもクロコダイルの治世は

長くは続かないですね」

「何でだ？」

「ライト、貴方の疑問に答える前にクロコダイルの計画を

簡単にでいいので説明をお願いします」

「えくと、コブラ国王を雨を奪った暴君に見せて反乱軍に反乱を起こさせる…だろ？」

「では、真実はともかくとしてコブラ国王を討った反乱軍はアラバスタの国民の目にはどう見えるでしょうか？」

「…正義だろうなあ」

私はライトの答えに頷く

「その正義の反乱軍を潰した場合、クロコダイルは歓迎されると思いますか？」

「あく…無理だろうなあ」

「シユウ、それじゃクロコダイルの計画は成功しないの？」

「いいえ、成功しますよ。反乱軍を悪とすればいいのです」

ナミの言葉に私が答えるとナミ達がまた疑問の表情を浮かべるが

コブラ国王は眉を寄せて歯噛みをする

「シユウ、クロコダイルはどうやって反乱軍を悪にするんだ？」

「多くの民を巻き込む…そうであろう？シラカワ博士」

ライトの疑問にコブラ国王が答える

「いや、巻き込むって…反乱軍はアラバスタの人達を攻撃しねえだろ？」
「何も反乱軍がアラバスタの人々を攻撃する必要はありません。」

そのように見せ掛ければ事足りますからね」

「シラカワ博士、クロコダイルはどのように民を巻き込むと思うかね？」

「直接アラバスタの人々を傷つけた者がクロコダイルの部下だと知られると面倒ですからね」

おそらくは時限式の毒ガスや爆弾といった所でしよう」

コブラ国王の疑問に私が答えるとライト達が目を見開いて驚く

「なので今回の砂嵐は自身に注意を引き付ける事で毒ガスもしくは爆弾の事を知られない為の

誘導だと考えると納得がいくのですが…いかがでしょうか、サー・クロコダイル？」

私が部屋の扉へとそう言葉を掛けると皆が驚きの表情を浮かべる

そして、扉が開かれるとその先にはクロコダイルの姿があった

「…やはり優秀だな、シラカワ・シユウ」

クロコダイルは葉巻に火をつける余裕を見せながらそう話す

「もつとも、それを知っても爆弾を止められなければ意味がねえがな」

「ええ、その通りですね」

私とクロコダイルがそう話しているとライトが前に進み出た

「シユウ、あいつは俺がぶっ飛ばすから爆弾を頼むぜ！」

そう言つてライトは拳を叩き合わせる

「ナミ、コブラ国王とビビの事を頼みますよ」

「うん、任せて！」

そう返事をするナミに私は近づいてある事を耳打ちする

ナミは一瞬驚くが直ぐに表情を戻して無言のまま頷く

私は頷いたナミに笑顔を向けてから爆弾を探しに行く

そして、ライトとクロコダイルの戦いを始まろうとしたその時

アルバーナの各所で麦わら一味とオフィサー・エージェントの戦いも始まるのだった

第124話

「さて、爆弾はどこにあるのでしょうか？」

クロコダイルの相手をライトに、コブラ国王とビビの護衛をナミに任せ、私は、

クロコダイルの計画の要の一つである爆弾を探しにアルバーナの街中に出ていた

「爆弾を効果的に使う場合を考えるにしても、アルバーナの土地勘が無いのが痛いですね」

クロコダイルが言った通りに爆弾を使うと知っても、止められなければ意味が無い「仕方ありません。上空からアルバーナの街並みを見て考えるとしましょうか」

私はそう言つて上空に飛び上がりアルバーナを俯瞰する

そして、その街並みから爆弾の所在を思考していくのだった



シユウが爆弾の所在を探していたその頃、アルバーナの各所で麦わら一味とオフィサー・エージェントの戦いが進んでいた

「ウソツチョー！ハンマー彗星！」

チヨツパーの角を即席の巨大なスリングショットに仕上げて放ったウソツプの一撃が

Mr. 4に決まり、ウソツプとチヨツパーのコンビは勝利を掴んだ

「ど、どうだ！これが勇敢なる海の戦士、ウソツプ様とチヨツパーの力だ！」

一味の者達の命を背負い、その旅路を導いてきたウソツプは慢性的な胃痛と共に海の戦士として確かな成長を遂げていたのだった

そして、別の場所では…

「…礼を言う」

チンツ！

納刀の際の鏗鳴りが辺りに響くと、ゾロと戦っていたMr. 1の身体から鮮血が飛ぶ
Mr. 1との戦いで追い詰められたゾロの渾身の居合いが決まり、ゾロが勝利を掴んだのだ

「俺は…まだまだ強くなれる！」

勝利と共に確かな成長の手応えを掴んだゾロがニヤリと笑う

だが、勝利の代償として大怪我を負ったゾロは体力を回復させるべく、怪我の処置もそこそこに仮眠を取るのだった

ウソツプとチョツパー、そしてゾロによる快進撃が続く中で、サンジは勝利を掴めずに苦戦を強いられていた



「くっ!」

ミス・ダブルフィンガーの棘により、負ってしまった脇腹の怪我を抑えてサンジが呻く

「随分と歯応えが無いわね、ミスター?」

片手を腰に当て、首を傾げながらミス・ダブルフィンガーがそう言う

「…俺は、女は蹴らねえ!」

「素敵な紳士ね、ミスター」

サンジの言葉にミス・ダブルフィンガーが称賛の言葉を贈る

「でも、残念ね。私達は敵なの…容赦しないわ!」

迫る棘を身を振るようにしてサンジが避けていく

一切の反撃が無いことで、ミス・ダブルフィンガーの攻撃はドンドン調子を上げていく

その攻撃の嵐の中で、サンジは反射的に足を上げようとした事で動きを止めてしまうそれが致命的な隙となり、ミス・ダブルフィンガーの棘をまともに腹に受けてしまう「ガハッ！」

「もう少し楽しめると思ったのだけど……これでお別れね、ミスター！」

手を太い棘に変化させたミス・ダブルフィンガーが、サンジを貫こうと踏み込むキンツ！

しかし、サンジを貫こうとした棘は寸での所で弾かれた

「大丈夫ですか？」

眼鏡を掛けた女剣士、たしぎがサンジの窮地を救った

「……眼鏡ちゃん」

「この人は私が相手をします！貴方は他の人の手助けを！」

たしぎの言葉にサンジは歯噛みをする

如何に自身の信念で女を蹴ることが出来なかったとはいえ、守るべき女性に助けられた事が

サンジの誇りを強く傷つけていたのだ

「……すまねえ、眼鏡ちゃん」

「礼はいりません。私達は本来、敵なんですから」

刀を構えるたしぎの背に目礼をしたサンジが、アルバーナの街中へと走り出す。走るサンジは自身の不甲斐なさに怒りが沸いてくる。

だが、この日の経験が後にサンジを成長させる糧となる。

後の時代に《黒足のサンジ》との異名を取る男も、今は名も無きたただの海賊。彼が飛躍するには今一時の時間を必要としていたのだった。



アルバーナ王宮にて始まったライトとクロコダイルの戦いに巻き込まれぬようにナミとビビ、そしてコブラ国王は避難をしていた。

「お父様、どこに向かっているのですか？」

「アラバスタ王国の王家にのみ伝えられる場所だ」

ナミを先頭にして一行は王宮内を走り続ける。

「そこは……」

「地下だ。クロコダイルも知らない場所となるとそこが確実だろう」

一行が走り続けていると、アラバスタの兵士の1人が姿を見せた。

「コブラ国王……無事でしたか！」

「うむ」

敬礼をしながら声を発する兵士の姿に一行は足を止めて、コブラ国王が重々しく頷く
「して、君はなぜここに？」

「はっ！ペル様より反乱軍がアルバーナに姿を見せたと報告がありました！」
「ペルが？」

兵士の報告にビビが反応を見せる

「その件につきまして詳細を報告したいのですが…」

「そこまで言う」と兵士はナミを一瞥する

「構わぬ、近くに寄りなさい」

「では…」

コブラ国王の一言で兵士はそそくさとコブラ国王へ近づく

そして、兵士が耳打ちをするためなのか右手をコブラ国王へ近づけたその時

ドガッ！

ナミがライフルを使って兵士を殴り飛ばし、コブラ国王から引き離れたのだった

「ナミさん!？」

ナミの突然の行動にビビが驚きの声を上げる

「悪いけど、コブラ国王の顔を触らせるわけにはいかないわ、Mr. 2」

ナミの言葉にコブラ国王とビビが驚愕する

そして、殴り飛ばされた兵士が笑いながら左手で自身の顔に触れると、別人へと変わった

「あゝら、どうしてバレちゃったのかしら？」

「シユウが言つてたのよ。クロコダイルは爆弾が失敗した時の保険として、あんたを

コブラ国王に変身出来るようにしようとするつてね」

ナミの言葉にMr. 2、ボン・クレールが大きな声で笑う

「やるじゃなくい。でも、詰めが甘いんじゃないの？」

そう言つてボン・クレールが構えを取る

「ここであちしが、あんたをぶつ飛ばしてコブラ国王の顔に触れば済む事でしょう？」

ボン・クレールの言葉を受けてナミもライフルを構える

「女だからって、甘く見ないでよね！」

「あんたこそ、あちしがオカマだからって甘く見るんじゃないわよ！」

ナミがライフルを振るい、ボン・クレールが蹴りを繰り出す

こうしてアラバスタを巡る戦いの中で、ナミとたしぎの戦いも始まったのだった

第125話

刀と棘が幾度も互いを弾き合っていく

「くっ、やりにくい！」

ミス・ダブルフィンガーが足を棘にして自身の高さを変える事で、彼女の攻撃の角度が

戦いの中で度々変わっていく

「中々やるわね、ミス！」

「貴女こそ！」

ミス・ダブルフィンガーが両手を棘にして刺突を繰り返せば、たしぎが刀の反りを活かして

その刺突をいなしていく

互いに決定機を欠く攻防が続く

そんな中で先に動いたのはミス・ダブルフィンガーだった

「ハッ！」

ミス・ダブルフィンガーは能力者であり、その攻撃は棘にした身体を使って行われる

故に、その攻撃は手によるものだけでなく、足や身体全体も使うのだ
ミス・ダブルフィンガーが棘にした足で蹴りを繰り出し、棘にした髪を使うように頭
を振る

それまでの攻防とリズムが変わった事でたしぎは後手に回るが、何とかしのいでいく
同僚であるライトとの手合わせの経験のおかげだ

戦いの主導権はミス・ダブルフィンガーの物となったが決めきれない

その事にミス・ダブルフィンガーは少しずつ苛立ちを覚える

そして、ミス・ダブルフィンガーは身体のツボを棘で突いて身体能力をアップさせる
更にリズムを変えようと棘による刺突に薙ぎ払いや叩く事も加えるが、たしぎはこれ
もしのぐ

ミス・ダブルフィンガーの猛攻をたしぎは我慢強く耐え忍ぶ

上がってしまった息を整えようとミス・ダブルフィンガーが引けばたしぎが押す

そして、戦いの主導権はたしぎへと移る

愛刀を振るいミス・ダブルフィンガーの身体に少しずつその一太刀を入れていくが、
たしぎの

一太刀が振るわれる場所を瞬時に棘に変えてミス・ダブルフィンガーはしのいでいく
やがて、双方共に完全に息が上がってしまった事で、互いに警戒をしながら離れて息

を整える

「ハア、ハア…しぶといわね、ミス」

「ふう…負けませんよ…いえ、勝たせてもらいます！」

かつて、ローグタウンでゾロに敗れた時の悔しさが、たしぎに強い勝利の渴望を持たせた

「ふふ、貴女とお酒を飲んでみたかったわね」

「牢越しでよければ、お付き合います」

美女2人が柔らかに笑う

だが、直ぐに表情を引き締めて互いに鋭く見据える

砂塵が2人の間を通り抜けるのをキツカケとして両者が踏み込む

たしぎが愛刀を横薙ぎに振るい、ミス・ダブルフィンガーが棘の手で突き込んでいく

両者の影が交わり、砂塵が舞い上がる

やがて砂塵が晴れると、そこには左肩に棘を突き刺されているたしぎの姿が現れた

だが…

棘を突き刺しているミス・ダブルフィンガーの方がゆっくりと倒れていったのだった

「ふう…」

たしぎが一息つく

そして、納刀をして地面に膝をつくときミス・ダブルフィンガーの身体を調べ、命の心配が

無いことを確認すると海楼石製の手錠をミス・ダブルフィンガーに嵌める

そこまで動くと、たしぎは力が抜けたように地面に座り込むのだった

「なんとか、勝てましたあ〜…」

先程までの戦いが嘘のようになってなんとも気の抜ける声を上げる

「痛っ!」

戦いの興奮が落ち着くと、たしぎは左肩を抑えて痛がる

「あいたた…これ、痕が残っちゃいますかね?」

海兵としては名誉の傷かもしれないが、それでも彼女も女性なので気になってしまふ

「うくん…まあ、そうならライトくんに責任を取ってもらいましょか」

たしぎは傷痕が残るのを少しも残念に思っていないように、頬を赤くしながら笑顔を見せる

「?

「今回、私が前線に回る事になったのはライトくんのせいですから…仕方ないですよね

?」

たしぎはまるで誰かに言い訳をするように話すが、そこには気絶している

ミス・ダブルフィンガーしかない

そして傷の応急処置を終えると、たしぎはミス・ダブルフィンガーを右肩に担いで歩き出す

「さて、もう一頑張りしましょうか。ライトくんも頑張っているでしょうからね」

後に、大海賊時代の高名な女海兵として歴史に名を残すたしぎだが、今回の戦いがたしぎが成した最初の大きな武功として記録される事になる

そんな事になるとは露知らず、たしぎはミス・ダブルフィンガーを担いで歩き続けるのだった

第126話

時は少し戻り、たしぎとミス・ダブルフィンガーが戦いを始めた頃、アルバーナ王宮内で

ナミとボン・クレーの戦いも始まっていた

「ハッ！」

「アン！」

「フッ！」

「ドウ！」

「セイッ！」

「オラア！」

「真面目にやりなさいよ！」

「ジヨ——ダンじゃ！な——いわよお——う！」

ナミがまるで踊るように蹴りを放ってくるボン・クレーに一言文句を言うのだが、
当のボン・クレーはこれでも至極真面目に戦っているのである

「あちしの『オカマ拳法』を舐めるんじゃ、な——いわよお——う！」

そう言いながらボン・クレーは飛び蹴りを繰り返す

「くうー！」

ボン・クレーの飛び蹴りを、ナミは武装色を纏わせたライフルで受けるが、

その飛び蹴りの威力は防御の上からナミの身体を飛ばす威力を持っていた

「あらあ？もつと飛ぶと思つたのに、あんた意外と重いのねえ〜い」

「うっさい！ぶつ飛ばすわよー！」

頬に片手をあてながら言うボン・クレーの言葉に、ナミが噛みつく

「もお——う、そんな簡単に怒ってるようじゃ、恋人なんて出来ないわよお——う！」

「あら、恋人ならいるわよ。自慢の恋人がね♪」

ナミの言葉にボン・クレーが目を見開く

「あつ、それは、おめでとうございます」

「えつ？えつと、ありがとうございます？」

戦いを止めてお互いに頭を下げる、そんな奇妙な光景が出来ていた

「なあ——んで、敵のあんたと和んでるのよお——う！」

「あんたのせいでしょうが——！」

ナミとボン・クレーの戦いを見守っているビビとコブラ国王は苦笑いをするしかない

「もう、調子が狂うわね！」

そう言いながらもナミはライフルを振るう

ボン・クレーはナミのライフルを蹴りで受け止める

その後は真面目に攻防が続くがお互いに決定打に欠ける

「罅が開かないわねえーい。それじゃ、こんなのはどう——う？」

そう言つてボン・クレーが右手で自身の顔に触れると、ルフィに変身した

「んがっはっはっ！ どう——う？ 麦ちゃんよお——う？ これでも、あんたは攻撃……っ！」

ナミはボン・クレーの言葉を遮るようにライフルで殴り飛ばした

「なあ——にすんのよお——う！ あんた、麦ちゃんと友達でしょ——う!？」

そんなボン・クレーの言葉にナミはライフルを肩に担いで答える

「わたし、海賊嫌いだから」

ハッキリと答えるナミにボン・クレーは、ルフィの顔のまま口を大きく開けて驚く

「そういうわけだから、遠慮はしないわよ！」

そこからナミの猛攻が始まる

先程までと違うのは、ルフィの体格になったボン・クレーは動きに精細を欠いている

事だ

互角だった戦いの流れがナミへと傾く

何度も強かにライフルで打ち据えられてから、ボン・クレーが漸く元の姿に戻る

だが、その時にはボン・クレーはボロボロになっていたのだった

「ハア、ハア、やるじゃな——い！」

「あんたが自滅しただけでしょ？」

「んがっはっはっ！それもそうねえ——い！」

そう言つてボン・クレーはその場でクルクルと踊るように回りだす

ナミが追撃しようとライフルを振るうと、ボン・クレーは回転を活かして後ろ蹴りを放つ

「くう！」

ライフルで受けたので直撃は避けられたが、後ろ蹴りの威力で飛ばされてしまい、

ボン・クレーと距離が出来てしまった

「悪いけど、奥の手を使わせてもらうわよお——う！」

そう言つてボン・クレーは、背中に身に付けていた白鳥を模した何かを足につけた

「さあ！準備完了よお——う！」

「どこまでふざけるつもりなのよ！」

足に白鳥を模した何かを足につけたオカマ、というシユールな光景にナミがツツコミを入れる

「ジヨ——ダンじゃ、なあ——いわよお——う！」

ボン・クレーがその言葉と共にナミに向かって踏み込んでくる
ナミは迎撃しようとライフルを構えるが：

「白鳥！」

蹴りの態勢に入ったボン・クレーの姿にゾクリと悪寒を感じて、即座に横に身を投げ出す

「アラベスク！」

ポッ！

空気を貫くような音と共に放たれた蹴りは、ナミの背後にあった壁に穴をあけていた
「なっ!?!」

壁の穴を見てナミが驚く

「どう——う？蹴りの力を、この白鳥で一点に集中出来るのよお——う！」

ボン・クレーの言葉にナミは背中に冷や汗をかく

「ちなみに、右がオスで左がメスよお——う」

「どうでもいいわよ！そんな情報！」

思わずツツコミを入れてしまったナミだが、あの白鳥を模した何かによって、ボン・クレーの

攻撃の間合いも変わってしまった事をやっかひに感じている

「それじゃ、行くわよお——うー！」

ボン・クレーがダメージを感じさせない力強さで踏み込んでくる

「アン！」

ボン・クレーが繰り出す蹴りをナミがライフルで弾く

「ドゥー！」

ナミは次に壁に穴を開けたあの蹴りが来ると身構える

だが…

身構えるナミを見て、ボン・クレーがニヤリと笑った

「オラァー！」

ドガツ！

ボン・クレーは蹴りを出さず、裏拳でナミの脇腹を強かに殴り飛ばしたのだった

「くう…つつー！」

床に投げ出されるように倒れたナミは、脇腹を抑えて痛みをこらえる

『『オカマ拳法』だつて言ったでしょお——う？拳法なんだから、

蹴りだけじゃなあ——いわよお——う！』

床に倒れているナミにボン・クレーは追撃をしていくが、ナミは床を転がって避けて

いく

「んがっはっはっ！形勢逆転つてところねえ——い！」

ボン・クレーの攻撃の合間になんとか起き上がったナミだが、その額には脂汗が浮いている

「勝った気になるのは、早いんじゃないかしら？」

「そうねえい、油断せずに行かせてもらおうわよお——う！」

ボン・クレーの攻撃をライフルで弾く度に、ナミは歯を食い縛って脇腹の痛みを耐える

「白鳥！アラベスク！」

ボン・クレーが放つ必殺の一撃を、ナミは身を振って避ける

だが、身体がひきつるようになって脇腹の痛みで動きが止まってしまうと、ボン・クレーに

顔を殴り飛ばされてしまった

「そろそろ降参したらどう——う？」

「…シユウに任せられたのよ？諦めるわけじゃないじゃない！」

ボン・クレーに殴り飛ばされた事で、ナミは口を切って血を流していた
その血を手で拭いながら、ナミが立ち上がる

「んがっはっはっ！いい根性してるじゃな——い！」

ナミが手にしていたライフルの安全装置を動かす

「わたしも、奥の手を使わせてもらおうわ」

ナミの言葉にボン・クレーは両手を拡げておどける仕草をする

「接近戦でライフルを撃つつもり？あちしの蹴りの方が早いわよ——う」

「そう？なら、試してみようかしら！」

その言葉と共にナミから仕掛けていく

アルバーナ王宮の一角で行われているナミとボン・クレーの戦いは、少しずつ

終幕へと近づいてくだった

第127話

アルバーナ王宮の一角にてナミとボン・クレーの激闘は続いていた

「セイツー！」

「ンガッー！」

先に奥の手を切ったボン・クレーが戦いの流れを掴んだのだが、ナミも奥の手をちらつかせる

事で戦いは互角の状態に戻っていた

「オラアー！」

ボン・クレーが蹴りを放つ

ナミはその蹴りを弾き、その反動でライフルを手中で回転させる

すると、銃身を掴んで振るっていた状態から、銃口を相手に向けた状態へと変化したのだが、ボン・クレーはそれに直ぐ反応する

引き金を引かせまいと、足だけでなく手技も交えて連撃を繰り返す

ナミは器用にボン・クレーの連撃を捌きながら持ち手を反転させて応戦する

このやり取りが10分程続いていた

双方共に息が上がっているが、引く様子を見せない

ここで引けば流れを失うという、戦っている当人にしかわからない確信があるからだ
そんな攻防の中で、先に動いたのはナミだった

これまで丁寧ボン・クレーの攻撃を弾いていたが、徐々に避ける動きを見せていく
だが、ボン・クレーも歯を食い縛り連撃の速度を上げて、ナミの動きを抑え込む
この状況、苦しいのはボン・クレーの方だ

連撃を止めればライフルを撃たれる

その事がわかっているのに、無駄撃ちさせようと幾度も誘いとして隙を作ったりする
のだが、

まるでそれをわかっているようにナミは誘いに乗らない

確実にライフルを当てる為、接射しようとは虎視眈々と機会を待っているのだ

ボン・クレーはこれ以上は息が続かないと一か八かの賭けに出る

「白鳥！」

手技のフェイントを入れてリズムを変えてから必殺の一撃に移る

「アラベスク！」

白鳥を模した武器がそのしなりを利用して、ボン・クレーの蹴りを加速させる

だが、ナミは手技のフェイントには引つ掛からずに、身体を回転させながら前に踏み

込む

白鳥を模した武器が、ナミの脇腹を掠めるようにして服を削り取る

ナミは千載一遇の機会を掴み、ボン・クレーの腹に銃口を押し当て、事に成功した
ボン・クレーは来る痛みにも耐えるべく歯を食い縛る

だが、訪れた痛みはボン・クレーが想像したものとは違っていたのだ

「《衝撃弾》（インパクト・ブレット）！」

ドンツッ！

文字通りに腹の奥に響き渡る衝撃が、ボン・クレーを襲う

その衝撃に、強制的に肺の中の空気を押し出され、呼吸が出来なくなる

くの字に折れ曲がったボン・クレーの身体は、ズンツと音を立てて床に倒れた

「ガッ……アガッ！」

空気を求めるように、ボン・クレーは口を開く

そのボン・クレーの様子を見て、ナミは床に膝をついた

ナミも限界ギリギリだったからだ

「……どう？ 《衝撃弾》の威力は？」

ナミはまるでイタズラが成功した子供の様な笑顔を見せる

「わたしのライフルはお養母さんから受け継いだものだけど、恋人に

少し改造してもらってあるの」

息を整えながらもナミの説明は続く

「ライフルで殴った衝撃を吸収、蓄積して、さっきみたいに放出する事が出来るのよ」

コヒュツと音をさせて空気を吸い込んだボン・クレールが咳き込む

「もちろん、普通にライフルとして銃弾を撃つ事も出来るわ：便利でしょ？」

ナミがウインクをしながらそう言うと、呼吸が落ち着いたボン・クレールが身体を起す

「…やるじゃな——い」

先程の衝撃で腹に力が入らないボン・クレールだが、ニヤリと笑って見せる

「でもね、あちしもオカマの端くれ。まだ、負けたわけじゃな——いわよ——う！」

そう言って、フラフラと立ち上がったボン・クレールが構えを取る

「かかって来いや」

そんなボン・クレールを見て、ナミも立ち上がる

双方共に満身創痍：体力の限界も近い

「あんたとは友達になれたかもね」

「あ——ら、奇遇ねえい、あちしもそう思ってた所よお——う」

ニツと2人が笑う

そして、申し合わせた様に2人が同時に踏み込む

繰り広げられる攻防にキレは無いが、双方の気迫が場に満ちていく

ボン・クレールがナミの顔を殴れば、ナミもライフルで殴り返す

ナミがライフルで腹を殴れば、ボン・クレールも意地で殴り返す

泥臭い殴り合いにどこか美しさを感じさせる戦いだが、それも終わりを迎える事になる

何度目かわからない殴り返しに、ナミがよろけたのだ

「白鳥ー」

これが最後と、ボン・クレールが必殺の一撃の態勢に移る

「アラベ……ンガッー」

だが、衝撃弾を受けたダメージが、この土壇場でボン・クレールの動きを阻んだ

その隙に、ナミが銃口をボン・クレールの腹に押し当てる

それを見たボン・クレールは、敗北を認める様に笑ったのだった

「衝撃弾（インパクト・ブレット）ー」

ナミが引き金を引くと、ドンッ！という音と共にボン・クレールの身体がくの字に折れ曲がる

その一撃で意識を失ったボン・クレールは、ゆっくりと倒れていくのだった

第128

ドサツ！

ボン・クレーが床に倒れるとナミは大きく息を吐く

「はあく…何とか勝てたわね…」

ペタンと自分も床に座り込みながらナミが呟く

「ナミさん！」

戦いを見届けたビビがナミに走り寄る

「ビビ、勝ったわよ」

「ありがとうございます、ナミさん。でも、ボロボロですね…早く治療しないと」

そう言つてビビが身に付けていたポーチをゴソゴソと漁る

「これぐらい大丈夫よ」

「でも、痕が残っちゃうかもかもしれませんよ？」

「その時は、シユウに責任を取ってもらうから♪」

ニッコリと笑いながらナミが言いきる

彼女はただでは転ばない強かな女性なのだ

「…ダメです！博士が軟膏とかを置いていってくれたので治療しますよ！」

ビビの言葉に少し間があつたことにナミは気付く

ナミはそれを問い質そうとするが、そこにコブラ国王が割り込む

「よくやってくれた、ナミ殿」

「あ、はい、ありがとうございます」

タイミングを見計らつたような言葉掛けに、ナミの勢いが止まる

「私がその男…いや、オカマか？とにかく、その者を拘束しておくので、ナミ殿は

ビビの治療を受けておきなさい」

コブラ国王の言葉を受け入れて、ナミは大人しくビビの治療を受ける

そして、ナミの治療と、ボン・クレーの拘束と応急処置を終えた一同は、

拘束したボン・クレーを引き摺りながら地下へと向かうのだった



ナミ、たしぎの戦いは終わったが、ライトとクロコダイルの戦いはまだ続いていた

「オラッ！」

「フンッ！」

ライトの拳をクロコダイルが左の義手で弾くが、拳に纏っていた電気がクロコダイルに

少なくないダメージを与える

電気により硬直したクロコダイルにライトが追撃しようとするが、それより早くクロコダイルが身体を砂化してその場を離れる

「だあ——！またか！めんどくせえ！」

ライトは攻撃に武装色の覇気を纏わせる事で、クロコダイルに攻撃を何度も当ててきたが、

クロコダイルもグランドラインを生き抜いてきた猛者である

そう簡単に戦いの流れをライトに渡さない

「ちっ！てめえのような若僧が武装色を使えるとはな……」

「おうよ！おめえがいくら砂になろうとも、俺の拳をお見舞いしてやるぜ！」

クロコダイルの言葉に、ライトは拳を前に突き出して答える

「ふんっ！てめえの様に粋がる若僧の相手は腐る程してきた……」

そう言つてクロコダイルは右手で床に触れると砂へと変える

「おっと！」

ライトが砂に変わった床に足を取られないように飛び退くと、クロコダイルはその身

体を

砂に変えてライトの背後に回り込む

そして、クロコダイルは右手をライトに伸ばすが、ライトはその右手を下から殴り上げる

「ちっー！」

「あつぶねー！」

舌打ちをして離れるクロコダイルを見て、ライトは冷や汗を流す

クロコダイルの右手に捕まれば、ライトは渴いてしまい敗北するからだ

それは、双方共にわかつている事である

クロコダイルには必殺の一手がある

だが、ライトには無い

いや、クロコダイルには相性が悪くて必殺となりにくいというのが正しいだろう

ライトはクロコダイルの胸や顔に直接拳を叩き込めれば勝ちとなるが、クロコダイル

は

ライトの身体のどこかを右手で掴めば勝ちなのである

その為、ライトは思いきった攻勢に出ることが出来ずに戦いが長引いているのだが、ライトに焦りは無い

こうして足止めさえすれば、あの優秀な友人が爆弾を何とかしてくれればと信じているからだ

ならば、自分はクロコダイルをコブラ国王達の所へ向かわせなければいい

ついでに、自分がクロコダイルをぶっ飛ばせば文句無しの結果だ

ライトはそう思いきっているのである

逆にクロコダイルの方には、僅かにだが焦りがある

ボン・クレールをコブラ国王の元へ向かわせはしたものの、コブラ国王の身柄を

手元に確保して、計画を確実なものにしたいのだ

その為、クロコダイルは目の前の男との戦いが、硬直状態に近い現状を好ましく思っていない

なので、クロコダイルはライトを無視してコブラ国王達を追おうかと考えた事もある
だが…

「荊!」

ライトが高速でクロコダイルとの間合いを詰める

「ちっ!」

クロコダイルは舌打ちをしながらもライトの動きに対応する

「おい、なんか気が散ってるんじゃないか?」

「…ガキが!」

ライトの《荊》による高速移動が、クロコダイルの離脱を許さない
下手に砂化をしようとすれば、あつという間に間合いを詰められて、
電気の拳をくらうだろう

その為、クロコダイルはこの存外に手強いライトとの戦いを続けるしかないのだ
だが、その戦いに転機が訪れる

「ワニ!」

なんと、一度倒れた筈のルファイがこの場に現れたのだった

「麦わら!?!」

ルファイが現れた事で、ライトの気が逸れる
経験豊富なクロコダイルは直ぐに動き出す

身体を砂化してその場を離れ始めたのだ

「おい、麦わら!今は俺が戦ってるんだ!邪魔すんじゃねえ!」
「イヤだ!ワニは俺がぶっ飛ばすんだ!」

ライトとルファイが言い合っている間にも、クロコダイルは動き続ける

そして、クロコダイルが離脱した事に気づいたライトとルファイは、慌てて後を追うの
だった

第129話

ボン・クレーとの戦いを終えたナミとその一行は、アラバスタ王家にだけ伝えられる地下へとやってきていた

「へー、砂漠の土地にこんな地下があるのね」

「うむ、地下であるから昼でも過ごしやすくね。そのため熱さの厳しい時などは時折涼みに来る事もあるのだよ」

ナミの言葉にコブラ国王は自慢をするように言う

「お父様……たまに姿が見えないと思っただらそんな理由だったんですね」

コブラ国王の言葉を聞いたビビは呆れた様のため息を吐く

「なるほど……ここが王家にのみ伝えられる場所か」

突如一行の耳に届いた声に、地下の空気はピンと張り詰める

「クロコダイル!?!」

ビビが驚きながら声の主の名を呼ぶ

名を呼ばれたクロコダイルは、一行の近くに縛られている者を一瞥すると鼻を鳴らす

「ふん、Mr. 2を倒したのか……」

クロコダイルはそう言うと、ナミをギロリと睨みつける

「ええ、そうよ。残念だったわね」

「小娘が…俺の計画を邪魔するか…」

余裕を見せるためか、はたまた落ち着くためか、クロコダイルは葉巻に火を着ける
「例え女でも俺の邪魔をするなら…潰す」

紫煙を吐き出しながらクロコダイルが告げる

クロコダイルの言葉には抑えきれぬ怒気が混じっていた

アラバスタの英雄の怒りに、コブラ国王とビビは気圧されぬ様に腹に力を入れる

そして、そんな2人を守る様にナミが一步前に進み出る

「聞こえなかったか、小娘？」

「邪魔をすれば潰す、だったかしら？」

肩を竦めながら言うナミの姿にクロコダイルは僅かに苛立つ

「生憎、あんたは私の恋人との約束を違えるほど魅力的じゃないわね。出直してきなさい」

堂々と言い切るナミの姿は、ボン・クレーとの戦いを超えた事で自信に満ちていた
クロコダイルは紫煙を吐き出すと、葉巻を右手で掴んで砂に変える

そして、右手から砂に変えた葉巻をサラサラと落としながらクロコダイルは歩く

ナミはライフルを構えると、自ら踏み込んでいく
恋人との約束を果たす為に、ナミは臆す事なく戦いを挑むのだった



「ワニー！」

ルフィとライトが地下に辿り着くと、そこにはナミを踏むクロコダイルの姿があった
「麦わらと電気の小僧か……」

クロコダイルはゆっくりとルフィ達に首を向ける

「動けば小娘を殺す」

クロコダイルの言葉にルフィとライトは歯を噛み締めてその場に止まる
「ビビ王女、Mr. 2の拘束を解け」

クロコダイルの命令にビビは歯噛みをする

友人であり、ボン・クレーから守ってくれた恩人であるナミを助けたい
だが、ボン・クレーを解放すればアラバスタ王国が危ない

「ビビ、拘束を解きなさい」

そんなビビの葛藤を断ちきる様にコブラ国王が言う

「お父様……」

「私が全ての責任をとる。その者の拘束を解きなさい」

再度のコブラ国王の促しにビビがゆっくりと動き出す

「ダメよ!」

そんなビビにナミが待ったをかける

「拘束を解いちゃダメよ、ビビ!」

クロコダイルは声を上げるナミを踏む足に力を込める

「くっ!」

「小娘……黙っているろ」

足に力を込めるクロコダイルを見てライトとルフィが飛び出そうとする

だが、そんな2人をクロコダイルは一睨みで制する

「わたしは、大丈夫だから!」

ナミは痛みに耐えて気丈に笑顔を浮かべる

そんなナミを黙らせようと、クロコダイルは更に足に力を込める

「動くなよ、小僧共……」

隙を見せないクロコダイルに、ライトとルフィは歯を噛み締めて耐える

そして、クロコダイルはその場にいる者達を脅すように左手の義手を見せつける

「もう一度だけ言う：Mr. 2の拘束を解け」

クロコダイルはゆっくりと義手を頭上に上げていく

ビビが此処までかと動こうとしたその時

「拘束を解く必要はありませんよ、ビビ」

不意に背後から聞こえた声に、クロコダイルは直ぐに振り返る

すると、自然系能力者であるクロコダイルを何者かが拳で殴り飛ばしたのだった

「大丈夫ですか、ナミ？」

声の主は膝をついて傷ついたナミを抱き起こす

「もう、遅いわよ。シユウ」

「申し訳ありません。ですが、待ち合わせ場所がわからなかったもので」

クロコダイルを殴り飛ばした者はシラカワ・シユウだった

シユウはそのままナミをゆっくりと抱き上げる

所謂、お姫様抱っこだ

「ライト、ルフィ、後は任せますよ」

シユウはそう言ってクロコダイルを一瞥してからビビ達の元へ歩いていく

だが、クロコダイルを一瞥した時の目は底冷えする程に冷たい目だった

「ですが、貴方達が不甲斐ない戦いをするようでしたら、私がクロコダイルを

潰しますので気を付けてください」

背中を向けたまま言うシュウの言葉に、ライトとルフィは唾を飲むように頷くアラバスタ王国を巡る騒動は終演へと近づいていた

第130話

「俺がクロコダイルをぶっ飛ばす！下がってろ、麦わら！」

「イヤだ！俺がワニをぶっ飛ばすんだ、ビリビリ！」

「ビリビリ言うな！」

シユウが地下に到着して、クロコダイルの打倒をライト達に任せただが、

2人はどちらが戦うかで揉めていた

「俺が最初に戦ったんだぞ！ビリビリ！」

「お前、負けたじゃねえか！」

「次は勝つから大丈夫だ！」

どうやら、どちらも譲るつもりはないようだ

そうこうしている内に、シユウに殴られたクロコダイルがゆっくりと立ち上がる

「シラカワ：何故てめえがここにいる？」

「爆弾の処理を終えたからですよ、クロコダイル」

クロコダイルはシユウの返答に歯噛みをする

「シラカワ博士、爆弾はどうしたのかね？」

「アラバスタの砂漠のど真ん中に埋めてきました。日光浴を楽しんでいる現地の生物には

傍迷惑な騒音になるでしょうがね」

シユウの言葉にコブラ国王は苦笑いする

「そうか…事が終わったら相応に礼をさせてもらいたい」

コブラ国王の言葉にシユウは素直に頷く

断れば王家の面子を潰すことになりかねないからだ

「…随分と気が早いな、コブラ国王」

怒気を表した表情でクロコダイルが言う

「まだ、俺の計画は終わってねえ！」

まるで自身に言い聞かせるようなクロコダイルの姿に、コブラ国王は憐れみの目を向ける

「…なんだその目は？」

「アラバスタの英雄よ、もう戻れぬのか？」

クロコダイルはコブラ国王の言葉を笑う

「はっ…どこまでも甘ちゃんだな」

クロコダイルの返答にコブラ国王は首を横に振る

クロコダイルがコブラ国王に向かって動こうとしたその時、その動きを止めるかのような

一際大きな声が地下に響き渡る

「上等だ！じゃあどつちが先にクロコダイルをぶっ飛ばせるか勝負だ、麦わら！」

「望むところだ、ビリビリ！」

どのような経緯でそんな話になったのかはわからないが、ライトとルフィは共闘：

いや、競争をする事になったようだ

「小僧共が…舐めるな！」

クロコダイルが右手を縦に振ると、砂の刃がライト達に飛ぶ

砂の刃を左右に別れて避けたライトとルフィがそれぞれ動きだす

「剃！」

「ゴムゴムのお——！！！」

ライトが《剃》による高速移動でクロコダイルに近付き、ルフィはゴムの腕を伸ばす

「ピストル！」

ルフィの拳がクロコダイルに向かって勢いよく伸びていく

だが…

「くらえ！クロコダ…ぶへっ?!」

ルフィの拳は、クロコダイルを殴ろうと接近したライトの顔面を殴ってしまったのだった

「てめえ、なにしやがんだ麦わらあ！」

「ビリビリが勝手に俺の技の前に出てきたんじゃねえか！」

戦いの最中だがライトとルフィは言い争いをしてしまう

追い詰められているクロコダイルはそれに付き合わずにライトに右手を伸ばす

「あつぶねー！」

ライトは転がるようにしてクロコダイルの右手を避ける

「このっー！」

ルフィが腕を伸ばしてクロコダイルを殴る

だが、クロコダイルの身体は砂となり、ルフィの攻撃のダメージを受けない

「なにやってんだ、麦わら！ 覇気を使えねえならどいてろー！」

「イヤだー！」

ライトにそう返事をしたルフィは何かを思い出したように手をポンツと叩く

「しししー！」

ルフィは背負っていた樽の中の水で手を濡らす

「これでどうだ、ワニー！」

水で濡れたルフィの拳がクロコダイルに伸びていく

すると、ルフィの拳が確かにクロコダイルの身体を捉えた

「よしっ！」

ルフィは拳の手応えを感じる

だが、伸ばしたルフィの拳は戻る前にクロコダイルの右手に捕まってしまった

ルフィの手から急激に水分が失われていく

「ふんっ！」

ライトが殴りかかると、クロコダイルはルフィの手を離してライトの攻撃を回避する

ルフィは失った水分を補給するべく樽の水を飲む

すると、ミイラのように渴いていた手が元に戻った

水分を補給したルフィは戦いに復帰する

だが、その動きはライトと妙な形で噛み合ってしまった、お互いの邪魔になってしまう

「何回俺を攻撃すんだよ、麦わら！」

「お前が何回も俺の技の前に出てくるんじゃないか、ビリビリ！」

双方共に戦いを続けながらも言い争いをしていく

その様子にクロコダイルは苛立ちを隠せない

「小僧共……！」

相変わらずルフィの攻撃は時折ライトに当たってしまうが、少しずつ2人の動きはいい意味で噛み合っていく

ライトの能力がクロコダイルの動きを一瞬止めれば、そこをルフィが捉える

ルフィの攻撃をクロコダイルが右手で捕らえようと動けば、ライトが牽制する競争をしていた筈の2人の動きは、少しずつ共闘へと変わり

クロコダイルを追い込んでいくのだった

第131話

「ふんー！」

クロコダイルに仕掛けていったルフィが殴り飛ばされる

そして、クロコダイルがルフィに追撃しようとするのをライトが止める

ブンツッ！

クロコダイルは状況を瞬時に判断してライトごとルフィを止めようと砂の刃を飛ばす

目を見開いたライトは慌てて《荊》を使って高速移動をする

そして、砂の刃の射線上にいたルフィを蹴り飛ばした

「このっー！」

ライトに蹴り飛ばされたルフィが、受身を考えずにオーバーヘッドキックに近い形で足を伸ばしてクロコダイルに蹴りを放つ

だが、クロコダイルは横に一步動く最小限の動きで回避した

「おい、麦わら。クロコダイルの奴、動きが良くなつてないか？」

「ん？そうか？」

ライトの疑問は的中していた

皮肉にも、ライトとルフィの共闘がクロコダイルの心に火をつけたのだ
その火がクロコダイルの心に少しずつ自信を取り戻させていつている

「喋っている暇はねえぞ……小僧共！」

クロコダイルは砂の刃を放つと、身体を砂に変えてその場から姿を消す

砂の刃がライトとルフィを分散させると、クロコダイルはルフィの横に姿を現す

「麦わらー！」

ライトがルフィを援護しようとするが、クロコダイルはルフィの身体を

盾にするように動く事でライトの行動を制限していく

ルフィがクロコダイルに応戦するが、クロコダイルは隙をみてルフィの背中の樽を破
壊した

これで覇気を使えないルフィの攻撃は気にする事はないと、クロコダイルはライトに
専念する

そんなクロコダイルにルフィは諦めずに仕掛けるが、クロコダイルの義手によって
血を流すダメージを負ってしまった

「下がってろ、麦わらー！」

「イヤだ！」

ライトが流血したルフィを心配するが、ルフィは臆する事なくクロコダイルに挑む。クロコダイルは、ルフィを気にする事で動きが鈍ったライトを追い込んでいく。そして、遂に右手でライトを掴む事に成功した。

「くそっ！」

ライトが覇気を込めて電気をクロコダイルに流す。

それによりライトはクロコダイルの右手から逃れる事が出来た。

だが、一瞬であれどライトは身体の水分をクロコダイルに奪われてしまった。

その為、僅かだが脱水症状が起こってライトの動きが鈍る。

「形勢逆転だな、小僧共」

ライトの電気によるダメージが残る身体でクロコダイルが立ち上がる。

「この程度のダメージなど……とうの昔に経験済みだ」

クロコダイルの言葉が続いている中でもルフィは攻撃を続けていく。

だが、その全てがクロコダイルにダメージを与えない。

クロコダイルはルフィを無視してライトに仕掛けていく。

脱水症状により頭痛が起きているライトは、動きに精細を欠き少しずつ追い詰められ

ていく。

そして、クロコダイルがライトを右手で捕らえようとしたその時

ルフィの拳がクロコダイルの顔を殴り飛ばしたのだった

ライトは目の前の状況に一瞬我を忘れて呆然としてしまう

だが、2発、3発とルフィの攻撃がクロコダイルに当たるのを見て我を取り戻すと、ライトも反撃に移るのだった



「やれやれ、ルフィも随分と無理をしますね」

ライト達の戦いを見守っていたシユウがため息混じりにそう言う

「シユウ、なんでルフィの攻撃がクロコダイルに当たるようになったの?」

シユウにお姫様抱っこをされたまま戦いを見守っていたナミがシユウに聞く

「ルフィの手の色を見ればその答えがわかりますよ」

「手の色?」

シユウの言葉にナミだけでなく、コブラ国王とビビも目を向ける

「赤い…」

ビビが呟くように言葉を溢す

「シラカワ博士、あの青年は…まさか血を使っているのかね?」

「ええ、そのまさかですよ、コブラ国王」

シユウを除く一同が驚きの表情を浮かべる

「血を使う事に気付く機転の良さも見事ですが、それを躊躇しないあの胆力も凄いものです」

シユウの称賛の言葉に一同が頷く

ビビがシユウに目を向けると、彼に抱かれているナミと目が合う

目が合ったナミはシユウの胸に頭を預けると、勝ち誇った表情をビビに向ける

それを見たビビは表情を剥れさせてしまう

そんな2人のやり取りに気付いたコブラ国王は苦笑いをするしかない

シユウが苦笑いをするコブラ国王に目を向けるが、女性2人は何事も無かったようにライト達の戦いへと目を向けている

強かな女性達である

ルフィの覚悟が、クロコダイルへと傾いた戦いの流れを押し戻していく勢いを取り戻したライトとルフィにクロコダイルは追い詰められていく

彼等の戦いに決着の時が近付いていた

第132話

「ゴムゴムのお——！ブレット！」

ルフィの拳がクロコダイルの身体に叩き込まれる

だが、クロコダイルは歯を食い縛って義手でルフィを攻撃する

義手による攻撃で更に流血したルフィは膝をついてしまう

「させるかよー！」

膝をついたルフィを仕止めようと動いたクロコダイルを、ライトが殴り飛ばす

膝をついていたルフィは、息を大きく吸い込んで気合いを入れ直して立ち上がる

「そのまま休んでもいいぞ、麦わら！」

「お前こそ休んでろ、ビリビリ！」

互いに悪態をつきながらも息の合っているライト達をクロコダイルが見据える

「…認めてやる、小僧共」

クロコダイルの言葉が地下に響く

「だが、この俺に勝つのはまだ早えー！」

クロコダイルの身体が砂となり渦を巻いていく

やがて渦は大きくなり、砂嵐となってライト達に襲い掛かる

ライト達は砂嵐に巻き上げられ、全身を砂に強かに打たれ傷をつけられていく
砂嵐が収まると、ライト達はドサツと力無く地面に落ちた

だが、直ぐに起き上がろうともがき始める

「ハア、ハア……何故起き上がれる？」

先程の技で息を切らしたクロコダイルが疑問の声を上げる

自身の最大級の技を受けても動く彼等の姿に、クロコダイルは取り戻しつつあった自信を失う

「俺が、お前をぶっ飛ばすんだ！」

「違うー俺がぶっ飛ばすんだ！」

ライトとルフィが、それぞれ立ち上がりながら雄叫びを上げる様に言う

クロコダイルは2人の気迫に一瞬身体が固まってしまう

その時、ライトとルフィは本能的に動き出した

「おおおおおおおおお！」

《剗》で距離を詰めたライトがクロコダイルの腹を殴つてくの字に折り曲げる

そして、クロコダイルの身体を両足で突きあげる様にしてクロコダイルを上空へと飛ばす

ルフィは即座に反応して身体を捻り上げて、クロコダイルを追うように飛び上がる
「ゴムゴムのお——！」

飛び上がったルフィの身体は捻り上げた反動で勢い良く横回転する

「スト——ム！」

ルフィはまるで砂嵐のお返しをするように拳の嵐をクロコダイルの全身に叩き込んでいく

「おおおおおお！」

ルフィはここで全て使いきるとばかりに拳を止めない

やがてルフィの拳の嵐が収まると、ルフィとクロコダイルは地面に無防備に落ちる

ルフィは大の字に倒れたままだが、クロコダイルが身体を起こす

「…小僧…共！」

クロコダイルの声に反応するルフィだが、限界を超えたのか起き上がる事が出来ない
バチバチ！

空気が爆ぜる様な音にクロコダイルが目を向ける

すると、そこには今までに無い程の電気を拳に纏わせたライトの姿があった

「…いつは、ちよつとシビレるぜ…！」

そう言ってライトは《荊》を使って踏み込む

「ライトニング・ナックル！（雷人の拳骨）」

右腕を覆い尽くす電気を纏ったライトの拳が、クロコダイルの身体に叩き込まれる。その拳は物理的な威力だけでなく、電気により内側から身体を焼いていく。ライトの一撃により限界を超えたクロコダイルは、ゆっくりと倒れていった。



「…終わったか」

コブラ国王が倒れたクロコダイルを見ながらそう呟く。

「ええ…ですが、反乱軍への対処や、今回の一件を世界にどのように伝えるかの検討等やることはまだまだありますがね」

他にも、今回の一件について口裏を合わせる為の根回しやらもあつたりと問題は山積みだ。

シユウの言葉にコブラ国王は頷く。

「わかっているよ、シラカワ博士。全ては王たる私の不徳が招いた事…」

その責任から逃れはせんよ」

そう言つてコブラ国王は娘であるビビへと目を向ける。

「ビビ、しばらくは私の仕事を手伝ってもらおうぞ」

「はい、お父様」

コブラ国王はビビの言葉に頷く

「一応言っておかぬと、また直ぐに外に行ってしまうかもしれぬからな、ハツハツハツ
！」

「お父様！」

ビビがコブラ国王に抗議するように声を上げる

そんな父娘の様子に、シユウとナミは目を見合わせると笑うのだった

第133話

「さて、ライトとルフィの応急処置をしたら地上に戻りましょう」

シユウの言葉にナミ達が頷く

「ですが、その前に……そろそろ出てきては如何ですか？」

シユウの言葉で地下の一角に隠れていた美女2人が姿を現す

ビビとコブラ国王はその2人が現れた事に驚いた

「自己紹介は必要ですか？ 《オハラのココ姉妹》」

「必要ないわ、《シユウ・シラカワ博士》」

シユウの言葉にルビーが答える

ルビーの言葉にナミ達は首を傾げる

だが、シユウだけは無反応だった

「私の名は《シラカワ・シユウ》ですよ。ニコ・ルビー」

「そう？ それは失礼したわね」

先制攻撃とばかりにかまをかけたルビーだが、反応を見せないシユウに内心で舌打ちをする

「それで、貴女方は何故そこに隠れていたのですか？」

「…船長さんが勝てるのか心配だったのよ」

ルビーがルフィを見ながらそう言う

「なるほど、サー・クロコダイルに一度やられた筈のルフィが、早々に復活

出来たのは貴女のおかげですか」

「…そうよ」

ほんの一言から自身の動きを看破されたルビーは動揺を必死に隠す

「ではルフィの治療は貴女に任せましょう」

そう言ってシユウはナミとライトの治療をしていく

そして、敵対は避けられたと安堵するルビーはため息を堪えながらルフィを治療するのだった



地上に戻った一行は反乱軍を抑えている海軍の元に向かった

そこでコブラ国王とビビが反乱軍の説得を行った事で、アラバスタ王国で起こった一連の騒動は一応の終わりを迎える

事の眞実を知った反乱軍はコブラ国王に涙を流しながら謝罪をして、アラバスタ王国の復興を誓う

その後は、コブラ国王の計らいで国庫を解放して和解の宴を開く事になったのだった



「楽しんでいるかね、シラカワ博士」

恋人のナミと共に食事を楽しむシユウの元に、コブラ国王がビビを伴いやってくる

「ええ、楽しんでいますよ。コブラ国王」

シユウの返答にコブラ国王が頷く

王族として民族衣装の様なドレスに身を包んだビビにシユウは目礼をする

ビビは嬉しそうに笑顔を返す

シユウとコブラ国王の会話を邪魔しない為なのか、ナミがシユウとビビの間に入る

そして、ニッコリと笑顔を見せてからビビを連れてその場を離れていった

「さて、改めて礼を言わせて欲しい、シラカワ博士」

そう言つてコブラ国王が頭を下げる

「頭を上げてください、コブラ国王」

「今回の内乱でアラバスタ王国は疲弊している。復興の為に財を残さなければならない……」

コブラ国王は話をしていての間も頭を下げ続ける

「国際的な面子を保つ為に相応の報酬を渡さなければならぬが、それを博士が望むもので

渡す事は難しいだろう……故にこうして頭を下げるしかないのだ」

国の復興として内政だけでなく、外交も考えると金は幾らあっても足りない

「コブラ国王、今は宴を楽しみましょう」

「シラカワ博士……」

「私は酒を飲んでいる内に報酬の事は忘れてしまおうでしょうから」

シユウの言葉にコブラ国王は二度頭を下げる

コブラ国王が頭を上げると、シユウは空の杯を差し出す

コブラ国王は笑顔を浮かべて空の杯に酒を注ぐ

注がれた酒をシユウが一息に飲み干すと2人の目が合う

そして、2人は宴を楽しむ様に笑い合うのだった



「改めてお疲れ様、ビビ」

「はい、ありがとうございます、ナミさん」

2人は杯を軽く打ち鳴らして酒を飲む

「うん、美味しいわ。勝利の美酒つてところかしらね」

そう言つてナミが笑顔を浮かべる

ナミは反応が無いことを不思議に思つてビビを見る

すると、ビビの目はコブラ国王と会話をするシユウに向けられていた

「ビビ」

ナミの言葉に驚いた様にビビは顔をナミに向ける

「シユウはあげないわよ」

ナミが笑顔のまま宣言する

その宣言にビビは手にしていた杯を一気に煽る

そして、大きく息を吐いてからナミを見据えた

「それじゃ、奪つちやいませうか」

笑顔でそう言うビビにナミは驚く

ビビは悪戯が成功した子供の様にクスクスと笑う

そんなビビの様子にナミも笑った

「王女様がそんな事を言ってもいいの？」

「海賊と一緒に行動してたので、影響を受けちゃったのかもしれない」

2人は笑いながらお互いの杯に酒を注ぐ

「それで、ビビは本気なの？」

「…私自身、この気持ちはどういったものなのかまだわかりません」

ビビは自身の言葉に苦笑いをする

「もし本気だった時は遠慮しませんからね、ナミさん」

「ええ、受けて立つわ」

杯を軽く打ち鳴らすと2人は酒を飲み干して笑い合う

そして、その後は友人として一緒に宴を楽しんでいくのだった

第134話

アルバーナ王宮で宴を終えた翌日、一行は戦いの疲れを落とす為、アルバーナ王宮の大浴場にて湯を浴びていた

「あゝ……やっぱりお風呂っていいわゝ……」

「そうね、本当に久しぶりね、姉さん」

アルバーナ王宮の大浴場には麦わら一味の仲間になったニコ姉妹も入っている。《オハラが悪魔姉妹》という事を知ってもコブラ国王が王国を救った恩人として受け入れてくれたからだ

「ロビン、どれぐらいお風呂に入ってたかしら？」

「クロコダイルの下についてからだから……4年だと思っわ、姉さん」

世界政府の刺客から追われる2人がゆっくりと風呂に入るのは危険な行為だ。その為、2人はシャワーで済ませてしまう事が日常となっている

だが、転生者のルビーの影響でロビンも風呂好きになっっているのだ

「姉さん、《アレ》は私達が求めていたものと違ったわね」

「……そうね」

《アレ》とはポーネグリフの事である

ニコ姉妹は今回の騒動を収めた報酬としてポーネグリフの見分をコブラ国王に所望していた

それをコブラ国王が外部への秘匿を条件に許可したので、ニコ姉妹は承諾してポーネグリフを大浴場に入る前に見分していた

その結果は彼女達が求めていたポーネグリフでは無かったのだ

もつとも、ルビーはその事を事前に知っていたのだが…

「まあ、そう簡単に見つけても面白くないし、今回は勉強になったと思っておきましょう」

「うん、姉さん」

ルビーの言葉にロビンが素直に頷く

すると、プルンツと揺れた物がルビーの視界に入った

「くっ！」

「姉さん？」

ここは大浴場

そこで入浴しているので相応の格好をしているのである

持たぬ者であるルビーが、ロビンの凶悪な物質に心を揺らされる

(なんで姉妹なのにこうも違うのよ！)

そんな事を何度繰り返した事かとルビーが齒噛みをするが、現実には変わらない
「本当に大きなお風呂ね、羨ましいわ」

「ふふ、自慢の大浴場ですよ、ナミさん」

「いいんでしょうか？私までお湯をいただいでしまつて…」

湯煙の向こうから新たに3人の美少女、ナミとビビとたしぎが現れる

その3人が歩く度にロピン程ではないが見事な物が揺れる

「くっ！」

「姉さん？」

世界は不公平だとルビーは真理を垣間見てしまう

「あら、2人は先に入っていたのね」

「…ええ、先にいたでいたわ」

ルビーは3人の物質を見ないように目を逸らす、今度は妹の物が視界に入る

最早、ルビーは項垂れるしかなかった

「あいたた…ちよつと傷に沁みるわね」

「大丈夫ですか、ナミさん」

「シユウが傷痕は残らないって言つてたから大丈夫よ」

「私の傷も痕は残らないみたいですね」

項垂れていたルビーがシユウの名に顔を上げる

「貴女…ナミだったわよね？シラカワ博士とはどういう関係かしら？」

ナミがルビーの言葉に顔を向ける

「シユウはわたしの恋人よ」

ナミが笑顔で胸を張ってそう言いきる

その際に揺れる物をルビーは努めて無視する

「恋人？…どこで知り合ったの？」

「わたしの故郷で一緒に育ったのよ」

ナミの返答にルビーは手で口を抑えて考え始める

（やっぱり《シユウ・シラカワ》は転生者？）

ルビーはそう考えるが下手に詮索を入れて敵と認識されては堪ったものではない

そう考えてルビーはこれ以上の詮索を止めにした

「そう、素敵な人を恋人にしたわね」

ルビーの言葉にナミが笑顔を返す

そのナミの笑顔にルビーはイラツとしたものを感じるが表情には出さないように努

める

(くっ！リア詰め！)

彼氏いない歴〓年齢の乙女(28歳)の嫉妬である

「そうだ、サウナもあるんですがどうですか？」

「いいわね♪たしぎも行きましょう」

「はい」

3人の美少女が湯船から出てバスタオルを身体に纏う

「姉さん、私達も行きましょう」

「…そうね」

ロビンの言葉にルビーが頷く

久しぶりのお風呂なのだから心から楽しもうと、ルビーは心を新たにして

湯船から出てバスタオルを身体に纏いながら歩く

5人の美女、美少女がサウナに向かう途中、一行は視線を感じて歩みを止めた

「はあ…何してるのよ、あんた達は」

ナミの言葉に上の方に目を向けると、男衆が覗いていたのだ

(ああ…そう言えばこんなイベントもあつたわね)

ルビーはそんな事を考えながら覗きのメンバーを確認していく

ルフィ、ウソップ、サンジ、チョッパー、コブラ国王、そしてライト…

(いないのは、シラカワ博士とゾロね)

ルビーがそう考えていると、たしぎが声を上げた

「ライトくん！何をしてるんですか!?!」

「いや、これは同じ男としての付き合いで…」

ライトはバスタオル一枚のたしぎを直視しないように目を逸らしている

この男、肝心な所でヘタレである

(この後、たしかナミがバスタオルを御開帳するのよね?)

ルビーは記憶を掘り起こすように思案を続ける

その為、よからぬ顔をしながらビビに耳打ちをしているナミに気付かない

ナミとビビがこっそりとニコ姉妹の背後に回り込む

「せくのー!」

大浴場にナミの掛け声が響く

「幸せ!」

「ダブルパンチ!」

ナミとビビがニコ姉妹のバスタオルを剥ぎ取る

その瞬間、男達が本能で目を向けてしまう

一瞬の間の後、ルビーは己の現状を知る

そして…

「キヤアアアアア！」

大浴場に乙女（28歳）の悲鳴が響き渡ったのだった

第135話

アルバーナでの一件を終えた私とナミはココヤシ村に戻った

アルバーナ王宮の大浴場で何やらあったようだが気にしない事にする

ココヤシ村に戻った私達はナミの怪我の回復を待つ

ボン・クレーとの激闘はナミにとって良い経験になったが、そのダメージを
軽視する訳にはいかない

そして、ナミの怪我が回復した頃、ガレーラカンパニーに依頼していた船が完成した
私とナミは東の海でしばらくの間、慣熟航行をすることにしたのだった



「シユウ、帆を畳んで」

ナミの指示でシユウが船の帆を畳んでいく

どうやらここで船を止めるようだ

「帆を畳みましたが…何かあったのですか、ナミ？」

「それほど大きくないけど、嵐が来そうなの」

「なるほど…ですが、電動機を使って海域を離脱する事も出来ますよ?」

「グランドラインに入る前に、この船がどのくらい嵐に耐えられるか試しておこうと思つて」

「わかりました。ナミの考えに従いましょう」

シユウも航海術を持っているのだが、彼はその能力故に船に乗った経験は少ない

その為、小船ではあるが航海経験豊富なナミの考えを優先する事が多いのだ

「では、錨も下ろしてきます」

「うん、お願いね」

およそ2時間後、ナミの予測通りに嵐がやってくる

嵐が過ぎるまでの間、2人は船の中でゆっくりとするのだつた



船の慣熟航行を終えたわたしとシユウは、グランドラインを船で進んでいくシユウの能力で日帰りする事もあれば、無人島等で一夜を明かす事もあるわ無人島等で一夜を明かす時は…その…ね?…うん

そんな感じでシユウとの船旅をわたしは楽しんでる

電動機を使えば他の船を圧倒する船足を發揮するこの船のおかげで、わたしの夢である

世界中の海図を描くことは順調に進んでいる

シユウの能力のおかげで遭難した時には直ぐに帰れるから、ログポースが指し示す航路以外にも何度も挑戦している

その成果として、今までの海図よりも詳細な物を描けていると自負しているわ

シユウとの船旅は毎日が新しい発見に満ちていて、とても楽しい

アーロンに支配されていた時は想像もしなかった日々を送っているわ

時折、海賊が襲ってくる事もあるけど、シユウと一緒に撃退している

もつとも、大抵はシユウに一蹴されちゃうけどね

流石、わたしの恋人だわ

そんな海賊からシユウが適当に相手を見繕って、わたしが戦う事もある

ボン・クレーとの戦いでわたしも成長したと思っていたけど、海は広いと感じさせられるわ

シユウの能力で直ぐに帰れる事もあつて時折、船旅による疲労を忘れてしまう事があ

そんな時はシユウが直ぐに気づいてくれる

いつも見てくれていると思うと顔がにやけるのが止まらない

…こほん

シユウとグランドラインに出てから1カ月程経った頃、船旅は順調だけれど疲労を抜くために

7日程陸の上でゆっくりと休む事になった

その7日で色んな所を巡った

《冥王》、《赤髪》の所はもちろんの事、アルバーナにいるピピを訪ねたりもしている

そして、今日は《白ひげ》の所に顔を出した後、シユウの能力で転移をせずに

わたし達の船で少し旅をする事にした

その結果、思わぬ男と出会う事になってしまったの…



「ゼハハハハ！てめえがシラカワか？」

海賊船がわたし達の船に横付けしてきたので、いつもの様に迎撃をしようと思ったのだけど

乗り込んできた相手はいつもの奴等とは違っていた

《黒ひげ》

シユウの友人であるエースが追っていた相手…

「ええ、その通りですよ、《黒ひげ》」

「そうか、あちこち探したぜ」

黒ひげがシユウを探してた？

…なんで？

「ほう？何故私を探していたのですか？」

「ゼハハハハ！知りてえか？なら教えてやるぜ！」

黒ひげがシユウを指差しながら話し出す

「てめえが俺様の野望の邪魔をしたからよ！」

シユウが黒ひげの野望を邪魔した？

「白ひげの所で一騒動起こして逃げたのは、悪魔の実を手にする為だけじゃねえ！

仲良しごっこをしてやがる甘ちゃんを誘き出す事も兼ねていたのさ！」

シユウと一緒にアラバスタ王国に行くことになったキツカケね

「その甘ちゃんがいつまでたっても俺様の所に来やがらねえ！ちよいと調べてみれば、

てめえがエースの野郎を連れ戻したって話じゃねえか！」

黒ひげがニツと歯を見せて笑う

「だから、俺様直々にその落とし前をつけにきたのさ、ゼハハハハ！」

黒ひげの言葉を受けてシユウが何かを考えている

「エースの出生……それを利用してしようとしたのですね？」

「ゼハハハハ！ その通りよ！ エースを手土産にすれば七武海の座もすぐだ！」

黒ひげの笑いが甲板に響き渡る

「だが、エースは白ひげの所だ。そこで、俺様は代案を考えた！」

黒ひげは両手を拡げる仕草をしながら言葉を続ける

「てめえは海軍元帥のお気に入りらしいな？ それに、赤髪の子でもある」

黒ひげは拡げた両手で拳を作る

「エースの代わりの手土産にちようどいいだろう？ ゼハハハハ！」

シユウはスツと目を細める

「事情はわかりました。なので、それ以上の言葉は不要ですよ」

「そして貴方が私の自由を奪うというのなら、私が貴方の野望を潰して差し上げましょう」

「ゼハハハハ！ 上等だ！」

シユウが剣を構え、黒ひげが拳を構える

そして2人同時に踏み込むと、シユウと黒ひげの戦いが始まったのだった

第136話

「ゼハハハハ！やるじゃねえか！」

シユウの剣と黒ひげの拳がぶつかり合う度に、大きな音が甲板に響き渡る
ナミは戦いの邪魔にならぬように既に離れている

「貴方もその体型の割りには随分と機敏ですね」

「ゼハハハハ！言うじゃねえか！」

何度も何度も剣と拳がぶつかり合う

一見、戦いは互角に見えるが…

「ゼハハハハ！」

黒ひげが剣ごとシユウを殴り飛ばす

シユウは直撃を受けぬものの、後一步踏み込む事が出来ない

「なるほど…確かにやりにくいですね」

「なんだ、赤髪に俺様の事を聞いていたのか？ゼハハハハ！」

シユウは戦いの主導権を渡さぬ様に自ら踏み込んでいく

だが、黒ひげは体格差を活かしてシユウの間合いにまで踏み込ませない

さらに黒ひげは前足を度々入れ替えて左右の間合いを変化させていく
互角に見える戦いだ、黒ひげが優位に進めていた

「諦めて俺様の野望の糧になれば命は助けてやるぜ？ゼハハハハ！」

「お断りしますよ、黒ひげ！」

シユウは《荊》や転移を駆使して黒ひげに仕掛けていく

「おう？」

それまでと戦いのリズムが変わった事でシユウが先手を取っていく

「生意気な野郎だぜ、ゼハハハハ！」

だが、黒ひげの余裕の態度は崩れない

ここに至って、戦いを見守っていたナミも黒ひげの異様を感じていく

(あいつは…なんかヤバイ！)

ナミはそんな異様な相手と戦う恋人を見守る事しか出来ない自分に歯噛みする

「頑張つて…シユウ！」

ナミの声援が届いたのか、黒ひげの腕に薄い斬り傷が出来る

「ゼハハハハ！若えのに大したもんだ！」

戦いが始まってから傷が初めて出来たのに黒ひげは揺らがない

「さつきから、ちよこちよこと消えてるのはテメエの能力だろ？」

「さて、どうでしょうかね？」

「ゼハハハハ！連れねえ野郎だな！」

黒ひげは笑いながら右手に黒いナニカを作り出す

「…あれは何？」

戦いを見守るナミはその得体の知れない何かに悪寒を感じる

「俺様の能力も見せてやらあ！」

そう言つて黒ひげがナニカを前に突き出すと、シユウの身体がグンツと

黒ひげの方に引き寄せられた

引き寄せられたシユウの左腕を黒ひげが右手で掴む

ニイと黒ひげが笑う

「捕まえたぜ」

黒ひげが空いている左手で拳を作り、シユウを殴り飛ばす

「能力を使えねえだろ？これが俺様の《ヤミヤミの実》の能力だ！」

黒ひげは何度も左手でシユウを殴っていく

体格差故かシユウの身体が殴られる度に飛ぶが、黒ひげが掴んでいる右手で

シユウを引き寄せる

「ゼハハハハ！」

黒ひげの笑い声が甲板に響き渡る

「なるほど、色々試しましたが確かに能力は使えないようですね」

黒ひげの笑い声を遮る様にシユウの言葉が甲板に響く

「ですが…特に問題になりませんね」

シユウが腰を回し剣を横に振るう

シユウが振るった剣は黒ひげの腹を斬り裂く

「ぐっ…があああああああああ！」

腹を斬られた黒ひげは、シユウを掴んでいた右手を離す

そして、両手で傷を抑えると痛みに振り回される様に甲板を転げ回った

「おや？体勢が不十分だったのでそれほど深く斬る事が出来なかつたのですが…」

殴られた事で傷を負ったシユウが、右のコメカミ辺りと口から血を流しながら

黒ひげの様子を観察していく

「私を引き寄せた事、能力が使えなかつた事、そしてその痛がり様…」

シユウが1つ1つの事象を確認する様に言葉を紡いでいく

「黒ひげ、貴方の能力は悪魔の力の力を封じるのではなく、

《悪魔の力の能力をも引き寄せる》事が出来るのですね？」

シユウは黒ひげに問い掛ける様に言葉を発するが、黒ひげは傷を押さえて転げ回って

いる

「つまり、悪魔の实の能力という《概念》をも引き寄せる事が出来る…

その反面として《痛み》という概念をも引き寄せてしまうのではないですか？」

痛みが落ち着いたのか、黒ひげは傷を押さえながらもゆっくりと立ち上がる

「ゼハハハハ！よく頭が回るもんだなあ！」

黒ひげは武装色を使い傷口をを締めると、右手に黒いナニカを作り出す

「確かに俺様はこの能力で余計に痛みを感じちまう」

黒ひげは傷がまるで問題無いように笑みを浮かべる

「だが、テメエを随分と殴ったからな。ダメージはテメエの方が上だろうか？」

「さて、それはどうでしょうか？」

黒ひげの笑みにシユウは不敵に笑って応える

「ゼハハハハ！試してやろうじゃねえか！」

黒ひげは黒いナニカを使ってシユウを引き寄せる

シユウと黒ひげの互いの意地を張った足を止めての近距離戦が始まるのだった

第137話

「くっ！」

「あああああああ!!」

シユウと黒ひげの意地を張った近距離戦

黒ひげの覇気を纏った拳はシユウに確実にダメージを与えていく
シユウの剣による傷はダメージ以上に黒ひげの精神を削っていく
互いに一步も引かない戦いが続いていく

「…ぐっ、ゼハハハハ！温い温い！」

黒ひげは耐え難い痛みに脂汗を流しながらもシユウを殴り飛ばす
殴り飛ばされたシユウは一瞬膝を震えさせるが堪えて剣の一撃を返す

「うっ!?…がああああああ!!」

幾度も斬られる痛みに黒ひげの意識が遠退きかけるが、黒ひげは傷を武装色の覇気を
用いて無理矢理塞いでシユウに拳を返す

どれほどのこの攻防を繰り返しただろうか…

甲板には打撃音と斬撃音が交互に響き渡る

そんな攻防も終わりを迎える

黒ひげの拳のダメージにより、シユウの反撃が一呼吸遅れたのだ
経験故か、はたまた本能か

黒ひげはシユウを掴んでいた右手を離し、両拳でシユウを打撃していく
シユウは黒ひげの拳により左右に何度も弾かれる

だが、黒ひげを見据える目には強い光が宿り続けている

黒ひげの拳に弾かれる中で、シユウは両手で剣を握りしめる

そして、幾度目かの拳に弾かれる前に、ワームホールを開いてそこに飛び込み転移を
した

「ちっー」

拳が空を切った黒ひげは、舌打ちを一つすると直ぐに構える

背後に転移をしてきたシユウを黒ひげが迎撃をしようとする

すると、シユウは能力の重力球を黒ひげに飛ばす

これまでの攻防でシユウは剣による攻撃のみを使用してきた

そして、能力は転移のみを見せてきたのだ

その布石が黒ひげに一瞬の硬直を作り出す

だが、黒ひげもこの海を生き抜いてきた猛者である

黒ひげは武装色の覇気を纏わせた拳で重力球を打ち消す

そして、黒ひげが重力球を拳で打ち消す瞬間にシユウが踏み込む

ザンツ！

黒ひげの身体に袈裟懸けの傷が走る

そして、傷から血が吹き出すと同時に黒ひげは後ろに倒れたのだった



勝った！

シユウが勝ったわ！

シユウがダメージにより少しふらつきながらも黒ひげに近づいていく

トドメを刺すつもりね

「…ゼハハハハ！やるじゃねえか！」

うそつ!!あの傷でまだ意識があるの!?

どんな精神力をしているのよ!?

「能力への習熟度…それが貴方の敗因ですね」

「ゼハハハハ！何を勝った気でいやがる！俺様はまだ終わっちゃいねえぜ！」

黒ひげはそう言うけど倒れたままでいる

「何か言い残す事はありますか？」

「ゼハハハハ！温いなあ…シラカワ！」

黒ひげがそう言うのと、シユウは舌打ちを一つして消えて見える程の速さで動き出す
そして…

パンツ！

わたしの耳に響いたのは乾いた銃声

そして、わたしの前に立って血を流すシユウの後ろ姿だった



「シユウ!？」

ナミの声が背中越しに聞こえる

よかった…どうやら無事なようです

「ゼハハハハ！女を守るとは殊勝な行動だな！」

倒れている黒ひげの元に、黒ひげの船から出てきた者達が近づいていく

そして、黒ひげに肩を貸すとゆっくりと自分達の船へと戻っていく

「俺様にトドメを刺しにきてもいいぜ？その女が撃たれてもいいならな！ぜハハハハ！」

ここで黒ひげを止められないのは残念だが、ナミの命には変えられない

通常の銃弾ならば湾曲フィールドで防げるが、武装色を纏わせたあの銃弾は危うい

…此処までですね

そんな私の雰囲気を観察したのか、黒ひげはダメージを感じさせない笑みを見せる

「勝負は預けとくぜ、シラカワ！」

そう言って黒ひげとその一味は、黒ひげの特徴的な笑い声と共に去っていく

そして黒ひげ達が去った後、私は疲労とダメージが限界に達し甲板に膝をつくのだっ

た

第138話

黒ひげとの戦いが終わった後、シユウは自分の手で傷の治療をした

そして、シユウの能力でわたしとシユウはシャボンディ諸島に転移をしたのだけど、そこでシユウは気絶をしてしまったの

「ナミくん、良く来たね…と、言いたい所だが今は急いだ方が良さそうだ」

わたしがシユウに肩を貸す形で、気絶しているシユウを船から下ろそうとしていると、

レイリーさんがわたし達の所にやってきた

「私がシユウを運ぼう。事情はシャツキーの店にいたら聞かせてもらおうとしようか」
そう言つてレイリーさんはシユウを軽々と抱き上げて歩いていく

わたしはレイリーさんの後をついていくのだけど、その道中は無力感で一杯だった



「シユウ!?レイリーさん!シユウに何があつた!?!」

ナミとレイリーがシャツキーの店に辿り着くと、そこにはシュウの父親であるシャンクスがいた

「落ち着け、シャンクス」

ボロボロになっているシュウを見て慌てるシャンクスをベックマンが止める

「まずはシュウを休ませる。その後にはナミくんから事情を聞こう」

そう言つてレイリーは店の奥に向かった

シュウを寝かせて戻つてきたレイリーが席につくと、それに習いナミも席につく

だが、ナミは事情を話さずに俯いたままだ

そんなナミに、シャツキーがそつと水を差し出す

「ナミちゃん、落ち着いたら話してね」

そう言つて離れたシャツキーを見てナミは水を飲む

そして、ナミは一つ大きく息を吐いてから話し始めた

「シュウは《黒ひげ》と戦つたの」



グランドラインのとある海域を進む船の中

ここでは身体中に包帯を巻いた黒ひげがひたすら食事を続けていた

「《痛み概念》か…こいつは盲点だったぜ」

骨付き肉から肉を食いちぎりながら黒ひげが言葉を溢す

「最後はダメージ以上の痛みで身体が動かなくなっちゃった。

次は気をつけねえとな、ゼハハハハ！」

黒ひげは笑いながらエールを胃に流し込んでいく

「プハー！まあ、能力を使って初めての实战なら上出来よ…

本番は白ひげだからな！ゼハハハハ！」

黒ひげは食らいつくした骨を放り投げ、新たな骨付き肉を手取る

「シラカワ、次はぶっ殺してやるぜ…おっと、ぶっ殺しちゃったら

手土産にならねえや、ゼハハハハ！」

黒ひげは笑いながら骨付き肉にかぶり付く

その後も黒ひげは底知れぬ食欲で食らい、上機嫌に笑い続けるのだった



ナミから事情を聞いた一同は沈黙をしている

だが、シャンクスが不意に立ち上がった

「ベックマン、黒ひげのアジトを調べろ」

「あいよ」

シャンクスの指示を受けたベックマンが酒場を後にする

「シャンクス、どうするつもりかな？」

「俺が落とし前をつけるにしろ、シユウが奴を倒すにしろ、奴の事を知っておく必要がある」

シャンクスの言葉にレイリーが笑みを見せる

「自分が始末する……と、言い出さないだけ成長したと言えるな」

「レイリーさん、これでも《四皇》になってそれなりに経つんだ。少しは

配慮出来る様になったさ」

レイリーの言葉にシャンクスはおどける様に肩を竦める

「ごめんなさい……」

ナミの声にシャンクスとレイリーが顔を向ける

「わたしがシユウの足を引っ張ったから……」

ナミは拳を握り、悔しさのあまりに涙を流す

「それは違うわよ、ナミちゃん」

シャツキーが温かいスープをナミの前に差し出しながらそう言う

「黒ひげの事は噂程度だけど、私も知っているわ」

シャツキーの言葉を聞きながらもナミは涙を流し続ける

「私が知る限りだと、今のシラカワちゃんでは黒ひげの相手は荷が重いわ…

でも、シラカワちゃんは戦えた…何でだと思おう？」

ナミは首を横に振ってシャツキーに答える

シャツキーはそんなナミに柔らかな笑みを向けながら言葉を続けた

「好きな人を見ていたから、シラカワちゃんは意地を張れたの」

ナミはシャツキーの言葉に顔を上げる

「だから、ナミちゃんはシラカワちゃんの足を引っ張っていないわ」

「でも…」

シャツキーはナミの頭を優しく撫でる

「いい女はね、男を頑張らせる事が出来るの。そして、男の為に頑張る事も出来るわ」

シャツキーはそう言いながらハンカチでナミの涙を拭う

「だから、シラカワちゃんの為にいい女になりたいのなら、後悔して泣くんじゃなくて、

反省をして次の為に頑張るなさい」

「…はいっ！」

シャツキーの言葉により、ナミの目に力が戻った

「それじゃ冷めない内にスープを飲んじやいなさい。シラカワちゃんが起きた時に

やつれた顔を見せたりなんかしたら、いい女失格よ♪」

そう言いながらシャツキーは茶目つ気タップリにウイソクをする

そんなシャツキーにナミは笑顔を返してスープを飲み始めた

ナミが元気を取り戻した様子を見た男達は、女には敵わないとばかりにため息を吐くのだった

第139話

「シュウー！」

目を覚ますとナミに強く抱きつかれた

「おはようございませす、ナミ」

私はナミの頭を優しく撫でる

「ナミ、私はどれぐらい寝ていましたか？」

私の言葉を受けてナミが顔を上げる

「シュウは3日寝ていたわ」

「3日ですか…」

それだけ寝てもまだダメージは抜けきっていない

「もう少しこうしていただきたいのですが、レイ養祖父さん達に顔を見せに行きましょう」

「…うん」

私の言葉に返事をしてナミが離れる

だが、ナミは離れ際に私にキスをしてきた

それだけで3日寝ていた身体に力が入るのだから、男は単純だと思ってしまう

私が立ち上がるとナミは私の身体を支える様に腕を組んでくる
私はこのかけがえのない恋人と共にゆつくりと歩き出したのだった



「おお！目を覚ましたか、シユウ！」

酒場に出ると、レイ養祖父さんと一緒に父さんもいた

「ご心配をお掛けしました」

「全くだ、あの世でアカリにどやされると思ったぞ」

父さんの言葉にレイ養祖父さんが笑う

「さて、寝起きで申し訳ないがシユウからも話を聞かせてもらおうかな」

そう言つてレイ養祖父さんが私を席に招いてくる

ナミと共に席につくと、私は黒ひげとの戦いの事を話し始めた

「というわけで、今回私が黒ひげと渡り合えたのは、黒ひげがまだ自身の能力に

慣れていなかったのが要因ですね」

私の話を聞いたレイ養祖父さんと父さんは、腕を組んで何かを考えている

「シユウ、黒ひげについてだが…どうする？」

腕を組んで考えていた父さんがそう聞いてきた

「正直な所、今の私では荷が重いですね」

そう言う私にナミが心配そうな目を向けてくる

「黒ひげが私だけを狙ってくるのでしたら逃げれば済むのですが…そうでない事を考えると放置しておく訳にはいかないと思います」

私の言葉に父さんが頷く

「お願い出来ますか、父さん」

「ああ、任せておけ」

黒ひげは私だけでなくエースも狙う可能性がある事を考えれば、私のワガママで奴を放置しておく訳にはいかない…

「ねえ…シユウはそれでいいの？」

「もちろん、私自身このままで終わるつもりはありませんよ、ナミ」

ナミにそう答えてから私はレイ養祖父さんに顔を向ける

「レイ養祖父さん、私を鍛え直してください」

私の言葉を受けてレイ養祖父さんがニヤリと笑う

「加減はしないよ、シユウ。もうナミくんを心配させない様にとことん鍛え直すからね」

「はい、お願いします」

レイ養祖父さんの言葉に私は頭を下げる

「ナミ、そう言う訳ですが、貴女はどうしますか？」

「…わたしも一緒に鍛えてもらおうわ」

ナミの言葉に私は驚く

「あの時みたいを守られるだけじゃなくて、わたしはシュウの隣に立ちたいの。

だから、シュウが止めても鍛えてもらおうからね」

ナミの言葉に父さんとレイ養祖父さんが笑う

「ハツハツハツ！シュウ、ナミを大事にしるよ！」

「…はい」

私は父さんの言葉にそう答える

「さあシラカワちゃん、スープを飲みなさい。空きっ腹じゃ力が出ないわよ」

そう言ってシャツキーさんが私の前にスープを置く

私はいただきますの言葉を言って飲み始める

そんな私をナミはニコニコと笑って見続けている

そして、年長者達はそんな私達を暖かい目で見守り続けるのだった



あれから父さんは直ぐに動いて黒ひげのアジトに向かったのだが、どのアジトもぬけの殻だったようだ

父さんはその事を白ひげに告げてから黒ひげの搜索に戻っている
私とナミはレイ養祖父さんに鍛えてもらっている

そのおかげでしつかりと成長出来ていると実感出来ている毎日だ
時折はココヤシ村に転移してベルメールさん達に顔を見せている

まあ、顔を見せる度に孫の顔を催促してくるのだが：

そんな感じで私とナミがレイ養祖父さんに鍛えてもらってから早3ヶ月
修行をしていた私達の所にとんでもない情報が入ってきた

エースが黒ひげに捕らえられたと：

第140話

シユウとナミは、エースが黒ひげに捕らえられたという情報を聞いて

白ひげ一味のアジトにやって来ていた

「博士か、よく来たな…と、言いてえ所だが今はちつと立て込んでいてな」

白ひげの言葉通りに、白ひげ一味の者達は殺気立っている

「エースの事は耳にしました」

「そうか…」

白ひげはシユウの言葉にただ一言返すだけだった

シユウ達の間が重い空気に包まれた時、マルコがやって来た

「親父」

「マルコ、どうだった？」

「エースはインペルダウンに居るようだよい」

マルコの言葉に白ひげの眉間に皺が寄る

「それと…まだ表沙汰にはなっていないけど、エースの処刑の準備が進んでいるらしいよ

い」

白ひげのコメカミに青筋が浮かび上がる

「マルコ、戦争の準備だ」

「此処にくる前に言つてあるよい」

マルコはそう答えるとシユウへと顔を向ける

「博士、何か策は…?」

マルコの言葉にシユウは顎に手を当てて考え始める

「…無いわけではありません」

「教えてくれ、博士」

白ひげは食いつくようにシユウの言葉に反応する

「その前に一つ確認があります」

「なんだ?」

「目的はエースの救出で間違いありませんね?」

シユウの言葉に白ひげが頷く

「そうなると、海軍にエースの素性を表沙汰にされる訳にはいきません」

「シユウ、どういう事?」

「海軍がエースの素性を明らかにする…これは世界政府が公式に認めた事になります」

ナミの疑問の声にシユウが答えていく

「もしそうなつてしまった場合、仮にエースを助け出したとしても戦いは終わらないでしょう」

「ああ、海軍か俺達のどちらかが全滅するまで戦う事になるだろうな」

エースとその父親であるロジャーの事を知る白ひげがそう断言する

「だがな、俺達は家族の為なら命を張るぜ、博士」

「ではその言葉を信じて、1つ策を進言します」

シユウが策の概要を話していく

すると…

「グララララ！」

白ひげの笑い声が響き渡った

「親父！笑い事じゃねえよい！」

白ひげは片手を上げてマルコの言葉を制する

「息子達の説得は俺がやる。博士は他を頼むぜ」

「では時間が無いのでこれで失礼します」

そう言つてシユウはナミと共に白ひげのアジトを去つていった

「親父！」

「マルコ、息子達を集めろ」

マルコは拳を握り、齒噛みをしながらも白ひげの前から去っていく

「グララララ！悪くねえ！」

白ひげは面白いとばかりに笑う

「齡70を超えての大舞台だ：悪くねえぜ、グララララ！」

白ひげは一味の者達が集まるまで上機嫌に笑い続けるのだった



白ひげのアジトを去ったシユウとナミは海軍本部を訪れていた

「シラカワ君、君の提案を受ける訳にはいかない」

「センゴク、ケチケチするんじゃないわい！」

「お前は黙つとれ、ガープ！」

シユウは白ひげに提案した策をセンゴク元帥に話していた

そして、その話しを聞いたセンゴク元帥が拒否をした所である

「シラカワ君、エースは既にインペルダウンに収監している。そして、エースを

処刑する事まで話が進んでいるのだ」

「ですが、エースの処刑理由の公表まではしていませんよね？」

シユウの言葉にセンゴク元帥は言葉が続けられない

「ならば、エースの処刑理由の変更は可能な筈ですが？」

「センゴク、どちらにしろニューゲートとの戦争は避けられんのじゃ、なら終わり方がハッキリしとるシユウの提案の方がマシじやろうが」

シユウを擁護するガープ中将にセンゴク元帥はため息を吐く

「それに親の罪を問うのが理由では、海賊から海兵へと転身した者達の間には不安が生じる事に繋がるかと思えますよ」

「そうじゃそうじゃ！」

シユウの言葉に相槌を打つガープ中将の姿にセンゴク元帥は頭を抱える

「…わかった。シラカワ君の提案を受けよう」

センゴク元帥が受け入れた事でガープ中将が笑う

「ただし！事の最中のエースの身の安全の保障は出来ない」

「ええ、わかっています」

そう言つてシユウは、センゴク元帥に頭を一つ下げてからナミと共に海軍本部を去つていった

「…ガープよ、勝てるのか？」

「ぶわっはっはっは！心配とは丸くなったのう！」

「茶化すな、馬鹿者が」

咎めるセンゴク元帥の姿にガープ中将は笑いながら茶を啜る

「まあ、何とかなるじやろ」

「まったく：お前は若い時から変わらんな」

「センゴクは随分と固くなつたがお」

「私には元帥としての責任があるのだ！」

「そう言つてため息を一つ吐いてからセンゴク元帥も茶を啜る

「勝てよ、ガープ」

「おう！」

第141話

海軍本部を後にしたシユウとナミはシャンクスの元を訪れた

そして、シユウがシャンクスに何かを話すとシャンクスが快諾

それからシユウが話をした者達が運命の日に向けて準備に入る

仲間と酒を酌み交わす者

1人何かを考える者と様々だ

あくる日、海軍が公式にエースの処刑の日を世界に発表する

だが、エースの処刑理由は明記されてはいなかった

この事で世間では色々な憶測が飛び交う

エースの処刑の報で動き出す者がいれば、静観を決める者もいる

世界の耳目がエースの処刑に集まった頃、ついにエースの処刑の日が訪れたのだった



海軍本部『マリンプォード』では類を見ない程の厳重な警戒態勢が敷かれていた

今日処刑を執行される者はポートガス・D・エース

その男は生きる伝説である『白ひげ』の身内である

あの白ひげが、その一味が仲間の処刑を見逃す筈が無い

これは、本日海軍本部に集まった全ての海兵の共通認識である

「は、壯観だなあこりゃ」

ピリピリとした海軍本部の空気の中で、1人の年若い海兵がそう声を上げる

アラバスタ王国の一件で少佐へと出世したライトだ

「ここにいたか、ライト」

そんなライトの元をガープが訪れる

「ガープ中将、噂って本当なのか？」

「噂じゃと？」

「エースは釣り餌で本命は白ひげっていう奴」

「本当じゃぞ」

ガープの返答にライトは腕を組んで考える

「でもよ、この作戦って白ひげの一味と全面戦争になるよな？大丈夫なのか？」

「そうならん様に色々と根回しをしてあるわい」

ライトは「へ」と感心の声を上げる

「もつとも、絵図を書いたのはシュウの奴じゃがな」

「マジかよ!? 何やってんだあいつ!？」

ライトの驚き様にガープが大声で笑う

「さて、そろそろ戻るわい」

「おう! またな、ガープ中将!」

ガープは踵を返し、背を向けたままでライトに話す

「ライト、生き残るんじゃぞ」

「…おう!」

ライトはガープを見送るとため息を吐く

「ほんとに、シュウの奴は何やってんだよ…」

そう言いながらライトは頭をガシガシと掻く

「たしか、原作ではエースの処刑が主目的だったよな?」

ライトが首をひねりながらそう言葉にする

「それが、なんでか白ひげを狙う事になっっているし…」

そう言いながらライトはまた、ため息を吐く

「頂上決戦… いったいどうなっちまうんだ?」

ライトの眩きは海風に溶けるように消えていく

ライトの周囲がにわかにはざわつき始める

エースが広場に連れ出されて来たからだ

それに続く様に、海軍最高戦力である三大将も姿を見せる

すると、まるでそれが呼び水になった様に海の中から海賊船が姿を現したのだった



「エース！ 迎えに来たぞ！」

海軍本部に白ひげの声が響き渡る

歴戦の海兵達の視線が突き刺さる中でも、白ひげは威風堂々と立っている

白ひげ一味と海兵達の睨み合いが続く

「ニューゲート！」

今度はセンゴク元帥の声が海軍本部に響き渡る

「昨今増えつつある海賊に対する警告として貴様を討伐する！」

「エースは俺を誘う為の餌か、センゴク！」

「そうだ！」

センゴク元帥と白ひげの会話が海軍本部だけでなく、電伝虫を通して世界に伝えられ

る

「俺はこうしてテメエらの前にやって来た！エースを開放しろ！」

「老いたなニューゲート！海賊のお前がそう言うのか！」

センゴク元帥の言葉を受けて白ひげが笑う

「グララララ！そうだったな！俺達は海賊だ！」

白ひげはそこまで言うのとニヤリと笑う

「海賊は海賊らしく！エースを奪わせてもらおうぜ！」

「「オオ——！！」」

白ひげの言葉に一味の者達が関の声を上げる

「総員！戦闘態勢！」

センゴク元帥の命令が海軍本部に響き渡ると、海兵達が素早く反応する

そして、三大将の内の一入であるクザン大将が気だるげに海へと近づく

クザン大将が海に手を翳すと海軍本部の周囲の海が氷つていき巨大な足場が完成する

その足場に海軍、海賊双方の海に生きる男達が下りていく

海軍本部に空気が歪んで見える程の戦意が満ちていった

「戦闘開始！」

「行くぞおー！」

センゴク元帥と白ひげの号令が同時に海軍本部に響き渡る
こうして後に歴史に残ることになる、海軍と海賊の戦争が始まったのだった

第142話

白ひげ一味と海軍の戦争の初手を取ったのは海軍だった

三大将の1人『黄猿』の異名を持つボルサリーノが能力を使い、光を白ひげに放つ
だが、白ひげは微動だにせずにその光を身体に受ける

白ひげに当たった光は拡散し、一瞬白ひげの姿を隠す

その光景を見た海兵達から歓声が上がる

歓声の中、白ひげの姿が露になる

腕を組んで仁王立ちの白ひげの身体には、ボルサリーノの攻撃による傷は一つも無かった

白ひげは鼻を一つ鳴らす

「ぬるいな」

海軍の誇る最高戦力である三大将の1人の攻撃が直撃しても無傷の白ひげ

この事実になくはない数の海兵に動揺が走る

世界最強の海賊

その呼び名に不足無し

生きる伝説の姿がそこにあった

その白ひげの立ち姿に後押しされる様に、エースが率いていた部隊の者達が氷の足場を進み出す

彼等が目指すのはただ一つ

己が隊長のエースの元である

動揺した海兵達の眼前に高揚した海賊達が迫っていく

海兵の一人が歯をガチガチと恐怖で鳴らすと、次第に周囲の海兵にも恐怖が伝わっていく

白ひげ一味と海軍の戦争の序盤

勢いは完全に白ひげ一味の物となった

だが、これにセンゴク元帥が素早く反応する

センゴク元帥が指示を飛ばすとガープを除いた大将以下の将校達が海兵達の前に進み出てきた

准将達が海兵達の前に進み出ると同時に、双方の前線部隊が戦場の中央でぶつかる海軍本部において武功で成り上がった准将達が、その持ち前の武力で前線を支えている

その隙にセンゴク元帥は、動揺した前線の部隊と他の部隊を入れかえる様に指示を飛

ばす

その様子を見ていた白ひげはジョズが率いる部隊を右側面へと進ませる
彼等の目的はエースの救出である

わざわざ正面から戦う必要は無いのだ

戦場となつている足場を俯瞰していたセンゴク元帥は、白ひげ一味の

隊長格が率いる部隊が動いた事を察知する

センゴク元帥は伝令を通じてボルサリーノに指示を飛ばす

まだ動揺が収まっていない部隊がある今、これ以上陣形を弄ると乱戦となつて収集が
つかなくなる恐れがある

その為、まだ序盤であるが海軍の最高戦力の1つであるボルサリーノという手札を
切つたのだ

指示を受けたボルサリーノは、身体を光に変えて一瞬でジョズの部隊の進攻先に姿を
現す

そして、能力を使って光をジョズの部隊に放つた

ジョズが能力で身体をダイヤモンドに変えてボルサリーノの一撃を受け止め

隊長のジョズが攻撃を受けた事で部隊の足が止まる

その際に陣形を立て直したセンゴク元帥が、ジョズ達の進攻先に海兵達を展開した

ジョズは舌打ちを一つすると自らボルサリーノに突っ込んでいく
ボルサリーノも受けて立ち、右翼でも戦いが始まった



白ひげ一味と海軍の戦争の場には七武海の者達が海軍側で参戦している

その七武海の一人である『鷹の目のミホーク』は戦場に溢れる戦意を楽しんでいた
「流石は双方共に組織を率いる長。戦場をよく見ているものだ」

中央、そして海軍側から見て左翼で展開されている戦いを見ながらミホークがそう言
葉にする

「初手の一撃…あれを受けて無傷とはな…世界最強の海賊の名は伊達ではないな」

ミホークは戦場から白ひげへと目を移しながらそう言う

「壁を超えた事でその背が見えたかと思っただが…」

ミホークは威風堂々と立ち続ける白ひげを見据えながら不敵に笑う

「これだから海は面白い」

ミホークが目を戦場へと移すと、白ひげとセンゴク元帥の双方が同時に

中央へ新たな戦力を投入する場面だった

「赤髪の所で酒を飲んでいた折に、シラカワが訪れて話した事に興味を持って来てみたが……」

そこまで言うともミホークは口を三日月の形に吊り上げる

「本命の戦いが楽しみだ」

新たな戦力が中央の戦いに加わったその時、戦場に新たな一石が投げられる
ルフィが率いるインペルダウンに収監されていた海賊達が、海軍側から見
てから空きの右翼に現れたのだった

「エース！助けに来たぞー！」

ルフィの声が戦場に響き渡る

「ふむ、シラカワはこの展開も読んでいたのか？」

ミホークはシャンクスの所で飲んでいた折に、シユウが第三勢力が来る可能性が高い
と

言っていたのを思い出していた

もつとも、シユウが予想した相手とは違うのだが、ミホークはその事を知らない
「麦わらよ。その未熟な力でこの戦場に立つ資格が貴様にあるのか？」

ルフィ達が現れた事で、センゴク元帥は三大将の一人を投入する事を決断する

白ひげ一味と海軍の戦争は新たな局面へと進むのだった

第143話

「エースウウウウウー！」

ルフィが叫びながら前へと進んでいく

すると、ルフィの前に三大将の1人であるクザンが立ちはだかった

クザンの姿を見たルフィの脳裏に一瞬、クザンに何も出来ずに負けた時の記憶が甦る

だが、ルフィは躊躇せずに前に進み続ける

クザンがルフィに手を向ける

だが、ルフィとクザンの間に『海侠のジンベエ』が割って入った

「ルフィくん、行けえ！」

ジンベエの後押しを受けてルフィが進む

そのルフィの前に多くの海兵達が現れる

「どけえ！」

ルフィは足を止める事なくインペルダウンの囚人達と一緒に戦っていった



そんなルフィ達の戦いを見てガーブは頭を抱える

「ガーブ、あれはお前の孫か？」

「そうじゃ……」

センゴク元帥の言葉にガーブがため息混じりに答える

「白ひげが相手なんだ。お前の孫だろうと加減する余裕はないぞ」

「わかつとるわい」

ガーブは以前にルフィを一度見逃した時に、センゴク元帥に言われた事を思い出す

「ガーブ、孫を助けたかったら自分で何とかしろ」

センゴク元帥の言葉にガーブは目を見開く

「……いいのか？」

「大一番を前に凹まれたら勝てるものも勝てんだろうが」

センゴク元帥の言葉にガーブは大笑いする

「ぶわっはっはっは！昔を思い出すのう！」

「元帥の立場が無ければ私とて、もう少し楽に動く」

大笑いするガーブをセンゴク元帥が睨む様に見る

「それじゃ儂は孫を相手に肩慣らしをしてくるわい」

「張り切りすぎてバテるなよ、ガープ」

「余計なお世話じゃ!」

センゴク元帥は笑みを浮かべながら離れていくガープの後ろ姿を見送ると

視線を戦場へと戻す

「…動かか、ニユーゲート」

まるでガープの動きに呼応する様に仁王立ちで微動だにしなかつた白ひげが、

戦場の中央へと動き始める

それに対応する為にセンゴク元帥は、三大将の最後の1人であるサカズキを戦場に投入するのだった



白ひげが薙刀を片手にまるで散歩でもする様に戦場を歩いていく

白ひげの行き先に次々と海兵が現れるが、海兵達は薙刀の1振りで打ち払われる
准将、少将、中將の海兵達も連携して白ひげに仕掛けて行くが、

誰も白ひげの歩みを止める事が出来ない

「お前らは下がつとれ、儂が相手するけえのお」

そんな白ひげの行き先に『赤犬』と呼ばれる三大将の一人、サカズキが立ちほだかるだが、白ひげは意に介さずに歩き続けていく

そんな白ひげにサカズキはコメカミに青筋を浮かべる

そして、サカズキの肩が盛り上がるとそこからマグマ弾が白ひげに向けて発射される
白ひげは薙刀に武装色と自身の能力である振動を纏わせると、マグマ弾を
右手一本で打ち払いながら歩いていく

サカズキはマグマ弾に紛れる様に白ひげに踏み込み、マグマの拳を振るう

白ひげは武装色と振動を纏わせた左手でサカズキの拳を迎え撃つ

ドンツという空気の爆ぜる様な音が戦場に響き渡る

するとサカズキだけが吹き飛ばされ、白ひげは何も無かった様に歩き続けていく

そんな白ひげの様子にサカズキの顔が怒気で赤く染まっっていく

「舐めるな！」

怒声と共にサカズキが白ひげにマグマ弾による弾幕を放つ

だが、白ひげは左手一本で空気を殴り振動させる事でマグマの弾幕を打ち払う

白ひげとサカズキの戦いを見ている海兵達が目を見開く

海軍最高戦力の三大将の一人が軽くあしらわれている目の前の光景が信じられない

のだ

サカズキは屈辱に口から血を流す程に齒嚙みをする

そして、サカズキは全身をマグマに変えて白ひげに飛び掛かる

白ひげは左拳に武装色の覇気と能力の振動を纏わせると無造作に打ち下ろす

白ひげの拳により氷の足場に叩きつけられたサカズキが動かなくなる

なおも歩き続ける白ひげの前にいる海兵達が、まるで見えない何かを押されるように白ひげに道を通っていく

サカズキが動かなくなつた今、世界最強の海賊の歩みを止められる者は中央にはいなかった

「肩慣らしにもならねえ」

第144話

海軍本部を舞台として白ひげ一味と海軍の戦争が行われている

その戦場の一角にて、新人海賊であるルフィを中心とした勢力がエースを助け出そうと奮闘していた

「ゴムゴムのお——ジェットガトリングー！」

ギア2

幾度もの冒険の果てに身に付けたルフィの奥の手の1つである

これまでの冒険で出会った強者達にも劣らない海兵達の囲みを突破する為に、ルフィは持ちうる限りの力を使って戦い続けていた

だが、そんなルフィの元に最悪の相手が現れる

「ぶわっはっはっはー！」

ルフィの祖父にして海軍の英雄であるモンキー・D・ガープが現れたのだ

「げっーじいちゃん!？」

英雄の登場に苦戦をしていた海兵達の士気が上がる

「どいてくれ、じいちゃん！俺はエースを助けるんだ！」

ルフィの言葉にガープは《薙》を使って近付くと右手に拳骨を作る

「この、バカ孫が！」

そう言いながらガープはルフィの頭に拳骨を落とす

周囲の者達が思わず首を竦めてしまう程の音が響き渡った

「いつてえ——!!」

ルフィはあまりの痛さに両手で頭を抱える

「ルフィ！後ろの連中は何じゃ!？」

ガープの言葉にルフィはガープの目を見て答える

「インペルダウンで会った奴等だ！」

「そやつらは略奪主義の悪党共じゃぞ！何を考えとるんじゃ!？」

「エースを助けるのに手伝ってもらってるんだ！」

ルフィの答えにガープはまた拳骨を落とす

「いつてえ——!!」

「バカ者が！助けるなどは言わん！じゃが、もう少しやり方を考えんか!？」

これまで命懸けの戦いが続いていた戦場に突如出来た祖父と孫のやり取りに、

周囲の者達は戦いを止めてしまう

「本当にエースを助けたいならシユウを見習えい！」

「ん？ シュウがなんかしたのか、 じいちゃん？」

思わず口走ってしまった事を誤魔化そうと、 ガープは口笛を吹きながら目を逸らす
「まあ、 それはそれとしてじゃ」

「「誤魔化した——！！」」

周囲の者達の総ツツコミを受けながらガープはポケットから何かを取り出す
「なんだそれ？」

「エースの海楼石製の手錠の鍵じゃ」

ガープの言葉にルフィが目を見開く

「じいちゃん！ それくれ！」

「構わんぞい」

そう言うとガープはニヤリと笑う

「ただし、 条件が2つある」

ルフィはガープの言葉に頷いて続きを促す

「1つはルフィがこの戦争を何があっても生き残る事じゃ」

ルフィはガープの言葉に頷いて了承する

「そして、 もう1つの条件じゃが…」

ガープが少し溜めを作ると、 どこからかゴクリと唾を飲み込む音が聞こえる

「この戦争が終わって落ち着いたら、儂と飯を食うことじゃ」

ガープが言った条件に周囲の者達は転けそうになる

「なんだ、そんな事か」

「そんな事とはなんじやい！じいちゃんと飯を食うんじやから、もつと嬉しそうにせんか！」

そう言いながらガープはまたルフィの頭に拳骨を落とす

ただし、今度の拳骨は軽いものだ

「ししし、いいぞ！じいちゃん！」

そう言うルフィの笑顔にガープは笑みを浮かべる

そして、ガープは手錠の鍵をルフィに投げ渡した

「儂は忙しいから、これ以上は助けられんぞ」

「ししし！大丈夫さー！」

ガープはルフィの頭に優しく手を置く

「ルフィ、生き残るんじやぞ」

「おう！」

ルフィはそう答えてエースの元に走っていった

「さてと……」

ルフィの背を見送ったガープがインペルダウンの元囚人達に振り向く
「ルフィは身内じゃから見逃したが、お前達は話が別じゃ」

そう言いながらガープは手の骨を鳴らす

「お前達は儂が直々にインペルダウンの牢に叩き返してやるわい！」

ガープの言葉にインペルダウンの元囚人達の顔が青ざめる

海兵達は巻き込まれない様にそつとその場を離れていく

「ぶわっはっはっはー」

「「「ぎゃー——！！」」」

白ひげ一味と海軍の戦争が行われている一角では、たった一人の海兵に
海賊達が次々と殴り倒されていくのだった

第145話

戦場の一角にてガープが海賊達を蹴散らし始めた頃、戦場の中央では白ひげがサカズキを一蹴してエースの元に歩を進めていただが、そんな白ひげが不意に足を止める

海軍本部元帥のセンゴクが白ひげの前に姿を現したのだ

「ニューゲート、しばらくは私に付き合ってもらおうぞ」

「ほう？俺を倒すとは言わねえのか？センゴク」

「私は分を弁えているつもりだ。お前が相手では前座が精々だろう」

そう言いながらセンゴクは帽子を取って戦闘態勢に入る

そんなセンゴクの姿を見て白ひげはニヤリと笑う

「肩慣らしぐらいはさせろよ？」

「期待に応えられるかはわからんな」

センゴクはそう言ううと能力を使って大仏へとその身を変える

巨大な大仏の姿になったセンゴクは掌底を白ひげに放つ

白ひげは片手でセンゴクの一撃を受け止める

大きな体格差がありながら微動だにせず……

「随分と鈍っているようだな、センゴク！」

「お前やガープと一緒にするな！ 私には元帥としての仕事があつたんだ！」

センゴクは白ひげの言葉に応えながら幾度も掌底を放っていく

だが、白ひげはそんな掌底の嵐を片手で無造作に打ち払う

センゴクは戦いのリズムを変える為に、能力を使ってビームを白ひげに放つ

白ひげはそれすらも簡単に打ち払った

「グララララ！ 流石にさっきの小僧よりはマシだな！ センゴク！」

「海軍の三大将を小僧呼ばわりする海賊は今やお前ぐらいだろうな、ニューゲート！」

白ひげは笑いながら一歩前に進む

それを見たセンゴクは攻撃の密度を高めるが、白ひげの歩みを止める事は出来ない

そして、間合いに入った白ひげは左拳に震動を纏わせて振るう

センゴクは白ひげの拳を受け止めるべく両手に武装色を纏わせて防御する

直後、目を疑う様な光景が現出する

巨人族並みの体格となっていたセンゴクが白ひげの一撃で吹き飛ばされたのだ

「ぐっ！」

センゴクは受け身を取って直ぐに立ち上がる

白ひげはゆっくりと歩いて来る

その様子を見るセンゴクの顔を汗が流れ落ちる

「そう長くは持たんな…」

センゴクは眩く様に言葉を溢すのだった



どれほど時間が経っただろうか？

中央の戦場では既にボロボロのセンゴクと無傷の白ひげの姿がある

時折、センゴクを助けようと海兵達が白ひげに仕掛けるのだが、

白ひげはただ無造作に打ち払うだけで海兵達を退けていく

最早大仏への変身も解けて満身創痕のセンゴクだが、彼は震える膝を

抑え込む様にして立ち上がる

その時、不意にセンゴクの後方で大きな歓声が沸き上がる

歓声につられる様にしてセンゴクは振り向く

そこには海楼石の手錠が外れたエースの姿があつた

「突破されたか…」

そう眩きながらセンゴクはエースの近くにゐる麦わら帽子の男を見る

「ルーキーだと思つていたが、流石はガープの孫と言つた所か…あいつに似て無茶ばかりするようだな」

そう言いながらセンゴクはため息を吐く

「グラフララー！」

白ひげはエースを助けたのが自分の息子達ではなく、駆け出しの

ルーキーであつた事が愉快で笑つた

エースとルフィが共闘して戦場を脱け出そうとしている

白ひげ一味の者達はインペルダウンの囚人達と協力して2人をサポートしていく

センゴクと白ひげには、その光景がまるで新しい時代が始まるかの様に見えていた

「やれやれ、私も老いたというわけか…」

センゴクの眩きはエースとルフィを中心とした喧騒に飲み込まれて消えていく

「だが、私にも1つの時代を生き抜いた意地がある」

そう言うのとセンゴクは、ずれていた眼鏡をかけ直す

「最後までカツコつけさせてもらうとしようか」

センゴクは最後の力を振り絞つて大仏へと変身する

そして海で生きてきた男の1人として、世界最強の男に挑むのだった

第146話

海軍三大将の2人、クザンとボルサリーノがエースとルフィの行く手を阻もうとするだが、白ひげ一味のマルコやジョズを始めとした多くの者達が

エースとルフィを援護していく

そして、遂にエースとルフィは白ひげの船にまで辿り着いたのだった

「負けたか……」

最早立ち上がる力も無いセンゴクがそう呟く

目的を果たした白ひげ一味はこの後は撤退するだろう

だが、それでこの戦争が終わる訳ではない

戦争においてもっとも難しいのは終わるかたである

正義を標榜する海軍が、悪と称する海賊に負けたままでは終われないのだ

海軍としては革命軍の事もあり、そうそうに手仕舞をしなければならぬのだが、

負けたままでは世間的な印象以上に世界政府に負い目を持つことになる

そうなれば海軍の在り方に政府の横槍が入っていき、やがて海軍は完全に世界政府の

私物となってしまうだろう

故に海軍はこのまま終わる事が出来ない

このままでは海軍と白ひげ一味の戦いは間違ひなく泥沼化するだろう
もし海軍がそうそうに白ひげ一味との戦争を終わらせるとするならば、
第三者に介入してもらふ必要がある

そんな状況の中で海軍本部を舞台とした戦場に新たな勢力が現れる

白ひげと並ぶ《四皇》の一人、赤髪のシャンクスとその一味だ

「双方武器を下ろせ！この戦争、俺が預かる！」

シャンクスの一喝に戦場のあちこちで争っていた者達の動きが止まる

「何をしに来た、赤髪！」

ボロボロのセンゴクが、元帥としての責任感だけで身体を支えてシャンクスに問いかける

「言つただろう！この戦争を止めに来た！」

「我々に白ひげ一味を見逃せというのか!？」

「このまま双方のどちらかが滅ぶまで戦いを続けるつもりか!？」

「我々は海を守る男としてその覚悟はある！」

センゴクの返答に海兵達が顔を上げて胸を張る

「白ひげ！お前はどうかだ!？」

「俺達は家族を守る為ならとことん戦う！」

白ひげの言葉に一味の者達が不敵に笑う

「双方共に退く気は無いんだな!？」

「無い！」

センゴクと白ひげの返答に戦場にいる者達が再び戦闘態勢に入る

「ならば！俺はここに代案を示す！」

シヤンクスの言葉に戦場にいる者達の注目が集まる

「双方の代表による決闘だ！」

シヤンクスの言葉に多くの者達が目を見開く

そんな中で白ひげの笑い声が大きく響き渡った

「グララララ！おもしろええ！」

白ひげはそう言うのとセンゴクの方に振り向く

「その決闘！この俺がを受けて立つ！センゴク！テメエはどうだ！」

白ひげの言葉にセンゴクは目を瞑る

「ニューゲート！決闘は俺が受ける！」

そう言つて堂々と歩いて来たのは、海軍の英雄であるガープだった

白ひげとガープが睨み合いながら笑う

「わかった！赤髪！その提案を受け入れよう！」

センゴクがそう言った事で海兵達がざわめく

「責任は私が取る！」

センゴクがそう言い切った事で海兵達のざわめきが収まる

ざわめきが収まったのを見てシャンクスは「つ領いてから話し出す

「双方！この決闘に賭ける物を！」

シャンクスの言葉にセンゴクが答える

「ニューゲート！貴様が勝てば白ひげ一味のみだけでなく、インペルダウンの

囚人達も見逃そう！」

センゴクという言葉に海兵達が驚く

グループが負けた時のリスクがでかすぎるのだ

「グララララ！これだけの男達の自由を賭けるとあっちゃ俺も相応の物を賭けねえとな

！」

そう言つて白ひげはニヤリと笑いながら答える

「俺は男達の自由の代価として俺の首を賭ける！」

白ひげの宣言に今度は海賊達がざわめく

そのざわめきの中でルフィは身を震わせていた

千を越える男達の命運を笑いながら背負った白ひげの器のでかさに：
こうして後の歴史に《頂上決闘》と記される事になる戦いが始まるのだった

第147話

海軍本部にてガープと白ひげの決闘が始まった

「ふんっ！」

振動と武装色を纏わせた拳を白ひげが振るう

サカズキとセンゴクを沈めたその拳がガープに迫る

だが…

「ぬうえい！」

ガープは武装色を纏わせた拳で白ひげの拳を迎撃した

その瞬間、空気が爆ぜた

その衝撃に決闘を見守っていた男達が目を瞑る

空気が爆ぜた衝撃が収まり男達が目を開けると、そこには拳を合わせた

ガープと白ひげの姿があった

男達は目を見開く

サカズキとセンゴクを沈めた白ひげの一撃を、拳1つで迎え撃ったガープの力に

「グララララー！」

「ぶわっはっはっはー！」

白ひげとガープの攻撃が加速していく

何合も打ち合わされていく

その攻撃の中で白ひげは薙刀も使っていくが、ガープはそれをも拳一つで迎え撃つ
英雄の異名に不足無し

世界最強の海賊の名に不足無し

男達は生きる伝説の姿を目撃している幸運に身を震わせるのだった



「はっはっはー！」

ガープと白ひげの決闘を見守る男達の一人である鷹の目のミホークは笑っていた

「世界最強の男達の強さとはこういうものか、はっはっはー！」

ミホークは笑いながら一つの拳動すら見逃さぬとばかりに、ガープと白ひげの決闘を見据える

「遠い…だからこそ挑む価値がある、はっはっはー！」

ミホークがワインで喉を潤していく

海軍本部から盗って……もとい、取ってきた物だ

「礼を言うぞシラカワ。これほどの決闘、そう見れるものではない……はっはっは！」
ミホークが上機嫌に笑いながら決闘を見守る

そして、ガープと白ひげの決闘に少しずつ変化が現れ始めたのだった



白ひげとガープの決闘に変化が現れたのはガープの拳がキツカケだった

なんと、ガープが拳で白ひげの薙刀を砕いたのだ

白ひげが砕けた薙刀をガープに投げつける

ガープが投げつけられた薙刀を避ける

避けた事で僅かに態勢が崩れたガープの隙を見逃さずに白ひげが拳を振るう

始めの一撃を当てたのは白ひげだった

だが、ガープは不敵に笑いながら白ひげに拳を返す

一発、二発と互いに拳を交わし合う

白ひげがガープを殴り飛ばす

殴り飛ばされたガープは間髪入れずに間合いを詰めて白ひげを殴る

る
ガープの一撃で上体が仰け反った白ひげは、その反動を活かしてガープに頭突きをす

やがて白ひげとガープは足を止めて殴り合う

男と男の意地の張り合いだ

白ひげとガープの身体に少しずつ痣が出来ていく

口を切ったり、鼻血を流したりと傷ついていく

だが、ガープと白ひげは一步も引かない

「ぶわっはっはっは！」

「グララララー！」

ガープと白ひげが笑う

背負っている物の大きさを感じさせずに

まるで友との語らいを楽しむ様に

だが、そんな2人の戦いも少しずつ終わりへと近づいていく

「ふんっ！」

「ぬうえい！」

殴り合いを始めた当初に比べて、確実に2人の攻撃の数は減ってきている

2人の決闘を見守る多くの男達の中に確信に近い思いが沸き上がる

終わりは近いと：

海賊達が、海兵達が拳を硬く握り絞めて見守る

白ひげとガーブが互いの拳で弾き合った勢いで離れると不意に動きを止めた

「そろそろ終わりにしようかのう、ニューゲート！」

「ああ、俺が勝つて終わりだ、ガーブ！」

「何を言つとる！ 俺が勝つわい！」

そう言い合うとガーブと白ひげはニヤリと笑う

「ぶわっはっはっは！」

「グララララ！」

ガーブと白ひげが笑い声を上げながら踏み込み、拳を振り上げる

ガーブと白ひげの拳がすれ違う

空気が爆ぜる音と共に2人の拳が相手の顔を捉える

数瞬、その態勢のままガーブと白ひげの動きが止まる

そして、海風が1つ吹くと白ひげがゆっくりと倒れていくのだった

「俺の勝ちじゃな、ニューゲート」

第148話

海軍本部が海兵達の歓声と、海賊達の泣き声に包まれる

そんな中でガープは大の字に倒れる白ひげの横に腰を下ろした

「ああ、しんどかったわい」

ガープはそう言いながらため息を吐く

「うっ……」

「お？起きたかニューゲート」

先程まで死闘をしていた相手とは思えない程に、ガープは気安く白ひげに声を掛ける

「負けたか……」

「おう！儂の勝ちじゃ！」

白ひげの言葉にガープがニツと笑いながら応える

「ニューゲート、お前さんは数年前に死病を患ったらしいな？それで衰えた分だけ

儂の方が上じやったのう」

「バカ野郎。その程度で衰える程柔じゃねえ」

ガープは白ひげの言葉に首を傾げる

そんなガープを白ひげが笑う

「グララララ！ガープ、俺から最後の一踏ん張りを奪ったお前の相棒に後で礼を言っておけ」

そう言われたガープはセンゴクの方に顔を向ける

そこには氣を失つても不思議では無い程にポロポロのセンゴクが、ガープを見守る姿があつた

「そうじゃのう、後で礼を言っておくわい」

そう言つとガープと白ひげは目を合わせてから笑い合つた

「さて、ニューゲート。決闘は儂の勝ちじゃ」

「ああ、この首…好きにしろ」

そう言う白ひげにガープは悪戯をする子供の様な笑みを浮かべる

「センゴク！決闘は儂の勝ちじゃが、この後で海賊共を追う余裕はあるか!」

ガープはこの場にいる全ての者に聞かせる様な大声でセンゴクに問い掛ける

「バカ者が！首を回して状況を見てみる！」

ガープはセンゴクの言う通りに首を回して状況を確認する

ガープのその時の仕草は片手を額に当てて芝居染みていた

「皆既にポロポロだ！海賊達を追う余裕があるのはクザンとボルサリーノぐらいだろう

！」

ガーブはセンゴクの言葉に何度も首を縦に振って頷く

「だが！海軍本部に残されている最大戦力である2人がいない時に、もし四皇や

革命軍が動いたらどうなる!？」

「大変な事になるのう！」

センゴクの言葉にガーブがそう応えるのだが、どうにもわざとらしく見えてしまう

「そうだ！ニューゲートの首を手に入れた今、この場にいる海賊達を見逃しても

海軍本部としては十分な功績として胸を張れる！ならば、ここで手仕舞いだ！」

「という事じゃ、ニューゲート」

そう言いながらガーブは満面の笑みで白ひげに振り返る

すると、事態を理解した白ひげが大声で笑い出す

白ひげの笑いは徐々に周囲に伝わっていく

やがて海軍、海賊の分け隔てなく皆が笑い始めた

海軍と海賊

立場は違えど同じ海に生きる者として、男達はお互いを認めあつたのだ

明日になれば、またお互いにしのぎを削り合う戦いが始まるだろう

でも、今この時は一緒に笑うのも悪くない

1つの時代を生き抜いた者達と、これから新たな時代を生きる者達は、2人の男が魅せた決闘を通して爽やかに笑うのだった

だが、そんな状況に乱入する無粋な者がいた

「ゼハハハハ！」

今回の戦争の原因を作った男、マーシャル・D・ティーチの笑い声が響き渡ったのだ
た

第149話

「ゼハハハハ！」

海軍本部に黒ひげの笑い声が響き渡る

「ティーチ、何をしに来た」

ガープとの決闘で全力を出しきった白ひげは、顔だけを何とか起こして黒ひげを睨む
「ゼハハハハ！俺様は七武海だぜ？海賊を討伐しに来たに決まってるだろう！」

黒ひげの言葉にその場にいる皆が顔を歪める

「黒ひげ！この戦争は俺が預かっている！それを邪魔するのか!？」

「赤髪！俺様は政府公認の海賊だ！その俺様がなんでテメエの言うことを

聞かなきゃならねえんだ！」

そう言つて黒ひげがニヤリと笑う

「都合の良いことに白ひげはポロポロだしなあ、ゼハハハハ！」

黒ひげと共に一味の者達が笑う

その笑い声に白ひげとガープの決闘を見届けた多くの者達が拳を握り締める

「マーシャル・D・ティーチ！白ひげの身柄は決闘の約定で我々海軍のものだ！」

「ああ？知らねえなそんな約定。七武海の俺様を止めなければ世界政府の会議で

承認を取つてきな。もつとも、その時には白ひげの首は

無くなつてゐるだろうがな、ゼハハハハ！」

政府公認で海賊行為を行える七武海

それ故に黒ひげの行動を止める事が出来ない

黒ひげは海賊の首を取りに来た

これを海軍側が咎めれば七武海の在り方の否定になり、延いては

政府の否定につながつてしまう

海賊側が黒ひげを止めれば、せつかく止まつた戦争をまた始める事になる

それをしたならば白ひげとガープの決闘を汚す事になる

この場にいる海賊と海軍は動く事が出来ない

「ゼハハハハ！」

それを知るが故に黒ひげは笑う

勞せずして自らの野望に近付く事が出来るからだ

「黒ひげよ、ニューゲートの首を諦めるつもりは無いんじやな？」

「目の前のお宝を諦める海賊がいんのか？英雄さんよお、ゼハハハハ！」

ガープの言葉を黒ひげが笑う

だが、黒ひげの笑い声が突如止まる

「ガープと白ひげが顔を見合わせた後に笑い始めたからだ
「なんだ？」

黒ひげがガープと白ひげの様子に首を傾げる

「ぶわっはっはっは！おかしいのお、ニューゲート！」

「グララララ！ああ、こいつは傑作だぜ！」

笑う2人の姿に黒ひげは眉を寄せる

「ああ？何を笑ってやがる？」

そう言う黒ひげにガープと白ひげは不敵な笑みを見せる

「ティーチ、おめえは全てが計画通りに行ったと思っているんだらう？」

そう話す白ひげの姿を黒ひげは目を逸らさずに見据えている

「おめえもやっかいな奴に喧嘩を売っちゃまったな」

白ひげの言葉に黒ひげは首を傾げる

「おめえの計画、全部読まれてたぜ」

そう白ひげが言った時、不意に何者かの言葉が響き渡る

「やれやれ、随分と無粋な輩がいるようですね」

その言葉と共に白ひげとガープの近くにワームホールが開く

そして、その中からシユウが姿を現した

「ご存知ですか？七武海はあくまでも海賊行為を認められただけの海賊である事を」

そう言いながらシユウは剣を手取る

「つまり、海賊として何者かに狙われる可能性があるのですよ。例えば賞金稼ぎとかです。例えね。

もつとも、賞金は貰えないでしょうから名を上げる為になりますよ」

ニヤリと不敵に笑いながらシユウは剣を黒ひげに向ける

「そう言う訳ですので覚悟はいいですか？マーシャル・D・ティーチ」

その言葉と共にシユウが踏み込む

黒ひげは舌打ちをしながらシユウを迎え撃つのだった

第150話

シユウの剣を拳で弾きながら黒ひげが話す

「シラカワア！テメエは七武海に、政府に喧嘩を売ってるんだぜ！？」

それをわかってんのかあ!？」

シユウは踏み込んで剣を振るいながら黒ひげの言葉に答える

「世界政府加盟国の1つに少しツテがありますので、今回の事は

事前に根回しをしていますよ！」

「チッ！」

黒ひげは舌打ちをしてシユウから距離を取る

そして、右手に黒いナニカを作り出した

「数ヶ月前のテメエとの一戦で、俺は自分の能力を完全に把握した！

ヤミヤミの實の力を見せてやらあ！」

シユウの身体が黒ひげに吸い寄せられる

だが、シユウは吸い寄せられる勢いを利用して黒ひげに踏み込んでいく

「それは以前に体験しましたよ」

シユウが強く剣を振るう

黒ひげはシユウを吸い寄せていたナニカを消して、右手に武装色を纏わせて防御する
「貴方の能力は対能力者には非常に有効ですが、戦闘力を能力に依存していない者には
然程有効にはならないですね」

「ハッ！言うじゃねえか！」

黒ひげの拳が、シユウの剣が互いを倒そうと振るわれていく

シユウと黒ひげの戦いが始まって少し経った頃、シユウが転移を交えて

黒ひげに攻撃をしていく様になった

レイリーとの修行で鍛え直されたシユウの武装色の覇気を纏わせた剣は、

少しずつ黒ひげの身体を傷つけていく

「うざっつてえー！」

薙ぎ払う様に振るった拳がシユウの身体を殴り飛ばす

だが、シユウは殴り飛ばされた勢いで転移をして、攻撃の機会へと変えていく
途切れる事なくシユウの攻撃が続いていく

黒ひげとシユウの戦いは、シユウが優勢に進めていった



「ほう、シユウもやるもんじやのう」

戦いの場を離れたガープが軍医に治療を受けながら観戦している

「ニューゲート、お前は どう見る？」

ガープは戦いの場を離れる際に白ひげも連れて来ていた

そして、白ひげもガープと一緒に軍医の治療を受けているのだ

「戦いの技術は博士の方が上だな」

白ひげは治療を受けている最中でありながらビールを煽っていく

「カア——腹に染み渡るぜ！」

「ニューゲート、お前の身柄は海軍の預かりだと理解しているのか？」

ガープ、白ひげと一緒に軍医に治療を受けながらセンゴクがそう言う

「ケチケチするな、センゴク。これから先、こいつを飲める機会もそう多くねえんだろ？」

「それはこれからのお前次第だな、ニューゲート」

センゴク、白ひげ、ガープは先程まで戦争をしていたとは思えない程に

和やかな雰囲気では話をしていく

「シラカワ君の想定通りに事は進んでいる。後はあの男を彼が倒すだけだ」

「俺はガープに勝つつもりだったんだがな、グララララ！」

白ひげは笑いながらビールを煽る

「まあ、負けちまったもんは仕方ねえ。この首はおめえ達に預けるさ」

そう言いながら白ひげはシユウと黒ひげの戦いに目を向ける

「だがな、ティーチの奴は俺の下で20年以上グランドラインで生き抜いて来た男だ。

戦いの技術は博士の方が上だが、生き抜く事に関してはティーチの方が上だろうよ」

そう言いながら白ひげはまた、ビールを飲む

「このまま、すんなりとは行かねえだろうな……」

決闘を汚された海軍と海賊達がシユウへと歓声を送っている

白ひげが呟いた一言は歓声に飲まれる様に消えていったのだった

第151話

「いてて！もつと優しく治療してくれよ！」

軍医に治療を受けているライトが文句を言っている

そして、治療が終わったライトは、海軍と白ひげ一味の戦争をなんとか生き抜いた事に

安堵のため息を吐いた

「なんとか生き抜いたけど……まだ終わりじゃねえんだよなあ」

そう言いながらライトは黒ひげと戦うシユウの姿を目で追っていく

「サカズキ大将が白ひげに一撃でやられたと思つたら、ガープ中将と白ひげが決闘をして……、

もう完全に俺の知らない頂上決戦になつてるな」

そこまで言うのとライトはまたため息を一つ吐いた

「そして最後には黒ひげが白ひげの能力を奪いに来たと思つたら、それをシユウが止めに来るし……もしかしてシユウの奴、こうなる事をわかつてたのか？」

そう言いつつライトは首を傾げるが、考えても答えが出ずに頭を掻いた

「考えてもわかんねえや、後でシユウに答えを聞こう」

ライトは奮闘するシユウへと目を向ける

「だから勝てよな、シユウ」



「ゼハハハハ！やるじゃねえか、シラカワ！」

シユウの攻撃により身体から血を流す黒ひげが、武装色の覇気で傷口を締めながら笑う

対するシユウもその身体に何度も黒ひげの攻撃を受けてダメージを負っている

だが、両者共に戦意に衰えは無い

「俺様の計画を見抜いてここまで追い込んだテメエには、拍手をしてやりてえぜ！」

「貴方の称賛などいりませんよ」

「ゼハハハハ！つれねえ事を言うじゃねえか！」

笑いを収めた黒ひげが不敵な笑みを見せる

「だがな、シラカワよお…テメエは一つ勘違いをしているぜえ？」

「ほう？何を勘違いしているのですか？」

黒ひげは笑いながら右手を上へ上げた

「俺とテメエの戦いは決闘じゃねえって事だ！」

黒ひげが上に上げた右手をグツと握る

すると、戦場に銃声が響き渡った

銃声により戦場は静寂に包まれる

睨み合う黒ひげとシユウに動きは無い

だが、やがて不敵に笑っていた黒ひげの表情が歪み始める

そして…

「うっ…：があああああああああ！」

黒ひげは血が流れる腹を抑えて痛みにより転げ回り始めたのだった

「決闘では無い？ そんな事は知っていますよ、黒ひげ」

シユウの言葉が静かな戦場に響いていく

「なので、こうして横槍が入る事は想定していました…もつとも、貴方が存外に

しぶとかったので思ったよりも時間が掛かってしまいましたかね」

転げ回っていた黒ひげが身体を起こしながらシユウを見据える

「何をしやがった、シラカワ！」

「先程から何度も貴方に見せていたではないですか」

そう言つてシユウはワームホールを開いた

「一言で言えば、私に向けられた銃弾を貴方に向けて転移させたのですよ」

シユウの言葉に黒ひげは舌打ちをする

「そういえば、随分と見物人が多いですね」

そう言いながらシユウは目を周囲へと向ける

「戦いの見物人には銃を空中へと放つて離し立てる者がいたりするのですが……」

そう言うときシユウは黒ひげに不敵な笑みを向ける

「その銃弾が『たまたまワームホールで貴方とその一味に向けて転移される』事も

あるでしょうね」

シユウの言葉に黒ひげが目を見開く

「デメエ……シラカワア！」

「先に他者を介入させたのは貴方ですよ、黒ひげ」

シユウが剣を持たぬ左手を振るう

すると、2人の戦いを見守っていた者達の頭上に数多のワームホールが出現した

それを見た多くの者達が歓声を上げる

皆、決闘を汚す無粋な黒ひげとその一味に怒りを抱いていたからだ

「さて、貴方達はどれほどの銃弾に耐えられるのか……楽しみですね」

「シラカワア！」

黒ひげの怒声を遮る様に銃声が1つ、戦場に響き渡る

それを皮切りに、数えきれぬ程の銃声が続いていく

黒ひげとその一味の者達の身体は銃弾の雨を浴びていく

そして銃弾の雨が止むと、そこには力無く倒れる黒ひげとその一味の姿があるのだ
た

第152話

「はっはっは！俺の息子ながら凄いい奴だ！」

黒ひげ一味の末路を見届けたシャンクスが息子であるシユウを称賛する

「ベックマン、1つ聞いていいか？」

「何だ？」

笑いを収めたシャンクスが副船長のベックマンに問い掛ける

「シユウと黒ひげの戦いなんだが、一見すると黒ひげを出血させていたシユウが優勢に

見えただろうが、実際にはシユウの方が黒ひげよりもダメージが大きかった」

シャンクスの言葉にベックマンが頷く

「あのまま戦いを続けていれば黒ひげが勝った筈だ。なぜ黒ひげは決着を急いだんだ？」

「俺は白ひげの存在が原因だと思っている」

「白ひげの存在？」

そう言いながらシャンクスはベックマンの言葉に首を傾げる

「黒ひげがこの場に現れた理由を言っていたらどう？『白ひげの首を取りに来た』」

「確かにそうだな…」

「そして黒ひげはガープに対して白ひげを『お宝』と表現していた。黒ひげには白ひげの首を確実に確保するべき何らかの価値があつたんだろう」

「それが黒ひげが決着を急いだ理由か？」

「おそらくな」

シャンクスはベックマンの答えに「つ領くと後ろに振り返る

」と、言うことらしいな、ナミ」

シャンクスが振り返つた先にはライフルを肩に担いだナミの姿があつた

「シユウはその事も含めて読みきつていたのかしらね、お養父さん？」

「さあな。シユウの恋人であるナミがわからないものを俺が知る筈もないだろう」

そう言つてシャンクスは肩を竦める

「しかし、随分と派手にライフルを撃つていたな」

「弾代はお養父さん持ちだったからね♪」

「はっはっは！ちやつかりしてるぜ！」

そう言つて笑うシャンクスにつられる様にナミも笑う

「シユウの事を頼んだぜ、ナミ」

「ええ、任せて」

そう言つてナミはシャンクスにウインクする

「そうだ、お養父さん。礼服を用意しておいてね」

「ん？どういう事だ？」

「わたしとシユウの結婚式に出席してもらうからよ♪」

ナミの言葉にシャンクスが目を見開く

「本当か!? いったい!？」

「今回の一件が落ち着いたらかしら?」

「ベックマン! 礼服はどこで仕立てたらいい!？」

「落ち着け、シャンクス」

慌てるシャンクスの姿に、赤髪海賊団の者達が笑うのだった



シユウが身体を穴だらけにして倒れている黒ひげに歩み寄っていく

「ジラ…ガワア…!」

「おや、それほどの状態になっても意識があるとは…驚異的な精神力ですね」

既に死んでいてもおかしくない状態の黒ひげだったが、生存しており、

なおかつ意識まであったのだった

そんな黒ひげに油断無く備えながら、シユウはある人物達と話をする為に
ワームホールを開いた

「エース、聞こえますか？」

「おう？シユウか！聞こえるぜ！どうした？」

「黒ひげの意識がまだあるのですが、貴方が落とし前をつけますか？」

シユウの言葉に少しの間、エースは沈黙する

「いや、ティーチをそこまで追い詰めたのはシユウだ。俺は皆が

俺の為に来てくれただけで満足さ」

「そうですか」

そう言つてシユウはエースとの間に開いているワームホールを閉じようとする

だが、ワームホールが閉じる前にエースが話し出した

「おっと、言い忘れてた！シユウ、ありがとな！」

「ククク、どう致しまして」

今度こそエースとの間のワームホールを閉じたシユウは、別の人物と話を始める

「エースは黒ひげの首をいらないそうです。なのでお買い上げいただけませんか、

センゴク元帥？」

「ふむ、そやつの首にはどんな価値があるのかね？」

「白ひげの下で20年以上上海賊として生き抜き、独立してから直ぐに七武海に成り上がった

男です。インペルダウンを破った男をルーキーと発表するよりも多少は世間の心象が

良くなると思いますよ」

「なるほど……いくらで売ってくれるのかな？」

「今回の一件が終わった後の宴……その費用を海軍持ちという事でいかがですか？」

「……わかった。それで手を打とうか」

シユウがセンゴク元帥との間のワームホールを閉じる前に、センゴク元帥の大きなため息が

聞こえてきたのだった

「さて、そういうことですので、貴方は《金獅子のシキ》に続くインペルダウンを破った男として名を残す事になります」

「ジラガワア！」

こうして白ひげ一味と海軍本部の戦争は一応の終わりを迎える

だが、黒ひげは意識を失うまで血を吐きながらもシユウの名を呼び続けたのだった

第153話

海軍本部と白ひげ一味の戦争が終わって数日後、世界に向けてある声明が発表された。『皆さん、私は海軍本部元帥のセンゴクです。本日は皆さんにご報告する事がございます』

以下、電伝虫を通じて世界に向けて発表された声明である

『数日前、我々海軍は白ひげ一味との決闘に勝利し、白ひげの異名を持つ

エドワード・ニューゲートの身柄を確保しました』

『その戦争の際に海軍として色々と不手際がありました。それは後日改めてご報告します』

『話を戻します。白ひげの身柄を確保した我々は、白ひげにある要求をしました。それは、

彼に海賊を引退して海軍に協力をしてもらう事です』

『多くの皆さんはご存知だと思いますが、現在は大海賊時代と呼ばれています』

『皆さんは、今の大海賊時代と呼ばれる前の時代を覚えているでしょうか？一つの酒場の中で

海軍と海賊が笑い合いながら酒を酌み交わしていた時代の事を』

『皆さんは覚えていらっしゃるでしょうか？かつての時代は、略奪主義の海賊よりも平和主義の海賊が

多くおり、平和に過ごす皆さんと共に酒を酌み交わした海賊達がいたことを』

『私は覚えていません。ですが、残念ながら多くの略奪主義の海賊達が皆さんの平和を

脅かしているのが現状です。そして、略奪主義の海賊は今もなお増え続けています』

『我々海軍は正義の名の元に今日まで皆さんの平和を守る為に、多くの海賊と戦ってきました。』

ですが、真に情けない話ですが、増え続けている海賊に対処しきれいていません』

『そこで、大海賊時代を迎える前の時代から生き残り、今も伝説の海賊として名を馳せている

エドワード・ニューゲートに皆さんの平和を守る為に協力を依頼したのです』

『皆さんの中には納得のいかない方もいらっしゃるでしょう。海兵の中には白ひげ一味との

戦いで自身が、友人が不幸な目にあつた者もいるでしょう』

『ですが、忘れないで貰いたい！我々が憎むのは、平和を脅かす悪を働く者達である事を！』

『忘れないで貰いたい！我々が憎むべき相手は、社会に馴染めず、海に自由を

求めた者達ではない！人々から富や平和を奪う悪である事を！』

『事の詳細は後日改めてご報告致します。今回の声明に納得出来ない、不満だと

言う海兵諸君も多々いる事でしょう。だが、諸君等には海の平和を守る為に、

真摯に職務に励む事を希望する』

『以上で本日のご報告を終わりとします。ご静聴感謝します』



海軍本部のセンゴク元帥が発表した声明は世界に様々な反応を起こした

仁義を大切にす平和主義の海賊達は多くの賛同を示した

略奪主義の海賊達は事の成り行きを息を潜めて静かに観察していた

そして、海軍内の過激派は強く反発した

この様な事は認められないと、センゴク元帥を激しく非難していった

その過激派の代表としてサカズキ大將が、センゴク元帥の辞任を要求していく

それに対する様に元帥擁護派の代表としてクザン大將が矢面に立った

元より反発しあっていた2人の話し合いは、やがて決闘へと発展する

その決闘に勝利したのは：クザン大将だった

海軍本部と白ひげ一味の戦争において、サカズキ大将は白ひげに敗れている

その時の戦傷が、今回の決闘の結果を決めたのだった

サカズキ大将が決闘に敗れた事で過激派が沈黙するかと思われたが、彼等は海軍を辞して

賞金稼ぎとして独自に海賊を狩る組織を作っていた

これらの事は新聞に大々的に載って多くの人々が知る事となる

そして、その新聞の片隅には一人の海賊が処刑された事が記されていた

『インペルダウンを破った海賊、マーシャル・D・ティーチ。彼の者の処刑が執行された』
だが、時代の変革に目を奪われた人々の中に、この一文に関心を示す者はいなかった
のだった

第154話

「あゝ…、この宴でこの前の戦争の事を水に流してね。乾杯」

「乾杯！」

海軍と白ひげ一味、そして宴に参加した平和主義の海賊が共に盃を上に掲げる

現在、海軍本部では白ひげの引退と、平和主義の海賊の海軍協力を祝って宴が催されていた

その宴の音頭を、次期元帥候補となったクザン大将がとつたのだった

「グラララララ！ テメエら！ 酒を一滴も残すなよ！」

「おう！」

白ひげの言葉に、宴に参加した海賊達が笑いながら応える

現在、白ひげは海賊を引退して海軍本部の相談役の地位についている

白ひげの役目は元海賊の経験を活かして、平和主義の海賊との橋渡しが主である

橋渡しが主ではあるのだが、それは名目上の話であり、実質的には海軍と海賊の協力態勢の

象徴的な存在として海軍本部の相談役に席をおいているだけである

その為、昼間から酒を飲んだり、ガープと共に海兵を鍛えたりして悠々自適に余生を過ごしているのが現状である

「親父、この酒も美味しいよい」

決闘の傷も癒えて豪快に樽のまま酒を飲んでいる白ひげの元に、マルコがやってきた
「おう、マルコ。縄張りの方はどうだ？」

「ビッグ・マムがちよつかいを出して来たけど、赤髪が協力してくれたから直ぐに片付いたよい」

白ひげの引退に伴い、白ひげ一味の船長はマルコに代替わりをしていた

そして、四皇の一角であるビッグ・マムが、白ひげ一味の代替わりの混乱を狙い、

白ひげ一味の縄張りを掠め取りに来たのだった

だが、ビッグ・マムの狙いは失敗に終わる

ビッグ・マムと同じ四皇のシャンクスが白ひげ一味に協力をしたのだ

まあ、シャンクスが協力した理由は、下手に混乱が起これば息子の結婚式に参加出来ないといった個人的理由が大半をしめていたのだが：

その為、シャンクスは大人気なく全力でビッグ・マムを潰しにいったのだった
その結果、ビッグ・マムは四皇としては最低の戦力にまで落ち込んでしまった

海賊としては異質な政治力のおかげで、四皇の地位は守る事が出来たが、ビッグ・マ

ムが

胸に秘める野望は遙か彼方に遠退いてしまったのだった

「そうか、赤髪には良く礼を言っておけ」

「わかつてるよい、親父」

そう言つてマルコは白ひげと笑顔で酒を酌み交わすのだった



宴が催されている一角、そこではガープとルフィ、そしてエースと一緒に宴を楽しんでいた

「ルフィ、肉ばかりじゃなくて野菜も食わんか！」

「じいちゃん、肉じゃなくちゃ力が出ねえよ」

先に行われた戦争…現状では《頂上決闘》と呼ばれている戦いの最中に約束した通りに、

ルフィはガープと一緒に食事をしていたのだった

「それで、お前はどうかするのか決めたのか、エース？」

「んが？」

「一杯に飯を頬張っていたエースがガープの言葉に顔を上げた

「ああ、俺はルフィと一緒にいくことにしたぜ、ジジイ」

「そうか…」

「親父は引退しちまったからな。それに、あんな無茶ばかりする

養弟を放っておけないだろ？」

「その通りじゃのう」

そう言つてエースとガープは笑つた

「そう言えば、ルフィ？お前はシユウに頼んで新聞に載つておつたが、何をしとつたんじゃ？」

「ああ、仲間にメッセージを送つたんだ」

「メッセージ？」

「俺達は弱い…それが今回の事でハッキリわかつた」

ルフィはその明るい性格からは想像しにくい、至極真面目な表情をしていた

「エースを助けに来る前も、俺は仲間を守れなかつた…。だから、2年間

修行する事にしたんだ」

ガープはルフィの言葉に納得した様に頷く

「ルフィ、師匠の宛はあるのか？」

「ハンコックに鍛えてもらう」

ルフィはガープの疑問にそう答えた

ボア・ハンコック

彼女は七武海の1人である

ルフィは冒険の中で彼女と出会い、エースを助けに行くために色々と協力をしてもらったのだ

そして、彼女は覇気使いであるので、2年間彼女に修行をつけてもらう事にしたのもっともルフィは最初、シャボンディ諸島で出会ったレイリーに修行をつけてもらうつもりだったのだが、当のレイリーに断られたのだ

その為、ルフィはレイリーではなく、ハンコックに修行をつけてもらうのだ

ちなみに、レイリーがルフィを弟子にする事を断つたのは、養孫を優先した為である
結婚式が行われれば、養孫夫婦の間に子供が産まれるかもしれない

その為、父親であるシャンクスを差し置いて名付けをしようとしているので、いつでも動ける様にルフィの弟子入りを断つたのである

弟子入りを断られたルフィにとっては不幸かもしれないが、ハンコックにとっては幸福な時間を送れるありがたい事であった

「そうか、しっかりと修行せい」

「おう！」

その後、ガーブは孫達との一時をゆっくりと楽しむのだった

第155話

「なあ、シユウ。お前はどこまでわかってたんだ？」

海軍と海賊達の宴が催されている一角にて、ライト、たしぎ、シユウ、ナミが話をしていた

「いきなりですね、ライト」

「ずっと気になっていたからな」

ライトがシユウに聞いているのは頂上決闘における経緯だ

ライトは黒ひげの登場に合わせてやって来たシユウに、どこまで読んでいたのかを聞いたのだ

「ライトは黒ひげが白ひげの元を抜けた話は知っていますか？」

「確か一味の仲間を倒して悪魔の実を奪う、そして白ひげに傷を負わせて逃げたんだろ？」

ライトの返答にシユウが頷く

「黒ひげが悪魔の実を奪ったのはあの能力が目的だったのでしよう。では、一味の仲間や

「白ひげを傷つけた目的は何でしょうか？」

「うーん……今までの経緯を考えると、エースか？」

「私はエースは目的ではなく、手段だと考えました」

「手段？」

「ええ、黒ひげの目的を果たす為に必要な手段ですね」

シユウの言葉にライト、たしぎ、ナミが興味深そうに耳を傾ける

「アラバスタ王国の一件が終わった後、私とナミはグランドラインを巡っていました」

そこで黒ひげに襲撃された時に、黒ひげは私を手土産にすると行っていました」

「襲撃されたって……大丈夫だったのか？」

「あの時、黒ひげはまだ自身の能力に不慣れでしたからね。何とか生き残れましたよ」

そう言つて肩を竦めるシユウの姿に、ライトとたしぎはため息を吐く

「その時の黒ひげの言葉と、後にエースの身柄を海軍に差し出して七武海になった事から、

黒ひげの目的は四皇以上の地位になる事だと推測しました」

「四皇以上の地位？」

「わかりやすく言えば、海賊王ですね」

黒ひげの目的を告げられた、たしぎとナミが驚く

ライトは首を傾げていた

「なんでそこで海賊王になるのが目的だと思ったんだ？」

「一番の要因は白ひげに傷を負わせて逃げた事ですな」

ライトが更に首を傾げる

「なぜ、傷を負わせただけで逃げたのでしょうか？」

「単純に白ひげに勝てなかっただけとか？」

「ええ、おそらくはその通りでしょうね」

ライトは自分の予想が当たったのが嬉しくてニヤリと笑う

「ライト、もし仮に白ひげの首を取ったと噂が流れたら、その首を取った人物は

どの様に評価されると思いますか？」

「海軍なら英雄扱いだろうな。海賊なら四皇かそれ以上の…ああ、そう言う事か」

ライトは納得が言ったのかしきりに何度も頷く

「じゃあ、頂上決闘に黒ひげが襲撃してきたのは…」

「自身の力で成せないのなら、弱っている所を狙う…そういう事だと思いますよ」

「でもよ、他力本願っていうのはどうなんだ？」

「どの様な手段を用いたとしても、白ひげの首を取ったという事実があれば

後はなんとでも出来ますよ」

シユウの言葉にライトは頷きながらも、気になっていた事を聞くことにした
「シユウ、黒ひげの能力ってなんだ？」

「黒ひげ自身はヤマヤマの実と言っていましたね。能力としては

《引き寄せる》事に優れています」

「引き寄せる？」

「生物の他に、能力や痛みといった概念まで引き寄せる事が出来る能力ですね」

「シユウ、能力も引き寄せるって事は、能力者から能力を奪う事も出来たんじゃないか？」

「奪う事は可能だと思いますが、現実的ではないですね」

「何でだ？」

「ライト、海軍の座学等で聞いていませんか？能力者は1つ以上の

能力を有する事は出来ない」と

ライトは首を傾げながらも頷く

「私もある文献で、犯罪者を対象にして複数以上の悪魔の実の力を与える実験をした、
というものを見たことがあります。結果は例外なく死亡したそうですね」

「…そっか」

「ええ、ですので、黒ひげが白ひげの能力を奪うとは考えませんでした」

ライトは「ふくん」と言いながら何かを考えている

「どうかしましたか、ライト?」

「いや、何でもねえよ」

そう言うと、ライトは誤魔化す様に苦笑いする

そして、「流石にシユウもわかんねえよな…」と聞こえないように呟いたのだった

「さて、そろそろ失礼します。センゴク元帥達に予定を聞く必要があるので」

「予定?何の予定だ?」

「私とナミの結婚式に出席出来るのかどうかですね」

シユウがそう言うと、ライトとたしぎは目を見開いて驚いた

「ナミ!おめでとうございます!」

「ふふ、ありがとう、たしぎ」

たしぎの言葉にナミは少し照れながらもお礼の言葉を返す

「はあ!?!結婚式!?!」

「ええ、結婚式ですよ。ライトとたしぎは出席していただけますよね?」

ライトは魚の様に口をパクパクさせて言葉を続ける事が出来ない

「もちろん出席します!ライトくんもそうですよね?」

「お、おう!」

たしぎの促しに漸くライトが再起動した

その後は結婚式を話題としてナミとたしぎはガールズトークをしていく

そして、シユウがセンゴク元帥達の元へと行ってしまった後のライトは、所在なさげ
に

宴の料理を摘まんでいくのだった

第156話

頂上決闘から3ヶ月程経った頃、ココヤシ村で盛大な結婚式が行われようとしていた
「よく似合ってるわよ、ナミ。流石、私の養娘ね♪」

結婚式の主役の1人、花嫁のナミの元にやって来たベルメールが、
花嫁衣装を着たナミを称賛する

「ありがとう、お養母さん」

「もう……こんな時にお養母さんなんて呼ぶんじゃないわよ」

そう言つてベルメールは横を向いて手で目を抑える

「ナミ、あんたにお客さんよ」

ノジコがそう言いながらナミの元にやって来た

「あら？ベルメールさん、泣くのはまだ早いんじゃない？」

「うるさいわよ、ノジコ。あんたも早く結婚しなさい」

「うちのミカン畑と一緒に守ってくれる、素敵な旦那様が現れたらね」

ノジコはそう言いながら肩を竦めた

「ノジコ、お客さんって誰？」

「そうだったわ。入ってきていいわよ」

ノジコの言葉で水色の髪の毛の美少女が部屋に入ってきた

「お久しぶりですね、ナミさん」

「うん、久しぶりね、ビビ」

そう言いながらナミとビビは笑顔で握手をした

握手を終えたビビは花嫁衣装を着たナミを見ていく

「綺麗な衣装ですね…羨ましいです」

「ふふ、ありがとう」

ビビは苦笑いをナミに向けながら話し出す

「先を越されちゃいましたね」

「あら、自分の気持ちがあんなだったのか気づいたのかしら？」

「そうですね、ここにきてみてやっとなかりました」

そう言うのと、ビビは1つ息を吐いてから言葉を続けた

「ナミさん、私はシユウさんの事が好きです。1人の男性として」

ナミはその事を知っていた様に頷いた

「ですけど、今日の所はナミさんを祝福させていただきますね」

「今日の所は？」

「知っていますか、ナミさん？王族って伴侶が1人とは限らないんですよ？」

ビビの言葉にナミが目を見開く

すると、ビビは悪戯が成功した子供の様に笑った

「冗談ですよ、ナミさん」

「はあ…本当に強かになつたわねえ、ビビ」

「王女として色々と勉強していますから」

ビビとナミのやり取りを見ていた、ベルメールとノジコが大笑いしていた

「では改めまして…おめでとうございます、ナミさん」

「うん、ありがとう、ビビ」

そう言つてナミとビビはお互いに笑顔を向ける

その後、たしぎが部屋にやつて来ると、女性達はにこやかに話の花を咲かせるのだつた



ココヤシ村の岬には1つの墓がある

シラカワ・シユウの母である、シラカワ・アカリの墓だ

そのアカリの墓の前に、礼服を着た一人の男がいる

四皇の一人、赤髪のシャンクスだ

「アカリ…墓参り、遅くなっちゃまって悪かったな」

そう言いながらシャンクスはアカリの墓に花束を献じる

そして、シャンクスは常以上の柔らかい笑みをアカリの墓に向ける

「アカリ、俺達の子が結婚するぞ」

海風が一つ吹いてシャンクスの顔を撫でていく

「アカリ、シユウを産んでくれて、ありがとう」

また一つ海風が吹くと、シャンクスの目に浮かんでいた雫を拭いていったのだった

最終話

ココヤシ村にある集会場の扉が開かれる

扉の先には純白のウエディングドレスに身を包んだナミの姿があつた

ナミがゲンさんにエスコートされてゆつくりと前に進んでいく

エスコートしているゲンさんが、既に男泣きをしてしまつてゐるのはご愛嬌だ

ナミがエスコートされて前に進んでいくと、そこには白のタキシードに身を包んだ、

長身瘦躯の美男子、シユウの姿があつた

ココヤシ村では今、シユウとナミの結婚式が行われていたのだつた

エスコートされてシユウの元に辿り着いたナミは、目尻に涙を貯めながら

柔らかな笑みをシユウに見せる

そんなナミの笑みにシユウも優しく微笑んで応える

新郎と新婦が揃つた式場に祝詞を唱えるべく、一人の人物がシユウとナミの前に立つ

今回の結婚式にて大役を任されたセンゴク元帥だ

「新郎、シラカワ・シユウ。いかなる時もこの海で新婦と共に生き抜く事を誓いますか

？」

「誓います」

「新婦、ナミ。いかなる時もこの海で新郎と共に在る事を誓いますか？」
「誓います」

セングク元帥が厳かに頷く

「では、新郎新婦は誓いの口付けを！」

シユウとナミは向き合ってゆつくりと近付いていく

「ナミ、愛しています」

「わたしも愛しているわ、シユウ」

その言葉と共にシユウとナミの顔が近付けられていく

そして2人の唇が合わさると、式場は祝福の歓声に包まれたのだった



結婚式が終わると、飲めや歌えやの大騒ぎの宴となった

そして、多くの招待客達がシユウとナミに祝福の言葉を送っていく

「シユウちゃん、おめでどう」

「シユウ、おめでどうなのだ」

ワノ国にいるシュウの祖父母も結婚式に出席しており、シュウにお祝いの言葉を送った

「ありがとうございます。シオリお祖母さん、ブンタお祖父さん」

「ところで、シュウ。曾孫はいつになるのだ？」

「もう、気が早いわよ、ブンタさん」

そう言いながらシオリはブンタの背中を叩く

「そうですね…しばらくは新婚生活を楽しむつもりですが、

そう遠くない内にと考えていますよ」

「うむ！そうか！今から名付けが楽しみなのだ！」

「もう、ブンタさんったら」

この会話に聞き耳を立てている男が2人いる

シャンクスとレイリーの2人だ

それぞれに胸に秘めた案があるのだが、先を越されない様に無言の笑顔で牽制しあっ

ていた

「ナミ、おめでとうございます」

「ありがとう、たしぎ」

所変わって、ナミの元にはたしぎが祝福の言葉を送りに来ていた

「たしぎ、はいコレ」

「コレって…ブーケじゃないですか!？」

「次はたしぎの番でしよう?」

ナミがウインクをしながらそう言うのと、たしぎは顔を真っ赤に染めた

「え?!あの、その…私とライトくんはまだ恋人じゃないですし…」

「あら?わたしはライトが相手とは言つてないわよ?」

「もう、ナミ!」

たしぎをからかう事に成功したナミが大きな声で笑う

「それに『まだ』って事は、その気はあるんでしょう?」

ナミの言葉にたしぎは顔を真っ赤に染めたまま頷く

「ウジウジしていると、取られちゃうわよ?」

「そ、そうでしょうか?」

「だからこの際、酒で酔い潰して既成事実を作っちゃいなさいよ♪」

「ええ——!?!」

こんな感じで結婚式後の宴は夜が更けるまで続いていった



頂上決闘が終わってから2年程の月日が経った

その間、世界は大きく動いていった

これまで、海賊に掛けられた賞金は『生死を問わず』として掛けられていたのだが、平和主義の海賊達が海軍に協力した事で改められた

平和主義の海賊達の賞金は変わらなかつたが、賞金の受け取り条件が

『対象の生存』と変更されたのだ

これにより平和主義の海賊達は、生かして捕獲という困難な条件に代わった事で、ほとんどの賞金稼ぎから狙われなくなったのだ

中には功名が目当てで平和主義の海賊達を狙う者もいたのだが、大抵は命のやり取り
までは

行わない形で決闘する様になっていった

そして、海軍と平和主義の海賊が協力した事で、多くの略奪主義の海賊達が駆逐されていった

独自に賞金稼ぎの組織を作った《赤犬》の異名を持つサカズキは、組織の者を率いて主義に関係無く海賊達を狩っていた

その海賊を狩っていく際に、一般人までも巻き込む過激な行動に、海軍や政府から何

度も

警告を受けるが、改めずに海賊を狩っていった

そして、ついにサカズキは《赤狂犬》と異名をつけられて指名手配をされた
そんなサカズキを、新しく元帥に就任したクザンが艦隊を率いて倒すことになり、
頂上決闘以来の大きな戦争となった

この戦争には多くの平和主義の海賊がクザンに協力した事で、サカズキ側は一方的に
追い詰められていった

そして戦争に敗れたサカズキは、元海軍大将でありながら公開処刑という形で
罰せられる事になったのだった

こうしてサカズキが作った賞金稼ぎの組織は発足して僅か2年程で壊滅した
だが、組織の残党は革命軍と合流していき、新たな騒動の火種となるのだった



一隻の船がグランドラインの波を掻き分けて進んでいく

「シユウ、もうすぐシャボンディ諸島につくわよ」

その船に乗っていたのは、頂上決闘からの2年の間に、更に女性としての

魅力を増したナミだった

「そうですか……ルフィ達と会うのも久しぶりですね」

「そうですね」

シユウとナミは頂上決闘が終わってからの2年程の間、修行をしていた麦わら一味の新たな船出を見送りに来たのだった

「あいつらは旅立つけど、わたし達はしばらくゆつくりとする事になりそうですね」
「それはどういう事でしょうか？」

シユウが問い掛けると、ナミは柔らかく微笑みながら両手をお腹に当てた
それを見たシユウは、ナミを優しく抱き寄せた

「愛しています、ナミ」

「うん、わたしも愛しているわ、シユウ」

シユウとナミの唇が自然に重ねられる

新たな旅立ちがあれば、新たに産まれてくる命もある

こうして、この世界の海に生きる者達の物語は綴られていくのだった

おまけ・東の海の名付け決闘

後に海賊王と呼ばれる麦わらのルフィが、空白の二年の後に航海を再開してからおよそ十ヶ月後、東の海にて後の歴史に『東の海の名付け決闘』と呼ばれる大騒動が起こったのだった。



春の陽射しが暖かく感じる昼頃、東の海にあるココヤシ村に一つの命が誕生した。

「ナミ、ご苦労様でした。」

「うん、ありがとう、シユウ。」

波打つ紫の髪が特徴的な長身痩躯の美男子が、ベッドに身体を預けるオレンジ色の髪が特徴的な美女に口付けをする。

男性の名はシラカワ・シユウ。

女性の名はシラカワ・ナミ。

およそ三年前に結婚した二人は本日、一児の親となったのだ。

「産まれてきた子は女の子でしたね。」

「あら、男の子の方がよかった？」

「健康に産まれてきてくれたのですから、なにも文句はありませんよ。」

そう話すと二人はまた唇を重ねた。

「結婚して三年、相変わず熱いわねえ。」

腕に赤子を抱きながらそう言う女性はシユウとナミの養母のベルメールである。

「ねえ、養母さん。私にも赤ちゃんを抱かせてよ。」

そう言つて笑顔でベルメールが抱く赤子を覗き込むのは、シユウとナミの養姉のノジコだ。

「ノジコ、あんたも自分で子供を産んだら？」

「私に見合う男がいればね。」

「あんまり選り好みしてると行き遅れるわよ？」

「身近にシユウつていういい男がいるんだもの。少しぐらい望みが高くなっても仕方ないじゃない。」

◆ そんな母娘の会話にシユウとナミは顔を見合わせると、同時に肩を竦めたのだった。

和やかな家族の雰囲気とは一転、ココヤシ村の駐在の家では剣呑な雰囲気を醸し出す男達がいた。

そんな男達の雰囲気には臆せず、一人の美女が報せにやって来た。

「産まれたわ。元気な女の子よ。」

女性の報せに剣呑な雰囲気を醸し出していた男達が歓声を上げる。

「あらあら。」

そんな男達の様子をみて微笑む美女はシラカワ・シオリ。

三十代の美女にしか見えない彼女であるが、それでもシラカワ・シユウの祖母である。

歓声を上げる男達も紹介しよう。

白髪に眼鏡が特徴的な老人は、かつて冥王の異名で呼ばれた大海賊のシルバース・レイリー。

赤髪に左目に走る傷痕が特徴的な男は、現四皇の筆頭である赤髪のシャンクス。

そしてワノ国の洋装に鬘を結わえた髪が特徴的な老人がシラカワ・ブンタである。

レイリーがシユウの養祖父、シャンクスがシユウの実父、ブンタがシユウの実祖父の関係だ。

彼等は常ならばココヤシ村にはいない者達だが、ナミが子を産むのが近いと聞いて、

遙々ココヤシまでやって来たのだ。

「産まれてきたのは女の子か。なら、シャルロットってのどうだ？」

「いやいや、リーレイアという名がいいだろう。」

「カオリというのも捨てがたいのだ。」

彼等三人がお互いの言葉を認識すると、和やかな雰囲気が一転して剣呑な雰囲気へと変わった。

「シャルロットだ。」

「リーレイアだ。」

「カオリなのだ。」

シャンクス、レイリー、ブンタがそれぞれ考えに考え抜いた孫、曾孫の名を口にす。決して譲らぬと空気が歪んで見える程の意思をぶつけあった男達が同時に立ち上がる。

そして…。

「「決闘だあ！」「」

男達は意気軒昂にココヤシ村の駐在であるゲンの家を出ると、競い合う様に走り出すのだった。

◆ 「あらあら、シユウちゃんとナミちゃんの意見も聞かないでどうするのかしら？」

「それだけ、シユウとナミの子が産まれるのが待ち遠しかったのでしような。」

シヤンクス達が去った家でシオリとゲンがゆっくりと茶を啜っている。

「ゲンさんは参加しないでもいいのかしら？」

「私はシユウとナミが名付けるのでしたら文句はありませんな。」

「ふふ、私もそう思うわ。」

そう言つて微笑んだシオリは席を立つ。

「それじゃ私はあの人達が争っている間、曾孫を抱かせてもらいに行きましようかね。」

「それはいいですな。私もご同道致しましょう。」

シオリとゲンは笑顔で家を出ると、シユウとナミの家に向かったのだった。

◆ シヤンクス達が決闘を決めてゲンの家を飛び出した翌日、三人はココヤシ村の沖合いに浮かぶ大きな足場に場所を移した。

これはこうなる事を想定していたシユウが、予め用意しておいた決闘場である。

三人はそれぞれが一世一代の大勝負とばかりに濃密な覇気を纏って睨み合っている。

「シャンクス、遺言は大丈夫かな？」

「レイリーさんこそ、年寄りの冷や水が過ぎるんじゃないやねえか？」

「君も祖父になつたんだ。もうこちら側だよ。」

「俺はまだ四十手前の現役バリバリの海賊だ。老け込むのは引退してからで十分さ。」

睨みあうレイリーとシャンクスは目線で火花を散らしながらも言葉を交わしていく。

「ブンタ殿、貴方も無理をしない方がいいんじゃないかな？ シオリさんにドヤされると思うが？」

「レイリー殿、お気遣い感謝するのだ。なれど、男には譲れない時があるのだ。」

「ああ、その通りだ。」

ブンタの言葉にシャンクスが同意すると、三人が腰に帯びた得物を抜き放つ。

そして、一つの波しぶきが足場に落ちたのを合図に、三人が同時に踏み込んだのだつた。



「ナミ、もう起き上がったても大丈夫なのですか？」

「シユウ、私はそんな柔な鍛え方はしてこなかったつもりよ。シユウの隣にいるためにね。」

ナミはシユウの腕に自らの腕を絡ませると、シユウの肩に頭を預ける。

「あらあら、仲がいいわねえ。」

そんな二人をシオリが曾孫を抱きながら微笑んで見ている。

「シオリさん、私にもその子を抱かせてもらえないだろうか？」

「ダメよ、ゲンさん。ゲンさんが抱いたら、あの子が泣いちゃうからね。」

懇願するゲンの心にノジコの言葉が突き刺さる。

膝から崩れ落ちたゲンを見ていたベルメールは大笑いだ。

「ねえ、シユウ。あの三人は放っておいていいの？」

「ある程度はガス抜きをしないと父さん達も収まりがつかないでしょう。まあ、適当な所で止めに入りますよ。」

「放っておきなさいよ。三人の決闘は皆が酒の肴にしてるんだから。」

そう言つてシオリに代わつて赤ん坊を抱いたベルメールがシユウとナミの元にやつて来た。

「ほら、いつまでもイチャついてないで、ナミはお母さんをやりなさい。」

ベルメールから赤ん坊を受け取ったナミは慈愛に満ちた優しい表情を我が子に向けてる。

そんなナミの肩をシユウが優しく抱き寄せた。

「これならば、親子三人で一緒にいられますよ。」

「…うん。」

シユウとナミのやり取りを見ていたベルメール達はやれやれと言わんばかりに苦笑いをする。

そしてこの夫婦のやり取りを見ていたココヤシ村の未婚の女性達は、まるで狩人の様な眼光で独身男性達の姿を見詰める。

この世界の女性達は総じて強かな者が多いのだ。

「それにしても、いつまで続くのかしらねえ?」

ベルメールの言葉につられるように一同は沖合いで決闘をしている三人へ目を向ける。

三人は幾度も剣を打ち合い、轟音を響かせていた。

「流石にそろそろ止めに入った方がよさそうですね。」

「そうね、行つてらっしゃい、シユウ。」

ナミがシユウを送り出そうとしてそつと離れると同時に、一際大きな轟音が響き渡

る。

すると…。

「うう…ああああああああん！」

ナミが抱いていた赤ん坊が泣き出し、それと同時に轟音がピタリと止まった。

そして…。

「シャルロット!? どうした!? おじいちゃんはここにいないぞ！」

「リーレイア!? 大丈夫か!？」

「カオリ!? 一体誰が拙者の曾孫を泣かせたのだ?!」

水柱を立てて海上を駆け抜けた三人が、決闘を止めて赤ん坊の元にやって来たのだ。た。



「三人共、ちゃんと反省をしたかしら?」

「はい。」

ニコニコとした笑顔でも凄みを感じさせるシオリの前でシャンクス、レイリー、ブンタの三人が地に正座をしながら頭に見事なタンコブを作っている。

「そもそも、シユウちゃんとナミちゃんの意見を聞かないで名前を決められるわけないでしょう？ それなのに貴方達ときたら…。」

曾孫を泣かせた三人に容赦なくシオリの説教が続いていく。

三人の目から少しづつ光が失われていった。

「しかし、私達の娘は大物になるかもしれませぬ。一泣きであの三人の戦いを止めるのですから。」

「あら、もう親バカかしら？」

「親バカと言われようともいっこうに構いませんよ、養母さん。」

ベルメールのからかいをシユウは軽く受け流す。

「ところでナミ、その子の名前は決めてあるの？」

「決めてあるわよ、ノジコ。でも、シユウが認めてくれたらだけどね。」

ノジコにそう返事をしたナミに皆の注目が集まる。

ナミは胸に抱く赤ん坊を優しい瞳で見詰める。

「この子の名前はアカリ、シラカワ・アカリよ。」

ナミが告げた赤ん坊の名前に皆が驚いて目を見開く。

ナミが告げた赤ん坊の名前が、二十年以上前に亡くなったシユウの実母と同じ名前だったからだ。

「シュウ、いいかしら？」

「…ええ、もちろんです。きっと、アカリママも喜んでくれますよ。」
「うん。」

後年、この赤ん坊は美しい女性へと成長し、女性冒険家として歴史に名を残す数々の偉業を成し遂げる。

だが、今はただ両親の愛を一身に受けて静かに寝息を立てるのだった。

外伝：ヘタレのライトの強かなたしぎ

side：ライト

たしぎを女として意識する様になったのはいつ頃だっただろうか？

海軍で初めてあいつと会った時、年上のあいつは当時の俺がまだガキだった事もあって、弟みたいな感じで接してきやがった。

それがムカついたから一言言ったんだが、あいつは変わらずに俺と接し続けてきた。だから俺は意趣返しとしてあいつを女としてではなく同僚の一人として扱った。

でもそんな日々もある日を境に変わった。

あれは初めて一億ベリ超えの海賊の一団を討伐しに行った時だ。

あの戦いの時に俺は海賊の攻撃からたしぎを庇って海に落ちたんだ。

俺は悪魔の実の能力者だから海に沈んでいった。

乱戦の最中だったから海に落ちた奴を助けにいけない余裕があるわけない。

それに船上から鉛弾の雨が降ってくる可能性だってある。

そんな危険な状況だったのに、たしぎの奴は俺を助ける為に海に飛び込んできや

がった。

最初は『せっかく助けたのに何を考えてんだこのバカ!』なんて思ったりしたが、そんな考えは直ぐに吹き飛んじまった。

何故かつて?

海面に浮かびあがったらあいつがさ…。

「あっ!?!人工呼吸を!」

なんて言っと思っていきりキスしてきやがったからさ。

海に落ちて直ぐだったからまだ意識はあった。

だからあれは人工呼吸だってわかつてるぜ?

でもよ…前世も含めて初めて女の子とキスしたからさ…。

あれだ、うん…こんなの意識しないでいられるわけねえだろうが!

それからだ。

なんだかんだ理由をつけて、たしぎをデートに誘う様になったのは…。

助けてもらった礼だつて言っつて誘ったり、手合わせで勝ったから飯を奢れつて言っつて誘ったり、休みで暇だからつきあえつて言っつて誘ったり…。

転生したばかりの頃はハーレムだなんだと考えていた俺が、気が付けばたしぎにベタ惚れさ。

ボーイツシユな顔立ちに女らしい身体付きは魅力的だし、刀バカなところだつて表向きは呆れた様な事を言っているが可愛いもんだ。

いつかは結婚…いや、先ずは恋人になりてえつて考えていたんだ。

いたんだよ…シユウとナミの結婚式で酔い潰れちまったこの時までには…。
なんで目が覚めたらたしぎと一緒に裸で寝てるんだよおおおおお!!
直ぐ近くでたしぎの寝息が聞こえる。

ヤバイヤバイヤバイ!

と、とにかくベッドから出て服を着よう!

そう思つて背を向けたその時…。

「う…ん。」

たしぎに背中から抱きつかれた。

わあああああああ!?!なんか背中にやーらかいものがあるあああああ!?!

俺が抱き枕と言わんばかりに更に強く抱き締められる。

待つて!ギア3してるから!ギア3しちやつてるからああああああ!

「…あれ?ライトくん?」

俺の心の叫びが聞こえたのか、たしぎが目覚めました。

「め、目が覚めたかたしぎ?と、とりあえず離れ…つて、なんでもつと強く抱きつくんだ

よおおお!」

頭まで俺の背中に預けられて、もうどうしていいかわかんねえよ!

「ちよっ! たしぎ! 離れろ!」

「嫌です。」

「なんでだあああああ!?!」

わけがわかんねえよ! どうしたらいいんだよ!?

「ライトくんが恋人になってくれるまで離れません。」

…えっ?!

「えっと、それはその…責任を取れとかそういうのか?」

「…ナミに言われてそうしようかと思いましたが、やっぱり初めてはちゃんとしたいなって思ったので、その…まだしていません。」

そ、そうか、よかった…。

「あつ? じゃあ、なんで俺に恋人になれなんて…?」

「…言わないとわかりませんか?」

…マジで?

「えっと…俺でいいのか?」

「…ライトくんがいいんです。」

「……ここで何もしなかったら男じゃねえよなあ……」

「なあ、たしぎ。」

「はい。」

「俺はお前が好きだ。」

「はい。」

「だから……」

そこで言葉がつかまっちゃう。

くそっ！

たしぎにあそこまで言わせただ！

あと少し頑張れよ、俺！

「だから、俺の恋人になつてくれ！」

「……はい！」

大きな返事と共にたしぎがギュツと抱きついてくる。

「おいっ、ちよっ、たしぎ！ 当たってる！ 当たってるって！」

「当ててるんです。」

「待って！ まだ出来てねえから！ まだそこまで心の準備出来てねえからあああああああ
！」

こうして俺とたしぎは恋人になった。

きっかけはあれだが、なんとか俺達らしいと思う。

その後、なんとか無事にベッドを抜け出て服を着ると、恋人のたしぎと一緒に飯を食う。

そして外に出るとそこには皆がいて、たしぎがピースサインを作ると皆から祝福の聲が上がったのだった。